

鹿児島県史料

旧記雑録拾遺
記録所史料一

解題

本巻は『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 記録所史料一』として「史館調」一冊、「旧史館調」七冊、「旧史官調雑抄」三冊の薩摩藩記録所（当時は御記録所とよばれていた）関係史料を収録した。底本は何れも旧島津家編集所蔵本、現東京大学史料編纂所蔵本で『島津家文書（島津家本）』の中である。

さて底本は何れも明治期（二十年代前後）の島津家編輯所写本とみられ、表題もその頃に原本を整理書写した際に付されたのであろう。ただ大部分のものに共通して「調」の語が用いられているところから、原本は藩記録所での調査史料として残され大雑把にまとめられていたものであろう。

「史館」とは藩記録所のことであり、国史館の別称もあった。「史官」とはそこで執務する奉行・添役以下職員のことである。「旧史館」とあるのは廃藩によって記録所が廃止となつていことから付された名称であろう。この史料集のとりあげている対象の年代は主として享保から明和に至る間のもので、藩主は島津吉貴から継豊・宗信・重年、そして重豪が登場するはじめの頃までである。幕藩体制の成熟期で藩制も幕府の制度を吸収して整備、種々の規約を設けては調整を繰返し、他方將軍家や近衛家との婚姻関係や宝暦治水の取組などで財政面でも課題をかかえ、次代に推移する間の藩社会の実像の一面を具体的に示してくれる史料といつてよいであらう。「調（しらべ）」とあればその職務として自主的又は指令・要請にこたえる形の受動的な様々の調査全般を含むものとみるべきであらう。具体的にいえば、家伝・由緒（人名・地名・制度・社寺等）・家筋・家格・養子願・高上願・御目見願等々の広汎に及ぶ。「史館調」だけが「旧」を冠していないが、藩政時代のものとして特別に区別されたわけはあるまい。以下の「旧史館調」等と同義とみてよい。ただ、年代では宝暦二年の史料が中心となる。「旧史館（官）調」の表題には冊毎に番号の記載がなく、先後の順は必ずしも明確ではないが東京大学史料編纂所史料目録

の順に従って(一)〜(七)の順で掲載した。但し(一)と(四)の表題は「史官」となっている。このうち(七)は人別列伝で性格を異にしている(後述)が、その他は概ね「史館調」とも共通した同様の内容で記録所、又は職員個人が必要と認められた記事・史料・仰書・通達等の写留の他、記録奉行・添役等の連名調書を収録している。調書を主に年代順に配列すれば、(一)・(六)延享五(寛延元)年、(三)寛延四(宝暦元)年、(二)宝暦三・四・五年、(四)・(五)宝暦十三・十四(明和元)年の順となるので以下その順で説明する。

「旧史官調雑抄」も冊順の表記は(一)と(三)はあるが(二)の表記はない(但し後筆の書き加えあり)。また表題も(一)以外は「旧史官雑抄」となっている。しかし内容からみて現在の整理順が妥当であろう。「史館調」や「旧史館(官)調」の欠を補う態をとり、(一)には調書の延享二・三・四年、寛延二年等のものをあげ、(二)とするものには宝暦八・九・十年等のものをあげている。(三)は別記の如く元文以降明和迄の記事を揚げた後に明和年間の文書を並記しているが「調」に該当するものは収録されていない。

写者については明らかにしえないが、「史館調」と「旧史館調」(一)(目録は別)と(四)・(五)(目録とも)・(六)(目録と後半は別)・(七)が同じ、(一)・(三)が目録とも同筆、「旧史官調雑抄」の(一)・(二)が同筆(目録とも)、(三)が別筆と数名の分担筆写となっている。そしてはじめの写者が一番多く担当しているが、同筆のものと同じく東京大学史料編纂所所蔵島津家文書(島津家本)「地誌備考」中の鹿児島郡・谷山郡部分他や「諸家調抄」の題目部分、「紹述編年」等があり、自ずから書写年代、経緯等を推測しえよう。また記録所調担当者名の書き方の体裁にも氏名・略名(二)調之・調」の添書)・連名等と写者別の相異のあることも注目される。

では、「史館調」から気付いたことを幾つかずつあげていこう。冒頭の(一)の(2号)元和九年の伊勢神宮御炊太夫宛の奉納米を銀に変更する旨の家老連署状は「旧記雑録後編四」収録の家久譜中にあるもので、記録所として承知しておくべき史料の一つとして収録されたのであろう。これは(四八号)「泉坊江被成下候(八幡宮領)知行目

録之吟味」関連史料である。また(二号)の「慈徳院様(宗信) 琉使具志川王子御召列事件」とあるのも(六三号)「琉球王子被召連江戸御参府御登城一件之調」以降、「慈徳院様中山王尚敬慶賀使被召連御参府一件」に至る間の史料との関連がうかがえよう。(三号)よりは新藩主重年の一門家等への最初の訪問に当り、各家毎の家臣等の御目見や進物について記録奉行らの調査答申等であり、(九号)以降は城下士・外城士等の継目養子願やその御礼願、高上願また家筋調が続く。調書の作成者は記録奉行川上久儔・添役吉田清純・本田親方・山田有雄等であるが、連記署名中添役吉田清純の「調」と特記するものや同人の単独署名のものも数点あり(勿論原本ではないが)、清純の活躍が目立つ。特に前出の琉使参府に際しては同行して先例を調査したり、国許の記録所と連絡を取り合う等活躍している。また(五〇号)～(五九号)の「伊集院郷地略誌」等の記載は宝暦六年に同人が中心となり、本田親方・山田有雄と協同で「地誌要略」を編述していることから、その作業の前提の一端を示すものとして注目されよう。また(一二号)には、「地頭帳ニ者不相見得候」とあり、藩内地頭職の歴代名簿の如きもの(例えば「諸郷地頭系図」が該当するか)の存在を示しており(「旧史館調」五(三三七の2号)にも「当座地頭帳之内ニ相見得申候」とある)他にも「御格式帳」(「旧史館調」五(三六五の2号))「萬調帳」(同(三四四号))等がみえ、記録所備付けの帳簿の存在を示している。また、当座に書留の有無などを申し立てているところを見ると、「当座」とはこの場合記録所のことを指しているとしてよいであろう。巻末は宝暦二年十二月琉使同伴参府の藩主重年の供として記録所から添役の吉田清純と定筆者の川西筑右衛門が同行した際の覚書(六七号)であるが、併せて江戸にて先例を調べて報告したものを書留めており、終りの一文(六九号)は琉球方からの琉使清見寺参詣についての照会に際して用意した宝永七年時の次第書の書抜である旨を記している。このように「史館調」を通じて吉田清純の関連記述が目立ち、同書は或は同人の覚書を主としてまとめられたものかとも思われる。

「旧史館調」(一)の前半分は個人或は地域からの提供もしくは収集の中・近世の史料で記録所に書留めておいたも

のが列記されている。寺社関係のもの、史跡・逸話・政変・戦闘・顕彰記事等々、何れも短文で記されている。たとえば(二四号)「伊集院小伝次御誅伐」・(二五号)「島津大和守様御生害」・(四九号)「大炊御門中将殿龜島江配流」・(五八号)「義弘公関ヶ原より御帰宅等之事」・(七二号)「秀頼様及御子息御生害」・(八一号)「義昭僧正生害」等。後半は延享四・五(寛延元)年の調書を二六点掲載しているが、うち五点は吉田清純の調と認められる。(八九号)の「年頭御規式」は延享五年正月の藩主宗信の国入に伴う一門以下儀礼の次第を掲出、中で宝永七年の格式について記録所への先例問合せに、先例見当たらずと答申した旨を記している。これは今後記録所への関係資料の増発を要請しているのである。そして、一番最後の(一一七号)は「旧史館調」(六)の冒頭(三三三三号)に接続するものと思われ、(四二七号)末尾の「右五拾六行、享保十三年戊申三月晦日調也」の合計数の記述内容とも合致するのである。そしてその後続く(四二八号)延享五年五月廿六日付以降の史料は(一)の(一一六号)延享五年五月廿五日付の史料の後に接続するものとみられるのである。かかる点からみて年代順に「旧史館調」の順をつける とすれば(一)・(六)とするのが妥当のように思われるのである。

(六)は享保十三年三月晦日付の家筋勤方調が五十五項掲出され、(一)の末尾の一項と併せて五十六項となる。藩命による一斉調査と思われ書式は一定しており、山奉行・郡奉行等奉行職クラスの調査で大半が鹿兒島士、小番士が一六、大番士が四〇のうち新御番が七である。また江戸詰経験者が一九を数える。当時の藩士の出自と職歴を知るこ とが出来た。なおこのうちの半数の二八人が遺孫の名も含めて「諸家調抄」(『伊地知季安著作史料集九』所収)の中に掲載されていることがわかり、後年の記録奉行郡山遜志が本書を整理活用したことがうかがえる。また(六)の後半は(一)の延享五年前半の調の後に続く記録所調書で延享五(寛延元)年末までと翌寛延二・三年の分を掲げ、やはりその大部分が家筋并勤方調をしめている。そして延享五年の調の担当者多くは「吉調」とあり、吉田清純であったことがわかる。しかし寛延二・三年分の調にその名がないのは在府勤務中の故であろう。この間氏名のあ

がっている八〇名中半数弱が同じく「諸家調抄」の中にみられる。同様に鹿兒島土が多数で大半が大番士、残りが小番・新番士で、納殿役・横目役等を勤め江戸詰となっている者が少なくない。

(三)では巻頭に寛延四年八月の表御用人座の通達(御書院での礼席の変更)を吉田清純がうけて書写、記録所の通達帳にも書留めて置いた旨を記している(一九三号)。ついで御内證元服の際の支度・次第について記録所での吟味の内容を揚げ(一九四号)・(一九五号)、(一九六号)では同年七月廿三日付で小笠原長袈裟の場合の具体案を示している。また(一九七号)では寛延三年十二月廿四日、先に島津中務久輝三男から別立名字替した小林中太兵衛の家格連名、役座の順序について吟味の結果を具申している。この関係史料は以後も屢々見られるが、島津家支族から別立別姓を望む一方で家格維持期待への対処案も求められたのである(後掲四(二九一号)・宝暦十三年九月二日の答申では「向後中務三男之格ニ者被仰付ましく旨」と記している)。本冊には調書が六〇余収録されているが、養子願が一番多い。また元服御目見の際の進上物願調等もあり、御目見調帳を用意して實際を記載、先例としている(二五九号)。なおこの間の調は吉田清純の担当が過半をこえ、単独扱いも一〇を数える。

(二)は主に宝暦三年から五年までの記録所調書約五〇を収録している。やはり継目養子願が一番多い。宝暦五年に吉田清純は添役から奉行となり川上久儔・安藤茂貞と並び益々活躍しているように思われる。担当調も過半に及んでいる。清純は宝暦三年はじめの藩主重年下国の際供奉に記録所筆者川西筑右衛門の同伴を願出ており(一一九号)、併せて御用物入の挟箱壺荷の添方を申請している(一二一号)。また(一四四号)「入江十郎左衛門訴訟之儀ニ付由緒調」は享保十六年九月七日の川上久儔の調書で、田辺屋道與と共に関ヶ原敗戦後帰国の途次の島津義弘の危急を救った堺商人塩屋孫右衛門弟入江助右衛門筋目の十郎左衛門格護の寛文年間訴訟古書物に関するものであり、(二二八号)にも同文があり、「旧史官雜抄」(二七六号)にも同文と宝暦九年五月十八日の吉田清純外二名連署調書が収録されており、遺孫に扶持米二十俵給与の次第が記されている。また(二六二号)「中西文右衛門・同長

兵衛・同政太郎・柏幾右衛門・有川二平太能方ニ付座席列調」は宝暦四年七月八日の吉田清純主担の調書で、芸能の家で代々小番として優遇されてきた中西家の序列案を提示したもの、(一八四号)は宝暦五年六月一日の吉田・安藤連名の調書で、中西長兵衛が隠居して眼病の嫡子八角をさしおいて二男の政次郎の家督相続を願出たのに対し、盲目でもないのに相続を認めぬのは不可と系図を添て具申ししている。同家については「旧史官調雑抄」(一)(八八号)・(四三号)に中西文右衛門・長兵衛の家筋調が収録されている。また同家については田村省三氏「尚古集成館紀要8「中西氏系譜草稿」―薩摩藩世襲能役者中西家の系譜―」の研究がある。

「旧史官調」(四)と「旧史館調」(五)はほぼ同年代の調を採録しており、いかなる基準で二分したか判然としないが、史料が重複していないところをみるとやはり一括史料を二分したのであろう。但し(四)(三一六号)宝暦十三年七月廿六日付の史料とほぼ同内容で三日おくれの同月廿九日の(五)(三五一号)「鉄熊御目見且同人家中御目見願之再調」とある史料を併せてみれば妥当な区分けといえよう。

さて(四)では巻頭に(二七八号)「郷原金太夫名字拝領御礼進上物之仰渡」をあげ、はじめ前に記した小林中太兵衛の先例にならない御太刀進上のみとした案について同家の申請通り正徳元年の記録奉行市来早左衛門が二種一荷を付加するのが妥当とした調書をあげている。これには「要用首尾簿之内」の註記があり、先代の判例として特記されたのであろう。なお要用集については、『鹿兒島県史料集(一)・(二八)・(二九)』で文政本・安政本が紹介されているが、享保年間を遡る正徳三年頃の本の存在が尾口義男氏より指摘されている(『宮崎県史』)史料編近世5―藤井本「要用集抄」の史料検討を通して)。本史料集でも「要用集」に関する注記が数ヶ所にみられる。要用集については『鹿兒島史学』55 林匡氏「薩摩藩の法令と文書管理―島津吉貴藩政期を中心に―」に関する。宝暦末年には吉田・安藤に加えて本田親方・山田有雄が記録奉行に就任しており、吉田が代表格、本田は宝暦八年、記録奉行として家譜の継続編集に取りかかっていたのである。その際本田が職員の勤務時間の延長並び

に待遇改善による編集作業の効率化を提言した件については以前拙稿に記している（『旧記雑録』月報17「薩藩記録奉行本田親方と記録所職員の勤務時間問題」）。

さて吉貴の在世時代、即ち享保年間を中心に藩制の整備が進められ、その職制・役格などが整えられたことが近年具体的に明らかにされつつある（前掲林氏論文・『黎明館調査研究報告21 同「島津吉貴の時代」』）。その後宝暦年間前半までは現実に即した若干の手直し、緩和もみられたが、後半になると逆に旧制への復帰、引締めがはかれるようになる。四・五の記録所調べにもその傾向がみられるようになる。宝暦十三年八月の（二九七号）達では城下士が外城衆中并座付士を養子にする件について、父子従弟血筋の続のみ免許、高持出の者は許可だが養父方の借銀を弁済して養子に入るとは認めぬこととした。また（二九八号）宝暦十三年八月廿六日の達では外城衆中の養子になる血筋の者がない場合、衆中の内二男・三男の中から、それもなければ寄合以上の家来の中から、父方従弟の血筋迄は許可するが、最前凡下の業を致す者は不許可とした。五の（三六九号）宝暦十二年十二月十日の調書では、城下代々士のところへ城下一代士の養子成願が不可とされている。

記録所としては従来調に際し、先例・傍例を調べて意見をまとめる。先例・傍例が無く決められないとして返上する。そして今後のため先例・傍例の史料の提供を求めている。また判断のつきかねる場合、一応否定するが、はっきり否定しかねる場合には御吟味次第として決定を御家老座等上部機関に委ねるのである。しかし宝暦後年の場合、藩主の意向、法令の規準にてらして概して厳正に判断している。否とする例がたとえば外城衆中の城下士への養子入り、大番士の小番士成願、資格昇格等については、厳正で半数は否となっている。さらに再審でも否とすることも少なくない。ことに小番人は難しく、一代小番から代々小番になるのはさらに難しいとされていた。

「旧史館調」(七)は伊集院久治（抱節）以下比志島国貞（紀伊）まで二五名の功臣の名とその子孫については順に簡単に列挙説明した人物小伝である。中で得能通古の弘化二年編の「名臣小伝」の内容について、同書に抱節

と紀伊を洩らしているのは遺憾と述べていることや（紀伊については記述があるので当たらない）、遠矢貞勝の子孫小番士が安政三年召禿となっていること等、他にも武功者の末裔で科により召禿しとなっている氏名をあげていること、また国貞の子孫の場合、伊勢貞昌の配慮によって家跡が召立てられたことを終りに記述していることなどから、嘉永五年記録奉行となった伊地知季安の手になるものかと推測された。はたして同じ島津家本の写本に「名臣小伝補遺 忠死跡断絶家全」があり、配列順に異同はあるがその筆跡は前半分は明らかに季安自身のものと思われる。同書はまさに得能通古の同じく島津家本「名臣小伝」の補正を意図したもので、内容からみて或は「名臣小伝」の旧稿（その後補正されたと思われ、前述の季安の指摘は当たらないが）をみて安政三年以降筆をとったものかと思われる。何れにしても既掲のものとは異なるこの季安稿が「旧史館調」の中に包含されていることは、季安とその意図を受け継いだと思われる季通の関与がうかがえるのである。ただその配列が「旧史館調」ではいろは順になっているが（伊地知は秩父で「知」に入る。比志島は一番後にあげる）、「補遺」の方では比志島を五番目にあげており、知までが季安の筆跡とみられる（「旧史館調」には別筆の写が二本あり、これは「補遺」と大体同順になっている）。

「旧史官調雑抄」はこれまでに取り上げられた史料の他に取り残された史料を前後二冊にわけて採録、さらに享保末年より明和初年に至るまでの年譜と、以後明和九年に至る間の史料を一冊に追補したものであろう。したがって、(一)・(二)と(三)では別編輯の形となっている。

(一)でははじめに(一号)宝永七年二月十九日記録奉行市来家年等の新納旅庵軍旁記並に同家の家筋調をあげ、(四号)の同五年三月廿七日の調では、比志島氏の村上氏改号申請に今のままがよいと詮議の上御吟味次第と答申している。(一七号)は享保三年三月の水引大小路町の田辺屋七郎右衛門の訴願による道與家筋調、(二一号)の享保二年十一月廿五日の調では山田弥右衛門の小番入再願に格式通り一代小番が妥当と吟味、(六二号)には汾陽源

右衛門の先祖理心の功績等による小番入吟味があり、以下(一〇三号)まで大方宝永・正徳年間の家筋調が続く。(二〇四号)延享二年六月水引執印丹下の家筋調、また(二四三号)にも同様の調がある。なお(一三八号)に「猿渡家調之内」として元禄十五年二月の記録所調をのせ、付書に喜右衛門信安時代に召禿のことを記し、さらに本田家との関係や諸家系図妄作者の名をあげているのは当時依然として系図問題が座内の関心事であったことを示すものであるか(『黎明館調査研究報告16 林匡氏「薩摩藩記録所寸考」(三)田中国明と猿渡信安―記録所関係者点描―』)。以下(二五六号)まで延享二年以降寛延三年までの諸家家筋調が続く。(一五三号)延享四年十一月晦日の川上安左衛門調は当時記録奉行平右衛門二男で別立、当分無役で大番筋の認定。(一五七号)は寛延三年九月廿四日の調で、指宿衆中長野筑右衛門の城下士成願に対して、諏方神事社役八家中長野家のみ外城士であること、志布志山田家等の城下士成の先例のあることで、余例にはならずとして認定の意見具申で「旧史館調」(二〇三号)の再掲であるが、これには吉田清純調の添書がみられる。

(二)にはおおよそ宝暦八年から十一年までの諸家の養子願調、家筋調等が収録されている。「吉調之」の添書のあるものが五〇中三五で目立つ。そのうち(一六三の1・2号)宝暦八年六月八日の飯隈山坊中仲之坊当救仁郷深仙坊の御目見について進上物調では、後で品目判定の誤りに気付いたが届け出はせず、担当者の更迭で内部処理する旨を記している。その記述者は奉行の吉田清純と思われ、座内の内情告白ともよみとれよう。(一七〇号)宝暦九年三月九日の調書では城下士養子の儀は俗生不審のものは不許可とし、妾腹の外戚血筋を以て城下士養子不可と定め上申、その通りになったと記しており、(一七一号)同年三月廿八日調では許可の先例あるも外城養子格式により今回は先祖不審につき「御詮儀次第」と上申、上司より不採択の通知を確認した旨吉田が記している。(一七八号)「御関狩之事」と(二二〇号)「御関狩并御馬追之儀調」は伊地知季安の「御旧式類抄」二(『伊地知季安著作史料集五』所収)の(42)と(43)と同文である。季安は出典として(42)の方にのみ「史官雑抄」と記しているが、(43)も同様

とみてよいと思う。何れにしても「旧史官雑抄」から季安は引用しているといつてよい。そして季安は(42)でも(43)でも注記を加えており、(43)では(二七八号)の文の一部を省略している。そして(43)の注記では(一七八号)の「吉野牧」の成立年を慶長年中とするのを非とし、「上井覚兼日記」によれば天正三年とすべき事は自明であると批正しているのである。また「御旧式類抄」全の(35)・(36)が「旧史官調」(一)(一四二号)・(五)(三三八号)と合致しており、ただちに同一史料といえないまでも季安のひく「史官雑抄」と本巻史料の同質性は認めてもよいと思われる。さて一番終わりの(二二六号)宝暦十一年の「島津若狭・島津小平太席連名吟味」に注目しよう。即ち(二二六号の1号)の七月廿三日調書には吉田用右衛門特命にて吟味隠密の由とあり、奉行の吉田清純が特別に調書を作成した旨を記している。その中で答申した席順と異なる議が示され(藩主の血縁親疎により家格によらぬ)、今後紛れなきように特に「万調帳」の内に書留めておく旨を記しているのである。また(二三二号)宝暦十一年三月十四日の「亀山甚兵衛家筋調」では奉行吉田清純が調書の作成に当たり、後に自分覚として亀山家元祖の日向広原の所領のことを書留めている(「自分覚」はこれまでも屢々見られ、調担当者の覚と思われ、多くは吉田清純の覚書としてよいであろう)。そして(二二八号)では吉田氏の祖とされる「善久公第二女并吉田次郎四郎位清室御法名」を掲出している。吉田清純の系譜は明示されていないが正八幡宮神官系の息長姓であることを意識し、掲示したのであるか。

(三)は内題に「享保中ヨリ明和中ニ至ル」とある筆跡は季安の子季通のものと思われ、構成もこれまでのものと一変している。前半の年譜の作成時期、作成者も明らかではないが、後半の文書もこれまでと異なり、記録所の調は掲載されておらず、仰書・達書写等である。二六片中「旧記雑録追録 六」とほぼ同文のものが八点と多い。記録所職員の記録留かとも思われるが、編修は内題を記載し「旧記雑録追録」を集成した季通かとも考えられる。また鹿児島大学図書館所蔵の玉里文庫中に得能氏原書を写した「通達牒」があり、二冊の内前の一冊は享保二年から寛

政八年までの通達が収録されている。その中に本冊の文書（二四二号）の(1)・(3)・(5)・(15)・(17)・(19)・(20)・(22)・(25)の同文九点が収められている。後年の記録奉行能通古もまた旧藩時代の記録所史料（通達）を収集、保存していたのであろう。その内の一点(3)は明和三年正月四日の年頭太刀進上に関する小松清香達書であるが、後出の白木五番箱の文書で「追録」収載の文書を末尾の取次、郡山主右衛門（員良、記録所稽古）承知の分を簡略化して掲載している。なお、(22)の後統の（明和八年）卯十一月十七日の記事に「太守様護摩所江被遊 御參詣候序ニ御厩内御記録所江御入、御座中御覽被遊候事」とあるが、この重豪の視察が契機となり長年の懸案が解決、安永三年二之丸下に記録所が移建され（現在名山小学校敷地）、文庫も新設、記録所の活動領域も広がって行くのである。御厩跡の岩崎御蔵は文書蔵として廃藩置県後島津家文書が収納され西南戦争の際には東郷重持らの働きにより搬出され戦火を免かれたが、築地御蔵は焼失、編集中の家譜等も焼け、記録所の地も廃藩置県後県庁がおかれ、文書なども人心一新をはかるため多数焼却されたという（『鹿大史学』26 拙稿「薩藩史料伝存の事情と事例」）。

以上一通り本巻掲載史料を見てきたところで関連する記録所史料をとりあげ補足説明しよう。まず、「御記録所調書并諸書附目安」は「島津家文書」の斉彬御手許用とされる小筆笥の史料で林匡氏の見解によれば「伊地知季安が記録所職員（記録方添役）となる嘉永元年直前の記録所関係の参考資料」とされる（平成十二～十四年度日本学術振興会 科学研究費補助金研究成果報告書『近世薩摩における大名文化の総合的研究』所収「藩記録所の活動に関する一考察」）。棚番四三号、通番一四五五点にのぼる藩記録所管理下におかれ収蔵されていた膨大な史料群の目録であり、林氏の説かれる如く現存史料との対比、有無の調査は今後の課題であろう。ただ明和年間以降のものが大部分と思われる。また、ここでいう御記録所調書とは本巻でとりあげた記録所調とは共通点はあるにしてもちろん同じものではない。ただ相互の目録を対比して、さしあたり同一史料（写を含めて）と思われるものをあげれば廿三番の延享五年六月の「琉球国始り并被入御手琉使江戸江被召列次第」は「旧史館調」(一)の（九八号）・（九九

号)に、廿九番の宝暦十年「良英寺虎之間申渡寺格ニ付調査書付」は「旧史官調雑抄」(二) (二二六号)に関連しているであろう。子細に検討すれば他に幾つも見出せよう。

次に掲げる白木箱文書については長年に亘り東京大学史料編纂所において「島津家文書」の整理を担当されている山本博文氏の解説がある(『旧記雑録』月報20「薩摩藩政文書の古文書学的考察」)。その中で「白木箱は一番から十三番まであり、享保期以降、記録所において保存すべきと考えられた文書が収められた箱である」と述べられ、以下「藩主の指示を伝える文書」他実例をあげて説明されている。また記録奉行の役割についても「記録奉行は文書の保管だけではなく、家格・寺格等についての記録責任者であり、そのため記録所が人事記録担当部局としての役割をもっていた」と述べておられる。「島津家歴代制度五一」(『鹿児島県史料薩摩藩法令集四』)にも記録奉行の職務として「一御系図方、惣テ古代ヨリノ御書付等見シラへ、堅固ニ致格護、虫付等禁候役也、一当時トテモ後代ニ可入儀ハ時々入念書付文庫ニ納置候事、一惣テ士ノ筋目系図ノ由緒糺候所也」とある。もちろん「家譜」(島津氏世録正統系図、支流系図)編集の記録所発足当初以来の業務もあった。目録によれば明和年間までの文書を納める白木箱文書は大体一番から五番までで内容は記録奉行宛書付の他、記録所で保管すべきとされた文書であり、記録所内部作成の調はほとんど見当らない。もちろん記録奉行の動静を示す史料は多数あるが、直接本史料と重複するものは管見によれば前出文書一点の他「旧史館調」(二) (一四八号)「忠久公御鎧うつし并小泉御冑之儀ニ付御家老連署御記録奉行宛之御書付」(『旧記雑録追録三』に収載)等七点にとどまる。

次に記録奉行吉田清純について補筆しておこう。『鹿児島県史』によれば、江戸に出て服部南郭門に学び漢詩文に長じ帰省後記録奉行・使番に進み、安永九年二月に歿したとあり、また宝暦・明和の頃古学派荻生徂徠学が普及その先駆となったのは清純(字蘭阜、老号浦雪)と市来政公(瀬兵衛、記録方添役、明和八年歿)であったという。履歴は吉田用右衛門、元文三年記録方稽古、同六年添役、宝暦五年奉行、明和四年使番とある。前述白木文書五番

箱にも残される寛延二年十一月の藩主重年実名考に、また同三番箱に残される同三年十一月一日の前藩主宗信影像添軸物草案覚書（『旧記雑録追録五』収載）等に江戸芝藩邸での精励ぶりがうかがえる。また本史料でも「史館調」（四二二号）「町田仲右衛門御番勤方之調」での配慮や、同（三五五号）「開口在柳宮秘鑑」での川上久儔への、また「旧史館調」（一三〇号）「延享中將軍職解任之儀ニ付執事等ヨリ上表」但書注記での安藤茂真への敬称、同（二二五号）寛延四年三月十五日の元記録奉行伊地知重英の孫助太郎の吉田宛書状の存在等々からみて本史料の私的性情が感じられ、また正本では記載されない「調之」、「調」の用語の使用や、奉行・添役等の略字名使用、吉田清純の場合に「吉」或は「用」を符号の如く記することなどから公的史料とは考え難いと判断した次第である（なお不確定）。

また同僚本田親方・山田有雄についても『鹿児島県史』に漢学者として併記されており、本田親方が吉田の後を嗣いで奉行の主任として活躍するが同人こそ後の記録奉行本田親孚、さらにその後の記録奉行伊地知季安の祖父であり、記録所内の吉田―本田―伊地知の系譜をうかがわせる。伊地知季安は本田親孚の記録奉行時代その教導をうけ文化朋党事件に連座して配流、赦免後も久しく閉居、無官の生活が続いたが学業に専念、記録所等とも縁をつなぎ史料を借写する等次第に實力を身につけていく。天保年間、在野の史家として注目されるようになり、「桂庵禪師碑銘」や「穆佐悟性寺義天様御石塔一件勘考書」をめぐって一時当時の記録所（奉行得能通古等）と対立するが、やがて時局の推移と共に復権、藩主斉彬の下で嘉永五年記録奉行となり通古等とも和解するに至る（得能氏については『鹿児島史学』50 林匡氏「薩摩藩記録奉行得能氏について」参照）。季安没後、季通は通古と相互に史料の貸借をするなど交流している。そして季安の遺志をついだ季通は季安の収集、書写、集成につとめた記録所関係史料の保存に配慮したのである。『伊地知季安著作史料集五』の「伊地知氏雑録」もその成果の一つとってよく、その第一に収載されている正徳三年九月十六日の御記録奉行田中五右衛門（国明）・川上平右衛門（久儔）連署の一

冊こそ奥書に「明和三年丙戌三月上旬書写之 清純」とあり、吉田清純の書写本と伝えられるものであり、季安と清純の時をこえた記録奉行としてのつながりをうかがわせている。

本史料がどのようなようにして作成され、保存され現在に至ったか明確に示す史料がなくあくまでも推測にとどまらざるを得ないが、あえて試見を述べるとすれば、記録奉行吉田清純らが職務の傍ら作成、粗々まとめておいた半私的参考史料を後の記録奉行伊地知季安らが手に入れ、多少手を加え、さらに明治以降、記録所廃止（明治四年）後も残務を継承した季安の子季通をはじめとする県庁・島津家編輯所員の手により奇跡的に整理集成保存されてきたものといつてよいのではなからうか。「家譜」や「旧記雑録」にほとんど収載されない文書が多いだけに有価値と思われる（後掲本巻掲載文書内文書・記録・記事等点数参照）。なお林匡氏の論稿として近年刊行された国文学研究資料館編『藩政アーカイブズの研究』（岩田書院）収載「鹿児島藩記録所と文書管理―文書集積・保管・整理・編纂と支配―」と地方史研究協議会編『南九州の地域形成と境界性』（雄山閣）所載「薩摩藩の家格・役格整備と藩政文書の書式統一―島津吉貴藩政期を中心に」があり、記録所の歴史全般について詳述されている。また本稿でとくにとりあげなかった初期の記録所・記録奉行についても同氏の『鹿児島史学』52「薩摩藩文書奉行及び初期の記録奉行について」が詳しい。

以上とりとめもない史料紹介になつてしまつたが、二点感想めいたことを述べさせてもらえば、一はよくぞこの史料が残されたものという想いで、それに関わつた作成者、持伝えた人々、それをとりまとめて史料の形で今に伝えた人々に敬意と謝意を表したいということ。二は本史料が写本ではあるが近世中期の藩社会の実情を、多数の家筋調をはじめとする記録所の諸調を通して明らかにし得る具体的基本的な史料ではないかと実感し、今後の活用を期待したいということである。

終わりに、本稿執筆にあたっては調査史料室の担当室員各位より数々の助言を得た。毎々のことながら記して謝

『記録所一』掲載文書点数

文 書 名	文書数 (収載) <未収>	目録上史料 総 数	掲載史料数
史館調	80 (4) <76>	69	69
旧史館調 一	120 (7) <113>	117	117
旧史館調 二	90 (3) <87>	75	75
旧史館調 三	100 (0) <100>	85	84
旧史館調 四	71 (9) <62>	42	42
旧史館調 五	64 (5) <59>	53	53
旧史館調 六	164 (2) <162>	142	142
旧史館調 七	25 (0) <25>	25	25
旧史官調雑抄 一	183 (2) <181>	160	159
旧史官調雑抄 二	87 (0) <87>	76	75
旧史官調雑抄 三	33 (8) <25>	6	6

注1 収載とは「旧記録録」収載文書を示し、未収とは、「同」未収載文書を示す。

2 掲載史料数とは、『記録所一』内で掲載した重複分を除く史料数を示す。

意を表したい。

(付記)

なお目録欄の発出者連名の記載順については、「調」字の付記のある場合は、その氏名を先に掲げている。

(五味 克夫)

例言

一 本書は、「史館調」「旧史館調一〜七」「旧史官調雑抄一〜三二」を収め、『旧記雑録拾遺 記録所史料一』として刊行するものである。

本書の底本とした史料名と所蔵を掲載順に示すと次の通りである。

史料名	所蔵別
史館調	東京大学史料編纂所
旧史館調	東京大学史料編纂所
旧史官調雑抄 一〜三	東京大学史料編纂所

一 文書・記録・記事は、原則として底本に従って掲載し、通し番号を文首に付した。重出文書にも番号を付し、重出の旨を注記して本文は省略した。

一 収載した文書をほかの文書や写本等によって補充または校訂する場合は、次のようにした。

ア 補充・挿入箇所は▽ △及び◇で示した。

イ 原文書又は旧記雑録等がない字句については、原則として該当箇所を「 」で囲み、その右側に典拠史料を記し示した。また、漢字・かなの相違については、原則として読みが同じであれば、底本のままとした。

ウ 補充や校訂に使用した典拠史料は、次の略記号で示した。

旧記雑録 ㊦

島津家文書 (東京大学史料編纂所所蔵) ㊧

新編島津氏世録正統系図 (東京大学史料編纂所所蔵) ㊨

一 刊行にあたって、文書の体裁をおおよそ次のように統一した。

ア 原注や文書中の異筆・補筆は、原則として「」（墨書）、『』（朱書）で囲んだ。

イ 文書の年月日・差出所・宛所の位置などは、原則として底本の体裁に従った。

ウ 文書・記録・記事中には、適宜読点「、」および並列点「・」を付した。

エ 原注に移動指示がある場合は、原則として該当箇所に移動した。

オ 頭注や行間の書き込みは底本の体裁に合わせたが、長い場合は※印を該当箇所に記し、関連箇所の本文後に適宜まとめた。

一 見せ消は、その文字の左側に「々」を付した。

一 編者の付した注は、原注と区別するために（ ）で囲んだ。

一 欠字・平出・台頭などは、原則として底本の体裁に従った。

一 原文中の送り仮名及び返り点は、原則として省略した。

一 変体仮名は現行の平仮名に改めたが、江、茂、者、与など一部はそのまま用いた。

一 漢字は一部の異・略・俗字を除き、原則として底本の用字に従った。

一 本文中に、後に記入する目的や虫損等の理由で空けられたと考えられる箇所については、原則として底本の体裁に従った。

言 一 『鹿児島県史料 旧記雑録』との重複文書については文末に注を付した。なお、記事の場合には、原則として

重複注は逐一付きなかった。

例 一 当時一般に使用された文字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

哥(歌) 吳(異)

𠂇(事) 早(畢)

筭(算) 季(年)

𠂇(稅) 刁(寅)

工(衛)

𠂇(婦)

逃(逃)

广(摩)

昏(紙)

旧記雜録拾遺記録所史料一 目次

解題…………… 1
例言…………… 16
目次…………… 19

史館調…………… 一
旧史館調…………… 一

一…………… 五五
二…………… 九八
三…………… 一五四
四…………… 二一三
五…………… 二五一
六…………… 二九五
七…………… 三六〇
旧史官調雜抄……………
一…………… 三六七
二…………… 四三五
三…………… 四八九

目次

文書目録

.....五三五

史
館
調

(表紙)

史館調

目録

- 家久公御家譜之中
- 慈徳院様琉使具志川王子御召列事件
- 島津圖書殿宅江初而 御光儀ニ付家来之もの共 御目
見且進上物等之調
- 島津大学殿宅江 御家督初而 御光儀ニ付諸調
- 島津周防殿宅江初而 御光儀ニ付諸調

- 島津備中殿家来川上六郎兵衛外一人自分継目之御礼
御城に於て家格之進上物被仰付度願之調
- 島津周防殿家来別府市郎左衛門継目家督ニ付家格之進
上物仕 御城に於て 御目見之願之調
- 島津主殿殿宅江 御光儀之節小林左内・島津登 御目
見之調
- 奥附代々土二木二十兵衛継目養子成ニ付御礼願之調
- 小番格之家江大番家親類より番代之先例調
- 松崎家相續
- 丹生家家筋
- 加世田衆中鮫島四郎右衛門五拾石高上り願之調
- 鹿兒島士黒木柴右衛門五拾石高上願之調
- 黒木家系圖
- 鹿兒島士富山半蔵家筋調
- 御納戸附代々土川合太左衛門初而高持成之願調
- 親治右衛門代より御番入願失忘當有馬半次郎存當り此
節御番入願之調
- 継目家督并養子嫡子成等之御礼八歳より以下者同格之
者名代にて可申上仰渡

- 御書院附代々士大山九平外城養子願之調
- 総州様御直御沙汰書之写
- 竹之山權四郎養子願之調
- 入道様江善次郎殿より進上目録に實名可被相用否之調
- 水引八幡新田宮江相属候千儀家筋調
- 國分衆中池田新左衛門家筋調
- 鎌田太郎左衛門先代々勤方之調
- 鎌田平右衛門高祖父以来勤方調
- 諏方大明神御由緒調
- 大龍寺之邊色々唱等之調
- 御太刀・銀馬代目録等認様之調
- 鹿兒島士小牟田六兵衛相果直子無之に付大根占衆中川邊某を継目養子願之調
- 坊泊衆中間世田助六直子無之比志島隼人家来重信八兵衛を養子願之願(調)
- 小城權現宮由来調
- 與頭人数實名書記差出候様被相渡候書附写
- (一〇開口在柳營秘鑑「脱力」)
- 伊作衆中益山金左衛門相果直子無之養子願之調
- 伊集院千右衛門家筋調
- 秩父十太夫家筋調
- 岸半藏家筋調
- 木脇三左衛門家筋調
- 日本御禁制之書籍
- 町田仲右衛門御番勤方之調
- 三雲新右衛門家筋調
- 山田覺太夫家筋調
- 御厩附代々士松山次郎八永代御暇之上竹之山權四郎養子願不被仰付候ニ付再ひ御厩士江被召入度願之調
- 久保七兵衛家筋調
- 蓮金院江御沙汰書
- 泉坊江被成下候知行目録之吟味
- 日向國御家来證文六通
- 伊集院郷地略誌
- 日置郷地略誌
- 市来郷地略誌
- 串木野郷地略誌
- 平佐郷地略誌

- 隈城郷地略誌
- 水引郷地略誌
- 高城郷地略誌
- 野田郷地略誌
- 出水郷地略誌
- 中西家傳來之能之傳書之調
- 御家系圖筆者江書調候趣書記
- 踊衆中嘉茂源五左衛門直子病身ニ付島津善次郎殿家來某を養子願之調
- 琉球王子被召連江戸御參府御登城一件之調
- 吉田用右衛門より川上平右衛門・本田七右衛門・山田喜三右衛門江之書狀
- 町田幸太郎家筋調
- 平田鞆負・市來左中御礼進上物之調
- 中山王尚穆謝恩使被召連江戸江御參府一件
- 太守様琉人被召連先規之通 御登城且被下物進上物其外諸次第之一件
- 寛陽院様 淨國院様御兩代琉使江戸江被召連 御參觀御日延等之調

102

「正文在御炊太夫」

101

覚

- 琉球國飢饉且王城焼失等御助力之御取分を以来辰年之御參府御用捨被仰出候御書
 - 御月番井上河内守様より被御渡候書付御記録所江納置候様御家老島津帶刀より田中五右衛門江被相渡書付之写
 - 正徳二年辰 御參府御用捨之処同巳年同御用捨事件且御請書御差出
 - 正徳四年・享保三年 淨國院様琉使被召連御參府之一件
 - 慈徳院様中山王尚敬慶賀使被召連 御參府之一件
 - 家久公御家譜之中
- 止先年所寄附于太神宮之神田百斛納米、為其代自今茲奉納白銀百両、是秋収及海陸運送等、以失墜多故如此云々、已上、

太神宮之為御領知行百石致寄附之^{㊦由}、從先年書物可在之候、然者遠國より毎年使被差越所務有之儀、殊之外造作還て失墜に成候間、右百石分之為納毎年銀子拾枚

ツ、奉納可在之候間、可被得其意候、恐々謹言、

伊勢兵部少輔

元和九年

貞昌印

二月廿七日

島津下野守

久元印

御炊太夫殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一七四一・一七八七号文書ト同一文書ナルベシ)

○慈徳院様琉使具志川王子御召列事件

覺

一延享五辰年、將軍家重公就御代替中山王尚敬御祝儀

之使者具志川王子、^(朝利)寬永元年九月九日、慈徳院様被召

列鹿兒島、御發駕、御供之御家老鎌田典膳政昌、琉使

江被召附候御家老平田掃部(後靱負)正輔、十二月十

日、御出府、同月十五日、琉使被召列御登城、御

目見相濟申候、同月廿八日、琉使江戸被召立、御家老平田靱負正輔被召附、翌二年巳三月十三日、鹿兒島江到着いたし候、

一右ニ付、慈徳院様西目筋、御通船、十一月八日、播州

坂越江、御着船、直ニ御旅行、同十四日、大坂御屋敷

江、御光着、同十八日、川御上り御乗船、同十九日、

伏見江、御光着、同二十二日伏見御立、美濃路御旅行、

十二月十一日、江戸芝御屋敷、御光着、此節者島津兵

庫殿・^(後重年)入来院石見殿御供被仰候、琉使茂同日江戸江着、

琉使芝、御屋敷江被召置候事、

○島津圖書殿宅江初而、御光儀ニ付家来之者とも

御目見且進上物等之調

覺

島津圖書殿宅江、^(久亮・宮之城家)御家督初而之、御光儀、自分家督之

御光儀、家来之、御目見・進上物・拜領物有無之儀ニ

付、島津出雲殿・島津筑後殿両家之家来とも不相并候、

圖書殿家来とも此節何様可被仰付候哉、吟味仕可申出

旨被仰渡候、圖書殿養父監物代一所持之内より大身分

被仰付、諸事島津出雲・島津大学(久章・花園家)・島津筑後同前に可

被仰付よし被仰渡置候、然者圖書殿家大身分に被仰付

候ニ付而者、同格之内品能方に不被仰付候得者相并不

申筈与奉存候、筑後家来ともに者進上物・拜領物無之

由候得とも、家筋に付て者御六男家、圖書殿事ハ御三

男家にて御座候得者、下段に相落候て者同格と申なか

ら不足之様に被存候、圖書殿家大身分被仰付候て者此

節初而之 御光儀にて御座候間、出雲家之例に可被仰

付儀与乍憚私共吟味仕候、以上、

寶曆二四月八

吉田(清純)

川上(久徳)

但家来拾五人 御目見被仰付、進上物・拜領物者不

被仰付候旨被仰渡候、

○島津大学宅江 御家督初而 御光儀ニ付

覺

此節島津大学宅江 御家督初て被遊 御光儀、御膳

進上被仰付候ニ付、別紙之通被成御渡、調被仰渡、

左之通御座候、

享保七年寅九月 隅州様御代故島津周防殿宅江 御家(久徳)

督初而 御光儀之節、家来拾七人進上物仕 御目見被

仰付候、其後向後 御光儀之節者、家来拾五人 御目

見可被仰付旨被仰渡置候よし被申出候、

一同十五年戌十二月、大学自分繼目被仰付候ニ付 御光

儀之願被申出、當座江調被仰渡候、故周防殿事御親戚

之故を以、御座之間におひて兵庫殿・周防殿・玄蕃(島津)

殿と御禮之次第被仰付候、大学殿代に罷成候而者、島

津左衛門次に先年家格被究置、又候哉當三月、大学事

亡父周防殿繼目被仰付候ニ付て者、家格之儀先年被定

置候通島津左衛門次にて、月次出仕御礼席御祝儀事等

諸事左衛門・筑後同前に可被仰付由被仰渡置候、然者

大学事 御光儀願之儀も左衛門同前に可被仰付儀与吟

味仕書差上置候、然処に大学所帯方難續ニ付段々儉約

被仰渡、不被遊 御光儀、輕き進上物迄を被差上、

御光儀為相濟筋に被仰付たる由に御座候、夫故家来

御目見等之次第相知不申候、 右之通御座候、然者大学事自分繼目ニ付 御光儀

ハ輕き進上物被差上相濟為申事に御座候、此節者御家督初而 御光儀一通之儀に御座候得者、被仰

渡置候通家来十五人 御目見迄被仰付、進上物・

拜領物に者及問敷儀与奉存候、其外大學類中より

進上物等之儀ハ、此節島津出雲宅 御光儀同然に

可被仰付儀与是又吟味仕候、以上、

寶曆二年壬申四月六日

川上(久備)

本田(親方)

吉田(清純)

○島津周防殿宅江初而 御光儀ニ付調

覺

島津周防殿私宅江 御光儀御膳進上被仰付被下度候、(忠起)

新規御取立之儀ニ候故先例無御座候、同格島津備中(貴備)

殿・島津善次郎殿家家督継目 御光儀之節之通、進上物其外都而右両家同前に被仰付被下度旨願被申出、

調被仰渡、左之通御座候、

周防殿事越前島津家相續被仰付候ニ付而者、御家中第

一之高家にて御座候得とも、新規御取立之事候故諸事先例相知不申候、

一島津備中殿・島津善次郎殿家一所持迄之節、家督継目

御光儀御太刀・御道具・御馬鞍置進上、家来十五人

御目見被仰付候事、

右之通ニ御座候処に、備中殿・周防殿・因幡殿・(島津忠卿)

善次郎殿家一所持之内より段被相替 御一門に被

仰付候、右ニ付て者備中殿・善次郎殿一所持迄之

時よりハ品能被仰付筈に御座候、御太刀・御道具・

御馬鞍置之儀者、是より重き品者無之候ニ付、一

所持之節も當分も右進上被仰付、家来 御目見之

儀者、大身分十五人 御目見被仰付事に候故、

御一門方ハ両三人被相重、其内進上物・拜領物有

之筋に可被仰付儀に御座候、右四家 御一門に被

仰付候以後、 御家督初而之 御光儀・其身家督

継目之 御光儀無之候ニ付、右通吟味仕候、然者

周防殿家も 御光儀之節御太刀・御道具・御馬鞍

置進上、家来も右通に被仰付家格ニ被仰付置、此

節之儀者一統に被仰渡候進上物にて 御光儀御膳

進上可被仰付儀与私共吟味仕候、以上、
宝曆二年申四月七日

吉田(清純)
川上(久籥)

右之通申出置候通、周防殿宅 御光儀之節、家来十五人 御目見被仰付候、其内役人計拜領物・進上物被仰付候旨承之候、且又備中殿宅江 御光儀之節も、家来十五人 御目見被仰付、有来り候通進上物・拜領物等被仰付候事、

○島津備中殿家来川上六郎兵衛外忝人自分継目之御礼御城におひて家格進上物被仰付度願之調

覺

備中殿家来川上六郎兵衛・町田賀右衛門此節自分継目之御礼、御城におひて家格之進上物仕 御目見被仰付被下度旨備中殿より願被申出、調被仰渡候、元文二年巳四月、玄蕃殿家来 御目見之儀、御願も無御座候処に御見合を以被仰付、其節川上六郎兵衛・町

田助兵衛継目家督之節、一度ツ、御太刀進上仕 御目見可被仰付候、後年至子孫引續家督継目之節、一度ツ、御目見可被仰付旨當座江も被仰渡置候、左候而、川上六郎兵衛門(ママ)・町田助兵衛御太刀進上仕、同四月廿八日、於 御書院 御目見被仰付候、

一玄蕃殿家来兩人ツ、家督継目之節御太刀進上にて 御目見被仰付候、今忝人被願出候者々、御目見可被仰付旨被仰渡置、其節家来町田次郎兵衛(後賀右衛門与改名仕候)進上物仕、御目見之願被為申出、御願之通、元文五年申八月廿八日、御太刀進上にて 御目見被仰付候、其御被仰渡候者、玄蕃殿・周防殿・兵庫殿家来(久門・加治木家)三人ツ、右通り 御目見被仰付候者共者 御目見之節脇差指候様に被仰付候、三人外向後 御目見被仰付候者有之候而も脇差指候(衝力)候儀不罷成旨當座江も被仰渡置候、

右之次第御座候、然者備中殿家来三人継目家督之節、忝度ツ、御太刀進上にて 御目見被仰付候得者、後年至子孫引續家督継目之節、忝度ツ、御目見可被仰付旨先年被究置候、依之此節家来川上

六郎兵衛・町田賀右衛門引續きの儀に御座候に付、
自分継目の御禮先格之通御太刀進上にて 御目見
被仰付、尤脇差指候様に可被仰付儀与奉存候、以
上、

宝曆二年申四月廿日

吉田
(清純)

○島津周防殿家来別府市郎左衛門継目家督ニ付家格
之進上物仕御城におひて御目見之願調

覺

島津周防殿家来

別府市郎左衛門

右亡父別府市郎左衛門継目被申付、家格之通進上物仕、
於 御城 御目見被仰付被下度旨願被申出、調被仰渡
候、
(島津忠紀)
周防殿家来先別府市郎左衛門・中村助左衛門・肥後運
右衛門三人ともに代々 御目見可被仰付由、元文二年
巳三月廿三日被 仰出、同四月十五日、周防殿越前家
相續之御礼被申上候節、右三人共に於 御城御太刀進

上にて 御目見被仰付候間、御格式之通當別府市郎左
衛門事自分継目の御礼於 御城御太刀進上仕 御目見
可被仰付儀与奉存候、以上、

申四月廿四
(宝曆二年)

吉田
(清純)
川上
(久備)

○島津主殿殿宅江 御光儀之節小林左内・島津登御
目見之調

覺

本文相札申候処に、此節諸家江 御光儀之節、親類中
より進上物仕 御目見被仰付候、然者小林左内事主殿
(政二)
殿家三男にて候処に、先年新規他家家に被召立候、然
(久貴)
共無據親類別条御座なく候、島津登事ハ主殿殿家二男
(久登)
にて、是又無據儀に御座候、右次第御座候得者、此節
御光儀之節、左内・登御肴代御目録進上仕 御目見可
被仰付儀与吟味仕候、以上、

申四月十一日
(宝曆二年)

吉田
(清純)
川上
(久備)

覺

○小番格之家江大番家之親類より番代之先例調

本文調被仰渡候、二木長八事奥附足輕にて候処に、奥附一代士に御赦免被仰付、御礼奉願置候処に、奥附代々士二木二十兵衛繼目養子被仰付候、右右躰之先例見合申候得とも相知不申候、依之吟味仕候者、最初一代士に被仰付候御礼無之候而者、一代士に被仰付候御相^{礼カ}欠け申候ニ付、一代士之御礼者中紙進上相納、左候而、繼目養子成之御礼中紙進上にて 御目見可被仰付儀与吟味仕候、以上、

右ニ付、一代士に被仰付候者ハ 御目見之席無之、御通掛けに 御目見被仰付筋に先年被仰渡置候由承之候、後年為考書記置者也、

(宝曆年)
申四月十一日

(清純)
吉田
(久壽)
川上

覺

○奥附代々士二木二十兵衛繼目養子成ニ付御礼願調

小番格之者幼少之内、大番人親類之内より番代相勤候先例も有之候者々相調可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一代々小番當松崎十郎左衛門曾祖父松崎休左衛門部屋栖之内相果、嫡子松崎善助幼少之内休左衛門弟松崎藏右衛門事休左衛門跡番代ニ罷成、御馬廻被仰付候、以後善助に家督相譲り、藏右衛門事二男家に別立、大番家筋にて一代小番に被召入置、其以後京都御留守居御役相勤、代々小番江被仰付候、

一代々小番當深栖七左衛門曾祖父深栖七左衛門事深栖嘉右衛門幼少之内番代に罷成、御馬廻にて江戸詰仕、其後嘉右衛門江家督相譲り、七左衛門事二男家にて別立、一代小番に被召入置候、

右番代之儀ニ付、此跡當座江調方被仰渡候儀者無御座候得とも、帳内に右通相見得申候付申出候、

松崎家・深栖家之儀者代々小番之家筋にて、同名家内之中より番代に罷成たる事に御座候、番代之義者、其家々之家督之勤仕、家督相譲り候以後別立候得者、大番相勤申筈に御座候、此儀を以者同

名家内之者も大番人他家之親類之者も同前ニ相見得申候、左候へ者、大番他家之親類にても無據願申出訊御座候ハ、右松崎・深栖両家之傍例ニ被準、他家之親類小番之家番代可被仰付儀与吟味仕候、然共右躰之先例者見當り不申候故、乍此上御詮議次第奉存候、以上、

(宝曆二年) 申四月十八日

(清純) 吉田
(久備) 川上

○松崎家相續

覺

松崎善兵衛

右嫡孫

松崎善助

番子

松崎新助

松崎伊左衛門

松崎十郎右衛門

養子 松崎十太郎

右十太郎事右十郎右衛門弟之処、依願十郎右衛門養子に被仰付候、

○丹生家家筋

12 覺

六代祖

一丹生備前事、(信房)倉岡移地頭相勤候、

地頭帳ニ者不相見得候、

五代祖

一丹生助右衛門

右助右衛門事、備前子丹生新三郎早世ニ付、徳永

豊前嫡子を養子に仕候、助右衛門儀者備前甥之由、

日當山地頭相勤候由申傳候、

但地頭帳ニ者不相見得候、

四代祖

一丹生弥兵衛(信途) 右助右衛門直子

右弥兵衛事、物頭御役并山之口移地頭相勤候、

但地頭帳ニ者不相見得候、

三代祖

一丹生助右衛門 右弥兵衛直子

右助右衛門事、御馬廻にて江戸詰仕、寄物頭并寄

御勘定奉行相勤候、

但物頭・御勘定奉行帳ニ相見得候、

二代

一丹生平八 右助右衛門直子

右平八事、中通御目附相勤候、

最前ハ御側御小姓役、

一私事平八弟にて候処、男子無之候ニ付、平八継目養子

に被仰付、當時四番組小番相勤居申候、

宝曆二年申三月九日

丹生助右衛門

右助右衛門響養子丹生弥兵衛事者岸良清右衛門ニ

男にて候事、

○加世田衆中鮫島四郎右衛門五拾石高上り願之調

覺

加世田衆中鮫島四郎右衛門五拾石高上り之願申出、家

筋調被仰渡候、四郎右衛門六代之祖鮫島加賀勤方相知

不申候、高祖父鮫島民部左衛門事者 御城下土川越三

右衛門家之先祖川越三右衛門二男にて候処に、右加賀

養子に罷成、噺役相勤候、曾祖父鮫島郷兵衛、祖父鮫

島次右衛門兩代ともに噺役相勤候、親鮫島郷兵衛與頭

役相勤候、當四郎右衛門事噺役相勤、當時者所衆并之

御奉公相勤居申候、尤代々加世田衆中にて御座候、以

上、

(宝曆二年) 申四月廿六日

(清純) 吉田
(久備) 川上

○鹿兒島士黒木柴右衛門五拾石高上願之調

覺

本文五拾石高上り之願申出、家筋調被仰渡候、黒木柴

右衛門六代之祖黒木次郎兵衛事日州高原江罷居申候、

高祖父黒木太郎次郎(後左近兵衛与改名仕候) 山田昌

巖齋高原地頭職之節與力役相勤、福山地頭職被仰付候

節直に彼方江相附罷越、福山江居住仕候、(義久)龍伯様江

御奉公相勤候よし、自家より者申出候得とも、何様之

勤方仕候訳相知不申候、(義弘) 惟新様朝鮮國江御渡海之節

御供仕、且又関ヶ原 御合戦之砌首尾好御供仕候故、

知行高五拾石之 御感状頂戴被仰付候、其後昌巖齋出

水地頭職被仰付候節又々與力相勤、直ニ出水江罷移り、

組頭役相勤申候、夫より以来出水に居住仕候、曾祖父

黒木七左衛門(後に柴右衛門と改名仕候)、祖父黒木

喜右衛門兩代ともに所相談役相勤申候、親黒木喜兵衛

御兵具差引役相勤候、當柴右衛門横目役・御兵具差引

役等相勤申候、當分何ぞ勤方無御座候、尤代出水衆中

ニ而御座候、以上、

(宝曆二年)
申四月廿日

(清純) 吉田
(久備) 川上

○黒木家系圖

黒木次郎兵衛

嫡子

黒木次郎兵衛

後七左衛門 左近兵衛

二男家

黒木次郎左衛門

高原へ罷移り、當分子孫黒木
次左衛門与申者高原江有之、

後柴右衛門

黒木七左衛門

黒木喜右衛門

黒木喜兵衛

黒木柴右衛門

養子
黒木角之助

出水衆中武官喜兵衛二男なり、

○鹿兒島士富山半蔵家筋調

覺

富山半蔵

右家筋調被仰渡候、半蔵高祖父富山備中勤方相知不申

候、曾祖父富山弥市兵衛事當家村李太郎家より右備中

養子に罷成、代官・金山物奉等(行脱カ)之御役相勤申候、是則

當富山傳内左衛門先祖にて御座候、祖父富山半兵衛事

ハ右弥市兵衛二男にて、初而別立、横目役相勤申候、

亡父富山弥市兵衛是又横目役相勤申候、當半蔵事ハ右

弥市兵衛二男にて、兄當富山弥市兵衛家内にて罷居候

処に、先比別立被仰付候、當分御近習番所筆者相勤居申候、尤代々御城下士にて、大番相勤申筈之家筋にて御座候、以上、

(宝曆二年) 申六月六日

(清純) 吉田 (有雄) 山田

○御納戸附代々土川合太左衛門初而高持成之願調

17

川合太左衛門曾祖父代より以前之儀者相知不申候、祖父川合市郎右衛門事江戸江罷居候、親川合長右衛門右市郎右衛門二男にて、江戸窄人にて罷在候、金細工仕御用之御細工をも仕差上申候、右長右衛門母事者酒井(忠隆) 靱負佐様御夫人(泰清院様御娘)御幼稚之砌御乳相勤候、右訳を以、武仁兵衛江戸詰之節家来にて御當地江召列、直に居付に罷成り候、

大玄院様田布施江 御光越之節御沙汰有之、長左衛門(右カ)

母御奉公之一筋を以御切米三石被下置、御用御細工被仰付候、當太左衛門事数年御用金細工相調差上申候二付、御納戸附御小者に被仰付置、其以後御納戸附一代士に御赦免、延享四年卯八月七日、御納戸附代々土に

被仰付、今以御用細工相調差上申候、當分御納戸押番をも相勤罷在申候、以上、

宝曆二年申四月廿六日

(清純) 吉田 (親方) 本田

○親治右衛門代より御番入願失忘當有馬半次郎存當り此節御番入願之調

18

覺

有馬助左衛門事、元文三年午五月、江戸におひて相果、同十二月、嫡子有馬治右衛門繼目被仰付、幼少にて御番入之願親類とも氣付不申不願出内、寛保二年戊四月、相果候ニ付、治右衛門弟當有馬半次郎事治右衛門繼目養子に罷成、是又幼少にて、其砌親類とも御番入願不申出、治右衛門代より数年におよび延引仕候故、此節半次郎存當り、代々小番入之願段々申出趣有之、調被仰渡、左之通御座候、一宝永三年戊三月、御番入御格式之内、中絶之儀依願者御取上ケ有間敷候間、小番被仰付格之者御役相勤、又

者餘事之御奉公にて御番入不仕者ハ、申出次第小番帳ニ可載置候、不申出御番入不仕者は中絶に可罷成旨被仰出置候、右御格被相定候以後、御番入之願不申出中絶いたし候者無御座候、

一 山田四郎右衛門曾祖父より亡父まで三代引續六人賦之

御奉公仕候ニ付、四郎左衛門代(右九)新番入之願申出、調被

仰渡候、然者四郎右衛門事家督いたし候まで代々新番之御格式不被相定候故大番相勤申、其以後代々新番之儀者享保十三年二月御格式被相定、其涯早速新番入之願被申出候ハ、代々新番被仰付筈候処、数年におよ

ひ新番入之願不申出、寛保元年西十一月まで大番相勤居候ニ付、中絶に相當り申候故、願之通に者難被仰付儀与當座より吟味書差上置候処に、新番入不被仰付候、

右之通御座候、治右衛門代一世御番入申後れ中絶仕候、當半次郎事此節にいたり及数年御番入延引仕、

早竟幼少にて親類とも氣付不申、不願出筋に相見得申候、然れとも右式申後れ御番入不仕者ハ、中絶之御格に相當り申候、山田四郎右衛門事新番入願不申出、大番相勤候訳を以中絶に相當り、新番入不被仰

付候、御番入中絶に付而者右傍例も御座候、小番入御格式にも、不申出御番入不仕者ハ中絶に可罷成旨被安置候、然者治右衛門・半次郎両代におよひ御番入不申出候得者、中絶之御格に相當り申候故、半次郎事如元小番に者難被仰付御座候間、大番に可被召入儀与吟味仕候、以上、

宝曆二年申五月廿七日

山田(有雄)
本田(親方)
吉田(清純)

○継目家督并養子嫡子成等之御礼八歳より以下ハ同格之者名代にて可申上仰渡

覺

継目家督并養子嫡子成等被仰付候節、八歳より以下之者ハ名代を以家筋之進上物仕御礼申上度旨一類ともより願申上候様にと被仰付置候、同格之者名代にて御礼可申上儀に候、左候得者、多人數御礼申上候節者名代に頼ミ候同格之者差支儀も可有之候間、八歳より以下

之者ハ同格之名代ニ而無之候ても、名代を以家筋之進上物仕御礼申上度旨一類ともより願申出候者、右進上物相納候筋に可被仰付候、左候而、名代之者御礼序(席上)に罷出に者不及候、尤右之通御礼申上相濟候得者、成長いたし、重て御礼之願申上るニ者不及事に候、此旨支配中へ可通達候、以上、

享保五年 五月

(島津久武) 全

右通達子五月十日被仰渡候、

○御書院附代々士大山九平外城養子願之調

覺

御書院附代々士大山九平亡父大山九藏代御書院附代々士に御赦免被仰付候、九平代までハ二代に相成申候、外城養子之願四代目より被取揚、三代迄不被取揚旨被仰渡置候ニ付、又々相調可申出旨被仰渡候、外城養子御格式之内、近代別立候者にても外城衆中又ハ家中者之内無據由緒有之者は其訳を以養子に可被仰付旨、去

ル元文二年巳三月、被仰渡置候、然者岩元秀善坊亡父岩本多楽院代初而別立申候、然処に秀善坊事本家岩本十郎大夫跡養子に罷成申候、秀善坊まで二代に罷成候処に、高尾野衆中茨木南龍院二徒弟之續きにて所持高をも持越候ニ付て、秀善坊跡養子奉願、御免被仰付候、右式之例も御座候、尤御格式之内にも、近代別立候者にても無據由緒有之者者養子御免可被仰付旨被究置候間、肥後仁平太事ハ九平甥にて無據血筋之儀に御座候間、養子御免被仰付候ても何ぞ差支申儀者有御座間しく与吟味仕候、以上、

宝曆二年申六月十七日

(清純) 吉田

○総州様御直御沙汰書之写

21 一丑閏七月十二日、於御隱居所種子島彈正・名越右膳・相良大藏(長賢)・宮之原甚太夫(重行)・三原善兵衛・佐久間九右衛門・長東市郎右衛門・徳永治左衛門・向井四郎右衛門、右人数被召寄、総州様御直御意候者、御隱居表立て之御用向何事も御格式に懸儀者御構ひ不被遊思

召候、然共 太守様御年若被成御座候ニ付、御為宜儀者可被 仰達儀与被 思召候、諸人之勤之善悪者御聞せ被遊、 太守様江可被 仰達与被 思召候、就夫被 思召候者、惣而勤之宜方之儀誰も申者に候得者、不勤或ハ不屈之致方に付而者遠慮いたし不申上候、左様之もの有之節者、 御隠居にて御障り不被成御座候間、随分御聞出被成候様に御手當被 仰付候、

一 御家老之儀者、諸人にほめられ候様に勤候て者御為に者よろしからざるものに候、縦ハ諸人之願之儀も吟味いたし、大かた六ヶ敷やうに埒明候様に候得者、諸人ハほめ申者に候得とも、左様いたし候得者御奉公に者不相成候、

一 惣而御付届ハ猶以何角ニ付我もの不入事候得者、手ふとくいたし候事人々致能もの、御留守居ハ猶以左様有之候得者御奉公に者不成候、當時 公義御格式諸事花麗之儀無之様にと段々被仰渡候得者、無益之費無之様に氣を付申儀肝要ニ候、

一 此節 御家督御祝ニ付、随分手ひろく承合、御勝手宜敷様可仕候、御出入之町人とも奉行頭人・小役人之長

屋など江参り、御買入物等之儀ニ付何角与心安町人を愛付候儀不宜候、町人之儀者取入候而勝手よろしき方にいたすか町人之仕形に候、其儀を取持候て御勝手之無吟味取持候儀不宜候、物奉行別而氣を付可申事ニ候、ケ様之事致候者ハ、御目附・横目随分氣を付させ遂披露候様可致候、

一 数代之御出入之町人ともよりも、脇々町人より下直に可差上与申ものも有之候得者、御立入不致者にてても其方を取り可申候、数代御用物賣上候故を以、高直に有之候を御買入仕候儀不可然候、数代御出入仕候訳を以、兎角鼠肩ケ間敷儀を申候儀了簡違に候、町人に家之格式など、申儀者無之事候、只利徳を第一といたす者に久しき御出入、近年御出入与申無差別、御勝手宜敷賣上候者江可申付候、町人之内にも数代御出入いたし候ものハ高利をも不取筈に候得とも、町人ハ左様之道理も不存、兎角當時之勝手よき方致者に候間、随分氣を付、左様致させざる様に役人とも可心懸事に候、御料理人は猶以可心懸、数代御出入之町人にてても高直に賣物を差上、不宜仕形之者御用不申付、御出入可差留候、

右之通被 仰出事候間、御普請奉行・御茶道頭江も承知仕可然候、御普請奉行之儀者大分御物入之場を相勤候間、猶以諸事氣を付、右被 仰出趣相守可然候、以上、

八月

於江戸被仰出候御書付にて候、

右、享保六年丑十月十六日、種子島(時感)十左衛門御取次を以被 仰渡候事、

○竹之山權四郎養子之願調

覺

竹之山權四郎直子無之候ニ付、御厩附代々土松山次郎八事、權四郎妻方無據訳を以、養子御免被仰付被下度旨段々願申出趣有之、調被仰渡、左之通御座候、一當權四郎高祖父以前之儀者相糺候得とも相知不申候、曾祖父（実ハ祖父ニ而御座候）竹之山林左衛門隈之城衆中にて、勤方相知不申候、祖父竹之山權右衛門事ハ(光久)寛陽院様御代定御供相勤、直に 御城下土に被召出候、

亡養父竹之山權左衛門諸檢者等之御奉公相勤、先年相果候、權四郎事ハ右權右衛門二男にて、其身代別立罷居候得とも、兄權左衛門家跡養子に罷成候ニ付、世代を以ハ三代に相成申候、權四郎御普請方檢者其外諸所檢者にて、江戸詰をも仕候、權四郎妻ハ穎娃内膳家来川井田幸兵衛(女脱カ)にて御座候、

一當松山次郎八曾祖父御中間相勤、祖父松山甚六代御厩附代々士に御赦免被仰付候、亡父松山友悦事醫道修行仕、表寄番醫師被仰付、其以後 信證院様(綱貫後室) 於榮様御方御醫師相勤、去ル寛保三年亥十二月 御城下一代土に被仰付候、友悦嫡子松山友貞、二男當次郎八にて御座候、友悦妻ハ穎娃内膳家来川井田幸兵衛二女にて御座候、

右之通御座候、權四郎妻ハ川井田幸兵衛娘、友悦妻ハ姉にて、次郎八事ハ甥之續血筋別条御座なく候、然者差而故も無之別立候者外城養子之願四代目よりハ被取揚、三代までは不被取揚、近代別立候者にても無據由緒有之者ハ養子御免可被仰付旨御格式被安置、無據由緒之訳を以ハ、近代別立候者にては外城

養子御免被仰付候先例多く御座候、縁類之訳を以て外城養子御免被仰付候先例者見當り不申候、然とも次郎八事者權四郎妻為には甥之續、殊更兄友貞持高之内六石持越、養父介抱可仕旨段々願申出候、此儀を以てハ權四郎家別立候而三代に罷成候得とも、妻方無據由緒、其上高をも持越申候得者、願之通養子御免被仰付候而も何ぞ差支申儀者有御座間敷与吟味仕候、然しなから右躰之先例見當り不申候故、此上者御詮議次第奉存候、以上、

宝曆二壬申年六月十八日

吉田(清純)
川上(久備)

○入道様 江善次郎殿より進上目録に実名可被相用否

哉之調

覺

(吉野) 入道様 江善次郎殿より御進上物有之候、御目録に実名被相用候、元服無之内幼稚にても実名相用事に候哉、両条相札可申出旨被仰渡、左ニ申上候、

一於御家中 御直元服被成下候人者、元服之節実名相究候先例に御座候、

一家督之人者幼少にても実名相用、又者不相用訳私とも存し不申候、乍然様子により他所江付届いたす書付に者、実名不相用候而不叶儀も可有御座与奉存候、此儀傍例も覺不申事候へ者、究而難申上御座候、

右相札候趣如此御座候、以上、
享保廿一年即元文元年辰五月七日改元、

辰十一月十一日

町田(俊徳)
相良(長香)

○水引新田宮江相屬候千儀家筋調

覺

水引新田宮江相屬候千儀家筋相札可申出旨被仰渡、左之通御座候、

千儀職之儀、古来より佐々木氏之者勤来候処に、右佐々木家断絶におよび、中比番代を以千儀職相勤申たる由候、然処に權執印二男川幡周兵衛と申者千儀職相續

いたし、其子川幡周兵衛引續き千儀職相勤申候、右周兵衛事初者男子無之ニ付、新田宮社人島元源七兵衛二男島元清右衛門養子に仕、川幡仲栄と改名仕、千儀職相勤申候、最初に周兵衛男子無之、仲栄養子に仕候以後直子出生仕、川幡幸左衛門与弟分に罷成、家内にて罷在候、右幸左衛門嫡子川幡新左衛門事當千儀従弟にて、且又家内にて罷在候処に、去ル享保十四年酉九月、國分衆中池田甚左衛門養子に罷成候、

右新田宮妻帯權執印・千儀・大檢校三家之儀者同格にて、於 御城年頭ニ者 御目見被仰付、其外諸御祝儀事之節者外城衆中同前に參上仕、御祝儀申上候、且又右三家二男三男之者者外城衆中養子にも罷成、外城衆中より右家江養子に為罷成も有之、以前より縁組等も仕、外城衆中同前に被仰渡置たるよし、此節執印吉太よりも申出候、千儀家筋相糺候趣如此御座候、以上、

元文元年辰十一月七日

町田(後發)

25

○國分衆中池田新左衛門家筋調

覺

國分衆中池田新左衛門家筋相糺可申出候、新左衛門事ハ新田宮千儀従弟にて候処に、國分衆中池田甚左衛門養子に罷成、家督迄もいたし居候、新左衛門事甚左衛門由緒も有之、無據問柄にて養子に罷成たる儀にても候哉、且又新左衛門事ハ外城衆中同格之者と慥成證據等も有之事候哉、委細に相糺可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一池田甚左衛門曾祖父池田十郎左衛門、祖父池田甚左衛門、親池田堅右衛門、當池田甚左衛門代々國分衆中にて候事、

一右甚左衛門直子無之ニ付、新田宮千儀従弟川幡新左衛門事、去ル享保十四年酉九月、甚左衛門養子に罷成、池田新左衛門与改名仕、同十九年寅八月家督仕候、右養子に罷成候儀、無據問柄与申ニ而も無之、前代より甚左衛門家に由緒有之よし申傳候までを以養子に罷成候由、此節新左衛門より申出候、新田宮權執印・千儀・大檢校事ハ、此以前ハ御家老より御直書をも被下、

又者直にも書付等差上候儀、執印・權執印等格護仕候
文書之内段々相見得申候、右三家之儀者新田宮社家よ
りも格式宜者にて、古来より神領高之内銘々被下置、
右三家者格別に高員数も相重ミ所持いたし、執印吉太
勤方差支候節者跡役をも勤来り候、且又年頭に者 御
目見被仰付、諸御祝義等申上候節者諸外城同前罷出候、
權執印家より者水引衆中養子に罷成候儀、系圖にも相
見得申候、右三家より二男三男之者外城衆中養子にも
罷成、外城衆中より右家に養子に罷成たるも有之、以
前より縁與等も仕、外城衆中同前に為被仰渡置由此節
執印吉太よりも申出候、尤手札之表も無年付書付名字
にて衆中同前に被下置候事、

一當千儀川幡萬慶曾祖父川幡周兵衛と申者ハ權執印家之
二男にて、千儀職相續いたし、其子川幡周兵衛事も千
儀職相續仕候、右周兵衛始ハ男子無之、新田宮社人島
元源七兵衛二男島元清右衛門養子に仕、川幡仲栄と改
名仕、千儀職相勤申候、其子當千儀川幡萬慶にて御座
候、最初に周兵衛男子無之、仲栄養子に仕候以後直子
出生仕、仲栄弟分に罷成、川幡幸左衛門与申候、仲栄

家内にて罷在候、右幸左衛門嫡子川幡新左衛門事當千
儀従弟にて、是又家内にて罷在候処、右池田甚左衛門
養子に罷成申候、尤新左衛門事千儀家内にて罷在候内、
手札之表も無年付書下名字にて罷在候事、

右段々之次第を以相考候得者、權執印・千儀・大檢
校三家之儀者衆中同然之格式に相見得申候、且又此
節千儀家筋之儀執印吉太方江も申遣相糺候処、前条
に相見得申候通り、以前より外城衆中同前に被仰渡
置候由申出候、此儀別条有之間しくと奉存候、右段
々相糺候趣如此御座候、以上、
元文元年辰十一月十二日

町田(後慈)

○鎌田太郎左衛門先代々勤方之調

26 覺

一高祖父 鎌田加賀政在

右桜島地頭

一曾祖父 鎌田監物政貞

右靄田地頭

右兩代何御役相勤候儀ハ相知不申候得共、右之通地頭職被下置候段者、當座古書付之内に相見得申候、

一祖父 鎌田太郎右衛門政栄

右御用人御役相勤、諸所地頭職被仰付候、

一親 鎌田太郎右衛門政高

右御用人御役相勤、諸所地頭職被仰付候、

一當 鎌田太郎右衛門(政直)

右當時御勘定奉行御役被仰付置、地頭職被下置候、

右鎌田太郎右衛門高祖父・曾祖父兩代引續き地頭職被下置、祖父以來三代引續き御用人御役相勤、是又

地頭職被下置候、

○鎌田平右衛門高祖父以來勤方調

覺

一高祖父 鎌田左京政徳

右申口御役相勤為申由候、此儀當座江ハ相知不申候得とも、自家江右通り傳來仕、金地院崇傳國師

より 家久公江被差上候書状之内左京名相見得、

且又左京事馬越・清水・小林等之地頭職被仰付置

候儀者當座江も慥ニ相見得為申事候得者、申口御役相勤候儀別条有之間敷与奉存候、申口御役者當時御用人御役之事ニ而御座候、

一曾祖父 鎌田左京政喬

右御用人御役相勤、諸所地頭職被仰付候、

一祖父 鎌田後藤兵衛政方

右御用人御役相勤、諸所地頭職被仰付候、

一親 鎌田十左衛門政常

右御用人御役相勤、諸所地頭職被仰付候、

一當 鎌田平右衛門(政興)

右當分 御隱居様御方御用人御役相勤申候、

右五代引續御用人御役相勤、地頭職被仰付候、

右之外、諏訪仲右衛門祖父諏訪(兼型)右衛門御家老御役相勤、親并當仲右衛門兩代御用人御役相勤、相良主左衛門親相良權太夫まで三代引續き御用人御役相勤申候、

此外祖父代まで三四代引續き御用人御役相勤候者者餘

家にも御座候、此等之段申上候、以上、

元文元年辰十一月十七日

町田(後誌)

○諏訪大明神御由緒調

覺

當所諏方大明神如何様成御由緒にて、何之頃より御
勸請候哉、相糺可申出旨被仰渡、左に申上候、

承久三年七月十八日、鎌倉將軍頼經卿御代 御元祖忠

久公信濃國大田莊地頭職（其時之地頭者當分之領主に
て御座候）御給被成置、五代貞久公御傳領にて御座

候、山田聖栄自記に、貞久公御在國之時者信濃に御

下り、本社諏方を懐き御申し、山門に崇祝御申候、同

神馬鷹御すへ 御下向候与相見得申候、且又御家譜之

内にも、貞久公信州大田莊より薩州江御下り之時、

當國本社諏方大明神を請し下し、山門院総社に御崇め

候与相見得申候、大田莊之儀 忠久公より 貞久公迄

御五代 御傳領之地にて、御代々諏方大明神御尊崇

之由緒を以、右通 御當國江御勸請にて可有御座奉存

候、然共右御勸請之年月ハ相知不申候、左候而、 六

相良（長香）

代氏久公御代、山門院より鹿兒島東福寺城脇江御引移
り之時、山門院之諏方大明神を當分之地に御遷宮、宗
廟に御崇候与是又御家譜之内に相見得申候、右遷宮之
年月日相知れ不申候得共、安養院格護仕候 氏久公諏
方大明神神領御寄進状を以相考候得者、延文元年之頃
にて可有御座与奉存候、

右相糺候趣書付差上申候、以上、

元文元年辰十二月十四日

町田（後齋）相良（長香）

○大龍寺之邊色々唱等之調

覺

上大龍寺之邊を本御内与唱申候、古来別に為唱名者無

之候哉、且又壯之助殿拜領之屋敷、又ハ米良藤右衛門

罷居候屋敷迄も御内与申候哉、御屋形有之候御囲内

計を本御内与申候哉、御記録所へ相知居候者、可申出

旨被仰渡候、

御譜其外諸書付等見合申候得とも、右段々之儀相知れ不申候、依之私とも相考申候者、本御内と申候者御内計を唱へ申たる筈与存申候、然者當分河野八郎左衛門・伊藤九左衛門屋敷より西相良弥一兵衛・吉川玄隆屋敷迄此已前躍辻も有之、御内与相見得申候間、此分を本御内与申にて者有御座ましく哉と奉存候得とも、大龍寺御屋形之節御内之境委細に相知れ不申候間、究而難申上御座候、且又壯之助殿屋敷之内本若松平八郎・中島七郎左衛門・本田信次郎・平岡八郎太夫など罷居たる所者、大龍寺御屋形之節御犬之馬場にて有之たる由候、川上十助・石原越右衛門など罷居たる所より戸柱之方者伊集院(忠徳)幸侃屋敷にて有之、當分米良右衛門罷居候屋敷者島津相模屋敷にて有之たる由、老人とも咄に承申候、尤傳承迄にて何ぞ證據等ハ無御座候、相糺候趣如此御座候、以上、

元文二年丁巳四月十三日

兄玉(利張)
安田(マ)
相良(長香)

30

○御太刀・銀馬代目録等認様之調

覺

御太刀・銀馬代目録に者御太刀一腰・御馬何疋与記し、青銅・太刀目録に者御太刀一腰・青銅百疋与相記し候、青銅・太刀目録に茂御太刀一腰・御馬一疋と可記事候処、青銅百疋与相記し候者古風ともにてハ無之候哉、相糺可申出旨被仰渡、左之通御座候、一天正二年甲戌八月朔日、如恒例御太刀一腰・青銅百疋進上申候、

一 同年(閏)霜月十七日之晩、御犬之馬場におひて御稽古始にて候、夫より御對面所にて御三献參候、御座に者主居、御次に新納近江守殿、其次喜入撰津介(季久)、客居上川上上野守殿、其次同名武藏守殿にて候、武州御盃(久勝)いた、き候時、太刀御給候、青銅二百疋之折紙にて候(兼親)ひつ、御三返目に御老中召出し候、次に本田紀伊守、其次拙者召出し、御酒被下候、一 同三年乙亥三月二十五日、御犬追物有之、御三献過候て、各持參之太刀之次第者、三日之御手組之様に上げ候、射手之外者次第なしにて候也、一所衆・諸地頭皆

々太刀持參候、おしなめて百疋也、

一同十一年九月十五日、平田殿にて談合なり、其衆忠棟(伊集院)

光宗(平田)・伊野州・上長州・本刑部・新石・穰新也、松浦

筑前守案内者にて候間參候なり、赤星殿禮儀に被來候、有馬殿舍弟是も禮儀に來られ候、太刀・百疋預り候也、

一同十二年正月十一日、御吉書之御三献に、御座次忠棟・

親貞(本田)・本田刑部少輔、客居忠長(鳥津)・光宗・拙者なり、筆

者本刑也、如恒例御判各頂戴申候、寄合中・御右筆に百疋ツ、被下候なり、此後拙者旧例之御太刀持參任候、百疋也、

右之通上井覺兼日帳に相見得申候、目錄にも青銅何疋与被相記たるにて者有之ましく哉与相考申候、其外御太刀・銀馬代之儀者相見得不申候、且又應永十七年 元久公御上洛之節、將軍義持公其外脇々江被進候品物書付之内、御太刀一・鳥目何貫与有之候、目錄に何様に被相記候儀者相知れ不申候、相糺趣候如此御座候、以上、

元文二年巳四月十七日

兒玉(利張)

安田(マコ)
相良(長香)

○鹿兒島士小牟田六兵衛相果直子無之ニ付大根占衆
中川邊某繼目養子願之調

覺

本文小牟田六兵衛相果、直子無之候ニ付、大根占衆
中川邊休右衛門事、六兵衛家血筋親類之訳を以繼目
養子之願親類ともより申出、調被仰渡、左之通御座
候、

一六兵衛曾祖父小牟田弥右衛門(光久) 寛陽院様御代定御供相

勤申候、高祖父以前之儀者相糺候得とも相知不申候、
祖父小牟田藤兵衛輕き御奉公相勤、江戸江も相詰申候、
亡養父小牟田弥右衛門山奉行所定筆者相勤、江戸江も
相詰申候、右弥右衛門直子無之候付、岩城千左衛門弟
岩城六兵衛智養子に罷成、小牟田六兵衛と申候、御家
老座筆者相勤、江戸ニおひて相果申候、

一大根占代々衆中川邊休右衛門高祖父川邊丹波所衆并之御
奉公相勤申候、曾祖父川邊測右衛門事者右丹波二男に

て別立、與頭役相勤、祖父川邊休右衛門横役相勤候、

右休右衛門二男川邊休左衛門正徳五年未四月別立、與

頭役相勤候、二男當休右衛門にて候、測右衛門妻者六

兵衛養祖父小牟田弥右衛門姉にて御座候、

右之通御座候、六兵衛与休右衛門續之訳者、六兵衛

養祖父弥右衛門姉休右衛門曾祖父川邊測右衛門江相

嫁、祖父川邊休左衛門出生いたし候、付而者家筋ニ

付三従弟之續別条御座なく候、六兵衛事ハ岩城家よ

り養子ニ而相果、直子無之候故、血筋之續者相絶申

候、然者 御城下士山元平藏相果、直子無之、奥附

足輕山元彦左衛門事家ニ付血筋無據親類にて、繼目

養子之願親類ともより申出、當座江調被仰渡候、平

藏亡養父山元甚平与山元彦左衛門續之訳ハ血筋二従

弟違ひにて御座候、平藏事ハ和天平左衛門二男にて

候処に、右甚平養子に罷成候、右無據血筋之訳に御

座候間、願之通繼目養子御免可被仰付哉、乍然右通

之先例見當り不申候ニ付、究而者申上かたく候間、

御吟味次第可被仰付旨、去年九月、吟味書差上置候

処に、願之通に者御免不被仰付候、尤外城養子御格

式之内にも、無據血筋又者为差立訳も有之、願之趣

に依てハ被仰付儀も可有之由、元文二年巳五月、御

格式被定置候、右六兵衛繼目養子之願何ぞ為差立訳

も相見得不申候故、右平藏例を以者願之通に者被仰

付間敷儀与私とも吟味仕候、此上なから御詮儀次第

奉存候、以上、

宝曆二年申七月廿三日

山田(有雄)

本田(親方)

吉田(清純)

○坊泊衆中間世田助六直子無之比志鳥隼人家来重信
八兵衛を養子願之調

覺

本文坊泊衆中間世田助六直子無之候ニ付、比志鳥隼

人家来重信八兵衛血筋無據者ニ御座候間、御免被仰

付被下度旨願申出、調被仰渡、左之通御座候、

一助六祖父問世田慶左衛門事者野村太兵衛家来にて、硯

細工仕、寛陽院様御代より御用細工相勤申候、亡父

間世田弥兵衛代御細工所附被仰付、御用御細工相勤居申候処に、(吉良) 淨國院様御代坊泊衆中に御赦免被仰付候、助六事ハ右弥兵衛三男にて、別立被仰付候、

一 八兵衛曾祖父重信周右衛門、祖父重信藤左衛門、親重信喜右衛門、當八兵衛迄四代ともに伊勢兵部殿家来にて御座候、右喜右衛門事者自分依願南林寺門前者に罷成、八兵衛事者如元伊勢兵部殿家来にて候処に、先年比志島隼人家来に罷成候、右周右衛門妹者間世田慶左衛門妻にて御座候、尤周右衛門事元来谷山衆中にて候由申傳候得とも、其證據相見得不申、衆中にて候哉凡下にて候哉相知れ不申候、周右衛門以前之假名相糺候得とも、是又相知れ不申候、

右之通申出候趣を以者、助六与八兵衛續之訳ハ、八兵衛曾祖父重信周右衛門妹助六祖父間世田慶左衛門江相嫁し、親間世田弥兵衛出生いたし候ニ付而、助六与八兵衛与は二従弟違ひ之續に相見得申候、右ニ付私共吟味仕者、御城下士其身代別立候者ハ、由緒無之候得者、外城養子御免無之御法に候、且又外城養子之儀者、三四代相續仕候家筋外城高持来候者

者御免被仰付御法に候、然者外城衆中跡目相續之儀も右に準し可被仰付儀に御座候、間世田助六事其身代別立、為差立勤方も無之、尤八兵衛家筋之儀、元来者谷山衆中之由申傳候得とも其證據無之、八兵衛曾祖父周右衛門以前之儀、衆中にて候哉凡下にて候哉相知れ不申候、周右衛門妹ハ助六祖父慶左衛門妻之由候得とも、親之名茂相知れ不申候ニ付て者、士凡下之分ちも無之候、右通不審なる者にハ血筋之訳申出候而も御取揚有之ましく儀与奉存候、足輕・家来・寺門前之者不審成者者、血筋之訳を以茂御吟味之上、御城下士又者外城衆中養子に者被仰付ましく儀与吟味仕候、尤本文願之通に者被仰付ましく儀与奉存候、以上、

宝曆二年申七月九日

山田(有雄)

本田(親方)

川上(久備)

吉田調之(清純)

○小城權現宮由来調

覺

小城權現宮

右宮者 御家十一代之太守陸奥守忠昌公数年御病身にて被成御座候ニ付、御先祖様之御加護を御願思召、御平愈を御祈候御志願にて、真勝院（或ハ新照）殿大岳譽公居士（九代之太守陸奥守忠國公之御法名）之 御靈を小城權現与明應六年十月廿七日御崇尊候て、燈明田迄 御寄進被成候、御志願成就におひて者永代退轉不可有之、彼宮之儀者安養院連續之院主可致執務旨 忠昌公之御寄進状に被載置候、小城權現之御由来件之通に御座候、以上、
正徳二年壬辰九月廿日

川上（久壽）
肥後（盛香）
市来（家年） 四人連名
田（田中国明）

○與頭人実名書記差出候様被相渡書附

写

- 一番 島津安藝久雄
新納四郎久辰
- 二番 島津市正忠廣
佐多又四郎久孝
- 三番 桂又十郎忠知
吉利下総忠張
- 四番 島津左近久守
樺山又九郎久廣
- 五番 町田出羽忠尚
種子島左近忠時
- 六番 伊集院源助久朝
島津美作久基
- 七番 伊集院右衛門久國
川上上野久運
- 八番 祢寢七郎重永
川上将監久将
- 九番 鎌田又七郎正勝
入来院伯耆重高

十番 伊勢兵部貞昭

島津中務久茂

御家老組 島津彈正久慶

島津圖書久通

右與頭之儀、光久公御代寛永廿年之頃より初て被仰付たる由候、右與頭之人數書被相渡候ニ付、実名書記差上候旨、正徳三年癸巳六月、肥後二右衛門存と有之、

○(147)

開口在柳營秘鑑

それ松竹の二千代の三冬も同じ深緑より常盤かきははゆく御菌生になを相生の陰そへてめてたかりける時とかや

右開口にハ夫と書出し、末ハ時とかや又ハ御代とかやと書納るなり、是傳授之よし、川上親央翁直(久徳)に傳授なり、于時宝曆二年壬申七月十九日、

但吉貴公御代正徳年間、兩度親央江被仰付書調被差上候よし承之、然れとも當座江も書留無之候故、

致口傳置候、

○伊作衆中益山金左衛門相果直子無之養子願之調

覺

本文伊作衆中益山金左衛門相果、直子無之、親類又ハ同所衆中之内にも養子に可罷成者無之、樺山左京家来竹崎喜右衛門血筋二從弟違ひ之續に御座候間、金左衛門跡養子に被仰付被下度旨願申出趣有之、調被仰渡、左之通ニ御座候、

一益山金左衛門曾祖父以前之儀者相知れ不申、祖父益山十右衛門事俗生又者勤方等相知れ不申候、親益山金左衛門事御厩附にて為有之由にて申出、御厩方段々相札候得とも、是又相知れ不申候、金左衛門事御厩附にて候処に、大工之業に情(情)を出し候ニ付伊作衆中に被仰付候旨、宝永四年亥二月黒葛原源左衛門御證文を以被仰渡候、右次第を以ハ祖父十右衛門并親金右衛門儀も御厩付にて可有之と相考申候、金左衛門事宝永六丑年江戸江被差越、同年十二月、彼地におひて相果、翌寅年より當年に至り高帳面張紙にて被召置候よし所役々申

出候、本文ニ者金左衛門事享保五年子十二月相果候旨申出候得とも、此儀者相違にて御座候、段々相糺候処に、右通宝永六年相果候段所役人ともより申出、只今にいたり四十五年ニ罷成申候、

一竹崎喜右衛門高祖父竹崎越中御直士にて、慶長之頃樺山美濃久高志布志又ハ出水地頭職之節被召付、右両所江罷越、出水におひて相果候よし、曾祖父竹崎仲右衛門代樺山家家来に罷成候、祖父竹崎越右衛門事仲右衛門二男にて御座候、樺山相馬代役人相勤申候、親竹崎越右衛門事樺山主計代役人相勤申候、當喜右衛門事飾金細工仕、御切米被下置候、御細工所御用相勤申候、右之通に御座候、金右衛門・喜右衛門續之訳者、金右衛門祖父益山十右衛門妻ハ伊作衆中野元藏右衛門二女にて、金左衛門親金右衛門其後に出生仕候、喜右衛門曾祖父竹崎仲右衛門妻事も右藏右衛門嫡女にて、仲右衛門江相嫁し、喜右衛門祖父竹崎越右衛門出生いたし候ニ付、金右衛門・喜右衛門二従弟違ひ之續き別条無御座候、然者 御城下士養子願之儀ニ付被定置候御格式之内にも、近代別立之者にても、

外城衆中家中者之内無據由緒之者養子に願出候儀者相来通可有之旨被仰渡置候、外城衆中養子願之儀ニ付而者御格式被定置候儀無御座候得とも、右之御格式に準し候得者、外城下おひても同様可被仰付儀与奉存候、然れとも金右衛門事其身代御厩付より伊作衆中ニ御赦免為被仰付者に候得者、代々衆中筋目にて其身代別立候者とハ訳葎相替、其上相果候節より只今にいたり四十五年ニ及び跡養子も無之、高帳面に家跡相残り候迄にて、大形断絶之姿に相見得申候、夫とも差立たる訳も有之家筋にても候者、御取分を以養子可被仰付儀も可有御座候得とも、其身代御赦免為被仰付者に候得者、左様之訳も無之、且又金左衛門祖母・喜右衛門曾祖母野元家より右両家江相嫁し、縁継之故を以親類に罷成たる儀に御座候得者、家ニ付無據血筋之親類と者申かたく御座候、右旁之次第を以ハ親類とも願之通に者被仰付間敷儀与吟味仕候、然ながら何分にも御詮議次奉存候、以上、

宝曆二年申七月十三日

山田(有雄)

吉田(清純)
川上(久徳)

(金左衛門・金右衛門混同ノ記載アルカ)

○伊集院千右衛門家筋調

覺

伊集院千右衛門

右親伊集院千兵衛事ハ當伊集院十藏叔父にて、十藏家内にて罷居候、千兵衛・千右衛門父子ともに勤方無御座候、

○秩父十太夫家筋調

秩父十太夫

右先祖伊地知彈正季隨与申者、氏久公御代初而御家江被召出、子孫にいたり結構に被召仕、祖父伊地知(重恵)勘助御馬廻之御奉公相勤、親十郎兵衛代秩父名字御免(将興)被仰付、御馬廻にて江戸詰仕、當十郎右衛門事最初より新番にて江戸詰被仰付、其後御馬廻被仰付候、十太(将種)

夫事右十郎右衛門嫡子にて御座候、親十郎右衛門家御前元服被仰付、代々小番相勤、御太刀・二種一荷進上仕候、

○岸半藏家筋調

覺

岸半藏

右養祖父岸喜右衛門事伊勢兵庫殿家来にて候処ニ、喜右衛門代 御家被召抱、勤方相知不申候、養父岸喜右衛門事伊佐岡伊右衛門二男にて候処に、先喜右衛門養子に被仰付、御近習役・町奉行等之御役相勤、地頭職被下置候、半藏事川上瀬兵衛二男にて、右喜右衛門養子に被仰付、代々小番ニ被召入置、御太刀進上被仰付候、

○木脇三左衛門家筋調

覺

木脇三左衛門

右先祖伊東肥後事御用人御役相勤、諸所地頭職被仰付、

其子伊東次郎右衛門事も御用人御役相勤、諸所地頭職

被仰付、男子無之候ニ付、伊東五右衛門嫡子伊東仁右

衛門事養養子に仕、御納戸奉行・吟味役等之御役相勤

申候、然処に養子違変いたし、仁右衛門子伊東次郎右

衛門江先次郎右衛門より家督相譲り、左候而、右次郎

右衛門代木脇名字に相改、御馬廻にて江戸詰仕候、八

郎右衛門事次郎右衛門嫡子にて御座候、御馬廻にて江

戸詰仕候、八郎右衛門嫡子當三左衛門にて御座候、八

郎右衛門家代々御城下士にて小番勤来、御太刀・二

種一荷進上仕候、

但當八郎右衛門事最初新番にて初而江戸詰仕候、

宝曆二年申七月十九日

山田(有雄)

川上(久備)

吉田(清純)

覺

一天學初函

一崎人(十篇脱力)

一西學凡

一辨學遺牘

一幾何原本

一天文略(問力)

一代疑篇(論力)

一三論學記(山脱力)(紀力)

一職方外記(紀力)

一同文算記(指力)

一句股義(勾力)

一計開

一七克

一彌撒祭義

一袁度説(表力)

一聖記百言

一寰有記(説力)

一靈言蠡句(勺力)

一况義

一渾蓋通憲門記(圖説力)

一明量法義(測力)

一簡平儀記(説力)

一滌平義記(ママ)

一徐罪正記(藤力)(規力)

一唐景教碑附

一天主實記(義力)

一圈容較義(圓力)

一萬物眞原

一十慰

一交友論(泰力)

一參西水法

一教要解略

一二十五言

○日本御禁制書籍

以上三十三部

○町田仲右衛門御番勤方之調

覺

本文町田仲右衛門御番勤方之儀何様可被仰付候哉、

奉得御差圖候旨申出、調被仰渡、左之通御座候、

一御家老直申渡之御役人御役御免以後御番者被仰付間敷

候、右御役御免之節、小普請銀被差免候段申渡候人ハ

格別其旨申渡、無之人ハ小普請銀ハ可相掛候、右ニ付

代番之願申出候ハ、有来通得差圖可被致首尾候、一

代小番之者悴代番之願申出候ハ、大番相勤答候間、是

又同然得差圖可被致首尾候、尤代番願之通被仰付候人

江者小普請銀相掛間敷旨、元文元年辰十二月、當座江

も被仰渡置候、

一仲右衛門御記録奉行御役数十年相勤候故を以地頭職迄

被仰付、直觸ニ被召入置候、然処に先頃其身無調法之

訳有之御役御免、地頭所までも被召揚、遠方寺入被仰

付候、

右之通に御座候得者、御役・地頭職共に御家老直申

渡にて、與頭直觸に被仰付事に御座候、右御書付之

趣を以ハ、御役首尾好相勤候者ハ、御免以後御番ハ

不被仰付事にて可有御座哉与相考申候、依御答目御

役御免以後之儀、分けて何分にも相見得不申候ニ付

而者、仲右衛門御番勤方之儀何分ニ可被仰付哉、尤

右躰之先例御座なく候ニ付、私とも究而難申上御座

候条、御詮議次第可被仰付儀与吟味仕候、以上、

宝曆二年申七月廿二日

山田(有雄)

本田(親方)

川上(久備)

吉(吉田清純)

○三雲新右衛門家筋調

覺

三雲新右衛門

江戸居附三雲新右衛門家筋相調可申出旨被仰渡、承知

仕候、新右衛門高祖父三雲太郎左衛門事ハ京都施薬院

宗伯五男にて御座候処に、中納言(家心)様御代此御方江被

召抱、御留主居并御用人御役相勤、曾祖父三雲太郎左

衛門事者信州御代官宮崎三左衛門四男にて、右太郎左

衛門養子被仰付、御留守居御役相勤申候、祖父三雲新兵衛事御側御目附・御用人・御番頭等之御役相勤、亡父三雲宗八事ハ信州御代官宮崎三左衛門三男市岡理兵衛子にて候処に、太郎左衛門子分被仰付、新兵衛跡職致相續、(吉貫養女・阿部正徳室)於喜代様御方納殿役人御役相勤申候、新右衛門家筋如此御座候、此段申上候、以上、

宝曆二年申八月八日

山田(有雄)
 本田(親方)
 川上(久備)
 吉田(清純)

○山田覺太夫家筋調

覺

山田覺太夫

右高祖父山田覺太夫、曾祖山田(父脱カ)權兵衛、祖父山田覺太夫三代とも納殿御役相勤申候、親山田四郎右衛門横目役・伏見御屋敷 御假屋守相勤、其後御勘定所小頭御役相勤申候、當覺太夫事新御番にて江戸詰仕申候、大

番家筋にて候得とも御太刀進上仕候、以上、

寶曆二年申八月八日

山田(有雄)
 本田(親方)
 川上(久備)
 吉田(清純)

○御厩付士松山次郎八永代御暇之上竹之山權四郎養

子願不被仰付候付再御厩附士被召入度願之調

覺

本文御厩付士松山友貞弟松山次郎八事竹之山權四郎養子之儀ニ付、御厩方永代御暇之願申出、願之通御暇被(衍カ)被下置候処に、養子御免不被仰付候ニ付、次郎八事本々之通御厩附士に被召成被下度旨願申出趣有之、調被仰渡候故、先例段々見合申候得とも見當り不申候、依之私とも吟味仕候趣者、たとへは 御城下士永代與之御暇願出、人家来に可罷成与仕候者家来御免不被仰付、如本々與に被召入度旨願申出候而茂、又々人家来より御城下士に御赦免之筋に罷成、宜方ニ立帰り申候故、

如本與入ハ難被仰付儀与相考申候、御座附士より品能き方を志し、御城下士養子ニ可罷成与存、永代御座御暇為願出者養子御免不被仰付節者、品悪き方に立帰り候故、如本御座付士に被仰付候而も差支申儀者御座有間敷哉与奉存候、右次第に御座候得者、次郎八事何ぞ計策を以願為申出儀にて無之、縁類之訳を以御厩方永代御暇被下、御城下士養子願出候得とも御免無之ニ付而者、如本々御厩付士に立帰り候様ニ可被仰付儀与吟味仕候、然ながら御詮議次第に奉存候、以上、

宝曆二年申八月十日

本田(親方)

吉田(清純)

川上(久備)

○久保七兵衛家筋調

覺

久保七兵衛

右六代之祖久保七兵衛事、義弘公飯野に被成御座候時、又一(島津久保)郎様江被召附候而、別而御奉公仕たる由に

候、高祖父久保七兵衛高麗・関ヶ原江御供仕、別而御奉公仕候、曾祖父久保平内左衛門勤方相知不申候、祖父久保七兵衛、親久保七兵衛両代納殿御役相勤申候、當七兵衛事段々御役相勤、祖父以来六人賦之御役相勤候ニ付、當七兵衛代代々新番被仰付候、

宝曆二年申五月三日

本田(親方)

吉田(清純)

川上(久備)

但當七兵衛事御使番御役より大坂御留守居御役被仰付候、曾祖父平内左衛門事ハ古後七郎右衛門家より養子ニ罷成候、

○蓮金院江御沙汰書

蓮金院之事為島津家宿坊此間文字なし、

中納言家久代令興隆寺領致寄附早、任先判之旨、今度少将重年被遣證書之間、御祈禱先祖之日牌寺内修造等無怠慢可被沙汰候、仍状如件、

宝曆二年 月 日

○泉坊江被成下候知行目録之吟味

写 覺

知行目録

薩州出水多田村之内

高三拾石

門屋敷三

高式拾石

隈之城西牟田村之内

門志

高五拾石

恒吉之内

住床之門

鎌田典膳(政昌)
名乗判

島津主鈴(久懸)
名乗判

義岡相馬(久中)
名乗判

伊勢兵部(貞起)
名乗判

島津主殿(久懸)
名乗判

高野山

蓮金院

合百石者

右知行、為當家長久之祈禱寄進之候、(叱力)岐与永之無怠被

修護摩於

八幡宮神前可有御 祈候也、

三原諸右衛門尉

慶長十八年

重種判

八月十九日

伊勢兵部少輔

貞昌判

泉坊

本文写一通相馬殿より被成御渡被仰渡趣者、前之者右高之所務を以泉坊江為被相渡由候得とも、近年者銀子を以被相渡候、依之此節大坂御留守居迄泉坊願出候趣者、前之御米を以被下度旨段之申出、右目録写一通差出候、御留守居より近年銀子を以相渡来候得者、御米を以此節より相渡候儀難致訊を以断申遣置候段申越候、然者本文目録之表別条有之間敷候得とも、猶又於當座見合有無之訊可申出候、重而御留守居方心得にも可相成候間、此段被仰渡候由、申正月十七日、吉田用(請)

〔純〕右衛門致承知之、御家譜之内段々見合候得とも書留

等見當り不申候、然れとも從〔家久〕中納言様御炊太夫江被

下置候御書付にも高百石被下候由相見得、目録別紙に

有之与御書付之内相見得候、右目録者不相見得候、然

者泉坊江も中納言様より御書付有之、本文者右に相

付目録と相見得候由、御書付者如何様紛失いたし、當

分本文写之通目録計り格護いたし候与被相考候に付、

右之趣を以相馬殿江口達を以申上置候、勿論目録本書

ハ差越不申候得とも、別条有之ましく与相考候段を茂

申上置候事、

宝曆二年壬申正月十七日

右之趣意者川上平〔久壽〕右衛門并添役衆申談候上にて、

口達を以て申上置候事、

右ニ付、元和九年二月二十七日、御炊太夫江白銀十枚

を以百石之納米に被引替被相渡之由、伊勢〔貞昌〕兵部少輔

殿・島津〔久元〕下野殿より御書付御家譜之中より見當り候故、

前楮に書写之置候、宜考見也、

○日向國御家来證文六通

49 覺

日向國御相給様方御家来證文寫六通

49の1

○今度諸國繪圖御改ニ付、日向國繪圖〔綱貫〕從薩摩守様御調進

被遊候ニ付、那珂・宮崎郡之内大和守領内下繪圖相調、

先年以使者鹿兒島江差出候處、御吟味之上清御繪圖御

調、江戸御評定所江皆被相納候由、依之大和守領分繪

圖御扣之写壹枚・郷帳御扣之写一冊・変地其外被相改

候目録御扣之写、此節鹿兒島におひて御渡被成、慥ニ

請取申候、為後年如件、元禄十五壬午年十二月九日

伊東大和守内〔祐美〕

松浦助右衛門印

松平薩摩守様御内

本城源四郎殿

藤野休右衛門殿

49の2 ○今度末略、文面大概似寄候故不写之、

元禄十五壬午年十二月十一日

秋月長門守内(種政)

惠利清八印

松平薩摩守様御内

右同

兩人宛

49の3 ○今度右同断、白杵郡之内御領椎葉山者遠江守御預り之地にて御座候、末略、

元禄十五壬午年十二月六日

相良遠江守内(頼喬)

米良權右衛門印

松平薩(摩守様カ)御内

宛書

右兩人

49の4 ○今度末略す、白杵郡之内壹岐守領分末略す、

元禄十六癸未年十二月十六日

三浦壹岐守内(明政)

吉村傳七印

松平薩(摩守様カ)御内

宛書

兩人

49の5 ○今度末略す、児湯郡・那珂郡之内淡路守領内末略す、

元禄十六壬午年十二月十五日(ママ)

島津淡路守内(惟久)

春成與五左衛門印

本城源四郎殿

藤野休右衛門殿

49の6 ○今度末略、御料所宮崎表之下繪圖末略之、山木与惣左衛門様より被相調末略、

元禄十六癸未年三月六日

竹村惣左衛門代

富沢庄左衛門印

松平薩广守様御内

本城源四郎殿

藤野休右衛門殿

○伊集院地之略誌

日置郡

○伊集院 伊集院氏領之、熙久出奔後為公領、

寶徳二年庚午二月廿四日 忠國公攻討伊集院城、城主

伊集院大隅守熙久失防禦道、出奔肥後國、

天文十九年十二月十九日 貴久公去伊集院移鹿兒島云

々、

伊集院彈正忠頼久雖守鋒尾之陣、聞于 元久公之訃音、

廻和諧謀而開陣而帰于伊集院云々、

日置北郷雜掌法橋信宗與地頭下野三郎左衛門尉久長代

沙彌道慶相論之事云々、

莊嚴寺

開山良範上人、八代之住俊盛法印代移此寺於鹿府、

号大乘院、

雪窓院

天正十五年五月六日 義久公發于鹿兒府到伊集院、

入當寺為髡名 龍伯、同八日詣太平寺、依佐々陸奥(成政)

守・堀左衛門佑之指南而見于 秀吉公、寶刀大小二

柄(備前包平・三条宗近)賜之、其翌九日、賜薩摩

一國安堵之台書云々、

円通庵

伊集院大隅守久氏之女剃髮禪衣而住職之、

○日置郷地略誌

日置郡

日置

天文二年十二月、山田式部少輔有親献日置于 日新公

属旗下、故山田氏移山田、同月二十四日、誅式部於伊

作云々、伊作庄同日置北郷、

宗廟 八幡

義久公御造立、年号不詳、

日置城

大永七年六月十一日、島津八郎左衛門薩广守實久陷

日置城云々、

○市来郷地略誌

日置郡

市来 市来氏世々領之、至寛正三年 立久公征市

来久家没落而為公領、

文和三年四月十日御文書之内、

市来院伊作田城

平城

是時築陣湯田口、挑戰於大日寺口云々、

天文八年閏六月十七日、實久之旗下島津越前守・新

納常陸守守之、(忠臣) 貴久公自將而攻討之、城兵失防禦

之道降、

○串木野郷地略誌

日置郡

串木野

(串或、作櫛)

文和四年十一月五日 師久公注進云、(貞久) 老父道鑑櫛木

城墉云々、去ル九月二日、宮方当城へ寄来ル之間 師

久馳向、五ヶ日致合戦、御敵等数輩討捕之追落云々、

串木野城

川上上野介忠克守之而属實久、雖然懷于 太守貴久

公之德風降旗下、且使嫡男虎徳丸謁于 貴久公云々、

文和四年十一月五日御文書之内師久公御注進状之内、

將又老父道鑑中風之身難儀ノ上、合戦最中之間不能委

細、末略之、

○平佐郷地略誌

54

薩广郡

平佐

平佐城

天正十五年、桂神祇忠助據之、 秀吉公軍九鬼・脇坂

等之軍攻之、而不落云々、

是時入来院氏合力於忠助、入援兵於平佐城、其後賜

寶刀、

同年五月十八日 秀吉公去太平寺入平佐城、發平佐入

山崎城、一宿蘆田、越于宮之城九尾到曾木云々、

天正十五年四月廿五日 秀吉公乘船著于薩州川内、陣

太平寺、故高城・水引之両城出質降、

同年四月廿五日、解纜肥後佐敷著薩州出水岸ト云々、
碓山城 薩戸郡平佐天辰村之内、

師久公御居城、

次陥矣云々、

一 渋谷氏押領之地東郷・高城・入来院・祁答院有山北四ヶ所、

54の1

一去六月廿二日、薩摩國南方御敵并洪谷人ト押寄碓山、

及散々合戦、御敵(既取破)城壁桓立攻入之時、自八幡新

田宮御山鑓音二三度響入于寄手凶徒等中、其時神慮令然哉、御方軍勢乘勝致合戦之間、凶徒等討負引退畢云々、

曆應二年八月十五日

(酒匂) 左衛門尉久景注進状如件、

(本文書ハ「旧記雜録前編」二〇五八号文書トホボ同文ナリ)

一文和三年四月十日 師久公御注進状云、就宅万城没落事、薩州凶徒等馳集市来院伊作田城、可寄来當所碓山城之由、相巧候と云々、

一 師久居碓山城、而串木野・羽島・荒川・隈城・宮里・

高江・山門院共以領知而對洪谷、經年月之後、入来院彈正少弼重門催大軍来攻高江峯城、重門雖戰死而城亦

55

薩摩郡

隈城

○隈城郷地略誌

元龜元年庚午、献于渋谷氏之押領地而降參也、薩摩郡隈之城新納伊勢守受之、百次・平佐・碓山・高江入来院氏献之、高城郡水引・中郷・湯田・西方東郷氏献之、故處兩家以清敷・東郷也、宮里界平田狩野介、高城郡水引・中郷・西方・京泊賜于薩摩守義虎(鳥津)、隈城使補島津中務太輔家久地頭職云々、

○水引郷地略誌

56 高城郡

水引

薩州家領之後為公領、

58 出水郡

○野田郷地略誌

津田城
 高城氏領、薩州家領之後為公領、
 御家始記云、文明七年十二月 忠昌(幣力)公新田宮御社參、
 御幣執印方、同日、天神宮御社參、御幣國分方、同
 日、高城之城給黎殿ニ被遣云々、
 文明十七年三月、三郎(島津)太郎忠興(重久之嫡男) 自出
 水發軍至高城、同十八日、陷于湯田城云々、

57 高城郡

高城

○高城郷地略誌

天神
 文明二年八月廿五日棟札、大願主 立久公、當地頭
 奉行藤原忠俊、
 文明二年地頭今給黎長門守忠俊、

59 出水郡

出水

○出水郷地略誌

野田 出水郷之内なり、近為一外城、
 薩州家義虎代野田地頭島津常陸(忠兼)、
 感應寺
 忠久公御代本田靜觀(貞觀)建立云々、其後雲山和尚開山、
 曆應二年頃之人也、
 薩州家領知、
 箱崎八幡
 永享三年二月廿五日、大旦那重久(島津)、大願主頼信、
 紫尾宮
 永享二年十月十三日、大旦那重久、息男初千代丸(島津忠興)、
 山門院
 薩摩國山門院内本田次郎左衛門入道兼阿給恩菓成(久兼)
(跡脱カミナリ)
 (兼阿讓狀にあり) 河地頭代官職事、延文五年八月
 廿二日、
 文治二年八月二日 忠久公著御于薩州山門院、

判官守久(高津)住于山門、動惡逆結太守、故 久豊公將又

三郎 貴久公(忠國)而領軍衆攻討之、守久不能防、而出奔

肥後云々、以山門院賜相良某也、

木牟禮

山門院西方内・六反廿・壹反給黒鳥川・一反卅、

木牟禮之城警固之裡所宛行也云々、 道鑑公賜伊地

知生(季弘)一丸云々、文和三年三月廿六日、薩广國役所大

番事、自今三月一日至同七月一日、山門院内針原・

横峯・内野分所被勤仕也云々、

建武二年、道鑑賜 本田孫二郎、

木牟禮

諏方大明神

貞久公勸請于信州諏方大明神云々、

專修寺

天正三年(乙亥)丙子之冬十二月廿五日 近衛前久公寄手光

駕出水專修寺、越年於當寺云々、

山北四ヶ所開陣之際、太夫判守久(信胤)・山城守忠朝・北殿

久照・野頸殿已下一族皆先入薩摩郡、而守久入部于山

門院、忠朝居于隈之城矣、久豊之旗下鹿兒島・谷山・

指宿・吉田・蒲生也、

一南方 ○河邊 ○知覽 ○穎娃 ○指宿 ○給黎

一山北(薩广山と見得たり)

○東郷 ○入木院 ○祁答院 ○高城

○中西家傳來之能之傳書之調

60 覺

本文中 西文右衛門家傳來候能之傳書之儀者、(綱貴)大玄院

様御代、別而大切なる傳法之事候間、中西文右衛門・

同名長兵衛兩人江傳置候様に与中西道快江被仰出、御

請申上置候由申出候、此儀長兵衛承知いたし候まで

て道快も相果、御記録所にも相知不申候、右傳書之儀

者文右衛門先祖中西長門流儀之傳書にて、御物より文

右衛門方江御預けに被仰付置候処に、延享四年卯、文

右衛門相果候ニ付、親類ともより右御預け之品可差上

哉之段島津仲江申出、右之趣 (吉眞)總州様達 御耳候処に、

右品ニ御記録所江御預け被仰付置、至後年中西家之子

孫能いたす者有之節、又ニ御預け可被仰付由 御意候

間、當座江納置、後年前条之趣紛れ無之様に可致置旨、

同年四月、當座江被仰渡、右之傳書御記録所蔵に納置申候、右次第に御座候得者、長兵衛方江御預けに者被仰付かたく儀に御座候、尤右通之傳書者嫡家までに相残、庶流に者相傳不申筈に御座候間、かたく以長兵衛願之通に者被仰付間敷儀与吟味仕候、以上、

寛延四年未閏六月三日

川上(久儀)
吉田(清純)

○御家系圖筆者江書調候趣書記

覺

御家御系圖數卷之内御讓御系圖卷、筆者御記録所筆者野村喜兵衛与申人書調被置候、子孫當野村與八左衛門与申候、近年御系續之分者御記録所筆者二階堂覺之丞書調被仰付書調置候、子孫當二階堂圓齋にて候、宝曆二年壬申九月、相記置之也、

○踊衆中嘉茂源五左衛門直子病身ニ付島津善次郎殿家来某を養子願之調

覺

本文踊衆中嘉茂源五左衛門直子有之候得とも、身弱にて御奉公難相勤者にて候故、島津善次郎家来神田(久方、後重豪)半右衛門事無據血筋之者ニ候間、養子御免被仰付被下度旨願申出、調被仰渡、左之通御座候、

一源五左衛門六代之祖嘉茂惣兵衛、高祖父嘉茂源之丞、曾祖父嘉茂源右衛門右三代共ニ噯役相勤申候、祖父嘉茂源七左衛門何ぞ勤方無之、亡父嘉茂源七左衛門代一向宗依科、宝永六年丑十月、衆中被召放、知行・屋敷被召上、踊之内中津川村百姓ニ被召成、其以後源七左衛門・源五左衛門如本踊衆中に御赦免被仰付候由、踊噯とも申出候、源五左衛門何ぞ勤方無之候、源五左衛門祖父源七左衛門妹神田善兵衛相嫁申候、

一善次郎殿家来神田元右衛門六代之祖神田元慶事ハ元来朝鮮人にて、(義弘)惟新様朝鮮御帰朝之節御供仕、御領國加治木ニ居住仕候、元慶事朝鮮國神田与申所へ罷居候故、直ニ名字に相付申候由ニ御座候、勤方相知不申候、高祖父神田助左衛門事者細工人にて高四石被下置、(義心)龍伯様濱之市ニ被成御座候節、一節彼地江罷移、其後

如本加治木江居住仕候、曾祖父神田善兵衛嫡子神田納

右衛門直子無之、弟神田勘右衛門嫡子神田元右衛門養

子ニ罷成候、何ぞ勤方無之候、右善兵衛二男神田平兵

衛代^(別カ)列立申候、平兵衛嫡子當神田半右衛門にて御座候、

右之通ニ御座候、源五左衛門与半右衛門續之訳者、

源五左衛門祖父源七左衛門妹半右衛門祖父善兵衛江

相嫁、親平兵衛出生仕候故、源五左衛門為に者半右

衛門事ニ從弟にて、血筋別条御座なく候、右式血筋

之訳を以ハ、御座附足輕又ハ人家来にて茂外城衆中

養子御免被仰付先例多く御座候間、源五左衛門養子

半右衛門願之通御免被仰付候ても何ぞ差支申儀ハ有

御座間敷与吟味仕候、以上、

宝曆二年壬申九月十八日

山田^(有雄)

本田^(親方)

吉田^(清純)

川上^(久備)

○琉球王子被召列江戸御参府御登城一件之調

63

覽

寛文十一年亥五月廿八日、中山王尚真^(貞カ)繼目使者金武^(朝)按

司^(光カ)寛陽院様被召列、江戸江 御参府、御 登城 御

目見相濟候事迄者 御家譜等にも相見得申候得、元禄^(其脱カ)

年間 御城御回禄之節、諸御書付焼失いたしたる由御

座候故、委細 御家譜之内に不相見得欵と承居申候、

寶永七年寅閏八月廿六日、文照院^(昭)様就御代替中山王

尚益使者美里王子并尚益自分繼目之御礼使者豊見城王^(朝)

子両使者^(吉豊) 淨國院様被召連、江戸江 御参府、其節者

大坂伏見之儀 公義より別而被入御念、段々結構之御

會積有之、從四位上中將ニ御任官被 仰出、琉両使被

召連 御登城、公方様御直垂にて 出御、御目見

為有之由相見得申候、

^(宝カ)寛永七年 淨國院様御代琉使被召連候、前方段々 御

内意を以被 仰出諸御書付 御家譜之内に相見得候与

存居申候得とも、爰本にて相知不申候、

右之通御座候、^(宝カ)寛永七年以前之儀、公方様御支度

附等委細爰許にて者相知不申候、文照院様御代琉

使 淨國院様被召連候御書付之内ニ、御支度付右之

通相見得申候、其外之儀段々見合候得とも、持越候
諸御書付之内ニ者相見得不申、乍然御國元御記録所
に糺方被仰渡候者、猶又相知可申儀与奉存候、以
上、

寶曆二年申十月廿八日

御記録方添役

(清總)
吉田用右衛門

右老通者、寶曆二年壬申十月廿八日晚、於播州坂越
湊島津主殿(久徳)殿より調かた被仰渡、廿八日夜八ッ過迄
相係り船中相調、翌廿九日早天差上候、則陸卸り仕
申候也、

○吉田用右衛門より川上平右衛門・本田七右衛門・

山田喜三右衛門江之状

一筆致啓達候、(重平)太守様倍御機嫌能被遊御旅行、其
御地 (継豊)隅州様御機嫌能無御障可被遊御座、恐悦御同
意奉存候、

一 太守様小倉路御日限之通 御通駅、去月四日、大里よ
り 御乗船、下之関より下之方引島之前江 御繫船、

同十一日夜半、琉使乗船不殘引島之前江着いたし候、
同十四日 御出船、琉人乗船其外御供船出船仕候、順
風無之津之浦之御繫船、同廿八日(衍力)、坂越江 御着船、
翌廿九日陸江 御卸、直ニ播磨路 御通駅、今月三日、
西之宮駅 御立、尼ヶ崎より御乗船、大坂川口にて御
本船住吉丸江被為 召、琉人乗船參居候ニ付被召連、
同四日午刻、大坂御屋敷江 御光着被遊候、此度者松
平大膳太夫様・細川越中守様・小笠原伊豫守様より御
馳走船被差出、別而結構なる艫にて琉使乗船に相成、
琉人者先例之通佐土原屋敷江直に着いたし候、同八日
卯下刻、大坂より川御座船江 御乗船、琉使乗船も御
馳走船にて致御供、先年ニ不相替御會釈ともにて御座
候、其夜申子刻(衍力)、牧方江 御繫船、寅刻 御出船、同
九日申下刻、今富橋涯より陸江御卸、伏見御屋敷江
御光着被遊候、琉人茂佐土原屋敷江致着候、淀川筋六
十年以來無之干水にて、隣國四ヶ國より人夫被差出、
川浚為被仰付由に御座候、右式故御先番御供船都而伏
見着及遲延候、明後十二日より美濃路東海道被遊 御
通驛管御座候、

各弥御堅固御出勤可被成、珍重奉存候、私并筑右衛門(川西)無吳ニ御供いたし罷在候、然しなから私儀播磨路より不快有之、大坂滞在中出勤不仕得、大坂より御問合可申越候処に、江戸より御使便旅宿遠候而、別而遅立承付、旁間ニ合不申、無是非次第御座候、依之伏見より右之段御問合可申越ため、恐惶謹言、

(宝曆二年)
十一月十日

吉田用右衛門

清純判

川上平右衛門殿

本田七右衛門殿

山田喜三右衛門殿

○町田幸太郎家筋調

覺

右幸太郎曾祖父町田嘉右衛門事者當町田仲右衛門家之二男にて、初而別立、勤方無御座候、養亡祖父町田弥市右衛門事ハ當町田源左衛門家之二男にて、右嘉右衛門養子に罷成、御船奉行御役相勤申候、直子無御座候ニ付、親町田長兵衛事ハ右町田仲右衛門亡父町田權右

衛門二男にて候処に、右弥市右衛門養子に罷成、表御小姓御役相勤、其後御目附御役相勤、拾人賦被仰付候、當幸太郎部屋栖にて御側御小姓相勤、當分中通御目附御役相勤居申候、尤六人賦被仰付置候、右長兵衛家代々小番家筋にて、中紙進上仕候、

右家筋相札可申出旨被仰渡、相札候趣如此御座候、以上、

宝曆二年申十二月廿五日

吉田(清純)

○平田鞞負・市来左中御礼進上物調

覺

本文進上物調被仰渡候、左中事當年頭於 御國元御役ニ付御太刀進上着座無之候ニ付、於爰本當年頭御太刀進上御礼不被仰付候得者、御太刀進上御礼相欠申候ニ付、進上物納にて當年頭者御礼可被仰付儀与奉存候、以上、

平田鞞負(正體)
市来左中(政方)

67の1

但取負殿進上御礼調同斷、

宝曆二年申十二月廿五日

吉田(清純)

○中山王尚穆謝恩使被召連江戸江御参府一件

覺

一寶曆二年壬申十二月二日、琉球中山王尚穆繼目謝恩使

今婦仁王子(朝義) 太守重年公被召連、江戸芝御屋敷江御参

府被遊候、御家老義岡相馬殿(久中)・島津主鈴殿(久郷)、琉使方御

家老島津主殿殿(久柄後久馮)、御側御用人本田久米(親房)

右衛門・二階堂林左衛門(行通)、琉人方御用人伊集院十蔵(久恵)、

御側御用人御近習役兼役福山平太夫(安部)、御近習役河野安(通)

之右衛門(吉)、琉人方御近習役伊地知新太夫(季周)其外多人數御

供にて、八ツ時前芝御屋敷江参着、

但吉田用右衛門・御記録所定筆者川西筑右衛門参着

仕候、用右衛門外廻主取役、筑右衛門御先供相勤候

事、

67の2

○太守様琉人被召連先規之通 御登城且被下物進上

物其外諸次第之件

一同年十二月六日 上使大御目附伊丹兵庫頭様芝御屋敷

江御出、太守様此度琉球人被召連候ニ付、御米二千

俵御先規之通御拜領被遊候、

但御目録壹通有、米二千俵と計書有之也、

一同年十二月十二日 太守様 御登城、御参府之御

禮被 仰上、西御丸江も 御登、御礼被 仰上候、

御供之御家老義岡相馬殿・島津主鈴殿 公方様江御目

見、御太刀・銀馬代一枚・紗綾二卷宛献上、西御丸

江も罷登、御太刀・銀馬代一枚宛献上有之候、

一同年十二月十五日 太守様 御登城、琉使并琉球人不

殘被召連、琉人ハ先例之通路次楽にて東下馬より 御

登被遊候、太守様并琉使・琉人、且又琉人方被召附

候島津主殿殿迄 公方様江 御目見被仰付候、西御

丸江も 御本丸御目見相濟候而琉人被召連、先規之通

西之御丸江御登被遊候事、

但西之御丸 (徳川家治) 大納言様此節御庖瘡いまた御床上無之

候ニ付、御目見ハ不被仰付候段、從 公義被仰

渡候、御次第書に者、大納言様にも御目見有

之筋に被記置候由、此方御右筆より承知之、

一 右琉使登 城ニ付、此度ハ以寛文^{行カ}文十一年之例 公方

様御支度御長袴被遊 御着候故、太守様にも御支度

御駈斗目御長袴被為 召御登 城、

一同月十八日、琉使并琉人楽童子まで不残 太守様被召

連、先日之通御登 城、於 御城琉使 御目見、音楽

被遊 上覽、首尾能相濟、琉使江御暇被下、御饗應

御吸物・御菓子、中山王并琉使・従者・楽童子まで

白銀其外拜領物被仰付候、

一 銀五百枚 一 右附紙受

一 綿五百把

中山王江

一 銀二百枚 一時服十

今婦仁王子江

一 銀三百枚

従者相中江

一時服三拾九

但忝人ニ付三ツ、 楽人拾三人江

右従 御本丸

一 銀三百枚 一時服二十

中山王江

一 綿百把

今婦仁王子江

右従 西御丸

一同月十九日、琉使并琉人不残 太守様被召連、上野

御宮江 御參詣被遊、路次楽等先規之通有之候事、

一 薰一枚 一 國絹三拾疋

一 糖餅一折

中山王江

一 薰三香合 一 國絹拾疋

一 蜜柑一籠

今婦仁王子江

右従 日光御門主様拜領被仰付候、

一同月二十七日、琉使今婦仁王子其外残らず御暇被下、

中山王江書翰被成下之、

一同月二十八日四時、琉使并琉人不残芝御屋敷被差立候、
琉人方江被召附候御家老市来左中殿、御用人伊集院十^(政方)

藏・堀堀右衛門、御近習役鎌田六郎太夫、御留守守居(真紀)
 赤松甚右衛門、御使番物頭寄海江田半藏、其外御役々
 先規之通被召附、西御門より罷出、御本門前東御門
 筋通駅被仰付候、此節も東海道美濃路被差越候、
 一寶曆三年癸酉(三月朔日) 琉使・琉人西目筋着船、鹿兒島
 江參着仕候事、

○寛陽院様 淨國院様御両代琉使江戸江被召連御參
 觀御日延等之調

覺

(光心) 寛陽院様御代寛文十一年、(吉世) 淨國院様御代宝永・正
 徳・享保年間琉使江府江被召連候付 御參觀御日延
 等之儀相糺可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一寛陽院様御代寛文十一年亥五月廿八日、琉球中山王尚
(貞乙) 眞繼目謝恩使金武按司被召連鹿兒島 御発駕、七月廿
 一日 御參府、同月廿八日、琉使被連 御登 城、
 御目見相濟申候、同十二年子四月十二日 御暇御給、
 四月十八日、江戸 御発駕、六月十四日、鹿兒島江
 御着城、

一寛文十三年(即延宝元年)巳四月十六日 寛陽院
 様鹿兒島 御発駕、東目筋 御通路、六月廿八日
 御參府、七月廿三日(マ) 御目見、十二月廿八日、從
 四位上左近衛中将に御叙任被 遊、右御叙任之儀、
 公方様御代替之節にても無之、何様之訳にて御叙
 任被 遊候段御記録之内にも相見得不申候、尤前
 々年琉使被召連候ニ付而御月延等有之候訳是又相
 知不申候、

一寛陽院様御代天和二年戌二月六日、將軍綱吉公就
 御代替中山王尚貞慶賀使名護按司(朝元) 大玄院様御部屋栖
 にて被召連鹿兒島 御発駕、西目筋 御通路、四月六
 日 御參府、同月十一日 大玄院様琉使被召連 御目
 見相濟申候、

一寛陽院様天和二年四月十九日御暇御給、五月三日、
(二九) 江戸 御発駕にて、七月三日、鹿兒島江 御着城、
 同三年亥二月二十二日、西目筋 御発駕、四月廿
 三日 御參府、同月廿六日 御目見相濟申候、右
 を以相考申候得者 御參觀御月延相見得不申候、
 一淨國院様御代宝永七年寅閏八月廿六日、 將軍家宣公

就 御代替中山王尚益慶賀使美里王子并尚益即位之謝
恩使豊見城王子被召連鹿兒島 御発駕、十一月十一日
御参府、同月十八日、琉両使被召連 御登城、従四位
上左近衛中将ニ御叙任被 遊、御目見相濟申候、翌
正徳元年卯六月十一日御暇御給、七月朔日、江戸 御
発駕、八月十五日、鹿兒島江 御着城被遊候、

右、琉両使江戸江罷登候ニ付始終之次第一巻帳頭
書之内に、

一 公方家宣公就 御代替、琉球中山王より使者差上御祝
儀申上先例候間、此節之儀も先例之通被仰付度 太守
様（吉貴公）被思召候ニ付、宝永六年丑二月十八日、
間部越前守様江島津帶刀御使者にて、先御内意被仰入
候御口上、且又帶刀より可申達与被仰付候趣書付候而
持参いたし、御家老奥村治右衛門を以申上候事、
一 右ニ付、土屋相模守様并御月番本田伯耆守様江九々一
三を以委細之儀とも御内意段々被仰入候事（九々一三
自分覚田宮齡庵にて候）、

一 琉球使者寛永・慶安・承應・寛文年間被召連候節者、
御會釈結構有之候処に、天和二年被召連候節より御會

68の1

釈輕く罷成候ニ付、天和以前之例格ニ被仰付度旨、御
月番大久保加賀守様江御願 御國元より被仰遣候事、
但右ニ付書付別冊有之也与書記有之候得とも、爰本
御記録所にて相糺候得共、相見得不申候、

○琉球國飢饉且王城焼失等御助力之御取分を以来辰
年之御参府御用捨被仰出候御書

写

松平薩摩守

琉球國去丑年飢饉、其上中山王居城焼失打續き大変有
之処、薩摩守以助力、去年琉球之両使先例不相替召連
参府仕候段、旁以大儀に被 思召候、依之来辰年之参
府御用捨可被遊候間、為心得御暇以前先達而可申聞旨
被 仰出之候、

（本文書ハ、旧記雜録追録二二三〇八二号文書ト同一文書ナルベシ）

○御月番井上河内守様より被御渡候書付御記録所へ
納置候様御家老島津帶刀より田中五右衛門江被相
渡書付之写

覺

此切紙之御書付一通ハ、正徳元年卯五月十五日、吉貴様 御登城被遊候処に、今日御礼相濟候以後御退出不被成、御扣被成御座候様に与、御月番井上河内守様より大御目附横田備中守様を以被仰達置、御礼相濟候以後御老中様御列座、河内守様より 上意之趣被仰渡候、以後為御念候とて河内守様より御渡為被成御書付にて候、此節相渡候間、御記録方江堅可被納置候、以上、

正徳元年卯五月十六日

島津帯刀印(仲休)

御記録奉行

田中五右衛門殿

(本文書ハ「旧記雜録追録二二三〇八三号文書ト同一文書ナルベシ」)

○正徳二辰年御参府御用捨之処同巳年同御用捨之事件且御請書御差出

一正徳二辰年 御参觀之筈ニ御座候得共、去寅年琉人被召連候故、右通 御参觀御用捨被仰渡候、右御用捨ニ付、同三年 御参觀御伺之御書辰八月十二日之御日付

にて被差出候処に、巳六月中 御参府被成候様ニ御老中様以御奉書被仰渡置候得共、正徳四午年、又々琉使被召連筈ニ候ニ付、巳年 御参府是又御用捨之段以御書被仰渡、右御請巳三月四日之御日付にて御書被差出、同十一月廿六日 御参府被遊候、

○正徳四年・享保三年 淨國院様琉使被召連御参府之一件

一正徳四年午九月九日、將軍家継公就 御代替中山王尚敬慶賀使與那城王子(朝世)・尚敬即位ニ付謝恩使金武王子(朝世)淨國院様被召連鹿兒島御發駕、十一月二十六日 御参府、同月廿九日、被叙正四位下、琉兩使被召連 御登城、御目見相濟申候、同五年未六月十二日御暇御給、七月九日、江戸 御發駕、八月晦日、鹿兒島江 御着城被遊、

享保元年申七月十三日、鹿兒島 御發駕、同年九月十一日 御参府、同二年酉六月十一日御暇御給、同月廿五日、江戸 御發駕、八月十五日、鹿兒島江 御着城被遊候、

一 六月 御參觀之筈候処に、九月 御參府被遊候、

此儀者去る午年琉使被召連候故、未十月六日之御

日付にて、申年 御參觀御伺書被差出候処に、九

月中 御參觀御月延被仰渡、御請同十二月二十六

日御日付にて御書被差出、申九月十一日 御參府

被遊候、且又 御參府御暇之儀、六月中被仰付被

下度旨御願被仰上候処に、寶永二年酉二月九日、

小笠原^(長重)渡守様より御願之通六月中 御參觀御交

替被仰付旨、以御書付被仰渡置候、自是以來 淨

國院様六月 御參觀被遊候、

一 享保三年戌九月十一日、 將軍吉宗公就 御代替、中

山王尚敬慶賀使越來王子^(朝慶) 淨國院様被召連鹿兒島 御

発駕、十一月八日 御參府、同月十三日、琉使被召連

御登 城、 御目見相濟申候、此度者天和二年之例を

以御官位御昇進無御座候、同四年亥六月十一日御暇御

給、同月十六日、江戸 御発駕、十月十八日、鹿兒島

江 御着城被遊、

一 享保五年子六月廿三日、鹿兒島 御発駕、九月十

一日 御參府、同六年丑六月、御願之通 御隠居

被仰出、同七年寅二月七日御暇御給、同月十六日、

江戸 御発駕、四月廿一日、直に礮御屋敷江 御

光着被遊候、右、六月 御參觀之筈候処、亥十一

月十一日御日付にて御書被差出、同九月十一日、

御參府被遊、

○ 慈徳院様琉使被召連御參府之一件

一 慈徳院様御代寛延元年九月九日、 將軍家重公就 御

代替、中山王尚敬慶賀使具志川王子^(朝利)被召連鹿兒島 御

発駕、十二月十一日 御參府、同十三日、從四位上左

近衛中将に御叙任被遊、同十五日、琉使被召連 御登

城、 御目見相濟申候、同二年三月十三日御暇御給、

同月二十二日、江戸 御発駕、五月十八日、鹿兒島江

御着城、七月十日 御逝去被遊候、

一 慈徳様にも三月中 御參觀御交替御願之通被仰渡

置候、右御逝去ニ付、勿論 御參觀御伺御月延等

無御座筈候、

一 淨國院様御代三度琉使被召連候節、 御參觀御月

延ニ付前以御老中様其外様江御内意被仰入候訳、

爰本御記録所諸書付之内ニ者見當り不申候、然れとも宝永六年段々御内意被仰入候例を以相考申候得者、御老中様方江前以御内意為被仰入にても可有御座哉与乍憚奉存候、

右、相糺候趣如斯御座候、以上、

宝曆三稔

酉正月十七日

御記録方添役

吉田用右衛門(清純)

右書附壹通、江戸におひて相馬殿より御用ニ付相調差上申候書留也、

宝永七年寅十一月、琉球中山王両使者江戸江罷上

候ニ付始終之次第一卷帳頭書之内

一江尻(仲休)馬津帶刀旅宿江興津清見寺留守居古閑役僧龍沢

院入来被申付候者、慶長十五年、琉球頭王子(具志頭朝盛、尚志)(自分覚

尚寧王弟之由)於此境被致死去、清見寺江葬、位牌安

置いたし候、依其由緒先年も琉使被致參詣候、此度も

參詣有之候哉之旨相尋られ候、兩使江清見寺より阿部

茶一箱ツ、致進覽候付て致持參候由被申候付、可為致受納旨申達候、尤琉人參詣之儀者、此方より御左右可申由返答いたし置候而、音物之茶箱ともに則兩王子江持せ遣し候事、

一右ニ付て帶刀殿より申遣し候者、先年も中官之者參詣いたしたる由候間、追て罷上り候節可為致參詣旨兩王子申候趣にて、音物之礼をも帶刀より申遣候事、

朱書

一兩王子江戸勤相濟、寅十二月十八日出足、大身分

島津(忠實)筑後殿、御家老島津大藏殿、御用人猿渡喜右

衛門・向井市之丞(友貞)、御目附讚良權左衛門・諏訪仲

右衛門其外物頭・御馬廻・新御番段々被相附、同

十二月廿三日、興津駅江着候事、

同

一清見寺におひて、具志頭按司位牌江兩王子より白

銀三枚・大蠟、

但銀薄みかき式拾丁・官香式把ツ、・祭文壹通、

右之員數銘々被遣候也、

一美里方之使嘉手苅親雲上、豊見城王子使前川親雲

上、用達川南正藏、御步行兩人相添被遣、使者口上として正藏より申達候者、此節江戸江之勤首尾能相仕廻、今日爰本罷通候、依之目錄之通具志頭按司位牌江納置候、宜敷頼存候、先頃此筋罷通候時分者、阿部茶壺箱ツ、被懸御意忝存候、右之御礼も申入候由申達置候、

一 具志頭按司位牌江當具志頭按司より白銀壺枚・官香拾把、右両使者江頼ミ被遣候、且又官香三把ツ、右使者兩人より拜進被仕候、右之首尾猿渡喜右衛門より用達川南正藏江申達、御步行上村七兵衛・穎川勘右衛門相附相勤候事、

右ニ付而此節も今婦仁王子より被遣物有之、祭文壺通先例之通相添、清見寺江被相納候ニ付而、内々御記録所江被尋候趣有之候付而、為後考書拔置候置候事、
(符カ)

宝曆二年申十二月日 (吉巳) 清純

但琉球方見玉惣之丞を以被相尋候也、

旧史館調

(表紙 一)

舊史官調

一 旧史官調 目錄

- 一 田布施士族下村隱岐守帳留拔書
- 一 寄田村牧事忠節
- 一 呂宋より參麿香迹
- 一 國中一之宮條
- 一 渋谷略系圖
- 一 河西兵庫入道軍忠

- 一 高城郡若宮權現由来
- 一 日新様御牌寫
- 一 小西作右衛門
- 一 和田家先祖
- 一 村岡家略系圖
- 一 平國(岡九)曾藤兵衛御奉公
- 一 柏原家先祖之事
- 一 加世田六角堂
- 一 田尻荒兵衛打手之人
- 一 日羅上人
- 一 日本三躰之本尊
- 一 宰代役
- 一 五院
- 一 末弘甚兵衛江御褒美
- 一 薩摩(島九)虛鳥
- 一 橋口石見江御感状
- 一 系圖偽作之咎流罪衆
- 一 伊集院小傳次御誅伐
- 一 島津大和守様御生害

- 一 伏見之御城責
- 一 薩州湯豊宿郡十二町名之内在谷山皇徳寺
- 一 垂水郷安田次郎兵衛家筋調
- 一 元久公御上洛之時日記之内
- 一 義弘公より龍伯公江之御文
- 一 惟新様朝鮮江御渡海船
- 一 文保元年云々及寛永五年云々
- 一 昔之字
- 一 帖佐米山之堂鰐口
- 一 幡雲及星燃
- 一 國見舞として小出對島守外に二人下國^(馬)
- 一 牛馬御改及一向宗之本尊出し士衆之作
- 一 建久四年大飢饉之作
- 一 將軍家より日本國中江繪圖調差出候様達
- 一 將軍辞世之歌
- 一 島津中務久輝家臣高崎權左衛門先祖覚書之内
- 一 鳥丸家筋
- 一 忠久公御誕生日吳説
- 一 大谷刑部陣取

- 一 關ヶ原江島津中書様御意^(着)
- 一 長慶院殿由緒傳系
- 一 正之母
- 一 奥州会津之元祖
- 一 從四位上前肥後太守土伴靈神^(津)
- 一 大炊御門中將殿甌島江配流
- 一 松木少將殿
- 一 松木少兵衛
- 一 松木伊兵衛
- 一 島津道世居所
- 一 八助
- 一 藤原氏異名
- 一 人丸
- 一 天鍵鞭之法
- 一 惟新様江殉死之蘭牟田氏文書之内
- 一 惟新様加治木及平松江御移日
- 一 義久公・義弘公・忠恒公御蔵入高石田より左之通
- 一 義弘公関ヶ原より御帰宅等之事
- 一 義弘公御位牌

- 一 惟新様御他界
- 一 惟新様木崎原御合戦御危難
- 一 惟新様与御改名
- 一 忠恒様伊集院幸侃被成候時之次第
- 一 比志嶋家略系圖
- 一 義久公御法名
- 一 起請文
- 一 又八郎様伊集院幸侃を御打果ニ付御逼塞
- 一 新納旅庵伏見城江参上之節是非共御取次成ましき件
- 一 太守公賜御板北斗之符
- 一 鹿野屋高牧野福山野江被召直之云々
- 一 秀頼様及御子息御生害
- 一 龍伯様御状
- 一 日秀上人照皆
- 一 國府正八幡宮造立之件
- 一 御尊躰之書物事
- 一 新日公御吉書(白紙)
- 一 福永助十郎子孫
- 一 雜説一書五ヶ條
- 一 比志嶋宮内少輔遠嶋
- 一 義昭僧正生害
- 一 日高彦右衛門より進上品
- 一 和田氏傳
- 一 陽和院様一件三ヶ條
- 一 樺山仲右衛門家略系圖
- 一 樺山仲右衛門跡養子願之吟味
- 一 太守宗信公より築地神明宮に御寄進
- 一 玉造故城
- 一 年頭御規式
- 一 島津矢柄殿其外役替
- 一 島津備中殿御前ニ於て御腰物一腰拜領
- 一 島津左衛門殿より十文字御紋被相用度願ニ付吟味
- 一 本田空・本田出羽御目見之儀ニ付吟味
- 一 赤崎圓真家筋調
- 一 御家老郷原轉依願御役御免及平田新左衛門等御役昇進之事
- 一 河野八郎右衛門大御目附(左カ)
- 一 山田助右衛門家格調

一 吉貴公御代中山王使者江戸江被召列候御家老又ハ琉使江被召附候御目見之調

一 光久公中山王使被召列候一件

一本田出羽下司之件

一 田中藤次兵衛家筋調

一 左近丞壽仙・松元壽閑等之家筋調

一 植木次郎太家筋調

一 大野鉄兵衛家筋調

一 餅原正因家筋調

一 岩崎次兵衛家筋調

一 城州伏見大黒寺由緒調

一 頼朝公五百五拾年ニ付本田作左衛門より献納願調

一 猪俣左右衛門家筋調

一 京都即宗院由緒調

一 相良平八郎家筋調

一 松元栄春家筋調

一 倉橋金之丞被召拘譯及家筋調

一 佐多八十右衛門嫡子相果二三男男上り願之調

(一)河野幸左衛門初而高持成願ニ付調脱カ

一 大重仲兵衛高上り成願之調
一 志和屋左太夫家筋調

○田布施士族下村隱岐守帳留拔書

1 覺

前文略

天正七年己巳二月二十四日、高原江罷歸り、名古屋御

普請に者高原より主取仕罷立、御普請相調申候事、左

様にて高原より御物米仕上せ申候、此等も御當國よ

り初て之儀にて御座候事、其時之地頭山田理安老六年、

其後新納旅庵老四年御地頭にて候事、

右田布施郷士下村隱岐守・同甚右衛門方々移帳之

内拔書、

○寄田村牧事忠節

薩戸郡内寄田村牧事被致忠節之間、以別儀所預置也、
可被存其旨之状如件、

2

貞治七年三月廿七日

執印左衛門太夫人道殿

師久判

弘安十年三月日

執行貫首紀正行

(本文書ハ「旧記雜錄前編二二一八九号文書ト同一文書ナルベシ」)

其外七人連朱印

呂宋より參麁香迹

右水引新田宮大檢校文書之内在之、

3

呂宋より參麁香迹申候処、水溺死申候哉、即持せ給候、其通披露申候、

渋谷略系圖

末略

○一重保本早川車内郎

○一重直本吉岡柏原

七月九日

○一重茂本大谷齋田

○一定心本曾司清色

本田源右衛門親商判

○一重貞本落合高城 六郎

執印吉左衛門殿
御報

右渋谷五家在水引新田宮社家平勘兵衛系圖、

○國中一之宮條

○河西兵庫入道軍忠

4 前条略之、

可謂吾朝第一宮、何況為國中一宮之條無異儀者哉、開

伊勢國河西兵庫入道道現申軍忠之事者、矢上彦五郎入

門社者

天智天皇皇后也、然者云時代云年記、不及對陽之條勿

道覺純令與同凶徒、引入御敵於濱崎城依打塞路次、及合戰難儀之間、去六月五日、渋谷下総六郎太郎手打寄東福寺城致合力之處、同日、卒凶徒數千人寄來東福

寺城之間、致散之合戰抽軍忠畢、同九日、押寄濱崎城致合戰之刻、舍弟七郎義清被疵(左大指矢目)、中間彦三郎(左膝)、八郎(八郎)、矢目、如此合戰抽軍忠、逐落濱崎城之条、當御手人、并島津下野三郎兵衛尉同所合戰之間、被存知者也、早預御一見狀、為備後代龜鏡、恐之言上如件、

貞和三年七月、四日、承了判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二二五四号文書ト同一文書ナルベシ)

右正文在水引宮内村武兵衛、

○高城郡若宮權現由来

高城備前守平重雄亡魂稍於郡中為怨靈也、依之郡中衆庶曾崇若宮權現、在高城郡、

正文在高城郷土上床仲右衛門、

右前条後条文章略之、

○日新様御牌寫

極樂寺殿梅岳常潤在家菩薩(忠良) 神儀

(義久)
龍伯公御判

永祿十一年戊辰十二月十三日

右在宮之城曇秀寺、

○小西作右衛門

小西撰津守殿子息作右衛門没落之時分、(行長) 前条後条略之、

小西作右衛門殿當國にて高被仰付、其内百五拾斛宗左衛門為堪忍分被遣候、其書付只今まで所持仕候、然る処に作右衛門との宗旨違にて御座候ゆへ、長崎の様に被為登候、

右二ヶ条、宮之城島津圖書殿家臣兒島七郎右衛門文書之内に有之、

○和田家先祖

五左衛門事、和田左衛門尉義盛、小山左衛門尉朝政、工藤左衛門尉祐經、土肥左衛門尉遠平、梶原源太左衛門尉景宗、

右在宮之城家臣山路善左衛門系圖、

○村岡家略系圖

11 村岡五郎良文貞道(輔カ) 孝浦(多カ)

貞時(次脱カ) 伊作平始(下向鎮西)、良元

薩摩道房(多カ) 河邊 有道 田祢次郎

忠直 薩摩六郎 忠長 阿多平四郎

忠支 薩摩七郎 忠景 右馬頭 別府五郎

忠明 谷山先祖

○平國(岡カ)曾藤兵衛御奉公

12 前条後条略之、

於高麗 又一郎様御煩被成候而、御陣中にて御葉參候

間、夜白御そばに罷居、御葉をせんじ候而上申候、然とも御氣色不召直、

巳五月晦日

祐書

右正文在大村士平國曾藤兵衛、

右曾藤兵衛先祖八代少右衛門与申す者 惟新様(義也) 黃門(家久)

様江御奉公仕候ニ付而、又市郎様御病氣之節御奉公相勤候由、書附之あり、

○柏原家先祖之事

先祖柏原豊前守資好事 太守陸奥守元久之御家老相勤為被申与代(脱カ)申傳候事、

鹿兒島柏原弥太右衛門殿家ハ此方系圖之写にて候、我等代に懇望にて被為写候事、

元禄八年亥二月彼岸日

七郎右衛門印

柏原源太夫殿

右正文在黑木島津内膳久兵家臣柏原源太夫、

○加世田六角堂

14 六角堂御玉屋御骨箱之書附

但加世田六角堂にあり、

忠國公法名

淨蓮院殿東礪太岳大居士

文明二年庚寅正月廿日到 御逝去、(不脱カ)違御存命之約、謹

而 奉皈入引導阿字門者也、

明星山頼濟法印石之箱底
字梵

○田尻荒兵衛打手之人

田尻荒兵衛被誅候節、打申たる人子孫御尋、井尻早左衛門与申人之よしにて、右麓流加世田伊藤助左衛門より書附有之、

○日羅上人

日羅上人鏡常三年癸卯十二月晦日寂、拾取遺骨幡州佐用之中山葬之、其墓所至于今自鏡常三歳癸卯至天文二年癸巳九百四拾八年、

右薩陽泊津無量寿山西勝寺大智院縁起之内にあり、

○日本三牀之本尊

薩州泊法光寺 (阿弥陀仏脱カ) 本尊・觀音・勢至 (春日作之由)、日本

三牀之本尊三所と申候者、京都三條誓願寺 秋月領

福嶋(昌)称福寺 薩州泊法光寺、

○宰代役

18 宰代役勤 宰代暖役とも云ふと、

右坊津士伊瀬喜兵衛系圖にあり、

○五院

19 總持寺 五院者

普藏院 如意菴 傳法菴 洞川菴 (妙) 如高菴

永祿辛酉正月十六日

福昌寺宛書有、

右在川邊寶福寺文書、

○末弘甚兵衛江御褒美

20

今度京都江俄人数就御用被仰付候処、無吳儀御奉公い
たし候条、為御褒美右之地被宛行者也、

慶長五年九月廿七日

鎌田出雲守

政近判

比志島紀伊守

國貞判

平田太郎左衛門

増宗判

島津圖書頭

忠長判

末弘甚兵衛殿

右之地面書なし、

正文在川邊士末弘民部左衛門、

○薩摩虚島

21

薩广方浪ノ上ナル虚島是ヤツクシノフシト云フラン

近衛信輔公

薩广方鏡ノ池ノ一ツ鴛鴦ヲノカ姿ヲ友トシミルラン

右御同人

右正文在穎娃開門社家市来主膳開門縁記之内、

○橋口石見江御感状

22

慶長五年七月九日、鎌田政近・平田増宗・(比志)比志島國貞・

島津忠長連判 御感状之内、高麗におひて御約束之加

増として被宛行候由、宛書石見守殿、

右谷山士橋口四郎兵衛文書之内、

○系圖偽作之咎流罪衆

23

御國元におひて系圖偽作候者、日州表にて久保幽玄、

鹿兒島にて比志島平右衛門、高岡にて杉尾弥市郎、比

志島・杉尾後遠島被仰付候、

○伊集院小傳次御誅伐

24

慶長年間伊集院小傳次御誅伐、就夫阿多より中村筋御

通し被成候ニ付、谷山勢大浦口江伏草にて待申候、馬

にて御通之時分、原口權兵衛と名乗、向々矢を射付打

取申候、右大浦口帝釈寺へ八月十七日正命日之吊于今

仕来り申候よし、谷山衆中原口大藏文書之内拔書之置

候事、

安田次郎兵衛

義次

右彰久(島津)之供仕候て高麗江罷渡、虎捕候ニ付而、為御褒

美從(義也) 惟新様御腰物拜戴仕候、

右嫡子

安田孫右衛門

義實

○島津大和守様御生害

正保二年酉十二月十一日、島津大和守久章谷山におひ

て生害、清泉寺江牌あり、

右嫡子

安田次郎兵衛

義員

○伏見之御城責

京都江主従三人慶長四年閏三月廿日國元打立上洛仕候、

同五年之七月十八日より伏見之御城せめにて、八月朔

日ニ落城申候、正文在谷山土園田茂吉、

右次郎兵衛嫡子依無之、次郎右衛門聶養子ニ仕、次

郎兵衛家相續仕候、

義重

○薩州湯豊宿郡十二町名之内正文在谷山皇徳寺

右者、彰久之供仕高麗江罷渡虎捕候安田次郎兵衛、子孫當代まで之家系可差出之旨被仰渡候付申渡候処、家系等無御座候ニ付、次郎兵衛より當代迄之子孫書記差

上申候、以上、

丑十月廿二日

○垂水郷安田次郎兵衛家筋調

覺

垂水役人

町田監物

川上六郎兵衛

伊集院吉左衛門

御記録所

○元久公御上洛之時之日記之内

28 元久公御上洛之時之日記之内、應永十七年六月三日

御参着被成、同十一日 御参會候上進物、

東福寺江

鳥目十貫

即宗菴江点心折

鳥目十貫

右正文在揖宿士海江田仲左衛門、

○義弘公より龍伯公江之御文

29 (一)

てつほう并玉藥被成御用意可被食越候、鎗ハ一切不用
立候、何としても鉄炮かず被仰付肝要ニ候、追々可罷

立人衆心得可入儀に候之条、よくく被仰付てつほう
奔走候様に可有才覚候事、

一石火矢之事御たつね候て、有次第可被差渡候事、

九月廿九日

義弘
御書判

龍伯公江

被差上候、

比志島紀伊守殿、餘ハ此使江相含候間被聞食届、
御入魂所仰候段、可然之様に可預御披露候、恐々

謹言、

右正文右同断、

(本文書ハ「旧記雜録後編」二一三八六号文書トホボ同文ナリ)

○惟新様朝鮮江御渡海船

30 惟新様朝鮮國江慶長元年申二月廿一日 御渡海之節、

久見崎より御出帆、御船觀音丸のよし、

右正文在揖宿濱田四郎右衛門、

○文保元年云々

文保元年九月十六日

遠江守

平朝臣(花押) 隨時判

○寛永五年云々

寛永五年 氏房伊豆守とアリ、

○昔之字

伊勢物語に業平を昔男と云事ハ、弘法大師之御本より
愛染之法を受給、三七日ニ成就し給へる間、昔と云ハ

廿一日と書たれハ、昔男と云也、

右正文在帖佐士安楽五郎右衛門、

○帖佐米山之堂鰐口

大井石見守は帖佐郷に住す、米山之堂を建立して、鰐
口に當所地頭石見守實高とホリ付、今に有、無相違候、

右正文在薩州吉田士大井兵助、

○幡雲及星燃

元和四年戊午九月廿六日より十月十日夜迄幡雲と云ふ
物立、辰巳之間に有、同十月十一日夜より廿六日まで
寅卯之方に星燃候、長さ十四五尋有之、

○國見舞として小出對馬守外に二人下國

寛永十年癸酉六月より國見舞として上衆御下候、大将
小出對馬守、(吉親)野瀬(能勢頼隆)小十郎、城織部(信茂)佐 御分國中甌島・
屋久島・種子島迄御渡被成候、此時三拾六町壱里に竿
を打被成候而、壱里塚出来候、

○牛馬御改及一向宗之本尊出候士衆之件

寛永十二年乙亥二月 御分國中牛馬御改被成候而札を
被下候、無札馬者御物ニ被召上候、前々御改被成候一
向宗本尊出候士衆ハ知行・屋敷被召上候而寺領にて候、
下々ハ財寶まで被召上候、身上に口能無御座候、財宝
ハ神社之修理ニ付、

○建久四年大飢饉之件

建久四年大飢饉、然間男掛符女掛符守之事、

○男守 出大男民匿民隠々如律令

○吞符  出匿媿拂隠々

○女守 出匿民拂隠々如律令

○吞符 出匿媿隠々

歌二曰、

天照す日月の影を拜め只人の命を守る神々

右如此相調候而、三日ニ當日門外ニ出、衣裳を振て時を仕候、不思議之よし人々申候、

○將軍家より日本國中繪圖調差出候様

38 正保二年乙酉 (家光) 將軍様より日本國中繪圖調候而可指出

よし、諸大名江被仰渡候、

但一里六寸ツ、之賦にて繪圖可調之よし候、

○將軍辭世之歌

39 慶安四年辛卯 (家光) 將軍様御死去、御辭世哥に

(悲しまじ悦びもせずとにかくに)
歎かしな悦もせし苦も楽も

終には覚る夢の世の中

御供衆堀田加賀守・阿部對馬守・三枝土佐守・内田信

濃守、右四人御供被申候、

右六行、正文在大口士二宮伊豫、

○鳥津中務久輝家臣高崎權左衛門先祖覺書之内

40 建久七年に薩廣へ御下りたまふ、先出水之山とへ御座

有、其後庄内へうつらせたまふ、

右鳥津中務久輝家臣高崎權左衛門先祖高崎六郎左衛門能成書記置候、御當日記之内ニ有之と、

○鳥丸家筋

41 平姓鳥丸氏元祖次郎左衛門重世得東郷之内鳥丸名号鳥

丸、後領鶴田住居之、其子次郎三郎重躬、其嫡子紀伊

守重利、其子兵部少輔六右衛門入道世離實名重純、自

壯歲侍 義弘公之側、文祿年間朝鮮國江御供、帰國之

後関ヶ原江御供仕候、重純好醫術長于外科、享年九十

六、葬不断光院、養子兵右衛門（智養子なり）、其子

六弥太、妹嫁五代喜左衛門早世、六弥太女子永山甚左

衛門妻、六弥太嫡子兵右衛門早世、其弟六右衛門、右

二男家永吉鳥津久輝家中鳥丸五左衛門にて候、

○忠久公御誕日吳説

忠久公治承三年十月二十八日に生る、市来中宿東郷士

鳥越四郎兵衛下人吉左衛門所持書附之内有之と、いか

ゞ哉、

○大谷刑部陣取

大谷刑部少輔殿一所に 御陣取被成候、然に筑前中納

言一揆被起 内府様方に被差出之由、九月十四日に大

柿江相知れ申候事、

○関ヶ原江鳥津中書様御着

44 九月十四日之晚五ツ時に、諸軍勢中書様御打立、関ヶ

原之様に御つゝ、き被成候事、

右二行、寛文三年癸卯二月彼岸中日、宮之原才兵衛

八十才書之と相見得候、才兵衛事関ヶ原江御供仕候、

正文在串木野士官之原徳右衛門、

但右才兵衛事ハ其節中書老中に罷在候与相見得候、

○長慶院殿由緒傳系

45 是ハ穴山越前守源虎康女（虎康又称秋山氏、与源四郎

同人欵）同族穴山陸奥守信君入道梅雪為養女、東照

宮幸之、産万千代君、因是万千代君依母姓改名武田七

郎信吉、繼穴山梅雪之名跡、始領甲州穴山、信吉君慶

長八年癸卯九月十二日逝、廿一歳、以無嗣故御舍弟水

戸中納言頼房卿（童名鶴千代、後改武田五郎）相續穴

遺領、

武田七郎信吉君御母堂称下山殿、

○正之母

(徳川秀忠) 台徳公に幸せられ正之を設し時、 台徳公之 大夫人

(源力) 崇徳院殿嫉妬ふかきゆへ、正之之母堂を見性院殿方江

(信玄女) 懸込せられぬ、其ころ保科家は甲州士之事にて、信吉

君の母堂との因ミあるよしにて、見性院殿諸事懇意なるゆへ、正之をして保科の家を相續せられ、其子之正之をは見性院殿之御養子と称せらる、

寛永十四年丁丑二月十二日逝去、法名良雲院殿天誉壽清信女、

○奥州會津之元祖

會津城主 高廿三万石

従四位下少将

御黒書院溜之間

松平肥後守容貞

當年二十三才

○従四位上前肥後太守土津靈神

先祖保科肥後守正之、実ハ 台徳院殿の若君なりしを、保科肥後守正光嗣子なきに依て、正之幼名幸松丸と申せし時養子に被下、家督相續有之、寛永九年、従四位下肥後守に被任、正之と号す、同十一年、侍従に任す、同十三年、信州高任之(遠力)三万石を轉し、式拾万石にて出羽國山形之城江移る、正保元年に三万石御加増にて奥州會津江所替、若松へ在城して都合式拾三万石を領す、同二年、左近衛權少将従四位上、承應二年、正四位下右近衛中將、寛文九年隱居、同十二年十二月十八日逝去、行年六十四歳、羽林中郎将従四位上前肥後太守土津靈神と諡す、

○大炊御門中將殿甌島江配流

覺

(藤原頼國) 大炊御門中將殿甌島江配流、居住被成候、慶長年号之

よし候、何ぞ文書等無之、妻ハ上甌島衆中梶原宗故娘、

中將殿死去以來松木少將殿江被取合候、

女子松木中將殿息女、母梶原宗故娘、

右女子 (家久) 中納言様江九才之ころより松木少將殿取立に

て御奉公、廿六才ニ而御暇被下之候由、慶長十七年子誕生、法名喜庵妙寿大姉、貞享三年丙寅正月廿六日死去、行年七十五、上甕島衆中本田八郎兵衛妻、八郎兵衛親八左衛門甕島地頭本田伊賀殿鹿兒島より寛永十三年ニ相附、高三十石 中納言様より拜領、上甕島江被召移候、

本田八左衛門、父ハ本田八郎兵衛、母ハ中将殿息女、女子父同人、母同人、上甕島衆中村岡舎人妻、次男 本田次右衛門父同人、母同人、

○松木少将殿

右甕島江住居、中将殿同前慶長年号之由承傳申候、法名松雲院殿法誉受慶居士、寛永五年辰八月二十二日死去、少将殿死去之時分、京都諸司代板倉周防守様江御披露御座候由、周防守様より其御返書参候を藤崎半右衛門家に御座候、御記録所江被差出候処に、元禄九年子四月廿三日 御城回録(録方)之節焼失仕候よし傳承得候、右妻ハ上甕島衆中梶原宗故娘、中将殿妻、死去以後少将殿取合、法名安清妙隠大姉、萬治元年十一月二日、本田八郎兵衛側にて死去、 中納言様より甕島江少将

殿居住之内年ニ御養ひとして十人御扶持方被為給、毎日水夫兩人ツ、入、年ニ節供毎に時服まで被為給候之よし、母存生之時分申聞置候、女千代、少将殿息女、母宗故娘腹、早世、子少将殿息女、右同人腹、 光久公江正保四年亥御奉公、名ハおいち也、

○松木少兵衛

少将殿嫡子、右同人腹、慶安四年卯、鹿兒島江召移され候、上甕島江少兵衛居住之時分、鹿兒島高三拾石餘買地有之、鹿兒島江罷移候而より少兵衛高に相直り、小番被相勤候、妻ハ水引衆中寺田休左衛門姉、少兵衛甕島江居住之時分離別、當時隈之城衆中和泉覚左衛門妻、少兵衛存生之内年ニ切米二十石ツ、被給候、但少将殿嫡子、右同人腹、

○松木伊兵衛

少兵衛嫡子、母寺田休左衛門姉腹、右親少兵衛被相果候時分、伊兵衛幼稚ニ而、喜入休右衛門側に被召居成人、少兵衛并に小番に入被相勤候、伊兵衛妻ハ大場休右衛門妹、伊兵衛死去以来大久保高

50

應永年間、島津道世又道聖とも云、俗名山城守忠朝相馬氏元

○島津道世居所

右由緒書之内所々書拔置候、正文在上甌島土本田民部左衛門、

宇妻、伊兵衛成人被申候てより親少兵衛并に切米被下候処に、死後被召上候、持高三拾石餘伊兵衛存生之内拂被申候、
女子

伊兵衛息女、大場休右衛門妹腹、當分母方高宇所

江罷居、當年十六才、

右之段々、私母存生之内申聞置候筋、又松木伊兵衛儀

近年に罷成事ニ候条、覺申候通書記差出申候、以上、

元禄三年午三月九日

松木伊兵衛從弟

本田八左衛門

上甌島

御噺所

51

○八助

祖なり、鹿兒島出水崎に被居住候、出水崎と申候者、今大徳寺邊を云ふ也、

千葉助

「下之」上總助

「相模」三浦助

「遠江」伊井助

「加賀」富樫助

「伊豆」狩野助

「出羽」秋田城助

「周防」大内助

一朝臣とハ四位之人、参議に任する時ハ参議藤原之家定之朝臣と云々、

○藤原氏異名

52

齋藤 進藤

近藤

首藤

尾藤

伊藤 加藤

武藤

兵藤

後藤

衛藤 須藤

工藤

遠藤

以上十六頭

○実ハ本文拾四なり、

○人丸

53

柿本氏人丸

人王四十五代聖武天皇時

百旆通婆

犬一人 少童ヤチヲ書

百臆須旆通達婆娑呵

右口傳 大此字

ミトリコノヒタイノカミヲフリタテ、ユハスノアト

ハ犬ト云文字

聖武天皇ノ御代ニ始ルト申也、

右正文在蒲生士久保平内文書之内、

○天鍵鞭之法

54 一天鍵鞭之法

一格護

明應六年丁巳十一月八日

入来院加賀守重聰

右文字在蒲生神守院文書、

○惟新様 江殉死之藺牟田氏文書之内

55

惟新様 江殉死仕候人数之内、藺牟田縫殿助子孫次左衛

門文書之内、

前條略之、

一御供為申者之跡目知行則被召上、二人親とも為方なく

仕合有之候処、一兩年過御供申候跡目に表に拾表宛給

申候、

一寛永十一戌年、何れも御供仕候跡目に知行式拾石ツ、

給候段者、不輕懸命之地を他人に跡を可遣儀に無之、

末都て略之、

一祁答院又次郎（河内守）良重永祿九年丙寅正月十五日

不幸死、室者薩州義虎姉也、子孫断絶、良重法名樹蔭

行鉄大禪定門、

右正文在蒲生士祁答院刑部左衛門湯田平内系圖内、

○惟新様加治木及平松江御移日

56

一慶長十三年戊申平松之御城より 惟新様加治木江十

一月吉日に御移り被成候事、

一義弘様帖佐より平松江御移り被成候者、慶長十一年

午十二月吉日、

○義久公・義弘公・忠恒公御蔵入高石田より左之通

57

石田治部少輔殿より如此候事、
(三感)

一 義久様 十四萬斛

内御蔵入十一万石

外給人方

一 義弘様 十二萬石

内御蔵入八万石

外給人方

一 忠恒様 (家久) 三拾七萬石

内御蔵入拾貳万石

外給人方

大隅・薩摩・日向半國

合高六拾三万石餘

○義弘公関ヶ原より御帰宅等之事

58 一慶長五年十月七日に関ヶ原より 義弘公御帰宅御座候

事、

但稻津一揆ニ付、日向江三日 御逗留御座候而、帖

佐には十月七日ニ御着被成候事、

一慶長六年四月之始方より 義弘公ハ御ゑんりよのよし

候て、向島藤野江御渡海被成、同年之五月、帖佐江御

帰宅候事、

但山口勘兵衛尉殿より和久甚兵衛殿御使にて天下之

儀相濟候よし候て御心安罷成、御國中目出度よし被

申候事、

一義弘様久保様祁答院鶴田城にて御指出被成候、其より

久保様御上洛之事、

但太閤秀吉公川内太平寺江御勸座、御帰洛之節右所

にて初而 御目見、

右正文在蒲生士小山田休右衛門文書之内、

○義弘公御位牌

59

加治木大樹寺後改長年寺、

義弘公御位牌御安置なり、

○惟新様御他界

惟新様御事、去月十一日より火急に被成 御煩候ニ付、
御精威之儀雖御座候、永々 御草卧之故、七月廿一日
之夜子之時に被成御他界候、 御死容之御事も今月廿
日に福昌寺江被成御越、同廿四日に 御葬礼相定候、
末略之、八月十六日、曾木五兵衛重松判、(伊丹師親)
道甫老まいる与有之、正文在加治木曾木新助、

○惟新様木崎原御合戦御危難

惟新様木崎原御合戦之時、曾木播磨御側近く罷居候処、
御楯持候者矢に中り申候故、播磨下人名島弥右衛門参
り候而、走寄り御楯をつき申候処、敵一人抽参り候而、
惟新様御甲を切はつし、弥右衛門頭に切付申候、其時
播磨戦死仕候よし、

正文右同断、

○惟新様与御改名

慶長四年 惟新様伏見江御在京被遊候中、二月御遁世
被成候而、其より 惟新様与奉申上候事、

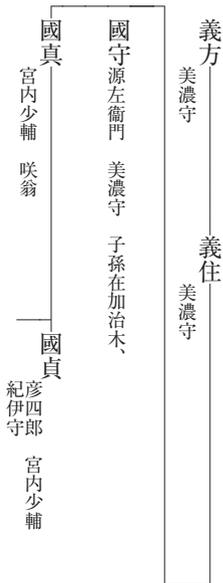
○忠恒様伊集院幸侃被成候時之次第

慶長四年閏三月九日ニ (マヤ) 又八郎様幸侃を (忠恒・後家入) 御手打被召
果候、其割 (刻) 惟新様ハ京都江御茶湯に前々日より御上
りなされ、御留守ニ而候ニ付、伏見より御注進候、夜
入候而御帰宅被成 御意候者、下之御屋形ハ人数もあ
まり入ましく候間、何れも上之御屋形に参り候て御番
可仕由候而、幸侃之屋敷と上之御屋形ハよしかき壺重
にて候に被明除間御番仕候、前後略之、

正文右同断、加治木家臣在曾木弥次郎、

○比志島家略系圖

64 比志島十代河内守立頼之弟



右系圖在加治木家臣比志島久右衛門、

○義久公御法名

義久公從 三寶院殿受領号

貫明存忠法印、

右加治木家臣是枝治部左衛門系圖之内に有之、

○起請文

起請文前書之事

今度

(義久) 龍伯様

又四郎殿を少将殿ニ被 思食替、從京都

御朱印を御申下之由被承付不致言上、構疑心申候由被

聞食通之旨被仰知驚存候、就夫拙者事ハ毛頭不承付候

由、

(本文書ハ「旧記雜録後編三」一六七五号ノ抄ナルベシ)

右正文在加治木家臣新納仲左衛門、

○又八郎様伊集院幸侃を御打果ニ付御逼塞

67

又八郎様幸侃を御打果被成候、就夫ちと御逼塞御座候、
さか角之倉所へ、夫より高雄江十五日御座候、其後
御帰宿之由、

○新納旅庵伏見城江參上之節是非とも御取次成まし

き件

68

新納旅庵伏見城江被參候節、遮而御用ニ付參上候間、
是非とも御取次頼存候よし再三申候得とも、曾而成ま
しき通し申候間、是非におよばず候て罷帰候刻、はる
か跡より鉄炮あまた打かけ被申候、夫よりた、ちに大
坂江罷下り、義弘様角与申上候得者、前より其分に
て候間不及力之由御詫にて候、其日伏見之御城被攻落
候、義弘様ハ大坂へ御座候事、

右式行右同断、

○(ママ)

69

寛文元年辛丑之夏、於武城溜池之華第 (元久) 太守公賜御板
北斗之符、

右正文在敷根士高野孝右衛門家系圖之内、

○鹿野屋高牧野福山野江被召直之云々

鹿野屋高牧野福山野江伊集院殿御代に被召直候割付之
通罷移り候、慶長四年 月 山田民少輔殿御地頭之時、
御目見いたし候由、

右正文在福山士山下藤右衛門家藏、

○廻野之牧

71 一廻野之立始之

天正八年庚辰四月十四日

一卯之時入始馬立也、

一其前牧御祈念而

其外略之、

其後狼犬競来之損馬之事有之、

天正十四年丙戌八月十二日より牧之御祈念と有之、

慶長九年甲辰正月廿五日誌之有、

○秀頼様及御子息御生害

72 前後文略之、

一秀頼様被成御切腹候時御供之人數書立進候事、

一秀頼様御子息八歳に御成候を、京中車にのせ申候て引
わたし、六条川原にて御成敗候、さてくむかし語に
こそケ様なる物語とも承候ニ、物之あはれ書中にハ申
かたく候、いまた若年の御ことに候ひつるに、御果き
わ奇特なる仕合上下ともに感じ申候、

右正文在國分士泊源太左衛門、正文御用に相成候、

○(ママ)

73 前條略之、

右知行無吳儀可被成格護儀尤候、向後相違有ましく候、

仍状如件、

慶長二年六月九日

りう伯
御判

(本文書ハ一旧記雜録後編三二二四〇号文書ノ抄ナルベシ)

正八幡御尊躰 御注文

○御尊躰之書物事

殿、辛亥歲九月廿六日、泉州堺を出船、十一月三日奉移寶

○國府正八幡宮造立之一件

天文十七年戊申より同至廿年辛亥正八幡宮造立之事、大願主薩隅日州之(貫心)太守・相模守梅岳日新齋也、依之道隆上洛、正宮之御尊躰并大多羅智女神躰七条大佛師法印康運作也、山科殿・四辻殿以取成奉備 叡覽、

永祿四年辛酉文月吉日佛子照皆判

日秀上人照皆

右在國府正八幡宮文書、

○(ヤ)

右正文在國分土楠元喜右衛門、正文御用に相成候、

右御神躰九月廿六日堺を 御出船、十月廿三日、おひ

右正文在國分宮内社人桑幡半右衛門、

桑幡豊後守殿

康運判

大佛師法印

天文二十年九月吉日

御本地作立在様如此、口傳在之、

女躰持物同付也、何も金なり、

〔本之俣〕

阿弥陀同八寸、俗躰、装束紫、御タケ同前、

女躰持物同前、御タケ同也、

釋尊立像八寸、俗躰同前、

二間

持物花、女躰御タケ同、持物同也、

居タケなり、御壘三寸、御本地立像聖觀音御タケ八寸、

俗躰冠也、黒装束、持物尺なり、御タケ一尺二寸、

一間

大隅国桑原郡宮内 正八幡宮御尊躰之事

三間

との浦に御着候、同二十一日、廻宮ケ浦大明神一夜御留り、廿九日、島之藤野江御渡候、御屋形 貴久様御参り候、霜月三日丁亥ハかき島宮御着候、午時也、蒲生之若宮八幡御こしを借り候て、ミきのかさりあなたよりの社人御越候、宮こよりのからうとなから、ミこし一へうつし申候て、十一月三日 御寶殿へ御移り候、前後略之、

右正文在國分宮内社家三角嘉左衛門、

右書附之内に、樺山善久永堅ハくかを御上候、其外ハ船なりと有之、

○新日公御吉書(日新)

吉書

一可修理神社佛閣、専祭奠之事、

一神者依人之敬増威、人者依神之徳添運之事、

一可専勤農調納國々年貢之事、

天福皆来 地福圓滿 天地和合樂 武運長久樂、唵

々如律令、

島津相模藤原日新(忠良)
御判

天文八年己亥正月十一日

(本文書ハ、旧記雜録前編二二三四〇号文書ト同一文書ナルベシ)

右正文在吉松土和田佐左衛門、

卯月拾五日

東持坊 盛淳判

「長壽院ニテ候」

右正文在栗野士内田幸兵衛、

○福永助十郎子孫

78

助十郎 名乗不相知、家之字祐、

(義也) 惟新様高麗國江 御渡海之時供奉、虎狩之節虎を手

取に仕、脇指にて指殺し候、右脇指本田休左衛門曾

孫本田助之進方へ名虎切丸于今格護、番船御取合之

時分喉を半弓にて被射、手疵痛ミ候ニ付、直に御供

なりかたく、御中途より御暇被下帰朝、其後得快氣

伏見江罷登り、虎を取候御褒美として 惟新公賜御

高二百斛之 御感状、伏見城御攻之時助十郎戰死仕

77の2

候故、御感状行衛不相知候、

右助十郎伊集院抱節之末子にて、福永之猶子に為罷(久造)

成之由申傳候、

右養子福永休左衛門、後違変、實者本田源右衛門親

商二男、嫁助十郎娘、

六右衛門養子實者踊衆中池田七郎左衛門二男なり、

其子六右衛門祐次、其子益右衛門祐宥、嫡子左傳次、

二男市十郎、

右助十郎女子有之、本田休左衛門妻、

右正文在隅州踊士福永益右衛門由緒書之内、

○雜説一書五ヶ條

79 一東郷肥前守重位(花押)

一久詮小吉、川上市右衛門狩野養朴弟子、繪方相傳、号常親、

右垂水家臣川上六郎兵衛家胤流、

一鹿兒島堀川并屋敷つき出被成候事、慶長十七年之事也、

一鹿兒島樓門立候事、右同年九月十一日に柱立被成候事、

右正文在小根占町橋市郎左衛門、

一八木氏者但馬國八木之宿有故家号とすと見得候、

○比志島宮内少輔遠島

80

比志島宮内少輔殿江、寛永五年正月、中納言(家久)様江戸よ

り御使大野将監殿・高崎玄蕃頭殿兩人を以、御意悪敷

由正月廿七日に被、仰出候、則同廿九日に熊之タケ江

入寺、ヤガテ二月七日に住持同心にて谷山より遠島、

○義昭僧正生害

81

大學寺(寛)義昭僧正御生害、年三拾九才、其後七十五年目

に鹿兒島大興寺御建立有之、忠治公御代永正十二年

乙亥六月七日也、開山坊津一乘院頼政法印也、

右正文在高山士山下善之丞、

○日高彦右衛門より進上品

82

一鳥目百貫文

銀ニシテ壹貫目

一刀一腰

助光二尺七寸

右龍伯様江濱之市にて進上、

右慶長十八年六月十八日

日高彦右衛門

右正文在高山士日高權之丞、

○和田氏傳

楠氏一族之和田氏と傳之、

但是より上世追可考、

正 和田豊前守 鹿兒府住居、
太守貴久公・義久公奉仕、

和田讚岐守 鹿兒島和田
讚岐祖

右豊前守嫡子豊前守代自鹿兒島移伊集院、其子江左

衛門正直代慶長五年庚子、移居日州高岡、子孫引而

在高岡、

右系圖正文在高岡士和田十郎兵衛、

○陽和院様一件三ヶ條

84

覺

一陽和院様御誕生寛永十五年戊寅二月三日、寛文二年壬

寅三月十九日御入興、

一右御姫様御誕生寛文四年甲辰三月六日、同年六月十三

日御天亡、御名菊千代様、

一陽和院様御事 後光明院様江被遊御勤候、其節之御名

者辨内侍様と申候、正徳元年辛卯八月十二日御卒去、

同廿日暮六時過ころ 御死体高輪御屋敷御出、五ッ前

大圓寺江御入被成候、御引導師越前之永平寺隱居（か

な川へ隱居）御頼被成候、御位牌島津將監殿御持被成

候、永平寺隱居石牛天梁和尚にて候、

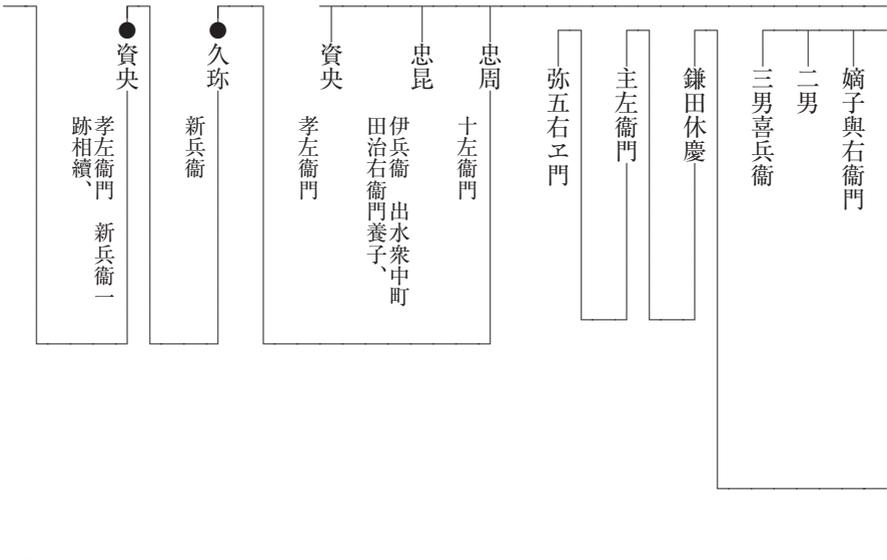
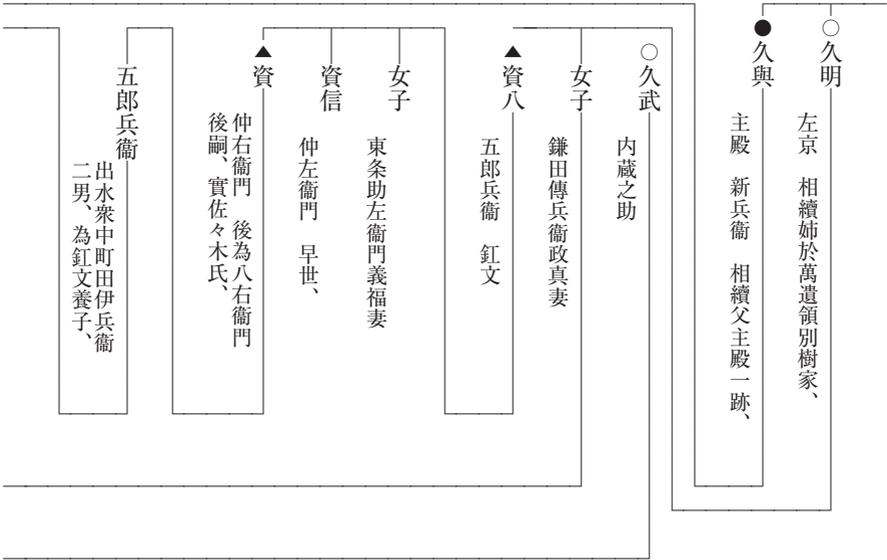
○樺山仲右衛門家略系圖

●●●豊万丸 ●久増 筑後守

●久如 主殿 為出水衆中、

女子 於萬 奉仕 義久公、

(ママ)



●資

孝右衛門

○資房

八右衛

○資

仲右衛 死無後嗣、

○樺山仲右衛門跡養子願之吟味

覺

樺山仲右衛門跡養子ニ付て、仲右衛門親類双方より書物を以養子成之儀御内意申出、私共にも内々吟味いたし可申上旨被仰聞、左之通御座候、

公義仰渡之内、跡目之儀養子者存生之内可致上言、末期に及び候申之といへとも不可用之、然りといへとも其父五十以下之輩者雖為末期依其品可立之、十七歳より以下之者養子いたすにおひて者吟味之上可許容、向後ハ同姓之弟・同甥・同従弟、又甥・同従弟以此内相應之者可選、若し同姓之内無之におひて、入贅・娘方之孫・姉妹之子・種替之弟、此等者其父之人柄によ

り可立之、自然右之内にても養子いたすへき者無之におひて者、達奉行所可受差圖、たとひ雖為実子、筋目違ひたる遺言不可立事、

但御當家令條記之内に相見合有之書写申候、

右之通、公義仰渡之趣を以ハ、同姓之内より養子仕筈御座候ニ付、樺山五郎兵衛子とも之内より仲右衛門家跡相續可仕事に御座候、然れとも先年五郎兵衛三男樺山喜兵衛事仲右衛門存生之内養子に罷成、其以後違変仕候ニ付、最早一往ハ五郎兵衛家より養子ニ罷成、及不縁たる事御座候、鎌田主左衛門家之儀者縁家にて御座候得とも、血筋之故を以、仲右衛門跡親類ともより養子成之儀申出候、然れとも五郎兵衛三男一往養子に遣、違変仕たる儀に御座候ニ付て者、此節者鎌田家より養子に罷成筋にも可有御座候哉、此儀ニ付て者私ともにも究而申上かたく御座候、御見合之ため両家連續之次第略系圖仕立差上申候間、
思召次第奉存候、以上、
右樺山主計殿より内々被仰聞、我等相調差出置申候、
延享五年辰七月六日

○太守宗信公より築地神明宮に御刀一腰御寄進

覺 草案

御刀

一腰 主水首正清
長三尺六寸七部

一御鍬二重金

一御白鞘

一御袋(⑩)入織房付緒

右今度 太守宗信公被為寄進于薩府築地神明宮、被相

副 御直書畢、全(⑩)令寶納、(⑩ナシ)〔至後年有緩疎間敷旨、

別當抱真院江可被申渡〕者也、仍如件、

寛延元年九月(⑩七)日

御家老中

連名

寺社奉行

(本文書ハ「旧記雜録追録五」三〇一号文書トホボ同文ナリ)

右 御直書与有之候者 御判物被相副候故如此書調候、

先例之通に候、

○玉造故城

常陸國誌卷第七之内

玉造故城(八)

在行方郡、大塚(孫力)氏子孫行方宗幹始筑多氣繁幹弟二男馬

場清幹有三子、長曰盛幹、少曰成幹、忠幹曰行方平四

郎、忠幹子曰宗幹、有四子、伯曰小高太郎、仲曰島津

二郎、叔曰麻蟲三郎、季曰玉造四郎、小高太郎子曰六

郎、元曆年中為源義經先鋒、與屋島軍將能登守教經大

戰、六郎等隕首、賴朝以死事之、故厚撫其孤、六郎後

累世在此、天正年中玉造與一太郎為佐竹所殺城廢、

鄉人傳、

玉造與一太郎天正六戊寅十一月廿四日死、其子曰

與一左衛門尉重幹、天正十八庚寅十二月廿日佐竹

謀反、重幹(マ)於太田、法名我秀常是、與一太郎者号

堯永源舜、

○年頭御規式

覺

延享五年辰正月元日 太守宗信公御書院江 御出座、

島津備中(貫備・垂木家)(披露太刀奏者御年男) 御家老老持參太刀着

座御礼、御盃頂戴、大御目附持參太刀着座無之御礼、

盃頂戴、大御目附之内島津(久寛)弥市郎事一人着座有之筈候

処、依願嫡子島津藤四郎家格之場にて持參太刀着座被

仰付候故、弥市郎不着座候と此節より以後とも右例

に被相究候よし、若御年寄ハ在江戸故着座無之、右終

て御側詰河野(通興)八郎左衛門右同断、

但御年男島津藤九郎・島津小平太、

一先例 御一門之衆者正月三日 御座之間におひて着座

御礼、御盃頂戴候得とも、當年頭より八元日於 御

座之間島津周防殿(忠紀・越前家)・島津兵庫殿(久門・加治木家)(披露太刀奏者御年

男)着座御礼、御盃頂戴、右終而島津圖書殿持參太

刀着座御礼、御盃頂戴被仰付候、是者備中殿元日

御書院に着座御礼有之候故、右通被相改候、周防殿當

年頭より初而勤方有之よし候、圖書殿年頭持參太刀當

年より初而被相勤候、

一山沢十太夫表御用人格にて周防殿より扶助、周防殿方

江勤かた被仰付候、相良源太夫事(長後)も表御用人格にて島

津三次郎殿(忠卿・今和泉家)より扶助、三次郎殿方勤かた被仰付旨、去

年極月廿六日被仰渡候、依之御役人帳被相除候よし、

右に付而當年頭御用人御役にて地頭所無之候而も年頭

御礼持參太刀被仰付候よし、寶永七年、御格式被定置

候、右兩人ハ御用人格にて候得者、持參太刀之筈候処

に、御役人帳被相除、表方御用人之勤無之故にても候

哉、當正月三日、諸御役人之頭にて鬘斗目半上下にて

右兩人ともに御礼被仰付候、持參太刀者無之候、尤右

兩人右御役被仰付候砌、早速願にて地頭所被差上候、

地頭所無之候ても持參太刀被仰付筈候得とも、右次第

故不仰付与相考候、右ニ付而者旧冬御記録所江も右躰

之先例ともハ無之候哉と、段々御用人衆御取次を以而

御尋有之候得とも、右地頭持にて無之、御用人格之勤

御役人帳被相除候而も、地頭持同然年頭持參太刀御礼

申上候先例見當り不申候旨、口達を以申出置候事、

一海江田半藏納殿役人格にて周防殿方へ相勤候、近藤七

郎左衛門納殿役人格にて三次郎殿方江相勤候、右兩人

當正月三日、龍之間におひ鬘斗目半上下にて 御通懸

御目見被仰付候、其外周防殿・三次郎殿方江諸奉行格

にて一往相勤候面々、梅之間におひて 御通懸 御目

見仕候、尤中通に者不仰付候、
 一町田仲右衛門御記録奉行御役にて地頭職被下置候、長(後懸)
 嶋地頭町田孫七無役にて移地頭故、當年頭持參太刀俣
 右衛門次に孫七被仰付候事、

右之通、當年頭先例に相替候儀も有之、又者此節より被仰付候事御座候故、後年為心覺書記置之、

延享五年辰正月十一日

○島津矢柄殿其外御役替

島津矢柄殿(本名弥市郎)大御目附御役より若御年寄
 江御役替、延享五年辰正月十一日、於 御前被仰付、
 御役料高五百石、且又山岡(宮脱力)齋社奉行御役より大御目
 附江御役替同日被仰付、御役料高三百石被下置候、其
 外段々御役替有之候、

但小林中太兵衛御勘定奉行御役より寺社奉行江御役
 替、比志島彦五郎御番頭より御勘定奉行江御役替被
 仰渡候、

○島津備中殿御前におひて御腰物一腰拜領

去ル辰年より、島津備中殿御事 隅州(雜懸)様 御病身に被
 遊御座候ニ付而御家老座江被相勤候処に、此節願によ
 り勤方御免被成候よし、辰正月十三日、於 御前被仰
 渡、御腰物一腰(長州專政代金二枚札物之由)拜領被
 仰付候事、

○島津左衛門殿より十文字御紋被相用度願ニ付吟味

覺
 島津左衛門殿(久甫・日置家)より、以前ニ被相用候本十文字御紋御
 免被仰付被下度旨内々被為申出趣有之、達 貴聞候
 処に、御紋所之儀ニ付而者 寛陽院様御代段々御吟
 味有之たるよし被 聞召上候、然者 御一門家迄に
 本十文字御紋被成御免筋にも被 思召上候得とも、
 大身分にも本十文字御免被成にても可有之哉、私と
 も吟味仕可申上旨被仰渡、左之通ニ御座候、
 一寛陽院様御代御紋所之儀ニ付被 仰出候御書付等當座
 江相見得不申候事、

一 右御代迄者 御家御二男家者備中殿・兵庫殿・左衛門

殿家迄にて、備中殿・兵庫殿家紋本十文字被為相用候、

左衛門殿六代之祖下總常久代迄ハ本十文字御紋被相用

候処に、下總嫡子彈正久慶代子細有之、世代被削除、

中納言様御庶子三郎右衛門忠心事、右下總後嗣被 仰

付、御庶子にて御坪之内ニ被罷居候時分、引通十文字

御紋拜領被仰付置、下總後嗣相續候而も直に右御紋所

被相用、其以來只今にいたり左衛門殿家右紋所被為用

來候、元祖歳久初而家被相立候以來、右下總迄者備中

殿・兵庫殿家同前本十文字被相用候事、

一 鳥津大学亡父周防殿事者 大玄院様御二男にて別立、

大身分ニ被仰付、本十文字御紋御免被成置候事、

一 鳥津周防殿事御二男越前家相續、 御一門に被仰付、

本十文字御紋御免被成置候事、

一 鳥津三次郎殿事御二男和泉家相續、 御一門に被仰付、

本十文字御紋御免被成置候事、

一 鳥津圖書殿家御三男家大身分にて別十文字之御紋所被

用來候処に、當圖書殿代從 淨國院様十文字御紋被成

御免候事、

右之通御座候得者、以前に御家中におひて本十文字

御紋被為用候者備中殿・兵庫殿・左衛門殿家迄にて

御座候、然者當分之御一門家迄に十文字御紋御免被

成、大身分よりハ御免不被成筋に有之候て者、鳥津

大学・鳥津圖書殿事、本十文字御紋從 御先代様御

免被成置候処に、今更遠慮仕候様被仰付儀者如何之

事に奉存候得者、御二男家大身分之内左衛門殿家計

別十文字被相用、相并不申候ニ付、右傍例を以、此

節本十文字御紋御免被仰付候而も何ぞ差障り申儀者

有御座間敷与奉存候、私とも吟味仕候趣如此御座候、

以上、

延享四年卯十二月廿三日

○本田全・本田出羽御目見之儀ニ付吟味

覺

先本田全・當本田出羽 御目見被仰付候節下司被相

除候、右ニ付而出羽事者叙任 勅許之儀に候得者、

下司御免可被仰付哉、吟味仕可申出旨被仰渡、左之

通御座候、

一先空頭下司之儀ニ付而、先年當座江吟味被仰渡、先役ともより申出置候者、本事吉田家口宣を以空頭に叙任仕出、御當國者神職之衆頭にて御座候得者、年頭御目見之節計空頭与下司迄御披露有之可宜哉与吟味仕候、

一年頭外空頭江 御目見被仰付候節ハ下司相除、空与御披露可有之哉与詮議仕候、其故者、書礼に譬ハ、播磨守任官之人より致書通候節、播磨与下略仕先方江遣候節者下輩之人江遣候書法にて御座候、是を以相考候に、空与脇より下略仕御披露有之候儀者脇より之唱にて御座候、對其身ハ下輩之方に可有之哉与吟味仕候、

一右之通御座候得者、空頭事 御宗廟之神職にて、於吉田家も為相知者ニ御座候間、年頭 御目見被仰付候節計官名相唱、年頭外之節者下司相除、空与御披露有之筋ニ可被仰付哉与吟味仕候、

右之通、正徳三年巳十月吟味書差出候処、本事 御目見其外自分願書等に下司被相除、至當出羽右同様に被仰付置候、依之此節空口宣案・出羽口宣案 宣

94

旨・位記迄見届申候処に、本事者正六位下 勅許之口宣案迄にて、空頭下司之儀者吉田家裁許状之内に相見得、勅許にて者無之候、出羽事ハ從五位下出羽守 勅許口宣案・宣旨・位記まで致頂戴罷在候得者、官位共に 勅許にて、空とハ格別之儀ニ御座候、然者 勅許を以御免之下司於御當國相唱候儀者、却而 御規模之事に候得者、出羽 御目見等之節、下司御免可被仰付儀与吟味仕候、以上、
延享五年辰正月十六日

藥 (兼丸兼雄) (吉田清純) 吉
安 (安藤茂真) (町田俊懿) 町
吉 (吉田清純) 吉
調之、

○赤崎圓真家筋調

右圓真亡父赤崎仙左衛門事伊集院猪右衛門家之家來にて候処に、惣大工添役相勤候訳を以高隈衆中に被仰付、

赤崎圓真

圓真事も引續高隈衆中ニ而候処、享保十三年申二月、表寄番醫師被仰付、寛保元年酉四月、其身はかり御城下士被仰付、延享元年子四月、代代御城下士被仰付、御目見相濟申候、當分奥醫師にて築地御屋敷江相勤居申候、尤大番相勤申筈之家筋にて御座候、以上、
辰正月十九日

○御勝手方御家老郷原轉依願御役御免及平田新左衛門等御役昇進有之

延享五年辰正月廿一日、御勝手方御家老御役郷原轉依(久進)願御役御免、大御目附御役平田新左衛門殿御勝手方御家老御役於御前被仰付、御役料高千斛、大口地頭所被仰付候、御側詰御役河野八郎左衛門大御目附へ御役替、御役料高三百石、寄合家格連名之次第鎌田一藤太次に被仰付候事、

但新左衛門殿事今日掃部と名拜領にて候事、

○河野八郎左衛門大御目附江御役替被仰付座席連名

等之吟味

覺

河野八郎左衛門殿事大御目附江御役替被仰付候ハ、本田作左衛門次ニ座席可被仰付候、尤家格寄合連名之(由親)次第鎌田一藤太次に可被仰付儀与吟味仕候、以上、
辰正月廿日 清純一人ニテ調之、

○鹿兒島士山田助右衛門家格調

山田助左衛門(兼継)

右山田助右衛門親山田助右衛門事ハ今井一兵衛二男にて御座候、一兵衛事ハ仁礼藏人二男にて御座候処に、田邊屋(頼景)(或ハ今井)道與養子に被仰付、御納戸奉行御役相勤申候、一兵衛妻ハ山田昌巖齋娘にて御座候故、助右衛門代別立、母方之名字山田を名乗申候、新御番にて江戸詰仕、外に何ぞ御役等相勤候儀無御座候、當助右衛門事御馬廻りにて江戸詰仕、其後納殿御役相勤、當分無役にて御座候、親助右衛門以来大番家筋にて候得とも、當助右衛門事御馬廻右通相勤候故を以、一代

小番被召入置候、尤一兵衛以来 御城下士にて御座候、
以上、

丑二月廿六日

○吉貴公御代中山王使者江戸江被召列候御家老又ハ
琉使江被召附候御目見之調

覺

吉貴公御代去ル寶永七年以来、中山王使者江戸江被召
列候節、御家老又ハ琉使江被召附候御家老 御目見被
仰付候次第相札可申出旨被仰渡、左之通に御座候、

一寶永七年寅冬 吉貴公琉使被召列 御参府、同十一月
十五日 御参府之御礼被仰上候節、御一族島津筑後・

御家老島津將監殿於(久意) 御黒書院 御目見被仰付候、且
又琉使江被召附候御家老島津帶刀(仲佐) 御目見被仰付候事、

一正徳四年午冬 吉貴公琉使被召列 御参府、同十一月
二十八日 御参府之御礼被仰上候節、御家老肝付主殿(兼柄)・

若御年寄比志島隼人(範房) 御目見被仰付候事、

但跡々八大身分彦人御供ニ被召列、 御参府御礼之

節大身分一人・御家老一人 御目見有之候得とも、

此節大身分不被召列候ニ付、右兩人 御目見、

一同十二月二日、琉使江被召附候御家老島津將監殿 御
目見被仰候事、

一享保三年戌冬 吉貴公琉使被召列 御参府、同十一月

十一日 御参府之御礼被仰上候節、御家老比志島隼人・
若御年寄名越右膳(重渡) 御目見被仰付、且又琉使江被召列(附力)

候御家老北郷作左衛門(久嘉) 御目見被仰付候事、

右之通書附差上申候、以上、

延享五年辰正月廿四日

○光久公中山王使者被召列候一件

覺

一寛永二十一年申四月十八日 光久公中山王使者金武按

司被召列鹿兒島 御發駕、西目海上 御通船、六月十

二日、江戸江御着被遊候事、

一寛文十一年亥五月二十八日 光久公中山王使者金武按(朝)

司被召列鹿兒島 御發駕、西目海上 御通船、七月二

十一日、江戸江御着被遊候事、

一天和二年戊二月六日 綱貴公御屋部栖之内中山王使者
名護(朝元)按司被召列鹿兒島 御發駕、西目海上 御通船、

四月六日、江戸江御着被遊候事、

右、寶永七年以前中山王使者被召列候節、西目筋御
通船之儀相札可申出旨被仰渡、如此御座候、以上、

延享五年辰正月廿三日

○本田出羽下司之件

覺

本田出羽神職ニ付而 御目見被仰付候節ハ下司御免
被成、自分家督繼目御礼、其外組方江相附願書等差
出候節も下司御免可被成哉、致吟味可申出旨被仰渡、
左之通御座候、

一先本田空事ハ正六位下 勅許にて、空頭下司者吉田家
より裁許にて御座候事、

一當出羽事ハ從五位下・出羽守官位共に 勅許にて御座
候事、

右之次第に御座候得者、出羽事空とハ格別之儀に御

座候間、自分家督繼目御礼、其外組方江相附願書等
にも下司御免可被仰付儀与吟味仕候、然れとも神職
相離れ、諸士同前之場にて自分御礼願書等に下司相
用候儀いたしかたく事にも可有御座候哉、此儀者私
共にも究而何分難申上御座候間、御吟味次第奉存候、
以上、

延享五年辰五月廿七日

但辰五月、願之通御免被仰付候、

○鹿兒島士田中藤次兵衛家筋しらへ

覺

田中藤次兵衛

右本文代々小番人之願段と申出趣有之、調被仰渡候、
藤次兵衛曾祖父田中(同實)五右衛門事、去る寛永十四年十
一月、肥前國有馬江御人数被差越候節、五右衛門事
者六人賦にて罷越、其後江戸江も右御賦にて差越た
るよし申出候得とも、六人賦之訊自家系圖にも相見

得不申、尤當座江も相知不申候、祖父田中藤次兵衛(国近)事ハ御右筆御役相勤、養父田中五右衛門事御記録奉行御役相勤、一代小番江被召入置候、大番家筋にて御座候故、當藤次兵衛事大番に可被仰付儀与奉存候、以上、

延享五年辰二月廿日

○左近丞壽仙・松元壽閑等之家筋調

覺

左近丞壽仙

松元壽閑

右列調被仰付候、先年鶴木圓隆御側醫師相勤、代々御城下士に被仰付御礼申上候節、代々御城下士中紙進上之頭に 御目見被仰付候、吉川玄隆事は又御側醫師相勤、代々御城下士に被仰付御礼申上候節、代々御城下士中紙進上二男之頭に 御目見被仰付候、然者御側醫師御役を以てハ、壽仙・壽閑事圓隆例を以代々御城下士中紙進上之頭に列可被仰付儀与奉存候、然ながら壽仙(マ)壽仙事一代士に為被仰付事候得者、御目附調

之通、外城養子頭に列被仰付候而茂宜敷可有御座候哉、此儀におひてハ究而難申上御座候間、御吟味次第奉存候、以上、

延享五年辰二月廿二日

新(葉丸兼雄)用(吉田清純)

左(安藤茂貞)仲(町田俊慈)

用(吉田清純)調之、

右ニ付而、壽仙・壽閑事吉川玄隆例に為被仰付由承之、

○植木次郎太家筋調

覺

植木次郎太

右次郎太養祖父植木長兵衛事大坂御屋敷廻り見かしめ相勤候処、元禄九年、赤松次郎右衛門御取次を以て士に御赦免被仰付、川御座方御船頭相勤申候、養父植木次郎四郎事 御當地江引越之願申出、享保三年、願之通被仰付、 御當地江罷下、諸御役座筆者等相勤申候、

當次郎太事益山半助三男にて御座候処に、右次郎四郎
繼目養子被仰付、當分御料理役相勤申候、尤大番家筋
にて御座候、以上、

延享五年辰正月廿八日

○鹿兒島士大野鉄兵衛家筋調

大野鉄兵衛

右大野鉄兵衛事ハ當大野清右衛門三番目之弟にて候処
に、兄山沢十太夫事二男にて別立被仰付置候得とも、
肥後龜徳跡相續被仰付候ニ付、十太夫家跡鉄兵衛に被
仰付候、兄清右衛門他家大野氏にて、祖父大野筑右
衛門事輕き御奉公相勤、父大野清右衛門事も輕き御奉
公相勤申候、鉄兵衛事當分郡奉行御役相勤、一代新御
番に被入置候、尤代々、御城下士にて御座候、以上、

○餅原正因家筋調

餅原正因

右正因事ハ島津筑後家来にて候処、醫道を以被召出、

去ル享保十三年申九月、伊集院衆中に被仰付、同十四
年酉五月、表寄番醫師被仰付、元文三年、奥寄番醫師
被仰付、(吉貴室)靈龍院様御方江相勤、同五年申七月、(總目)隅州
様御側醫師被仰付、御城下一代士被仰付、延享二年
丑十月、代々、御城下士ニ被仰付候、尤大番相勤筈之
家筋にて御座候、以上、

延享五年辰二月廿五日

○鹿兒島士岩崎次兵衛家筋調

岩崎次兵衛

右次兵衛親岩崎五郎左衛門事ハ、當岩崎孫右衛門祖父
岩崎孫左衛門二男にて、初而別立、御料理役相勤、次
兵衛事當分御包丁人役相勤申候、代々、御城下士にて、
大番相勤候家筋にて御座候、以上、

辰三月朔日

○城州伏見大黒寺由緒調

覺

伏見大黒寺由緒相糺可申出旨被仰渡候、大黒寺由緒御記録所江相知不申候ニ付、穎娃權十郎方江相尋申候処に、彼方にも書留ハ無之候得とも申傳候者、穎娃家十代穎娃左馬久政證人にて伏見江相詰候節、諸司代之御方江御心安被仰下候ニ付、奉訴寺地買取、祈禱料百石、本尊迄も寄附いたし、右寺建立候よし申傳候、伏見御屋敷御祈禱被仰付、御通路之節者、御目見被仰付候、且又大黒寺儀前方ハ圓通山長福寺与申候処に、當公(徳)川(重)家重方様御幼名、長福様与奉申候ニ付、寺号大黒寺与相改、今以穎娃家江書通いたし来候由承届申候、去ル宝永五年子五月、大黒寺より穎娃左京・同主膳父子江遣し候書付に、長福寺者、御當地御在城之時分、島津家御先祖御祈禱所として、穎娃左馬頭殿證人に御詰被成候節御建立之寺にて候、御祈禱料百石御寄附有之、薩戸國より住持三代相務、祐慶阿闍梨・長悦・専良与申出家罷在候、尤護摩所にも相加り、江戸表等にも相勤候之よし傳承申候、其後十四五年無住にて有之由ニ付、其時分之伏見御屋敷守り奥村五郎兵衛与申仁預り支配仕

候内、相續不仕候ニ付、其後左馬頭殿より（左馬頭ハ時代違ひにて、左馬与有之候者子孫之間にて可有之候）申来候よしにて住持相定申、上方にて覚祐法印清雅、尚盛段と拙僧迄三代相務来申候、尤右之筋目當所奉行江も度々書附差上御存知之儀に御座候、本寺者京都御室仁和寺惣法務宮様御下知にて候、右之段御存知被遊候、寺之格式者よろしく御座候得とも、た、今迄貧寺ゆへ相續難仕罷在候、年中、殿様為御祈禱料鳥目三貫文拜領仕候、御目見仕候時分ハ芭蕉三反被為下候、御國本・江戸之中途に罷在申候ニ付、年中、御家御武運長久御繁榮、御殿中御安全、海陸御安寐之御祈禱長日相勤罷在候よし相見得申候、

右之通御座候得者、穎娃家より建立之儀別条無之与相見得申候、然る処に、正月伏見御屋敷講讀等相勤申候故を以、御家より御建立与存知罷在、御當家御祈願所之よし伏見御奉行所江も申出候ゆへ、寺地御免為被成置にて可有御座候、右相糺候趣如此御座候、以上、

延享五年辰三月七日

調之、

○頼朝卿五百五十年ニ付本田作左衛門より獻納願之
調

覺

此節 頼朝卿五百五十年御法會ニ付而、本田作左衛門(由親)より獻納物仕拜禮仕度旨願被申出、調被仰渡、左衛門之通に御座候、

作左衛門家之元祖本田次郎貞親事ハ畠山重忠二男にて候処、本田次郎親恒養子に罷成、忠久公島津御庄御給之節、先達而 御當國江罷下り、調議とも仕置罷り上り、忠久公御下向之御供仕又々罷下り候而より以來、至當作左衛門相續仕来り、本田家嫡流にて御座候、右通之家筋にて御座候故、忠久公五百年御回忌之節、作左衛門獻納物仕拜禮為被仰付事にて御座候、去ル元祿十二年 頼朝卿五百年御法會之節、獻納物仕拜禮之願為申出儀無御座候、然らハ 御家ニ付而者作左衛門家差立たる旧臣之家筋にて御座候得とも、頼朝卿御法會ニ付而者五百年御法會之節も獻納物不

仕候ニ付て者、此節願之通に者御免被仰付間敷儀与詮議仕候、此上なから御吟味次第奉存候、以上、

延享五年辰三月九日

調之、

右御法會大乘院におひて三月十三日より同十七日迄日数五日御修行有之、殺生禁断御觸流有之、右日数之内諸士參詣御免被仰渡候事、

○猪俣全右衛門家筋調

猪俣全右衛門

右猪俣全右衛門親猪俣堅右衛門事ハ、當猪俣半十郎祖父猪俣堅右衛門二男にて候処に、兄猪俣十兵衛家内より初而別立申候、曾祖父猪俣堅右衛門御中間相勤申候、祖父猪俣堅右衛門御中間相勤候処に、御厩付代々士に御赦免被仰付、肝煎役相勤申候、親猪俣堅右衛門事ハ御厩方御道具附役相勤候、當猪俣全右衛門當分御厩方御道具付役相勤罷在候、右調候趣如此御座候、以上、
延享四年辰十二月廿九日

○京都即宗院由緒しらべ

覺

京都即宗院由緒相札可申出旨被仰渡、左之通御座候、
 京都東福寺内即宗院者、御家六代氏久公御牌被成御
 座候儀者、隅州大始良龍翔寺開山剛中和尚事 氏久公
 御帰依僧にて御座候、 氏久公大始良江暫被成御座、
 其後志布志江御移なされ、剛中を大慈寺二代之住持ニ
 被仰付、 氏久公御逝去被遊候節、剛中和尚御焼香被
 仕、其以後即心院開基いたし 氏久公御牌安置にて、
 右寺江隠居いたし被居候処に、剛中和尚東福寺江住職
 有之、左候而、東福寺内に即宗院開基いたし、又々隠
 居之節 氏久公御牌安置いたされ、右より以来 氏久
 公御牌所に罷成候、

右之趣當座江相見得申候、即宗院文書写巻冊為御見
 合相添差上候、以上、

延享五年辰二月四日

調之、

調之、

右文書之内、龍吟庵と書記有之候、東福寺之事にて
 候、即宗院も最前即宗庵と申候、文書に者即宗庵と
 相見得候事、

○鹿児島士相良平八郎家筋調

覺

相良平八郎

本文進上物しらへ被仰渡候、相良傳八家嫡子御太刀・
 二種一荷進上仕来候得とも、近代二男 御目見仕候先
 例無御座候、右通之者ハ中紙進上被仰付儀ニ御座候、
 先年野村才右衛門・東郷藤兵衛・東郷浅右衛門家嫡子
 之儀者御太刀・二種壱荷進上仕候得とも、右三人二男
 野村助五郎・東郷藤十郎・東郷次太夫初而之 御目見
 之節、三人ともに中紙進上被仰付候、然れハ右三家之
 例を以、傳八二男相良平八郎事中紙進上可被仰付儀与
 奉存候、以上、

延享五年辰四月十二日

日(高為常) (吉田清純)
 吉

○鹿兒島士松元榮春家筋調

安(安藤茂真)
川(川上久備)調之、

松元榮春

本文家筋しらへ被仰渡候、榮春事者當松元勘之丞祖父松元勘之丞二男にて、當勘之丞家内より去ル寛保三年亥十一月初而別立申候、榮春高祖父松元與左衛門勤方相知れ不申候、曾祖父松元式部左衛門、祖父松元勘兵衛、親松元勘之丞、右三人小役人相勤申候、當榮春事當分醫道稽古仕罷在候、尤代々御城下士にて、大番相勤申筈之家筋にて御座候、以上、

延享五年辰四月廿日

藥(藥丸兼雄)日(日高為常)
吉(吉田清純)安(安藤茂真)
町(町田俊懿)川(川上久備)
吉(吉田清純)調之、

○倉橋金之丞被召拘訳及家筋調

113
覺

倉橋金之丞

右金之丞事何様之訳にて御家中に為被召抱家筋之者にて御座候哉、相糺可申出旨被仰渡候、金之丞亡父倉橋碩庵事、醫道仕候ニ付て大玄院様御代江戸におひて被召抱、御醫師相勤申たるよしに御座候、此外家筋等之儀委細當座江相知不申候、以上、

延享五年辰五月十九日

調之、

○佐多八十右衛門嫡子相果二三男男上り願之調

114
覺

佐多八十右衛門

右本文調被仰渡候、嫡子・二男・三男有之、嫡子相果候節者、依願二男嫡子成、三男二男成被仰付候先例多々御座候、然者佐多八十右衛門兄佐多喜六郎相果候ニ付て者、願之通八十右衛門事亡兄喜六郎場に組帳可被召載儀与吟味仕候、以上、

延享五年辰五月廿日

五人にて

調之、

河野幸左衛門初而高持成願ニ付調

河野幸左衛門

右本文初而高持成之願申出、家筋調被仰渡候、河野幸左衛門高祖父河野太郎次郎、曾祖父河野金之丞、祖父河野源太左衛門、亡父河野七郎右衛門迄四代御納戸附士にて御納戸江相附御奉公相勤候、當河野幸左衛門事も御納戸附士ニ而御納戸相付相勤居候処に、亡父七郎右衛門代 (綱貫調室) 蘭室様江首尾よく御奉公相勤候訳を以、去ル享保四年亥十二月、代々御城下士ニ御赦免被仰付候、其以後諸檢者等相勤、當分未之日大番相勤申候、以上、

延享五年辰五月廿一日

調之、

○鹿兎島士大重仲兵衛百石高上り成願之調

覺

大重仲兵衛

右本文百石高上り成之願申出、家筋調被仰渡候、大重仲兵衛(後共)家者伊集院家五男大重弥三郎忠秀十四代之孫大重五郎(久實)左衛門事、慶長五年、濃州関ヶ原より(義弘)惟新様御下國之節、豊後國森江におひて戦死仕候、何御奉公相勤候儀相知不申候、其子大重吉兵衛、其子大重主馬(久必)与連續仕候、主馬一子有之候處に、小根占衆中長野家養子に罷成候故、主馬家断絶仕候、右五郎左衛門二男大重傳(久水)左衛門初而家相立申候、是則仲兵衛家元祖にて御座候、右傳左衛門事ハ、寛永十五年二月、肥前國有馬原之城におひて得敵首候、是又又勤方相知不申候、其子大重仲兵衛、其子大重傳左衛門両代とも大番相勤候、其子當仲兵衛代嫡家右主馬家断絶仕居候ニ付、去ル享保十三年戌五月願申出、大重嫡家相續、自家兼帯に御免被仰付置候、當分無役にて大番相勤候、尤代々御城下士ニ而御座候、以上、

延享五年辰五月廿五日

町(町田俊徳)安(安藤茂貞)

吉(吉田清純) 藥(藥丸兼雄)

調之、

但戌七月廿一日、右願之通被仰付候、自分覺、

○鹿兎島士志和屋左太夫家筋調

覺

志和屋左太夫

右養祖父志和屋左京事御看經方相勤、四人賦にて江戸詰仕候、養父鏡學院事 御代山伏被仰付、八人御賦にて江戸詰仕候、左太夫事若年之節より御側御小姓相勤、其後御小納戸御役被仰付、六人御賦にて御跡乗相勤申候、當分山奉行相勤、尤大番相勤候家筋にて御座候、以上、

(表紙 二)



目錄

一 嶋津淡路守殿江忠之字等拜領被仰付差支有無之儀ニ付調

一 御記録所筆者川西筑右衛門御下國御供被仰付度旨御記録奉行より申出之件

一 菊姫様御疱瘡之件

一 御記録方御用物入(狭)狹箱御下國ニ付御道中被差通度旨御

供之御記録奉行より申出之件

一攝州住吉之社家田中福太夫訴状之儀ニ付調

一御領國中為差立靈驗有之神佛取調之件

一太守様・若殿様江戸御上下之節東目御通行調

一桂太郎兵衛・河野安之右衛門・宮之原宇右衛門列調

一平田孫次郎・堀甚八同前

一平田仲左衛門同上

一呉明卿詠哥品字蓮

一丹後宮津侯永井尚政之碑文^(世)

一延享中將軍職解任之儀ニ付執事等ヨリ上表

一將軍吉宗公墓表

一將軍家宣公室天英院殿墓表

一今和泉之儀指宿郡之内ニ被召附候付因幡殿へ被仰渡候

御書附振之調

一永山彦太郎繼目養子願ニ付家筋調

一串良衆中鳥越甚左衛門養子願ニ付調

一五右衛門二男村田正次郎事孫ニ候故養子二男ニ仕度旨

市来左中より願ニ付調

一甚左衛門二男堀甚八進上物調

一石神彦四郎繼目養子願之調

一溝邊衆中宗像仁之助養子願ニ付調

一鎌田八郎右衛門家筋調

一海老原孝左衛門繼目養子願ニ付調

一佐多・新納両家年頭御札着座等之件

一御年男之儀ニ付 仰出

一入江十郎左衛門訴訟之儀ニ付由緒調

一阿多正覚寺ニ御建被遊候天津正祐菴主云々福昌寺師山より寺社奉行所へ申出之件

一御兵具所附士森甚四郎致変死跡養子願ニ付調

一救仁郷長左衛門・北郷次太夫繼目御札名代ニ而進上物

納願ニ付調

一忠久公御鎧うつし并小泉御冑之儀ニ付御家老連署御記

録奉行宛之御書付

一慶長十一年鹿兒嶋城御樓門前之板橋落成渡初之件

一六郎大夫二男鎌田兵太進上物調

一於德殿嶋津出雲へ被嫁候付為續料高被宛行候旨出雲宛

之領知目録

一嶋津奎地頭職之御札願ニ付御禮席調

一鎌田兵太進上物調 三通

一鎌田典膳娘北郷民部へ致縁與不縁ニ付離別願中右娘相

果候ニより其願意許否調

一於供殿御忌掛之御方々調

一上杉大炊頭様御家中嶋津玄蕃家筋之件

一中紙進上ニ而諸御目見之者之儀ニ付 仰出

一國分正國寺へ御寄附高之儀ニ付御家老中より御書付被

下置候可否調

一弟共を兄之養子ニ相願候節之儀ニ付 公義仰渡

一伊集院衆中臼井武右衛門養子願ニ付調

一田布施衆中和田早兵衛同前

一中西文右衛門・同長兵衛・同政太郎・柏幾右衛門・有

川二平太能方ニ付座席列調

一瀬之口甚右衛門高上り願之調

一森朴阿弥家筋調

一中紙進上ニ而家督継目初而之 御目見云々 仰出

百十五代
一中御門院御履歴

一往昔高尾野へ致居住候者之娘於通と申者淨瑠璃為作初

由ニ付其由緒調

一祢寢孫左衛門より江戸帰國之節上京平松様へ御目見願
ニ付調

一崎山貞栄相果直子無之養子罷成者無之ニ付跡職不被召

立旨願出ニ依り調

一祢寢孫左衛門より小松家号ニ名字替願ニ付調

一榎本新兵衛百石高上り願ニ付調

一碓山次右衛門直子無之亡父八郎右衛門於大嶋出生之男

子ヲ継目養子願ニ付調

一智養子罷成候者養子違変本家へ立帰候後御目見沙汰之

儀ニ付御通達

一年頭諸地頭并御役家ニ付御太刀進上之面々来年頭 又

三郎様御方へも納太刀可被仰付哉之旨調

一右同断ニ付正月三日納太刀被仰付筋ニ可有之哉之調

一武井清左衛門養子願ニ付調

一藤田權兵衛より比志嶋隼人叔父比志島比三治ヲ継目養

子願ニ付調

一亡父伊勢兵部へ御作之紋所拜領被仰付置候処引續右御

紋相用度旨伊勢巨より願ニ付調

一御船奉行格松崎平左衛門・御船奉行竹原與右衛門連名

之次第調

- 一 嶋津登二弟掛橋五郎右衛門進上物調
- 一 喜入主馬二弟喜入幸之丞分地別立ニ付家格調
- 一 格与申儀ニ付 仰出
- 一 光久公御代琉使被召列御參府之涯御官位御昇進等有之候哉之儀ニ付調
- 一 中西長兵衛隱居嫡子中西八角儀ハ病身故ニ男中西政次郎へ家督相續願ニ付調
- 一 松元壽閑家筋調
- 一 中西長兵衛家系
- 一 江戸居付士二三男御番入之儀ニ付 仰渡
- 一 鎌田(八脱)小左衛門家筋調
- 一 寶曆五年之御奉書
- 一 有章院様御代武家諸法度被仰出候哉有無調
- 一 圓徳院様御葬禮之節御代之御太刀持之儀ニ付調
- 一 圓徳院様御葬禮之節御位牌御名代ニ而可被為奉守旁之儀ニ付調

覺

一 寶曆二年申十二月十七日、用右衛門事昨日主鈴殿(吉田清純)より被仰渡置候儀ニ付罷出、主鈴殿江御直ニ申上候趣者、昨日被仰付候島津淡路守殿江忠之文字拜領被仰付候而茂何之差支ハ有御座間敷与吟味仕候、先年淡路守殿中(剃)被成下候節、実名拜領被成候、其砌安藤左平次江名乘切之儀被仰付候、左平次より申出候者、忠之文字ニ可被仰付哉与相伺候処ニ、加賀守殿家父子替々久・忠之文字被下由ニ而、久柄与名乘相切差出候、右之趣ハ御記録所御書付之内ニ茂父子替々久・忠之文字被成下候儀一向相見得不申候、尤(吉貴)總州様御代御格式被相定候御書付之内ニ茂、佐土原江久・忠之文字被成下候誤相見得不申与私・左平次ニ茂覺居申候、左候得者、加賀守殿家 總州様御代より結構ニ被仰付候得者、此節淡路守殿江忠之文字拜領可被仰付儀与奉存候、乍然忠之文字一字拜領者不被仰付、先年當加賀守殿実名御改被下度旨、總州様江御願有之、御國元於御記録所只今之通忠雅与御記録奉行相切被進候、淡路守殿ニ茂爰元ニ而名乘相切可被進候、此儀者先例ニ御座候間、此度

淡路守殿江忠之文字拜領被仰付候ハ、実名相切御目録被相附可被進儀与奉存候趣委細口達を以申上候處ニ、主鈴殿より、右次第ニ候得者、何ぞ之折を以淡路守殿より御願被為申上、其節忠之文字拜領被仰付筋ニ茂可有之哉、何れ重而之事ニ而可有之与致承知之候事、

覚

御記録所定筆者 川西筑右衛門

右者、私儀當年 御下國御供被仰付置候、依之小役人致名書可申出旨被仰渡候、御記録所筆者之儀御供被仰付先例ニ御座候、然者御記録所御用物挾箱壹荷被差越事ニ御座候、御記録所御用物之儀者脇方之者江取拵難為致品々ニ而御座候、於 御中途御用等被仰付候節、無筆者ニ而者別而差支申儀御座候間、右筑右衛門事先例之通私同前御供被仰付被下度奉存候、尤 御中途御用無之節ハ表方勤御供等仕来申候、以上、

西正月廿二日

御記録方添役

吉田用右衛門

右之通相認、寶曆三年西正月廿二日、渋谷喜三左衛門江直ニ差出置之、

120

(宝曆三年) 西二月二日 菊姫様御庖瘡被遊候付、御役人限謁御家

老衆御祝儀申上候事、

一同月十一日 菊姫様御庖瘡御順快、御酒湯被遊候付而、

両御殿様江御役人限謁御家老衆御祝儀申上候事、

121

覚

御記録方御用物入挾箱壹荷

右御用物者 淨國院様御代 御意を以大切成口々入筋被差越候由相馬殿より書付を以被仰渡候、播磨路ハ不差越候事

付被仰付、御記録奉行御供ニ而、三道中竹長持壹竿

差通被来候處ニ、其以後 隅州様御代段々減方被仰

渡、右御用物御納戸荷物之内入付被仰付、是又三道

中被差通候、慈徳院様御家督初而 御下國之砌、

於御船中小倉筋 御通路被 仰出候節、御記録方添

役江右御用物西目乘廻ニ被仰付候而茂差支有之間敷

哉与御尋有之候節、右式大切成御用物之儀、其上

御両代様三道中為被差通品々ニ御座候故、小倉筋被

差通度旨申出、其通被仰付候、去ル辰年 慈徳院様

御參觀被遊候節、御記録奉行御供被仰付、於 御中

途御用有之候處ニ、右御用物御納戸荷物之内ニ入付

有之候付、御用難相達、漸自分覺書等を以御用相弁別而御用差支申候故、右之訳於江戶申出、挾箱忝荷入付被仰付、小倉路・東海道両道中被差通、此節茂右通ニ御座候、然者此節東目筋御通路ニ付而者、大切成御用物之儀御座候間、挾箱忝荷被差通度奉存候、且又當座筆者之儀、先年 隅州様東目筋 御通路之砌、表方勤ニ而御供為被仰付由承居申候得共、爰元ニ書留等無御座候故、何某何勤ニ而御供仕候訳相知不申候、此節表方勤ニ而東目筋御供被仰付被下度奉存候、右之段可申出旨被仰渡候付、如此御座候、以上、

西二月十八日

御記録方添役

吉田用右衛門(清純)

右之通書認、二階堂林左衛門江差出置之、(行通)

元禄十一年戊寅十月十五日訴書差出候、

撰州住吉之社家田中福太夫訴状之内調候、

覚

一當社神前之御祈禱 御家久敷被為仰付候、

此段何之比より御祈禱仕初来候儀、并五十二年以前

光久公當社江御參詣被為遊候節福太夫家ニ御腰被懸候事、御記録所江者相知不申候、定而其儀為有之ニ而候ハん、

一御先代様當社邊ニ而 御誕生被為遊候御場所、社務方江祖父福太夫度々斷申、永代御借り被遊、石垣御建立被 仰付候由、

此段何年中ニ御借り受、石垣御建立被仰付候儀、御記録所へハ相知不申候、然共只今現ニ石垣御座候得者、無別儀事与存候、御地清め并掃除・奉守護等之儀、御家より福太夫方江被仰付置候儀ニ而候哉、是茂何之比より与申儀相知不申得とも、福太夫祖父代(族脱之)

ニ 御場所御借り受之儀肝煎為仕儀ニ候得者、夫より以後右通ニ仕来たるニ而杜御座候ハん、

一其後御家中より石燈籠建立被成候ニ付、

此儀茂御記録所江相知不申候得共、是以石燈籠現ニ有之候得者、其通ニ社為有之ニ而候ハん、

右 御誕生石并場所之儀者、寛永十八年 將軍家江被差出候 御家之御系圖 忠久公之御傳記之中第一ニ御書記為被召置事ニ而御座候、近年ニ茂林大学(信應)頭殿江委

ク被為聞候事ニ而御座候得者、無掃除ニ而 御誕生石
 之場所荒し置申候而者、御元祖様を御崇敬被遊儀薄
 様ニ諸人可存事かと存候、然者福太夫より申出候通、
 御供料并御燈明料相應ニ被下置、御誕生石之格護・
 掃除・祓清め、又ハ於神前之 御家御長久之御祈等永
 代無退轉被仰付度事与存候、乍然 御誕生石之場所江
 御供御燈明奉備儀、如何様之訳ニ而仕事ニ而御座候哉、
 私不案内故取竟不申候、 忠久公之御靈神者淨光明寺
 ニおゐて御祭被遊候得者、是社御安座之御廟堂ニ而御
 座候、御誕生石之儀ハ 御誕生被遊候場所迄ニ而、 忠
 久公之御靈神御安在之御廟ニ而無御座候、然ル時者前
 ニ何れ之御神を向ニ相立奉崇候而 御供燈明奉備事ニ
 而御座候哉、無覺束事ニ存候、佐藤大和方江御尋被遊
 候ハ、相知可申候、弥以 御誕生石之場所之 御供御燈
 明奉備事義ニ相叶申候ハ、其料相應ニ被仰付、末代
 迄之御證文を急度被相添被下置度候、又不奉備筈之義
 ニ而御座候ハ、何れ 御誕生石之格護計ハ永代ニ至迄
 被仰付、其料相應ニ被下、尤御證狀ニ而茂被下置度事
 与存候、ケ様之類先規を考申候ニ、高野山之御宿坊蓮

金院江被召替候時、寺領高三拾五石紀州之内ニ御買地
 ニ而、其上御國之知行百石御寄附之由候、又慶長四年
(義私)
 惟新様御逆修之為として、奥院常燈料一百式拾貫文御
 寄進被遊候、いづれも御證狀被相附候、福太夫方之儀
 者蓮金院御取立程ニ者及間敷事ニ被存候、御見合茂可
 有之儀ニ而候、此段者先例茂候ハ、可申上由承候付、
 為御考之書付申上候、以上、

元禄十二年
 卯正月十八日

御記録所

田中五右衛門(國明)

右調書一通、福太夫口上書一通、卯正月十九日、於御
 國遣座赤松次郎右衛門殿御取次ニ而差上候事、

123

覚

- 薩州高城郡水引郷
- 一 八幡新田宮
- 隅州桑原郡國分郷
- 一 正八幡宮
- 隅州噲啵郡
- 一 霧島神社

『本文、春井殿於 御城細川越中守
 様老女より、於御國元為差立靈驗
 有之神佛可有、御座候間、書付給度
 由被頼候ニ付、此内護摩所へ調方
 被仰渡、書付差出候得共所々悪敷
 候、依之先年 姫君様より御幡敷
 寄進被遊候 神と見合相調可申出
 候、佛も見合書付可差出候、此段
 本田久米右衛門殿より承候故、本
 文之通見合書出候事』

薩州穎娃郡

一枚聞神社 (ヒラキ) 開聞神社とも申候、

薩州出水郡 (イヅミ)

一加紫久利神社

薩州鹿兒島城下

一正一位諏方神社

右同断

一正一位稻荷神社

日州諸縣郡高岡郷

一法華嶽寺薬師如来 (ホケダケジ)

同國同郡志布志郷

一寶満寺觀世音大士

薩州鹿兒島城下山之口

一地蔵菩薩

寶曆三年 (西) 四月二日 御記録方添役

吉田用右衛門 (清純)

覚

一寛永十六年四月廿九日 (元久) 寛陽院様御帰國江戸御發駕、

東目筋 御下向、

一正保四年正月廿八日 寛陽院様鹿兒嶋御發駕、東目筋

御參勤、

一寛文十三年 (延寶改元) 四月十六日 寛陽院様鹿兒嶋御發駕、

東目筋 御參勤、

一延寶三年九月廿六日 (綱貴) 大玄院様御部屋栖之内江戸御發

駕、東目筋 御下向、

一同四年五月廿五日 大玄院様御部屋栖之内鹿兒嶋御發

駕、東目筋 御參勤、

一同五年七月十日 大玄院様御部屋栖之内江戸御發駕、

東目筋 御下向、

一天和四年 (貞享改元) 二月五日 大玄院様御部屋栖之内鹿兒

嶋御發駕、東目筋 御參勤、

※1 一元禄二年三月三日 大玄院様鹿兒島御發駕、東目筋

御參勤、

一同六年二月十六日 大玄院様鹿兒嶋御發駕、東目筋

御參勤、

一同九年正月廿六日 (吉貴) 淨國院様御部屋栖之内鹿兒嶋御發

駕、東目筋 御參勤、

一同十一年九月五日 大玄院様御帰國江戸御發駕、東目

※2 筋 御下向、

右者東目筋 御通路年月相札可申出旨被仰渡、相
札候趣如斯御座候、以上、

酉四月十一日 御記録方添役 吉田用右衛門(清純)

右之通相認、相馬殿へ直ニ差上置之、

※1 (行間)

一 寶曆三年癸酉四月二十三日 太守重年公江府御發駕、東目

筋御下向、六月九日御着城、一御礼使喜入安次郎(久福) 一都於

郡御止宿 一御家老義岡相馬殿其外御用人衆御供(久忠)】

※2 (行間)

一 享保七寅年 隅州様御帰國、五月二日、江戸御發駕、東目(繼豊)

筋御下向、六月廿三日御着城、都於郡御止宿、御礼使祿

寝仙十郎殿(清純)】

覚

一 御太刀 御用人兼役之御礼

桂太郎兵衛(久忠)

一 右同 御側御用人御役之御礼

河野安之右衛門(通吉)

一 右同 御用人御役之御礼

宮之原宇右衛門(通忠)

右桂太郎兵衛事與頭御役ニ而御用人兼役被仰付、此

節御礼列調、御側御用人頭ニ相積り可差出候、御

目見御礼席ニ茂、與頭・御番頭ニ而御用人兼役之人ハ、

御側御用人・表御用人頭ニ列座被仰付事ニ候間、右

通以後共ニ列調仕候様ニ与内記殿・将監殿より吉田

用右衛門直ニ致承知候事、

寶曆三年癸酉七月廿四日

覚

一 弓 平田平太左衛門二弟 初而之 御目見

平田孫次郎

一 右同 堀甚左衛門二男 初而之 御目見

堀甚八

右者堀甚左衛門當分御用人御役、平田平太左衛門

御隠居様御方御側御小姓御役ニ而候、小番格之人ハ

親御役之次第、其子御役相動候人ハ家格ニ無構列相

調候、親之御役を以ハ子共同格ニ而茂前キニ列相調

申事ニ候得共、此節ハ親之御役ニ無構、寄合連名家

格之通ニ子共列相調申候、其訳ハ、享保十三年申六

月、平田新左衛門二男平田長兵衛、平岡内匠殿二男(正輔)

平岡彦之丞与列調書ニ相見得居候、右兩人共ニ御太

刀進上ニ而初而之 御目見被仰付候節、新左衛門家

格御太刀・三種二荷、内匠殿ハ御太刀・二種二荷ニ而候、家格連名之次第を以ハ長兵衛先キニ 御目見被仰付筈ニ候、然共内匠殿當分御役ニ付而者彦之丞先キニ可被仰付哉、此段究而難申上由御記録奉行列調、右通被差出置候処ニ、右列調書之通 御目見被仰付候与相見得申候、依之右例を以此節列調仕候而、将監殿へ用右衛門差出置之候事、

寶曆三年酉八月八日調之、

覚

中紙

平田平太左衛門三弟
初而之 御目見

平田仲左衛門

右 御目見列調之儀御目附衆より相尋来候、依之先例見合候上ニ而、代々小番部屋栖之人之頭ニ列調可有之哉与申達候、右仲左衛門事寄合之家内ニ被居候故、右通致吟味候、寄合之二男御太刀進上之人跡々有之、代々小番格継目 御目見之差次ニ列調相見得居候故、右例ニ準シ相調遣置候事、

寶曆三年酉八月九日

一中紙進上之人曾祖父代被召抱、曾祖父以前何様之者共

不相知人ハ、初而之 御目見之節、先祖代々 御城下士初而之 御目見之末、御座附士頭ニ列調有之筈候事、此段ハ自分覚ニ而候、

吳明卿詠品字蓮有序

往歳、乞千葉蓮於顧子承、先生所種之北園小池、得並頭華數朶、以為奇、今年忽有三花合附而開、觀者大奇之、余以為瑞、惟宋嘉元、泰始間、一生於建康、一生於豫州、皆一茎兩華則、三華更不常有、可知也、乃予池以並頭為常、且得三華如品字則、應何瑞乎、作品字蓮詩、三首

千葉蓮生大華峰 移根南土百靈從 一莖並吐三華出
面々都含玉女容

其二

濁水芙蓉本異姿 重臺並蒂亦稱奇 今看一萼花成祭
何羨三珠出海時

其三

綠沼紅蕖手自栽 看時常抱佛書来 若非帶共禪心結
那得花成品字開

○公諱尚征、姓大江氏、永井崑山公之嗣子也、崑山公信

濃守尚政也、崑山公（德川家光、猷嚴二家稱）德廟之時為執政歷任於猷嚴二

廟、母内藤氏、寬永七年、任右近大夫叙從五位下、萬

治元年、嗣立襲封于城之淀、其入七萬三千餘石、寬文

九年、賜移封於丹後宮津、延寶元年癸丑十一月十一日

卒于東都、距生慶長十八年凡六十有一歲云、葬于三田

功運寺、諡曰成肅公、配毛利氏甲斐守秀元女、有六男

八女、長越中守尚房早卒、次信濃守尚長為嗣、餘略于

此、今侯直國改築墳墓立石、益奉命作銘曰、

孝子慈孫豈遺其本片石不朽以傳于遠

延享戊辰歲夏六月豐臼杵莊允益撰

烏石葛辰書

右大將家其器、當其任如古例〔平〕之有勅許者、一天下之

大幸萬民安〔塔〕諸之為思事不過、其時者故後聞者在憚依

而〔奉〕舉一紙之連文驚〔而〕

聖聽、臣等誠惶恐惶謹言、

執事 舉

從四位侍從中務大輔藤原朝臣本多忠良

三家

松平〔宗矩〕兵部大輔

井伊〔直定〕掃部頭

松平〔賴恭〕讚岐守

松平〔容貞〕肥後守

諸侯十八人

國主五人 帝鑑問 老中五人 柳問 面々

鷹問 面々 菊問 面々

別當 若年寄

右表啓 京都江被獻之由、〔此〕此書附書物屋利、七持參二而寫之、

但安藤左平次殿より致借用写之置也

130 延享二乙丑穉臣等表之

右大臣吉宗公固年〔家〕蘭〔蘭〕將軍國解政務共辭、而

右大將宗重卿〔御奉〕舉讓、而尤後荷恩〔深仰者〕

右大將〔家〕任乞將軍職〔解〕國家政務共

右大將家令〔替〕繼替者臣等四民之悅賀哉、正

賜號有徳院葬東叡山上

有徳院大政大臣正一位大相國前征夷大將軍右大臣源朝臣吉宗墓

貞享元年甲子十月廿一日、生紀州和歌山、在位三

十年、

辭職七年、寛延四年^{辛未}六月廿日薨、

壽六十八歳、

覚

拜領被仰付旨 御判物為被下置儀御座候、然者今和泉惣名を揖宿郡之内与被仰付迄之儀ニ御座候得者、一通り之御書付ニ而、御家老衆御書付ニハ及間敷儀与私共吟味仕候、以上、
寶曆三年西七月九日
安吉 吉調之、

前關白大政大臣從一位基熙公女

征夷大將軍贈大政大臣正一位源朝臣家宣公室

天英院殿從一位藤原朝臣熙子之墓

寛文八年戊申六月八日生于京師、

元文六年辛酉二月廿八日薨、于三縁山上、
(葬脱力)

覚

本文今和泉指宿郡之内ニ被召附候付而ハ、屹与御家老衆御連名之御書附を以因幡殿御方江可被仰渡哉、又一通り之御書付ニ而可被仰渡哉、相調可申出旨被仰渡候、今和泉之儀、穎娃郡之内・揖宿郡之内一所之地ニ

本文永山彦太郎繼目養子永山友碩御免被仰付、此節御番入之願申出候、醫道仕候者代々小番・代々新番家格養子被仰付、御番入御免被仰付候先例相調可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一代々小番・代々新番家格養子ニ醫道仕候者御番入被仰付候先例段々相札申候得共、近代右躰之者御番入被仰付候先例無御座候、

一醫道仕候者其身之醫功を以十人賦又ハ六人賦被成下候者、御番入ハ不被仰付御格ニ被定置候、

一彦太郎代代々新番ニ被召入置候、

右之通御座候、代々小番・代々新番家格之者幼少ニ而御番難相勤者ハ、御番入之願申出、御番帳ニ被召載置、成長以後御番相勉申事ニ御座候、右通醫道仕

候者小番・新番御番人被仰付候先例無御座候、然者小番・新番家格之者、御駕籠廻其外屹立候場所之勤を茂仕事ニ御座候、醫道仕候者右式勤を茂不仕筈ニ御座候、友碩御番入、當分醫道仕候付而者、願之通二者被仰付間敷儀与吟味仕候、左候得ハ、友碩還俗仕候ハ、家格之通御番入可被仰付儀与奉存候、以上、癸酉七月廿五日 川 安 吉 本 吉調之、

覚

申良衆中鳥越甚左衛門
養子願再吟味被仰付候、

本文石崎助右衛門高祖父石崎七右衛門事國分衆中之由申傳候段申出候付、此節又々相糺可申出旨被仰渡候、依之國分暖方江委細問届申候處ニ、高帳并古書付等段々相糺申候得共、石崎七右衛門与申者相見得不申候由申出候、左候得ハ、七右衛門事元來衆中筋目之者とも相知不申候、御城下土馬場玄仙養子御兵具所足輕平川長右衛門二男平川幸兵衛事、玄仙直子無之候付、血筋之甥ニ而候故養子之願申出、願之通被仰付候、且又溝邊衆中外山源内直子無之候付、代々御中間有馬慶兵

136

衛事、源内為二者母方甥之血筋續を以養子之願申出候処ニ、養子御免被仰付候、然者新規ニ附衆中被仰付候者ハ、諸座附・人家來之者ニ而茂、元來士筋目之者ニ而候ハ御免被仰付事御座候、無左候得者、御免不被仰付候、血筋を以 御城下士又ハ外城衆中養子二者、元來士筋目之者ニ而無之候得共御免被仰付先例ニ御座候、左候得ハ、助右衛門事元來士筋目相知不申候得共、血筋之儀ハ別條無之候、御兵具所附足輕・御厩附御中間・物奉行所附其外御座附之者之儀者同前之事ニ御座候條、血筋之先例を以甚左衛門跡養子被仰付候而茂何ぞ差支申儀ハ有御座間敷与奉存候、以上、

癸酉八月八日 川 安 吉 吉調之、

覚

村田五右衛門二男村田正次郎事市來(政方)左中殿孫ニ而候故、養子被仰付二男ニ仕度旨願被申出候趣有之、調被仰渡、左之通御座候、

(久克)
一當嶋津頼母事桂太七郎二男ニ而御座候、右母ハ先入來院主馬殿娘ニ而候、右腹ニ致出生候ニ付、太七郎存命

之内より主馬殿子分ニ内々被申談置、出生之御より主

馬殿方江引受、介抱被致置、享保十三年申九月十四日、

主馬殿二男ニ被仰付被下度旨願被申出候処ニ、願之通

二男ニ被仰付候旨、谷山角(忠題)大夫御取次を以被仰渡、入

来院大八郎与申候、其後先島津頼母養子ニ被仰付候、

一當宮之原觀明坊事大山後角(貞洪)右衛門三男ニ而、大山茂次

郎与申候、右母八宮之原甚五兵衛妹ニ而候、右腹ニ致

出生候ニ付、甚五兵衛養子ニ被仰付度旨願申出候處ニ、

延享三年寅五月十一日、願之通甚五兵衛養子被仰付、

二男ニ被仰付旨、嶋津十太右衛門御取次を以被仰渡候、

一先北郷權八(資登)三男北郷龜之助事當種子嶋藏人姉之腹ニ致

出生、藏人方江内々貫受、介抱仕置候間、以来藏人弟

分ニ被仰付被下度旨願被申出候処、寛延二年巳五月廿

八日、北郷助(久壽)大夫御證文を以願之通藏人弟分ニ被仰付

候、

右之通御座候、桂太七郎二男・北郷權八三男之儀者

寄合以上之取與、大山後角右衛門三男者小番同格之

取組ニ而候、此節左中殿願者、外孫之儀ニ者候得共、

寄合之方江小番格之二男取與之儀御座候得者、格違

之儀ニ而品能キ方ニ御座候、ケ様成先例當座へ相知

不申候、然共外孫之儀御座候得者、願之通養子御免

被仰付ニ而茂可有御座候哉、乍然直之二男ニ而無之

候付而ハ、願之通御免有之候而茂左中殿直之二男与

者訊茂相替申候付、進上物御番入等、直子ニ而無之

者者其家之家格ニ者不被仰付御格式ニ而御座候、此

儀如何可有御座候哉、寄合之方へ小番格之二男養子

願之先例無之儀御座候付、究而何分ニ茂難申上儀ニ

御座候条、御吟味次第ニ奉存候、以上、

癸酉七月朔日 川 吉 吉調之、

右、願之通養子被仰付候事、

覚

本文進上物調被仰渡候、甚左衛門亡祖父堀(興貞)四郎大夫御

家老職之内、享保二十年卯十二月、嫡孫并倅向後折目

ニ進上物等仕御礼申上候節ハ如何可有之哉、右之段兼

而致承知置度旨御内意ニ而願被申出候節、四郎大夫御

家老職被仰付、御役之御礼御太刀・二種壺荷進上為被

仰付事候故、嫡子代々御太刀・二種一荷進上之筈候条、

嫡孫向後折目進上物等進上物等仕候節ハ、御太刀・二種一荷進上之筈候、二男以下何之ニ付而進上物等仕候儀有之候ハ、其節之吟味次第可被仰付候、御家老御役内ハ二男御太刀進上被仰付候例茂有之候得共、御役被辞候以後ハ御太刀進上者品能方ニ有之候付、其節之御吟味次第可被仰付候旨當座へ被仰渡置候、然者堀孫太夫事四郎太夫二男ニ而、四郎太夫寄合之家格不被仰付内中紙進上ニ而初而之、御目見仕候、其以後四郎太夫事寄合ニ被仰付、孫太夫別立申候、右通四郎太夫御役前中紙進上為仕儀御座候得共、先比孫太夫嫡子初而之、御目見願出候付而進上物調被仰渡候、右通四郎太夫御役内進上物御尋被申上、當座へ茂被仰渡置候、右吟渡之趣を以、孫太夫嫡子堀孫次郎弓進上相當可仕旨吟味書差上候處ニ、其通被仰付候、此節甚左衛門二男堀甚八事、孫次郎例を以弓進上可被仰付儀与吟味仕候以上、
癸酉八月六日
 川安吉吉調之、

覚

本文石神彦四郎相果、直子無之候付、御兵具所附代

ゝ土横内元哲事彦四郎家由緒之訳を以継目養子之願親類共より申出、調被仰渡、左之通御座候、

一彦四郎七代之祖石神善右衛門 （義也） 惟新様朝鮮國江御渡海

之節御供仕候由、勤方相知不申候、六代之祖石神堅右

衛門 （家久） 中納言様定御供相勤為申由御座候、高祖父石神

郷兵衛御里役相勤候、右郷兵衛妹横内元哲曾祖父横内

舍人江相嫁申候、曾祖父石神十郎兵衛事ハ右郷兵衛嫡

子ニ而、致家督早世仕候、祖父石神善右衛門事ハ郷兵

衛二男ニ而、兄十郎兵衛継目養子ニ罷成、是又致早世、

直子無之、勤方相知不申候、親石神典三山川衆中菱田

渡左衛門二男ニ而候処ニ、右善右衛門継目養子ニ罷成、

表御番醫師相勤申候、其子石神彦四郎諸座寄筆者等相

勤、去ル申年相果、直子無御座候、

一御兵具所附代ゝ土横内元哲高祖父横内惣左衛門足輕ニ

而勤方無之、加治木江罷居申候、直子無之候付、松下

舍人与申者養子ニ罷成候、舍人事ハ水引衆中ニ而為有

之由申傳候得共、究而之儀相知不申候、尤惣左衛門以

前之儀も相知不申候、曾祖父横内舍人勤方相知不申候、祖父横内喜左衛門御兵具所へ相附御奉公相勤申候、亡

父横内腕兵衛代寛保二年戊四月、戸田平次御取次を以(盛起)
御兵具所附代々士ニ御赦免被仰付、御兵具所へ相附相
勤申候、其子當元哲醫道稽古仕、勤方無之候、

右之通御座候、元哲續之訳ハ、彦四郎高祖父石神郷
兵衛妹元哲曾祖父横内舍人江相嫁、元哲祖父横内喜
左衛門致出生候故、家筋ニ付而ハ三従弟違之續別条
無御座候、然共彦四郎亡父典三事養子ニ罷成候故、
血筋之續ハ相絶申候、然者 御城下士山元平蔵相果、
直子無之、奥附足輕山元彦左衛門事家ニ付血筋無據
親類ニ而、繼目養子之願親類共より申出、當座へ調
被仰渡候、平蔵亡養父山元甚平与山元彦左衛門續之
訳ハ血筋ニ従弟之續ニ而御座候、平蔵事者和田平左
衛門二男ニ而候処ニ、右甚平養子ニ罷成候、右式無
據血筋之訳ニ御座候間、願之通繼目養子御免可被仰
付候哉、乍然右通之先例見當不申候付、究而ハ難申
上候間、御吟味次第可被仰付旨、去々年九月吟味書
差上置候処ニ、願之通ニハ御免不被仰付候、且又
御城下士小牟田六兵衛相果、直子無之候付、大根占
衆中川邊休右衛門事六兵衛家血筋親類之訳を以繼目

養子之願親類共より申出、當座へ調被仰渡候、外城
養子御格式之内ニ茂、外城養子之儀高持越候者迄ハ
可被仰付候、高不持越候而も無據血筋又ハ為差立訳
茂有之、依願之趣ハ被仰付儀も可有之由御格式被定
置候、右六兵衛繼目養子之願、血筋相絶、何ぞ為差
立訳も相見得不申候故、右平蔵例を以ハ願之通ニハ
被仰付間敷儀与吟味仕、調書差上置候處ニ、御免無
御座候、右両例を以ハ、此節彦四郎繼目養子願之儀
茂、家ニ付元哲事無據續ニ御座候得共、血筋相絶申
候ニ付而ハ御免被仰付間敷儀与吟味仕候、然共元哲
高所持不仕候得共、養子於御免ハ是枝長右衛門持高
之内七石餘買取可申旨内々約諾為仕置事ニ御座候、
左候得ハ、當分高所持不仕候得共、右通内々約諾仕
置高相直り候迄之儀ニ御座候故、高持越候と同様之
筋ニ相見得申候、其上家ニ付由緒も有之、右両条を
以ハ、願之通繼目養子御免被仰付候而も何ぞ差支申
儀ハ有御座間敷哉与奉存候、外城養子御格式被定置
候得共、 御城下士養子ニ御座附士養子御格式不被
仰渡置候故、準外城養子之御格式右通吟味仕候、右

躰之先例見當り不申候故、私共ニも究而何分難申上
御座候条、御吟味次第奉存候、以上、

癸酉七月三日 安 吉 吉調之、

右願之通養子被仰付候事、

本文溝邊衆中宗像仁之助事直子無之ニ付、鎌田六郎太
夫家来溝口金藏従弟之儀御座候間、養子御免被仰付被
下度旨願申出、調被仰渡、左之通御座候、

一 溝邊衆中宗像仁之助家筋相糺候処ニ、曾祖父以前之先
祖相知不申候、祖父宗像新助所衆并之御奉公相勤申候、
親宗像助左衛門事者同所衆中溝口新右衛門二男ニ而御
座候處ニ、右新助養子ニ罷成申候、其子當仁^(ママ)右衛門ニ
而御座候、助左衛門・仁^(ママ)左衛門事茂衆并之御奉公勤来
申候、尤代々溝邊衆中別条無御座候、

一 鎌田六郎太夫家来溝口金藏祖父溝口金藏、親溝口藤八、
當金藏ニ至り代々大嶋盛太夫家来ニ而御座候処ニ、六
郎太夫亡父鎌田太郎右衛門代ニ右金藏事永代被召抱、
當分溝邊へ中宿仕居候、

右之通御座候、仁之助・金藏由緒之訳ハ、仁之助親
宗像助左衛門妹金藏親溝口藤八江相嫁、其腹ニ金藏
致出生候付、血筋従弟之續別条無御座候、右式血筋
之訳を以人家来より外城衆中養子御免被仰付候先例
多々有之候間、願之通養子御免被仰付候而茂何そ差
支申儀御座有間敷与奉存候、以上、
西十一月十三日 三人

右本文鎌田六郎太夫家来溝口金藏俗生相糺可申出旨被
仰渡候ニ付、大嶋盛太夫へ承届申候処ニ、當金藏祖父
溝口金藏、其子溝口藤八、金藏迄盛太夫家之家来ニ而
賤業等をも不為仕、若黨ニ而召仕置候由申出候、當金
藏事鎌田太郎右衛門代被召抱候、右通ニ御座候得ハ、
於盛太夫家茂祖父以来何そ賤業をも不仕、當分ハ寄合
家格之家来ニ而罷居申候、然者血筋之訳を以ハ外城衆
中養子御免被仰付候而茂何そ差支申儀ハ有御座間敷与
奉存候、以上、
寶曆三酉十一月十八日
吉安 吉調之、

本文鎌田八郎右衛門六代之祖鎌田伊豆事ハ當鎌田隼人
家之庶流鎌田佐渡弟ニ而、初而別立、何御奉公相勤候

訳相知不申候、高祖父鎌田利右衛門於琉球國戰死仕候、曾祖父鎌田將監勤方相知不申候、祖父鎌田六右衛門御厩馬醫師相勤申候、亡養父鎌田利右衛門事筆者・小役人等之御奉公相勤申候、直子無御座、當八郎右衛門事平田靱負殿附衆中内田五兵衛嫡子ニ而養子ニ罷成、小役人等之御奉公相勤、當分勤方無之、御番相勤居申候、尤大番家筋ニ而御座候、以上、

西十二月 日 吉調之、

覚

本文海老原孝左衛門去年相果、直子無之候付、御納戸附代々土稲田覚右衛門無據血筋之訳を以繼目養子被仰付被下度旨親類共より願申出、調被仰渡、左之

通御座候、

一孝左衛門家ハ當海老原半助家之庶流ニ而、孝左衛門祖父海老原三右衛門事ハ弓細工仕候ニ付而、元禄十二年卯九月十五日、川村勝左衛門御取次を以 御城下士ニ御赦免被仰付候、三右衛門以前之儀相札候得共相知不申候、亡父海老原四郎兵衛事ハ右三右衛門三男ニ而、

三右衛門嫡子海老原正兵衛家内より初而別立、山奉行所筆者其外小役人等相勤申候、孝左衛門事諸座方小役人相勤申候、四郎兵衛妻ハ御納戸附代々土稲田覚右衛門叔母ニ而御座候、

一覚右衛門高祖父稲田五助飯野衆中ニ而、(義弘)惟新様朝鮮

國江御渡海之節御供仕、其以後御納戸へ相勤候由自家より申出候得共、當座へハ相知不申候、曾祖父稲田弥左衛門父五助引次同前相勤候由申出候得共、是又相知不申候、祖父稲田覚右衛門御納戸附代々士ニ而御納戸江相附、衆并之御奉公仕、寄肝煎をも相勤候、亡父稲田七左衛門是又御納戸肝煎相勤候、當覚右衛門事茂御納戸江相附、當分迄衆并之御奉公相勤罷在候、

右之通ニ御座候、孝左衛門・覚右衛門續之訳ハ、覚右衛門母ハ物奉行所附松山喜右衛門姉ニ而、右妹四郎兵衛江相嫁、孝左衛門致出生候ニ付、孝左衛門為ニ者母方血筋從弟之續別條無御座候、右式血筋之訳を以ハ 御城下士養子ニ外城衆中又ハ御座附士より御免被仰付候先例多々御座候間、孝左衛門跡養子覚右衛門被仰付候而茂何ぞ差支申儀ハ有御座間敷与奉

存候、以上、西十二月十八日 吉調之、

覚

年頭御礼之儀、此以前年頭御座配六番座迄有之候処ニ、
享保九年、右御座配被相止、一列御禮着座之次第被仰
付候、右御座配之節より、新納家段々勲功有之、御取
分を以三年ニ一度佐多家之場ニ而御太刀進上着座有之、
其節ハ佐多家之儀納御太刀被仰付候旨被仰渡置候、然
處ニ享保九年一列着座被仰付候節茂、三年ニ一度者新
納家此内之通佐多家之場ニ着座被仰付候、且又佐多家
部屋栖有之、一所ニ着座仕候時者、佐多家之次ニ新納
家三年ニ一度宛着座被仰付候旨被仰渡置候、佐多家之
儀近年御家老御役引續、年頭着座御家老之場ニ而有之、
其後ハ新納家佐多家之場ニ上り候儀無之、来年一所ニ
着座有之候儀初而ニ而御座候、御座配之節者佐多家之
場ニ新納家着座有之候得者、佐多家入場無之候故、納
太刀被仰付候、一列着座被仰付候節、部屋栖有之一所
ニ着座仕候時ハ、佐多家之次ニ三年ニ一度宛着座被仰
付候旨被仰渡置候、然者當空殿事家督之儀ニ御座候得

(高津久室)

143の1

者、弥以空殿次ニ新納家着座可被仰付儀与奉存候、以
上、寶曆三年酉
十二月 日

御年男列調之儀ニ付

覚

一來辰年之御年男衾寢孫左衛門・伊勢兵部被仰付候処、
孫左衛門事服有之被差免、右之跡今一人誰江可被仰付
哉之旨、市太夫殿より與頭・御番頭之内御年男名書し
らへ之伺被差出、私より相良源太夫御取次ニ而相伺候
処ニ、義岡左平太江可申付旨 被仰出候、
一右ニ付 御意候者、御年男連名兵部御番頭ニ而先役故、
兵部・左平太与連名之次第若取違申儀茂可有之候、御
年男役ニ付而ハ、平日御役之場連名之次第ニ無構、御
名字下之者前ニ書可申事ニ候得者、左平太・兵部与連
名之次第可有之候、向後左様可相心得旨承知仕候、
一御年男之儀、以前者御小姓之内より兩人為被仰付事候
得共、表御内證御規式事多有之候故、
總州様御家督
(古書)
内表より兩人被仰付候、右之訳候得者、表方より被仰
付候迎茂、あなち與頭・御番頭より被仰付与申ニ而

ハ無之候、一人者御側御小姓杯より被仰付候共、時々思召次第可有之候、左様之節も、たとへハ御側より御名字下之者被仰付、御番頭より他家之者被仰付候ハ、連名且亦席之次第茂御名字下之者いつ連茂可為始候、将亦表御内證御年男一人ツ、者必御名字下之者不被仰付候而難成与申ニ而茂無之候、兩人共他家之者被仰付候而も不苦事候、御名字下之者被仰付候儀者、御小姓杯之内ニ者本輕キ者之子共を茂被召仕事も候得者、左様成所より壹人ハ御名字之者被仰付方可然与之思召ニ而、此跡右通為被仰付事候、他家之者ニ而も屹被召仕者者他家ニ而茂可被仰付事候、御年男ハ一所持・寄合ニ而茂、其格ニ而無之者ニ而茂、平日之家格付而之御取分ハ無之事候、御年男者重キ勤ニ而候故、右通被仰付事候、年頭御禮之砌、門首之奏者御年男相勤、門中奏者者御奏者番より相勤候茂、御年男者重キ勤之所より右通被仰付事候、右之趣本意を不存候得者、至後年物每一向ニ覚候而如何之事候間、同役中得与承知仕、表御家老中江茂申聞セ可置耳、

十一月

總州様御意候、

143の2

右御書附者比志嶋(範房)隼人殿より表方へ被仰遣候与相見得候与覚居候得共、此御書付ニハ其分不相見得候、

右 仰出者享保二十年巳十一月乎、寶曆三年酉十一月十三日、島津将監殿江用右衛門御直ニ申上、御記録所へ御渡被成置候也、

但御格式帳ニ写置之、

144

覚

入江十郎左衛門より御訴訟申上候趣有之候付、由緒相糺可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一十郎左衛門嫡祖塩屋孫右衛門与申候而、泉州堺ニ罷居候処ニ、慶長五年、関ヶ原合戦破候故、(義弘)惟新様御事

大和・河内御通路ニ而泉州平野ニ御到着、田部屋道與初又右衛門、与申者之住吉之宅ニ御入被遊候得共、関東方之

先勢平野邊江押来候之聞得有之候付、道與宅 御立退被遊、堺之塩屋孫右衛門宅ニ御入、夫より御船ニ召御帰國被遊候、右通孫右衛門御急難を奉救候儀、御記録之内ニ茂相見得、別条無御座候、

一 惟新様御帰國之節、孫右衛門より弟入江助右衛門并孫右衛門嫡子入江善左衛門兩人御供ニ差上申候処ニ、兵庫之沖ニ而兩人共ニ御暇被下候、其節相良吉右衛門御取次ニ而、孫右衛門ニ御知行三百石、弟之助右衛門江御切米拾石可被成下旨被仰付候処ニ、孫右衛門拜領之御知行ハ存旨御座候由ニ而指上申、弟之助右衛門江被仰付候御切米迄頂戴仕候、其後又々孫右衛門ニ薩州出水之内於野田村御知行百石、相良吉右衛門御取次ニ而被成下候得共、至以後上方衆并ニ右百石之物成トして銀子拾枚宛ニ被召成、孫右衛門より五代目入江久兵衛迄被下置候処ニ、久兵衛事無奉公申上候由ニ而、御家中御暇被下候、其節右御扶持銀茂被召上候由、十郎左衛門格護仕候寛文年間之訴訟古書物ニ相見得申候、尤右百石知行古名寄帳寫茂十郎左衛門家ニ格護仕候事、

一 十郎左衛門家筋者右孫右衛門弟入江助右衛門筋目ニ而御座候、此助右衛門事大坂御屋鋪御普請見廻被仰付候、右ニ付而ハ、御家老中御證文十郎左衛門格護仕候、左候而、十郎左衛門亡養曾祖父入江十郎兵衛代迄五代引續、最初助右衛門ニ頂戴仕候御米拾石被成下候儀、是

146

本文御兵具所附代々士森甚四郎其身代別立、先比致変死、直子無之候付、伊集院衆中小倉庄藏事無據血

御奉行所

神社

右通相糺申上候、享保十六亥十月八日

福昌寺

師山印

又阿多之内桂窓菴ニ御位牌御建被遊候、此寺當寺支配ニ而、大年寺末寺ニ而候、

天津正祐菴主
天津正祐菴主ハ阿多大年寺末寺正覚寺ニ御建被遊候、天津正祐菴主与申者相知レ不申候、外ニ桂窓妙久大姉与申上、(思)日新公御兄弟様ニ而有之由承申候、是

145

口上覚 但拔萃

一天津芳祐菴主 『阿多渡り名之内正覚寺』

一天津正祐菴主

又十郎左衛門格護仕候寛文年間之訴訟古書物ニ相見得申候事、

右相糺候趣如斯御座候、以上、享保十六亥九月七日 川(川上久徳)

筋之詔を以跡養子被仰付被下度旨親類共より願申出、
調被仰渡、左之通御座候、

一甚四郎亡祖父森八右衛門事元来足輕ニ而候処ニ、八右
衛門代御兵具所附代々士ニ御赦免被仰付候、嫡子森源
内事ハ其以後 御城下士被仰付、二男森助右衛門御兵
具所附代々士ニ而御兵具所へ相附御奉公仕候、嫡子森
茂兵衛ニ而御座候、二男甚四郎兄茂兵衛家内より別立、
御兵具所江相附御奉公仕、先比致変死候、助右衛門妻
者伊集院衆中當小倉庄左衛門姉ニ而御座候、
一當小倉庄藏親小倉庄左衛門、高祖父小倉喜左衛門、曾
祖父小倉七兵衛、祖父小倉庄左衛門三代共ニ所衆并之
御奉公相勤申候、親庄左衛門事行役相勤候、庄藏事
者右庄左衛門二男ニ而御座候、尤代々伊集院衆中別條
無御座候、

右之通ニ御座候、甚四郎・庄藏續之詔ハ、助右衛門
妻ハ庄藏親庄左衛門姉ニ而、右腹ニ甚四郎致出生候
故、甚四郎為ニハ庄藏事血筋從弟之續別条無御座候、
右式血筋之詔を以ハ外城衆中養子被仰付候先例多々
御座候間、庄藏事甚四郎跡養子被仰付候而茂何之差

147

覚

支申儀ハ有御座間敷与吟味仕候、以上、
寶曆三酉十二月十七日 本吉 安川
吉調之、

本文之通調差上候処ニ、段々被仰渡趣承知仕、御尤
奉存候、又々吟味仕候ニ付、左之通御座候、

※ 此程救仁郷長左衛門繼目御禮願之節調書差上申候、當

座之儀ハ御格式又ハ先例を以吟味仕事ニ御座候、病身
ニ有之 御目通罷出躰無之者ハ、名代を以進上物差上
候筋ニ 御先代より為被仰付置儀ニ御座候ニ付、御格
式先例ニ引當為申上儀ニ御座候、此節北郷次太夫儀も
寄合之家筋ニ御座候得共、大番以上一所持迄一統之儀
ニ御座候得者、右長左衛門調之通、先例を以名代ニ而
進上物差上候筋ニ可被仰付儀与申上置候、猶更吟味仕
候処ニ、右ニも申上候通、大番以上一所持迄一統之儀
御座候得者、相并候様ニ次太夫事先例之之通名代を以
進上物可被仰付儀与奉存候、
一嶋津主右衛門繼目御禮、野村太次右衛門初而之 御目
見并繼目御礼、病身ニ付名代を以進上物仕御禮相濟候

筋ニ被仰付被下度旨願被申出候節、進上物迄調被仰付、名代を以進上物被仰付候儀ニ付調被仰渡候儀無御座候、一右之通不被仰付候得者、此節別立而御格式被相定外無御座候、然ハ輕キ者者家内為介抱 御目通不罷出者茂

以名代進上物差上、小番格又ハ寄合并以上者輕キ者之格ニ者被仰付間敷共難申上御座候、病身ニ付 御目通

ニ不罷出者ハ、一所持以下大番迄も同前之儀ニ御座候、然処ニ大番・小番・寄合并以上与其差別被仰付候ハ、相并不申事ニ御座候間、此節御格式被相定、病身ニ付御目通ニ不罷出者ハ、名代ニ而進上物差上御札相濟候筋不被仰付事候ハ、大番より一所持迄可被仰付儀ニ御座候、八歳以下之者ハ一所持より大番迄一統ニ名代を以進上物被仰付儀ニ御座候、御格式之儀者いつれ一統ニ無之候得者不叶筈与吟味仕候、

右兩條吟味之外、私共存寄申儀無御座候、以上、

寶曆三稔酉十一月乎

吉調之、
川安

※(行間)

『本文將監殿へ差上置候処ニ、其以後安藤左平次へ被仰聞候趣ハ、此節北郷次太夫・救仁郷長左衛門事、御座調之通進上物

148の1

納ニ被仰付筈候、是ハ兩人共ニ為被願出置有之候故、其通被仰付候、重而右牀之願申出候節ハ、猶又御吟味被仰付筈之由候旨致承知之置候、重而為考書記置也』

寫 寫

一 忠久公御鎧うつし一領

右忠久公御鎧者御家御代ニ為御讓物之處、及五百年御傳來之故、漸々ニ者其形不分明可有之牀候旨 太守繼豊公達 貴聞、永々為御見合うつし置候様ニと被仰付、段々吟味之上其形無相違相調、御兵具所藏江納置候、依之うつし之儀茂正之御鎧江被相添、自今以後御讓物之内被入置候、

一小泉御冑一領

右者 義弘公^江從 太閤秀吉公被成御拜領、差立候

御由緒茂有之、御家^為御讓物之處、元禄九年子四月

罹火災、御讓物 御覽之席被備牀無之候故、從^音總

州様 太守繼豊公江御讓物御目錄之内被相除候、雖

然御家之御重物ニ而偶其形相殘有之候故、 太守繼

豊公より取拵被仰付、如本相調御兵具所藏江納置候、

依之自今以後又々御讓物之内被召入候、

右之通此節被 仰出、以後若御讓物御目錄之内被

書載筈候故、物頭江茂委細申渡置候間、其訳御記

録所江記置、至後代傳失有間鋪者也、

平岡内匠

享保十一丙十二月廿八日

之品判

種子嶋彈正久基判

伊集院藏人久矩判

樺山主計久初判

嶋津空久武判

嶋津中務久貫判

御記録奉行

(本文書ハ「旧記雜録追録三」一九二六号文書ト同一文書ナルベシ)

右之通被仰渡置候間、本文之御書附可相直ル儀与奉

存候、以上、

酉十一月十八日

御記録奉行

本文小泉御冑之儀者御讓物ニ被召加候故、前条引札を

以申上候、

酉十一月廿日

御記録奉行

覚

一慶長十一年六月六日、蕨陽城樓門前板橋既新成爲渡初、

覚

鎌田兵太

本文進上物調被仰渡候、鎌田六郎太夫家嫡子ハ御太刀・

二種一荷進上被仕来候、二男近年 御目見被仰付候者

無御座候、亡父鎌田太郎右衛門弟鎌田清太事御太刀進

上三而 御目見為被仰付由ニ御座候、其以後及類焼、

書留等相見得不申候、然者六郎太夫家嫡子代々御太刀・

二種一荷進上被仕来候ニ付而ハ、當分證書等ハ無之候

得共、先年清太事御太刀進上三而 御目見為被仰付儀

ハ別条有御座間敷与奉存候、其上太郎右衛門代御家老

職・寄合家格為被仰付置儀ニ御座候間、此節六郎太夫

二男鎌田兵太事、先例之通御太刀進上三而 御目見可

被仰付儀与吟味仕候、以上、

寶曆四戌三月廿日 川 安 吉調之、右調ニ付而ハ、

前以段々調方被仰渡置候得共、又々致再吟味差上候、

然共弓進上ニ被仰付候、

諸所領知目錄

- 一 高何石 薩州何郡 何村
- 一 高何石 隅州何郡 何村
- 一 高何石 日州諸縣郡 何村

合高四百斛

右於德殿事就被相嫁于御方、為所帶續料今般從 太

守重年公右高永々被宛行之、御方持高被仰付候間、

全可被領知者也、依 仰如件、

年号月日

御家老衆御連名

島津出雲殿

覚

一 御太刀・二種一荷

嶋津大藏殿

右於御座之間御役之御禮、奏者島津十太右衛門、

一 御太刀

右同人

右於唐子之間地頭職之御礼、奏者右同人、

本文御禮席之儀調被仰渡候、享保三年戊七月十八日、

先嶋津空御家老御役ニ而高岡地頭職被仰付候節、御役・

地頭職之御礼於御座之間延享四年卯七月廿一日被仰付

覚

鎌田兵太

候、先嶋津大藏事若御年寄御役ニ而阿久根地頭職被仰
 付候節ハ、御役之御礼於御座之間御太刀・二種一荷進
 上有之、地頭職之御礼於唐子之間納太刀被仰付候先例
 有之候間、此節空殿事於御座之間地頭職之御礼可被仰
 付儀与奉存候、以上、

但先島津空殿御役・地頭職之御禮於御座之間被仰付
 候与御證文ニ相見得居候、其以後大藏殿御役・地
 頭職之御礼本文之通ニ相見得候、此段自分為心得
 記置也、 寶曆四年戊四月十二日 川吉調、安

本文進上物調被仰渡候、鎌田六郎太夫家二男近年 御
 目見被仰付候先例當座へ相知不申候ニ付、六郎太夫方
 江問届申候処ニ、亡父鎌田太郎右衛門弟鎌田清太御太
 刀進上ニ而 御目見仕候由申傳候、其以後逢類焼、諸
 書附等致燒失候故書留等無御座、右清太事何年間 御
 目見仕候儀も不相知候、元禄七戌年、清太事拾八歳ニ
 而相果申候、其後二男 御目見仕候者無御座候段申出
 候、依之吟味仕候者、六郎太夫家之儀ハ先祖代々御用

人御役相勤、地頭職被下置、亡祖父鎌田太郎右衛門事
 元禄年間迄御用人御役相勤居申候、嫡子ハ代々御太刀・
 二種一荷進上仕来候、右太郎右衛門二男清太事拾八歳
 二而相果候得者、元禄年間 (綱目) 大玄院様御代 御目見為
 仕筈ニ御座候、其比迄者、小番格之者嫡子御太刀・二
 種一荷進上仕候家ハ、二男御太刀進上被仰付候家多々
 御座候ニ付、清太事御太刀進上被仰付候半与相考申候、
 然者堀甚左衛門家嫡子代々御太刀迄進上仕来候処ニ、
 亡祖父堀四郎太夫代寄合ニ被仰付、御家老職被仰付、
 御役内御内意ニ而願被申出候節當座江被仰渡候者、四
 郎太夫事御役之御禮御太刀・二種一荷進上為被仰付事
 ニ候故、嫡子代々御太刀・二種一荷進上之筈候条、嫡
 孫向後折目進上物等仕候節ハ、御太刀・二種一荷進上
 之筈候、二男以下何ぞニ付進上物等仕候儀有之候ハ、
 其節之吟味次第可被仰付候、御家老御役内者二男御太
 刀進上被仰付候例茂有之候得共、御役被辞候以後ハ御
 太刀進上ハ品能キ方ニ有之候付、其節之御吟味次第可
 被仰付候、右仰渡之趣を以當座より調差上、當甚左衛
 門二男堀甚八 御目見之節弓進上ニ被仰付候、然者六

153の2

郎太夫亡父太郎右衛門事茂寄合家格ニ被仰付、御家老
 職被仰付候、六郎太夫家ハ以前より嫡子御太刀・二種
 一荷進上仕来、甚左衛門家ハ四郎太夫代より嫡子御太
 刀・二種一荷進上被仰付候、右を以ハ六郎太夫家甚左
 衛門より者立増申候、尤清太 御目見之證書者無之候
 得共、右次第ニ御座候得者、御太刀進上為仕儀ハ別條
 有御座間敷儀与相見得申候、殊更六郎太夫家寄合ニ茂
 為被仰付儀ニ御座候条、二男兵太事御太刀進上ニ而
 御目見可被仰付儀与吟味仕候、乍然御詮議次第奉存候、
 以上、寶曆四戊三月廿一日 川安 吉調之

本文調書差上候処、六郎太夫亡父鎌田太郎右衛門弟鎌
 田清太事御太刀進上仕候儀證書等茂無之候、堀甚左衛
 門家ハ二男弓進上被仰付候、右次第ニ候間、今一往得
 与致吟味可申出旨被仰渡候、依之又々吟味仕候者、享
 保三年戊七月、伊集院伊兵衛養子伊集院市兵衛養子成
 之御礼、養父伊兵衛事御太刀進上仕候間、御太^{マコ}上進上
 之願申出候ニ付相糺申候得共、當座江相知不申候、尤
 證書等無之自分覚迄ニ而御座候得ハ、究而難申上候間、

御吟味次第可被仰付旨當座より調書差上候処ニ、中紙進上被仰付筈ニ候得共、自家申出趣茂候故、弓進上被仰付候旨被仰渡候、同五年子四月、伊勢新五郎繼目養子成之御禮申出候節、養父伊勢新五郎別立之御礼何品進上仕候儀相知不申候間、御見合を以進上物被仰付被下度旨被申出候付、當座へ吟味被仰渡、相糺候処ニ、當座へも相知不申候得共、養父新五郎事別立之節御太刀・二種一荷進上被仰付候半与相考申候由申出、是又證書無之候得共、御太刀・二種一荷進上被仰付候、右之通證書等無之候而茂御吟味之上為被仰付先例も御座候、此儀を以ハ六郎太夫家最初乍小番格嫡子御太刀・二種一荷進上仕来、堀甚左衛門家ハ元来御太刀迄進上仕、二男之儀者中紙進上仕来候、六郎太夫家ハ證書等ハ無御座候得共、二男御太刀進上仕候由申傳候訳茂有之候、右通ニ御座候得者、市兵衛事中紙進上被仰付筈之者ニ御座候得共、自家申出候趣も有之、弓進上ニ被仰付候、新五郎養父新五郎進上物相知不申候得共、御太刀・二種一荷進上被仰付候、右次第ニ御座候得者、六郎太夫家證書等無御座候得共、右両家之先例を以、

154

覚

153の3

兵太事本文申上候通御太刀進上可被仰付儀与奉存候、以上、
戊三月廿二日 川安 吉調之、

覚

鎌田兵太

本文進上物調被仰渡候、鎌田六郎太夫亡父鎌田太郎右衛門弟鎌田清太事 御先代御太刀進上ニ而 御目見仕候儀、證書等者無御座候得共、自家ニ御太刀進上仕候段申傳置候ニ付而ハ別条有之間敷与奉存候、左候得者六郎太夫家二男迄御太刀進上之家格ニ相見得申候、尤亡父太郎右衛門代寄合ニ茂為被仰付儀ニ御座候条、二男鎌田兵太事先格之通御太刀進上ニ而 御目見可被仰付儀与吟味仕候、且又清太御太刀進上仕候儀無之候而ハ、六郎太夫當分寄合之儀候得共、二男弓進上被仰付筈与奉存候、以上、
寶曆四年戊四月廿三日

右之通段々吟味被仰渡、調書差上置候処ニ、兵太事弓進上被仰付候事、

本文鎌田典膳殿娘北郷民部江致縁與、此程不縁ニ有之、

双方親類より離別之願被申出置候処ニ、典膳殿娘被相

果候、右ニ付而ハ何様ニ可被仰渡哉、致吟味可申出旨

被仰渡候、夫婦不縁ニ付離別之願被申出置候、然処ニ

離別御免無之内典膳殿娘被相果候、右娘存生之内不縁

ニ相決候処ニ、被相果候ニ付願書被相下ケ候而ハ、典

膳殿娘死後民部亡妻ニ相成申筈ニ御座候、左候得者、

往々於民部方年回等茂相吊不申候而不叶筈ニ御座候、

然共存生之内相互ニ不縁ニ付離別之願を茂被申出置候

得者、左様之儀も民部方ニ而ハ難致筈ニ相考申候、然

ハ死後迎茂親類被願出置候通離別御免可被仰付儀与吟

味仕候、乍然右躰之先例當座へハ相知不申候故、究而

ハ難申上御座候間、御詮議次第奉存候、以上、

寶曆四戌六月六日 安 吉調之、

覺

於供殿御忌掛之御方々相糺可申出旨被仰渡、左之通御

座候、

一御兄 (繼豊) 隅州様

一 又御甥之續 (重生) 太守様

一 御姪 (繼豊女) 菊姫様

一 御祖母 (網貞後室) 信證院様

一 御叔母 (網貞女) 於栄様

一 御姉之續 (子力) 阿部伊勢守様御母堂

一 御從弟之續 (定齋) 松平隱岐守様

一 御甥之續 (正右) 阿部伊豫守様

一 御從弟之續 (忠進) 嶋津加賀守殿

一 右同 (高津惟久女) 嶋津備中殿

一 御兄 島津大学室○於巖殿

一 御兄 島津周防殿

一 右同 島津圖書殿

一 御姉 於德殿○島津出雲室

一 御甥之續 但実者御兄 嶋津玄蕃殿

一 御姉 於民殿○伊勢亘室

一 御兄 嶋津因幡殿

一 右同 小松安之助殿

一 御姪 肝付彈正室○於鐘殿

一右同 嶋津市太夫室○於鉄殿

一御甥 嶋津李殿

一右同 入来院石見殿

一御叔父 嶋津仁十郎殿

一御甥 末川織衛

一右同 末川文九郎

一右同 嶋津權五郎

一右同 末川七之進

一右同 末川彦十郎

一御姪 嶋津備中殿娘女子二人

一御甥 嶋津又八郎

一御姪 嶋津備中殿娘女子二人

一御從弟 嶋津大學

一右同 嶋津監物

一右同 町田郷九郎

一右同 桂太郎兵衛

一右同 嶋津主水

一右同 土岐仁之助

一右同 土岐常十郎

一右同 土岐貞十郎

一御母方御忌係當座へハ相知不申候、

右書附差上申候、以上、

寶曆四戌六月十三日 用左

156の1

寫 写

一嶋津玄蕃行忠曩祖左衛門尉忠綱、後周防守又豊後守与申候、右忠綱者嶋津三郎忠久公之御二男、

一忠綱越前國ニ居住、其後子孫丹後國ニ住、嶋津下野忠連ト申者ヨリ以来信州水内郡長沼ニ致在城、右忠連ヨ

リ十代嶋津淡路守昔忠後代ニ至リ當家ニ属、如前長沼ニ致在城候處ニ、中納言景勝代奥州磐瀨郡長沼ニ移、

今程當家中ニ致居住候、紋所輪之内十文字從先祖付来申候、

嶋津玄蕃

156の2

右於江戸上杉大炊頭様御留守居より此御方御留守居方へ嶋津新八久馮之捻状相見得候由ニ而、新八殿実名之訓尋書有之、右書附茂有之候故、寶曆三年黒葛

原平八江戸詰ニ而書寫置、寶曆四年戌六月十三日、
歸郷ニ而被為見之候故、書寫置之也、

寫

中紙進上ニ而家督繼目初而之 御目見之者

一御役被 仰付置候人数家督繼目且又乍御役初而之御禮
申上候節、小番ニ而茂大番ニ而茂家督繼目初而之御礼
之次第を不分、御役列之通 御目見可被 仰付候、右
終而無役之小番・大番・御赦免士 御目見之次第左之
通、

〔挿紙朱書、是より披露之御用人代合可申候〕

一 小番筋并一代小番之者家督繼目之御礼

一 大番相勤候者家督繼目之御礼

一 御赦免士家督繼目之御礼

一 小番筋初而之御礼 但嫡子成之御礼可為同列候、

一 大番相勤候者初而之御礼 但右同断、

一 御赦免士初而之御礼

右之通御役被 仰付候者ハ最初被遊 御覽、其後無

役之小番・大番・御赦免之士右之次第ニ 御目見可

被 仰付之由、名越（恒遊）右膳ニ而被 仰出候、以上、

正徳元年
卯九月四日

右之通以御書附御記録所へ被仰渡置也、

知行目錄 草案

高式百斛

隅州國分内村之内 外略之、

名寄帳在別冊、

右 故太守吉貴公其院御再建、為正八幡社領被寄附
之、享保六年二月廿七日御寄附狀被成下畢、全令所
務御祈禱無怠慢可抽丹悃者也、其節地面不纏今般支
配就相定、仍如件、

年号月日

御家老中御連名

正八幡宮別當
彌勒院

右寶曆四年戌十月日、

知行目錄 草案

高拾六斛

隅州國分内山田村之内 外略、

名寄帳在別冊、

右、依願貴寺引直于國分内山田村邊田、以寺地跡田開有之、出来高之内寛保元年十一月廿八日被寄附于其寺畢、至後年無違失可有取納者也、今般支配就相定、仍如件、

年号月日

御家老中御連名

正國寺

右同斷、

覚

國分宮内正國寺寺地引直被仰付、跡寺地田開キ、出来高之内拾六石正國寺寺高ニ御寄附候付、御家老衆御連名之御書付可被下置候哉、又ハ何ぞ御志願ニ而茂無之事候得者、御家老衆御書付被下置候ニ者及間敷候哉、右之段私共吟味之趣可申上旨被仰渡候、此以前所々寺院江寺社領御寄附之節、御家老衆御書付被下候儀、當座へ吟味被仰付儀無御座、御書付被下候節者其段被仰渡、御書付下書草案仕差上申事ニ御座候、此節吟味被仰付候ニ付而ハ、右式故究而之儀ハ難申上御座候得共、

158の5

知行目録

寫

158の4

知行目録

寫

此跡弥勒院前住憲英法印自分仕明ケ地依願弥勒院・龍洞院增高御寄附、且又高三拾石宛憲英寺・西田寺・小根占安樂寺江御寄附被仰付候節、右五ヶ寺江銘々御家老衆御連名之御書付被下置候、右を以相考申候得ハ、自分仕明ケ地依願御寄附之方より、御物御仕明ケ地御寄附之方者重キ方ニ而可有之与存申候、然者右例茂御座候得者、正國寺江御家老衆御連名之御書付被下置可然哉与奉存候、別紙草案式通書寫差上申候、以上、寶曆四 戌十月朔日 本 吉安 安調之、

高何石 何村之内

名寄帳在別冊、

右高雖為前住淨妙院憲英法印自分新仕明之地、依願被寄附于其寺之条、至後年無違失可有取納者也、仍如件、

年号月日

御家老中御連名

憲英寺

高何石 何村之内 名寄帳在別冊、

右高雖為前任淨妙院憲英法印自分新仕明之地、依願

相加于先年之御寄附高、都合三百石正八幡為社領被

寄附之条、至後年無違失可有取納者也、仍如件、

年号月日

御家老中御連名

彌勒院

寫 寫

兄弟數多有之候者弟共を段々ニ兄之養子ニ相願候節、

向後左之通相心得可申候、

一 弟を兄之養子ニ致し候節ハ、弟之續を以養子ニ相願可

申候、

一 右養子ニ相成候者又候其者之弟を養子致し候節者、実

弟ニ候得共養方ニ而ハ伯父之續ニ付、養子ニ者不相成

候間、相續ニ相願可申候、

一 右相續ニ相成候者又候其者之弟を養子ニ致し候節茂、

實弟ニ候得共養方ニ而ハ右伯父之續ニ候間、養子ニ不

相成候間、相續ニ相願可申候、

一 右相續ニ相成候者又候其者之弟を養子致し候節ハ、最

早養方ニ而續之名目無之候間、実弟之續を以養子ニ相願可申候、

右之通寄々可被相達置候、

六月

右寶曆四年甲戌七月五日、於江戸大目附能勢(頼唐)因幡守

様より被仰渡、御廻状相附、

本文伊集院衆中白井武右衛門事直子無之候ニ付、本

田新次郎家来松元栄右衛門血筋従弟違之儀御座候間、

養子御免被仰付被下度旨願申出、調被仰渡、左之通

御座候、

一 白井武右衛門六代之祖白井主殿、高祖父白井主税、曾

祖父白井才右衛門、祖父白井休右衛門、親白井弥兵衛、

當武右衛門迄代々所衆并之御奉公勤来申候、尤代々伊

集院衆中別条無御座候、

一本田新次郎家来松元栄右衛門俗生相知不申候ニ付問届

申候處ニ、栄右衛門曾祖父松元勤左衛門、祖父松元勤

左衛門、親松元志賀右衛門ニ至り三代當白尾戸後右衛

門家之家来ニ而、賤業等をも不為仕、諸座御藏手傳等相勤来り、新次郎亡父本田作左衛門代ニ右志賀右衛門事永代ニ被相抱置候、栄右衛門事ハ新次郎家来和田氏養子ニ罷成、和田栄右衛門与宗門手札被申受置候処ニ、栄右衛門兄相果候故和田氏致違変、志賀右衛門方江立婦、本之通松元名字ニ罷成候由被申出候、

右之通御座候、武右衛門・栄右衛門續之訳者、武右衛門母羽月衆中松元嶋之丞娘ニ而候処ニ、武右衛門親白井弥兵衛江相嫁、武右衛門致出生候、栄右衛門母ハ右嶋之丞嫡子松元四右衛門娘ニ而、栄右衛門親松元志賀右衛門へ相嫁、右腹ニ栄右衛門致出生候ニ付、血筋母方従弟違之續別條無御座候、鎌田太郎右衛門家来溝口金藏、祖父代より金藏迄大嶋盛太夫家之家来ニ而罷在候処ニ、金藏事先鎌田太郎右衛門代、永代ニ被相抱、金藏代より寄合家格之家来罷成候、血筋由緒之訳を以、溝邊衆中宗像仁之助養子ニ御免被仰付候、栄右衛門事親代より寄合家格之家来ニ罷成、當栄右衛門事右式血筋之訳を以ハ先例茂御座候間、願之通養子御免被仰付候而茂何そ差支申儀ハ御

座有間敷与奉存候、以上、

寶曆四稔戌九月六日 吉 安 吉調之、

右調書差出置候処ニ、願之筋不相濟由傳承之、其訳ハ、大嶋家与白尾家与ハ皆共小番家格ニ而候得共、大島家ハ訳茂為相替者之家来故、願之通御免被仰付候由承置之、

161

本文田布施衆中和田早兵衛事御兵具所附足輕坂本雲静家跡養子之願申出、調被仰渡、左之通御座候、

一 和田早兵衛曾祖父廣瀬六助事ハ佐司ニ居住仕、（義也）惟新

様朝鮮國御渡海之節致御供、於彼地戰死仕候、六助以前之儀ハ相知不申候、六助娘忝人有之、同所衆中津久田六郎左衛門養娘ニ致置、六郎左衛門事田布施ニ罷移、直子無之候故、同所衆中二宮隱岐三男二宮俵左衛門を六郎左衛門掣養子ニ仕、津久田俵左衛門与申候、右腹ニ津久田七郎右衛門致出生候付、六助血筋之訳を以六助家跡養子ニ罷成、廣瀬七郎右衛門与申候、是則祖父ニ而御座候、所横目役相勤候、七郎右衛門嫡子和田戸

右衛門ニ而御座候、早兵衛親和田善兵衛事ハ七郎右衛

門二男ニ而、別立申候、最初廣瀬氏ニ而候處ニ、嫡家

和田次兵衛代和田氏ニ相改候故、和田氏ニ罷成候、

一坂本雲靜祖父坂本周八御兵具所足輕ニ而、御兵具所へ

相附相勤候、周八已前之儀ハ相知不申候、親坂本九郎

左衛門是又御兵具所へ相附相勤候、雲靜事右九郎左衛

門二男ニ而、致剃髮醫道稽古仕候處ニ、田布施衆中東

条運平血筋由緒之訳を以先比養子之願申出、御免被仰

付候、

右之通ニ御座候、外城衆中より血筋由緒無之足輕養

子ニ被仰付候先例多々御座候、且又御城下士之内

家督ニ而罷居候者嫡子江跡相續被仰付、其身ハ與方

永代御暇被下、人家來被仰付候者茂御座候、早兵衛

事家督ニ而御座候得共、嫡子和田善藏江家跡相續被

仰付、其身ハ雲靜家跡養子被仰付被下度旨奉願、品

好方ニ而茂無之候得者、傍例を以此節雲靜家跡養子

和田早兵衛願之通御免被仰付候而茂何ぞ差障り申儀

有御座間敷与奉存候、以上、

寶曆四 戌九月十七日 吉 安 吉調之、

覚

中西文右衛門・中西長兵衛・同政太郎(次九)・柏幾右衛門・

有川二平太

右人数能方ニ付而座席列之次第相調可申出旨被仰渡、

左之通御座候、

一 中西文右衛門家能方ニ付而ハ 中西文右衛門

相知為申儀ニ御座候故、委不

及申上候、 中西長兵衛

一 柏幾右衛門家上古丹後御局御 有川二平太

下向之節御供仕、御國江罷下 中西政次郎

り伊集院江罷居、武田名字名乗為申由申傳候得共、當

座へハ相知不申候、其後長命名字ニ為罷成与相見得申

候、中納言(家八)様御代中西長門(秀長) 御家江被召抱、伊集院

之内谷口村江御高被下、彼方へ罷越候砌、長命氏之子

孫罷在候ニ付、御家古來より之能大夫子孫無別条候

故、右之者取立能大夫之勤被仰付候、幾右衛門高祖父

長命七郎右衛門直子無御座候付、木上新右衛門弟養子

ニ被仰付、五人賦ニ而長命源右衛門与申候、右源右衛

門直子長命源四郎幼少ニ而家督仕候ニ付、伊地知正助

番代被仰付、其後源四郎相果申候、養父長命源右衛門

事ハ折田諸兵衛二男ニ而、右源四郎繼目養子ニ罷成申候、(吉野)淨國院様御代江戸詰之節表寄御小姓相勤、其後

新御番ニ被仰付候、享保二十年巳八月、柏名字拜領被仰付、柏源右衛門与相改申候、先比相果申候、直子無

之、當有川源藏嫡子養子ニ罷成、當幾右衛門ニ而御座候、柏家之儀ハ古来より御家能大夫相勤申候、御祝

御能且又御囃子等之節、中西文右衛門差次ニ柏源右衛門相勤、文右衛門・源右衛門両家ハ御對面所敷舞臺

ニ而拜領物被仰付候、

一中西長兵衛事河内國石河郡富田林之者ニ而、最初小春李之進与申候而舞童ニ而候処ニ、(綱貫)大玄院様御代御

家ニ被召抱、石河甚太夫与改名被仰付、其後中西文右衛門家二男家中西長兵衛跡養子被仰付、右長兵衛御太

刀進上仕居候故、淨國院様御代、當長兵衛事右引次ニ而御太刀進上ニ而御目見仕候、能大夫被仰付、每

度江戸詰仕、十人賦被仰付置候、御祝御能之節、於鏡之間長兵衛・有川設楽兩人拜領物被仰付候、能方ニ付

文右衛門差支候節ハ、長兵衛・設楽源右衛門同前ニ差

引被仰付候、

一有川二平太家曾祖父有川設楽之助大玄院様御代納殿役相勤、祖父有川甚兵衛何之勤方無之候、亡父有川設

楽大玄院様御代與御小姓相勤、淨國院様御代能太夫被仰付、江戸詰之節表寄御小姓相勤、左候而、新御

番被仰付、下掛り流替迄被仰付、十人賦被仰付毎度江戸詰仕候、當二平太事亡父設楽代より能大夫被仰付、

江戸詰之節表寄御小姓相勤、當分新御番被仰付置候、御祝御能之節、於御内證拜領物被仰付候、

右之次第ニ御座候、右五人之者共、屹与御目見被

仰付候節ハ列相替申答ニ御座候得共、能方ニ付而ハ文右衛門家ハ代々小番勤来、代々能方差引為被仰付

儀ニ御座候、柏家ハ御家古来より之能大夫代々勤来申候、文右衛門・幾右衛門家御祝御能之節於敷舞

臺拜領物被仰付来、格別ニ相見得申候、長兵衛事ハ大玄院様御代御祝御能之節於御對面所文右衛門家

差次ニ拜領物為被仰付事茂為有之由候得共、其以後淨國院様御代より於鏡之間拜領物被仰付候、二平太

家茂於鏡之間拜領物被仰付候、右段々之詠を以吟味

本文調被仰渡候、森朴阿弥事ハ當森太郎兵衛弟ニ而御座候、太郎兵衛曾祖父森場左衛門（光久）寬陽院様御代御包丁人頭相勤申候、祖父森場左衛門（實ハ太郎兵衛）大玄（綱貫）院様（吉世）淨國院様御代御包丁人頭相勤、（繼也）隅州様御部屋

仕候得者、能方ニ付而ハ文右衛門・幾右衛門・長兵衛・二平太与座席之次第可被仰付候、政次郎事ハ當分ハ部屋栖ニ而候故、二平太次ニ列可被仰付儀与奉存候、以上、
寶曆四戌七月八日 吉安 吉調之、

本文五拾石高上り之願申出、家筋調被仰渡候、瀬之口甚右衛門六代之祖瀬之口助右衛門飯野衆中ニ而候処ニ、蒲生ヘ為被召移由候得共、年間相知不申候、高祖父瀬之口主税、曾祖父瀬之口喜兵衛右三代勤方段々相糺申候得共、是又相知不申候、祖父瀬之口覚右衛門、親瀬之口小右衛門兩代共ニ噺役相勤候、當甚右衛門事當分噺役相勤居申候、尤代々蒲生衆中別條無御座候、以上、
寶曆四戌八月六日 吉安 吉調之、

栖御方ヘ相勤申候、右場左衛門子森次右衛門料理役相勤致早世候、其子森春達承祖仕、隅州様御側御茶道相勤、是又相果、直子無之候ニ付、太郎兵衛事ハ場左衛門二男ニ而候処ニ、春達跡養子ニ罷成、當分筆者・小役人等之御奉公相勤居申候、朴阿弥事者右太郎兵衛弟ニ而、其身代別立、隅州様御側御茶道相勤、其後御同朋被仰付、先頃相果申候、右次第ニ御座候得ハ、朴阿弥家筋何之差立為申勤方茂無御座候、此段申上候、以上、 戌九月七日 調之、

御格式之内

『○』中紙進上ニ而家督繼目初而之 御目見之者
一 御役被 仰付置候人数家督繼目且又乍御役初而之御禮
申上候節、小番ニ而茂大番ニ而も家督繼目初而之御禮
之次第を不分、御役列之通 御目見可被仰付候、右終
而無役之小番・大番・御赦免士 御目見之次第左之通、
『是より披露之御用人代合可申候』
一 小番筋并一代小番之者家督繼目之御禮
一 大番相勤候者家督繼目之御禮
一 御赦免士家督繼目之御禮

元禄十四年十二月十七日降誕、號長宮、寶永四年四月廿九日親王、同五年二月十六日皇太子、同六年六月廿一日受禪、同七年十一月十七日即位、同八年正月一日御元服、加冠家熙公、理髮輔實公、能冠堯言朝臣、享保廿年三月廿一日讓位、同月廿三日太上天皇尊號、元文二年四月十一日崩御、三十七、奉葬于泉涌寺、

166 百十五代

御諱慶仁
中御門院

御母新崇賢門院賀子、
楠筒隆賀公女、

右之通御役被 仰付候者ハ最初被遊 御覽、其後無役之小番・大番・御赦免之士右之次第ニ 御目見可被仰付之由、名越右膳ニ而被 仰出候、以上、
正徳元年卯九月四日 本文在白木御文書籍之内、

一小番筋初而之御禮 但嫡子成、養子成之御礼可為同列候、
一大番相勤候者初而之御禮 但右同斷、
一御赦免士初而之御禮

往昔高尾野江致居住候者之娘於通与申者淨瑠璃為作初由ニ付、其由緒相札可申出旨被仰渡、左之通ニ御座候、

一雍州府志之中ニ、凡ソ淨瑠璃之詞者源義經之愛妾淨瑠璃御前之事より出る、其詞者織田信長公夫人之侍女小野御通ヲズこれを作ると見得申候事、

一太閤記之中ニ、薩州嶋津内小野撰津守ゆうにやさしかりし息女を持侍りしか、肥前龍造寺か臣瀬川采女正に嫁す、采女正高麗在陣之折節、彼妻あこかれし思ひのほとを物にしるし付侍りしを、便の船にこつてをくりけり、折ふし難風吹来て船はそんし、荷物博多の浦へ寄来るを漁父拾ひ上侍りしか、其中に洩そめやうの紙にて能つ、みたる物なり、ひらいて見れハ、まきゑけたかくよのつねならぬ文箱なり、いやしき者の致披露物にあらずとて、所の吏務へさし出しぬ、吏務請取つ、將軍の御前衆へかくと申上けれハ、則秀吉公へ文箱の符をも切すして上る、右筆山中山城守長俊をして御一覽あるに、女の文にて筆勢いとうつくしく書つ、けたり、女文略す、秀吉公御覽なされ、憐なる事なり、然者龍造

寺かたへ此瀬川采女を帰朝せさせよと御内書有しかハ、
頓而肥前へ参たり、此妻かたしけなき趣を申上ましく思
ひ、采女と共に名護屋へ参り、尼かう藏主を以て其趣
を申上、即夫婦共にめし出され、引出物し給ふて帰し
つかはされたるよし見得申候事、

右小野撰津守与申人御家中ニ有之候儀、御記録所江
相知不申候、朝鮮陣ハ和泉又太郎忠辰出水領知之時
分之事ニ候得者、如何様忠辰之家臣ニ而茂可有之候
哉、是又究而相知不申候、右撰津守小野氏ニ而、小
野御通に取違へ誤為申ニ而可有御座候、相糺候趣如
此御座候、以上、

延享二年丑閏十二月十一日 日 吉 町 川
町調之、自磯就御用調差上候、

覚

祢寝孫左衛門養曾祖父祢寝丹波代、(清雄)先年江戸詰之節
(清香)致上京、平松中納言時量卿江御同姓之訳其外段々御
懇意之儀共有之、進上物仕、御目見・拜領物等被致
候、依之此度孫左衛門事 御着城之御禮使御内々被

仰付置、江戸表勤方被相仕舞候節、致上京當平松宰
相様江御目見等被致度旨段々願被申出趣有之、相糺
可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一 丹波代上京仕、平松様江御目見仕度旨願被申出候訳、
當座相糺申候得共相知不申候、

一 平松様御嫡家西洞院御家御氏祖者

桓武天皇之皇子葛原親王、其嫡子大納言高棟卿御代初
而賜平姓候、自夫代々御相續、十八代之孫西洞院參議
行時卿より九代之孫從二位時慶卿、右御二男平松從二
位時庸卿御代初而御家被相樹、其御子時量卿、其御子
孫當平松時行卿ニ而御座候、

一 祢寝家は茂

桓武天皇之皇子葛原親王之御二男高見王、其子高望王
代初而賜平姓候、自夫代々相續、大相國清盛、其子小
松内大臣重盛、其子三位中将惟盛、其子妙覚代、祿六
其子次郎清重、是則祢寝家之元祖、自夫以来嫡々相續
仕来候段系圖ニ相見得、清重代初而祢寝院領知仕候、
二十三代之孫當孫左衛門ニ而御座候、

一 平松様御家祢寝家与上世御同姓ニ而御座候、元祖清重

以来西洞院御家并平松様御家江由緒有之候哉与祢寢家系譜之内段、相糺申候得共、其訳相知不申候、左候得者、上世御同姓迄与相見得申候、然共時量卿御代二者(光久後室、平松時庸女)陽和院様御由緒茂御座候故、右旁之訳を以丹波御家老職之内致上京、時量卿江願被申上進上物仕、被致御目見候半哉与相考申候、其節祢寢家系圖御覽被成度旨蒙仰、被備御覽、祢寢家號文字誤候ニ付、祢寢之文字ニ御改被下、丸之内上ケ羽蝶平松様御家紋故御免許被成、且又丹波江被下置候御書附之内ニ茂、清盛公嫡流之事重盛ニ而候段被為記置候、段々御丁寧被仰付候段孫左衛門より被申出候趣系譜之内ニ茂相見得、別条無御座候、

右相糺候趣如是御座候、以上、將監殿へ差上置候、

寶曆五年亥二月朔日 吉一人調之、

覚

本文崎山貞栄事相果、直子無之、養子罷成候者無御座候、其身代別立罷在候故、跡職不被召立筋被仰付被下度旨親類共より願申出趣有之、調被仰渡候、崎山貞栄

170

事當崎山休左衛門弟ニ而、寛延四年未四月廿三日、別立被仰付、先比相果申候、休左衛門高祖父崎山八右衛門、曾祖父崎山八郎右衛門、祖父崎山八兵衛右三人共ニ何御奉公相勤候訳相知不申、大番相勤申候、八右衛門以前之儀者相知レ不申候、右八兵衛直子無之候付、當中嶋次郎助親中島四郎右衛門弟養子ニ罷成、崎山角左衛門与申候、大番相勤申候、是則休左衛門・貞栄亡父ニ而御座候、右之次第ニ御座候得者、何ぞ差立為申勤方相見得不申候、尤貞栄大番家筋ニ而御座候、相糺候趣如是御座候、以上、

寶曆五稔亥正月廿三日 一人調、

覚

祢寢孫左衛門事小松家号ニ名字替被仰付候而茂何ぞ(清香)相障儀ハ有之間敷哉、相糺可申出旨被仰渡、左之通御座候、

清盛

安藝守 従一位 太政大臣

170の1

○養和元年辛丑閏二月四日薨、年六十四、法名淨海、

重盛

正二位 左大将 號小松内大臣、

○治承三年己亥八月朔日薨、年四十二、法名淨蓮、

惟盛

正三位 左中將

○元曆元年、潛登紀州高野山薙髮、同三月廿八日、
於同州那知浦入海卒、年二十七、法名淨圓、

高濤

童名六代 律師妙覺

○文治元年乙巳春、西州之合戰平族悉沒海、高濤狼
狽、同年十二月十七日、為北條遠江守時政就囚洛
東葛蒲谷、赴關東之途到江州野路之時、神護寺文
覺上人憐高濤之危難、稱有師弟之親、請免之於時
政、時政曰、非吾之所知、可告鎌倉也、文覺乃訴
于 賴朝卿、竟得免、而高濤為文覺之弟子、時年

十二也、

○同五年薙髮、名妙覺、時年十六也、

○建仁三年癸亥十一月廿七日、於關東田越川被誅戮、
年三十、法名良潮、

清重

次郎 沙彌行西

○傳稱、清重者妙覺在高雄時之子也、因摘其祖清盛・
重盛父子之諱字號清重、

○北條時政者同姓之因也、丁鎌倉 將軍賴家卿之治
世竊告時政曰、壽永元曆文治之合戰一族悉殲、家
系將絶、吾今幸免死、吾有一子、冀欲浴鴻恩貽子
孫、時政乃領之、

○建仁三年癸亥七月三日、賜 賴家卿下文為大隅國
祢寢南侯院延旧領地頭職、時政亦贈書於 薩隅日三
州刺史忠久公叙清重地頭職之事、既而清重初下着
南侯院、以禰寢為家號也、

○貞應二年癸未六月死、法名行西、

清重二十三代之孫當祢寢孫左衛門、

(本文書中ノ野線ハ全テ朱書ナリ)

右之通、嫡々相續仕来候段孫左衛門系圖ニ相見得、先祖清重祢寢院領知仕候而より孫左衛門ニ至り廿三代程在名襴寢之家号ニ而、小松之称號名乗候事無御座候、孫左衛門養曾祖父祢寢丹波代、(清雄)大玄院様御代小松之称号御免被仰付被下度旨願為被申出由候得共、御取揚無御座由候、其節之願書留、又ハ何様之訊ニ而御取揚無御座段茂當座へ相知不申候、然共丹波代元禄九年、先林大学頭様信篤丹波家譜之序文ニも、正三位惟盛之子高清、其子清重与被記置、平松中納言時量卿より丹波江被下置候御書付ニ茂、清盛公嫡流之事重盛ニ而候段被記置候、右通他所江茂孫左衛門家重盛一流之儀相知為申事ニ御座候、然者先祖清重家相立候以来小松之称号名乗候儀者終ニ無之事ニ候得共、右段々之訊を以ハ、此節小松之称号御免被仰付候而茂何ぞ差障り申儀ハ御座有間敷与奉存候、

私共吟味仕候趣如斯御座候、以上、

延享元年子十二月十九日 町川

覺

榎元新兵衛

右百石高上り願申出、家筋調被仰渡候、祖父榎元利助事種子嶋彈正殿家之家臣ニ而御座候処ニ、奥附士ニ被召出候、親榎元新右衛門事表方江被召出、奥御番相勤申候、新兵衛事ハ右新右衛門二男ニ而御座候処ニ別立、御勝手方筆者等相勤、當時代官御役相勤申候、尤大番相勤申筈之家筋ニ而御座候、以上、

享保十四年(西九)子正月十六日 本 町川

171の2

本文之趣調被仰渡相糺申候處ニ、新兵衛亡祖父榎元利助事種子嶋より奥附ニ而被召出、亡父榎元新右衛門代ニ表方江被召出候、新兵衛事二男ニ而、別立被仰付、初而之 御目見相濟、當分代官御役相勤申候通承届申候、然ハ右通表方江為被召出人百石高上り、御規帳ニ相見得不申候得共、御規之内、外城衆中家職之藝能を以鹿兒嶋ニ被仰付候者高上り之儀、諸事外城養子之格

171の1

式可為同断候、乍然月次之 御目見仕程之御役相勤候
 欵、又ハ中通ニ茂被仰付程之者ハ、百石成御免可被成候、
 座付土右同断ニ相見得申候、左候へハ、新兵衛事茂亡
 父代ニ表方へ被召出、當分代官御役を茂相勤、月次之
 御目見ニ罷出候得者、百石高上り御免被成候御格ニ相
 見得申候間、此段申上候、以上、

西正月十二日 高奉行

覚

亡碓山次右衛門直子無御座候ニ付、次右衛門亡父碓山
 八郎右衛門先年大島代官勤ニ而致渡海候節、於彼嶋男
 子出生仕候、右之者次右衛門繼目養子ニ被仰付被下度
 旨親類共より願申出候、依之大嶋人年生何程ニ罷成、
 妻子等茂有之事ニ候哉、右之訳相糺、尤養子御免可被
 仰付哉、相調可申出旨被仰渡、左之通御座候、
 一 日高正右衛門事直子無之候ニ付、亡父日高權左衛門先
 年徳之島代官之内於嶋致出生候男子正右衛門直弟ニ而
 候故、親類共より養子之願申上、寶曆四年戌三月、願
 之通御免被仰付、日高與右衛門与申候、右與右衛門上

國仕候節ハ三拾歳ニ而御座候、男子五人有之候得共嶋
 江召置、妻之儀ハ上國前離別仕候、尤與右衛門其身計
 養子御免被仰付候、

一 日高九太夫養子直弟日高武右衛門直子無之候ニ付、養
 父九太夫先年沖之永良部嶋代官勤之内致出生候男子八
 歳ニ罷成候、右男子武右衛門血筋之訳を以養子之願申
 上、延享二年丑閏十二月、願之通御免被仰付候、

一 八郎右衛門於大嶋致出生候男子年生其外妻子等有無之
 訳相知不申候ニ付、次右衛門親類共方江問届申候処ニ、
 當年三拾七歳、名ハ國郷与申候、男子老人有之、當年
 八歳ニ罷成候、其外子共有之候儀者究而相知不申候、
 尤妻有之候由申出候、

右之通御座候、八郎右衛門於大嶋致出生候島人、次
 右衛門直弟血筋別条無御座候、日高與右衛門事三拾
 歳ニ罷成、血筋之訳を以養子御免被仰付候、日高武
 右衛門養子之儀茂無據血筋を以為被仰付儀ニ御座候、
 右大嶋人當年三拾七歳ニ罷成候得共、次右衛門無據
 血筋之訳ニ御座候、其上外ニ養子ニ罷成候者迺も無
 之由親類共より申出候、然者 御城下士養子血筋之

訳を以ハ御座附士・足輕・人家来より茂養子御免被

仰付候、於嶋出生之者者訳茂相替候得共、右通無據
血筋を以ハ養子御免為被仰付先例も御座候間、願之
通繼日養子御免被仰付候而茂何ぞ差支申儀ハ御座有

間敷与吟味仕候、乍此上御詮議次第奉存候、以上、

寶曆五亥二月十六日

若吉調之、
安

寫

聳養子罷成候者、無據訳ニ而養子違變御免被仰付本家
ニ立婦候節、養父方ニ而 御目見致候而茂、本家ニ而
初而之 御目見不相濟者者、與頭しらへ之上 御目見
願申出候様ニ、正徳三年巳八月、御格式被定置候得共、
本家并養父方ニ而茂一度初而之 御目見相濟候者者、
本家ニ立婦候以後又々初而之 御目見願申出不及候、
此外之儀ハ先格相替候儀無之候、

右之通此節御格被相定候条、表方江致通達、御側方

御勝手方江茂可相達候、以上、

元文三年午十月四日、從左(願姓久周)京殿以通達被仰渡置候

事、

覽

来年頭諸地頭并御役・家ニ付御太刀進上仕御礼申上
候面々、来年頭御禮 (重家) 又三郎様御方江茂納太刀可被

仰付哉之旨調被仰渡、左之通御座候、

一元文二年巳正月、御一門・大身分・一所持・一所持格

并大御目附以上之御役より江戸江御祝儀被申上候連名

帳御渡被成、其節より (宗信) 益之助様御方江茂右人数より

太守様御同様ニ年頭御礼被申上候付、連名之次第調方

被仰渡、延享三年迄ハ 公 太守様 繼豐 御滯府内故、年々

相調差上置候、其節諸地頭・家ニ付而之年頭御礼申上

候面々、右年間帳内段々見合申候得共、當座へ調方被

仰渡候儀見當不申候、

一元文二年巳正月・同四年未正月、御一門并一所持之内

大身分・一所持・一所持格、大御目附以上御役相勤候

面々ハ江戸江御太刀進上仕候故、納太刀ニ不及候、其

外諸地頭・家ニ付而御太刀進上仕候面々ハ 又三郎様

宗信 江納太刀ニ而進上被仰付候由、御規式帳之内ニ相

見得申候、左候而、延享三年寅正月、御一門并大身

分・一所持・一所持格於江戸 公 太守様 繼豐 江御太刀進

上有之候故、爰本ニ而納太刀ニ不及、其外之諸地頭又
八家付而御太刀進上仕候面々者、有来通 御兩殿様吉
公繼江納太刀ニ可仕候、薩州様御方之儀ハ爰許ニ而
豐公宗信

納太刀ニ被仰付候由、是又御規式帳之内ニ相見得申候、
其節ハ 薩州様爰許江被遊御座候ニ付、右通納太刀被
仰付候与相見得申候、

一寬延四年未八月 (重年) 太守様御着城脇年頭御礼被遊御受候

節ハ、一所持より御一門迄若有来通於江戸年頭御礼被
申上候ニ付、諸地頭・家ニ付御太刀被仰付候面々納太
刀被仰付候、

右之通御座候得者、来年頭一所持より御一門迄於江
戸 御兩殿様江御祝儀被申上筈ニ候、諸地頭・御役・

家ニ付御太刀進上仕候面々者、来年 御着城脇年頭
之御礼被遊御受候節 (重家) 又三郎様江爰許ニ而納太刀

ニ而御礼可被仰付儀与相考申候、當十二月 又三郎
様江進上物之儀ニ付被仰渡候御書付之内ニも、年頭

江戸江御祝儀不申上諸地頭より者、御當地ニ而 (重)
守様江御太刀進上仕候節 又三郎様江茂進上物相納

可申由相見得申候、然者 太守様御着城脇諸地頭よ

175の1

り年頭御礼被遊御受候節、被仰渡置候通諸地頭・御
役・家ニ付御太刀進上仕候面々より 又三郎様江茂
於御當地納太刀ニ而御禮可被仰付儀与奉存候、以上、
寶曆四年戌十二月廿七日 本 吉 吉調之、

覚 但本文不及寫候、

本文年頭江戸江御祝儀不申上諸地頭よりハ、御當地ニ
而 (重年) 太守様江御太刀進上仕候節 又三郎様江茂進上物

可相納旨今度被仰渡置候、隅州様御家督内 (宗信)
様江進上物之儀此節同様ニ被仰渡置候、然處ニ享保十

八年・同廿年之年頭、諸地頭又八家ニ付御太刀進上之
面々御礼御請被遊、納太刀ニ被仰付、隅州様御方之

儀者右兩年共ニ御歸國脇右面々納太刀被仰付候付、来
年頭 又三郎様御方之儀、先例之通正月三日納太刀被

仰付筋ニ可有御座候哉、吟味仕何分ニ茂可申出旨被仰
渡候、隅州様御家督内 慈徳院様進上物之儀、太

守様江御太刀進上仕候節 慈徳院様ニ茂進上物可相納
旨被仰渡候付而ハ、享保十八年・同廿年之年頭正月三

日、諸地頭又八家付而御太刀進上之面々、於御當地御

礼御受被遊、納太刀ニ被仰付候儀、右仰渡之趣トハ相違仕候、尤右兩年何様之訊ニ而被相改候儀當座へ相知不申候、隅州様御家督内前條之通被仰渡置、来年頭江戸江御祝儀不申上諸地頭、御當地ニ而 太守様江御太刀進上仕候節 又三郎様へ茂進上物可相納旨此節被仰渡置候付而ハ、先達而相調差上候通、 太守様御帰國脇年頭御礼御受被遊候節、諸地頭・御役・家付而之御太刀進上之面々 又三郎様御方江茂此節仰渡之通納太刀ニ被仰付可然奉存候、諸地頭より 太守様江年頭御礼不申上内 又三郎様江御礼申上候儀、次第前後与相見得申候付、右通相調差上申候、乍此上御吟味次第奉存候、以上、 戌十二月廿九日 本 吉

右之通調書差上置候処ニ、戌十二月廿九日、戸田(盛)五郎(尚香)・基太村助左衛門より御用有之候付罷出候様申来、本田(親方)七右衛門罷出候處ニ、来年頭御規式帳之内、正月三日、諸地頭又ハ家付而御太刀進上仕候面々、又三郎様御方之儀納太刀ニ而進上可仕旨先達而被仰渡置候得共、 又三郎様御方之儀茂 太守様御着城

176

之節何分可申渡旨被仰渡候旨助左衛門より致承知、猶又為念御規式帳致拜見、同席中右之趣致通達、以後為見合記置候事、

本文武井清左衛門直子無之、町田源左衛門附衆中當分阿久根預り鳥山小平次血筋之訊を以養子願申出、調被仰渡、左之通御座候、

一 清左衛門高祖父武井傳右衛門、曾祖父武井惣左衛門而人共ニ勤方相知不申候、惣左衛門直子無之候ニ付、養祖父武井惣兵衛事ハ當蒲生彦八郎曾祖父蒲生庄左衛門二男ニ而養子ニ罷成、新御番ニ而江戸詰仕候、右惣兵衛直子無之候故、亡父武井清左衛門事ハ當塩官六左衛門祖父塩官濱之丞二男ニ而候処ニ養子ニ罷成候、寛(光)陽院様奥御小姓御役相勤申候、當清左衛門事筆者・小役人等之御奉公相勤、當分勤方無御座候、

一 小平次事ハ町田源左衛門家代々附衆中、當分阿久根預りニ而候、小平次曾祖父鳥山主左衛門勤方無之候、祖父鳥山次郎右衛門甕嶋下代役数年相勤候、親鳥山喜右衛門勤方無之、喜右衛門嫡子當小平次事金山垣廻上乘

等相勤申候、

右之通御座候、清左衛門・小平次續之訳ハ、御城

下土木上筑右衛門娘小平次曾祖父鳥山主左衛門江相

嫁、祖父鳥山次郎右衛門致出生候、其子喜右衛門、

其子小平次ニ而候、右筑右衛門嫡子木上新右衛門娘

當清左衛門親武井清左衛門江相嫁、清左衛門致出生

候ニ付、清左衛門・小平次血筋母方ニ從弟違之續別

条無御座候、右血筋之訳を以ハ外城衆中より御城

下士養子被仰付候先例多々御座候間、清左衛門願之

通養子被仰付候而茂何ぞ差支申儀ハ御座有間敷与奉

存候、以上、寶曆五亥三月七日 吉 吉調之、

木上筑右衛門

娘

鳥山主左衛門妻

新右衛門

筑右衛門嫡子

武井清左衛門妻

武井清左衛門

二從弟違之續

鳥山次郎右衛門—鳥山喜右衛門—鳥山小平次

覚

本文調被仰渡、左之通御座候、

一 比志嶋隼人叔父比志嶋比三治事比志島彦一四男ニ而罷

在候節、先年山田源左衛門大番家筋之内養子ニ被仰付、

先比致違変、前比志嶋隼人代三弟ニ男上リ被仰付候、

一 樺山左京三弟(久曾)樺山万八事、先比大番有馬八藏嫡子有馬

勘助直子無之、養子之願申出、願之通御免被仰付候、

一 寄合以上之三男迄ハ、別立候節代々小番被仰付御格式

ニ御座候、

右之通御座候、比三治事別立被仰付候得者、代々小

番被仰付御格ニ御座候、藤田權兵衛大番家筋ニ而御

座候故、養子被仰付候得者品相下り申方ニ御座候、

然共左京三弟万八事有馬勘助養子ニ御免被仰付候先

例茂有之、且又比三治事最初大番家之養子ニ茂為被

仰付置者ニ御座候得者、願之通繼目養子被仰付候而

も何ぞ差支申儀ハ御座有間敷与奉存候、以上、

寶曆五亥三月九日 吉 安 吉調之、

但藤田權兵衛姉有之、養子御免被仰付候ハ、右姉

ニ取合申度由願申出候、種子嶋權左衛門事先頃種

子鳥千九郎繼目養子被仰付、千九郎妹ニ取合相濟

候先例有之候故、何ぞ差障り無之事ニ候、

覚

伊勢亘亡父伊勢兵部（貞起）江先年御作之紋所拜領被仰付候、依之引續亘事茂右紋所相用申度御座候間、被聞召置被下候様ニ被申出候、親江拜領之事ニ候得者弥被相用筈候哉、可申出旨被仰渡候、紋所拜領被仰付候儀ニ付而、當座江被仰渡置候趣者無御座候得共、此以前十文字・牡丹・桐之丸等御紋所拜領被仰付候衆江者、代々被相用候様ニ与被仰渡、御書付ニ茂其趣相見得申候、兵部へ拜領被仰付候節ハ御取次證文ニ而繪形相見得拜領与計有之、代々被相用又ハ一世被相用候儀、分ケ而相知不申候、依之亘方江問届申候処ニ、彼方江茂右之詛書留等無御座候、其節江戸江詰合候与力共咄ニ、代々被用筈与為承与覚候得共、書留等無之候得者、究而者難申出由承届申候、十文字・牡丹・桐之丸御紋所者御代々様御用被遊事ニ御座候故、代々相用候様ニ与分ケ而被仰渡事与相見得申候、此跡御作之紋所拜領被仰付、引續其家代々用來候者多々御座候、然者兵部事茂御作

179

覚

之紋所拜領被仰付、御取次證文等茂有之、彼方記録ニ茂載置申筈ニ御座候得ハ、代々相用候様ニ与之儀ハ相見得不申候得共、亘家嫡子者代々右紋所被相用筋ニ可被仰付儀与乍憚奉存候、乍然御吟味次第奉存候、以上、寶曆五年亥三月十五日 安藤茂貞

『本文平左衛門事段ニ御吟味之上兵右衛門次ニ連名相究り候由承之候事』
松崎平左衛門事御船奉行格ニ而御普請方勤被仰付置候、此節竹原兵右衛門御船奉行被仰付候、連名之次第何様可有之哉、致吟味可申出旨被仰渡候、格与申儀ニ付而者、先年相良大藏大御目附格ニ被仰付置候、大御目附被仰付候人ハ家格寄合ニ被仰付御格ニ而御座候、然者大藏事右通格与被仰付候而茂大御目附同前之御格式ニ候哉之旨先役共より得御差圖候処ニ、大藏事家督之内右之通被仰付候ニ付而ハ、平岡八郎太夫次（之助）ニ被仰付筈候、大御目附格与申候者、御側江相勤候訳を以格与被仰出事候、何ぞ大御目附ニ相替儀ハ無之候、相良源太夫事寄合ニ而平岡八郎太夫次ニ被仰付候間、向後右之通可相心得旨、享保七年寅十二月、被仰渡置候、右を

以ハ格茂同前之事与相見得申候、然共本役与連名有之節ハ其差別可有之事ニ奉存候、先年有馬源五右衛門・東郷主左衛門兩人共ニ御勘定方小頭格ニ而御勝手方勤被仰付置候節、後役茂有之候得共、兩人共ニ御目見又ハ連名之次第本役より末ニ仕候由承届申候、然者先例之通、平左衛門儀兵左衛門次ニ連名可被仰付儀与奉存候、以上、

年号右同断、亥三月十六日 吉
安調之、

覚

島津登二弟掛橋五百右衛門事此節進上物迄被仰付被下度旨願被申出、調被仰渡、左之通御座候、

一 五百右衛門事登二弟ニ而御座候處ニ、幼少より川上家養子ニ罷成、於川上家初而之 御目見相濟申候、本家又ハ養父方ニ而一度初而之 御目見被仰付候者ハ、又ニ初而之 御目見ハ不被仰付御格ニ御座候間、初而之御目見ハ不被仰付筈ニ御座候、左候得者、登家二男御目見之先例無御座候処ニ、偶二弟五百右衛門罷在、進上物物迄不仕候ハ、以後登家二男進上物中絶之格

ニ可罷成与存申候、先年高崎惣右衛門二弟高崎七右衛門事(頼重)中神與五左衛門賀養子被仰付、三弟高崎五郎右衛門事二弟成之願申上、二弟成御免被仰付候、小番以下之者者男上り等之御礼ハ不被仰付御格ニ御座候、然共惣右衛門家二男迄ハ御太刀進上被仰付事候処ニ、五郎右衛門二弟ニ男上り被仰付、御太刀進上不仕候得者中絶ニ罷成候故、享保十三年申七月、於江戸納太刀被仰付候、五百右衛門事為似寄事御座候得者、此節進上物不被仰付候ハ、以後登家二男進上物中絶ニ罷成、且又五百右衛門先様別立候節、進上物等相當ニ不被仰付筈ニ御座候、左様ニ御座候而者迷惑ニ被存筈ニ御座候間、五郎右衛門傍例を以、五百右衛門事登家二男相當之進上物迄を可被仰付儀与吟味仕候、

一 登家嫡子者御太刀・二種一荷進上被仕来候得共、二男進上物為仕先例無御座候、依之吟味仕候者、先年島津(久考)仁十郎殿弟土岐太郎次郎初而之 御目見被願出候節、仁十郎殿家嫡子之儀ハ御太刀・三種二荷進上被仰付候、二男之儀近代 御目見仕候儀無御座候付、進上物之先例相知不申候、然共一所持之家嫡子御太刀・三種二荷

進上仕候得者、二男者御太刀・二種一荷進上仕儀御座候、仁十郎殿事茂一所持之家筋ニ御座候間、傍例を以太郎次郎事御太刀・二種一荷進上被仰付度旨、於當座致吟味申出候処ニ、太郎次郎事御太刀進上被仰付候、且又川田伊織國福弟川田次右衛門・二階堂舍人弟二階堂十郎兵衛初而之 御目見被願出候處ニ、右両家嫡子ハ代々御太刀・二種一荷進上被仕来候得共、二男 御目見進上物仕候先例無御座候付、次右衛門・十郎兵衛事一所持并寄合之二男ニ而候得共、弓進上被仰付候、右三家之傍例を以ハ登家二男弓進上可被仰付儀与奉存候、以上、年号右同断、亥三月十七日 安吉

覺

喜入主馬久福二弟喜入幸之丞事此節為別立申度御座候、
 資格之儀ハ御見合を以被仰付被下度旨願被申出、調被仰渡、左之通ニ御座候、
 一 御格式之内、與頭以上之二男分地別立被仰付候節ハ、與頭之格ニ者依分地之程又者依人品可被仰付候、其外ハ小番可被仰付由、寶永七年、被 仰出置候、

一 寄合以上之二男三男ハ代々小番、四男ハ大番与相心得、
 資格之調可致旨、享保三年七月、名越恒渡右膳を以被 仰出置候、

一 島津出雲家白置家二男嶋津清太夫高式百八拾石餘分地ニ而別立、寄合并資格被仰付、嶋津大藏家二男三崎文太夫高久近百五拾石分地ニ而別立、寄合并資格被仰付候、

一 嶋津故兵庫殿久季、加治木家二男島津助左衛門高千石分地ニ而別立、寄合資格被仰付、三男村橋左膳高五百石分地ニ而別立、寄合并資格被仰付候、

一 樺山主計代二弟樺山九郎次郎事高三拾石餘相求、先キ々者其身才覺又ハ少々成共高相求、取立候様ニ仕度旨被申出候処ニ、代々小番資格ニ別立被仰付候、

一 嶋津筑後二弟北郷權八事高千石分地ニ而別立、寄合資格被仰付候、

右之通ニ御座候、故兵庫殿・出雲・大藏右三家ハ御二男家又ハ準御二男家ニ而、格別之事ニ御座候故、
 二男寄合又ハ寄合并、三男寄合并資格被仰付候、主計家御五男家ニ而、為差立事ニ御座候得共、九郎次郎事右通代々小番資格ニ被仰付候、筑後家ハ御六男

家ニ而候得共大身分ニ而、分地高千石、權八事別立、寄合家格為被仰付与相見得申候、右之外一所持之内御直別并又御庶流、又者他家ニ男別立、代々小番家格被仰付候先例多々御座候、然者喜人家御七男家之儀ニ候得者、樺山家之傍例を以、幸之丞事代々小番家格ニ被仰付外御座有間敷与吟味仕候、乍然與頭格ニ者依分地之程又ハ依人品可被仰付旨御格式被 仰出置候得者、此儀ニ付而者何分究而難申上御座候条、御詮議次第奉存候、以上、

年号右同断亥三月廿日 吉調之、
安

覚

格与申儀ニ付 仰出

島津圖書

右一ヶ條、格与申事無之候故不写之、

相良大藏(長賢)

右家督之内大御目附格ニ被 仰出候、大御目附以上之御役被 仰付候者ハ、寄合并又ハ其外之家ニ而茂寄合可被 仰付旨 總州(古豊)様御家督之内御格式被 仰出置候、

然者大藏大御目附格ニ被 仰付置候、右之通格与被

仰付候而茂、大御目附前之御格式ニ候哉之旨、別紙を以御記録奉行[△]より[△]得 御差圖候趣達 貴聞候

処ニ、大藏事家督之内右之通被 仰付候ニ付而ハ、平

岡八郎(之品)太夫次ニ被 仰付筈候、大御目附格与申候者、

御側江相勤候訳を以格与被 仰出事候、何ぞ大御目附

ニ相替儀ハ無之候、右通格与申儀紛敷候故、此節二階

堂舍人事御側ニ相勤候得共、大御目附ニ被 仰付格与

申事被相除候、右之次第ニ候得ハ、相良源太夫事寄合

ニ而平岡八郎太夫次ニ被 仰付候間、向後右之通可相

心得候、

右両條達 貴聞候処、右之通被 仰出候間、間違無之

様ニ可仕置候、以上、

(名越恒渡)
右膳

(○ナシ) 十二月廿八日
(享保七年寅) 将監(島津久當)

但本文白木御文書一箱箱ニ有、

(本文書ハ一旧記雜録追録三二一五二八号文書ノ抄ナルベシ)

覺

一 光久公御代慶安二丑年、中山王尚質即位ニ付具志川按司（朝）鹿兒嶋江上着、同年七月、具志川按司鹿兒嶋被召立江戸上着、光久公御事同年正月廿六日御發駕被遊、先達而、御參府被遊、琉使被召列御登、城、御目見相濟候、左候而、翌年三年寅四月廿八日御暇御給、五月廿二日、江戸、御發駕、六月晦日、御着城、同四年卯二月廿日、鹿兒嶋、御發駕、四月五日、御參府被遊候処ニ、同年十二月廿五日、少將御任官被遊候、中山王繼目之御禮使被召列、其後、御參府之節ニ而御座候、一同御代寛文十一年亥五月、中山王尚貞繼目之御礼使者（朝興）金武按司被召連鹿兒嶋、御發駕、同年七月廿一日、御參府、同月廿八日、琉使被召連御登、城、御目見相濟申候、左候而、同十二年子四月十二日御暇御給、四月十八日、江戸、御發駕、六月十四日、御着城被遊候、同十三年（則延寶元年）丑四月十六日、鹿兒嶋、御發駕、六月廿八日、御參府、同年十二月廿八日、從四位上中將ニ御叙任被遊候、中山王繼目之使者被召列、其後、御參府之節ニ而御座候、

右之通御座候、此外、光久公御代寛永廿一年、家綱公御誕生且又中山王尚賢繼目ニ付、琉使被召連候、同御代承應二年、家綱公御代替付琉使被召列候、同御代天和二年、綱吉公御代替付、綱貴公中山王使者被召列候儀御座候、三度共ニ其涯御官位御昇進之儀無御座候、

一 綱貴公元禄十年丑閏二月廿七日鹿兒嶋、御發駕、四月九日、御參府被遊、同年七月朔日、東叡山本堂御手傳被、仰出、同十一年寅八月二日、上野御手傳相濟候付綱貴公御登、城被遊、為御褒美從、綱吉公御手自長光御腰物御拜領被遊、同九月五日、御暇御給被遊候、例年四月御交替ニ而御座候得共、上野御手傳故九月御暇御給ニ而御座候、左候而、同年九月晦日、江戸、御發駕、十一月十五日、御着城被遊候、同年、御參勤之時節御窺被遊候處ニ、十二月晦日、御老中小笠原佐渡（長重）守様以御奉書、至来年三月重而可被相伺旨被仰渡候、同十二年、又々御伺有之候処ニ、三月十八日、小笠原佐渡守様以御奉書、來年三月中可被遊、御參府旨被仰渡候ニ付、同十三年辰正月十二日、鹿兒嶋、御發駕、

三月五日 御参府被遊候、

右之通御譜中相見得申候、例年之通 御参勤被遊候
得者、元禄十二年 御参勤之筈御座候得共、上野御
手傳御勤被遊候故被差延候哉与、其節取沙汰有之候由、
御上下之儀書記候帳内ニ相見得申候、

右者 光久公御代琉使被召列候涯御任官有之候儀、
且又 綱貴公御代上野御手傳御勤以後御月延等有
之候哉、相糺可申出旨被仰渡相糺候処ニ、右之通
相見得申候間、書付差上申候、以上、

寶曆四年戌十一月十四日 本 安

右張紙

慶安四年卯十二月廿六日 綱久公御登 城、 御元服
被遊、御諱字御拜領、 松平薩摩守綱久公与奉称、從
四位下侍從御叙任ニ而御座候、

右を以相考申候得者、 綱久公侍從ニ御任官被遊
候故、 光久公少将御任官被遊候哉与奉存候、為
御見合是又書付差上申候、以上、
戌十一月十四日 御記録奉行

覚

中西長兵衛隱居之願申出、嫡子中西八角江家督之願
申上度存候得共、八角事十三年眼病氣ニ有之、往
々御奉公相勤躰ニ無御座候故、家督相續為仕候儀も
難叶候、依之二男中西政次郎江家督相續為仕度旨段
々申出趣有之、吟味仕可申出旨被仰渡、左之通ニ御
座候、

一嫡子片輪ニ有之 御目通ニ茂難罷出者者、進上物相納
家督相續仕、輕御奉公等相勤候者茂御座候、且又嫡子
無據訊有之、依願者二男家督被仰付候者茂御座候、

一御目見調ニ付、享保二十年卯八月被 仰出置候御書附
之内、外城士又ハ座附之者ニ而候処ニ、親何之藝故
御城下士ニ被仰付、其子茂親同前之藝仕候、且又親ハ
何之藝故被 召出候、其子者何之藝茂不仕候、たとへ
ハ外城士ニ而致醫師居候処ニ御側醫師ニ被仰付、親同
前致醫師候ハ、御目見可被仰付候、親ハ御側醫師被
仰付候得共、其子醫師茂不致、何之藝も不致候ハ、
吟味之上 御目見可被仰付候、乍然嫡子ハ訊有之親之
藝難成ニ付而、二男三男ニ而茂親同前之儀をいたし候

得ハ、親之致候藝をわすれざる事候故、此儀ハ格別ニ候、最前何之訊ニ而被 召出候本之次第を委可致吟味旨相見得申候、

右之次第御座候、當長兵衛事元來河内國石川庄富田林之者ニ而御座候處ニ、摂州大坂ニ罷居候能太夫小春左衛門養子ニ罷成、小春空之進与申候舞童ニ而御座候、(綱貫)大玄院様御代被召抱、石川甚太夫与改名被仰付候、左候而、元禄四年、中西文右衛門家庶流中西長兵衛跡目養子被仰付、其以後御能方仕手役被仰付置候、近年極老ニ罷成候故、仕手役之儀ニ男政次郎江被仰付、御切米迄引續政次郎江被下置候、嫡子八角事眼病氣ニ有之、左之目相禿、右之目茂眼力薄、近年身弱御座候故、家督相續難為仕由申出候、嫡子之儀者片輪ニ有之 御目通ニも難罷出者ニ而茂家督相續被 仰付事ニ御座候、八角事幼少之時分より御能方多年相勤、近年左之目相禿身弱罷成、御能方勤方ハ難相勤候故不被仰付候、然共盲目与ハ相替候、尤身弱御座候而も世間徘徊等茂仕躰ニ御座候由承及申候、左様ニ御座候得者、御番等ハ相勤申答ニ御座

185

候ニ付、適嫡子ニ而御座候處ニ、右病躰迄ニ而ハ家督相續可被仰付者と相見得申候、且又長兵衛事最初能之藝を以為被召抱者ニ御座候ニ付、能方勤を第一ニ存居、能方勤不罷成候故、二男政次郎江家督相續之願申出候哉与存申候、長兵衛事能藝を以被 召出候得共、其後先長兵衛家跡養子ニ被仰付候得者、藝能ニ而為被召出迄之者と者相替申候、其上政次郎仕手役相勤申候得者、親之藝を仕來申候ニ付、御目見調ニ付仰渡之御書附之内ニ茂、嫡子ハ誤有之親之藝難成候ニ付、二男三男ニ而も親同前之儀をいたし候へハ、親之致候藝をわすれざる事候故、此儀ハ格別之由相見得申候、家督相續之儀 御目見与者相替候得共、右ニ準候得者右御書附之趣ニ茂相當仕申候、然ハ長兵衛願之通ニ者被仰付間敷儀与奉存候、以上、
寶曆五亥六月朔日 吉 調之、
安

松元壽閑

本文家筋調被仰渡候、松元壽閑事元來下町人ニ而候處ニ、寛保元年酉四月、醫道を以一代蒲生衆中ニ御赦免被仰付、

延享元年子五月、代々蒲生衆中被仰付候、寛延元年辰正月、一代 御城下士被仰付、御側醫師被仰付候、寶曆三年酉八月、代々御城士被仰付、當分 隅州様御方勤方被仰付置候、尤大番相勤申答之家筋ニ而御座候、以上、

亥八月十八日 吉調之、

覺

中西長兵衛

女子

母萩原勘兵衛女 伊東源右衛門妻

八角

母同前、妻者宮内勘右衛門女、當分今和泉家中ニ而先役

人詫摩勘右衛門事隠居 幽安、嫡子詫摩勘兵衛當分 役人、弟詫摩甚五

郎當分留、守居役

荻谷藏右衛門

弟中西政次郎政次郎兄河内仙兵衛智養子 河内織右衛門、母皆共森八右衛門女

右長兵衛前妻

生駒嘉右衛門

妻

最初嫁中西長兵衛、生一女一男、後離別、再嘉右衛門、(嫁脱之) 先年相果候、

女子

嘉右衛門養子生駒七右衛門妻

右之通續之次第寶曆五年亥五月廿六日相札記置也、

寫 寫

江戸居付二男三男迄茂御番入為被仰付事候得共、此節

より嫡子迄御番入被仰付候、二男以下者御番入被仰付

間敷候、其身為物馴一身格之御奉公、且又他所江可罷

出与存候者ハ勝手次第可願出候、當分御番入被仰付置

候者者其通被仰付置候、二男以下藝能有之者、又者

思召を以可被召出儀者格別候、

右之通被 仰出候段江戸より申来候間、此旨可承御

役々江可申聞置候、

五月

(鳥津久海) 主殿

右之通寶曆五年亥五月十二日被仰渡候事、

鎌田小八左衛門

本文家筋調被仰渡候、小八左衛門祖父鎌田治部左衛門事ハ當鎌田筑右衛門先祖鎌田治部左衛門二男ニ而、初而別立申候、元久寬陽院様御代御腰物方役相勤、其後奥大番相勤申候、亡父鎌田藤左衛門事茂 寬陽院様御側御小姓御役相勤、其後 (綱貫)大玄院様與御小姓御役相勤候、其以後座横目・儀御普請方檢者等相勤申候、當小八左衛門事勤方無之、當分御番相勤居申候、尤代々 御城下士ニ而、大番家筋ニ而御座候、以上、亥五月五日安吉調之、但自分覺、小八左衛門家ハ當鎌田主左衛門家之庶流

ニ而候、高祖父鎌田筑後、曾祖父鎌田治部左衛門一兩代勤方不相知候、右治部左衛門嫡子ハ鎌田市兵衛ニ而、當鎌田筑右衛門家ニ而御座候、二男鎌田治部左衛門是則小八左衛門祖父ニ而、初而別立申候也、

御奉書寫

今度同氏薩摩守願之通、遺領無相違嫡子又三郎被 (重年)仰付候、然処又三郎事依為幼少、領分并琉球國仕置等之

儀、諸事先格相違無之様、其方心を附取計候様可仕旨

上意候、可被存其趣候、恐々謹言、

『寶曆五年乙亥』

七月廿七日

西尾隱岐守 (忠尚)

松平右近将監 (武元) 在判

堀田相模守 (正彦) 在判

松平大隅守殿 (継豊)

(本文書ハ「旧記雜錄追録五」一六四「号文書卜同一文書ナルベシ」)

右御奉書尅通亥八月廿二日御到来、伊地知嘉右衛門歸便御馬廻横山新右衛門被相附被差下之、

覺

(徳川家継)有章院様御代武家諸法度被 仰出候哉、有無之訳相

糺可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一 御家譜并諸書附等段々相糺申候得共、有章院様御代

被仰出候武家法度見當り不申候、

一 自 權現様至 (徳川吉宗)有徳院様御代、御代替之節者 御代

々様より武家諸法度被 仰出置候、有章院様御代計

者被 仰出候儀武家殿制録又ハ柳營秘鑑之内ニも相見

得不申候、

一 御代替之節、御領國 御判物御頂戴被遊来候得共、
有章院様御一代者 御判物御頂戴無御座候、尤何様之
儀ニ而御頂戴無之訳ハ相知不申候、

右之通御座候、然者 有章院様御事ハ御年五歳ニ而
將軍 宜下、八歳ニ而薨御被遊候、御幼年故 御判
物無之状与乍憚奉存候、武家嚴制録・柳營秘鑑ニも、

御代々様之内 有章院様御代計武家諸法度 仰出相
見得不申候得者、是又 御幼君様故、右通ニ而為有
御座哉与相考申候、此段申上候、以上、

寶曆五年亥九月廿一日 山吉安
吉調之、

覚

一 寛陽院様御葬禮之節御代之御太刀持

本田次郎左衛門

一 浄國院様右同断、

本田新次郎

一 慈徳院様右同断、

右同人

一 大玄院様御葬禮之節御名代先嶋津玄蕃殿、御名代之節
者御代之御太刀持相勤候儀帳内ニ不相見得由、本田作

左衛門より被申出置候、右次第故、此節 圓徳院様御
葬禮之節、御位牌御名代島津備中殿被奉守候故、御代
之御太刀持無御座候事、

但御亡者之御太刀持ハ御代々様有之、是ハ本田
家庶流本田六右衛門家より相勤来候、右差支
候節ハ、庶流之内より吟味之上相勤候也、

覚

大玄院様御葬禮之節、御名代先々嶋津玄蕃殿被為勤
候、其節御代之御太刀本田嫡家江為御持被成候儀、

寺社方帳内ニ不相見得候、此節之儀何様可被仰付哉、
致吟味可申上旨被仰渡、左之通御座候、

一 寛陽院様御葬禮之節 大玄院様御在國ニ而 御自身ニ

御位牌被遊御守候ニ付、御代之御太刀持本田嫡家江被
仰付候、

一 大玄院様御葬禮之節者 浄國院様江戸江被遊御座、為
御名代 御位牌先々島津玄蕃殿被為奉守候ニ付、御名
代ニ而候故、御代之御太刀持者相欠申候与相見得申候、
一 浄國院様御葬禮之節ハ 慈徳院様御在國ニ而 御自身

御位牌被遊御守候故、御代之御太刀持本田嫡家江被仰
付候、

一 慈徳院様御葬禮之節、 圓徳院様御事 慈徳院様御存

生之内御假養子被仰上置候故を以、御家督御相續之儀

茂御願被仰上、未 公義御免無之迄ニ而御座候、然者

大玄院様御葬禮之節、御名代ニ而 御位牌被為奉守候

与者訳茂相替、御名代与申筋ニ而者無之与相考申候、

右之次第ニ御座候へハ、御代之御太刀持無之候而者、

御家御代々様御葬送之旧式相欠申候段、當座より吟味

仕申上候処ニ、御代之御太刀持本田嫡家江被仰付候、

右之通ニ御座候得ハ、此度者 (重要) 又三郎様江戸へ被遊

御座候故、 圓徳院様御葬禮之節 御位牌御名代ニ

而可被為奉守与乍憚相考申候、左候得者、 大玄院

様御葬禮之節、玄蕃殿御名代被為相勤候節之通、御

代之御太刀持者無之筈与吟味仕候、此段申上候、以

上、 寶曆五年亥七月廿五日 安吉 吉調之、

(表紙 三)



舊史館調

一 御格式外城養子大友家并諸家調元服 御光儀等之調

目録

一 御記録奉行江 御禮席順之申渡書

一 元服人并理髮人支度吟味書

一 御内證元服ニ付仰渡

一 元服人進上物吟味書

一 元服席之吟味書

- 一 嶋津中太兵衛之事
- 一 平岡内匠之事
- 一 種子島藏人より 御光儀之願ニ付調書
- 一 嶋津大學之事
- 一 於貞殿御忌掛之方々取調之事
- 一 北郷民部事御禮使被仰付ニ付吟味書
- 一 阿多源藏家筋書
- 一 長野筑右衛門 御城下士願出ニ付調書
- 一 深栖市兵衛養子願ニ付調書
- 一 御城下士養子ニ付存寄申訳書
- 一 池端善藏養子之儀ニ付調書
- 一 御城下士申目下知調書
- 一 嶋津出雲繼目ニ付 御光儀願調書
- 一 川俣作圓還俗願出ニ付調書
- 一 又七郎太刀御禮着座調書
- 一 満田與右衛門養子願出ニ付調書
- 一 川上弥八郎式百石高上り之願申出調書
- 一 森生眼高持成願申出調書
- 一 上原嘉右衛門高持成願申出調書
- 一 渡邊新右衛門願出ニ付調書
- 一 池端善藏養子願に準せしもの調書
- 一 福嶋玄^佐作高持成之願申出調書
- 一 於供殿事縁與ニ付格合調書
- 一 愛甲玄昌高持成之願申出調書
- 一 隈元太一左衛門高上り願申出調書
- 一 太守様御着城年頭御規式之調書
- 一 琉球王繼目并卒去年月日書
- 一 大御所様御院號御記録奉行江達書
- 一 上井五郎左衛門取次助右衛門辞職御免御禮之事
- 一 本田與兵衛嫡子^{マコ}二男進上物調書
- 一 桑波田藤右衛門家筋調書
- 一 本田孫右衛門三男進上物調書
- 一 高橋七郎右衛門座席連名調書
- 一 御役之御礼地頭職御禮且進上物調書
- 一 鎌田九郎別立之願申出調書
- 一 御目見之進上物調書
- 一 山元平藏養子願申出調書
- 一 平嶋甚左衛門由緒調書

- 一本田甚六進上物吟味書
 - 一 太刀持參之願ニ付伺書
 - 一 外川〔都脱之〕萬兵衛養子願ニ付調書
 - 一 川添市之進之事
 - 一 川口治右衛門養子願ニ付調書
 - 一 伊集院伊膳家來兒玉幸兵衛家筋之事
 - 一 藤原氏八田系圖
 - 一 大玄院様 御前様之事
 - 一本田甚六進上物調書
 - 一 白井名字養子願ニ付調書
 - 一本田〔作力〕佐左衛門子家筋連名調書
 - 一 宮内式部左衛門家断絶養子願ニ付調書
 - 一 島津權太郎繼目御禮之儀申出ニ付調書
 - 一 種子島八郎次繼目御禮之儀ニ付吟味伺指令
 - 一 相良新右衛門・小笠原彦之進元服御禮之事
 - 一 河野壽市郎元服 御目見申上候事
 - 一 伊集院弥五兵衛進上物吟味書
 - 一 三嶋利兵衛家由緒調書
 - 一 三嶋利兵衛養子願ニ付調書
-
- 一 山田一郎兵衛 御目見願申出進上物調書
 - 一 島津圖書殿御座席之事
 - 一 御家老職等 御盃頂戴之事
 - 一 公儀ニ相係り候儀若年寄并と唱候様申渡之事
 - 一 池田九郎右衛門養子願ニ付調書
 - 一 高持成之願申出家筋調書
 - 一 筑後家御直元服被仰付ニ付進上物之事
 - 一 島津千次郎事 御直元服願進上物之事
 - 一 御料理被下ニ付島津玄蕃殿座席吟味之事
 - 一 中村善之進高持成申出調書
 - 一 坂元恕兵衛家筋調書
 - 一本田仲右衛門跡養子願ニ付調書
 - 一 岩本瑞哲高持成願ニ付調書
 - 一 兒玉市右衛門養子願ニ付調書
 - 一 入江十郎左衛門家由緒調書
 - 一 寬陽院様 日光山江御參詣ニ付調書
 - 一 大友因幡守 御家ニ御由緒之有之調書
 - 一 五社江御參詣之儀ニ付本田新次郎調上申書
 - 一家來三人宛格式之事

此節御内證元服被仰付筥候付、理髮之人并元服人支度致吟味可申出旨被仰渡候、先年於 磯御家老座御内證

覚

右寛延四年未八月九日、於表御用人座通達ニ而被仰渡、
(吉田清純)
用右衛門書寫之、通達帳ニ茂留置之候、

八月

(島津久馮)
主殿

右者御書院御礼席當分ハ御一門を初段ニ席被相下御礼有之事候得共、向後ハ以前之席ニ而御礼申上候様被仰付候、此旨承知候様可申渡候、

餘御役名略之、

御記録奉行

- 一 大慈寺當住 公文頂戴之儀願ニ付調書
- 一 福ヶ追諏訪大明神江御寄進之事
- 一 山鹿越右衛門養子願ニ付調書
- 一 大嶋十郎太夫養子願ニ付調書
- 一 森山長元高上り願ニ付吟味之事

覚

元服被仰付候節、御側御用人理髮被仰付候、此節茂先例之通御側御用人理髮可被仰付儀与奉存候、且又元服人支度半上下着用可仕旨先年被仰渡置候、衣服之儀者何様共相見得不申候得共、元服人家格之進上物仕御礼申上候節ハ、鬘斗目長上下着用被致筥候得者、元服之節鬘斗目半上下着用可被仰付儀与吟味仕候、以上、

寛延四年未八月九日 山吉調、

御内證元服之次第於 御本丸者何様ニ可被仰付候哉、吟味之趣可申出旨被仰渡、左之通御座候、
一元文二年巳七月、嶋津權左衛門(彌子孫彌郎脱カ)・相良源太夫御内證元服被仰付候節、主計殿(榊山久初)より當座へ被仰渡候御書付之内ニ相見得申候者、御内證元服者元服之御礼之次ニ可書載、御家老加冠ニ而、元服席之儀者其節之 御意次第可被仰付候、不及進上物、御内ニ而 御目見、元服人支度半上下、右之通記置候様ニ被仰渡置候、
一同三年午十二月、二階堂源太夫(行端)・名越左源太事御内證元服被仰付候節者、於 磯御家老座隼人殿加冠ニ而御

座候、

右兩条を以吟味仕候処ニ、右御書付之通不及進上物、御内ニ而御目見被仰付候得者、家格之進上物相欠申候、左候而、又々表江御出座之節家格之進上物被仰付御目見被仰付候時者、御目見二重ニ罷成候、磯之儀者御隱居様ニ而被成御座、元服人茂御心易被召仕候者之子共ニ候故、右之通御内ニ而御目見為被仰付与相考申候、然者於御本丸者元服人御家老座へ被召出、御家老衆加冠相濟候一通ニ而、御内ニ而御目見無之、當日ニ而茂他日ニ而茂表へ御出座之節家格之進上物差上、初而御目見被仰付候ハ、何ぞ差支申儀ハ御座有間敷与私共吟味仕候、乍然御吟味次第奉存候、以上、寛延二年巳六月四日 川安

覚

本文小笠原長袞婆御内證元服於被仰付者、座席之儀於何方可致相應哉、吟味仕可申出旨被仰渡候、此以前於磯御屋敷御内證元服被仰付候面々ハ磯御家老座ニ而被仰付候、其節被仰出候者、元服席之儀者其節之御意

次第可被仰付由、御書付ニ相見得申候、御本丸御家老座之儀者、磯御家老座ニ準シ候得者餘り屹与立為申儀ニ御座候、然者御書付之内ニ茂席之儀者其節之御意次第与有之候得者、いつニ而も御出座之節前以於梅之間元服被仰付、左候而、家格之進上物ニ而御目見被仰付候ハ、可然儀与私共吟味仕候、以上、

寛延四年未七月廿三日 川本

覚

小林中太兵衛

右、大御目附御役被仰付候ハ、家格并御役座席之次第何れ之場ニ可被仰付候哉之旨、於江戸本田七右衛門(親方)江被仰付、調書両通差上候、猶又私共吟味仕可申出旨被仰渡候付、左之通御座候、
一 中太兵衛事嶋津中務久輝三男ニ而御座候処ニ、(政)淨國(吉貫)院様御代寶永二年酉九月被仰出候者、嶋津中務三男嶋津中太兵衛事中務三男之格ニ無御構、御見合を以輕キ場ニ而茂被召仕、名字替を茂被仰付被下度旨依願、此節被召出、御側御小姓ニ被仰付、家号・實名被下置

候、其段ハ先達而被仰出候、右之次第ニ候故、中太兵

衛事向後中務三男之格ニ者不被仰付候、然共此度中太

兵衛御礼申上候節ハ被對中務家筋、願之通御太刀進上

被仰付候、右之訳致承知置候様中務江可申達由 御意

之趣御書付之内ニ相見得申候、

一平岡内匠事(之品)嶋津内蔵弟ニ而御座候処、享保五年子五月、

大御目附被仰付候節被 仰出候者、平岡八郎(之品)太夫事ハ

嶋津内蔵弟与存候而ハ家格之訳茂有之候得共、八郎太

夫事者平岡之家号新家ニ為被仰付事候故、由緒・家格

等茂無之候ニ付、此節新規ニ寄合被仰付候条、寄合

之場ニ而者名越(恒渡)右膳次書載、御役ニ付而ハ嶋津登次(久世)ニ

相記可申旨被 仰出、其段當座へ被仰渡置候、

右之通ニ御座候得者、中太兵衛家内匠家同様ニ為被

仰付儀ニ御座候、内匠事名越右膳次ニ家格連名被仰

付候、右之訳を以ハ、中太兵衛事名越左源太次、北

條十左衛門頭ニ家格之連名被仰付、御役ニ付而者新

納内蔵次(久品)、河野八郎左衛門頭ニ座席可被仰付儀与私

共吟味仕候、以上、 寛延三年午十二月廿四日

川安

覚

種子嶋藏人(久老)より、此節 御家督初而被遊 御下國候

付、乍憚私宅江 御光儀御膳進上願被申出、右ニ付

而者御太刀・御馬代進上仕度旨是又被申出、調被仰

渡、左之通御座候、

一御代々様御家督初而被遊 御下國候節、御一門・大身

分・御家老其外御身近御方様へ被遊 御光儀候儀、御

先格与相見得申候得共、誰之之家ニ者可被遊 御光儀

与被相究候御格者相見得不申候、 中納言様(家久) 寛陽院(光久)

様 大玄院様御代迄者萬石以上為差立方々江被遊 御

光儀候与相見得候、 浄國院様御代ニ罷成候而者嶋津

大学家相立、嶋津出雲家格之通ニ被相準、 隅州様被

遊 御光儀候儀茂有之、夫より以来家相立候御一門茂

御座候得者、其同格ニ不被遊 御光儀候而不叶儀与乍

憚奉存候、

一藏人家之儀、先祖代種子・屋久・永良部三嶋相領、中

古以来種子嶋一嶋領来、萬石以下ニ而候處ニ、高祖父

種子嶋左近代(忠時)萬石以上ニ被召成候、

一石家之儀、此以前八年頭御太刀進上茂、正月四日一家

被召出御取持為有之儀茂御座候、左候而、當分一列ニ御太刀進上被仰付儀ニ御座候、淨國院様御代正徳元年、藏人祖父種子嶋彈正代八朔直馬進上被仰付候、隅州様御代元文三年、萬石以上之儀ハ、公義又ハ御家中ニ而も御取分有之事候故乘輿御免、常式供廻り茂者人重ニ被仰付候、

一高祖父左近代、御城下江引越被仰付、寛永十三年以來祖父彈正代迄、御代ニ様被遊、御光儀候段、別紙を以被申出候儀、無別條相見得申候、然共、御代ニ様御家督初而被遊、御下國候付而被遊、御光儀候共、究而相知不申候、

右之通ニ御座候、藏人家之儀、他家ニ而者其家筋宜有之、萬石以上ニ而御座候故、大身分相當ニ相見得申候、然共先祖代、御家督ニ付被遊、御光儀候儀、究而不相知事ニ御座候得共、右通家筋茂宜、萬石以上之御取分茂有之儀ニ御座候、然者嶋津出雲・嶋津(久定、日置家)大學・嶋津圖書殿・嶋津筑後四家之儀茂萬石以上又者家筋ニ付大身分被仰付置、被遊、御光儀先例ニ御座候、付而者藏人願之通被遊、御光儀候而茂餘家之

傍例ニ者不罷成咎与吟味仕候、尤於被遊、御光儀者、御太刀・御馬代・御刀進上可被仰付儀与是又吟味仕候、乍然御詮議次第奉存候、以上、

寛延四年未八月六日 吉
川調、

199 覚

本文ニ付、嶋津大学何れ之場ニ連可有之哉、相調可申出旨被仰渡候、圖書殿事御一門部屋栖御礼相濟、其次ニ於、御座之間獨礼被仰付、乍大身分格別ニ御座候、大学事大身分ニ而表方ニ而獨禮有之候、大身分之儀者其身獨禮より最初ニ御禮被仰付儀ニ御座候間、大学事圖書殿次、安之助殿上ニ連名可被仰付儀与吟味仕候、(小松)以上、 寛延四年未六月十八日 吉調、川

200 覚

(雜書)於貞殿御忌掛之御方ニ相札可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一御父 (雜書)隅州様
一御甥之御續 (重牛)太守様
實者御姉

- 一 御従弟 御前様
- 一 御妹 菊姫様
- 一 御曾祖母 信證院様(綱貴後室)
- 一 御叔母之御續 阿部伊豫守様(於喜代・吉貴妻)
- 一 御従弟之御續 御母堂(正右)
- 一 御叔父 阿部伊豫守様
- 一 御叔母 鳴津大学(於嚴・吉貴女)
- 一 御叔父 島津備中殿
- 一 御叔母 島津周防殿
- 一 御叔父 島津圖書殿
- 一 御叔母 於德殿
- 一 御従弟之續 實者御叔父 島津玄蕃殿
- 一 御叔母 於民殿
- 一 御叔父 島津三次郎殿
- 一 御叔母 小松安之助殿
- 一 御叔母 於供殿肝付彈正
- 一 御妹 島津市太夫室
- 一 御弟 島津奎殿
- 一 右同 入来院石見殿

201

- 一 又御甥之續 實者御甥 島津善次郎殿
 - 一 御姪 肝付彈正娘
 - 一 御従弟 女子三人
 - 一 右同 末川織衛
 - 一 右同 末川文九郎
 - 一 御従弟 島津權五郎
 - 一 右同 末川七之進
 - 一 右同 末川彦十郎
 - 一 右同 島津備中殿娘
 - 一 右同 女子四人
 - 一 右同 島津千次郎
 - 一 右同 島津大学娘
 - 一 御母方忌係り當座へ相知不申候、 女子壹人
 - 一 右書付差上申候、以上、寛延四年未八月十一日 吉調、
- 覚
- 此節 御着城ニ付而、北郷民部事御礼使被仰付置候、(入傳)
 依之召列候役人手鑓為持候儀ニ付被申出趣有之、吟味
 被仰渡候、御一門并大身分之人人格之勤ニ而江戸江被
 差越候節、被召連候役人ハ手鑓為持来候、御家老御役
 ニ而江戸江被差越候節茂役人手鑓為持来候、然者民部

亡父北郷(久遠)作左衛門先年御番頭ニ而尾州江御使者被仰付候節、役人手鑓為持度旨被願出候得共、江戸詰ニ付而ハ願之筋ニ茂可有之候得共、此節之御使者ニ付而ハ役人手鑓為持候ニ者及間敷旨被仰渡候、民部家先祖代々御番頭ニ而江戸詰被仰付候節、召連候役人手鑓為持來候儀別條無御座候、此節御着城御禮使御番頭格之勤場民部被相勤事ニ御座候得者、召連候役人先規之手鑓為持候筋ニ可被仰付儀与私共吟味仕候、以上、

寛延四年未六月十八日

吉調、川

右ニ付、民部殿御禮使被召立候節役人手鑓為持候儀御免被仰付候也、

覚

右祖父阿多六太夫事

(忠奇)

大玄院様御代より

(綱貫)

浄國院様御

(吉豊)

代迄江戸御留守居御役相勤、地頭職被仰付候、親阿多瀬兵衛事者右六太夫三男ニ而、初而別立申候、浄國院様御部屋栖之内より奥御小姓・御側御小姓・御小納戸寄役等之御役相勤申候、當源藏事諸檢者等相勤、御歩行ニ而数度江戸詰仕、當分何之勤方無御座候、尤先

203の1

祖代々御城下士ニ而、大番家筋ニ而御座候、以上、

寛延四年未三月廿七日

吉調、川

覚

指宿衆中長野筑右衛門御城下士ニ被召成被下度旨願申出趣有之、調被仰渡、左之通ニ御座候、

一 長野家之儀、忠久公薩隅日御給ニ而初而御入國之節、御供之人数ニ長野家相見得申候、九州軍大将四家之内、長野与當座古書付之内ニ相見得、當筑右衛門申出候趣相違無御座候、

一 御家七代太守元久公御上洛之節、騎馬之御供大寺・長野両家ニ被仰付相勤申候、同御代喜入之凶徒を御誅討被成候砌、上永吉を大寺与長野左京ニ半分宛被下候由當座書附之内ニ相見得、筑右衛門申出候趣相違無御座候、
(義故)
一 惟新公朝鮮御帰陣之後御上洛之節、筑右衛門八代之祖長野筑前御供仕、於大坂御船奉行御役相勤候由筑右衛門申出候、此儀當座ニ相知不申候、同役之内新納助右衛門家系圖ニ御船奉行御役相勤候由相見得申候、其

外川上・本田・有川三家系圖之内ニ者右之訳相見得不
申候、然共筑右衛門七代之祖長野彦右衛門代元和三年
巳十月十八日書留置候書附之内ニ相見得申候得者、別
條有御座間敷哉与相考申候、

一 右筑前代野尻より鹿兒嶋江可罷移由被仰付候節、鎌田
出雲指宿地頭ニ而、筑前儀出雲被頼候ニ付指宿江罷移
居候段、其子彦右衛門委細書留置候趣別條有御座間敷
与存申候、

一 諏方御神事、社役川上・伊集院・新納・町田・伊地知・
本田・鎌田・長野八家被仰付置候、且又 御代々様御
葬送之節、御香爐之役筑右衛門家代々相勤来申候、
一 筑右衛門家系圖文書所持不仕候故、上世之儀委細者相
知不申候得共、長野家嫡流ニ而御座候段者先役共糺置
候書付ニ相見得、嫡流別條無御座候、

右之次第之家筋ニ而御座候、然者當大川平越右衛門祖
父大川平休兵衛代飯野衆中ニ而罷在候処ニ、先祖共段
々軍勞仕御奉公相勤候家筋之訳を以願申出、
様御代元禄十年丑閏二月十五日 御城下士ニ被召成候、
當田九郎左衛門祖父山田七郎右衛門代志布志ニ罷居申
候

203の2

覚 寫

候処ニ、御家他腹之御長男家為差立由緒之訳を以願
申出、
淨國院様御代寶永七年寅八月廿二日 御城下
士ニ被仰付候、筑右衛門先祖共右通差立御奉公相勤来、
第一代々社役相勤申候、社役之儀者御一族・他家之歴
々古来より相勤候而、格別之勤方ニ御座候、社役八家
之内ニ而者筑右衛門家計外城衆中ニ而相勤申事ニ御座
候、且又先祖筑前代鹿兒嶋江可被召移旨蒙御免罷居、
其以後至當筑右衛門指宿衆中ニ而為罷居事ニ御座候、
大川平家・山田家家筋を以ハ 御城下士ニ為被仰付先
例茂御座候條、筑右衛門家先祖共歴々之勤仕候儀茂有
之、古来より社役一家之頭取仕来候ニ付而ハ類少ク相
見得申候、右訳を以ハ願之通 御城下士ニ被召成候而
茂餘例ニ者罷成間敷与詮議仕候、乍此上御吟味次第奉
存候、以上、

寛延三年午九月廿四日

用調、
平左

右之嫡子 長野筑前
長野彦右衛門

右實者四郎右衛門事鹿兒嶋田清左衛門殿先祖二男二

而候、

右嫡子 長野宮内左衛門

右嫡子 長野筑右衛門

右嫡子 長野兵右衛門

右之養子 長野彦右衛門

右彦右衛門實者長野兵右衛門^(マ)二而弟二而御座候故、養子ニ仕ル、

右嫡子 長野筑右衛門

右之通私先祖相知レ申候ニ付、書付差上申候、以上、

八月十日 長野筑右衛門

伊東傳兵衛様

覚

本文深栖市兵衛其身代別立罷在、去ル辰年相果、直子無之、隈之城衆中中村甚兵衛血筋無據親類ニ而候故、跡養子御免被仰付被下度候、於御免者甚兵衛銀子持越、他借銀を茂可相弁由申候ニ付、市兵衛親類共より願申

出趣有之、調被仰渡、左之通ニ御座候、

一市兵衛亡父深栖勘助事ハ當深栖七左衛門先祖深栖堅助三男ニ而御座候処、別立不仕致早世候、曾祖父深栖七

左衛門勤方相知不申候、市兵衛事其身代別立罷在、先頭相果申候、^(頭カ)

一中村甚兵衛事ハ代々隈之城衆中ニ而御座候、曾祖父中村次兵衛、祖父中村與七兵衛、親中村五兵衛、當甚兵衛迄四代共ニ所衆并之御奉公相勤申候、

右之通御座候、市兵衛・甚兵衛由緒之誤ハ、市兵衛

曾祖父深栖七左衛門妻ハ甚兵衛曾祖父中村次兵衛妹

ニ而、市兵衛祖父深栖堅助致出生候ニ付、市兵衛与

甚兵衛者三從弟續血筋別條無御座候、市兵衛事其身

代別立罷在、右式奉願候ニ付而ハ被定置候御格茂御

座候得共、伊地知仲左衛門事其身代別立、相果直子

無之、隈之城衆中安藤仙七事無據血筋之孫ニ而候故、

跡養子之願申出、願之通被仰付候旨、去ル巳正月十

八日、伊集院十左衛門御證文を以被仰渡置候、右通

無據血筋を以ハ、其身代別立候者茂外城より御城

下士養子被仰付先例ニ而御座候間、市兵衛跡養子之

儀願之通御免可被仰付儀与奉存候、然者外城より御城下士養子罷成者、向後之儀外城より持高致所持、直ニ其高持出候者迄を御免可被仰付候、無高二而茂無據血筋又ハ為差立諷有之、願依趣者被仰付儀茂可有之旨、去ル元文二年巳五月、御格式被究置候、右を以相考申候得者、甚兵衛事所高持出候者ニ而ハ無之、銀子等持越、他借銀可相弁旨相見得申候、銀子持越候茂持高持出候茂同前之様ニハ御座候得共、於外城持高致所持来候者、凡下之業をも不仕咎ニ候、銀子持越養子ニ罷成候者ハ、其身才覚を以ハ何様ニも可致事御座候、左候得ハ、親代又ハ其身代別而輕キ仕業をも仕候諷委細難相知事茂有之咎候、其上銀子持越養子ニ罷成候儀ハ買養子同前之方ニ御座候、買養子之儀ハ御免不被仰付御格ニ御座候得者、右鉢之者紛敷相見得申候、何ぞ諷無之銀子迄を持有御城下士養子罷成候儀ハ御免被成間敷儀与乍憚奉存候、御格式之内ニ茂無據血筋之者御免被仰付事ニ被究置候、夫故血筋由緒を以ハ遠近之續ニ而も御免被仰付先例多々御座候、此節市兵衛跡養子之儀も、血

205

筋由緒之諷迄を以御免被仰付候ハ、何ぞ差支申儀ハ御座有間敷与私共吟味仕候、乍此上御詮議次第奉存候、以上、

寛延四年未六月十九日 吉調、川

覚

御城下士直子無之、血筋を以外城衆中又ハ座附・人家来を養子ニ願出候者多々有之候、且又外城衆中之者持高不持越、遠キ血筋を申立、本家拜借・他借銀を茂可致返弁由ニ而銀子持越可申旨申出候者茂有之候、右式遠血筋銀子持越養子ニ願申出候儀ニ付而ハ、先様無果申出積リニ候、右ニ付私共存寄申諷有之候ニ付、乍憚左ニ申上候、

一高祖父より玄孫迄ハ九族之親ニ而無據儀ニ御座候、右九族ハ父方者高祖父より玄孫迄忌服受申候、高祖父之兄弟九族之内ニ而無之候旨、曾祖父之兄弟ハ曾伯父母ニ而、其子再從弟ニ而服忌無之候、祖父之兄弟ハ又伯母(父脱)、其子ハ從弟違、其子ハ又從弟、九族之内ニ而候得共、是又服忌無之候、父之兄弟伯父母ニ而候、其子從

弟服忌有之、其子從弟違、其子又從弟迄ハ九族之内ニ而服忌無之候、其身兄弟姉妹、其子甥姪、其子又甥姪九族之内ニ而、又甥姪ニ者服忌無之候、嫡子・末子・嫡孫・末孫・曾孫・玄孫、是迄九族ニ而服忌有之候、母方ハ高祖父母・曾祖父母・曾叔父母・其子再從弟服忌無之、祖父母服忌有之、又叔父母・其子從弟違・其子再從弟服忌無之候、母之兄弟ハ叔父母ニ而候、其子從弟服忌有之候、其子從弟違、其子再從弟ニ而服忌無之、右段々之續九族ニ而、其外之親類者血筋与乍申九族之親相絶申遠類与申ニ而御座候、右九族之圖為御見合書付別紙差上申候事、

一元文二年巳五月、御格式被相究候者、外城より御城下士養子ニ罷成者、向後之儀外城より持高致所持、直ニ其高持出候者迄を可被仰付候、無高ニ而茂無據血筋又ハ為差立諷有之、依願ハ被仰付儀茂可有之旨被仰出置候事、

右之通九族之親并御格式茂有之候処ニ、遠キ血筋を申立、又ハ銀子持越本家之拜借・他借茂可弁由願申者茂有之候、九族之親者無據諷ニ候、銀子持越候茂

206

覚

持高持出候茂同前之様ニ者御座候得共、於外城持高致所持來候者ハ、凡下之業をも不仕筈ニ候、銀子を持越養子ニ罷成候者ハ、其身才覚を以ハ何様ニ茂可致事ニ御座候、親代・其身代別而輕キ仕業を茂為仕者茂可有之哉与委細ニ難相糺事茂有之候、前方ハ銀子持越養子ニ相成候者茂有之候得共、家筋商買之諷ニ候故、右躰之者者不被仰付御格ニ罷成候、銀子持越養子ニ罷成候而者前方買養子同前之事ニ罷成、紛敷相見得申候、何ぞ諷も無之銀子迄を持出御城下士養子ニ罷成候儀ハ御免被仰付間敷儀与奉存候、血筋之儀茂右九族之親迄ニ御免被仰付、九族之親相絶遠類之者ハ被仰付間敷儀与奉存候、勿論遠類ニ而茂別而無據願之諷茂有之候ハ、其節御吟味次第御取分を以可被仰付儀与是又奉存候、右次第ニ不被仰付候而ハ、向後之儀難被成諷茂可有之哉与乍憚奉存候ニ付、此段申上候、何分ニも御詮議次第ニ奉存候、以上、寬延四年未六月十九日 川吉

本文奥附代々土池端善藏果、直子無之、且又親類之内養子ニ罷成候者逆茂無御座候ニ付、奥附一代士小野彦之丞善藏從弟池端善五兵衛亡妻与二從弟之續ニ而、善藏縁類ニ而候得共、養子ニ御免被仰付被下度旨善藏親類共より段々願申出趣有之、調被仰渡、左之通御座候、

一 奥附代々土池端十助曾祖父池端作兵衛事小根占衆中之由候処ニ、奥附足輕被仰付候、祖父池端傳兵衛代奥附代々土被仰付候、亡父池端十助与申候、右善藏養父池端三四兵衛事ハ右十助祖父池端傳兵衛二男ニ而、別立申候、善藏事ハ御城下土能勢清右衛門二男ニ而、右三四兵衛養子ニ罷成候、

一 小野彦之丞曾祖父小野與兵衛事ハ御兵具附代々土當小野用右衛門高祖父小野彦左衛門弟ニ而、別立申候、何御奉公相勤候訳相知不申候、祖父小野權左衛門、亡父小野與兵衛奥附足輕相勤申候、當彦之丞事茂奥附足輕相勤居候処ニ、去ル享保十二年、奥附一代士被仰付、御當地并江戸御奥江茂相勤居申候、

右之通ニ御座候、善藏・善五兵衛從弟之續別條無御

座候、善五兵衛亡妻与彦之丞由緒之訳者、彦之丞叔母之娘奥附一代士佐藤弥五右衛門ニ相嫁、女子致出生、御城下土重久甚兵衛ニ相嫁候、右甚兵衛娘善五兵衛亡妻ニ而御座候故、彦之丞与者二從弟之續ニ而御座候、右通之縁類ニ而養子被仰付候先例段々相糺申候得共、相當之例見當り不申候、乍然指宿正哲養子安藤隆雲由緒之訳ハ、正哲母ハ北郷民部家来桜木藤兵衛与申者之娘ニ而御座候、右藤兵衛親桜木藤兵衛与申候、正哲為ニハ母方曾祖父ニ而候、右藤兵衛兄桜木平左衛門与申者之娘同家中伊地知太郎兵衛江相嫁、右太郎兵衛娘同家中阿蘇與右衛門へ相嫁、右與右衛門娘安藤仙庵へ相嫁、隆雲出生仕候ニ付、三從弟違之續ニ而候得共、段々縁中之續ニ而候得共、縁類ニ而血筋与者難申御座候、正哲指宿才江^光寛^光陽院様より醫道之御書物等拜領被仰付置、正哲致相傳罷居、隆雲右通縁類、殊ニ正哲弟子ニ而醫道稽古仕由ニ御座候故、右御取分を以ハ養子御免可被仰付哉与當座より吟味書差上置候處ニ、願之通養子御免被仰付候、右傍例ニ者難引用御座候得共、先ハ似寄

為申事ニ御座候、然者彦之丞子善藏存命之内より身近親類同前公私共ニ別而致世話、其上此節養子御免於被仰付者、銀子持越拜借金返上仕、他借銀迄相弁養老母引受介抱可仕由相見得申候、尤彦之丞事茂奥附一代士被仰付置、最早多年御奉公相勤居申候、同格之内ニ而一代士より代々士之養子御免被仰付迄之儀ニ相見得申候、右を以相考候得ハ、御城下士之養子ニ罷成候与ハ詛茂相替申候故、縁類ニ而茂彦之丞事養子御免被仰付候而茂何ぞ差支申儀ハ御座有間敷哉与奉存候、然共相當之先例見當り不申候ニ付、究而ハ難申上御座候間、御吟味次第奉存候、以上、

寛延四年未五月九日 吉調、川

覚

吉野御馬追ニ付、當年より重富人数申目立初而被仰渡、御城下士申目下知人被仰付候ニ付而、島津善次郎殿私領加治木家中與頭兩人騎馬ニ而手鑑・挾箱等為持、申目為惣下知罷登り来候、此節重富申目立都而加治木同前ニ被仰付被下度旨周防殿より被為願

(高津忠紀)

出趣有之、調被仰渡候、尤島津備中殿私領垂水申目立ニ者、前より御城下士申目下知被仰付事之由候、惣而申目下知人被仰付候儀ニ付而ハ、當座へ相知候訳有之候ハ、是又相札可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一諸所 御城下士申目下知被仰付候ニ付而ハ、段々相札申候得共、當座へ何様之訳相知不申候、

一善次郎殿家之元祖兵庫忠朗者 中納言家久卿之御二男ニ而、初而家被相立、御取持茂重ク、光久公御代より一所持ニ而御家中一之上席ニ被仰付置候処ニ、御一門列ニ被仰付候、

一備中殿家之元祖右馬忠將者 中興之太守貴久公御次弟ニ而、一所持之内ニ而茂為差立事ニ御座候処ニ、是又御一門列ニ被仰付候、

一周防殿家之元祖周防守忠綱者 御家御元祖忠久公之御二男ニ而、越前國守護代ニ而候、至二代忠行播州下掛保を被領知、是より代々播州ニ居住、忠綱より代々鎌倉將軍・京都將軍家ニ被致昵近候、周防殿事 吉貴公御二男ニ而、近年右家相續被仰付候、

一周防殿座席之次第、當分ハ御間柄を以備中殿上座ニ而候、至以後而ハ、同様之人家督之節ハ周防殿・善次郎殿・備中殿与次第可被仰付旨、去ル元文三年午十一月、被仰出置候、依之連名之儀茂周防殿・善次郎殿・備中殿与次第被仰付置候、

右之次第御座候、御一門家格同様ニ被仰付、家筋連名ニ茂周防殿・善次郎殿・備中(殿脱力)与有之事ニ御座候、

御一門之儀者一所持之内より先年家格段を為被相替事ニ御座候、然者善次郎殿家以前ニ者御家中一之上席ニ被仰付置、諸事御取持重ク有之候故、加治木申目立家来申目下知人ニ而前々より罷登り来、品能方与相見得申候、重富之儀ハ近年御取立ニ而、當年初而申目立為被仰渡事ニ候得者、跡々為仕来例茂無之候、周防殿事越前島津家相續ニ付而者、外ニ相并候家筋茂無御座、御一門之内ニ而茂家筋連名一之上席ニ被仰付置候、右訳を以ハ、此節周防殿私領之儀、善次郎殿私領同前ニ可被仰付儀与吟味仕候、且又備中殿私領之儀、此以前 御城下士申目下知人為被仰付事候へ共、御一門与段被相替候儀ニ付而ハ訳茂相

208

替申候条、惣而御一門同様ニ可有之儀与奉存候、無左候得者、一所持之内より御一門与段被相替候詮無御座候間、是又善次郎殿私領同前ニ可被仰付儀与乍憚奉存候、乍然御吟味次第奉存候、以上、
寛延四年未四月廿日 一人
吉調、

覚

鳥津出雲(久定、日置家)繼目被仰付候ニ付、先例之通私宅江被遊 御光儀、御膳進上并御太刀進上仕度旨願被申出、調被仰渡候、當出雲家繼目家督之節ハ、奉願為被遊 御光儀先例ニ御座候、出雲曾祖父鳥津左衛門家督ニ付、去ル正徳六年申三月廿八日 淨國院(吉豊)様被遊 御光儀御膳進上、御太刀一腰・御刀一腰・直御馬老疋被致進上候、且又 隅州(継豊)様被遊御家督候ニ付而、去ル享保九年辰五月十六日、右左衛門宅江被遊 御光儀、其節茂右之品々進上被致候、祖父鳥津左衛門繼目之節、同十三年申五月四日 隅州様被遊 御光儀、其節茂右之品々進上被致候、亡父鳥津左衛門家督之節 御光儀之願被申出候得共、 隅州様御滯府中ニ而不被遊 御光儀、重而

御在國之節 御光儀之願可被申出旨為被仰渡由ニ御座候、然ハ出雲繼目ニ付而 御光儀之願被申出、先例御道具・御馬進上仕來候得共、此節者被仰渡趣 茂御座候故差扣、御膳進上并御太刀進上仕度由被申出候間、願之通可被仰付儀与奉存候、以上、

寬延四年未八月十五日 吉一人調、

覚

川俣作圓事御書院小役人ニ而候処ニ、依願役儀被差免、此節御番入之願申出候、剃髮ニ而茂御番相勤候先例有之候哉、相糺可申出旨被仰渡候、剃髮之者御番相勤候先例段々相糺申候得共、何分共相知不申候、醫師之儀ハ御番相勤不申候、山伏之儀ハ古來より當分迄小番・大番共ニ御番相勤來申候、然者御番人之儀、俗躰之勤方第一ニ相見得申候、剃髮之姿ニ而ハ俗躰之勤場難仕筈ニ御座候、尤高屋敷をも致所持無役之者ハ御番相勤申儀ニ御座候、然共剃髮ニ而御番相勤候先例相見得不申候処、此節初而御番被仰付候得者、至以後ハ常式俗躰之者茂身樂之方ニ而剃髮願申出、御番可相勤与申者

茂可有之候、左候而ハ、以後差支申儀茂可有御座哉与相考申候、作圓事御書院御茶道方御断申出、御免被仰付候ニ付而ハ、還俗被仰付御番可被仰付儀与私共吟味仕候、乍然御詮議次第奉存候、以上、

寬延四年未六月十六日 吉調、川

覚

本文調被仰渡候、年頭着座之面々大御目附以上御役被仰付候得者、御在國之節ハ其身御役之場ニ而御太刀進上、依願嫡子家筋之場ニ而持參太刀御礼着座被仰付來候、御在府之節ハ其身御役之場ニ而年頭之御禮御太刀進上於江戸被申上、家筋之場嫡子御太刀進上無之事候、然者 御在國之節、依願嫡子家筋之場ニ而御太刀進上為被仰付來事ニ御座候間、又七郎事先例之通家筋之場ニ而持參太刀御礼着座可被仰付儀与奉存候、以上、

寬延四年未六月十六日 吉調、川

覚

本文國分衆中滿田與右衛門直子無之、御兵具附御譜

代足輕平野利助養子被仰付被下度旨願申出、調被仰渡、左之通ニ御座候、

一 満田與右衛門事代ニ國分衆中ニ而、高祖父満田次郎兵衛、曾祖父満田藏之助兩代共ニ勤方相知不申候、祖父満田次郎右衛門事者國分衆中柳彦左衛門二男ニ而候処、右藏之助養子ニ罷成候、是又勤方相知不申候、亡父満田清兵衛、當與右衛門兩代共ニ所衆并之御奉公相勤申候、

一 平野利助曾祖父平野利助事ハ國分衆中兎玉藏助四男ニ而候処ニ、御兵具所附御譜代足輕平野家養子ニ罷成候、祖父平野勘助右兩代共ニ御兵具所方御奉公相勤申候、當利助亡父平野喜兵衛事ハ右勘助二男ニ而、先年別立、御兵具所方御奉公相勤申候、利助當分御兵具所方御奉公相勤居申候、

右之通御座候、與右衛門・利助續之儀ハ、與右衛門母ハ利助亡父平野喜兵衛姉ニ而、國分衆中前田勝右衛門江相嫁、右腹ニ出生之娘與右衛門親満田清兵衛江相嫁、當與右衛門致出生候ニ付、與右衛門為ニハ利助事血筋從弟違之續ニ而御座候、右式血筋を以者、

213

覚

本文初而高持成之願申出、調被仰渡候、森生眼亡父森

御座附士・足輕又ハ人家来より茂養子被仰付候先例多々御座候間、利助事血筋之詛を以ハ養子被仰付候而茂何之差支申儀ハ有御座間敷与吟味仕候、以上、
寛延四年未二月十九日
吉調
川安

212

覚

本文式百石高上り之願申出、家筋調被仰渡候、川上弥八郎曾祖父川上四郎兵衛事(忠兄)惟新様御隠居方御家老御役相勤、地頭職被仰付候、関ヶ原御合戦之砌致御供、軍勞仕候、祖父川上(親母)五郎兵衛事納殿御役相勤申候、養亡父川上仁兵衛事(忠徳)ハ島津兵庫忠朗家来曾木新左衛門三男ニ而候処、右五郎兵衛養子ニ罷成、御船奉行御役相勤申候、當弥八郎事市来茂左衛門二男ニ而候處ニ、伯父右仁兵衛養子ニ罷成、當分何之勤方無御座、御番相勤居申候、尤代々御城下士ニ而、代々小番家筋ニ而御座候、以上、
寛延四年未六月十三日
吉調、
川

衛生事先祖代々日州延岡者ニ而、目醫師仕候処ニ、彼方致暇御當地ニ引越罷居申候、其以後奉願 御城下土ニ被召抱、御醫師被仰付相勤申候、當生眼事茂目醫師仕候ニ付、當分表御醫師被仰付相勤居申候、尤大番相勤申筈之家筋ニ而御座候、以上、未二月廿九日 吉調、川

覚

本文初而高持成之願申出、家筋調被仰渡候、上原嘉衛門六代之祖上原太郎五郎事 寛陽院様御代御用人御役相勤、地頭職被仰付候、高祖父上原長次郎同御代御側御小姓・御近習役等相勤為申由ニ御座候、曾祖父上原長次郎事御小姓御役ニ而、右御代御帰國之節致御供、於大坂自害仕候故家及断絶候ニ付、弟上原弥八兵衛出家ニ而罷居候処ニ還俗被仰付、右長次郎跡職相續仕、上原長右衛門与改名仕候、勤方相知不申候、是則嘉右衛門祖父ニ而御座候、亡養父上原七郎左衛門事ハ清水衆中蓑毛清兵衛弟ニ而候処ニ、右長左衛門養子ニ罷成、諸檢者等相勤申候、當嘉右衛門事ハ赤星十兵衛二男ニ而、右七郎左衛門養子ニ罷成候、當分物奉行所寄筆者

相勤居申候、尤大番家筋ニ而御座候、以上、

寛延四年未四月廿三日 吉一人調、

覚

本文島津將監家来渡邊新右衛門事、當草野助右衛門亡父草野五右衛門弟子ニ而紙漉稽古仕、御用紙漉調申者ニ御座候、紙漉之儀ニ付而者、 寛陽院様御代助右衛門曾祖父草野五右衛門事越前國江被差遣、段々稽古被仰付、弟子付候者共江折角指南仕、御用ニ相立候様ニ可仕旨被仰渡、大山吉兵衛・矢野長左衛門・村山源太左衛門修行鍛鍊仕、御用ニ相立候詔を以、輕キ者共ニ而御座候処ニ 御城下土ニ被召成候、右新右衛門事茂最早及五十ヶ年段々御用相勤、別而功茂有之者ニ候故、此節御吟味之上品能方ニ被仰付被下度旨助右衛門より段々願申出趣有之、調被仰渡、左之通ニ御座候、一渡邊新右衛門俗生之詔御記録所江相知不申候ニ付、將監役人方へ問届申候処ニ、新右衛門祖父渡邊新兵衛与申者高崎惣右衛門家之家来ニ而、高崎伊豆娘當將監曾祖父島津豊後へ相嫁候節致供、直ニ彼方家来ニ罷成、

亡父渡邊新左衛門、當新右衛門迄將監家来ニ而、家来衆并之奉公相勤候、尤新右衛門事ハ紙漉稽古多年仕候由申出候、

一大山吉兵衛・矢野長左衛門・村山源太左衛門俗生相札候処ニ、吉兵衛事ハ牛根百姓ニ而候、長左衛門事ハ不斷光院門前者ニ而候処ニ、助右衛門曾祖父五右衛門紙漉弟子ニ而多年御用相勤候訳を以、右兩人共ニ最初物奉行所附ニ被仰付置、其後天和年間 御城下士ニ御赦免被仰付候、子孫當大山休右衛門・矢野長左衛門ニ而御座候、源太左衛門事ハ元来牛根衆中ニ而候処ニ、右同断之訳を以、天和年間直ニ 御城下士ニ被召出候、子孫當村源^{山脱カ}太左衛門ニ而候、右三人俗生不相知候ニ付、助右衛門方江問届申候処ニ、右通申出候、

右之通ニ御座候、新右衛門事五拾ヶ年紙漉稽古仕、段々御用紙等漉調、其功茂相積、當分主取相勤、專御用ニ相立者之由ニ御座候、倅渡邊伊右衛門不相替折角精を出紙漉稽古仕、往々御用ニ相立者之由ニ候、大山吉兵衛・矢野長左衛門・村山源太左衛門多年紙漉稽古仕、御用相弁候ニ付而、吉兵衛・長左衛門事

216

ハ元来百姓又ハ門前者ニ而候得共、最初物奉行所附ニ被仰付置、其後又々多年功相積候訳を以 御城下士ニ御赦免被仰付候、源太左衛門事ハ脱躰衆中ニ而候故、直ニ 御城下士ニ被召出候与相見得申候、前島津空家来村尾茂兵衛事番匠方段々御奉公相勤候功有之、去ル寛保二年戊正月、其身計薩州吉田衆中ニ被仰付候、右例を以者、新右衛門事其身計外城衆中ニ可被仰付事候得共、右大山吉兵衛・矢野長左衛門紙漉之功を以物奉行所附より 御城下士ニ被仰付候先例有之候、然者新右衛門事五拾年来紙漉之功茂有之者ニ御座候間、右吉兵衛・長左衛門先例より一等御下ヶ、代々外城衆中之格ニ茂可被仰付儀哉与私共吟味仕候、乍然御詮儀次第奉存候、以上、

寛延四年未六月十日 用調、平

覚

本文池端善藏養子願之儀ニ付、御城下士養子ニ外城衆中并人家来より養子御免被仰付、右善藏願之趣ニ相準候例茂有之候ハ、相札可申出旨被仰渡候、外城衆中

并家来より 御城下士養子ニ者、無據血筋之訳を以御免被仰付候先例ハ多ク御座候得共、善藏願之趣ニ相準候先例段々見合申候得共見當り不申候、此段申上候、以上、 寛延四年未五月廿一日 吉調、川

覚

本文初而高持成之願申出、家筋調被仰渡候、福嶋玄佐事福嶋半助二男ニ而、寛延二年十二月、別立被仰付候、半助祖父福嶋新右衛門代官御役相勤申候、亡養父福嶋玄佐事ハ鎌田五太夫三男ニ而御座候処ニ、右新右衛門養子ニ罷成候、 淨國院様御代御側御醫師相勤申候、 當半助事茂武宮十左衛門嫡子ニ而御座候処ニ、右玄佐(子脱之)養ニ罷成候、當分御鎖口添番御役相勤居申候、當玄佐事何ぞ勤方無之候、尤代々 御城下士ニ而、大番相勤申筈之家筋ニ而御座候、以上、

寛延四年未正月晦日 用一人

覚

於供殿事(吉貴女)島津筑後嫡子(久茂、郡城家)島津岩袈裟(久敷)江縁與被 仰出置、

筑後宅江被引越候ニ付、何様之格合共不相知候、右格合之儀當座江被仰渡候趣ハ無之候哉、相札可申出候、

仰渡無之候ハ、右格合致吟味、是又可申出旨被仰渡相札候得共、此以前當座へ何分ニ茂仰渡無之候、依之私共吟味仕候趣左ニ申上候、

島津筑後家之儀者一所持之内ニ而茂大身分被仰付置、獨禮被仰付儀ニ御座候、都而屹与立候節別立而進上物等被仰付事ニ御座候、妻女之儀茂別立進上有之候、右を以相考申候得者、於供殿事筑後宅江被引越候而者筑後家風之通ニ可有之儀ニ御座候、左候得ハ、一所持同前之通ニ者難被仰付候、島津又六郎家之儀(久定、口屋家)茂大身分ニ而、筑後同前別立而進上物有之候、然者於供殿事(吉貴女、島津久定室)殿同格之格式ニ可被仰付儀ニ御座候、連名之儀(吉貴女、島津久章室)於嚴殿・於德殿・於供殿・於民殿(吉貴女、伊勢真矩室)与次第可被仰付儀与吟味仕候、乍然御吟味次第奉存候、以上、

寛延四年未五月十二日 吉川

覚 寫

於貞殿縁組被 仰出候付而、諸事格式之儀於嚴殿同前

本文百石高上り之願申出、家筋調被仰渡候、隈元太一左衛門祖父隈元太一左衛門事ハ當隈元与一右衛門曾祖父隈元吉兵衛二男ニ而、別立被仰付候、右吉兵衛事ハ先祖父之串良衆中ニ而候処ニ、吉兵衛代新納又左衛門

覚

被仰付候、進上之御目錄等茂名書調候様ニ被仰付候、殿文字之儀、此内之通殿之字相用候様被仰付候、
十二月 兵部
右之通、於御側御用人座丑十二月十七日被仰渡候、
覚
本文初而高持成之願申出、家筋調被仰渡候、愛甲玄昌(季經)事ハ愛甲喜春二男ニ而候処ニ、去年十一月、初而別立被仰付候、亡父喜春事代之志布志衆中ニ而、醫道仕候処ニ、去ル元文二年巳七月、於江戸隅州様御方御側御醫師被仰付、御城下士ニ被召出候、當玄昌事醫道稽古仕、當分何之勤方無御座候、尤大番相勤申咎之家筋ニ而御座候、以上、寛延四年未五月十六日 用調、平

御家老職之内與力相勤、其節又左衛門附衆中ニ罷成、其後嶋津備前殿與力相勤申候、嫡子隈元與一左衛門代御城下士ニ被召出、御普請方中取・代官役等相勤申候、
太一左衛門事茂兄與一右衛門右同前ニ御城下士ニ被召出、御小姓・御右筆兼役横目・代官・郡奉行・物奉行・長崎御附人等之御役相勤申候、亡父隈元正太左衛門事新御番ニ而江戸詰仕、部屋栖之内相果申候、當太一左衛門右式故承祖仕候、當分御番并小與頭相勤居申候、尤大番家筋ニ而御座候、以上、
寛延四年未三月廿五日 吉調、川
覚
太守様此節被遊 御着城候ハ、當年頭御規式御礼可被遊御請候哉、相調可申出旨被仰渡、左之通ニ御座候、
一淨國院様御代享保二年酉九月 御着城脇年首之御祝儀(吉貴)
被遊御受候間、向後其通可相心得旨被仰渡候、
一隅州様御家督内享保八年卯十二月、例年 御着城脇年頭之御礼被遊御受事候得共、當年之儀ハ最早年内無餘日候ニ付而、年頭之御礼不被遊御請候旨被仰渡候、

一 慈徳院様御家督初而延享三年卯六月 御着城脇年頭御(宗信)

規式御礼不被遊御請候、此儀ハ、浄國院様御病中且又御忌中御差支ニ而御礼不被遊御請与相考申候、

右之通ニ御座候、 浄國院様御代より 御着城脇年

頭御祝儀被遊御請、 隅州様御代ニ茂 御着城脇年

頭御禮被遊御受候、御差支之節ハ御礼不被遊御請与

相見得申候、 慈徳院様御家督初而 御着城之年茂

御差支ニ而年頭御礼不被遊御請儀ニ御座候、然者何

ぞ御差支無之節者 御着城脇年頭御規式御禮被遊御

受筋ニ相見得申候間、此節之儀茂何ぞ御差支無御座

候ハ、 御着城脇當年頭御規式御禮可被遊御請儀与

私共吟味仕候、以上、

寛延四年未二月十六日 用調、平

覚

222の1 一尚寧王 天正十七丑年継目、元和六申九月十九日卒去、

一尚豊王 元和七酉年継目、寛永十七辰年五月四日卒去、

一尚賢王 寛永十八巳年継目、正保四亥年九月廿二日卒

去、

一尚質王 慶安元子年継目、寛文八申年十一月十七日卒

去、

一同年尚貞王江継目、寶永六丑年七月十七日卒去、

一同尚敬王江継目、寛延四未年正月廿九日卒去、

寛延四年未三月廿七日、從琉球假屋役人書

出之、

一當尚喜王(ママ)

覚

222の2 一永享年中 大明宣宗之宣徳年間ニ當ル、
元皇考孫氏「為朝之字、三代而絶」

一中山王 舜天王より十一代目
尚巴志王 應永二十九年即位

一尚忠王 十二代目 永享十二年即位

一尚圓王 十七代目、中山國中興、非為朝流、原是葉壁

山伊イセナ是名、首里之人也、疑是先王之後胤乎、

一尚寧王・尚豊王・尚賢王・質王(尚脱力)・尚貞王・尚益王・尚

敬王・當王喜王也、
(尚力)

223

覚 草案

此紋者我等家紋也、其方家代々嫡家計令許與之畢、聊無緩疎至子孫可有傳用者也、仍如件、

年号月日

名 實名判

何野何某殿

覚

(徳川吉宗)
有徳院様

寫

御記録奉行江

大御所様御院號御在府之御方様江閏六月三日惣出仕(賴應)

而御弘有之、大目附能勢因幡守様より細川越中守様江(重賢)

御院號御同席中様江御通達可被成旨被仰達、御院號

別紙寫之通御駈、松平陸奥守様・越中守様より以御使

者御順達有之、右 御院號寫御小納戸二階堂森右衛門

二而被差越、今月九日御到来候、且又七月二日、上野

於中堂 宣命御規式相濟、御贈官 大政大臣正一位二

而被遊御座候段、明王院より御留守居迄為知有之候、

右之趣可書記置候、

寛延四年未八月十三日

(義岡久中)
相馬

覚

一元禄九年子九月三日、上井五郎左衛門殿御取次ニ而承

候ハ、同氏助右衛門役儀御断申上候、被達 上聞御免(伊地知重英)

許ニ而候、長々相勤申候、其上病氣時々差發、難勤由

被 聞召上候由御口上ニ而候、助右衛門罷出儀難儀、

名代南雲新介殿頼入、御返事承候、則肝付甚兵衛頼入、

御禮申上候事、

一御手鏡方三年

一御記録所十七年

此内四五年程八木拾石ツ、被下候、田中五右衛門(国明)

殿此内より米同前ニ被給候、

一元禄十四年巳八月廿一日、黒葛原源左衛門殿御取次ニ

而、徳之嶋江被遣候段を茂被仰渡候与相見得申候、

一琉球江被遣候付而、御銀十枚程拜領被仰付候通相見得

申候、

一元禄十五年午九月、於徳之嶋病死仕候、

右之通書付進覽仕候、以上、

寛延四年未三月十五日

伊地知助太郎

吉田用右衛門様

覚

本文進上物調被仰渡候、本田與兵衛家嫡子御太刀・二種壹荷進上仕来申候得共、近代二男 御目見仕候先例無御座候、右通之者中紙進上被仰付儀(候脱)ニ御座 先年野村十郎右衛門・東郷藤右衛門・東郷源五・相良傳八・大田金兵衛家嫡子之儀ハ御太刀・二種壹荷進上仕候得共、右五人共ニ二男初而 御目見之節中紙進上被仰付候、右之外多々右通之先例御座候間、與兵衛二男本田文藏事中紙進上可被仰付儀与奉存候、以上、

寛延四年未八月廿一日 用一人調、

覚

本文桑波田藤右衛門事去ル已九月相果、無高無屋敷、其身代別立候付、跡職不被相立筋ニ願申出、家筋調被仰渡候、藤右衛門事者當桑波田傳右衛門高祖父桑波田八郎左衛門二男ニ而、其身代別立、輕御奉公相勤申候、右八郎左衛門事ハ高岡衆中本田次郎兵衛家より桑波田藤右衛門養子ニ罷成、何ぞ勤方無御座候、嫡子桑波田勘助勤方無御座、御番相勤申候、其子桑波田貞右衛門

中通御目附御役相勤候、其子桑波田權之丞、其子當傳

右衛門兩代共ニ何ぞ勤方無御座候、尤代々 御城下士ニ而、大番家筋ニ而御座候、右藤右衛門事ハ其身代別立、何ぞ差立為申訳無御座候、右相札候趣如斯御座候、以上、 寛延四年未八月廿一日 用一人

覚

本文進上物調被仰渡候、本田孫右衛門家嫡子元服之御札被仰付御太刀・二種一荷、二男ハ御太刀仕来申候得共、三男 御目見仕候先例無御座候、然者去ル正徳二年辰五月、比志嶋善八二男比志嶋小市初而 御目見之願申出候節、善八家嫡子ハ 御直元服被仰付、家督継目之御札御太刀・二種一荷進上仕来候得共、二男進上物之例無御座候付、弓進上ニ被仰付候、右傍例を以相考申候得者、孫右衛門三男本田甚六事中紙進上可被仰付儀与奉存候、以上、 寛延四年未六月廿七日 用調、

覚

未閏六月四日、相馬殿(義岡久中)より御用ニ付罷出候処ニ、高橋

七郎右衛門大御目附御役於被仰付者、座席連名之次第
(種彦)
 相札可申出旨被仰渡、七郎右衛門名書巻通被成御渡候、
(吉田清純)
 且又官名見合三通り程可書出由候、用右衛門承知之、

覚

高橋七郎右衛門

右大御目附於被仰付者、座席連名之次第何様ニ可有之
(久品)
 候哉、可申出旨被仰渡候、七郎右衛門事新納内蔵次、
(政一)
 小林左内上ニ座席可被仰付儀与吟味仕候、尤家筋連名
 之儀ハ當分之通何ぞ相替申儀無御座候、以上、

寛延四年未閏六月四日
用調、平

別紙 縫殿 主馬 帯刀

覚

本文御役之御礼・地頭職之御礼両度被召出候、且又
 御目見之次第御役并地頭職之御礼御太刀・三種二荷、
 家督繼目之御礼御太刀・二種一荷、家督繼目之御礼御
 太刀、家督繼目之御礼与被召出候儀御格式被定置候、
 右次第ニ候処ニ、本文之通御役・地頭職・家督之三御
 礼同人同日ニ被召出、進上物之内重キ方を御礼席ニ相

備、右三御礼奏者番より相唱候而ハ疎略之様ニ相見得
 尤右之通屹与被定置候御格式相欠申儀ニ御座候間、三
 度共ニ銘々進上物相備、御礼申上筋ニ可被仰付儀与吟
 味仕候、以上、
 寛延四年未六月廿八日
平

覚

本文鎌田九郎別立之願被申出、調被仰渡候、去ル寶永
 七年寅二月御格式被仰出候者、与頭以上之次男分地別
 立被仰付候節ハ、與頭格ニ者依分地之程又者依人品可
 被仰付候、其外ハ小番可被仰付由相見得申候、然者勘
 九郎亡父鎌田源八事ハ寄合當鎌田典膳殿亡父鎌(政昌)要人次
 弟ニ而、右當九郎迄石家内ニ而罷居申候、右御格式之
(政躬)
 通勘九郎代々小番家格ニ可被仰付儀与吟味仕候、以上、

寛延四年未七月四日
本 吉調、

(九郎・勘九郎混同ノ記載アルカ)

覚

本文調被仰渡候、川上市右衛門家於加治木役人筋之者
 之儀ハ當座へ相知不申候得共、御支族川上十郎左衛門

家之又庶流ニ而御座候、然ハ右者之儀ハ役人格之者ニ而、當分役人之場相勤候由御座候、左候ヘハ、役人并役人格之者ハ、御目見之節脇差さし候様ニ被仰渡置候間、慶左衛門事 御目見之節脇差さし候様ニ可被仰付儀与吟味仕候、以上、 寛延四年未八月三日 平用

覚

本文山元平藏相果、直子無之候ニ付、奥附足輕山元彦左衛門事血筋親類之詛を以継目養子之願平藏親類共より申出、調被仰渡、左之通御座候、

一平藏亡養父山元甚平事ハ當山元次左衛門祖父山元次左衛門二男ニ而、初而別立申候、六代之祖山元藏之丞定船頭役相勤候、高祖父山元新左衛門勤方相知不申候、曾祖父山元次郎左衛門御船手附之者ニ而候処ニ、御船脇船頭役相勤候詛を以 御城下土ニ御赦免被仰付候、祖父山元次左衛門脇船頭役相勤候、養父山元甚平御普請方定檢者相勤候、平藏事ハ和田平左衛門二男ニ而候処ニ、右甚平養子ニ罷成、先頃相果申候、

右之通御座候、平藏・彦左衛門續之詛ハ三從弟ニ而

覚

御座候得共、平藏事養子ニ而血筋之續ハ無御座候、然共平藏亡養父甚平与ハ彦左衛門事ニ從弟違之續ニ而、山元家ニ付而者右式無據親類ニ而御座候、右を以相考候得者、血筋之詛を以ハ養子御免被仰付候先例多々御座候、其上別ニ養子ニ罷成候者逆茂無御座候由相見得申候間、彦左衛門事願之通継目養子御免可被仰付儀与吟味仕候、以上、 寛延四年未閏六月五日 平用調、

本文平嶋軍右衛門先祖平嶋甚左衛門臨也泉州堺江居住仕候節、於彼方 忠恒公(家父)被遊御庖瘡候砌、臨也御奉公仕候由緒相糺可申出旨被仰渡、左之通御座候、又一郎久保公於朝鮮國被遊御逝去候ニ付、 忠恒公初而 太閤秀吉公江為 御目見、文祿二年十二月十三日、大坂江 御光着、 御目見之御日限未相知候故、其内泉州堺之臨也与申者所ニ御旅宿之内被遊御庖瘡候段、御家譜之内ニ相見得申候、右ニ付臨也夫婦別而御奉公相勤候故、其以後從 義弘公 忠恒公臨也江御書被成

下候、且又寛永五卯月八日、(島津)下野久元・伊勢兵部貞昌より平嶋休右衛門江御扶持米被下候書付忝通、右御書并書付于今軍右衛門家致格護、此節右寫差出別条無御座候、此段申上候、以上、

寛延四年未七月十六日 山本 吉川
吉調

右者臨也者泉州堺之町人申屋臨也与高原衆中文書之内ニ相見得候、

覚

本文進上物調被仰渡候、小番之者嫡子三種二荷又者二種忝荷・御太刀進上仕、右二男以前より進上仕来候品ハ有来通可被仰付候、例無之新規ニ願出候者有之節ハ、遂吟味可相窺旨、享保九年辰十二月六日、當座へ被仰渡置候、然ハ本田孫右衛門家嫡子御太刀・二種一荷、二男御太刀進上仕来候、三男進上物之先例無御座候、右通之者中紙進上被仰付儀与先例御座候条、先例之通本田甚六事中紙進上可被仰付儀与吟味仕候、以上、

寛延四年未六月廿八日 平用

覚

御着城脇年頭御禮七月朔日・二日・三日被遊御請候ニ付、嶋津又七郎・嶋津新八郎親家筋之場ニ而持參太刀願被申出候、右ニ付申上候、右躰依願嫡子家筋之場ニ而持參太刀被仰付候儀者、御在國之節正月三日、於御對面所着座之面々持參太刀有之候節之事ニ而御座候、御着城脇年頭之御禮被遊御請候節、此跡無之事ニ候、此節之儀者先例ニ相替申候ニ付、此段御尋申上候、以上、 寛延四年未六月十九日 平用

覚

本文阿多衆中都外川万兵衛直子無之、親類中養子ニ罷成者無御座候付、新納四郎家来川添市之進事又甥之續ニ而由緒有之候故、養子御免被仰付被下度旨段々願申出趣有之、調被仰渡、左之通御座候、

一阿多衆中都外川万兵衛高祖父都外川太郎左衛門、曾祖父都外川平三郎、祖父都外川兵右衛門、養父都外川平左衛門右四代共ニ所衆并之御奉公相勤候、當万兵衛事ハ同所衆中有馬覚右衛門弟有馬三左衛門嫡子ニ而候処

ニ、右平左衛門養子ニ罷成、何ぞ勤方無御座候、

一川添市之進祖父川添喜兵衛、亡父川添喜兵衛、當市之進迄隆盛院門前者ニ而候処ニ、去ル正徳四年午十二月、先島津周防殿新家ニ被召立候節、右喜兵衛・市之進父子共ニ被相抱、夫より家来ニ罷成候、市之進事當分新納四郎家来ニ而罷居申候、

右之通御座候、万兵衛与市之進續之訳ハ、市之進祖母最初 御城下土松山九右衛門江相嫁、松山六左衛門出生仕候、其後致離別、當万兵衛養祖父都外川兵右衛門江相嫁候而、都外川平左衛門出生仕候故、六左衛門与平左衛門与ハ異父同母之兄弟ニ而候、平左衛門養子万兵衛ニ而御座候、右六左衛門娘川添喜兵衛江相嫁、當市之進出生仕候ニ付、万兵衛為ニ者市之進者母方筋又甥之續ニ而候得共、實者血筋相續不仕候、先比奥附代々土池端善藏相果、直子無之、奥附一代士小野彦之丞事縁類之續ニ而候処ニ養子御免被仰付候、此儀者善藏代拜借金・他借銀等有之、彦之丞銀子持越返上方仕、養老母一人外ニ引受介抱仕者迄茂無之、彦之丞多年首尾好御奉公相勤居候訳茂

238

有之、右之趣を以段々願申出候、其上奥附代々士・

奥付一代士同格之内ニ而一代士より代々士ニ御免被仰付迄之儀ニ候故、當座より吟味書差上置候処ニ、願之通被仰付候、此節万兵衛願之筋を以ハ、右彦之丞傍例ニ者難引用御座候、尤血筋之訳を以ハ、御座附・足輕又者人家来ニ而茂外城衆中養子被仰付候先例ハ多々御座候得共、血筋無之家筋續迄を以養子被仰付候先例段々相糺申候得共、似寄候例茂見當り不申候、右次第之續を以ハ養子御免可被仰付候哉、血筋無之者ニ而茂無據訳有之候ハ、可被仰付儀御座候得共、左様ニ茂相見得不申候、於御免ハ後例之障ニ者相成間敷哉と私共吟味仕候、然共右式似寄候例見當り不申候ニ付、究而ハ難申上御座候間、御詮議次第奉存候、以上、 寛延四年未八月廿三日 山 吉調、

覚

本文佐多衆中川口治右衛門直子無之、伊集院伊膳家来兒玉幸兵衛事無據血筋之者ニ候間、養子御免被仰付被下度旨願申出趣有之、調被仰渡、左之通御座候、

一 代々佐多衆中川口治右衛門曾祖父川口外記主取大工仕候、祖父川口治部左衛門行司役相勤候、親川口仲右衛門與頭役相勤申候、當治右衛門當分横目役相勤居候、

一 伊集院伊膳家来児玉幸兵衛祖父児玉伊兵衛、親児玉仁兵衛、當幸兵衛迄代々家来筋ニ而、家来衆并之奉公仕候、

右之通御座候、治右衛門与幸兵衛續之訳者、治右衛門姉幸兵衛親児玉仁兵衛江相嫁、當幸兵衛出生仕候故、治右衛門為ニハ幸兵衛事甥ニ而御座候、右式血筋之訳を以ハ、御座附・足輕又ハ人家来ニ而茂外城衆中養子御免被仰付候先例多々御座候間、治右衛門養子幸兵衛願之通御免被仰付候而茂何ぞ差支申儀ハ有御座間敷与吟味仕候、以上、

寛延四年未八月廿三日 山 吉調、

覚

藤原氏八田系圖

摂政兼家公次男道家公四代後胤

239の1

宗綱ムネツナ

八田權守 母中原大和守女 右大将頼朝卿ヨリ朝光カ母ニ賜下野國寒河郡并網戸郷、是ハ頼朝卿世ヲ知シ召ニ付テ古ノ苦身ヲ思召ツ、ケ、依有大功賜所也、

知家トモイヘ

八田右衛門尉 從五位下 宗綱次男也、

女

右大将頼朝卿乳母 小山下野大椽政光妻 小山七郎朝光母

東鑑

治承四年十月二日

二日辛巳、武衛相乘于常胤廣常等之舟楫、濟太井・

隅田両河、精兵及三萬餘騎赴武藏國、豊島權守清

光・葛西三郎清重等最前參、又足立石允遠(上脱カ)元兼日依(馬脱カ)

受命、為御迎參向云云、今日武衛御乳母故八田武者

宗綱息女、小山下野大椽政光妻、号寒河尼、相具鍾愛末子、參向隅田

宿、則召御前令談往事給、以彼子息可令致昵近奉公

之由望申、仍召出之、自加首服給、取御烏帽子授之

給、号小山七郎宗朝、後改朝光、今年十四歲也云云、

知重

八田太郎
左衛門尉
常陸介

所領常陸國小田与古系圖ニ
相見得申候

泰知

小田
奥太郎

法名玄朝
筑後 常陸介

泰重

高田八郎
左衛門尉

御系圖ニ相見得候
小田常陸介ハ此人
坎、乍然御系圖ニ
實名相記無之ニ付
難決候得共、御女
子年生を以相考候
ハ、此時知ニ相
當可申哉与奉存候

知定

筑後
左衛門尉

御系圖ニ相見得候小田筑後守ハ
此人坎、乍然御系圖ニ
實名書記
生を以相考候ハ、此
政知ニ相
當可申哉与奉存候

時繼

八田九郎左衛門尉

宗知

筑後 四郎左衛門尉

貞宗

太郎左衛門尉 常陸介

時宗

筑後 圖書介

時家

筑後 圖書介

知貞

筑後 彦四郎左衛門尉

右、寛保元年子十月 儀御用ニ付吟味之上書記

被差上候也、

寛

一 (綱貫) 大玄院様二度目之 御前様者上杉彈正大弼様綱憲御息女、

実者吉良上野介様義御女ニ而、彈正大弼様御姉ニ而御

座候、延寶三年卯二月廿九日、於江戸芝御屋敷御婚礼

御整被成候事、

一 延寶八年申八月八日 (光久) 寛陽院様江戸 御發駕、六月廿

七日、御國元江 御着城被成候事、

一 同年四月十八日 大玄院様為 御參觀御國元 御發駕、

五月十六日、江戸江 御參府被成候事、

一 同年十一月廿日之暮方 御前様御事御離別ニ而、上野

介様御方江御引取被成候、彼方より騎馬式騎為御迎被

參、此御方より茂騎馬步行被召附、致御供參候由、古

書付ニ見得申候、右御離別被成候儀者、酒井修理大夫

様・同軛負佐様より酒井雅楽頭様江御内談之上、修理

大夫様・軛負佐様より上野介様御方へ被仰入被為引取

候由、是又古書付之内ニ相見得申候事、

一 御離別以後寶永五年子九月廿五日御卒去、御法名 心

空院殿參雲貞清尼大姉与奉申由候事、

寛保二年丑三月

心空院様御位牌正建寺ニ被為建置候、心空院様御事ハ
 大女院様前御前様ニ而、被成御離別候得共、御嫡母之
 筋与思召之訳有之、從 (吉寛) 總州様寶永五年子為月牌料白
 銀拾五枚被為附置候、右之趣紛敷無之様可記置旨、内(顯
 膳殿妹久周)より被仰渡候事、

延享元年子九月

覚

本田孫右衛門三男 本田甚六

本文之通調書差上候処、二男御太刀進上仕候付、三男
 之儀弓進上ニ茂被仰付ニ而ハ有之間敷哉、孫右衛門類
 之家先例相糺可申出旨被仰渡候、依之相糺候処ニ、比
 志嶋善八家之儀 御直元服被仰付、御太刀・二種一荷
 進上被仰付家筋ニ候、去ル正徳二年辰五月、二男比志
 嶋小市 御目見申出候得共、右家二男 御目見先例無
 御座候付、 御直元服被仰付候家々者皆以二男迄御太
 刀進上被仰付事ニ御座候間、小市事御太刀進上可被仰
 付儀与調書差出候処ニ、被 仰出候者、善八家之儀
 御直元服被仰付事候得共、善八儀當分勤方ニ而二男御
 太刀進上不被仰付筈候処、弓進上被仰付候、先年二階

堂新五右衛門弟源助事 御目見之節弓進上被仰付候、

新五右衛門家 御直元服ハ不被仰付候得共、番頭相勤
 候ニ付、源助事弓進上被仰付候、善八二男之儀茂右源
 助例を以弓進上被仰付候由當座へ被仰渡候、右通 御
 直元服之二男さへ先例無之候得者弓進上被仰付事候、
 孫右衛門家元服之御礼仕家ニ而御座候、善八家より二
 等相下り申候、其上小番格ニ而嫡子御太刀・二種一荷
 進上、二男御太刀進上仕候家多々御座候、三男進上物
 例不相知者者皆以中紙進上被仰付事ニ御座候、右次第
 御格式之趣を以本文之通相調差上為申儀ニ御座候、此
 段申上候、以上、 寛延四年未七月廿五日
 川本

(本文書ハ、三三五号文書ト同一文書ニツキ省略ス)

覚

國分衆中江臼井名字之者有之、数年家跡断絶仕候間、
 此節國分衆中林伊左衛門弟林四郎左衛門事右跡養子被
 仰付被下度旨、長崎喜右衛門并林伊左衛門より願申出、
 調被仰渡、左之通ニ御座候、

一 白井家新系圖長崎喜右衛門方江所持仕居、白井家代々名書相見得申候、白井丹波与申者横川江罷居、其後國分江罷移候節屋敷返地目録其外古書状等是又喜右衛門方江所持仕、國分衆中別條無御座候、右丹波一子有之候處、長崎兵部跡養子ニ罷成、長崎六郎左衛門与申候、朝鮮國御掃陣之節子細有之、於壹岐嶋深野掃部兵衛与(重張)一所ニ切腹被仰付候、六郎左衛門一子仙右衛門事右式故長崎名字名乗候儀難成候間、祖父之名字曰白井ニ罷成、祖父丹波与一所ニ富之隈ニ罷移、其後願申出、長崎名字御免被仰付、長崎仙右衛門与申候、當長崎喜右衛門曾祖父ニ而御座候、然処ニ丹波名跡相絶申候、右仙右衛門子長崎六右衛門代ニ國分衆中堀切藤右衛門与申者跡養子ニ仕、白井藤右衛門与申候処ニ、違変仕、夫より白井名字及数十年断絶仕候、

一 國分衆中林伊左衛門祖父林喜兵衛事ハ長崎喜右衛門曾祖父長崎仙右衛門二男ニ而、養子ニ罷成候故血筋之親類ニ而御座候、

右之通先年國分衆中ニ白井名字之者有之、且又林家・長崎家親類之儀者別條無御座候、白井家之儀、

243

何ぞ訊有之断絶為仕ニ而茂無御座、養子ニ罷成者無御座候故、自然与及断絶候与相見得申候、御城下士之内ニ茂数十年及断絶候家外城養御免被仰付候者茂御座候、然者四郎左衛門事血筋之訊を以願申出儀ニ御座候得者、願之通被仰付候而茂何ぞ差支申儀ハ有御座間敷与奉存候、乍然御吟味次第奉存候、以上、
延享四年卯三月十一日 日安町川

覚

本田佐左衛門(事力)子家筋寄合ニ於被仰付者、何れ之場ニ連名可被仰付哉、内ニ相札可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一作左衛門家之先祖本田左衛門貞親与申者 忠久公御供(由親)仕初而御當國江被下、左候而、先祖共数代御家老御役相勤、於御當國本田氏嫡流ニ而御座候、御名代元服被仰付、御太刀・二種一荷進上仕、代々小番ニ被召入置候事、

一 相良源太夫先祖稻留新介与申者者求麻相良氏庶流ニ而、九代太守忠國公御代初而御當地江參上仕、其以後本名(長儀)

相良ニ相改、子孫数代御用人御役相勤、代々小番ニ被召入置候処ニ、祖父相良大藏代大御目附御役格ニ被仰付候付、家筋寄合被仰付、於御家老座御家老衆加冠ニ而元服被成下、御太刀・二種一荷進上候事、

一平田平太左衛門事ハ平田氏二男家ニ而、平太左衛門代大御目附御役ニ付家筋寄合ニ被仰付、御太刀・二種一荷進上候事、

一堀甚左衛門先祖堀七郎与申者 十一代太守忠昌公御夫人様御興添として豊後より相附参候、右子孫代々小番ニ被召入置候処ニ、祖父四郎太夫御家老御役ニ付家筋寄合被仰付、御太刀・二種一荷進上候事、

一小笠原郷左衛門事其身代御旗本より被召抱、代々小番ニ被召入置候処ニ、大御目附御役ニ付家筋寄合被仰付、御太刀迄を進上候事、

一鎌田太郎右衛門殿事ハ鎌田氏二男家ニ而、数代御用人御役相勤、代々小番ニ被召入置候処ニ、太郎右衛門殿御役ニ付家筋寄合ニ被仰付候、御太刀・二種一荷進上候事、

一鎌田一藤太事ハ鎌田氏庶流茶原氏二男家ニ而、数代御

用人御役相勤、代々小番ニ被召入置候処ニ、父衛衛事大御目附御役ニ付寄合被仰付、於御家老座御家老衆加冠ニ而元服被成下、御太刀迄を進上候事、此段不審ニ候事、

右人数之次第を以得与吟味仕候ニ、作左衛門家之儀者先祖共数代御家老御役相勤、殊更本田氏嫡流ニ而段々家之勲功茂有之、御名代元服を茂被成下候、

然者源太夫以下之面々小番より近年家筋寄合ニ被仰付候得共、作左衛門家筋ニ者及不申候、依之作左衛門事寄合於被仰付者、源太夫頭、北條織部殿差次ニ連名可被仰付儀与奉存候、乍然太郎右衛門殿事當御役之事情付、右より上ニ連名候儀如何ニ茂候ハ、太郎右衛門殿差次ニ可被仰付候哉、於此儀ハ御吟味次第奉存候、以上、

延享四年卯七月十二日 日安町

覚

國分衆中平田仁左衛門弟宮内式部左衛門与申者有之、百年餘家跡断絶仕居候、此節清水衆中泊權右衛門弟

泊利右衛門事血筋之次を以家跡相續被仰付被下度旨、
國分衆中平田利右衛門より願申出、調被仰渡、左之

通御座候、

一代々國分衆中平田利右衛門高祖父平田仁左衛門弟宮内
式部左衛門事宮内家之養子ニ罷成候、式部左衛門養父
何某共相知不申候、仁左衛門以前之儀茂系圖・文書等
所持不仕候故是又相知不申候、右仁左衛門・式部左衛
門庄内一乱之砌兄弟一所ニ戰死仕候、曾祖父平田次郎
右衛門事所衆并之御奉公相勤候、次郎右衛門妹有之、
清水衆中泊織部江相嫁申候、養祖父平田利右衛門事ハ
御城下士徳永對馬三男ニ而候處、右次郎右衛門聳養子
ニ罷成、噺役相勤候、親平田仁左衛門與頭役相勤、當
仁左衛門噺役相勤申候、右代々家筋之詛當座江相知不
申候故、國分噺方江問届申候処ニ、右之次第申出、別
条有御座問敷与存申候、

候、織部妻者平田次郎右衛門妹ニ而御座候、曾祖父泊
助兵衛、祖父泊七右衛門兩代共ニ勤方相知不申候、親
泊七兵衛郡見廻役相勤候、嫡子權右衛門横目役相勤申
候、二男當泊利右衛門ニ而御座候、高祖父織部以來血
筋無斷絶相見得申候、尤系圖・古書附等所持不仕候故、
家筋之詛當座へ相知不申候ニ付、是又清水噺方へ問届
申候処ニ、右通申出、別条有御座問敷与存申候、

右之通御座候、國分衆中宮内式部左衛門与申者有之、
慶長四年亥冬庄内一乱之砌、兄平田仁左衛門一所ニ
宮原与申所ニ而戰死仕
候、此儀者當座戰死帳之内ニ兄弟共ニ相見得、別条
無御座候、且又(義久)龍伯様御代國分御番帳ニ茂式部左
衛門大番相勤候与相見得申候、右仁左衛門娘式部左
衛門為ニハ姪ニ而候処ニ、泊織部へ相嫁、當泊利右
衛門曾祖父泊助兵衛致出生、夫より以來血筋相續仕
来候与相見得申候、然者國分衆中白井名字之者有之、
及数十年名跡致断絶居候処ニ、同所衆中林(伊脱之)左衛門弟
林四郎左衛門事血筋親類之詛を以、去ル延享四年、
跡養子之願申出候、尤曰井家新系圖・古書状等所持
仕居、別条無御座候故を以、願之通御免被仰付候、

此節式部左衛門名跡及百五拾年餘断絶仕居候、何そ
 詔有之断絶為仕ニ而茂無御座、養子ニ罷成候者無御
 座候故、自然与及断絶候与相見得申候、利右衛門事
 血筋相續仕居申事ニ御座候間、系圖・古書付等ハ所
 持不仕候得共、噫共より申出候趣別条有御座間敷与
 相考申候、殊ニ式部左衛門戦死仕候詔を以ハ、家跡
 養子御免可被仰付儀与奉存候、御城下士之内ニ茂
 数十年及断絶候家外城養子御免被仰付候者茂御座候
 間、血筋之詔を以願申出儀ニ御座候得者、願之通被
 仰付候而茂何そ差支申儀ハ有御座間敷与私共吟味仕
 候、乍此上御詮議次第奉存候、以上、

寛延四年未八月廿九日 山吉調、

(二六五号ハ関連系図ナリ)

覚

島津權太郎繼目御禮之儀願被申出、親類祢寢孫左衛
(清香)
 門より茂願被申出趣有之候付、吟味仕候而可申出旨
 被仰渡、左之通御座候、

一御家御元祖 三郎様七歳之御時京都より鎌倉江御下向、

於鶴岡八幡宮寶前御元服、畠山次郎重忠加冠ニ而被稱
 忠久公、被任左兵衛少尉、初而頼朝卿江御目見、御
 寶刀御拜領被遊候事、

一從(光久) 寛陽院様至 慈徳院様 御代之様御家ニ而被遊御

中(卿方) 其後 公方様江 御目見、被稱御元服御初任ニ

而御腰物・御一字御稱号等御拜領被遊来候事、

一(重年) 太守様去之年 御出府、御跡職御相續被 仰出、

公方様江初而 御目見、被稱御元服御初任御先格之通

御拜領等被遊、其以後御家督之御禮被仰上候事、

一御家之儀 頼朝卿御子孫様ニ而被遊御座候故、御一族

其外諸家之歴之 御直元服古来より之御作法、其家之

ニより御腰物・御脇差・ 御加冠之御折紙等拜領被仰

付、為被準初任御旧式与相見得申候、尤元服人名替、

實名を茂初而被相用事ニ御座候得者、為差立詔ニ御座

候、右式故古来之歴之者自然与下司を茂被用來候由候

事、

一(吉貫) 淨國院様御代 御直元服 御前元服、元服之御札 御

内證元服被仰付候家之別而御吟味之上 思召茂有之、

元服人進上物等迄依其家之御格式為被究置御事ニ御座

候、且又 御目見次第御格式之内ニ茂 御直元服、

御名代元服、元服之御禮、御役地頭職家督繼目初而之御目見之次第被仰付置候事、

一享保十五年戌八月十一日、島津助之丞事繼目養子成之御禮其身直ニ被申上候、同年十二月十五日 御直元服被仰付候事、

一享保十六年亥正月十八日、諏訪次郎左衛門繼目之御礼願被申出候処ニ、同三月朔日 御直元服被仰付、同年五月朔日、繼目之御礼被申上候事、

一延享二年丑二月朔日、種子嶋藏人繼目之御礼名代を以進上物差上、御礼被申上、同月十五日 御直元服被仰付候事、

一當八月朔日、北郷袈裟八郎繼目御礼其身直ニ被申上候、袈裟八郎家ハ 御前元服被仰付家格ニ而御座候事、

右段之次第二御座候、當座へ為被仰渡儀者無御座候得共、與中之諸士丸額ニ而者 御目見不被仰付事

与相見得申候、近年ニ茂丸額之者 御目見ニ罷出候當日御沙汰茂有之候哉、於 御城致中^(御力)、御目見被仰付候者茂御座候、 御家御代ニ様被遊御中^(御力)、

以後 公方様江初而 御目見被遊御事ニ御座候、右

ニ者準シ不申筈ニ御座候得共、寄合并以上之家^(御力)ニ丸額ニ而者 御目見不被仰付筈歟与乍憚相考申候、

然者 御直元服・御前元服之儀者 御家ニ而茂為重立御旧式、其家之別而規模ニ而御座候故、元服人部屋栖之内元服・初而 御目見仕候儀本意ニ御座候、然共亡父繼目茂無據諷故、御礼被申上事ニ御座候、諏訪次郎左衛門儀ハ繼目之御礼願被申出置候処

ニ、何様之訳ニ而御座候哉、 御直元服被仰付、其後繼目御礼被申上候、種子嶋藏人儀者依願繼目御礼名代を以被申上、其後 御直元服・初而 御目見為

被仰付儀与相見得申候、右例を以ハ、權太郎事此節繼目御礼者名代又ハ進上物納ニ被仰付、追而 御直元服・初而 御目見被仰付度儀与吟味仕候、乍然島

津助之丞繼目養子成御礼直ニ被申上、其後 御直元服被仰付候、其御當座江吟味為被仰渡儀茂可有之哉与段ニ相札申候得共、相知不申候、此節北郷袈裟八

郎事茂繼目御礼直ニ被申上候、右面家何様之儀ニ而右通被仰付候段、當座へハ相知不申候、右通之儀茂

御座候得者、私共ニ茂究而ハ難申上御座候間、此上者御詮議次第奉存候、以上、

寛延四年未九月十三日 山吉調、

伊勢兵部窺(貞起)

覚

種子嶋(久遠)八郎次

右者、亡父種子嶋(久遠)正繼目被 仰付候付、未元服を茂不仕候得共、御序之節家格之通御太刀・銀馬代・三種二荷進上仕、御礼申上度旨願申出候付、御記録奉行江相しらへ候處、願之通進上仕来候旨申出候間、願之通被仰付候而茂可有御座哉、先年北郷作左衛門繼目同苗市次郎江被仰付候節、御礼願并元服之願同日ニ申出、元服被仰付候以後繼目御礼被仰付候例御座候、八郎次儀未元服之願不申出候得共、先例之通元服被仰付候以後繼目御礼申上候様被仰付候ハ、其内繼目御礼之儀者扣置、元服願申出、元服被仰付候以後申渡候様可仕哉、何分ニ茂 御意次第可申渡与御家老江茂申談奉伺候、以上、 延享二年丑正月

朱書

本文御直奉伺候処、繼目被仰付候付而ハ御礼延引如何ニ候、元服未相濟候得共、御礼願之通御太刀・銀馬代・三種二荷進上可申渡候、元服未相濟幼少之者之時候間、名代を以進上仕候様可申渡候、向後之儀、右之通首尾可致之旨 御意候、

覚

相良源太夫嫡子

相良新右衛門

小笠原郷左衛門嫡子

小笠原彦之進

右者、寛延四年未九月十五日、於 御本丸梅之間御家老鎌田典膳殿加冠ニ而御内證元服有之、理髮御側御用人本田孫右衛門相勤候、元服人支度熨斗目半上下着用ニ而候、左候而、當日御礼日ニ而候故、於 御書院右兩人家格之進上物ニ而初而之 御目見被仰付候、尤支度ハ熨斗目長上下着用有之候、此段後年為見合書記置候、以上、

御記録方添役

本田七右衛門(親左)

寛延四年未九月十六日

吉田用右衛門(清純)

右書付、元服御格式帳之内ニ書載之候也、

覚

河野八郎左衛門養子河野安之右衛門嫡子

河野壽市郎
後安平太

右、此節 思召を以御内證元服被仰付候旨被 仰出、

寛延四年未九月廿八日、於梅之間御家老衆加冠、御側

御用人衆理髮ニ而、即日家格之進上物御太刀・二種ニ

荷進上ニ而初而之 御目見被仰付候事、但未九月十九日、

書付被仰
渡候事

自兵部殿以御

但御内證元服家格六家ニ相成候事、

覚

伊集院弥五兵衛

本文進上物調被仰渡候、伊集院仁左衛門家中紙進上

仕来申候処ニ、仁左衛門事 (宗信) 慈徳院様御守役・御用人

格、地頭職被仰付置候内、養子伊集院彦右衛門養子成

之御礼申上候節、御太刀進上被仰付候、繼目御礼申上

候節茂御格式之通御太刀進上ニ而御礼申上候、其以後

彦右衛門事養子致違変、本家ニ立帰申候、依之上村茂

兵衛弟上村平右衛門事右仁左衛門跡養子ニ罷成、伊集

院平右衛門与申候、仁左衛門家跡養子成之御礼不相濟

内、於江戸相果候、然者彦右衛門仁左衛門家之世代ニ

者入り不申、平右衛門事直ニ仁左衛門養子ニ為被仰付

儀候へハ、彦右衛門於仁左衛門家御太刀進上仕候儀ハ

相消申候、御格式を以ハ、親地頭職御免被成候以後子

孫 御目見之節ハ、弓進上可被仰付旨被究置候、右を

以相考候得者、平右衛門事一代進上物致中絶候ニ付而

ハ、弥五兵衛事御太刀進上ニ者難被仰付儀与奉存候条、

御格式之通弓進上可被仰付儀与奉存候、以上、

寛延四年未十月十四日 用 平 用調之、

覚

本文調被仰渡候、三嶋利兵衛事ハ三嶋存覚院三弟ニ而

候処ニ、存覚院男子無之、繼目養子ニ被仰付、高祖父

三嶋大坊事者 (義久女・龜寿) 國分様御祈禱山伏相勤申候、其後 (家)

納言様御代御當地江被召移候而、御扶持被下候、曾祖

父三嶋及圓坊山伏職相勤候、祖父三嶋存行院 (綱貫) 大玄院

様御代御代山伏相勤申候、養父三嶋存覚院御看經方山

伏相勤候、實ハ兄ニ而御座候、當利兵衛事先年道之嶋代官附役相勤、當分 御本丸奥大番相勤居申候、尤代
々 御城下士ニ而御座候、以上、

覚

三嶋利兵衛直子無之候付、田代衆中迫田仲右衛門嫡子迫田傳右衛門事養子被仰付被下度旨願申出趣有之、調被仰渡、左之通御座候、

一三嶋利兵衛事ハ三嶋存覚院三弟ニ而候処ニ、存覚院男子無之、繼目養子ニ被仰付候、高祖父三嶋大坊事ハ國分様御祈禱山伏相勤申候、其後 中納言様御代從國分御當地江被召移候而、御扶持米被下候、曾祖父三嶋及圓坊山伏職相勤候、祖父三嶋存行院 大玄院様御代御代山伏相勤申候、養父三嶋存覚院御看經方山伏相勤候、実者兄ニ而御座候、當利兵衛事先年道之嶋代官附役相勤、當分 御本丸奥大番相勤居申候、尤代々 御城下士ニ而御座候、

一代々田代衆中迫田傳右衛門高祖父迫田傳助、曾祖父迫田傳兵衛兩代共ニ所衆并之御奉公相勤候、祖父迫田長

左衛門事同所衆中井手籠仲左衛門二男ニ而候処ニ、右迫田傳兵衛養子ニ罷成候、與頭・暖添役等相勤候、親迫田仲右衛門當分暖役相勤居候、當傳右衛門事所衆并之御奉公相勤申候、

右之通御座候、外城養子之儀者、所高持越候者者御免可被仰付由御格式被定置候、然者迫田傳右衛門事代々田代衆中ニ而、所高持越養子成之願申出候付而ハ御格式ニ相當り申候条、願之通養子御免可被仰付儀与奉存候、以上、

寛延四年未十月四日 吉川 吉調、

覚

本文山田新助^{有從}三男山田一郎兵衛初而之 御目見願被申出、進上物調被仰渡候、新助家三男 御目見進上物先例無御座候、然者寛保元年酉十一月蒲生十郎左衛門御證文を以被仰渡候者、山田新助事先年不宜儀有之、御役御免被成候得共、近年被召出、段々御役を茂被仰付候ニ付而ハ、専心懸可相勤事候処、御役不相應之事共有之、其上 ^{（雜思）}御隠居様御方江書付を以申上候儀共被遂

御吟味候処ニ、自分之宜筋ニ申上候事旁不屈ニ被思召候、依之御役被成御免、地頭職被召上、持高半地被召揚、小普請ニ被仰付候、先祖代御奉公之功ニ付、御憐愍之上家格之儀者此内之通被建置候、嫡子 御直元服・家付而之年頭之御礼・八朔進上物者向後不被仰付候、右之通今日被仰付候条、諸事如何可被申渡旨、主計殿御差圖ニ而候由被仰渡置候、右を以ハ家被相建置候迄ニ而御座候得者、餘家ニ準候而相調可申様茂無御座候、殊更三男 御目見先例茂無之事情条、一郎兵衛事中紙進上可被仰付儀与吟味仕候、以上、

寛延四年未十月六日 川 吉調之、

右、山田一郎兵衛中紙進上ニ而 御目見被仰付候也、

島津圖書殿御座席之儀ニ付而、(久光、宮之藏家、吉貴男) 淨國院様御代段々被 仰出置候御書附ニ押紙ニ而申出候書付左之通ニ候、相封候而御側御用人本田孫右衛門を以主殿殿へ被差上置候、(親房) 淨國院様御代之御書付者越前嶋津家一卷帳之内ニ委細書留有之、右を寫候而差出置候、

去ル廿三日、島津圖書殿事島津大学次(久章、花園家)ニ而御料理 御盃頂戴被仰付候、御本文之通ニ者相違仕候付申上候、向後右通之次第ニ被仰付候而者 総州様思召茂相立不申候、 御逝去被遊候而茂御存生之通ニ社可有御座儀与乍恐奉存候、都而當時之御格式茂 總州様為被究竟御作法ニ御座候、 御家督之御祝其外御規式事茂年頭御礼之次第を以着座可被仰付儀ニ御座候、尤歴之之家筋年頭御礼を以家格為被相立事ニ御座候条、乍憚御本文之通可被仰付儀与奉存候、以上、

未九月廿五日 山 本 吉 川 川調之、

右之通申出置候処ニ内ニ傳承ハ、申出之通向後被仰付筋ニ相成候由傳承之候、右一卷ニ付而ハ、去ル廿三日、於御家老座主鈴殿(島津久郷)より被仰聞御用筋有之、相馬殿御得心無之、段々御直ニ被仰聞訊共有之、向後共ニ御規式ニ付表方へ圖書殿列座之節ハ、御二男家大身分次ニ着座有之筈ニ被仰渡候故、右御書付寫候而差上置候処ニ、又々御書付之通ニ相成候由ニ候事、

一御本文之内、御規式事等之節只今之大身分之内ニ而者

圖書殿上座之筈之由相見得候事、

右次第ニ付而ハ、段々六ヶ敷事共ニ而候処ニ、先首尾好相納り候事、委曲書記置不申候、

覚

来申年頭、御家老・若御年寄・大御目附於 御書院持参太刀着座、御盃頂戴被仰付事ニ候、右人数之内嫡子依願而ハ家格之席ニ罷出候得者、其親之御礼着座之席可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一 正徳元年卯九月廿五日 總州様御代以御書附被仰出、當座へ茂被仰渡置候、右御書付寫、

御書院

一 御城代・御家老・若年寄・大目附年頭御太刀置所ニ之間上より二帖目之上、

一 若年寄・大目附着座無之ハ三帖目之上、

一 御城代・御家老・若年寄・大目附 御盃上之間下より

二帖目之上、

一 着座無之若年寄・大目附 御盃ニ之間上より一帖目之下、

右 仰出之趣を吟味仕候趣左ニ申上候、

一 御家老之儀、着座之家筋又ハ着座無之面々一列ニ持参太刀着座被仰付事ニ御座候、

鳥津将監(久起)

一 右、若御年寄之場ニ而持参太刀着座、御太刀置所ニ之間上より二帖目之上、御盃頂戴上之間下より二帖目之上、

島津内記(久勝)

一 右、依願嫡子家格之場ニ被罷出候ハ、内記事若御年寄之場ニ而持参太刀着座無之、御太刀置所 御盃頂戴所将監同断、

河野八郎左衛門(通奥)

一 右、若御年寄之場ニ而持参太刀着座無之、御太刀置所三帖目之上、御盃頂戴ニ之間上より一帖目之下、

川田伊織(国格)

一 右、依願嫡子家格之場ニ被罷出候ハ、伊織事大御目附之場ニ而持参太刀着座無之、御太刀置所ニ之間上より二帖目之上、御盃頂戴所上之間下より二帖目之上、

新納内蔵(久忠)

右、依願嫡子家格之場ニ而被罷出候ハ、内蔵事大御目附之場ニ而持參太刀着座無之、御太刀置所三帖目之上、御盃頂戴所ニ之間上より一帖目之下、

高橋縫殿(種善)小林左内(政二)

右、大御目附之場ニ而持參太刀着座無之、御太刀置所 御盃頂戴所右同断、

右之通可被仰付儀与奉存候、以上、

寛延四年未十一月廿二日 山本吉川

右本文 御盃頂戴所、奏者番方繪圖之面ニ、上之間下より四帖目之上ニ記付有之候、右ニ付而ハ寛延四年未十一月廿二日當座調書之内ニ委細相記置候、但上之間与有之候ハ、御書院上段ハ相除ニ之間之事ニ而候、其次ハ三之間ニ而候也、後年為考相記置之、

寫寫

元日於 御書院持參太刀之節

御盃頂戴所

一二之間末敷居より上江五枚目疊頭

島津備中殿(貞徳)

一右同四枚目疊頭

御家老・若御年寄・大御目附

一右同三枚目疊頭

御側詰

右之通、来年頭より 御盃頂戴之席被仰付候段、延享

四年卯十二月被相定候条、此段可承御役々江可申渡候、

但備中殿當分ハ於 御座之間 御盃頂戴有之候付

無用候、

寛延四年 未十一月

(島津久起)
將監若御年寄役
島津將監殿ニ而候、

寫寫

若御年寄・大御目附着座有之家筋之面々者、元日於

御書院持參太刀ニ而着座被仰付事候得共、家格付而之

御太刀御格之通夫々之席ニ而嫡子を以進上仕候様ニ被

仰付置趣候間、御役之場ニ而御太刀進上之人ハ不及着

座、家格之場ニ而嫡子御太刀進上無之人茂向後不及着

座筋被仰付候、但自分覚、右伺書ハ島津主鈴殿より
被仰出候与御用帳ニ相見得申候、

右之通延享四年卯十二月被相定候条、此段可承御役

々江可申渡候、

寛延四年未十一月

(島津久起)
将監

別紙式通之通被仰渡候間、致通達候、以上、

十一月廿七日

(久東)
伊集院十藏

右式通、於表御用人座用右衛門致承知之、書寫置候

事、

寫 寫

来年頭之御規式并支度等迄 (雜惣) 隅州様御家督初而年頭御

規式之節之通被仰付候条、右之趣を以御手當可申渡候、

自分覚、此已後及兩度段々被仰渡御書付有之、不寫置候、

右之通可承座々江ハ可申渡候、

寶曆元年未十二月

(島津久起)
将監

一右寶曆改元去ル十一月三日於江戸被 仰出候段承知之、

但十二月廿七日、於

御本丸敷舞臺島津主殿より
諸御役人限直ニ被仰渡之候事、

覚

一島津十太右衛門より已閏十一月三日御用ニ付、安藤左

平次(真)罷出候処ニ、伊集院十藏江戸詰被仰付候付、公

義江相係り候儀ニ付而者御役名若年寄并与唱候様ニ被

仰付候、向後大御目附御役之人 公義江相係り候儀有

之節ハ、右通相唱候様ニ被仰渡候通達御書付有之候、

元文二年丁巳要用首尾簿ニ有り、

覚

本文勝岡衆中池田九郎右衛門直子無之候付、比志嶋

(集) 集人家来古川為藤次事無據血筋之者候間、養子御免

被仰付被下度旨願申出趣有之、調被仰渡、左之通御

座候、

一勝岡衆中池田九郎右衛門親池田九郎兵衛事ハ代々同所

衆中池田甚右衛門弟ニ而、家内ニ罷居候処ニ、九郎右

衛門代元文二年辰十月、初而別立申候、

一古川為藤次親ハ代々山之口衆中古川鶴右衛門与申候、

鶴右衛門事山之口の場八幡宮市内侍正市娘市龜ニ取合、

右為藤次致出生候付、御法違之子故正市家内ニ被召入

置、其後寺社奉行所御免之上、比志嶋隼人方江永代ニ

(範房)

召抱家来ニ罷成、古川為藤次与申候、右衛門事ハ古川早左衛門弟ニ而、父古川早太、祖父古川鶴右衛門ニ而候、為藤次親鶴右衛門母ハ勝岡衆中神宮司利右衛門娘ニ而、利右衛門事ハ同所衆中池田九郎兵衛弟ニ而、神宮司家養子ニ罷成候、

右之通御座候、九郎右衛門与為藤次續之詛ハ、為藤次親鶴右衛門母ハ神宮司利右衛門娘ニ而候、利右衛門事ハ九郎右衛門親池田九郎兵衛弟ニ而、神宮司家養子ニ罷成候故、九郎右衛門為ニハ為藤次親鶴右衛門ハ從弟違、為藤次与ハ又從弟ニ而御座候、為藤次事最初正市家内ニ而罷居申候得共、其以後家来ニ御免為被仰付置儀ニ御座候、然ハ血筋之詛を以ハ御座附・足輕又ハ人家来ニ而茂外城衆中養子御免被仰付候先例多々御座候間、九郎右衛門養子為藤次願之通御免被仰付候而茂何ぞ差支申儀ハ御座有間敷哉与吟味仕候、以上、寛延四年未十月廿六日 用調之、

池田九郎兵衛——當池田九郎右衛門

古川鶴右衛門

古川早太
妻利右衛門娘

258

神宮司利右衛門—女子

古川鶴右衛門母

古川早左衛門

古川鶴右衛門—古川為藤次

覚

木藤四郎次

本文初而高持成之願申出、家筋調被仰渡候、木藤四郎次事木藤彦左衛門弟ニ而、此節別立被仰付候、亡父木藤休八郎事ハ當木藤五郎右衛門祖父木藤長左衛門二男ニ而、初而別立申候、長左衛門事ハ國分衆中坂本休左衛門末子ニ而御座候處ニ、代々御城下士木藤覺兵衛養子ニ罷成、横目役相勤申候、亡父休八郎事御家老座筆者相勤候、其後納殿御役相勤、一代新御番ニ被召入置候、當四郎次事右休八郎二男ニ而御座候、當分何ぞ勤方無御座候、尤大番相勤申答之家筋ニ而御座候、以上、未十一月三日 三人 用調之、

覚

(郡城家)

本文調被仰渡候、筑後家嫡子 御直元服被仰付候節ハ、筑後内より茂御樽肴御近習役江相附、中押を以進上被

仕来候由、當座へ相見得申候間、此節茂先例之通筑後内より御樽肴進上可被仰付儀与奉存候、以上、

未九月 二八 用調之、

覚

島津(久章・花園家)大学嫡子島津千次郎事 御直元服被奉願、進上物

調被仰渡、左之通ニ御座候、

一享保五年子六月、當大学 御直元服之願有之候節、當

座へ調被仰渡候付、當座より調書差上候趣左ニ申上候、

此間ニ享保五年子五月十九日 御目見調帳之内ニ有

之候調書加候、

一右調書差上候処ニ、左之通被仰渡候、

此間ニ仰出之書付入、子五月廿四日要用帳ニ有之候

趣書入候、

右之通、當大学 御直元服之節、進上物之儀島津備(貴)

中殿家格之通御太刀・御刀・現御馬・折拾貳合・御

樽五荷進上可被仰付儀与右通吟味書差上候処ニ、島津圖書殿家之進上物可書出旨被仰渡候、右家之進上

物ハ御太刀・現御馬・折六合・御樽五荷進上ニ候故、

其趣申上候処ニ、當大学事御太刀・馬代・折拾貳

合・御樽五荷進上被仰付候、其節島津出雲家元服之

節ハ、御太刀・鞍置御馬・折拾貳合・御樽五荷進上

仕来候得共、祖父島津遊閑元服之節、所帯方難續候

付御断被申上、御太刀・馬代・折六合・御樽三荷進

上有之、其以後親左衛門元服之節より家格之通御太

刀・鞍置御馬・折拾貳合・御樽五荷進上被仰付候、

大学元服之節調書ニ遊閑進上物書出候付、遊閑家ニ

御引當無之、備中殿家・圖書殿家進上物之中を御取

被成、大学事御太刀一腰・御馬代・折拾貳合・御樽

五荷進上為被仰付与相見得申候、出雲家之進上物其

節委數相知申候ハ、同御二男家之事情故同格ニ被

仰付筈ニ御座候、然ハ此節千次郎元服之願被申出、

進上物之儀同格之内ニ茂御刀一腰并鞍置御馬進上仕

候茂有之候間、千次郎ニ茂同様ニ被仰付度由被申出

候、此儀者專島津筑後家ニ引當願之筋与相考申候、

筑後家之儀者御家中一之大身ニ而御座候故、乍御六

男家以前より右通被仰付候与相見得申候、先調之通、

備中殿家格之通ニ茂可有之哉与詮議仕候得共、備中

殿家御一門之家格ニ被安置候得者、其通ニ茂難被仰付候、依之此節得与吟味仕候処ニ、當大学元服之節迄ハ親周防殿事未一所之地茂無之一所持格ニ而有之、又者出雲家之進上物委敷調書ニ書出不申候故、御太刀・御馬代・折拾式合・御樽五荷進上被仰付候半与今更乍憚奉存候、其以後享保九年辰六月、花岡一所之地拜領被仰付、年頭御禮着座之次第茂島津出雲・島津大学与被仰付事ニ御座候、又ハ於嚴殿事大学方江御縁與有之、大学家結構ニ被仰付候、右ニ付而ハ、千次郎元服之節進上物品能方ニ可被仰付儀ニ御座候、左候へハ、出雲家之儀右ニ茂申上候通、御太刀一腰・鞍置御馬壹疋・折拾式合・御樽五荷進上被仰付儀ニ御座候間、千次郎事出雲家同様ニ進上物被仰付候ハ、相當可仕儀与吟味仕候、以上、

寛延四年未十一月十九日 川山 本吉
川調之、

右之通調書差上置候処ニ、來ル廿五日、千次郎御直元服被仰付候由、主殿より内記殿へ被仰渡候御書付忝通御記録所へ被成御渡候、右ニ御書付之

260

覽

面、右調書之通ニハ不被仰付、大学元服之節之通之進上物被仰付候、然ハ大学殿家格之進上物ニ願之筋一向不相濟候、後年為考書記置之候事、

寶曆元年未十二月十六日ニ被仰渡候、

此節御一門より御役人江御料理被下候付、島津玄蕃殿事右人数ニ可被召加候哉、且又寄合并之儀何れ之場ニ而御料理 御盃頂戴可被仰付候哉、致吟味可申出旨被仰渡候、

一 玄蕃殿事部屋栖ニ而御座候得共、元來其身ニ付而ハ無據事ニ御座候、月次御禮ニ茂御一門家督之差次ニ被罷出事候間、此節之儀、御料理被下候人数ニ被召加、備中殿・周防殿・玄蕃殿与次第可被仰付儀与吟味仕候、

一 寄合并之儀、月次等ニハ御近習役次ニ御礼等被仰付事ニ候得共、屹与寄合并与家格為被定置事候間、此節之儀格別之儀ニ御座候間、家格之場ニ而御料理 御盃頂戴可被仰付儀与吟味仕候、

右兩條私共吟味仕候趣如此御座候、以上、

寛延四年未九月廿一日 山 本 吉 川 吉調之、

右調書差上候処ニ、主鈴殿(島津久郷)より被仰渡候ハ、此節

ハ家督之人計御料理被下候付、部屋栖玄蕃殿ニハ

不被下候、重而御見合を以可被下旨用右衛門(香田清純)へ被

仰聞候、且又寄合并面々、御盃ハ御近習役次ニ而

被下、御料理ハ家格之場ニ而被下候由被仰聞候事、

覚

中村善之進

本文初而高持成之願申出、家筋調被仰渡候、中村善之

進事ハ中村喜八兵衛二男ニ而、兄當中村喜多右衛門家

内より寛延二年巳十二月初而別立被仰付候、亡祖父中

村怡阿弥事當中村與右衛門曾祖父中村與兵衛二男ニ而、

初而別立、御書院役人相勤申候、亡父中村喜八兵衛事

(綱貴女)於栄様御方納殿役人相勤申候、兄中村喜多右衛門事

(吉貴)淨國院様御代御小納戸役相勤、十人御賦被下、一代小

番ニ被召入置、當分(継豊側室・宗信生母)於嘉久様御方納殿御役相勤申候、

當善之進事御家老座御側方筆者相勤罷居申候、尤代々

御城下士ニ而、大番相勤申答之家筋ニ而御座候、以上、

未年 山 吉 用調之、
寛延四年

覚

本文家筋調被仰渡候、國分衆中坂本惣兵衛事ハ當坂本

休兵衛二男ニ而、去ル巳年別立申候、惣兵衛七代之祖

坂本休兵衛最初田布施衆中ニ而候処ニ、文祿四年龍

伯様富隈江御在城之節、田布施より國分へ罷移、御

城内江被召置、龍伯様(義忠)惟新様(家久)中納言様江御奉公

仕、於諸所之戰場軍勞仕候、六代之祖坂本彦右衛門慶

長二年 惟新様高麗國江御渡海之節致御供軍勞仕候、

同三年極月 御帰朝、直ニ伏見・大坂へ致御供相詰申

候、同五年九月、関ヶ原御合戦之節致御供軍勞仕候、

高祖父坂本休左衛門(光久)寛陽院様御代江戸御供仕、御帰

国之節、寛永十五年肥前國天草土民一揆之節茂御供仕

候、其後噺役相勤、曾祖父坂本彦右衛門所衆并之御奉

公相勤申候、祖父坂本休左衛門江戸詰仕、其後噺役相

勤申候、親坂本休兵衛是又江戸詰仕、當分噺役相勤居

申候、惣兵衛事所衆并之御奉公相勤申候、尤代々國分

寛延四年未十一月廿六日

山本
吉調之、

覚

本文本田仲右衛門相果、直子本田新七事重富家来ニ罷成、外ニ男子無御座候付、谷山衆中堀喜左衛門嫡子堀八之進事養子御免被仰付被下度旨、親類木場四郎左衛門・野元源助より願申出趣有之、調被仰渡、左之通ニ御座候、

一本田仲右衛門祖父本田仲右衛門諸檢者等之御奉公相勤申候、亡養父本田茂右衛門御書院方筆者役相勤申候、

仲右衛門事ハ松元十左衛門二男ニ而候処ニ、右茂右衛門直子無之候付、養子ニ罷成候、諸檢者等之御奉公相勤、先頃相果申候、祖父以前之儀ハ相知不申候、

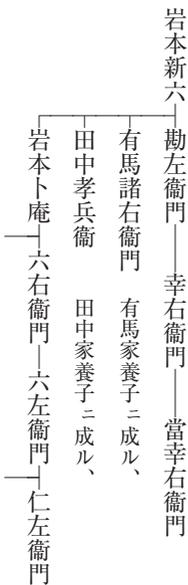
一代ニ谷山衆中堀八之進高祖父堀休左衛門慶長十六年之比清敷より谷山へ被召移、噺役相勤候由申出候、曾祖父堀吉右衛門、祖父堀六太夫兩代共ニ噺役相勤候、親堀喜左衛門當分與頭役相勤居候、八之進事茂當分横目役相勤居申候、

右之通御座候、外城養子之儀ハ所高持越候者ハ御免

可被仰付由御格式被定置候、然者堀八之進事谷山代ニ衆中ニ而、所高持越養子成之願申出候付、御格式ニ相當り申候条、願之通養子御免可被仰付儀与奉存候、以上、 寛延四年未十月晦日 山本 吉調之、

覚

本文初而高持成之願申出、家筋調被仰渡候、岩本瑞哲事者當岩本仁左衛門亡父岩本六左衛門弟ニ而、去ル享保二十一年辰三月、別立被仰付候、瑞哲亡祖父岩本卜庵當岩本幸右衛門曾祖父岩下新六^{本カ}四男ニ而、初而別立、醫道仕候、亡父岩本六右衛門小役人相勤申候、瑞哲事右六右衛門二男ニ而、當分御側醫師相勤居申候、尤代ニ御城下士ニ而、大番相勤申家筋ニ而御座候、以上、 未十二月朔日 二人



(ママ) 瑞哲

壽昌

七郎左衛門

覚考積

國分衆中
平田仁左衛門娘

慶長四年生ル、織部妻

清水衆中
泊助兵衛
寛永五年生ル、
母三十歳計之子、

泊七右衛門

正保三年生ル、父助兵衛十九歳計之子、

泊七兵衛

延寶七年生ル、父
三十四才之時之子、

泊權右衛門
父三十一才之時之子、

泊利右衛門
父三十八才之時子、

(本系圖ハ二四四号ノ付記ナルベシ)

覚

本文御納戸附代々士兒玉市右衛門事 御城下士本田

休左衛門江由緒有之者ニ候間、休左衛門家跡養子御

免被仰付被下度旨願申出趣有之、調被仰渡、左之通

御座候、

一兒玉市右衛門養祖父兒玉市左衛門事御納戸附代々士ニ
而、肝煎役数十年相勤申候、市左衛門以前之儀ハ相知
不申候、亡父兒玉安左衛門事ハ 御城下士當松岡長右
衛門曾祖父松岡休左衛門四男ニ而候処ニ、右市左衛門
直子無之養子ニ罷成、肝煎役相勤申候、右休左衛門事
ハ其身代長門國より 御城下士ニ被召抱、御用紙漉調
被仰付候、當市右衛門當分御納戸方押番相勤居候、

一當本田休左衛門亡父本田嘉平次事ハ休左衛門祖父本田
休右衛門二男ニ而、初而別立申候、當休左衛門高祖父
本田九左衛門納殿御役相勤申候、九左衛門以前之儀ハ
相知不申候、右妹松岡休左衛門江相嫁、兒玉安左衛門
致出生候、曾祖父本田休右衛門是又納殿御役相勤候、
祖父本田休右衛門新御番ニ而江戸詰仕、代々新番ニ被
召入置候、養父本田勘助當分御徒目附相勤居申候、右
勘助直子無之候付、甥當休左衛門嫡家養子ニ罷成候、
右之通ニ御座候、市右衛門・休左衛門由緒之訳ハ、
市右衛門實祖父松岡休左衛門妻ハ本田九左衛門妹ニ
而、右腹ニ安左衛門致出生、兒玉家養子ニ罷成候故、

當本田休左衛門与ハ又ニ從弟之續ニ而、血筋別條無

御座候、然者桐野權右衛門事桐野仲左衛門弟ニ而、

其身代別立、直子無之極貧者ニ而、老後致介抱他借

等相弁候者無之、御城下士之内養子ニ罷成者茂無

之候付、御兵具所附代ニ桐野彦右衛門事權右衛門

父方ニ從弟ニ而、無據血筋之者候間、養子御免之願

申出、去ル寛延二年巳正月、伊集院十左衛門御證文

を以御免被仰付候、且又重信市兵衛男子無之、御納

戸附士橋口渡左衛門事從弟違之血筋を以養子御免之

願申出、同年四月、市来次郎左衛門御證文を以御免

被仰付候、右通先例茂御座候得者、血筋之訳を以ハ、

市右衛門事休左衛門家跡養子御免被仰付候而茂何ぞ

差支申儀ハ御座有間敷与奉存候、以上、

寛延四年未十二月四日 二人 吉調之、

覚

種子嶋藏人(久芳)より、此節 御家督初而被遊 御下國候

付、乍憚私宅江 御光儀御膳進上願被申出、右ニ付

而ハ御太刀・御馬代・御刀進上仕度旨是又被申出、

調被仰渡、左之通御座候、

一 御代ニ様御家督初而被遊 御下國候節、御一門・大身

分・御家老其外御身近御方様江被遊 御光儀候儀、御

先格与相見得申候得共、誰ニ之家ニ者 御光儀可被遊

与被相究候御格者相見得不申候、 中納言様 (家久) 寛陽院

様 (御覽) 大玄院様御代迄ハ萬石以上為差立方ニ江被遊 御

光儀候与相見得候、 淨國院様御代ニ罷成候而ハ嶋津

大学家相立、嶋津出雲家格之通ニ被相準、 隅州様被

遊 御光儀候儀茂有之候、夫より以来家相立候御一門

茂御座候得者、其同格ニ不被遊 御光儀候而不叶儀与

乍憚奉存候、

一 藏人家之儀、先祖代種子嶋・屋久・永良部三嶋相領、

中古以来種子嶋左近代萬石以上ニ被召成候、

父種子嶋左近代(忠時)萬石以上ニ被召成候、

一 右家之儀、此以前者年頭御太刀進上茂、正月四日一家

被召出御取持為有之儀茂御座候、左候而、當分一列ニ

御太刀進上被仰付儀ニ御座候、 淨國院様御代正徳元

年、藏人祖父種子嶋彈正代(久基)八朔直馬進上被仰付候、

隅州様御代元文三年、萬石以上之儀ハ 公義又ハ御家

中ニ而茂御取分有之事候故乘輿御免、常式供廻り茂巻人重ミ被仰付候、

一 高祖父左近代 御城下江引越被仰付、寛永十三年以來祖父彈正代迄 御代々様被遊 御光儀候段、別紙を以被申出候儀、無別条相見得申候、然共 御代々様 御

家督初而被遊 御下國候付而被遊 御光儀候共、究而相知不申候、

右之通ニ御座候、藏人家之儀、他家ニ而者其家筋宜有之、萬石以上ニ而御座候故、大身分相當ニ相見得申候、然者先代 御家督ニ付被遊 御光儀候儀、究

而不相知事ニ御座候得共、右通家筋茂宜、萬石以上之御取分も有之儀ニ御座候、然者島津出雲・島津大(久定日置家)章・花岡家(久亮宮之城家)・嶋津圖書殿・島津筑後四家之儀茂萬石以上又ハ

家筋ニ付大身分被仰付置、被遊 御光儀先例ニ御座候、付而ハ藏人願之通被遊 御光儀候而も餘家之傍例ニ者不罷成筈与吟味仕候、尤於被遊 御光儀者、

御太刀・馬代・御刀進上可被仰付儀与是又吟味仕候、乍然御詮議次第奉存候、以上、

寛延四年未八月六日 吉 川調之、

右之通當座より申上置候処ニ、 御光儀願之通被仰渡候由承之、
(本文書ハ一九八号文書トホボ同文ナリ)

268 (本文書ハ一四四号文書ト同一文書ニツキ省略ス)

269 寛 仰渡、

寛陽院様御代日光山江御参詣被遊節之御供廻り御侍せ御道具其外古書留等有之候ハ、相糺可申上旨被仰渡、左之通御座候、

一 寛永十七年五月朔日 光久様日光江御参詣卯之刻御發駕、伊勢兵部・野村大学・新納刑部・仁礼主計・高崎惣右衛門・福屋五郎兵衛・三原傳左衛門・有川右近・野津弥五左衛門御供被仰付候、同四日、日光 御登山、神前ニ御太刀一腰・御馬代銀三拾枚・神楽料金子一兩、宮仕ニ青銅百疋、八乙女ニ青銅八百疋、毘沙門堂御門跡江銀子拾枚、学音坊・大楽院・最教院・本實成院何れ茂同断ニ而候、同六日 光久様日光御勤相濟 御帰館ニ而御座候、

一同十九年六月三日 光久様日光江御參詣卯之刻御供新(御發駕脱力)

納右衛門・平田狩野・喜入舍人・新納刑部・福屋伊賀、

同八日、日光より 御帰館、

一慶安二年六月六日 光久様・久平様(島津綱久)日光江御參詣、同

十二日 御兩殿様日光より 御帰館、御供人数相知不申候、

一寛文三年六月十八日 光久様・綱久様日光為御參詣江

戸御發駕、御家老伊勢兵部貞昭・鎌田藏人政直御供、

同廿四日 御帰館、

右之通島津故圖書久通日帳ニ相見得、其外之儀當座

書留ニ茂相見得不申候、依之右御供仕候子孫家々ニ

古日帳之類ニ而茂可有之哉与相糺申候処ニ、鎌田小

藤次家ニ日光御參詣帳有之候付、為御見合差上申候、

以上、享保十三年戊申六月三日 本城朝之丞
町田仲右衛門

覚

大友因幡守様事 (義則) 御家ニ御由緒之訊茂候哉、相糺可

申出旨被仰渡、左之通ニ御座候、

一因幡守様事大友家之正統ニ而御座候、元祖大友左近将

監能直者 頼朝卿之御子与申説御座候得共、不慥成ニ而御座候趣御記録之内ニ相見得申候、

一右御先祖大友因幡守親時入道德(道脱力)之女子 御家五代 貞

久公之御夫人ニ而、宗久公 師久公 氏久公之御母

堂ニ而御座候、

一同御先祖大友豊前守政親之女子 御家十一代 忠昌公

之御夫人ニ而、忠治公 忠隆公 勝久公之御母堂ニ

而 (以下次)

一天正五年、伊東家御敗亡、伊東家豊後へ致退去、大友

家を頼被居候処ニ、同六年之秋、因幡守様御先祖大友

左衛門尉義鎮入道宗麟・其子新太郎義統伊東家を為令

復入八萬之人数相催、十月廿日、日州高城を取圍候、

城代山田新助有信纔五百之人数ニ而城を守、以之外危

相見得候故、島津中務家久事吉利下總忠澄・鎌田出雲

政近・比志嶋紀伊國貞以下之諸將を引卒城ニ籠候処ニ、

敵兵攻候事甚急ニ御座候得共、家久強ク防罷在候処ニ、

同月廿五日 龍伯様(義久)三萬之軍兵ニ而日州ニ御發向被成、

十一月朔日、日州佐土原ニ御出陣、大友之陣を御攻可

被成与 思召、其隙を御伺被成候、同十日之夜 (義弘) 惟新

様御奇計を被運、伏兵を設敵首五百餘御討捕被成候、左候而、大友方松山之陣を放火被成候而、御人数を被納候、同十一日 龍伯様目白坂へ御陣被居候、此日伊集院下野久治為前鋒挑戦得利候、翌十二日兩軍相交、高城之麓下水流ニ而大合戦有之候、然処ニ嶋津右馬征久・同圖書忠長軍を進、横ニ討之候故、敵軍乱騒候所を、中務・新助城門を開突出候ニ付、義鎮父子大ニ致敗走候、惟新様并中務以下之諸將致追討、高城より至美々川七八里之間屍無之所茂無様ニ有之、人馬河水ニ溺死候者数不知候、翌十三日 龍伯様凱歌被執行、同月廿八日、鹿兎島へ御帰陣被成候、右通大友家御領内ニ攻入候儀御鬱憤ニ被思召、天正十四年、豊後江軍を被出候、惟新様御大将ニ而、島津左衛門歳久・同三郎五郎忠隣・嶋津右馬征久・島津圖書忠長以下之諸將致從軍、御人数三万七百餘ニ而肥後國より豊後國南郡江御攻入、島津中務家久壹万餘之人数ニ而日向より梓山アツサを越、豊後三重ニ討入候、龍伯様者同月十八日御進發、日州塩見城ニ被成御座御下知被成候故、惟新様并中務南方より軍を進挾攻候ニ付、大友家之一族

悉致降参、中務事義鎮之居城府内之近所利満之城迄攻入、稠敷取圍候、然處ニ從是以前仙石權兵衛(秀久)・長曾我部弥三郎(信親)・十河隼人佐(存保)・尾藤甚右衛門(知宣) 殿下秀吉公之命を請、為和睦豊後ニ来り候処ニ、不圖此合戦ニ逢、大友之軍ニ加り、大軍ニ而十二月十二日中務備候利満之陣ニ攻来候故、此時大合戦有之、長曾我部・十河兩人戦死、仙石・尾藤ハ逃去、大友義統府内之城ニ逃入、父義鎮相共ニ府内を捨テ高崎与申所ニ致退去候故、翌十三日、中務府内ニ攻入候、大友父子又高崎を去り、豊前國龍王ニ致出奔候、夫より諸所御攻被成候内、天正十五年 秀吉公九州ニ御進發故、此御方御人数茂御帰陣被成候、

一右通、大友家往古者 御家ニ付御身近キ御由緒茂御座候、天正年間以来節々御迫合有之候付、右之儀者大友家ニ茂相知レ有之筈候得者、至于今候而茂 御家ニ鬱憤ハ相残り申筈ニ御座候、

右相糺候趣如斯御座候、以上、

享保十三年申九月十七日 本町相川調、

覚

正月元日五社江 御参詣之節、私家より勤方之次第且又右ニ付被仰渡候趣有之候ハ、可申出旨被仰渡趣承知仕り、左之通申上候、

後陣

本田次兵衛

先陣

同姓仲右衛門

右、延寶六年午正月元日、右之通相勤申候、

後陣

本田次左衛門

先陣

本田政右衛門

右、元禄四年未正月元日、右同断相勤申候、

後陣

本田甚次

先陣

本田助之丞

右、元禄六年酉正月元日、左行列川上家へ被仰付置候處御断ニ付、伊地知家江被仰付、伊地知家与左右

鬮取ニ而、御城御差出之節左行列本田甚次・本田

助之丞相勤候、左候而、一社ニ而左右替合相勤申

候、

右ニ付、左右行列勤方之儀付其節奉願趣有之、左之

通被仰渡候、

本田次郎左衛門江申渡趣

一 去ル酉年頭 御社参之御供先陣後陣之儀ニ付而申分有之、其節ハ鬮取ニ而相勤候、就夫伊地知・本田両家より被申出趣達 貴聞候処、御社参之御供先陣後陣之儀、此以後伊地知家へハ被仰付間敷候、川上・本田相勤儀候条、差合候ハ、新納家より相勤候様ニ可被仰付旨被 仰出候間、此旨可有承知候、以上、

二月廿八日

右書付、猿渡喜右衛門殿より受取申候、

後陣

本田權兵衛

先陣

本田甚五左衛門

右、元禄九年子正月元日 匠作様御参詣之節、右之

通相勤申候、

後陣

本田市之助

先陣

本田伊左衛門

右、元禄十年丑正月元日 御参詣之節、左川上家、

右私家(マヤ)江より相勤申候、

右之通相勤申候、右外ニ茂 御社参之節段々相勤

271の2

来候得共、事多御座候故、先此段申上候、以上、
 未十二月廿五日 本田新次郎
 御記録所
 右之通寶曆元年未十二月廿五日被申出候書附書写之置候、

一右ニ付、正月元日 五社參御參詣之節、與中之諸士御供ニ罷出候面々扇圖として有之、諸士之扇子を觸役より銘々受取之一ツニ取集、両方へ引分、與中之諸士御供左右被相定事ニ候、是を扇圖与申候、近年ハ無之事ニ而候哉、川上慰政殿前方ハ為有之由川上十郎左衛門江直ニ相傳被置候、此儀ハ先陣後陣之勤方仕候人よりハ何ぞ相構事ニ而ハ無之候得共、右キ事之由被為咄候由、十郎左衛門より承置之、
 一右扇圖ニ而ハ諸士御供隙取致混乱候故、近年ハ無之由十郎左衛門より咄承之、

一御供左之方貴く、後陣之方宜候故、家筋を以て後陣先陣川上嫡家より前に被相定候、右之方後陣先陣右同前ニ

272

候、本田家嫡家被相定候事、

覚

島津備中殿家来(貴備・垂水家)

伊集院八兵衛

安山三左衛門

梅本武右衛門

島津周防殿家来(忠紀・越前家)

町田七右衛門

緒方伊右衛門

中村鉄五郎

島津三次郎殿家来(忠卿・今和泉家)

樺山權次兵衛

詫摩勘右衛門

外ニ一人、追而被為申出候節、兩人同前被仰付筈、

島津兵庫殿家来(久門・加治木家)

川上市右衛門

比志嶋休右衛門

本田孫左衛門

右之家来三人ツ、格式被仰付置候、其差次右家来之人数帳面無年付 御城下士互縁與御免無俗生付、三

人ツ、格式被仰付置候者同前可被仰付候、領主何そ付御禮被為申上候節 御目見被仰付候ハ、脇差を不帶 御目見可被仰付候、此外之儀ハ家来三人ツ、格式被仰付置候通、衣服其外同前被仰付候、右之通被仰付候条、諸事如例可被申渡旨、織部殿(北条時守) 御差圖ニ而候、以上、

延享三年寅四月六日 有川幸右衛門印(貢利)

覚

本文大慈寺當住古道 公文頂戴之儀ニ付願申出趣有之、調被仰渡候、大慈寺住職被仰付候節、龍伯様(義久) 中納言様(光久) 寬陽院様(綱貴) 大玄院様(吉豊) 淨國院様御代迄ハ住持代々 公文頂戴被仰付置候、然者先住寶積・悲・悟峯・葉山迄四代住職被仰付候節 公文之願申後候筋ニ相見(族脱力) 得共、大慈寺事ハ為差立寺院、其上右通 御代々様より 公文被下置候寺格ニ御座候付、先格之通此節古道事 公文頂戴可被仰付儀与吟味仕候、以上、

寶曆二年申正月廿七日

山本 吉調之、

獻上 福ヶ廻(迫力) 諏方大明神

覚

御刀 一腰 波平安周

右奉寄進者也、仍状如件、

寶曆元年辛未月日 重年御判

右草案、御右筆被仰付被相調候、未十二月廿三日

覚

本文山鹿越右衛門直子無之、國分衆中池田治右衛門無據血筋之者ニ御座候間、養子御免被仰付被下度旨 願申出趣有之、調被仰渡、左之通御座候、一當山鹿越右衛門養曾祖父山鹿越右衛門事 中納言様御代初而慶長中ニ何様之訊ニ而御座候哉御家中ニ被召抱候而、高三百六拾石餘被下置、庄内軍乱之節茂走廻り為仕由ニ候、其後琉球御討伐之節船奉行相勤、又八江戸 御城御普請之節石船宰領ニ而罷登、水主致喧嘩候砌、越右衛門存究能御座候故、首尾能相濟為申由候、

養祖父山鹿太郎兵衛代窄人被仰付、筑後柳川之城主立

花左(宗茂)近様被為知候付、彼地へ差越数年罷居候処ニ、嶋

原鬼利支丹一揆之節、太郎兵衛父子立花様へ相附致出

陣、二月廿七日城責之節、薩摩之者(親貞後越右衛門)与名乗本丸へ乗入、

太郎兵衛致戦死候、此儀ニ付養父(親貞後越右衛門)弥助門与改名、御家中

江婦參為被仰付由候、當越右衛門儀ハ國分衆中藪田助

右衛門二男ニ而、養子ニ罷成候、最初小番相勤候得共、

御吟味之上外城養子ハ小番不被仰付御格ニ相成候節、

大番ニ被召成候、横目役・諸檢者等相勤申候、

一代ノ國分衆中池田治右衛門實祖父藪田武左衛門事ハ故

嶋津圖書附衆中海江田藏右衛門養子ニ罷成、海江田武

左衛門与申候、實方ハ同所衆中藪田助右衛門弟ニ而候、

右武左衛門嫡子海江田治左衛門事ハ代ノ國分衆中池田

諸右衛門養子ニ罷成、池田武左衛門与申候、是則治右

衛門親ニ而御座候、當山鹿越右衛門者右藪田助右衛門

二男ニ而、山鹿家養子ニ罷成候、尤治右衛門家所衆并

之御奉公相勤申候、

右之通ニ御座候、越右衛門与治右衛門由緒之訳ハ、

越右衛門實父藪田助右衛門弟藪田武左衛門事海江田

藏右衛門養子ニ罷成、海江田武左衛門与申候、其嫡

子海江田治左衛門池田諸右衛門養子ニ罷成、池田武

左衛門与申候、其子當治右衛門ニ而御座候、血筋從

弟違之續別条無御座候、右通血筋無據者養子御免被

仰付候先例多ノ御座候間、願之通養子御免被仰付候

而茂何之差支申儀御座有間敷与奉存候、以上、

寶曆二年申正月十二日 本 山 吉調之、

○ 池田諸兵衛—池田監物—池田半右衛門—池田諸右衛門

○ 池田武左衛門—池田治右衛門
養子

○ 海江田藏右衛門—海江田武左衛門—海江田治左衛門
圖書殿附衆中 養子 実ハ國分衆中藪田助右衛門弟藪田武左衛門
海江田治左衛門
池田諸右衛門
跡養子ニ成

○ 國分衆中
藪田助右衛門—山鹿越右衛門—御城下士養子ニ成ル、
海江田武左衛門—池田武左衛門—池田治右衛門
海江田家養子ニ成ル、 池田家養子ニ成ル、

覺

大島十郎太夫直子無御座候付、富山傳内左衛門嫡子
富山傳後左衛門養子ニ取組度由申出候、傳後左衛門
俣御座候付而ハ、傳内左衛門家相續仕候筋願申出、
調被仰渡、左之通御座候、

一當八木孝次郎事ハ八木孝右衛門嫡子ニ而候処、伯父八
木八郎兵衛一子八木新次郎屋久島江居住被仰付置候付、
孝次郎事嫡家八郎兵衛養子被仰付候、孝右衛門二男八
木善助事ハ孝右衛門嫡子ニ被仰付候、

一當川上弥八郎事ハ市来茂左衛門二男ニ而御座候、茂左
衛門事弥八郎養父川上仁兵衛弟ニ而候処ニ、市来家養
子罷成候、右仁兵衛直子有之候得共、部屋栖之内相果
弥八郎事本家伯父仁兵衛養子ニ御免被仰付候、

右之通ニ御座候、傳内左衛門儀大島家より富山家養
子ニ罷成候、此節大島十太夫直子無御座候付、嫡子
富山傳後左衛門事本家養子之願申出、傳後左衛門嫡
子・二男御座候付而ハ、傳内左衛門家相續仕筋ニ相
見得申候、然者右通本家養子之儀ニ付而ハ先例茂御
座候間、傳後左衛門事願之通養子御免可被仰付儀与

277

奉存候、以上、寶曆一申正月廿五日 本 吉調之、

覺

森山長元百石高上り之願申出候付、於當座吟味之趣
可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一森山長元六代之祖森山次兵衛事伊集院より曾於郡江被
召移、朝鮮國江御渡海之砌御供仕、御帰朝迄首尾好
御供仕、直ニ鹿兒嶋江居住仕候由、自家よりハ申出候
得共、當座書留等ニ相見得不申候、高祖父森山清左衛
門幼少之内親次兵衛相果、漸々逼迫仕、少々有之候持
高迄賣拂、其時分足輕被召重候付、依願御兵具所附足
輕ニ罷成申候、曾祖父森山清左衛門事御兵具所附士ニ
御赦免被仰付、肝煎役相勤申候、養祖父森山長春事醫
道を以 御城下士ニ被召出、奥醫師被仰付、武・西田
御屋敷江相勤申候、亡父森山次郎左衛門事右長春弟ニ
而候処、長春男子無之候付養子罷成、横目役相勤申候、
當長元事醫道稽古仕、當分勤方無御座候、

一右通之家筋ニ御座候、然者養祖父長春代元文五年申十
二月、河野八郎左衛門御取次御證文を以當座へも被仰

(通典)

渡、長春事其身代被召出候付而ハ御格式有之候得共、
 数年首尾好相勤候故、思召を以百石高上り被成御免
 候、長春儀 思召を以被仰付候付、餘例ニハ不相成旨
 被仰渡置候、長春代百石之員数不相求得内相果候ニ付、
 亡父次郎左衛門代百石高上り之願申出候処ニ、百石高
 上り不被成御免御格之者候得共、右通長春代被仰付置
 候訳を以、願之通百石高上り亡養父江 思召を以被成
 御免候、依訳被成御免事候故、餘例ニハ罷成間敷旨、
 寛保三年亥八月、蒲生十郎左衛門御證文を以被仰渡置
 候、然共次郎左衛門代ニ茂百石之都合目成不申内相果
 申候、右通二代迄百石高上り御免被仰付置候、無左候
 へハ、長春代被仰渡候 思召之詮茂相立不申儀ニ奉存
 候条、長元事願之通百石高上り御免可被仰付儀与私共
 詮議仕候、乍然御吟味次第奉存候、以上、

寶曆二申正月八日 山本吉調之、

(表紙 四)

舊史官調

目次

- 一 郷原金太夫名字拜領御禮進上物之仰渡
- 二 肝付郡高山玉池山由緒書
- 三 忠久公御譜之書拔
- 四 肝付甚兵衛系圖之拔書
- 五 秩父家系圖之書拔
- 六 重豪公御前様御入輿御供百々曲_{ト下}之儀

七 (マ)

八 (マ)

九 川上久國より新納右衛門佐・北郷佐渡守へ之狀

十 額字

十一 光久公御家督ニ付犬追物御行張之記

十二 鹿兒島城築出等之儀阿部豊後守外二候(侯)より之狀

十三 右ニ付新納右衛門佐・北郷佐渡守より山田民部少輔

外三人宛之狀

十四 小林仲太兵衛家筋調 御記録奉行

十五 御座唱替

十六 七島郡司寄役とも御目見之調 御記録奉行

十七 御代替ニ付郡山郷噺・與頭より先例之踊御免被仰付

度願

十八 當鹿兒島上諏方社格申立三十社家以前之通被仰付度

故本田出羽守より申出

十九 右ニ付御記録奉行調

二十 御城下諸士外城より養子且跡職等之御格式御記録奉

行江之御達書

廿一 外城衆中寄合以上之家来より養子之御格式御勘定奉

行・地頭・御記録奉行江御達書

廿二 護摩所不動明王之由来

廿三 比志島家略系圖并同紀伊守國貞江宰相家久公より追

悼之御哥都合拾二首

廿四 為御救相撲・芝居興行之書附

廿五 俗に下大隅之邊田七人

廿六 南方 山北 上山城 谷峯城之略誌

廿七 惟新公より龍伯公江進上被遊候起請文式通

廿八 向々にて御道具調御記録所江申出書都合

廿九 大玄院様御以来御續合之略御系圖

三十 矢野甚八家筋調 御記録奉行

卅一 川内高城衆中遠矢源三郎手牧御免之調書

卅二 島津權五郎養子成之御禮進上物調 御記録奉行

卅三 三家花岡・重富
今和泉 御取立覺

卅四 萩原喜兵衛高持成願之調 御記録奉行

卅五 松元正右衛門高持成願之調 御記録奉行

卅六 義昭大僧正辞世哥

卅七 大興寺文書

卅八 川上久馬より丸之内二十之字紋所用度願及右ニ付御

申渡書
（マ）
卅九

四十 御厩附士源兵衛家内脇岡庄兵衛子細有之庄兵衛重て

御目見之儀之調 御記録奉行

四十二 右之再調

四十二 船木助七死後跡養子無之家跡調 御記録奉行

（目次ノ番号ハ全テ朱ノ丸圍ミアリ）

278の1

○郷原金太夫名字拜領御禮進上物之仰渡

一比志島鳥人殿（範房）より直に市来早左衛門（家年）に被仰渡候者、此

内郷原金太夫名字拜領御禮進上物調書差出候、調之通

御太刀を（行カ）まてを進上可被仰付事に候、右調之内 御直

元服被仰付助之丞家者御太刀・三種二荷進上被仰付事

候得者、御太刀・二種一荷進上被仰付候儀相當ニ御座

候得とも、小林仲太兵衛（政一）・平岡八郎太夫事（之品） 御直元服

被仰付、其後名字拜領之御禮御太刀迄を進上被仰付候

間、金太夫事も御太刀迄を進上可被仰付儀与申出候、

右小林・平岡之儀者新家に名字拜領被仰付、父之家ハ

立離れ候得者、島津家之庶流にてハ無之、夫故名乗字

も久・忠之字外に拜領被仰付候得者、金太夫儀与者相

替たる事に候、金太夫事ハ（島津忠守）奚去二男二而、于今助之丞

家ニ罷居事に候、然者助之丞家之（云カ）二男之格式ニ被仰付

事に候、助之丞家嫡子ハ 御直元服三種二荷被仰付、

金太夫事二男にて 御直元服被仰付候得とも、此節

御格式被相定、助之丞家二男之儀ハ 御直元服不被仰

付筈に候、然者金太夫事ハ以後家立候而も 御直元服

不被仰付筈に候、嫡子三種二荷進上候得者、二男二種

一荷御免被成 御格式ニ為究儀にても無之、御太刀・

二種一荷進上仕候家も二男中紙進上仕茂有之事に候、

依之御太刀・三種二荷差上候家も二男ハ御太刀まてを

進上可被仰付儀ニ候、左候得者、島津頼母殿（久記）二男權田

弁之助事も 御直元服被仰付候得とも、名字拜領之御

禮御太刀迄を進上可被仰付候、金太夫事も同前に候、

乍然助之丞家二男御太刀・二種一荷進上仕、御禮申上

候例も於有之者、先例之通可被仰付候、此段相調可申

候、右段之之訳御記録奉行得心罷居候様可申聞旨 御

意候、菱刈新^(重格)五兵衛事も同前に可被承由候て、同前ニ
隼人殿より被仰聞、左候て、右之調新五兵衛を以可差
出由承之候事、

但島津十郎左衛門家者島津内記殿家之二男家にて候
得共、是八十郎左衛門^(入道)養父賢峯事二男にて 御直
元服被仰付、十郎左衛門事も 御直元服被仰付候
ニ付、此家ハ以後とも 御直元服被仰付筈ニ候、
金太夫事ハ助之丞家之二男にて、於彼家 御直元
服被仰付候得とも、向後助之丞家二男にハ不被仰
付 御格式にて、金太夫別立候て 御直元服被仰
付たる事無之候得者、尤金太夫子孫 御直元服被
仰付筈に無之由、是又同前に承之候事、
此中差出候金太夫進上物調書も御下^(マ)被成候故、
助之丞家二男御太刀・二種一荷進上為仕儀有無之
調仕候而相添可差出由申上置候事、
右、寶永八年卯十一月廿五日
要用首尾簿之内

本行ニ付、十一月廿八日、隼人殿より直に市来早^(マ)右左

衛門江被仰渡候者、郷原金太夫進上物之儀、助之丞家
二男御太刀・二種一荷進上之先例無之候者、御太刀
計を進上可被仰付儀与被 仰出候得とも、助之丞家二
男之儀者 御名代元服被仰付 御格式ニ候、然者金太
夫事家立候而も子孫 御名代元服之筈に候、左候得者、
御太刀・二種一荷進^(上服カ)可被仰付儀ニ候、乍然 御名代元
服之家御太刀計を進上仕者も有之候哉、此段相調可申
上候、御太刀計を進上仕傍例無之候者、弥以御太刀・
二種一荷進上被仰付候条、相調可申上旨承之候、依之
御名代元服之家々相調候処に、皆以て御太刀・二種一
荷進上仕候ニ付、金太夫事も弥以御太刀・二種一荷進
上可被仰付儀御尤ニ奉存候よし、調書一通今日菱刈新
五兵衛御取次を以市来早左衛門差出之候事、

○肝付郡高山玉池山由緒書

覺

隅州大隅郡福山大安寺末

一玉池山

日新院

但隅州肝付郡高山前田村

開山太屋香甫和尚

示寂二月十七日、年号相知れ不申候、

開基

日新公御嫡女御南様御建立之由申傳候、尤(忠良)

日新公御影并御南様御位牌御安置ニ而御座、

何年何月寺宇御建立之訳相知れ不申候、尤寺

領由緒等無御座候、

右者此度寺家由緒等之儀相札可申上旨被仰

渡候ニ付、右之通一紙書記差出申候、以上、

寶曆六年子六月廿八日

高山

日新院

大信印

長能寺

但國御目附様御用之節、寺院由緒書出候書付

之内ニ有之、

○忠久公御譜之書拔

覺

小臣某謹承 高命、編集於此記録之際、誦於諸家系譜、

其中有阿多氏・鮫島氏・川田氏・鎌田氏・石冢氏・高

江氏・吉峯氏・有馬氏等之系圖數卷、其文曰、文治

(或元年、或二年)八月二日、忠久著御于薩州山門院也、

又鳥津家之古譜曰、建久七年忠久十八歳、薩隅日三州

入国之時、八月一日、下著于薩州山門院云々、而説未

知孰是、俟後知者而(已脱力)

予以私知推之以為、文治元年之春三月下旬、平氏之

門族悉攻亡、而後 頼朝卿兼諸国莊園守護地頭矣、

由是補任日隅薩三州於(衍力)於忠久公、則文治年間入国是

乎、

(本文書ハ「旧記雜録前編」二一〇一号文書下同「文書ナルベシ」)

○肝付甚兵衛系圖之拔書

覺

一肝属河内守兼續(初三郎)、天文十三年辰八月二十二日、

歳三十四にて入道、法名權大僧都省鈞、官位從 御門

跡莊嚴院殿申請之、

天文七年戊戌正月二十六日、肝付郡串良郷之内高岳

知行畢、祢寢家江渡、同十一年壬寅、(祢寢)清年對當家依

有隔心、重而知行早、

同年同日、(百引脱力)肝付郡之内知行早、

同年二月三日、百引郷之内平房知行早、

同月廿一日至乘陳、同三十日、諸縣郡之内大崎知行

早、

同年四月二十日、諸縣郡之内求仁院之内安樂知行早、

島津忠朝就為弓箭一味同心、彼在所ハ渡早、

同年七月十三日、蓬原知行早、

同十六日、贈於郡之内恒吉知行早、

妻女島津忠良嫡女、

兼續妹
女子

島津殿 貴久御妻女 歳廿死去早、

母島津忠朝猶子、

「天文十三年甲辰十二月廿六日、肝付郡之内大始良郷之

内西俣知行早、

同日、野里知行早、

翌年乙巳七月、市成知行早、

天文十五年丙午二月二日、肝付郡之内大始良知行早、

天文十七年戊申四月、大隅郡之内牛祢・邊田・二河

知行早、三ヶ所同前」

〔一〕ハ兼續譜力

三郎 左馬頭 兼續嫡子 (妻女脱力)伊東義祐嫡女、

良兼

永祿四年辛酉五月四日卯癸、贈於郡之内福山郷之内廻

之城知行早、

永祿五年壬戌四月五日午戊、諸縣郡之内松山之城知

行早、

同五月廿八日子壬、諸縣郡之内救仁院知行早、

同六月、安樂之城知行早、

永祿十一年辰五月十二日子丁、福嶋之城知行早、

兼續親
兼興

又八郎 兵部少輔 法名義雲幸忠

大永四年甲申十二月三日串良知行、

享祿三年庚寅五月二日、肝付郡之内鹿屋今城知行

早、

天文二年(癸) 巳四月五日、四十二歳にて死去、

兼續曾祖父

七郎三郎 周防守

兼連弟
兼光

越前守

對當家叛逆人、 肝付左門家之元祖

兼連親
兼忠

三郎 河内守 法名義翁兼忠 七十九歳にて死去、

兼政

兼忠親兼二元二男

号穎娃、(從力)後忠国島津三男之御契約、藤原忠重氏實

名之事業者致返進、幕之文計給候早、仍伴氏穎娃云

々、妻女平田重宗女、

肝付省釣志布志ニ居城あり、三年目に死去、永禄九年

丙寅、廟所大慈寺門外ニ在り、肝付河内守入道号竹葉、

右、肝付甚兵衛系圖之内書拔、

○秩父家系圖之書拔

282

覺

一重武

伊地知又九郎 周防守

勝久公御時御家老

天文五年丙申二月二日、知行於大隅郡之内下大隅

垂水、

同十三年甲辰正月十三日、知行於大隅垂水郷之内

田上、

一重武嫡子
重興

虎太郎 上總介 又九郎 周防介

永禄年間肝付河内守兼續入道省釣叛 太守、重興

暫黨之、天正二年之春、重重興悔先非、獻所領之

下大隅五ヶ所奉謝罪云々、天正八年庚辰二月十二

日死、五十三歳、法号千山守法菴主、妻者根占式

部太輔重就女、慶長十四年己酉九月八日死去、法
名妙尊、法華宗也、

右下大隅五ヶ所と有之、其所何方にて候哉、不
相知候、

右重武者當秩父十郎兵衛家九代之祖にて、秩父家系
圖之内書拔候、

寶曆十三年癸未四月廿八日

○重豪公御前様御入輿御供之儀

覺

一此節 太守重豪公 御前様御入輿之御供書之内、御輿
之先覆に百曲トヤワケ与書記有之候、是落字与相尋候、百々曲
与申候て、若き女中駕籠に乗り御先きに参るもの、由
候、先年（継豊後守） 竹姫君様御入輿之御供附ニ相見得候、其節
者平假名ニ書記有之たるよし、御右筆折田清右衛門咄
にて、若年之女中髪を両方に分け候て結たる人のよし
候、織物道具被為持居候由候得共、是ハ不持候よし承
置之、

○（マ）

青松篇

壽 皇陵泉涌寺住持長賜紫月耕和尚堅六十齡之詩

尊号尊印

寶曆十二年龍集壬午暮春、弟子了諦拜求朱印有、

○（マ）

覺

一十五代祢寢清年次女 島津家十四代太守勝久公夫人、
勝久公天文三年甲午小根占江御退去云々、

南 皇侃 吳郡人、少好學、明三禮孝經論語、仕梁、

北 為國子助教、撰禮記講疏欠千卷、書成、詔

付秘閣、召入爵充般、說禮記、欠武帝善之、
加員外郎散騎欠字郎、

一仙霞嶺 嶺上有關把總防守、嶺北下去一里、有閔帝廟、

極靈、周亮工先生有聯云、拜這人便要學這人、莫混帳
磕了頭去、過此山、須思出此山、當仔細模着心來籤筭
極驗、求者、日無暇刻、

○川上久國（久延）より北郷佐渡守へ之状

覺

一一筆令啓候、島津（忠明）兵庫頭殿内白坂納右衛門尉加治木立
（退）逃、興國寺へ罷居候、薩州（光心）様御上洛前ニ我等何とそ
異見申召直候様ニ与、國分丹波守を以被 仰聞候間、
新納刑部大輔（忠秀）と致談合、平田豊前守・児玉四郎兵衛・
皿良善介を以色々申渡候得共、曾而承引不被申、親類
木脇喜兵衛（道）入なども召寄、手をつくし被申候得とも、
縦重罪被仰付とも、加治木江者參る儀不罷成よし被申
切候、此由入 御耳候処ニ、今一往可申渡由被 仰出
候、從 兵庫頭殿御船元江使被成進候上被仰上候得
（退）（とも）、因幡守江（為）被仰置候由、鎌田源左衛門を以為
被 仰出由候、就夫又々前之三使を以吳見申候得とも、
無承引候、為 御意申渡候上ニ、ケ様ニ被申切候時者、
もはや手も盡申候、此由御次而者刻御披露可被成事頼
存候、恐惶謹言、

九月九日

川上因幡守

久國判

新納右衛門佐様（久延）

北郷佐渡守様（久延）

人々御中

〔本文書ハ「旧記雜録後編」四二七号文書ト同一文書ナルベシ〕

右本書ハ北郷民部殿箆藏写置之、木脇氏白坂氏養子ニ
被参候哉、此義ハ重て可相糺候、

寶曆十三年癸未五月十一日

○額字

萬笏朝天石

佩文韻府内呉中勝記、忠烈廟後、天平如錦屏、入座其
峰、皆立、僧曰、此萬笏朝天也、

○光久公御家督ニ付犬追物御行張

覺

一慶安元年九月二十六日、張行犬追物、光久公亦射焉
為是代始之犬追物也、是當相續（家） 家督則爪張行之旧
例也、

一 射手奉行兩人すわふゑほし

新納加賀守子
新納刑部大輔(忠秀)

諏訪仲右衛門子

諏訪奎右衛門尉(兼利)

町田勘解由次官子

町田源左衛門尉(忠代)

①御 一 劔之役

新納大藏丞子

一 御かいそへ

新納小右衛門尉

伊集院左京亮二男

一 御くつの役

伊集院久兵衛尉

餘者略之、

伊集院①長右衛門尉〔長門守〕子

一 幣振見兩人児装束

伊集院鶴松①尉子
土持平左衛門①尉子

土持徳介

右者、下方ハ客屋より支度所まで中途備、上方者北

郷①作左衛門尉宿より、

(本文書ハ「旧記雜録追録一」二四三号文書ノ抄ナルベシ)

但光久公御家譜内ニ有之、

以上、

○鹿兒島城築出等之儀阿部豊後守
阿部對馬守
松平伊豆守よりの御状

覺

一 鹿兒島城海手之石垣破損ニ付而、高さ三間半、長五百間程之所被築出之度之由絵圖之通達 上聞候之処、普請可①ナシ〔被〕申付旨被 仰出候、将又南之方船入之堀埋候ニ付而、被浚度之由得其意候、是又可有普請候、恐々謹言、

▽◎正保二酉△

五月廿三日

阿部豊後守 忠秋判

阿部對馬守 重次判

松平伊豆守 信綱判

松平薩摩守殿

(本文書ハ「旧記雜録追録一」二七号文書ト同一文書ナルベシ)

右御奉書、正保二年五月廿三日也、

290の1

○右ニ付新納右衛門佐・北郷佐渡守より山田民部少輔
外三人宛之状

猶以普請場之繪圖公儀江被差出候写進入申候、
為御心得候、以上、

一書令申候、依其元濱ニ築出之儀、南林寺之後川堀之
儀、公儀江被仰上候処、御免之被為成 御奉書候条、
写此度指下申候、早々普請被仰付候て尤ニ候、恐惶謹
言、

正保 二年 五月廿六日

新納右衛門佐 久詮判
北郷佐渡守 久加判

山田民部少輔様 (有榮)
穎娃左馬頭様 (久政)
川上因幡守様 (久因)
島津圖書頭様 (久通)
人々御中

(本文書ハ「旧記雜録追録一」二八号文書ト同一文書ナルベシ)

290の2

右築出ハ當分築地と唱候、寶曆十三年写之、

○小林仲太兵衛家筋調 御記録奉行

覺

小林仲太兵衛家之儀者島津(水吉家)又七郎家より相分れ、
故島津中務久輝持高之内をも致分地、御奉公相勤
来候処、他家之筋ニ罷成、別而歎ケ敷存申候間、
又七郎家之二男家にも三男家ニ而も、又七郎家
之系譜不相離様に被仰付被下度旨、段々由緒之訳
を以願被申出趣吟味仕可申出旨被仰渡、左之通、

291の1

一島津中務三男島津中兵衛事、中務三男之格ニ無御構、
御見合を以輕場にて被召仕、名字替を茂被仰付被下
度旨依願此節被 召出、御側御小姓ニ被仰付、家名實
名被下置候、其段者先達而被 仰出候、右之次第候故、
中太兵衛事向後中務三男之格ニ者不被仰付候、然とも
此度仲兵衛御禮申上候節者被對中務家筋、願之通御太
刀進上被仰付候、右之訳致承知置候様中務江可申達由

御意候ニ付如件候、以上、

寶永二年 西九月二十二日

島津帶刀判(忠雄)

島津中太兵衛判

可称、

小林仲太兵衛判
政一

寶永二酉

右者、島津中務三男島津中太兵衛於 御前右之通 御袖判頂戴仕候由中務より被申出候間、此段可被承置候旨、主殿殿御差圖ニ而候、以上、
(肝付久兼)

寶永二年 西十月五日

相良權太夫印(長規)

御記録所

島津中務

三男

樺山助太郎(久郷)

嫡子

右、来十五日元服被 仰付候、御禮之次第しらへ候

而書付可被差出候、式部殿御差圖ニ而候、以上、
(川上久重)

十二月十一日

黒葛原源左衛門(忠雄)

291の4
朱書

本行ニ付源左衛門へ御尋申入候者、中務殿三男者小林中太兵衛にて候、然者別に三男可有之儀難心得候由申達候得者、中太兵衛事ハ小林名字ニ而別家に被召立候故、中太兵衛弟事三男之筈と 御前江も被 思召、御家老衆其心得ニ而候由、市来源右衛門承候事、
(家宅)

寶永二年西十二月十一日

一 寶永五年子閏正月五日、小林中太兵衛事代々小番被召入候旨、大藏殿より川上八郎左衛門御取次を以被仰渡候、
(島津久明)

291の5

一 島津内藏弟島津庄三郎事、亡父織部二男之格ニ無御構、御見合を以被召仕、名字替をも被仰付被下度旨依願庄
(久達)

三郎事此節被 召出、御近習役ニ被仰付、平岡(之忠)五郎右衛門与家名御改被下候、右之次第候故、五郎右衛門事向後織部二男之格ニ者不被仰付候、然とも此度五郎右衛門御禮申上候ニ付て者 思召之詔有之、願之通御太刀進上被仰付候、右之旨致承知候様可相達置候旨 御意候ニ付如件候、以上、

寶永二年酉十月二十八日

島津(忠雄)帶刀判

島津内藏殿

右之通御座候、中太兵衛親左内事當又七郎曾祖父中務久輝三男ニ而候処、久輝依願家号實名被下置、新家ニ被召立、向後中務三男之格ニ者不被仰付候、然とも御禮申上候節者被對中務家筋、願之通御太刀進上被仰付候旨、前件之通 淨國院様御代 思召を以被仰付置、其後左内事代々小番被 召入置、段々御役被相勤、大御目附御役被付候節家格寄合被仰付、名越左源太次、北條十左衛門頭に連名被仰付置候、右通中太兵衛家之儀者 思召之詔有之又七郎家相離れ、新家に被 召立

候ニ付、又七郎家之由緒家格等茂相絶、他家ニ罷成候ニ付、家筋ニ付而者何事も互に構不申咎候、先年平岡(之忠)内匠事前条之通島津内藏弟にて候処ニ、 思召を以家名被下新家ニ被召立候処、享保五年子五月、大御目附御役被仰付候節被 仰出候者、平岡八郎太夫事(之忠)島津内藏与存候而者家格之詔も有之候得とも、八郎太夫事平岡之家号新家ニ為被仰付事候故、由緒家格等も無之候、此節新規ニ寄合被仰付候条、寄合之場にて者名越(恒渡)右膳次に書載、御役ニ付て者島津登次に相記可申旨被仰出、其段當座江も被仰渡置候、中太兵衛家内藏家同様ニ被仰付たる儀に御座候、右之詔を以、先年左内事大御目附御役被仰付候節、家筋連名越左源太次、北條十左衛門頭ニ被仰付置候、且又先年山岡(久英)宴山新家ニ被仰付置候ニ付、角郎(久勝)より系圖相調度由にて被得差圖趣御座候処達 貴聞、宴山事實ハ左衛門家之三男候得とも、 寛陽院様御子分ニ被 遊候ニ付、左衛門家を離れ、右之通ニ候段可書記事候、左候而、段々 思召之詔被 仰出、義岡左平太次に連名被仰付候、右次第之詔を以、左衛門家系致附属、宴山名之所に件を書入

れ候而者、思召之詔不相叶候故、宴山元祖ニ可仕旨御意之由被仰渡候、右宴山・内匠両家之儀者新家に被召立、御意之趣を以ハ再本家之支族に者被仰付ましくとの 思召ニ而候半と奉恐察候、然者此節中太兵衛儀由緒之詔を以、又七郎家之二男にて茂三男家にてても、系譜不相離様被仰付被下度旨、無據願之趣にて御座候得共、左内亡父久輝依願新家被召立、向後中務三男之格ニ者不被仰付旨、思召を以被仰付置たる儀御座候得者、此節又七郎より系譜庶流之筋ニ被仰付被下度願被申出候趣、淨國院様思召ニ者不相叶、右ニ付而者中太兵衛家之儀、又七郎家二男家之筋にてても又ハ三男家之筋ニ而も、願之通被仰付筋ニ者難申上候、左内事久輝三男之詔を以、此節中太兵衛事又七郎家之三男家ニ被仰付者、御三男家ニ罷成筈候得者、新納五郎左衛門頭、伊集院十右衛門次ニ茂連名可被仰付哉与相考申候、於其儀ハ 御支族并他家歴々之故家をも相越申儀、別而不輕事ニ候、此儀 淨國院様御存生之内右式之願被申出候者 思召之詔何分ニも被仰渡筈候得とも、今更 思召を以て被究置候儀被相改候而者

思召之一筋も不相立、被究置候家筋通名之次第も相替り申積りに候得者、旁以て又七郎願之通ニ者可難被仰付儀与吟味仕候、右次第之儀ニ御座候得ハ、中太兵衛家之儀 思召を以新家被相立、向後中務三男之格ニ者被仰付ましく旨、淨國院様御意之趣以来相立候筋被仰付置可然儀与乍憚奉存候、以上、

寶曆十三年癸未九月二日

御記録方稽古

市来瀬兵衛(政念)

川上大六(親敬)

御記録奉行

児玉五之丞(早力)

本田新右衛門(親左)

吉田用右衛門(清純)

○御座唱替

覺

一御家老座

右評定所之事

一 御勝手方

右御物産御國替座之事

一 用人座

右日帳所之事

一 奥大番

右御里役之事

一 奥附足輕

右定衆之事

但納殿附杯と申候哉之尋有之、

右之通向後唱可申旨被 仰出候、

寶永二年西二月

右書附御勘定方小頭より尋之儀有之到来候故写

之、

○七島郡司寄役御目見之調 御記録奉行

覺

一七島郡司寄役之儀ハ肩書名字之者被仰付置候、右寄役

者 御目見可被仰付哉、致吟味可申出旨被仰渡、左之通御座候、

去ル寶曆二年申七月、七島郡司共 御目見願之儀ニ付

段々申出趣有之、調被仰渡、別紙之通當座より申出置

候ニ付、書写差上申候、右之通御座候得者、郡司寄役

之儀 御目見被仰付候先例見當り不申候、左候得者、

寄役ハ肩書名字之者ニ御座候故、 御目見被仰付候ニ

者及問敷儀与吟味仕候、以上、

未九月廿日

御記録方稽古

川上(親敷)大六

御記録奉行

兄玉(実門)早之丞

吉田用(清純)右衛門

但調書之通 御目見不被仰付候、

覺

乍恐口上書を以申上候、

一 鏢節 三 拾連

一 鸞物 式壺

右之通進上仕、前代より 御在國之御者 御出座之御

序ニ 御目見被仰付来候を、享保九辰九月 御通り掛

ニ 御目見被仰付候節被仰渡候者、七島之郡司御當地

へ上り居候ニ付、明廿一日 御通り掛 御目見被仰付

候、右郡司之儀 御對面所御出座之御序ニ 御目見被

仰付事ニ候得者、最早當年ハ 御出座之御序茂無之候

ニ付、御通り掛ニ 御目見被仰付候、此以後とも例

ニ者不被仰付事ニ候条、其通承知可仕旨被仰渡候、左

候而、同十一年、又々 御通掛 御目見被仰付候故、

私とも當役中前々より被仰付来候儀相替申儀、迷惑至

極奉存候ニ付、同十五年戌之年、右之次第乍恐奉訴上

候処、七島郡司之儀者前々より有来通り 御對面所

御出座之御序ニ 御目見被仰付筈に候間、以後とも右

之通願出に不及候間、此旨承知可仕旨被仰渡、同九月

九日ニ 御對面所 御出座之御序 御目見被仰付、難

有冥賀至極ニ奉存候、且又延享二年丑年、先 薩州様

御下向被遊候節 御目見之願申上候処、其節被仰渡候

者、當分御當地江居合候四島之郡司 薩州様被遊御下

向候御祝儀申上進上物仕、御序次第 御目見被仰付被

下度旨願申出候、来ル九日 御對面所江 御出座被遊

御目見被仰付候間、四ッ前ニ罷出、進上物可差上旨被

仰渡候故、進上物差上、九月九日 御對面所 御出座

之 御目見被仰付、難有仕合奉存候、然者去ル未之年

(重年) 太守様被遊 御下向候ニ付、 御目見之願申上候処に、

同九月二日 御通り掛ニ 御目見被仰付候、何れ之筋

ニも 御目見被仰付候儀難有奉存候得とも、右にも申

上候通、私共當役中前々より被仰付来候儀相替り申儀、

迷惑至極ニ奉存候、就夫乍恐又々奉訴候、成合申儀に

御座候者、何とそ此節より前々之通り 御出座之

御序ニ 御目見被仰付被下度奉願候条、此等之趣を以

被仰上可被下儀奉頼候、以上、

寶曆二年申七月廿九日

口之島郡司

肥後仁右衛門印

中之島郡司

日高平次郎印

臥蛇島郡司

肥後源左衛門印

諏訪之瀬島郡司

肥後五郎兵衛印

悪石島郡司

有川次郎右衛門印

寶島郡司

平田伊兵衛印

御船手

御筆者衆中

本文相糺候処に、七島郡司共進上物仕 御目見被仰付候儀、當座江委細相知れ不申候、本文之通委曲申出候ニ付而者、御目見被仰付候儀別条なく相見得申候、然者 御對面所江被遊 御出座候節者、席末ニおひて御目見被仰付筈ニ候得とも、此涯 御出座之御序も無之与相考申候、左候得者、其内何方江成とも 御出之節 御通掛之 御目見可被仰付外御座有間敷儀と詮議仕候、尤此以後 御在國 御對面所江 御出座之節、

右者とも居合申におひてハ、以前之通 御對面所未席

におひて 御目見可被仰付儀与是又吟味仕候、以上、

申八月四

御記録方添役

本田(親方)

御記録奉行

川上(久籬)

○御代替ニ付郡山郷噺・與頭より先例踊御免被仰付度

願

口上覺

御代替之節、鹿兒島衆踊御座候、以後花尾權現宮江郡山衆中踊前方より仕り来申候、尤(綱貫)大玄院様(吉貫)總州様御代替之節も踊仕申候ニ付、隅州様御代替之節踊申度旨、別紙之通願申上候処に、其節之御地頭山沢(盛香)十太夫殿ニ而御座候得共、江戸御詰之故、跡御地頭代小笠原彦八郎殿御聞被成候ニ付、右之趣彦八郎殿より御披露被仰上候処ニ、先例之事情間被聞召置之旨被仰渡候条、踊仕候様に与右御地頭代より御書付を以御免被仰

渡候ニ付、踊相調申候、依之申上候、此節之儀も先例
之通踊御免被仰付被下度奉存候、以上、

寶曆二年申七月十六日

郡山

噯

與頭

連名

略之、

○當所諏方社格申立三十社家以前之通被仰付度故本
出羽守申出

乍恐以口上書奉訴候、

當所諏方大明神者、御元祖様信濃國塩田庄・大田庄
御地頭職御補任、貞久様迄被遊 御傳領、御當國
へ御下國、御元祖様御誓願之旨有之、信州本社諏方
大明神を御請下之、野田木牟禮城に被遊 御勸請、
氏久様御代當分之地に 御遷座、宗廟与 御崇、神領
餘多御寄附有之、御祭禮等餘社に相替候、就中 忠國
様御代七月御祭礼 頭殿 頭と申事被為始、立久様

御代ニ至、信州御佐山祭之次第を以て被遊御増祭、于
今御退轉なく候、此御祭者於信濃國号御狩祭、軍陣發
向之儀式にて御座候、本社にて年中七拾餘ケ度之御神
事に御佐山祭を被移候事、諏方大明神ハ日本第一之軍
神、武家之尊崇異于他御事故、御家擁護 御武運御
長久之御為にて御座、(族脱力)然者諏方両社者 御當家初而
御勸請之神社、御城下之惣鎮守、御代々様守護之
神靈ニ而、御尊敬之御内意餘社に類も無御座候、正
月元日五社参并 御首途之節も、先諏方社江被遊 御
参詣候、其外 御家督御官位等之 御告、御出陣之
御首途、合戦御勝利之 御祈願之趣、數通之御文言旧
記ニ相見得申候、且又先年正一位之神階 近衛家熙公
御染筆之御額 (綱貫)大玄院様御代諏方社・稻荷社江被為掛
(吉貫)總州様御代初之社頭より者万事結構に被遊 御再興、
御尊崇相増候、然者當所社家三拾家内之儀、以前二者
手札無年附書下名字、士互之縁與仕來候処に、去る巳
年札御改より、御分國中社人一統手札之面肩書名字
年附可相記旨被仰候ニ付、段々奉訴趣有之、元文二年
巳八月、嫡子迄書下名字年附ニ而被差置候段被仰渡、

難有次第奉存候、此上御訴訟申上候事恐多奉存候得とも、當所社家之儀者、二男・三男・末子迄も神事之節者無勝劣一統に出席仕、嫡子同然ニ相勤申事ニ御座候得者、嫡子迄書下名字に被仰付候而者、神前之座配成合も如何敷奉存候、諸社者不及申上、東照宮御祭會にも出席仕、御直參 御目通近く相詰申事ニ御座候得者、旁以恐入奉存候、右申上候通、御元祖様御以來格別之 御尊敬餘社ニ相替り候間、被對神靈隨仕之社家とも三十家内末子迄も此節手札并諸事以前之通被仰付被下度、偏ニ奉願候、京都吉田殿におひて 御當國諏方社 御尊敬之儀者委細相知有之、隨仕之社家迄も御挨拶等相替、對顔之節も、諸國社家より者頭ニ對面被成先格にて御座候、尤外城社人者官職次第階級も有之候得とも、御城下社家之社家(行カ)之儀者末子迄も官職無差別、最初より上官ニ裁許被申付、行事方に付ても吉田殿直傳有之、諸事御懇に被仰下候処、肩書名字之躰ニ而者、對本所候ても如何ニ存申候、彼是御取分を以 御城下社家三十家内何とぞ諸事以前之通被仰付被下候者、外聞実儀難有奉存候、何分にも御吟味次

296

第被仰付被下度奉存候、此等之趣被仰上可被下儀奉願候、以上、

寶曆二年酉八月廿二日

本田出羽守印

寺社御奉行所

○右ニ付御記録奉行調書

本文當所諏方社人三十家之者共二男・三男・末子までも手札之面書下名字被仰付、諸事以前之通被仰付被下度旨神主本田出羽守申出趣有之、水引新田宮・國分正八幡宮・穎娃開聞神社・當所諏方神社社位之次第相札可申上旨被仰渡、井上宮内江承候処、左之通申出候、

一 水引新田宮

一 大隅正八幡宮

右両宮共ニ五所八幡之中ニ而、尊卑高下無御座、同等ニ而御座候、

但御宮之次第ハ、五所之第四新田宮、第五大隅之御宮ニ而御座候間、新田宮、正八幡宮与次第可仕候、

一 穎娃開聞神社

一 鹿兎鳥諏方神社

右両社之儀者、右之通開聞、諏方与次第可仕候、

右之通宮内申出候ニ付、此段申上候、以上、

寶曆二年申九月廿日

御記録方添役

山田喜三有雄右衛門

本田七右衛門親方

○御城下諸士外城より養子且跡職等之御格式御記録奉
行江御達書

覺

一 御城下士直子無之、由緒之訳を以て外城衆中并座附士を
養子ニ願出候者、向後父方從弟血筋之續迄を養子御免
可被仰付候、且又所高直ニ持出候者ハ有来通可被成御
免候、銀子等持越、養父方借銀相弁、養子取組度由願
出候而茂被取揚間敷候、右ニ付而者、しらべ様之次第
以前より段段御格式被定置事候間、猶以無相違様しら
べ方可致候、

一 與中之諸士跡職願、直子無之養子承立候内延之願申出

候節、高屋敷所持之者又ハ無高無屋敷之者段々月限被

究置、三度迄者被召延、其上月延申出候而も何ぞ詮無

之者願不被取揚候、然れとも家之功又ハ其身之依託

ハ吟味次第被召延儀茂候処に、近年ハ及四度延之願申

出候者多々有之、月限被定置候詮無之候間、近代別立

候類輕き家筋之者者、四度日月延之願ハ向後一切被取

揚間しく候、然ながら格別之訳有之者者、御見合を以

可被延置候、

右之通此節被相究候条、御記録奉行江可申渡置候、
寶曆十三年癸未八月

島津久金
左中

右之通御書付小松式部殿清巻より未八月廿日吉田用右清絶

衛門江被成御渡候ニ付、書留之置候、向後右御格

式を以て外城養子調方可仕旨、式部殿よりは又致承

知置候事、

○外城衆中寄合以上之家来より養子之御格式御勘定奉
行・地頭・御記録奉行江御達書

○護摩所不動明王之由来

覺

右之通、寶曆十三年未八月廿六日、高橋此面殿より此節御格式被相改候ニ付御書付壹通被成御渡候ニ付、書写之置候、吉田用右衛門存、

勘定奉行江も申渡置候、夫れとも當分家来之姿にても最前凡下之業いたし居候者とも者御免被仰付間敷候条、右之趣を以可致吟味候、
寶曆十三年癸未八月廿六日
(高橋權壽) 此面

写

外城衆中直子無之、寄合以上之家来從弟之續迄ハ養子御免被仰付事候処、近年右躰續き之訳を以願出候者多候、依之向後衆中之内血筋ニ養子ニ罷成者無之候者、衆中二男・三男之内より願出、究而養子罷成者無之候ハ、右家来之内父方從弟之血筋迄を御免可被仰付候、

右之通被相定候段、寄合以上之面々并諸地頭・御

勘定奉行江も申渡置候、夫れとも當分家来之姿に

ても最前凡下之業いたし居候者とも者御免被仰付

間敷候条、右之趣を以可致吟味候、

寶曆十三年癸未八月廿六日

(高橋權壽) 此面

右之通、寶曆十三年未八月廿六日、高橋此面殿より

此節御格式被相改候ニ付御書付壹通被成御渡候

ニ付、書写之置候、吉田用右衛門存、

誌鹿兒府護摩堂之本尊不動明王之由来代

洛陽西洞院有八幡之神廟、神廟之傍有修護摩之堂、我祖師 弘法大師平刻不動明王之像、以安置於堂中、於是乎善男子善女人歡喜踊躍、而恭敬禮拜者不可勝計矣、其年月余在洛之日、見守堂之比丘竊欲鬻明王之像諸市、不忍見之、雖欲償於其價以安置尊像於旧堂以永傳祖師之制作、然余素桑門之徒無可償之貯、徒仰歎息而已、前薩隅日三州之太守義久尊君時在洛陽、余使侍臣聞之於 尊君、尊君平素婦依佛乘、而誠精實中、是故患明王之尊像與祖師之制作一時兩亡、而使侍臣齎白銀數斤、而與之、而迎明王之像、以送我薩州、不安置之於旧堂者、恐守堂之比丘再鬻諸市、而祖師之制作不傳於世也、尊君回旋之後、構堂於華第之傍、以安置尊像於其中、而敬信尤甚矣、且信受奉行明王之慈心、而撫民以仁愛、物以義寬猛兼施、而措國家於泰山之安也、其用廣哉、伏願自今以後 上自一人下到士庶、一心恭敬用明王之索以縛往来之心、一念仰瞻執明王之劍以斷人情之欲、悉除末世流俗之濁、全存本来不動之眞、祝々、

元和庚申閏十二月吉 日

○比志島家略系圖并同紀伊守國貞江宰相家久公より追悼之御歌都合拾弍首

覺

一 比志島家十代河内守立頼之弟流

○義方 美濃守 法名永昌 ○義住 美濃守

○國守 源左衛門 美濃守 ○國眞 宮内少輔

○國貞 義弘公・家久公御代御家老 宮内少輔 紀伊守

○國隆 彦四郎 宮内少輔 高岡地頭 家久公御代御家老 義住二男也、

犯罪被誅断絶、 國隆子○國安 内記

依父之罪科遠流屋久島、赦免之後為家督義之二男、

○義之 為國貞之後嗣、監物 家久公御代新恩五百石

○國治 實ハ鎌田監物政貞二男、主膳 妻義之之女子為養子、

國治之子○善八 (國英)

ことし元和第六首夏之頃、前の比志島紀伊守身まかりし悲しミをいへはさらなり、朝夕のいとまな

くつかふるに無二心、道を専らとして、古来稀の年に餘るまで馴／＼し思るを種として、五首をつらね手向る物ならし、

かきりなき袖の涙やたらちねの

わかれもけふにかはらさりけり

七十のなれしは夢とうち覺し

うつゝにかへるあかつきもかな

忘れしな道しある世のこの葉の

露に袂はくちハつるとも

なき人をなれもわすれし時鳥

こゝろくらへの啼音かなしき (さ)

ありかたき弥陀の教への六の道の (じ)

四のちまたをのかれぬる哉

宰相家久

(本和歌ハ「旧記雜録後編四」一六七七号ト同文ナリ)

林鐘十四日一周忌にめくる事夢のことく、光りあり玉の言の葉も露ときえ、思ひハ森のくちはに積るといへと、つたなき六首を靈前に手向、哀をのふるも

のならし、

鳴泪うき折々のかたミそと
南 しほるはかりの我袂かな

無 むなしきと思へはかなし水無月の
離ほとなく廻り来にけり

阿 明ほの、月の名残も散る華の
梢を忍ふおも影そうき

弥 見せはやの色香にめてし月霜の
こ、ろの花をあやなたむけん

陀 立かゑる離れならね^{⑩ハ}、幻の
夢の浮世をしたふはかなき

佛 吹はろふ嵐の雲も紫の
八重たつ空やうてな成らん

宰相家久

むかいゐてミれハかなしや面影の

去年の昨日にかわるうつしゑ

(本和歌ハ「旧記雑録後編四」一七四七号ト同文ナリ)

御うた但紀伊守殿御一周忌

右之通七首ともに古き紙に書付け御座候、紀州老一

周忌之節 御詠歌之よし相見得申候、写し仕差上申

候間、御見合可被遊候、以上、

亥八月四日

同名三左衛門

比志島平右衛門様

○為御救相撲・芝居興行之書付

301

覺

一元禄十六年癸未九月、上築地ニ而勸進相撲有之、加治

木之者御免ニ而興行、築前より関稔仁太夫与申者呼来

ル、

一寶永四年丁亥八月廿五日より、上築地ニ而操芝居興行

いたし、上町御救之為なり、

一同七年庚寅、上下町御救勸進相撲・芝居上築地ニ而御

免、九月廿七日より二七日興行、下町勸進本ニ成候処、

上町寄にて岩竹与申者勸進相撲之関取因幡山市太夫与

申者をなけ付候、

一寶永八年辛卯三月九日より、上築地ニて勸進相撲二七

日興行、上下町御救之為なり、

右書附者、大山平右衛門殿御家老座筆者被相勤候
 内諸書付被留置候覺帳之内に有之、寶曆十四年甲
 申六月五日写置之、

○俗に下大隅之邊田七人

覺

往昔、下大隅噲啞郡之内海邊隣りたる地を領する者あり、俗に邊田七人といふ、

上井 今諏訪甚六家、國分之上井村を領す、

敷根 今島津右膳家領之、

廻 今廻氏家領福山、

池袋 今池袋氏在外城牛根二川邊を領す、

石井 今此家断絶乎、垂水之内中之俣村領之、

伊地知 今秩父家垂水本城之主、海瀉・柗原相添十二

町領、

肥後 元祖肥後守平信基、今之肥後平右衛門家下大隅

高城領之、高城者垂水之内与相見得候、

右七人領地之高何程ニ相當可致哉、難察候、

○南方 山北 上山城 谷峯城之略誌

一南方 河邊・知覽・(註脱之)穎・揖宿・給黎

一山北 東郷・入来院・祁答院・高城

山とハ薩摩山を云、古役之衆より傳授之、

一上山城

(貞久)道鑑公所賜比志島彦一之五月廿三日状云、敵等上山

之城を取候半与于今夜忍て大勢谷峯之城ニ打集て候、可切取由方より告申候間、此城とられ候て後ハ、

一期浮沈たるへく候程に、只今上山に馳向ひ候、被

相催一族候て、不替时被馳越候者悦入候、尚々此城

とられ候てハ、合戦之前途を可失と云々、

一谷峯城 山王山欵

右、同八月廿一日御状ニ云、西侯并郡山城事、今朝

東侯より馳入申へく候、就夫ハ郡山城サリトモ一サ、

へハ候ハント存候処、無其儀落候事、就公私歎入候、

昨日も田上凶徒等大勢打出候間、谷峯ニ差置候子と

も以下降逢合戦候早と云々、

○惟新公より龍伯公江進上被遊候起請文武通

起請文前書之事

今度 竜伯様(義心)又四郎殿を少将殿ニ被思食替、從京都

御朱印を御申下之由、乍承付不致言上、構疑心申候由

被 聞食(食之)通候旨、被 仰知驚存候、就夫拙者事者、毛

頭不承付候由、重疊申上候処、無吳儀被 聞食分、此

上者無御別儀謂共条々被 仰聞、誠ニ安堵仕候、於自

今以後、如何様之讒人有之候て如右雖申妨、不殘疑心

互ニ御熟談之上を以、 御家御長久之調儀可仕外不可

存疎略候、若此旨於偽申者、

(本文書ハ「旧記雜録後編三二一六七五・一六七六号文書ト同一文書ナルベシ」)

右、押紙起證(ママ)文前書、

加治木写濟

新納仲左衛門(忠雄)

起請文前書之事

一今度之謂事、拙者毛頭不存寄通申上候処、殘る処なく

被 聞食分、安堵仕候事、

一於自今以後、如何様之讒人在之候而雖申妨、無腹藏申上、互ニ無御疑心御熟談之上を以て、當家長久之調儀所希候事、

一從京都御變之儀被 仰下候間、當家之御為を存、御變

可然候由申候き、曾而構私曲非申儀候事、

右之旨於令違背者

御神名如常、

慶長七

八月十日

進上

竜伯老様

(義心)惟新

(本文書ハ「旧記雜録後編三二一六七七号文書ト同一文書ナルベシ」)

右、押紙起請前書、

加治木寫濟

新納仲左衛門

右式通抑留文書之内見當、書写之置なり、

明和元年甲申八月廿八日

○向々ニ而御道具調御記録所江申出書都合

覺

一五匁五分御鉄炮 壹挺

但波ニ水午三ツ金銀象眼あり、

右 惟新様御持筒之由申傳候、

一五匁四分御鉄炮 壹挺

但曲尺式字彫込あり、

中心秉直三韓制敵貽厥家聲久揚

文禄甲午年

右文字真鍮にてすへ物

右高麗江參候由傳承候得とも、委細書等ニ者相

知れ不申候、

右之外 御持筒之御由緒之儀相知れ不申候、以上、

享保六

十一月廿三日

御納戸奉行

御記録奉行

覺

一式拾目御持筒 壹挺

但石神源兵衛重永重次作と有之候、

右九字筒与帳面ニ相見得候、委細之御由緒相知れ不申候、以上、

丑十二月十八日

御納戸奉行

左近允與太夫

米良九右衛門

覺

一御幕 貳頭

内壹頭ハ仕切幕

但古物日野絹、御紋所丸之内ニ二引、

右者朝鮮國御渡海之節 御船幕にて候由申傳へ、先

年御船手より御兵具所江相納たる由候、

一團扇之丸御馬印

右御馬印之儀ハ (家久) 中納言様高麗へ 御持せ遊ハさ

れ候由申傳へ候得とも、究而之由諸相知不申候、

然れとも右 御吉例を以て之故にても候哉、 (綱) 大

玄院様御道中被遊 御持せ、左候而、 (吉貴) 總州様御

部屋栖之節も御道中被遊為 御持来候処、先年高

305の4

輪御類焼之節焼失仕、其後出来被仰付候よし、日帳ニ相見得申候、右者申傳へ候由緒も有之候者、可申遣旨承候ニ付、如此御座候、以上、

丑十二月十三日

物頭

諏訪神六

川上瀬兵衛

御記録奉行

覺

一十文字之御伽羅

右御書院方江五六年以前より御預け被召置候、御伽羅之由緒、何之 御代より御傳來被遊候儀も御書院方へ者相知不申候、餘ハ略ス、

寅正月廿六日

御書院役人

御記録奉行

305の5

(光久) 一寛陽院様御代鉄炮張達野源太兵衛与申候、

附甲斐五兵衛鉄炮張

305の6

覺

一布袋 玉目三匁式分之御鉄炮

一十目 玉目三匁五分之(ママ)

一明德 玉目三匁六分

右三行 中納言様御持筒ニ而、高麗江御持せ被遊、

大明人餘多 御手つから御討被遊、右之通筒之名

御作之由、尤 御自筆之由傳承候、

一五典 玉目三匁五分御鉄炮

右 中納言様御持筒にて、御手つから竊餘多被

遊候由、右御鉄炮名も御作之由承傳候、

右之通承傳申候、實否之儀者究て存不申候、且又私

亡父次郎右衛門江被仰付出来仕候御筒ハ見覺罷居候、

餘略之、

二月八日

種子島時春

御記録所

覺

一七匁御鉄炮

壹挺

但松方兵右衛門張与申傳へ候、

蜻蜒十五銀真鍮にて象眼、

一七匁御鉄炮

壹挺

但とんぼう五ッ銀真鍮居物、

一五匁御鉄炮

壹挺

但元にとんぼう銀象眼、

一三匁御鉄炮

壹挺

但決勝与申御鉄炮ニ而者御座有間敷候哉、十日・

明德・五典一類之御鉄炮ニ而御座候、右之決勝与

ハ、書付等に者相見得不申候、以上、

二月十四日

御納戸奉行

御記録奉行

覺

御鉄炮九字式拾目

右者先年御由緒國民山栖承知仕候趣御座候て、私江

物語承り候、其通書付差出候様ニ承候ニ付申出候、

寛陽院様御代山栖三郎次郎与申節、鉄炮数挺御用ニ

付進上仕候、依之御持筒之内壹挺拜領可被仰付候条、

御鉄炮藏江參見合、可備 御覽旨 御意候故、右御

鉄炮持參、拜領仕度旨申上候処に、其通被仰付候、

然処に鳥津市正殿(忠廣)・鳥津安藝殿(久雄) 御前ニ被詰居候て

被申上候者、右御鉄炮御由緒三郎次郎不存候故頂戴

仕候、拜領被仰付かたき御由緒有之由にて被申上、

先年 御家督之節、御嘉例能御鉄炮之由候て 御迎

に被差上候、 御下向之砌鳥原籠城ニ而 御通船之

砌、御手つから被遊候 御持筒与申傳候段、兩人

御沙汰被申上候ニ付、驚入早速其断申、御藏江相納

め候、以後八匁・十匁之御鉄炮式挺山栖江拜領仕候

事、折節物語承候、此節右之御用筋ニ付、又々山栖

江茂頃日相尋、右之段ハ到只今忘却不仕、右之通覚

へ罷在候よし申事御座候、以上、

寅二月十五日

種子島十左衛門

御記録所

覺

一式刃八分御鉄炮壹挺

一先ニとんほう式ッ居物銀

一元ニ崩れ稻妻銀平象眼

一逸（吉豊）餘（吉豊）稻 彫込有、

右之御鉄炮先頃從 總州様太守様江被進候ニ付、

御前に有之候、以上、

寅二月十五日

御納戸奉行

御記録奉行

覺

入来院家ニ蜻蜒居物之鉄炮有之、拜領筒之由、右鉄炮

ニ付慥なる證書又者申傳へ之儀にても候者、可書出旨

被仰渡候ニ付、入来院主馬殿（重矩）へ申聞候處に、右鉄炮之

儀 光久公より入来院石見江拜領仕、于今所持仕候、

右之段者系圖に茂相見得申候得とも、別に委細之證書

写無御座候、乍然家中古老之者共江相糺申候処ニ、

家久公加藤主計頭殿（清正）与かけ被遊候御鉄炮之由申傳承届

候、證書無之候ニ付而者難申出候得共、可書出旨被仰

渡候ニ付、此段私より可申出旨主馬殿被申、如斯御座候、以上、

寅三月廿一日

用頼

黒田納右衛門

御記録所

覺

一松風之御琵琶

壹面

但撥面黒塗、若松に座頭之模様、金銀に金がひ有、

一右袋

壹ッ

但萌黄地金入、裏かう色、

一右外箱

壹ッ

但黒ぬり、松風与銘書あり、

右者、松風之御琵琶模様書付之儀被仰遣候ニ付、

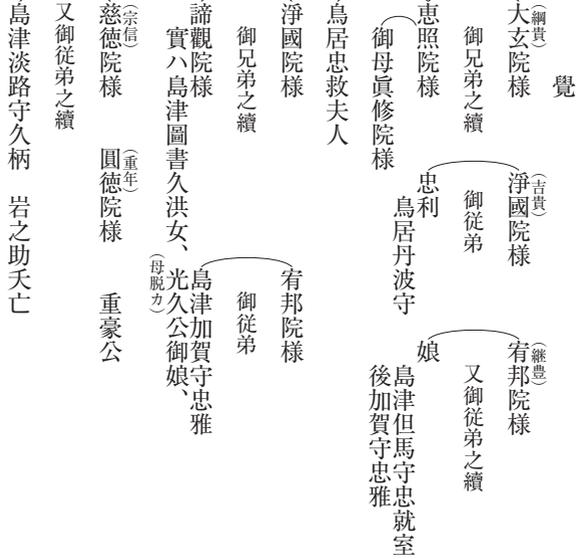
右之通にて候、以上、

五月七日

御納戸奉行

御記録奉行

○大玄院様以来御續合之略御系圖



○矢野甚八家筋調 御記録奉行

覺

矢野甚八家筋相札可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一甚八亡父矢野甚内事ハ當矢野大右衛門曾祖父矢野次左

衛門三男ニ而、初而別立、小役人等之勤仕、嫡子甚八

事も右同前之勤仕候、尤大番家筋にて御座候、

一嫡家矢野大右衛門家者、當大右衛門六代之祖父矢野自德

院与申者京都ニ罷居候処ニ、家久中納言様御代琴之藝を

以て 御當家ニ被召抱候、高祖父矢野大右衛門、曾祖

父矢野次左衛門、祖父矢野權左衛門御馬廻相勤申候、

其後納殿役相勤、亡父矢野大右衛門御馬廻にて江戸詰

仕候、大右衛門事京都御留守居御役相勤申候、代々小

番相勤居申候、

右之次第御座候得者、甚八家筋何ぞ差立為申訊相

見得不申候、以上、

寶曆十二年 午閏四月二日

御記録方添役

郡山(遜志)

御記録奉行

吉田(清純)

○川内高城衆中遠矢源三郎手牧御免之調書

川内高城衆中遠矢源左衛門亡祖父遠矢源三郎代手
牧御免之儀ニ付、相調可申出旨被仰渡候、手牧之
儀當座江ハ何分相知れ不申候故、高城噯共方江間
届申候処ニ、左之通御座候、

覺写

其元衆中遠矢源三郎自分馬過分ニ致格護置候間、其元
内城上嶽江放ち置き申度通所江も被申出、右野方江馬
召置候而も何ぞ無障旨、段々委細之次書にて被差出候
故、御國遣座江午九月被聞召上、福屋助左衛門殿御取
次ニ而、未二月十四日に御證文を以源三郎願之筋に手
牧場被遊御免候、其節御免之引合當座より不申越候
ニ付、此節此旨申遣候間、左様に可被聞召置候、以上、
戌十月九日 御厩方印

鎌田平左衛門印

財部作右衛門印

川内高城

噯衆中

郡見廻衆中

右之御證文此節申請候而、御噯衆江内證を以為見申候
処ニ、郡見廻衆江相付候而可差出旨承候、依之郡見廻
衆相甲惣左衛門殿江右之本書差出申候、左候而、噯所
江被留置候以後御問付も御座候者、此書付見合申候
て為可申上、五郎左衛門方江茂如此写し置申候、本文
御噯所江有、御當番噯衆上床仲兵衛殿へ戌十月十三日
ニ差出申候、以上、

戌十月十三日

「本ノマ、」
遠屋源三郎

右本書之儀ハ、元禄七年戌十月、源三郎より郡見廻
江相付噯方江差出候よし帳留御座候得とも、跡々よ
り折角見合申候得とも見出し不申候由、此節噯共申
出候、

右御證文写之内、午九月ハ元禄三年ニ相當り申
候、

未二月十四日ハ同年ニ相當申候、
(四脱カ)

戌十月九日ハ同七年ニ相當申候、

一青粕毛駄壱疋

右ハ (吉敷) 淨國院様御下向之節、高城西方於 御假屋地頭

向井市之丞江相附進上仕候、源三郎八十餘歳ニ罷成候故、西方江差越申儀叶ひかたく御座候ニ付、御中途より長倉兵右衛門御先きに罷通り候故、源三郎方へ 御目見可被仰付由被仰渡、高城町口ニ而 御目見被仰付候よし申出候、

一淨國院様御部屋栖之内、元禄八年五月、於江戸初而御暇御給 御國元江 御下向にて、夫より以来 御參勤被遊候、

一向井市之丞事、天和三年より寶永二年まで者川内高城地頭勤被仰付置候、

一長倉七郎左衛門初めハ (ママ) 与申候而、元禄八年より寶永七年まで御厩別當相勤申候、其子長倉兵右衛門寛文十年出生仕、寶曆五年、八十六歳にて相果申候、毎度江戸詰仕り、尤親七郎左衛門へ茂相附江戸詰仕候、其後横目役をも相勤候よし此節申出候得とも、江戸詰之

年間委相知不申候、

右之次第ニ御座候、淨國院様江戸より御下向之年間、遠矢源左衛門申出置候書物にも相知不申候、尤元禄八年以来御下向之筈与奉存候、高城西方於御假屋地頭向井市之丞江相附駄壱疋遠矢源三郎進上仕り候よし申出候、其砌市之丞地頭ニ而御座候、然者長倉兵右衛門事(元禄八年比ニ者式拾四五歳ニ相當り申候)御供仕り居、御中途より 御先きに罷通り候に付、源三郎江 御目見被仰付候旨申達候与相見得申候、左候得者、兵右衛門事名違ニ而茂有之間敷哉与相考申候、且又手牧御免之御證文写見届申候処に、元禄年間写置候書面与相見得、本書同前ニ而別条有御座間敷与吟味仕候、此段申候、以上、

寶曆十四年申七月廿八日

御記録方稽古

川上大六 (親敷)

御記録方添役

市来瀬兵衛 (政公)

郡山次郎左衛門(通志)

御記録奉行

本田新右衛門(親方)

吉田用右衛門(清純)

○鳥津權五郎養子成御禮進上物調 御記録奉行

覺

本文鳥津登智養子鳥津權五郎(久連)智養子成之御礼及延引候
ニ付、調被仰渡候、依之鳥津備中殿方江相糺申候処に、
別紙帳留写被差出候ニ付、相添差上申候、右帳留之趣
を以、權五郎智養子之儀都て御内々之儀にて表立智養
子成之御礼被申出に不及筋被 仰出候趣ハ相見得不申
候、然者智養子成御礼之儀者、(叱力)岐与表立不被願出候而
者御礼相洩申事ニ御座候間、此節智養子成之御礼登家
格之通御太刀・二種一荷進上物にて御礼可被仰儀(付脱力)与奉
存候、以上、

寶曆十四年 申七月廿九日

吉田(清純)

其外

連名略

○三家花岡・重富 御取立

覺

一花岡

寶永四年亥九月廿六日、高五千石被下之、鳥津(マ)

殿家御取立、

享保九年六月十五日、一所之地木谷村を花岡与号
被下之、

一重富

元文二年巳三月十八日、越前鳥津家鳥津周防殿相
續被仰付、高壺万石被下 御取立、

元文四年九月廿五日、号重富一所之地拜領之、

一今和泉

延享元年 子五月廿五日、和泉鳥津家鳥津三次郎(忠卿)

殿相續被仰付、高壺万石被下 御取立、

延享二年二月朔日、一所之地 拜領之、

○萩原喜兵衛高持成願調 御記録奉行

覺

本文萩原喜兵衛初而高持成之願申出、家筋調被仰渡候、當萩原孫太郎曾祖父萩原與右衛門儀、何御奉公相勤候儀相知不申候、與右衛門以前之儀段々相糺申候得とも相知不申候、亡祖父萩原三左衛門與大番相勤申候、喜兵衛事ハ右三左衛門二男二而、初而別立、當分御兵具所定筆者相勤居申候、尤代々御城下士二而、大番相勤申答之家筋にて御座候、以上、

寶曆十四年 申九月十九日

御記録方稽古

川上(親敷)大六

御記録方添役

市来(政公)瀨兵衛郡山(通志)次郎左衛門

御記録奉行

吉田(清純)用右衛門

○松元正右衛門高持成願調 御記録奉行

覺

本文高持成之願申出、家筋(調脱之)被仰渡候、正右衛門亡祖父松元傳兵衛勤方相知不申候、以前之儀相糺申候得とも、是亦相知不申候、右傳兵衛直子無之、亡父松元幸兵衛事ハ踊衆中田島新右衛門嫡子田島新左衛門与申者二而候処、跡養子ニ罷成、松元幸兵衛与申候、勤方無之、御番相勤申候、當正右衛門事當分地方定檢者相勤罷居申候、尤大番家筋ニ而御座候、以上、

寶曆十四年 申五月廿一日

御記録方稽古

川上(親敷)大六

御記録方添役

山田(有雄)喜三右衛門

御記録奉行

本田(親方)新右衛門吉田(清純)用右衛門

○義昭大僧正辞世哥

覺

314の2

普光院殿御舎弟、号宇智院義昭大僧正、有兄弟不安儀、
(広カ)
(足利義教)

右本畫賛者一乘院經藏有之候写ニテ候、

316

覺

一本文再調被仰渡候、(鳥津久倫 都城家) 鉄熊儀 御目通に被罷出候年生無
御座候故、名代を以御礼申上度旨、親類北郷權五郎(久慈)よ

314の1

一大覺寺義昭大僧正御辞世

のほるへき雲井のひはり地に落て
おとろか下に音をのミそなく

○大興寺文書

前略之、

此事以達

宸聽焉、明應七年九月二十有五日、冊賜福島大明神之
嘉號、翌八年冊自京降矣、祭以慰藉厥怨懟、則能利濟人民、
能擁護家國、

嘉吉元年三月十三日、御年三十七、

三州太守忠治改慈父

(忠昌) 圓室御芳跡壞旧室、為義昭之御

菩提所、命一乘院第六住持頼政、建立大興寺、

永正五戊辰六月上旬

南京前龍興寺住山僧録司護印雪竇比丘懷讓賛 朱印

315

覺 写

渡書

○川上久馬より丸之内十之字文用度願及ひ右ニ付御申
(マ)

一川上久馬より十一代之孫川上上野久隅代まで丸之内ニ
十之字紋所附来申候、此節より右紋所相用ひ申度旨願
申出らる趣有之、

本文願之通紋所相用候儀被成御免候条、此旨如例
可申渡候、

寶曆十四年申三月

(高橋種壽)
此面

○(マ)

り被願出候、寛延四年午八月四日、島津善次郎殿家督(久方加治木家)之御礼島津玄蕃殿名代(貴澄、垂水家)を以被仰付候、右通先例も御座候得者、鉄熊家之儀も一所持之内大身分ニ而差立たる資格、継目家督之節者家来 御目見をも被仰付事ニ御座候間、右先例ニ被準、鉄熊名代同格之人ニ而家格之進上物差上、継目之御礼 御目見可被仰付哉と吟味仕候、以上、

寶曆十三年未七月廿六日

御記録方稽古

市来(政公)瀬兵衛

川上大六(龜敷)

御記録奉行

吉田用右衛門(清純)

○御厩附士源兵衛家内肱岡庄兵衛子細有之庄兵衛重て御目見之儀之調御記録奉行調

覺

御厩附士肱岡源兵衛弟肱岡庄兵衛事幼少之時分より多病有之、當年六十餘歳に罷成候得とも、未 御目見之

願不申上、兄源兵衛家内ニ罷居候、庄兵衛嫡子肱岡金助儀ハ、御目見之願申上候(行力)候処 御目見相濟候、右次第故、庄兵衛無調法之訳を以此源兵衛より御断申出候、右鉢之例格も有之、庄兵衛重而 御目見之願可申出筋も可有之哉、致吟味可申出旨被仰渡、左之通御座候、一源兵衛祖父肱岡伊右衛門代御中間より御厩附士ニ御赦免被仰付候、亡父肱岡源右衛門、當肱岡源兵衛ニ而御座候、御厩江相附御奉公仕来申候、

一寶曆八年寅七月、御城下士測邊與左衛門親亡測邊與左衛門弟測邊次郎助長病者ニ而、當年六十歳ニ罷成申候処に、未 御目見之願不申上、家内ニ罷居申候、此節名代を以進上物差上、初て之 御目見相濟候筋ニ被仰付被下度旨、親類測與左衛門より段々申出候趣有之、當座へ吟味被仰渡、其節之吟味書別紙、壹通書写し差上申候、右通吟味仕り差上申候得とも、御取揚無御座候、

右之通測邊次郎助傍例相見得申候、源兵衛弟庄兵衛多病ニ而、六十餘歳迄 御目見之願不申出候処ニ、嫡子金助事ハ、寶曆四年戌閏二月、親類肱岡源兵衛

より 御目見之願申出、願之通 御目見被仰付候、

市来瀬兵衛 (政念)

然者庄兵衛事重而 御目見之願可申出事に御座候、

御記録奉行

其節當座へ調被仰渡候者者、先達吟味仕置申候趣ハ、

本田新右衛門 (親友)

庄兵衛嫡子ハ、御目見仕居、親庄兵衛ニ者 御目見

吉田用右衛門 (清純)

未仕者ニ御座候得者、御目見之次第父子前後仕候、

御目見之儀者勿論為重立事ニ御座候処に、父子前後

○右再吟味

に 御目見仕候儀者第一礼法ニ茂相込れ、金助事も

不輕無調法ニ而御座候故、今更 御目見仕候詮相立

申間敷儀与奉存候、尤源兵衛・庄兵衛事金助 御目

見之願申出候節、氣相付可申筈ニ御座候處に、庄兵

衛當分まで 御目見願不申出段、旁以無調法之至御

座候条、為後例に茂相成申儀ニ御座候間、次郎助傍

例を以、庄兵衛事以後 御目見願申出候而も御取揚

有御座間敷儀与吟味仕候、乍然右躰之先例見當り不

申候ニ付、金助一度 御目見被仰付候其詮此節迄ハ

相立候筋にも可被仰付候哉、此上者御詮議次第奉存

候、以上、

寶曆十三年未四月廿六日

御記録方稽古

318

一御厩附士脇岡源兵衛弟脇岡庄兵衛事 御目見之願不申上、其子脇岡金助事者先年 御目見仕居候、依之此節

當座へ吟味被仰渡、吟味書差上置申候、右吟味之通、

庄兵衛事重て 御目見不被仰付筋ニ相究り申候者、

金助當分迄ハ與帳ニ被召載置候得とも、以後家督継目

并別立等之願不申出筈御座候、然者 御目見之詮相立

不申候間、後年紛敷無之様に、此節與帳消除可被仰付

儀与吟味仕候、乍然右躰之先例見當り不申候故、此上

ハ御詮議次第ニ奉存候、以上、

未五月朔日

○船木助七死後養子無之家跡調 御記録奉行

覺

一本文船木助七相果、直子無之、養子ニ罷成候者無御座候ニ付、家跡不被召立筋ニ親類共より願申出、家筋調被仰渡候、助七六代之祖船木惣次郎(家人) 中納言様御代於京都 御家江被召抱候由自家申傳へ候、高祖父船木惣兵衛、曾祖父船木九兵衛、祖父船木次兵衛迄四代ともに御能方仕手脇相勤申候、亡父船木次右衛門事右次兵衛二男にて先年別立、横目役相勤申候、助七事ハ右次右衛門三男ニ而別立、馬醫師相勤申候、右次第ニ御座候故、何ぞ差立為申訳相見得不申候、此段申上候、以上、

寶曆十四年申

六月六日

御記録方稽古

川上大六(親數)

御記録方添役

市来(政公) 瀬兵衛

御記録奉行

山田喜三右衛門(有雄)

本田新右衛門(親方)

吉田用右衛門(清絶)

(本卷中ノ「〇」ハ全テ朱書ナリ)

舊史館調

目次

- 一 町田源左衛門附衆中石沢伊兵衛養子願之調
- 二 永井半助養家北川家より御兵具所附足輕江婦参願之調
- 三 右再調
- 四 窪田春賀死後養子無之家跡調 御記録奉行
- 五 國分弥勒院御再興
- 六 延寶二年より元禄五年まで之鑄流馬射手組人名
- 七 山口諸右衛門初而高持成願之調 御記録奉行
- 八 奥附一代士鎌田孫市多年勤功ニより代々士被仰付度納殿役人より申出之調 御記録奉行
- 九 久昶公御實名調
- 十 (マ)
- 十一 欠
- 十二 組頭及び御記録奉行江式部殿より被仰渡候書附
- 十三 町田藤助初而高持成願之調 御記録奉行
- 十四 諸所々之古牧(衝カ)しらへ書 御記録奉行
- 十五 右ニ付川上十郎左衛門より申出之書付
- 十六 鹿兒島稻荷神前鑄流馬御行張之始り御祈願等之調 御記録奉行
- 十七 長倉兵右衛門勤方之しらへ 御記録奉行
- 十八 栗屋盛右衛門高五拾石上り願之調 御記録奉行
- 十九 福屋助左衛門勤方之しらへ 御記録奉行
- 二十 川田伊織殿及同人養子彦七進上御太刀之調 御記録調
- 廿一 喜右衛門弟肱岡次郎兵衛御兵具所附士山口半兵衛養子違変ニ付て最初組方永代御暇之上養子為取組哉等

之調 御記録奉行

廿二 左近允喜八谷山衆中左近允喜泉養子願之調 御記録奉行

廿三 御臺所附士勤方有之者江者御切米三石六斗、被成下候趣御臺所より御記録奉行江返答

廿四 永田十左衛門養子願之再調 御記録奉行

廿五 申良衆中鳥越甚左衛門死跡養子之調 御記録奉行

廿六 諸御座附士格式差別無之候得とも御目見等之節順番之次第之調 御記録奉行

廿七 諸座附士高下相知不申諸座附之者娘縁與之儀者相知格式御座候調 御記録奉行

廿八 御春屋附士職業ニ付て者高下之差別無之趣御春屋役より御記録奉行江之返答

廿九 御船手附士職業により格式高下無之趣御船奉行より御記録所江申越

三十 下町人藤田喜兵衛年功ニより御目見願之調 御記録奉行

卅一 稻津六兵衛嫡子角之助依科被召放養子願之調 御記録奉行

卅二 鹿屋衆中亡永野市兵衛繼目養子願之調 御記録奉行

卅三 (マ) 鉄熊御目見且同人家中御目見願之再調 御記録奉行

卅四 志布志衆中重信新右衛門五拾石高上り之願調 御記録奉行

卅五 和田五齋初而高持成願之調 御記録奉行

卅六 近衛龍山前久様鹿兒島江御滞在中御馳走之次第

卅七 内之浦衆中相良兵右衛門五拾石高上願之調 御記録奉行

卅八 御家老・御物座・御國遣座詰等之調 御記録奉行

卅九 兎玉與左衛門初而高持成願之調 御記録奉行

四十 御厩附士一代士黒松六郎右衛門俗生調 御記録奉行

四十一 島津備中殿御家老御役御免之書付并通達

四十二 郡山五兵衛養子願之調 御記録奉行

四十三 籠伯様御袖判并文書等之調 御記録奉行

四十四 (マ) 四十五 小松安之助殿幼年ニ付續目之御禮名代且家来三人御

目見之一条
四十六 吉貴公靈塔

四十七座附士以上身分昇進之儀ニ付 思召書式通

四十八御兵具所附士北川玄昌死後養子親類共より願之調

四十九崎鉄之助御前元服願之調 御記録奉行

五十 光久公御家譜之内拔書

五十一綱久公御家譜之内拔書

五十二御城下代々土石原市左衛門養子願之調 御記録奉行

五十三左衛門殿養子島津大膳殿養子違変之儀御記録奉行よ

り高奉行之問合

五十四三輪山大門坊より御位牌御預り申上度願之調 御記録

奉行

五十五太守宗信公より神明宮江御刀一腰御奉納之儀御家老

衆より申渡書

(目次ノ番号ハ全テ朱ノ丸囲ミアリ)

○町田源左衛門附衆石沢伊兵衛養子願調

覺

一町田源左衛門附衆中阿久根預り石沢伊兵衛相果、直子無之、山口壽右衛門家内札山口八藏事養子仕度旨被願

出、本文之通調書差上置候処ニ、先年松井新右衛門家内札坂元玄眞元来士筋目之者候故、附衆中被仰付被下度旨西平太より被願申出、願之通被仰付、本文壽右衛門家内札八藏事も右玄眞願ニ似寄為申事ニ候間、今一往再吟味可仕旨被仰渡、本文吟味書差上置候處に、此節又々得与吟味仕可申出旨被仰渡、左之通御座候、西平太曾祖父西監物代初而被召出、家来とも少く差支候ニ付、亡父西彦太郎より先年奉願趣有之、附衆中二家内御免被仰付置、一家内者其砌奉願、大山權左衛門附衆中ニ而罷居候(猪カ)八重六弥太、享保十四年酉五月、願之通附衆中御免被仰候、今一家内者、寶曆四戌十二月、松井新右衛門家内札坂元玄眞奉願候節、調方被仰渡候、附衆中被仰付候儀ニ付而者、當座江被仰渡置候趣無御座候得とも、諸家衆中養子等之願有之、當座江も調被仰渡、元来士筋目之者被仰付候先例有之、玄眞事士筋目別条無御座候ニ付、願之通附衆中被仰付候て茂差支申儀者有御座間敷与申出候処ニ、願之通被仰付候、然者平太家之儀者右通家来とも少く差支候ニ付、右訳を以附衆中奉願、其砌一家内ハ御免被仰付候、玄

眞事最初奉願置候一家内之儀ニ御座候故、御免被仰付たる与相見得申候、右八藏附衆中養子願之儀も玄眞例ニ似寄たる事ニ者御座候得とも、平太願之詔を以ハ傍例ニ者引用しかたく奉存候、尤大小身共に以前より附衆中持傳へ居候家々多々御座候、右ニ付而者、其家附衆中之者相果、跡養子願出候節、家内札之者又者元来士筋目ニても血筋等之續無之者跡養子御免被仰付事ニ御座候ハ、餘例廣く相成、以後被成かたき詔茂可有御座哉与奉存候、依之此節源左衛門被願出候附衆中跡養子八藏事、血筋等之續も相見得不申候間、願之通ニ者被仰付間敷儀与又々吟味仕候、乍此上御詮議次第奉存候、以上、

寶曆十三年未三月

御記録方稽古

市來瀨兵衛(政公)

同奉行

吉田用右衛門(清純)

○永井半助養家北川家より御兵具(所脱)附足輕江婦參願調

321

覺

一 本文永井半助事御兵具所附足輕にて相勤居申候處に、先比北川玄昌跡養子之願申出、御兵具所永代御暇被差免候、然処ニ養子之願御免無之候、依之本之通御兵具所附足輕ニ婦參被仰付被下度旨願申出、調被仰渡候、先年御廐附士松山友貞弟松山甚左衛門事黒木次右衛門跡養子之願申出、御廐永代御暇被差免候、其節養子願ニ付而者當座へ調被仰渡候得とも、御廐江婦參之願申出候節者調方不被仰渡候、且又諸座附之者婦參之願申出候節調方不被仰渡候故、先例見當り不申候、然者半助事如本婦參被仰付候而者、札改奉行調ニ相見得申候通、以来餘例ニ罷成、往々締方不宜積リニ奉存候、尤御兵具所足輕婦參之先例も無之由ニ御座候得者、弥以半助願之通ニ者被仰付間敷儀与吟味仕候、以上、

寶曆十三年未三月廿七日

○右再調

覺

322

一本文永井半助事御兵具所附足輕ニ而相勤居申候処に、先頃北川玄昌跡養子之願申出、御兵具所永代御暇被成下候、然る処に養子之願御免無之候ニ付、本之通御兵具所附足輕ニ帰參被仰付被下度旨段々願申出、調被仰渡、左之通御座候、

一先年御廐附士松山友貞弟松山次郎八事 御城下士黒木次右衛門跡養子之願申出、御廐永代御暇被成下候得とも、御免無之候ニ付、帰參之願申出、願之通御免被仰付候由相見得申候、

一奥附足輕山元彦左衛門事 御城下士山元平藏繼目養子之願申出、奥附永代御暇被成下候得とも養子御免無之候ニ付、本之通被仰付被下度願申出、願之通御免被仰付候相見得申候、

一國分衆中家村源藏事 御城下士竹下庄兵衛養子之願所役之證文を以申出候得とも養子御免無之、如本外城衆中ニ立帰り申候由御座候、且又坊泊衆中甲斐七兵衛御城下士養子願申出候得とも御免無之、如本外城衆中ニ立帰り申候由に御座候、

右之通御座候、足輕より御兵具所江帰參之先例見

當り不申候、然者外城衆中より 御城下士養子願申出御免無之者ハ、如本外城衆中に立帰り申事御座候、尤外城衆中之儀者元來士筋目之者ともにて御座候、御城下士とハ差別有之候得とも、江戸表勤之節者 御城下士同様之勤仕事ニ候得者、右を以者御座附士又ハ一身者分けも相替り申候故、足輕帰參之傍例ニ者相并不申候、依之松山次郎八・山元彦左衛門願申出、如本帰參被仰付候先例茂有之、其上半助事ハ繪書調御用をも相勤候者之由御座候得者、此節願之通帰參可被仰付儀与吟味仕候、乍然右式願之通帰參御免於被仰付者、諸御座附士又者一身者養子成、其外品能方を願申出御免無之者ハ、準右先例帰參之願可申出事ニ御座候、左候得者、餘例到後年手廣く罷成、不締之方にも可有御座候哉、此儀ニ付而者究而何分申上かたく御座候間、此上ハ御詮議次第奉存候、以上、

寶曆十三年未五月廿九日

○窪田春賀死後養子無之家跡調 御記録奉行

覺

一 本文窪田春賀相果、直子無之、養子ニ罷成候者も無御座候ニ付、家跡不被召立筋被仰付被下度旨親類ともより願申出、家筋調被仰渡候、春賀曾祖父窪田善右衛門事ハ當窪田喜兵衛親窪田喜兵衛弟にて、初而別立、御用人座筆者相勤申候、祖父窪田勘左衛門御料理役相勤申候、養父窪田恕齋表坊主相勤申候、春賀事者右恕齋弟ニ而有之候処ニ、恕齋直子無之相果候ニ付て継目養子ニ罷成、是又表坊主相勤申候、尤大番家筋ニ而、何ぞ差立為申訊無御座候、此段申上候、以上、

寶曆十四年申六月十日

御記録方稽古

川上大六(親敷)

御記録方添役

市来瀬兵衛(政公)

御記録奉行

本田新右衛門(親方)

吉田用右衛門(清純)

○國分弥勒院御再興

覺

國分弥勒院
吉貴公御再興、享保七年寅二月十九日、繼豊公御家督、御再興之住持名相知不申候、其以後苗代川来迎院住職被仰付候、

○延寶二年より元禄五年迄の鎗流馬射人名

覺

延寶二年鎗流馬射手組之内

本田次郎吉

安親

右者本田次郎左衛門弟ニ而候処ニ、其後白尾家江養子ニ罷成、白尾登五左衛門与申候、射手急ニ差支相勤候由申出、

五代仁右衛門

子孫重て可相糺、

山元伊織

天和元年

子孫重テ可相糺、
藤崎長兵衛

六郎右衛門養子、後六太夫、子孫當藤崎六郎兵衛
なり、

貞享元年

黒葛原主左衛門

子孫黒葛原周右衛門なり、

野村源六

才右衛門嫡子、後才右衛門、子孫當野村大右衛門
なり、

貞享三年

菱刈八左衛門

子孫菱刈新五兵衛

伊東源八

子孫重テ可糺、

元禄元年

大番
新納平内

平内事御馬乗役にて、

射手急ニ差支候ニ付相

勤候由、親共より申出

候、子孫新納万弥

元禄二年

大番
川上十助

326

元禄五年

大番
子孫當川上十左衛門
山元慶右衛門

蔵之丞弟、後傳左衛門、子孫山元喜助

○山口諸右衛門高持成願之調 御記録奉行

覺

本文初而高持成之願申出、家筋調被仰渡候、山口諸右
衛門高祖父山口采女事何某家之嫡庶とも相知不申候、
尤勤方も相糺候得とも相知不申候、曾祖父山口曾右衛
門事ハ、右采女直子無之候ニ付、當崎元茂太夫曾祖父
崎元休右衛門三男ニ而候処ニ、養子ニ罷成申候、御歩
行にて江戸詰仕候由申出候、祖父山口弥右衛門勤方無
御座候、亡父山口諸右衛門小役人等之御奉公相勤申候、
當諸右衛門勤方無之候、御番相勤居申候、尤代々御
城下士ニ而、大番家筋ニ而御座候、以上、

寶曆十四年午三月十二日

御記録方稽古

郡山次郎左衛門(羅志)

御記録方添役

兒玉早之丞(実門)

御記録奉行

吉田(清純)用右衛門

○奥附一代(上脱)鎌田孫市多年勤功ニより代々士被仰付度納殿役人より申出之調 御記録奉行

覺

本文奥附一代士鎌田孫市事多年首尾好相勤候ニ付、奥附代々士被仰付被下度旨納殿役人より申出候、右ニ付孫市由緒書壹通被成御渡、吟味仕可申出旨被仰渡候、右孫市儀ハ、去年十二月、(島津久金)左中殿より本文并由緒書當座江御渡被成、吟味仕可申出旨被仰渡、其節左之通吟味書仕差上置申候ニ付、書写し差上申候、(マ)二十八日之場ニ書留有之候、右之通申上置候、此節再吟味仕候処ニ、何ぞ相替申儀無御座候、此段申上候、以上、
寶曆十四年申五月廿一日

御記録方稽古

川上(親敷)大六

御記録奉行

山田(有雄)喜三右衛門

本田(右九)新左衛門

吉田(清純)用右衛門

右之通ニ者不被仰付由傳承置之、

○久昶公御實名調

御實 本命土 御家字久

久昶(オ) 婦納繼

右、久者木局字故用火局昶字生本命土、昶者明也、通也、日長也、筭両字畫配八卦為震、震有大命風之象、實吉之吉者也、

寶曆九年己卯二月吉日

息長清純謹考

島津權七殿

○(マ)

覺 御石筆 筆頭飯高孫大夫

胤壽

右書中ニ有、 平胤朝所持

右別冊ニ有、

但折田清右衛門方より書出之なり、

○組頭・御記録奉行江仰渡書附

写

六與

組頭

御記録奉行江

組中極貧者 御目見罷出程之衣類等無之者、一世一度者 御目通罷出候様可心掛旨、先年申渡有之候ニ付、猶以其通可心懸事候得とも、借物とても不相調、御目見被仰付候儀及延引候者致迷惑者も有之、且依家筋ハ差支儀も有之筈候間、右躰之者初而之 御目見并家督継目等之御礼願申出候者、吟味之上進上物相納御目見相濟候筋可被仰付候条、此旨承置候様可被申渡候、

寶曆十四年申

三月

(小松清香) 式部

○町田藤助高持成之願調 御記録奉行

本文初而高持成之願申出、家筋しらへ被仰渡候、町田藤助事ハ町田伊右衛門二男にて、初而別立申候、右伊右衛門家ハ町田五郎左衛門家之庶流にて御座候、曾祖父町田源右衛門勤方無之候、養祖父町田源右衛門是また勤かた無御座候、兩代ともに伊集院之内春山村へ中宿仕居候、右源右衛門直子無之候ニ付、親伊右衛門事ハ御納戸附士兒玉安右衛門二男ニ而、別立罷在候処ニ、寛保二年戊正月、養子ニ罷成申候、新権方寄主取相勤居申候、藤助事ハ當分勤方無之候、尤大番相勤申筈之家筋ニ而御座候、以上、

寶曆十三年未十二月廿一日

御記録方稽古

市来瀬兵衛 (政公)

川上大六 (親麿)

御記録方添役

児玉早之丞(実門)

御記録奉行

本田新右衛門(親方)

吉田用右衛門(清純)

○諸所之古牧しらへ 御記録奉行

覺

當分諸所江有之候御牧之外、以前ニ被立置候古牧相糺可申出旨被仰渡、横切御書付壹通御渡被成候、古牧之儀ニ付而者、去年六月六日、於當座相糺申上置候古牧之外、此節又ニ相糺申候得とも見當り不申候、此段申上候、且又川上十郎左衛門江も相糺申候處ニ、古牧之儀者古書付等に相見得不申候由申出候、市来野之儀ニ付申出候書付壹通書写し差上申候、以上、

寶曆十四年申五月廿一日

御記録方稽古

川上大六(親敷)

御記録奉行

山田喜三右衛門(有雄)

本田新右衛門(親方)

吉田用右衛門(清純)

○右ニ付川上十郎左衛門より申出之書付写

覺

市来野・伊作野御牧ニ付て御尋ニ付、左ニ申上候、市来御牧従前ニ御代ニ 御直にて御座候、 忠國様御代ニ、私先祖川上十郎左衛門義久江 御家傳之御犬追物御相傳之節、市来御馬追ニ付 御相傳之儀御座候、私家代ニ亡父川上十郎左衛門迄、元禄六年之頃までハ毎年御馬追奉行被仰付罷登り申候、右御牧立初之年号相知不申候、

但伊作野御牧者 御國ニ而者最上之御牧と旧記に見得申候、是又年号相知不申候、

右之次第私方江相知申候訳まで申上候、以上、

寶曆十四年申五月廿日

川上十郎左衛門

○鹿兒島稻荷神前鎬流馬御行張之始り御祈願等之調
御記録奉行

覺

鹿兒島稻荷神前ニ而鎬流馬行張之始り御祈願等有之被
仰付たる事候哉、川上十郎左衛門江も相糺可申出旨被
仰渡候、且又上ヶ馬射手前々より小番格之者勤来り、
新番格之儀者近年被相定たる事に候得者、勿論射手被
仰付候先例ハ無之筈ニ候、然れとも代々新番格之者江
射手被仰付候而も差支候儀ハ有之間敷哉、吟味いたし
可申出旨被仰渡、左之通に御座候、

一元文五年申四月、鎬流馬之儀ニ付糺方被仰渡候節、當
座より申出置候書付写并に川上十郎左衛門方江相糺申
出候書付写、別紙沓通書写差上申候、

一川上十郎左衛門より、鎬流馬射手組延寶二年より元禄
五年まで書記置候上馬射手組帳沓冊、元文五年申四月、
當座江差出置候ニ付、此節書写差上申候、

右之通御座候、此節又々川上十郎左衛門江委細相尋
申候得とも、右通り先年申出置候趣ニ何ぞ相違無御

座由承り届申候、右射手・乳人人数之内新納平内・
山元慶右衛門・川上十助事ハ當分子孫大番格之者ニ
御座候、乳人之儀も射手同前之勤之よしニ御座候得
者、小番格より相勤申筈ニ候処に、右平内子孫當新
納万弥ニ而御座候故、親類共方江此節相糺申候処に、
射手急に差支申儀有之、平内事御馬乗相勤居候ニ付、
早速射手相勤候よし申出る趣承り届候、慶右衛門・
十助事も右躰急ニ差支申候ニ付、大番格之者より御
雇ニて相勤申たる哉と相考申候、今更委細之儀者相
糺しかたく御座候、然者代々新番格之者ハ代々小番
同前之勤方被仰付事ニ御座候得者、小番格之者射手
差支候節者、勿論先例ハ無之候^(符)得とも、射手被仰
付候ても何ぞ差支申儀ハ有御座間敷与吟味仕候、以
上、

寶曆十二年七月廿二日

御記録方稽古

川上^(親數)大六

郡山次郎左衛門^(通志)

御記録方添役

市来瀬兵衛 (政公)

御記録奉行

吉田用右衛門 (清純)

○長倉兵右衛門勤方しらへ 御記録奉行

覺

長倉兵右衛門事 (吉貴) 淨國院様御部屋栖より 御家督以後
勤方相糺可申出旨被仰渡候ニ付、當長倉七郎左衛門江
段々相糺申候処ニ、左之通申出候、書写差上申候、

私先祖長倉七郎左衛門祐香事、元禄八年亥四月より寶
永七寅閏八月まで御馬方相勤、依願役儀御免被仰付候、
尤七郎左衛門事本名監物にて御座候處に、右七郎左衛
門と名替被仰付候、何之何月被仰付候儀ハ糺付不申候、
且又長倉兵右衛門と申候者右七郎左衛門親ニ而御座候、
諸書付見合申候處に、右之外ニ相知れ不申候間、此段
申上候、以上、

申五月廿五日

長倉七郎左衛門

當座帳内書写差上申候、

写

御廐 長倉監物

右者 匠作様 (吉貴) 御方地下旅共ニ御馬方承候、

右之次第にて御座候、依之監物事前後兵右衛門与為申
儀ハ無御座哉与、再往におよひ相糺申候得とも、兵右
衛門与申候儀者無之よし自家より申出候、右之趣を以
ハ、監物代 淨國院様御部屋栖之内より御馬方にて、

御家督以後寶永年間ニ者七郎左衛門与名替仕候て御馬
方為相勤哉与相考申候、此段申上候、以上、

但右七郎左衛門親長倉兵右衛門事ハ何ぞ勤方無之
由、當七郎左衛門より申出置候、

申五月廿九日

御記録方稽古

川上大六 (親敷)

御記録方添役

市来瀬兵衛 (政公)

御記録奉行

山田喜三(有雄)右衛門

吉田用右衛門(清純)

○栗屋盛右衛門(門脱カ)高五拾石上り願之調 御記録奉行

覺

本文五拾石高上り之願申出、家筋調被仰渡候、栗屋盛右衛門六代之祖栗屋千右衛門事伊集院江罷居申たる由、勤方相知不申候、以前之儀相糺候得とも相知不申候、

高祖父栗屋千左衛門代伊集院より飯野江罷移り申候處ニ、慶長五年、高岡外城御取立之節被召移、所衆并之御奉公相勤申候、曾祖父栗屋左衛門事は又所衆并之御奉公相勤申候、祖父栗屋左衛門事行司役相勤申候、亡父栗屋千左衛門事所衆并之御奉公相勤申候、當盛(トク)左衛門事も所衆并之御奉公相勤居申候、尤先祖代々高岡衆中別条無御座候、以上、

寶曆十四年申五月十一日

御記録方稽古

337の1

川上大六(親敷)

御記録方添役

市来瀬兵衛(政公)

御記録奉行

山田喜三(有雄)右衛門

本田新右衛門(親方)

吉田用右衛門(清純)

○福屋助左衛門勤方調 御記録奉行

覺

福屋助左衛門(兼全)、元禄四年未二月頃勤方相糺可申出旨被仰渡、左之通ニ御座候、一寶永三年戊七月廿八日、福屋助左衛門(兼貞)より由緒書當座江差出置申候、右書付之内書拔仕差上申候、尤系圖等ハ所持不仕由候、

福屋助左衛門

兼貞

親助左衛門相果候以後、綱久公御上洛之節乘馬役に
て初而御供仕、於江戸 光久公より地頭職高城被 仰
付、本名五郎兵衛にて御座候処ニ、親名助左衛門ニ名
替被仰付候、其後 綱久公御方御納戸奉行被 仰付、
両度 御參勤之御供仕、其後吟味役被 仰付、京・大
坂御留守居役ニ詰相勤罷下り候、尤右吟味役に毎々
上洛仕、且又 綱久公より松平長門守様江御使者被
仰付相勤、御刀一腰拜領仕候、其後御用人御役被仰付、
十六ヶ年相勤、右御役之内 光久公 綱久公御參勤之
御供毎々相勤、於江戸乗物 御免許被 仰付候、地頭
職之儀者相續内之浦・阿久^(根脱カ)迄被 仰付候、然処病者ニ
罷成り、卯二月御役御免にて、七月相果申候、

一 寛文六年午十一月十四日より内之浦地頭職被仰付候、
一元禄四年未五月十七日より阿久根地頭職被仰付候、

右式行、當座地頭帳之内ニ相見得申候、

右之通ニ御座候、然者助左衛門事ハ吟味御役被仰
付、其後御用人御役替にて十六年相勤、右地頭職

被仰付、卯二月御役御免被仰付たる由緒書之内
ニ相記置申候、卯二月者元禄十二年ニ相當り申候、
右二月までハ御用人御役相勤居申候与相見得申候、
是より十六年以前を相積り申候得者、貞享元年ニ
相當仕候、寛文六年より天和三年迄ハ吟味御役之
内にて、内之浦地頭被仰付置候、元禄四年より御
用人江御役替にて、阿久根地頭被仰付たる筋与相
見得申候、然れとも由緒書之内年号正敷相記無之
候故、相考候までにて者究而之儀申上かたく奉存
候、尤自家江段々相糺申候得とも、年号其外委敷
儀相知不申候、此段申上候、以上、

寶曆十四年申五月廿八日

御記録方稽古

川上^(親敷)大六

御記録方添役

市来^(政公)瀬兵衛

山田^(有雄)喜三右衛門

御記録奉行

本田^(親カ)新右衛門

吉田用右衛門(清純)

○川田伊織殿及同人養子同彦七進上御太刀之調御記
録奉行

覺

川田伊織(國福)殿、来年頭御役之場にて御太刀進上被致咎候
得者、家ニ付進上被致候御太刀之儀者、養子川田彦七(國起)
江家格之場ニ而進上仕候様にと願被申出、調被仰出候、
彦七事當分御用人御役にて候得者、御役之場にて御太
刀進上致され、家格之場者伊織殿連名之場にて其訳書
記置候者、可相濟事ニ候、左候得者、彦七事ハ御役之
場ニ而御太刀進上被致咎ニ候、此段今一往吟味仕候而
可申上旨承知仕候、年頭御座配之儀者、寛永以來為差
立御規式之よし候、古来一所持領地ニ致在職、其身御
祝儀ニ參上いたし候得者、一人にても 御對面所江
出御被遊御規式有之たる由候、其後 寛陽院様御代よ(光公)
り、古来之歴々一所持、先祖軍之家者御吟味之上、御
座配被仰付置候處ニ、 淨國院様御代より 御對面所

御座配被相止、 御對面所 御書院共一流一列十人
ツ、持參太刀着座、 御盃頂戴被仰付來候、右着座ニ
被罷出候歴々其身大御目附以上之御役被相勤候得者、
御役之場にて御太刀進上有之、着座之場ニ者依願嫡子
着座被仰付候、右嫡子寺社奉行以下之御役被相勤居候
而も、年頭着座之儀者右通古来より為差立 御規式に
て候故、嫡子親之席ニ而御太刀進上 御盃頂戴仕候筋、
其家之先祖之功を茂第一相立規模之事御座候故、前々
より親之席にて嫡子着座被仕來候、然れとも嫡子幼少
又者無據差合等有之人其儀に不及候故、家格之場之御
太刀進上ハ無之候、適嫡子有之、御役をも被相勤居候
而も、親之家格之席にて御太刀進上被致候筋、古例と
相見得申候、然れハ嫡子親之席にて持參太刀着座被致
方、別而不輕事与奉存候間、彦七事願之通可被仰付儀
与吟味仕候、以上、

寶曆十三年未十二月廿九日

御記録方稽古

市来(政念) 瀬兵衛

川上大六(親敷)

御記録方添役

兒玉早之丞(実門)

御記録奉行

本田新右衛門(親方)

吉田用右衛門(清絶)

○喜右衛門弟肱岡次郎兵衛御兵具附士山口半兵衛養子(所脱カ)

違変付而者最初組方永代御暇之上養子為取組哉等之

調へ御記録奉行

覺

肱岡喜右衛門弟肱岡五郎兵衛事御兵具所附士山口

半兵衛養子ニ被仰付置候処に、違変之願申出、御

免被仰付、其後依願て別立、當分五番組に被召入

置候、最初與方永代御暇申出、養子為取組儀ニ而

者無之候哉、相糺可申出候、若不相知候ハ、傍例

相考、帰參ニ付て八片付かた何様可被仰付事候哉、

得与致吟味可申出旨被仰渡、吟味仕候趣左之通御

座候、

一能勢清右衛門二男能勢清八事奥附士池端三四兵衛養子

ニ願申出、享保十三年申二月、願之通御免被仰付候、

組方永代御暇之訳相糺候得とも相知不申候、

一植村七郎左衛門弟植村佐次右衛門嫡子植村半十郎事、

御廐附士猪俣十兵衛養子に願申出、延享二年丑十二月、

願之通御免被仰付候、是又組方永代御暇之訳不相知申

候、

一河内平右衛門弟河内藤左衛門二男河内八右衛門事組方

永代御暇申出、奥附士川畑安兵衛家跡養子願申出、延

享二年丑十二月、願之通御免被仰付候、

一梶原平右衛門二男梶原平兵衛事組方永代御暇申出、奥

附士池端源太兵衛家跡養子願申出、寶曆十二年午九月、

願之通御免被仰付候、

右之通御座候、組方永代御暇申出、御免以後養子願

申出候茂有之、又者御暇之沙汰ニ不及養子願申出候

も有之、相并不申候、肱岡次郎兵衛事組方御暇何様

之次第にて養子取組候哉、當座江ハ相知不申候ニ付、

右次郎兵衛方相糺申候処、最初御暇之願申出覺無之、

尤書留等も無之候、其後寶曆七年丑六月、養子違変

之願申出、御免被仰付候節も、本之通婦參之儀、詔而願申出候儀無之候、左候て、同年七月、別立之願兄喜右衛門より申出、四番組ニ被召入置候段、次郎兵衛親類より此節申出候、最初組方御暇之沙汰ニ不及養子取組申たる筋与相見得申候、右ニ付段々相札候得とも、先例見當り不申候、御勘定所相札申候処、別紙吟味書にも相見得候通、外城衆中御兵具所附又者奥附足輕類之養子願ニ付て者、其外城永代御暇申出、御免之上養子取組いたし、以後違変致候者ハ本之通衆中ニ者婦參不被仰付、片書名字ニ而親類家内ニ被入置候先例段々有之由ニ御座候、依之吟味仕候者、組方永代御暇申出養子ニ罷成候而茂、又者御暇之沙汰ニ不及養子ニ罷成候ても、御城下士を相離れ御座附士ニ罷成候儀ハ同様之事ニ而、差別無御座候、然者養子難遂致違変候節、本之通婦參被仰付候てハ、早竟御座附士より御城下士ニ御赦免之筋ニ罷成答候、勿論御城下士外城士衆中者詛も相替候故、先例ニ者相當不仕候得とも、次郎兵衛事一旦御座附士ニ罷成、養子致違変候ニ付而者、右外城衆中

養子違変之先例同様ニ相見得申候、左候得者、次郎兵衛事本之通ニ者婦參被仰付間敷事ニ御座候間、兄喜右衛門家内ニ可被召入置者与奉存候、以上、寶曆十三年未五月十七日

御記録方稽古

市来瀬兵衛(政公)

川上大六(親敷)

御記録奉行

本田新右衛門(親方)

吉田用右衛門(請絶)

○左近允喜八谷山衆中左近允喜泉養子願之調 御記録奉行

340 覺

本文左近允喜八直子無之、谷山衆中左近允喜泉事甥之續きにて御座候間、養子被仰付被下度旨願申出、しらへ被仰渡、左之通御座候、

一喜八親左近允喜右衛門事南林寺門前者にて御座候処に、

燒物方錦手繪書并小細工仕、多年御用相勤候功を以、

正徳三年、代々谷山衆中御赦免被仰付候、喜八事者右
喜右衛門二男ニ而、別立罷居、是又燒物方錦手繪書并
小細工主取被仰付置相勤居申候処に、寶曆三年 御城
下一代士被仰付、同十三年末十月 御城下代々士被仰
付、

一喜泉家之儀者、右喜右衛門嫡子左近允壽仙事醫道稽古
仕居、延享元年、表寄番醫師被仰付、同二年、表御醫
師被仰付、御側醫師同前勤方被仰付候、其後寛延元年
正月 御城下一代士御赦免被仰付、御側醫師被仰付相
勤居申候処に、寶曆五年相果候ニ付、嫡子左近允壽仙
江継目被仰付、是又間も相果、(無脱力)直子無御座候ニ付、喜
泉事右壽仙弟ニ而御座候ニ付、養子被仰付候、

右之通御座候、喜泉事喜八為ニ者世代を以ハ又甥ニ
而、血筋を以ハ実甥之續別条無御座候、然者 御城
下士直子無之、由緒之訳を以ハ、外城衆中并座附士
を養子願出候者、向後父方從弟血筋之續迄を養子御
免可被仰付旨被仰渡置候、喜泉事父方血筋之甥ニて、
猶以身近き方ニて御座候得者、願之通養子御免可被

仰付儀御座候得とも、當三月、三原弥七郎直子無之、

三原藤次事亡弟三原喜之丞(彦力)承養孫之儀ニ御座候間、養
子被仰付被下度旨願申出、當座調被仰渡、段々相糺
候得とも、先例并傍例見當不申候ニ付、吟味仕候者、
藤次事三原彦左衛門継目養子被仰付、最早彼家三代
致相續罷在候、尤祖父彦之丞為ニ者弥七郎事兄にて
御座候得とも、藤次為ニ者大伯父之續きにて、血筋
も遠く罷成候ニ付、弥七郎・彦之丞兄弟之續き迄に
て、外差立為申訳も無之、其上弥七郎家之儀御太刀
進上之家筋にて御座候得者、品能方にも相見得申候
間、願之通ニ者被仰付間敷儀与調書仕差上候処ニ、
右願書被相下候、右例に準候得者、喜泉事血筋之儀
ハ無據者御座候得とも、喜右衛門谷山衆中被仰付候
以來、喜泉まで最早四代相續仕来、其身嫡家家督之
者御座候処ニ、喜八事其身代別立、殊頃日 御城下
士被仰付、乍二男家品能方に候得者、嫡家を捨候て
相續仕候儀、別而不道理之筋ニ相聞得、其上右通之
先例も無御候間、(無脱力)旁以願之通ニ者被仰付間敷儀与奉
存候、以上、

明和元年申十月二十日

御記録方稽古

市来瀬兵衛(政公)

郡山次郎左衛門(遜志)

御記録奉行

本田新右衛門(親方)

吉田用右衛門(清純)

○御臺所附士勤方有之者江ハ御切米三石六斗ツ、被成

下候趣御臺所より御記録奉行江返答

覺

本文御臺所附士平生致帯刀、御臺所番并蔵方手傳何そニ付外城なと江荷物等被遣候砌、宰領人相勤申候勤方有之候者江者御切米三石六斗被成下候外、支配ニ對し高下之儀相知不申候、此段及御返答候、以上、

寶曆十二年午七月九日

御臺所

御記録奉行衆

○永田十左衛門養子願之再調 御記録奉行

覺

永田十左衛門直子無之候ニ付、御城下一代土宅間瑞庵事血筋由緒之訳を以養子之願申出、調被仰渡、先達而調書差上候処、再吟味被仰渡、左之通御座候、一十左衛門曾祖父永田与左衛門輕き御奉公等相勤申候、与左衛門以前之儀者段々相糾申候得とも相知不申候、与左衛門直子無之、祖父永田五郎右衛門事ハ田中五兵衛弟にて、与左衛門養子ニ罷成、是又輕き御奉公相勤申候、右五郎右衛門直子無之、亡父永田十郎左衛門事ハ伊集院衆中加世田惣兵衛二弟にて御座候処、元禄十七年申正月、五郎右衛門養子御免被仰付候、勤方相知れ不申候、當十左衛門事勤方無之候、一瑞庵曾祖父宅間与七兵衛、祖父宅間七兵衛、亡父宅間六郎左衛門迄代々物奉行所附士ニ而罷居申候間、与七兵衛以前之儀者相知不申、瑞庵事依醫道之功、元文二年巳九月、代々指宿衆中ニ御赦免被仰付、寶曆元年未八月 御下屋敷御側醫師相勤、一代 御城下士被仰付

置、當分勤方無之候、

一諸御座附之者御勘定所江相尋申候処、諸座附者娘縁與之儀者相知格式御座候、不達 貴聞縁與取與士并外城衆中江者、足輕・御小者・御書院仕坊主、又者家中士書下之名字之者之娘、内之女札之者、縁與被成御免候得とも、此跡之通之妻札に者不被仰付候、右ヶ条外之諸座附者之娘者、士并外城衆中江者縁與御免無之候、諸座附者之格式高下被仰渡置候儀、相知不申候段返答承置候、

一物奉行所・御細工所・御臺所・御春屋御座附者之儀相尋申候處に、平常致帶刀、肩書名字にて、其者格式之儀者何れ茂相知不申、其上格式被仰渡置候帳留等見當り不申候段、返答承置申候、右式委細相知不申候得者、諸座附大概同様之格式のものにても可有之哉与相考申候、其内物奉行附之者之娘 御城下士妻札ニ者御免不被仰付旨承り置申候、

一先役とも外城養子之儀ニ付當座より申出置候調書之内にも、御兵具所附足輕・御厩附御中間・物奉行所附、其外御座附之儀者同然之事に御座候よし相見得申候、

右之通御座候、十左衛門・瑞庵相續之之(衍力)之記者、十左

衛門實祖父吉加江惣兵衛妻者瑞庵祖父宅間七兵衛姉ニ而、十左衛門父永田十郎左衛門出生いたし候ニ付、瑞庵事八十左衛門為ニ者母方血筋ニ從弟之續別条無御座候、御城下士養子願御格式之内、近代別立候者にて茂外城衆中又者家中者之内無據由緒有之者ハ、其記を以養子願出候儀者有来通可有之旨相見得申候、御城下士血筋甥・從弟・三從弟・二從弟までも外城養子先年以來御免被仰付候先例多く御座候、外城衆中養子願ニ付て、分け而御格式被定置候儀者相見得不申候得共、右 御城下士外城養子之御格式ニ準し、又者傍例ニ引當、調書仕差上申候ニ付、御吟味之上御免被仰付来候、先年 御城下士下脱之馬場玄仙養子、御兵具所附足輕平川長右衛門二男平川幸兵衛事玄仙直子無之ニ付、血筋甥之續きを以養子之願申出、願之通被仰付置候、溝邊衆中山源内直子無之候ニ付、代々御中間有馬慶兵衛事源内為ニ者母方甥之續きを以養子願申出候処、御免被仰付置候、然れハ新規ニ附衆中并附衆中養子願出候者、又者人家来より其身代

ニ代々衆中に御赦免被仰付置血筋之續き無之者 御城下士養子ニ願出候者は、諸座附・人家来之者にて茂元来士筋目之者にて候得者、御免被仰付事に御座候、無左候得者、御免不被仰付候、其身代衆中ニ被仰付置候而茂、先祖とも卑賤之家業仕候者ハ御免不被仰付事ニ御座候、串良衆中鳥越甚左衛門繼目養子ニ、物奉行所附石崎助右衛門血筋ニ從弟之續きを以願申出候、右助右衛門俗生元来士筋目相知れ不申候得とも、血筋別条無之候故、御免被仰付置候、且又伊勢兵部附衆中肝付七右衛門家跡養子、御細工所附内田藤兵衛母方血筋從弟之續きを以養子之願申出候、藤兵衛俗生家業等相札申候上當座より申出候者、御兵具所附足輕・御厩附御中間・物奉行所附、其外御座附之義者同然之事ニ御座候間、物奉行所附石崎助右衛門血筋ニ從弟之續きにて養子御免被仰付候先例を以、御免被仰付候而茂差支申儀者有御座間敷旨申出、願之通被仰付候、樺山龍庸事備中殿家来ニ而候処に、一代伊集院衆中に御赦免被仰付、其以後 御城下一代士被仰付候、御城下士樺山源右衛門江血

筋ニ從弟之續きを以繼目養子被仰付置候、御城下士外城衆中者、家中者之内無據由緒有之者者、其詔を以養子願出候儀者有来通可有之旨、御格式被仰渡置候得とも、血筋・由緒・親族遠近之續き被相定置候詔相見得不申候ニ付而者、小身者とても血筋断絶仕候義者不輕義坎与奉存候、右式にて、先例血筋を以ハ三從弟之續迄者養子御免為被仰付置事共にて者有御座間敷哉与乍憚相考申候、瑞庵事元来物奉行所附ニて候得とも、右傍例先例ニ引當申候得者、血筋ニ從弟之續きを以ハ願之通御免可被仰付者与吟味仕候、然れとも瑞庵曾祖父以来俗生家業等當座江相知不申候故、此段物奉行江段と相札申候得とも、子孫當分物奉行所附にて無之候ニ付、相札しかたく由返答承届申候、此上ハ俗生等可相札様無御座候、右躰之者ニ御座候得者、瑞庵事其身代代々衆中ニ御赦免被仰付置候而茂、曾祖父以来俗生不相知候ニ付而者、新規ニ附衆中又者其身代衆中ニ被仰付置候而茂、先祖とも卑賤之家業仕候者者附衆中并 御城下士養子御免不被仰付先例ニ被準、願之通被仰付間敷候哉、此

儀餘例にも可罷成事ニ御座候得者、私共にも究而難
申上御座候間、御詮議次第奉存候、以上、

寶曆十三年未七月廿二日

御記録方稽古

市来瀬兵衛(政公)

川上大六(親敷)

御記録方添役

郡山次郎右衛門(遜志)

御記録奉行

吉田用右衛門(清純)

右瑞庵事願之通ニ者不被仰付候由、従式部殿被仰
渡候、(小松清香)

○申良衆中鳥越甚左衛門跡養子之調 御記録奉行

覺

前條略之、

然者新規ニ附衆中被仰付候者、諸座附・人家来之者
にても元来士筋目之者にて候得者、御免被仰付事御座

候、無左候得者、御免不被仰付候、血筋を以ハ、御
城下士又ハ外城衆中養子ニ者、元来士筋目之者にて無
之候得者、御免被仰付先例ニ御座候、左候得者、助左(共力)
衛門事元来士筋目ニ相知れ不申候得とも、血筋之儀者
別条無之候、御兵具所附足輕・御厩附御中間・物奉行
所附、其外御座附之者之儀者同前之事ニ御座候条、血
筋之先例を以、甚左衛門跡養子被仰付候而も何ぞ差支
申儀者有御座間敷与奉存候、以上、

寶曆二年申八月八日

御記録奉行

吉田用右衛門(清純)

安藤左平次(茂具)

川上平右衛門(入齋)

右申良衆中鳥越甚左衛門跡目養子ニ、物奉行所附
石崎助右衛門血筋之訳を以養子御免被仰付候調書
之内、

○諸御座附士格式差別無之候得とも 御目見之節之次

第之調 御記録奉行

覺

前條略之、

一旦又諸御座附士之儀、皆とも同前之格式ニ而差別無御座候、然れとも 御目見被仰付候節者、御納戸附士・御兵具所附士・御船手附士・御奥附士・御厩附士・御書院附士与次第被仰付事ニ御座候、

右御厩附士 肱岡源兵衛家内前田新兵衛事御書院附士ニて御座候処、別立願ニ付調書之内、

右寛保四年亥四月廿一日萬調帳之内拔書、

○諸座附士高下相知不申諸座附之者娘縁與之儀ハ相知

格式御座候調 御記録奉行

覺

諸御座附者高下有之事候哉、何分書付を以可申達旨被仰聞趣相達、相しらへ候得とも相知不申候、諸座附者娘縁與之儀ハ相知格式御座候、

札改方條目之写

一不達 貴聞縁與取組候士并外城衆中江者、足輕・御小

者・御書院仕坊主、又者家中士書下名字之者之娘、内女札之者、縁與被成御免候得とも、此跡之通之妻札ニ者不被仰付候、妻札ニ而妻之親之名并何方座附・家中士等之訳、手札帳面等に書記可申候、親相果候ハ、兄弟又ハ家部之者之名を可書記事、

但内女にても此跡之札改ニ茂不書載者、内女ニ召仕ひ候由ニ而除證文有之候とも、本文之通には不被仰付候、

右之通札改方條目ニ相見得候、右ヶ條外之諸座附者之女子ハ、士并外城衆中江者縁與御免無之候、諸座附者格式高下被仰渡候儀、當座江ハ相知不申候間、此段及御返答候、以上、

寶曆十三年未七月八日

御勘定方

小頭

御記録奉行

○御春屋屋^(行方)附職業ニ付てハ高下之差別無之趣御春屋役

より御記録奉行江返答

覺

- 一 御春屋附之者、老入ハ當分御春屋藏手傳被仰付相勤居、御切米被下置候、御藏手傳之儀ハ外城衆中又ハ足輕江も被仰付事御座候、
- 一 御春屋附之者、兩人ハ砂糖漬調人被仰付置、御切米被下置候、
- 一 御春屋附之者、老入ハ桶結主取被仰付置、御切米被下置候、

右者御春屋附之内より當分表立御奉公相勤居候者、右之通ニ御座候、格式被定置候儀ハ無之、肩書名字ニ而、平生帶刀いたし候者ともに御座候、尤御春屋附之内にても高下之差別無之候、此段申進候、以上、

寶曆十三年未七月十日

御春屋役

御記録奉行

○御船手附職業により格式高下無之趣御船奉行より御

記録江申越(所脱カ)

覺

- 一 御船手附之者、定水手・小船頭までハ無名字ニ而、小船頭之儀者他國江差越候節、片書名字御免ニ而候、定船頭被仰付候得者、片書名字御免ニ而候、且又定水手之儀も、他國船漂着之節、案内ニ召乗差越候時者時々申上、片書名字ニ而差越候、格式之儀者何様之格式と申上、かく候、

一 御船手附士之儀、御船頭者御船立ニ差上候時主從四人、脇船頭主從三人御賦被下、御船手附にても定船頭役・脇船頭まで者、御船立間之上下共に主從賦模合方より被下候、御船手附士船頭役外に為差立勤ハ無之候、座附士之内高下之差別無之候(行カ)、以上、

寶曆十三年未七月十日

御船奉行

御記録奉行

○下町人藤田喜兵衛年功ニより御目見願之調御記録

奉行

覺

本文下町藤田喜兵衛事西田御屋敷御酒屋敷年首尾好相勤居候ニ付、御取分を以、此節一世書下名字・

鏝入脇差并日野紬致着候儀御免被仰付候ニ付而、

長崎御屋代・唐通事・水引町太原武左衛門抔同様

ニ 御目見迄も被仰付被下度旨願申出趣有之、調

被仰渡、左之通御座候、

一 漳州口通事下船津町小橋早左衛門事、寶曆三年酉三月

十四日、三町年寄格被仰付、同四年戌正月三日 御目

見被仰付置候、

一 長崎御屋代初而年頭 御目見被仰付候年間、程久しく

儀ニ而相知不申候、三町年寄格為被仰付置由候得とも、

是又年間相知不申候、 御目見被仰付候儀者年頭御規

式帳之内にも相見得申候、

一 水引森尾町太原武左衛門於上方御用聞被仰付置候、御

金方御用茂相應之儀者可被仰付候、依之御當地之三町

年寄格被仰付候旨、寛保三年亥正月二十八日被仰渡、

其後年頭御規式帳之内にも相見得申候、

右三人之者とも、年寄格被仰付置候訳を以、年頭

御目見為被仰付筈与奉存候、右者とも 御目見被仰

付候ニ付、當座江調被仰渡哉と帳内段々相糺申候得

とも見當り不申候、此節喜兵衛事一世書下名字・鏝

入脇差并日野紬致着候儀御免被仰付まてにて、年寄

格ニは不被仰付候、此儀を以ハ三人之者ともハ相

準しかたく御座候、尤 御目見被仰付候儀者不輕事

ニ御座候故、喜兵衛事右品々御免被仰付候迄を以年

寄格同様ニ 御目見被仰付におひて者、餘例も廣可

相成事ニ奉存候間、願之通被仰付聞敷儀与吟味仕候、

以上、

寶曆十三年未十二月廿八日

御記録方稽古

市来(政公)瀬兵衛

川上(親敷)大六

御記録方添役

見玉(実門)早之丞

御記録奉行

但願之通不被仰付候、

本田(親方)新右衛門
吉田(清純)用右衛門

○稲津六兵衛嫡子角之助依科被召放養子願調 御記録
奉行

覺

本文稲津六兵衛嫡子本稲津名字之角之事(助脱九)先年依科土被
召放、當分遠流ニ被處置、外ニ直子無之候ニ付、川内
山田衆中永吉六右衛門二男之儀御座候間、御養子御免
被仰付被下度旨願申出趣有之、調被仰渡候、六兵衛事
元来川内山田衆中ニて罷居候処、所高拾石持出し 御
城下土稲津半右衛門繼目養子御免被仰付候よし、寛延
元年閏十月廿五日、川上瀬兵衛御證文を以當座江被仰
渡置候、最初半右衛門繼目養子永吉六兵衛親類とも願
(衍九)申申出候節、當座江調被仰渡候哉、此節段々相糺申候
得とも見當り不申候、嫡子角之助事ハ六兵衛家内に被
召入置候、二男永吉六右衛門事親六兵衛家跡ニ川内山

田江残し置申候由此節申出候ニ付、噯方江相糺申候處
ニ、六右衛門事残し置候儀別条無御座段承届申候、然
者外城養子之儀、引續き二代ハ御免不被仰付御格ニ御
座候得とも、六右衛門事直子之儀ニ御座候ニ付、右記
を以ハ、願之通養子御免被仰付候而茂何そ差支申儀者
有御座間敷与奉存候、以上、

明和元年申十月廿一日

御記録方添役

市来(政念)瀬兵衛

郡山(羅志)次郎左衛門

御記録奉行

本田(親方)新右衛門

吉田(清純)用右衛門

○鹿屋衆中亡永野市兵衛繼目養子願調 御記録奉行

覺

島津矢柄家来日高仲左衛門、鹿屋衆中亡永野市兵衛
繼目養子血筋從弟之續を以親類共より願申出、調被

仰渡、左之通御座候、

一市兵衛曾祖父永野次郎四郎鳥津大和家来ニ而候処、大(久章)和私領鹿屋子細有之被召揚候節、直ニ鹿屋衆中ニ相成衆中にて罷居候由、此節申出候、次郎四郎以前之儀者相糺申候得とも相知不申候、祖父永野市兵衛、養父永野次郎右衛門事ハ右市兵衛ニ男ニ而、延寶四年別立申候、亡永野市兵衛事同所衆中岡山諸右衛門三男ニ而候処ニ、寶永三年戌六月、養子ニ罷成申候、右四代とも勤方相知不申候、

一仲左衛門祖父日高仲左衛門、亡父日高仲右衛門、其子當仲左衛門三代ともに鹿屋江中宿いたし罷居候、祖父仲左衛門以前より鳥津矢柄譜代之家来にて衆并之勤仕、卑賤之家業等不仕候、鹿屋衆中永野市兵衛養母者右仲左衛門亡父仲右衛門姉ニ而御座候、

右之通御座候、市兵衛・仲左衛門續之訳者、市兵衛亡父永野次郎右衛門妻ハ仲左衛門亡父仲右衛門姉ニ而、市兵衛与ハ從弟之續ニ者相見得申候得とも、實者右市兵衛事ハ岡山諸右衛門三男ニ而、永野市兵衛(次郎右衛門カ)養子ニ罷成申候故、仲右衛門姉出生仕候實子にてハ

無御座候、右式故仲左衛門方血筋ハ無御座候、御格式に茂、三四代寄合以上之家来にて、血筋從弟之續を以ハ、外城養子成御免可被仰付旨被定置候、右通血筋之續相絶候ニ付而者、御格式ニ相當不仕候間、養子願御取有之間敷儀与奉存候、以上、

寶曆十三年未七月廿八日

御記録方稽古

市来(政公)瀬兵衛

川上(親敷)大六

御記録方添役

児玉(実門)早之丞

御記録奉行

本田(親方)新右衛門

吉田(清純)用右衛門

○(ママ) 鉄熊御目見且同人家中御目見願之再調 御記録

奉行

本文再調被仰渡候、鉄熊儀(島津久倫・都城家) 御目見ニ被罷出年生ニ無

御座候故、名代を以御札申上度旨、親類北郷權五郎(久富) 由

り被願出候、寶曆六年子八月廿六日、島津安之助(忠温) 殿和

泉家相續之御禮、家格之進上物被差上られ、島津周防(忠紀)

殿名代を以 御目見被仰付、其節家来三人 御目見仕

候、右通傍例も御座候得者、鉄熊家之儀茂一所持之内

大身分ニ而、為差立大家之事ニ御座候、継目家督之節

者家来 御目見をも被仰付候間、右被準傍例、鉄熊儀

名代同格之人にて家格之進上物差上、継目之御禮 御

目見可被仰付哉与吟味仕候、以上、
寶曆十三年未七月廿九日

御記録方稽古

市来(政公) 瀬兵衛

川上大六(親敷)

御記録方添役

兄玉早之丞(実門)

御記録奉行

本田新右衛門(親方)

吉田用右衛門(清純)

右名代を以 御目見被仰付候由承知之、

○志布志衆中重信新右衛門五拾石高上り之願調 御記

録奉行

覺

本文志布志衆中重信新右衛門五拾石高上り之願申出、

家筋調被仰渡候、新右衛門高祖父重信中納言何御奉公

相勤候儀相知不申候、慶長・元和年間高帳にも中納言

と書記有之由候、尤中納言以前之儀者相糺候得とも相

知不申候、曾祖父重信存慶事同所衆中上村甲斐二男ニ

て、中納言養子ニ罷成候、勤方相知不申候、祖父重信

六左衛門右上村甲斐嫡孫上村内膳二男ニ而、存慶養子

ニ罷成、夏井口在番主取相勤申候、亡父重信新右衛門

夏井口在番主取并寄浦役相勤申候、當新右衛門事も夏

井口在番主取并寄浦役相勤居候処ニ、享保十五年戌二

月御断申上、志布志麓江罷帰り候、寶曆九年卯正月、

寄浦役被仰付、當分相勤罷居申候、尤代代衆中家筋之

者ニ而御座候、以上、

寶曆十三年未五月十四日

御記録方稽古

市来瀬兵衛(政公)

川上大六(親敷)

御記録方添役

児玉早之丞(実門)

御記録奉行

本田新右衛門(親方)

吉田用右衛門(清絶)

○和田五齋初而高持成願之調 御記録奉行

覺

本文初而高持成之願申出、家筋調被仰渡候、和田五齋養父和田宅右衛門事者、當和田覺右衛門亡父和田半右衛門二男にて、初而別立申候、御料理役相勤申候、祖父和田半右衛門筆者・小役人等之御奉公相勤申候、半右衛門以前之儀段々相糺申候得とも相知不申候、五齋事ハ右覺右衛門二男ニ而候処、叔父宅右衛門繼目養子

ニ罷成申候、當分表坊主相勤居申候、半右衛門以来

御城下士にて、大番相勤候筈之家筋ニ而御座候、以上、

寶曆十四年申三月晦日

御記録方稽古

川上大六(親敷)

市来瀬兵衛(政公)

御記録方添役

山田喜三右衛門(有雄)

御記録奉行

吉田用右衛門(清絶)

○近衛龍山前久様鹿兒島江御滞在中御馳走之次第

覺

前久様御滞在中 御歌之會 御花見 御馬追 御連歌
春山のせきかり 御老中衆四人より御成四日 御馬揃
御川遊 御犬追物 福昌寺御成 瀬引 笠かけ 道場
より御成 春日御参詣
右者、天正四年丙子三月 近衛龍山様鹿兒島江御下向

之節御馳走与相見得、(義久)龍伯様御譜中に記載有之候ニ付、書写差上申候、以上、

寶曆十三年未二月廿二日

(吉田清純)

用右衛門調之、

(安藤茂貞)

左平次

○内之浦衆中相良兵右衛門五拾石高上り願之調 御記

録奉行

覺

本文五拾石高上り之願申出、家筋調被仰渡候、相良兵右衛門六代之祖東丹後申良衆中ニ而罷在候、勤方相知不申候得とも、應役儀之高、慶長十九年七月廿三日御家老衆連印之知行目録致所持居申候、嫡家者 御當地相良新助にて御座候、高祖父東主税代福山江被召移、其後内之浦江罷移り、當分まで居住仕候、曾祖父相良治部右衛門、此代嫡家より差免、小名字東氏を相改、相良氏ニ罷成申候、噺役相勤申候、祖父相良治左衛門、養父相良助四郎兩代ともニ噺役相勤申候、助四郎事ハ

一

覺

○御家老・御物座・御國遣座詰等之調 御記録録奉行

江戸江も相詰、大坂御藏役をも相勤申候、男子無御座候ニ付、高山衆中富實見用右衛門二男にて聳養子ニ罷成り、當兵右衛門にて御座候、與頭役相勤、當分噺役相勤居申候、尤代之内浦衆中別条無御座候、以上、
寶曆十四年申四月十五日

御記録方稽古

川上(親敷)大六

同添役

市来(政念)瀨兵衛

同奉行

本田(親左)新右衛門

吉田(清純)用右衛門

島津(久元)主計

後帶刀

右、寛文六年、御家老職ニ而聞御物座、

一 祢寝八郎右衛門(清雄)

後孫左衛門

右、元禄元年より同五年申十一月九日迄御物座御詰役、

新納四郎右衛門(久珍)

後市正(左九)

右、元禄八年亥正月二十五日より御國遣座御詰役、

川上式部(久重)

右、元禄十四年迄御國遣座御詰役、

一 寶永四年亥十一月仰渡之内、御勝手方之文字相見得申候、

右者、御物座、御國遣座、御勝手方与相改られ候年月相糺候得とも、究而見當り不申候、先右之通相見得申候、以上、

寶曆十三年未正月廿日

御記録奉行

○児玉與左衛門(再脱力)而高持成願之調 御記録奉行

覺

本文初而高持成之願申出、調被仰渡候、當児玉與左衛門高祖父児玉助之丞御納戸附ニ而御座候、助之丞以前之儀段々相糺申候得とも相知不申候間、曾祖父児玉團兵衛代 御城下士ニ御赦免被仰付、御包丁人相勤申候、當半弥事ハ右團兵衛二男ニ而、兄児玉喜助代享保六年丑二月、初而別立申候、當分御包丁人頭相勤罷居申候、尤大番相勤申答之家筋にて御座候、以上、

寶曆十三年未三月十四日

御記録方稽古

川上(親敷)大六

同添役

山田喜三(有雄)右衛門

同奉行

吉田用(清純)右衛門

○御厩附一代士黒松六郎右衛門俗生調 御記録奉行

覺

御厩附一代士黒松六郎右衛門俗生札糺可申出旨被

仰渡候得とも、當座江相知不申候ニ付、自家へ問
届申候処ニ、左之通申出候、

一六郎右衛門實高祖父肥後藤右衛門事者加世田衆中ニ而
有之たる与申傳候由ニ御座候、曾祖父黒松志摩之丞始
者肥後藤左衛門与申候、右藤右衛門子ニ而、黒松氏之
子ニ而、黒松氏之養子ニ罷成、御厩方御中間相勤候、
祖父黒松藤後左衛門御中間相勤申候、親黒松六左衛門
事ハ右藤後左衛門三男ニ而別立、御中間にて罷居候得
とも勤方不仕候、當六郎右衛門多年御中間相勤居申候
処ニ、寛延三年午四月、島津權左衛門御取次を以、御
厩附一代士ニ御赦免被仰付、當分御厩御道具附役相勤
居申候、

右相糺候趣如此御座候、以上、
寶曆十三年未二月廿四日

御記録奉行

四人略、

○島津備中殿御家老御役御免之書付并通達

写

島津備中殿(貴備)

右一往御家老座江被相勤候様ニ先達而被 仰出、又々
去年 御在府中被相勤候筋被仰付置候、漸々被年寄勤
方太儀被 思召候、此節 御下國被遊候ニ付、被仰出
置候通當勤被成御免候、長々被相勤苦勞被 思召上候
旨、今日於 御前 御意有之、御腰物拜領被仰付候、
右之通致通達、御側方・御勝手方江者写を以相達、
其外可承御役々并組中・地頭所・私領・明所之外城
江茂可被申渡旨、不洩様可致通達候、

但佐土原假屋江も可申渡候、

寶曆十三年未七月十九日

(高橋種壽)
此面

○郡山五兵衛養子願之調 御記録奉行

覺

郡山五兵衛直子無之候ニ付、島津肥前殿家来郡山(忠紀)
貞倫事血筋ニ從弟之續を以養子之願申出候、依之
右養子成願之通御免被仰付者ニ候哉、内々吟味い

たし可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一 貞倫事者元来大島笠利間切湯湾村之佐順与為申者にて

御座候、先年郡山嘉右衛門大島代官附役にて致渡海、

於彼島致出生候、直子別条無御座候、右佐順事醫道稽

古仕、先年御當地江罷越居候処、寛延三年午七月、(鳥

防殿家来入被為願出候節、周防殿家新規御取建、家来

とも段々被召抱候得とも、手醫師等用分相達候程不相

揃候、道之島人家来に者御免無之事ニ候得とも、佐順

事ハ郡山嘉右衛門直子ニ而、訳茂相替候ニ付、御取分

を以周防殿家来ニ被召抱候儀御免被成候旨被仰渡置候、

當分郡山貞倫与名替仕居候、

一元文二年巳三月、鹿兒島士養子ニ外城衆中被仰付候御

格式之内、近代別立候者にても外城衆中又者家中者之

内無據由緒有之者は、其訳を以養子願出候儀ハ格別ニ

候間、有来候通可有之旨被仰渡置候、其以後寶曆七年

巳三月、御城下土帖佐三四郎家跡養子、島津圖書殿

家来濱崎玄真事、血筋甥之續を以家跡養子御免被仰付

候、

一 美代三右衛門沖之永良部島代官附役にて致渡海候節於

島出生いたし候男子當美代甚右衛門事、直子之訳を以、

享保二年酉九月、願之通直子成御免被仰付候、

一 松沢与左衛門亡父松沢十左衛門沖之永良部島代官にて

渡海いたし候節於島致出生候男子、与左衛門實弟之儀

ニ御座候故、養子成之願申出、延享四年卯十二月、願

之通養子成御免被仰付候、

一 伊地知八四郎大島代官ニ而渡海いたし候節島におひて

致出生候男子正澄事、山内利右衛門ニ從弟之續を以繼

目養子願出、正澄事八四郎直子之儀ニ御座候間、養子

御免被仰付候而も差支申儀者有御座間敷与吟味仕候、

乍併ニ從弟之續にて島方より養子被仰付候先例者無之

事ニ候間、御詮議次第奉存候旨申出置候処、寶曆二年

申四月五日、願之通御免被仰付候、

一 右之外代官并附役於道之島出生いたし候男子、直子・

直弟之續を以、御城下土養子又ハ嫡子成御免被仰付候

先例多々御座候、

右之次第ニ御座候、貞倫事郡山嘉右衛門直子ニ而御

取分も有之、殊ニ肥前殿越前家新規御取建之訳を以

段々被為願出、家来ニ御免被仰付置候得者、常式之

家来と者訳茂相替り申たる者ニ御座候、然者人家来より御城下士養子、元文二年以来ハ島津圖書殿家来濱崎玄真外先例相見得不申候、玄真事ハ甥之血筋を以帖佐三四郎家跡養子御免被仰付候、貞倫事ニ兄弟之續ニ而候得とも、血筋別条無御座候、且又於道之島出生之男子、直子・直弟之外御城下士養子并嫡子成御免不被仰付候処ニ、正澄事伊地知八四郎直子ニ而、二從弟之續を以、御詮議之上山内利右衛門繼目養子被仰付たる事ニ御座候、右兩条之先例を以ハ、五兵衛願之通養子御免可被仰付儀与吟味仕候、乍然最初肥前殿段々被為願出候訳を以、貞倫事家来入御免為被仰付者ニ御座候得者、直父・直兄之養子などニ願出候与ハ訳茂相替り申候、右を以ハ願之通にも被仰付間敷候哉、此儀ニ付而者私ともに茂究る難申上御座候間、御詮議次第奉存候、以上、

寶曆十三年未五月六日

御記録方稽古

市来(政公)瀬兵衛

川上(親敷)大六

同添役

児玉(実門)早之丞

御記録奉行

本田(親方)新右衛門

吉田(清池)用右衛門

右式部殿(小松清香)江差上置候処、願之通不被仰付候由承之、

○龍伯様御袖判并文書等之調御記録奉行

361

覺(義心)

本文 龍伯様御袖判并文書等正文ニ而可有之哉、致吟味可申出旨被仰渡候、依之笑岳寺江相糺、本文見届申候処ニ、三通共ニ正書別条無御座候、先年文書御改之節、何様之訳ニ而當座江差出置不申候哉、写相見得不申候、笑岳寺御寄附高、慶長年間古高帳之内ニ高百四石餘相見得申候、永祿年間水田式段、當分之高積りにして何程ニ相當り申候哉、相考へかたく御座候、然者文祿年間天下一統毀破勘略被仰渡、其節寺高過半被召上たる由候、左候得者、至慶長年間寺高百石餘ニ相成

候哉与相考申候、元和年間寺高四拾石餘ニ相減、當分
八寺高式拾石餘ニ相成申候、何様之訳ニ而段々寺高相
減申候哉、當座へ者相知不申候、右を以ハ、永祿年間
水田(ノリ)崎式段ハ被召上たる地面ともにてハ有之間敷哉
与相考候得とも、此儀者究而私ともにも難申上奉存候、
相札候趣如此御座候、以上、

寶曆十三年

御記録奉行

○(ノリ)

覺

本文ニ付又々吟味被仰渡、左之通御座候、

- 一 二階堂舎人代附衆中被仰付、指宿衆中平賀十郎左衛門・
郷田諸右衛門親類伊東萬右衛門士筋目別条無御座候ニ
付而、願之通附衆中御免被仰付候、
- 一 樺山左京家附衆中両家内有之候処、一家内衆中養子罷
成、跡一家内附衆中之願被申出、左京家来竹崎孝右衛
門士筋目別条無御座候ニ付、願之通附衆中御免被仰付
候、
- 一本田新次郎亡父本田作左衛門代附衆中一家内御免被仰

付置、新次郎代大野休太夫家内札本田善安士筋目別条
無御座候ニ付、附衆中被願出、御免被仰付候、

- 一 西平太家附衆中二家内御免被仰付置、其砌被願出一家
内ハ附衆中被仰付、今一家内先頃被願出、右先例を以、
坂元玄真事士筋目別条無御座候ニ付、附衆中願之通御
免被仰付候、

一 大始良預り弟子丸与次右衛門附衆中郷田金左衛門直子
無之、島津主殿家来大田次右衛門血筋之續を以養子願
被申出、御免被仰付候、

- 一 仁禮仲右衛門附衆中有川喜兵衛直子無之、仲右衛門家
来三輪武兵衛血筋之續を以て養子之願被申出、御免被
仰付候、

一 平田靱負附衆中田中吉左衛門相果、直子無之、吉利奎
右衛門家来小村次郎兵衛血筋之續きを以養子之願被申
出、御免被仰付候、

一 右之外にも血筋之續きを以附衆中御免被仰付候先例多
く御座候、且又附衆中御免被仰付置候家々、血筋之續
き無之者にても士筋目別条無之者ハ、附衆中御免被仰
付候先例御座候、

右之通相見得申候、然者附衆中初而御免被仰付置候者者、本より血筋之續き無御座筈候、以前より附衆中持傳へ候家、據なく誤有之附衆中相除かれ、其跡附衆中被願出候節茂血筋續き無之候ニ付、土筋目別条無之者者附衆中御免被仰付候、且又附衆中持傳へ候家、其者相果直子無之節者、血筋之續きを以て被願出、附衆中御免被仰付候先例御座候、町田源左衛門附衆中石沢伊兵衛相果、直子無之候ニ付、山口八藏事血筋由緒之誤も無之、養子之願被申出候得とも、右先例を以ハ御免被仰付間敷儀与吟味仕候、乍然御詮議次第与存候、以上、

寶曆十三年未四月朔日

御記録方稽古

川上太六^(大)

市来瀬兵衛^(政公)

同添役

山田喜三^(有雄)右衛門

同奉行

本田新右衛門^(親方)

吉田用右衛門^(清純)

右願之通御免無之由承候、

○小松安之助殿幼年ニ付續目之御禮名代且家来三人御目見之一条

363

覺

一(鳥津忠温)小松安之助殿亡鳥津(忠卿)因幡殿後嗣寶曆六年於 御下屋敷

御直ニ被仰付、今和泉家相續被仰付候、相續之御礼被申上候儀、未幼年之故、進上物御格之通以名代、同四月四日、継目之御禮・今和泉家相續之御礼、御太刀・

馬代銀三枚・三種三荷進上ニ而可被仰付旨被仰渡置、

子八月廿六日、鳥津周防殿名代を以御礼相濟候、奏者(忠紀)

畠山數馬、

近藤四郎兵衛

矢野權右衛門

浦川左右衛門

右家来三人脇指を帶し 御目見被仰付、

○吉貴公靈塔

覺

延寶三年乙卯九月十七日産於薩府、故通議大夫羽林中
郎將薩隅日三國主兼領琉球國源公吉貴靈塔、

○座附士以上身分昇進之儀等ニ付 思召書式通

覺

座附士を表方江被召出候儀、外城○衆中を鹿兒島士ニ被
召出候儀并一身者座附士又者外城衆中ニ被仰付候儀者
重き事候間、此以前より相減し候様にと 思召も有之、
頃日ニ至り候へ者薄き様に者候得とも、 太守様思召
ニ者、當分被相減候上ながら被召出候者多き様ニ 思
召候、座附士を表方江被召出、外城衆中を鹿兒島士ニ
被召成、一身者を座附士又ハ外城衆中ニ被仰付候儀者、
小番之者を寄合ニ被召入程之重き事候、右之次第ニ候
故、向後者数年首尾好相勤候欵、又ハ何十年程首尾好
相勤候一通り之儀迄にて者被召出間敷候、其身之藝能

ニ依り御用筋ニ而被召出候者ハ格別、其外ハ數年首尾
能相勤差立候訳茂有之、又者無據由緒も有之候ハ、
吟味之上可被召出候、右之通○之被 思召候故、此儀御内
々被○仰聞事候条承知可仕候、以上、

享保十一年午七月

御取次

權十六

(島津久當)
將監殿

御家老中江

(本文書ハ「旧記雜錄追録」三一八八号文書ト同一文書ナルベシ)

写

座附士・外城衆中一代鹿兒島士格ニ被仰付候者近年有
之候、大番格之士三代續新御番相勤候得者、代々新番
ニ被仰付候御格式ニ被仰付置候、夫ニ準し候得者、一
代鹿兒島士格ニ被仰付候者之事も、三代續士格ニ被仰
付候ハ、代々ニ可被仰付儀ニ候、其御格ニ被定置候茂
不被遊 御覚候間、其通承知可仕置候、且又小番格之
者ニ寺社奉行格之御役迄寄合格之御役相勤候得者、是

も三代相勤候ハ、右ニ準シ候様可被仰付事候得共、右御役格之儀者格別之事候故、新番格之通ニ者不被仰付候間、右通之儀有之節者、時々奉伺候様可仕候、

右之通、島津權左衛門にて 御意承知仕候、寛保元年酉八月、首尾種子島織部、(時感)

(本文書ハ「旧記雜録追録四」一七〇九号文書ト同一文書ナルベシ)

右式通、座附士 御城下士ニ被召出候格式當座江

仰渡無之候ニ付、此節主鈴(島津久郷)殿江被 仰達御渡被成

候段式部殿より被仰聞、市来瀬兵衛明和元年申十(政念)

一月朔日致承知、御格式帳之内ニ書写置之候、

○御兵具所附士北川玄昌死後養子親類共より願之調

覺

本文御兵具所附士北川玄昌相果、直子無之候ニ付、御兵具所御譜代足輕永井半助由緒之訳を以親類ともより養子成之願申出、調被仰渡、左之通御座候、

一玄昌高祖父北川七郎右衛門、曾祖父北川了右衛門、祖

父北川了兵衛、親北川吉之丞代之御兵具所附御譜代足輕ニ而御座候、玄昌事も同前御兵具所附足輕ニ而御座候処、依御奉公之功、寛保二年、於江戸御兵具所附士ニ御赦免被仰付候、且又玄昌事醫道稽古仕居、去る辰年、表寄番醫師被仰付相勤申候、

一半助六代之祖永井惣右衛門、高祖父永井權兵衛、曾祖父永井半右衛門、親永井半右衛門代之御兵具所附御譜代足輕ニ而御座候、半助事ハ右半右衛門三男ニ而、玄昌弟子ニ罷成、醫道家傳之儀とも傳受為仕由申出候、右之通御座候、玄昌・半助續き之訳者、玄昌母・半助母者御兵具所附足輕吉井七兵衛娘ニ而、從弟之續き別条無御座候、然者士ニ御赦免被仰付候者其身代外城より養子御免之願申出候とも被取揚間敷旨、享保三年 御格式被究置候、然者亡仁礼玄東於江戸数年醫道稽古仕、家法致傳授候ニ付、玄昌事玄東弟子ニ而家傳等仕置候故、半助事ハ玄昌より致相傳、療治方等者手廣不仕候得とも、往々醫道仕存念ニ而罷居申候よし此節申出候、去る寛延三年午六月、御城下士指宿正哲事直子無之、北郷民部家来安藤仙庵

二男安藤隆雲養子之願段々申出趣有之、當座江調被
 仰渡候、正哲親指宿才測事者(光心) 寛陽院様御側醫師相
 勤、醫道之御書物等拜領被仰付置、正哲為二者縁類
 にて、血筋にて者無御座候得とも、正哲弟子ニ而醫
 道稽古仕由ニ御座候得者、右御取分を以養子御免可
 被仰付哉と奉存候旨調書差上申候処ニ、願之通御免
 被仰付候、右隆雲事ハ血筋にて無之、醫道傳授之
 一筋を以、御取分ニ而御免被仰付たる与相見得申候
 ニ付、半助先例ニ者準しかたく御座候、然れとも半
 助事ハ血筋之訊も有之、其上玄東以来醫法相傳いた
 し罷在玄昌師弟之儀ニ御座候得者、似寄たる事にも
 御座候間、願之通にも可被仰付哉と奉存候、乍然
 御城下士并諸座附士ニ、足輕より甥之續きニ而養子
 御免被仰付候先例者多々御座候得とも、従弟之續を
 以御免被仰付候者、段々相札申候得とも見當り不申
 候、尤 御格式被究置候趣ニ準し候得者、玄昌事其
 身代御赦免被仰付、半助従弟之續を以養子御免被仰
 付候得者、餘例廣く可相成儀にも御座候間、願之通
 に者被仰付間敷哉与吟味仕候、此上ハ私とも究て申

上かたく御座候、何分に茂御詮議次第奉存候、以上、

寶曆十三年未二月十四日

御記録方稽古

市来瀬兵衛(政心)

川上大六(親敷)

同添役

山田喜三右衛門(有雄)

同奉行

吉田用右衛門(清絶)

安藤左平次(茂良)

○三崎鉄之助元服願之調 御記録奉行

367

覺

本文元服之願被申出、調被仰渡候、三崎平太事島津大
 藏三崎家ニ而別立被居候節、二男ニ而小番家格ニ別立、
 其後諏訪家養子ニ罷成、違変仕候、大藏事本家後嗣ニ
 被仰渡候以後、平太事依願大藏家二男ニ立帰り、御太
 刀・二種一荷進上にて二男成之御札相濟申候、然者大

藏家之儀者、二男迄ハ、御前元服被仰付家格ニ御座候間、此節平太嫡子三崎鉄之助事折三合・御樽二荷・御太刀進上にて、家格之通、御前元服可被仰付儀与奉存候、以上、

寶曆十三年未二月十一日

御記録方稽古

川上大六(親敷)

同添役

山田喜三(有雄)右衛門

同奉行

本田新右衛門(親方)

吉田用右衛門(清純)

○光久公御家譜之内拔書

覺

一明曆三年丁酉正月十九日、失火于江戸新鷹匠町、暴風吹燄、江城本丸炎上、餘妖覃吾之櫻田邸(④舎)矣、

一同三年二月二日、為參觀發鹿兒島而取路於日州、于時

執政以奉書諭之、其詞曰、光久之邸舎亦罹池魚之災、依焉緩參觀之期、應將六七月窺其參勤之期也、グトヒ雖然雖既發居城、宜歸居城矣、光久得之路而帰城、

當月十九日、從新鷹師(④ナシ)匠町火事出来、風強候故御

本丸江相移悉く令炎上候、雖然、公方様無恙西丸江渡

御、御勇健之御事候間、可(④御心安)為御安心候、然者其方當

地之屋敷類焼候之間、參勤之儀延引可仕之旨被、仰出

候、被得其意六七月時分可被伺之候、其節可申達候、

恐々謹言、

(明曆三年) 阿部豊後守 忠秋判

正月廿五日

松平伊豆守 信綱判

酒井雅楽守(④頭) 忠清判

松平大隅守殿

(本文書ハ「旧記雜錄追録」二六八九号文書ト同「文書ナルベシ」)

今度其方當地之屋敷類火ニ付て、參勤延引候様ニ与最

368の4

前以奉書相達候通、忝被存之由得其意候、依之為御礼被差越使者候、入念候段可及 上聞候、恐々謹言、

(明曆三年)

三月九日

阿部豊後守 忠秋判

松平伊豆守 信綱判

酒井雅楽守 忠清判

松平大隅守殿

(本文書ハ「旧記雜録追録二」七〇八号文書ト同一文書ナルベシ)

其方參勤之儀示預之趣達 上聞候之処、勝手次第當年中可致參府之旨被 仰出候、可被得其意候、恐々謹言、

八月廿三日

阿部豊後守 忠秋判

酒井雅楽守 忠清判

松平大隅守殿

(本文書ハ「旧記雜録追録一」七四三号文書ト同一文書ナルベシ)

368の5

一明曆三年十月六日 光久公鹿兒島御發駕、萬治元年戌六月朔日 御國元江御暇、

但明曆三年より當寶曆十二年午歳まで百六年ニ相成候、

○綱久公御家譜之内拔書

一元禄十五年壬午十月十八日夜戌之刻、自江府芝市廓失火、芝第及取添田町両所之屋敷尽焼亡、是故 綱貴暫移居高輪之館、翌十九日 大將軍綱吉公使齋藤治左衛門来芝亭、尋火後之安否、 綱貴謹而奉謝恩篤忝、先是十月十八日、芝之第焼失、乃擇吉日經營之、新宅既成也、同年十二月十五日 綱貴移徙于芝之邸、

一綱貴公元禄十五年三月鹿兒島 御發駕、同十六年未五月晦日御暇、同六月十八日、江戸 御發駕、一元禄十五年より當年まで六十壹年ニ相當り候、
〔寶曆十二年なり〕

一明曆三年より元禄十五年まで四拾六年に相當る、

右者、明曆三年櫻田御屋敷御類焼に付、當座江相知

候趣有之候ハ、相糺可申出旨被仰渡、右通相見得申候、且又芝 御屋敷元禄十五年御類焼ニ付、右之詔も相見得居候ハ、可申出被仰渡候間、如此御座候、以上、

寶曆十二年

午三月十日

御記録方添役

郡山次郎左衛門(遜志)

兄玉早之丞(実門)

同奉行

吉田用右衛門(清純)

○御城下代々土石原市左衛門養子願之調 御記録奉行

覺

代々御城下土石原市左衛門直子無之、御城下一代士新納長意事血筋由緒之詔も無御座候得とも養子仕度旨願申出、調被仰渡、左之通御座候、

一市左衛門高祖父石原正庵勤方相知不申候、尤正庵以前

之儀相糺申候得とも相知不申、曾祖父石原仙右衛門、祖父石原市兵衛、養父石原藤左衛門迄勤方相知不申候、當市左衛門事ハ右市兵衛二男にて御座候処ニ、兄藤左衛門養子ニ罷成、諸檢者等之輕き御奉公相勤居申候、一 新納長意事ハ新納喜藤太家之庶流ニ御座候、六代之祖新納民部、高祖父新納十郎四郎両代共ニ勤方相知不申候、曾祖父新納清左衛門事ハ日置越後二男ニ而御座候処、十郎四郎養子ニ罷成、松山江罷移居候、然処ニ島津助之丞先祖島津市正殿家初而被召立候節帖佐ニ罷移り、市正殿へ相附罷在候、祖父新納清左衛門代市正殿家来ニ罷成申候、其後元禄九年子十一月、依願市正殿家代々附衆中ニ被仰付候、親新納清左衛門、其嫡子長意にて御座候、長意事御番醫師・奥醫師相勤、寶曆元年未八月 御下屋敷御側醫師 御城下一代士ニ被仰付置候、當分何ぞ勤かた無御座候、

右之通御座候、外城養子御格式之内、近代別立候者にて外城衆中又者家中者之内無據由緒有之者、其詔を以養子願出候儀格別に候間、有来通可有之候、且又外城にて持高所持いたし、直に其高持出候者ま

てを御免可被仰付候、無高にても無據血筋之者者、願之趣ニよりてハ被仰付へく儀も可有之由相見得申候、然者右之準御格式吟味仕候處ニ、市左衛門・長意事血筋由緒之訊無御座候、殊ニ御城下一代士より代々御城下士養子御免被仰付候先例、又者似寄候先例茂見當不申候、右通り血筋由緒無之者御城下士養子御免被仰付候者、向後餘例廣く相成り、一代御城下士之御格式其詮も不立筈に御座候間、願之通に者被仰問敷儀与奉存候、以上、

寶曆十二年午十二月十日

御記録奉行
人名略ス、

○左衛門殿養子島津大膳殿養子違変之儀御記録奉行より高奉行江問合

覺

島津大膳殿^(久慈)

右者、喜入美作殿子ニ而候處ニ、島津左衛門殿先祖島津彈正殿養子被罷成、島津大膳殿与申候處、其後故有之養子違変にて喜入家江被立歸候、

右者、當座ニおひて相見合候趣如此御座候、以上、

正徳五年未正月廿日

御記録奉行
川上平左衛門^(右カ)
調之、

高奉行

○三輪山大門坊より御位牌御預り申上度願之調御記録奉行

覺

三輪山大門坊より故御殿様方御位牌御預り申上度候段願被申出候得とも、御免不被仰付候故、此節又々近代之御法名御書付被下度旨書状を以被申越、寺社奉行返答之草案御渡被成、吟味仕可申上旨被仰渡候、大門坊より先頃御位牌御預り申上度旨願被申越候節、

當座へ調被仰渡候哉与段々相糺申候得とも見當り不申

候、誰様 御位牌安置候哉相知不申候、然者 御位牌

御預り之儀者先達而御断被仰遣、相濟申たる事御座候

処、又々此節近代之 御法名御書付被下度由願被申出

候、此上者 御法名も書付被遣間敷与者被仰遣かたく

咎ニ奉存候、尤 御位牌無之、 御法名まで之儀に御

座候間、御預け被成候と申ニ而者無之、寺社奉行被申

出候通、近代之 御法名書付可被遣儀与吟味仕候、以

上、

寶曆十二年午九月廿九日

御記録方稽古

市来瀬兵衛(政公)

川上大六(親敷)

右同奉行

本田新右衛門(親方)

吉田用右衛門(清純)

安藤左平次(茂真)

より申渡書

覺

御刀 一腰

右今度 太守宗信公被為寄進于薩府築地神明宮、被

相副 御直書全令寶納、至後年有緩疎間敷旨、別當

抱真院江可申渡者也、

寛延元年九月 日

御家老

御連名

寺社奉行

(本卷中ノ「〇」ハ全テ朱書ナリ)

○太守宗信より神明宮江御刀一腰御奉納之儀御家老衆

(表紙 六)

旧史館調

- 一 海江田半藏家筋勤方調
- 一 野之山文左衛門家筋勤方調
(ミカ)
- 一 比志嶋七郎太夫家筋調
- 一 財部孫之丞家筋調
- 一 新納仁右衛門家筋并勤方調
- 一 柵寝甚兵衛家筋并勤方調
- 一 高橋喜左衛門家筋勤方調

- 一 市来新左衛門家筋調
- 一 山田弥五右衛門家筋調
- 一 東郷吉右衛門家筋并勤方調
- 一 三原武兵衛家筋并勤方調
- 一 伊集院源右衛門家筋并勤方調
- 一 福崎五郎左衛門家筋并勤方調
- 一 木藤休右衛門家筋并勤方調
- 一 讚良善四郎右同
- 一 津留伊兵衛右同
- 一 仁禮孫右衛門右同
(左カ)
- 一 本田太兵衛右同
- 一 山田源左衛門右同
- 一 田尻八郎右衛門右同
- 一 友野次郎右衛門先祖軍功并次郎右衛門勤方調
- 一 伊藤長左衛門祖父及長左衛門勤方調
- 一 松元茂兵衛先祖及當茂兵衛右同
- 一 中馬源右衛門曾祖父より之勤方調
- 一 中原茂右衛門先祖及當茂右衛門右同
- 一 三原源左衛門先祖及當源左衛門右同

- 一西九平太先祖及當九平太右同
- 一土持平右衛門先祖及當平右衛門右同
- 一能勢彦右衛門右同
- 一白石仲右衛門右同
- 一田中諸右衛門右同
- 一鹿島傳左衛門右同
- 一白尾四郎兵衛勤方調
- 一溝口孝左衛門右同
- 一鈴木友右衛門右同
- 一市來茂左衛門右同
- 一大河平源助先祖并當源助右同
- 一福島半助右同
- 一仁禮平右衛門右同
- 一久保七兵衛先祖及當七兵衛右同
- 一小倉與右衛門右同
- 一木場次郎兵衛右同
- 一吉井勘右衛門右同
- 一有馬千左衛門勤方調
- 一西角太夫右同
- 一中村半助右同
- 一清水傳右衛門右同
- 一押川十郎右衛門右同
- 一榎元新兵衛右同
- 一富山清右衛門右同
- 一町田善助右同
- 一山下喜右衛門右同
- 一平田才右衛門右同
- 一久留万左衛門右同
- 一堀十郎右衛門勤方調
- 一御本丸納殿役人衆より尋ニ付御記錄奉行答
- 一將軍綱吉公及徳松様江疏人より献上品調
- 一佐多八十右衛門屹度立候御禮之節進上物之調
- 一飯隈山坊中桜井五大院弟救仁郷種_(左方)右衛門事大崎衆中池田善_(左方)右衛門成之調
- 一琉人より 御臺様江献上物品調
- 一佐藤權之助家筋并勤方調
- 一島津市太郎家内三木原二_(三九)之太 御目見ニ付進上物申渡_(崎)
- 一高橋權右衛門右同

- 一 平田平左衛門家筋調
- 一 中山王使者を以祝儀為差登之事
- 一 川上權四郎家筋調進上物之事
- 一 柏原善右衛門家筋調
- 一 末川織衛月次御礼之事
- 一 吉利仲左衛門 御目見進上物吟味之事
- 一 本田出羽守通席之事
- 一 新納喜右衛門家筋調
- 一 喜入十郎右衛門家筋調
- 一 木脇八郎右衛門家筋調
- 一 入田助左衛門家筋由緒之調
- 一 幾朴千祥家筋勤方之調
- 一 種子嶋伊右衛門右同
- 一 弟子丸喜兵衛右同
- 一 池田仙左衛門右同^(十九)
- 一 家村仲藏家筋調
- 一 高橋半藏右同
- 一 北郷彦七右同
- 一 戸田平次右同
- 一 弟子丸兵衛右同
- 一 本田新右衛門右同
- 一 川上安左衛門家筋并勤方之調
- 一 本田正右衛門右同
- 一 有川七左衛門右同
- 一 種子島善兵衛右同
- 一 篠原伊右衛門右同
- 一 國分藤之丞右同
- 一 肥後與右衛門右同
- 一 田中藤次兵衛右同
- 一 仁禮玄東右同
- 一 高木次郎太右同
- 一 市来平左衛門右同
- 一 松下助五郎右同
- 一 近藤牧右衛門右同
- 一 兵庫様御家督御相續ニ付御讓物調之事
- 一 肱岡三輪八家筋調
- 一 阿久根三五郎右同
- 一 岩城源太兵衛并前田^(助三) 御城下士ニ被成候事

一 山川宗廟熊野權現祭禮之節野間口彦之進家御代參云々
調之事

一 山田一郎左衛門家筋調

一 伊勢九郎八右同

一 上村藤之丞右同

一 小倉仲之丞家筋調

一 木村村右衛門右同

一 田代安積右同

一 兒玉鉄兵衛右同

一 朝倉甚五兵衛・黒木長五郎・永田次左衛門・志和地治

右衛門 御城下士被仰付候事

一 染川傳七家筋調

一 廻向院之事

一 理性院無量壽之事
(院脱カ)

一 土岐仁之丞(助力) 御目見進上物之事

一 小林中之丞家筋之事

一 新納藤右衛門家筋之事

一 伊勢弥市左衛門右同

一 平山七郎右衛門右同

一 本田助之丞右同

一 伊集院甚助右同

一 野間孫兵衛右同

一 富山彌右衛門右同

一 平山源左衛門右同

一 伊集院七左衛門右同

一 川崎與三左衛門右同

一 讚良善藏右同

一 弟子丸小八郎家筋之事

一 小田善兵衛家筋之事

一 四本喜左衛門右同

一 平田新太郎右同

一 本田次兵衛右同

一 龜山次郎右衛門右同

一 伊集院平右衛門右同

一 川上正右衛門・梅北次郎左衛門・大嶋孫右衛門家筋勤

調

一 島津又六郎家来阿多平左衛門家出所之調

一 築原喜右衛門家筋調

一上野納右衛門家ニ付合藥主取之事

一久・忠之文字遠慮可仕事

一中山王御禮ニ付返書御吟味之事

一島津加賀守殿復源姓ニ付庶流吟味之事

一大興寺江寄進物之事

一御先代様御袖判御書付見合調

一慈徳院様御逝去一卷帳之内拔書

一大女院様御葬送之事

○鹿兒島士海江田半藏家筋勤方之調

海江田半藏

右亡祖父海江田諸右衛門事海江田仲左衛門二男にて別立、御即位之節、添御使者十五人御賦にて相勤、物奉行・納殿役人等相勤申候、親海江田八右衛門事部屋栖之内御馬廻り被仰付、早世仕、半藏事幼少之節より御小姓相勤、當時山奉行御役相勤、代々小番被召入置候、

○野々山文左衛門家筋勤方調

野々山文左衛門

右親檢校被召抱、御醫師被仰付、江戸にて九人之御賦被下置候、文左衛門事幼少之節より御小姓相務、其後寺社方取次被仰付、當時山奉行御役相勤申候、尤大番ニ被召入候、

○鹿兒島士比志島七郎太夫家筋しらべ

比志島七郎太夫

右祖比志島(國貞)紀伊守事御家老御役相勤、嫡子比志島(國隆)宮内(範具)諷有之家召禿され候、曾祖父比志島監物事嫡家より紀伊後嗣ニ被仰付、御高五百石被成下、家相立申候、祖父比志島主膳(國也)、父比志島善八代(國美)之地頭職被下置候、嫡子比志島(國能)主右衛門新御番にて江戸詰仕候、七郎太夫事主右衛門弟にて、御側御小姓相勤、山奉行御役被仰付、先比主右衛門後嗣ニ罷成候、尤代々小番勤来り申候、

○鹿兒島士財部孫之丞家筋調

右養祖父財部作右衛門財部傳右衛門弟にて別立、御厩別當御役数年相勤、代々小番被召入置候、養父財部傳五左衛門當分伏見御假屋守にて五人御賦被下置候よし、孫之丞事幼少之節より御小姓相勤、先年寺社方取次被_(付脱之)仰、當時山奉行御役被仰付置候、

○鹿兒島士新納仁右衛門家筋并勤方調

右祖父新納仁右衛門山奉行・御納戸奉行御役相勤候よし、親新納仁兵衛御馬廻相勤、其後納殿御役相勤申候、仁右衛門事新御番にて江戸詰仕、當時郡奉行御役相勤、代々小番勤来申候、

○鹿兒島士衾寢甚兵衛家筋并勤方調

右祖父川口覺兵衛代官御役相勤、養父川口權兵衛定御供に被仰付、四人御賦にて江戸詰仕候よし、甚兵衛代

衾寢名字ニ罷成、新御番にて江戸詰仕、當時郡奉行被仰付置候、尤大番相勤来申候、

○鹿兒島士高橋喜左衛門家筋勤方調

右親高橋喜兵衛殿役奉行相勤、喜左衛門事二男にて別立、諸檢者等之御奉公相勤、其後當御役被仰付置候、大番家筋にて御座候、

○市来新左衛門家筋調

右祖父市来新左衛門御厩別當相勤、親市来源八長崎警固番相勤、新左衛門事座横目役・代官御役相勤、其後當御役被仰付候、尤大番家筋にて御座候、

○鹿兒島士山田弥五右衛門家筋調

右祖父山田慶兵衛、親山田周右衛門諸檢者等相勤、弥

右祖父三原大藏事三原備中二男にて、別立申候、御納戸奉行相勤、地頭職被下候よし申出候得とも、地頭職之儀者當座江相知不申候、養父三原諸兵衛病人にて勤方無御座候、武兵衛事新御番にて度々江戸詰仕、當分郡奉行相勤申候、尤大番相勤申候家筋にて御座候、

三原武兵衛

○鹿兒島士三原武兵衛右同

五右衛門事三人御賦にて江戸詰仕、當時郡奉行被仰付置候、尤大番家筋にて御座候、

○鹿兒島士東郷吉右衛門家筋并勤方しらべ

東郷吉右衛門

右祖父東郷覺右衛門御奉公相知れ不申候、親東郷半右衛門事代官御役相勤申候、吉右衛門事小役人等之御奉公相勤、當時郡奉行御役相勤申候、尤大番家筋にて御座候、

右祖父木藤覺兵衛、親木藤長左衛門國分衆中より覺兵衛養子ニ罷成、小役人等相勤、休右衛門事御徒目附相

木藤休右衛門

○鹿兒島士木藤休右衛門同

右養祖父福崎清左衛門事王子原 御犬追物幣之役相勤、公方様江御目見、拜領物等仕候、養父福崎十右衛門中通御目附相勤、五郎左衛門事表御小姓ニテ江戸詰仕、當時郡奉行御役相勤候、尤代々小番勤来申候、

福崎五郎左衛門

○鹿兒島士福崎五郎左衛門家筋并勤方調

○鹿兒島士伊集院源右衛門家筋勤方調
右曾祖父伊集院備後・祖父伊集院源右衛門山之口地頭職相勤申候、親伊集院左衛門御小姓相勤、源右衛門事ハ江戸御奉公不仕、諸檢者等之御奉公相勤、當時郡奉行被仰付置候、尤代々小番にて御座候、

勤、當時郡奉行ニ被仰付候、尤大番相勤申候、

○鹿兒島士讚良善四郎右同

讚良善四郎

右祖父讚良善助物頭相勤、親讚良善助初而地頭職被仰付候、代々小番勤来申候、

○鹿兒島士津留伊兵衛右同

津留伊兵衛

右祖父津留彦兵衛勤かた御座なく候、親津留曾右衛門定御供相勤候由、伊兵衛事小役等相勤、(人脱力)當分郡奉行被仰付候、尤大番勤来申候、

○鹿兒島士仁礼孫左衛門右同

仁礼孫左衛門

右養父仁礼孫右衛門諸檢者等之御奉公相勤、孫左衛門事財部衆中にて候処に、孫右衛門養子ニ罷成、小役人

等相勤、御勘定所小頭、其後當御役被仰付候、大番家筋にて御座候、郡奉行御役被仰付置候、

○鹿兒島士本田太兵衛右同

本田太兵衛

右祖父本田太兵衛事横目役相勤、親本田次兵衛定御供・納殿御役等相勤、太兵衛事横目役・御勘定方小頭等相勤、當時郡奉行被仰付置候、尤大番勤来申候、其後御普請奉行御役・御船奉行御役被仰付置候、

○山田源左衛門右同

(宇喜多秀家)

右曾祖父山田半助事備前中納言殿家来にて候処に、御家ニ被召抱、乘馬御賦にて御使者等相勤申候よし、祖父山田玄、心醫師にて御座候、親山田源五左衛門新御番にて江戸詰仕、後醫師ニ罷成、玄哲と改名仕、御側御醫師にて六人御賦ニ被仰付候、源左衛門事御徒目附相勤、當時郡奉行御役相勤申候、尤大番相勤来申候、但其後京都御留守居御役被仰付、代々小番ニ罷成申

○鹿見島士友野次郎右衛門先祖軍功并當次郎右衛門
勤かたしらへ

友野次郎(長年)右衛門

右曾祖父友野次郎右衛門事、琉球國 御退治之節父子
拾壹人にて渡海仕候、祖父友野左近御小姓役相勤、親
友野七左衛門小與頭相勤申候、次郎右衛門事地方檢者

○鹿見島士田尻八郎右衛門家筋并勤方調

田尻八郎右衛門

右高祖父田尻中務(鑑種)太輔筑後梁川城主にて御座候、曾祖
父田尻嘉兵衛(統種)代 御國江參上仕、御番御免にて勤方御
座なく候、祖父田尻八兵衛口事奉行・御廻等相勤、親
田尻金石衛門御船奉行・山奉行・御馬廻等相勤、八郎
右衛門事地方檢者相勤、當時郡奉行御役相勤申候、尤
代々小番勤来申候、

其後御船奉行御役被仰付置候、

○松元茂兵衛先祖及當茂兵衛勤方調

松元茂兵衛

右親松本昌庵醫師にて被召抱、高三百石被下置、拾人
御賦被成下候、茂兵衛事御馬廻に被仰付、諸所江御使
者相勤、左候而、屋久島奉行拾ヶ年相勤、其後當御役
相勤申候、尤代々小番被召入置候、

○中馬源右衛門曾祖父より之勤かたしらへ

候、

相勤、當時郡奉行寄御役相勤申候、尤大番勤来申候、

○鹿見島士伊藤長左衛門祖父及長左衛門勤方調

伊藤長左衛門

右祖父伊藤隆右衛門代官役相勤、親伊藤長左衛門事郡
奉行御役相務、長左衛門事も郡奉行御役相勤、新御番
にて江戸詰仕、當分寄郡奉行相勤申候、尤大番勤来申
候、

中馬源右衛門

右曾祖父、祖父何ぞ御役相勤不申候、養父中馬半六口事奉行相勤申候、源右衛門事横目役にて江戸詰仕、其後寺社取次五ヶ年ほと相務、其後當御役相勤申候、尤大番筋にて御座候、

○鹿兒島士中原茂右衛門先祖及當茂右衛門勤かた調

中原茂右衛門

右先祖代々、御代山伏にて、祖父中原良舜院拾二人之御賦にて入峯仕候よし、親中原仲左衛門御馬廻相勤、茂右衛門事茂御馬廻数年相勤、其後當御役被仰付置候、尤代々小番被召入置候、

○鹿兒島士三原源左衛門先祖及當源左衛門勤方調

三原源左衛門

右祖父三原市右衛門事出水米之津勤番数年相勤申候、源左衛門事数年表御小姓相勤、郡奉行御役被仰付、徳之島代官にて渡海仕、其後當御役相勤申候、尤大番家

筋にて御座候、

○西九平太先祖及當九平太勤方調

西九平太(純徳)

右祖父西圓應代被召抱、小番相勤来申候処、親西丹下代寄合并被仰付、兄西彦太郎(純孝)當時御用人御役相勤、地頭職被下置候、九平太事二男にていま別立不申、御側御小姓・寺社方取次等相勤、當時御細工奉行被仰付置候、其後物奉行御役・大坂御留守居御役被仰(付脱力)、皆吉与名字相改、別家ニ相立申候、

○鹿兒島士土持平右衛門先祖及當平右衛門勤方調

土持平右衛門

右曾祖父土持平(綱辰)左衛門事御船奉行・京都御留守居相勤、馬関田地頭職被仰付候、祖父事ハ病人にて勤方御座な(綱英)く候、親平右衛門御馬廻相勤、當平右衛門事御側御小姓相勤、其後當御役被仰付候、尤代々小番勤来申候、其後御使番御役・御納戸奉行等之御役相務、

右高祖父白石藤左衛門事御右筆相勤、曾祖父白石仲兵衛、祖父白石仲兵衛御家老座筆者相勤、親藤左衛門事國分衆中ニ而、仲兵衛養子ニ罷成り、新御番にて江戸詰仕、寺社方取次・宗門改方御役被仰付候、仲左衛門(又)事新御番にて江戸詰仕、御勘定方小頭相勤、其後當御

○鹿兒島士白石仲右衛門右同

白石仲右衛門

○能勢彦右衛門右同

能勢彦右衛門

右高祖父印東彦右衛門事摂州御知行所代官にて、曾祖父能勢喜庵御醫師にて十四人御賦飯米被下、祖父喜庵事同然之勤方にて御座候、親歴庵事御醫師にて拾二人御賦被下、代々御米四拾石被成下、江戸居附ニ而御座候処に、御國元江引越候節、地方にて式百石永代ニ被成下候、彦右衛門事幼少より数年御側御小姓相勤、當時御細工奉行相勤申候、尤大番相勤候家筋にて御座候、其後儀奉行相務、

○鹿兒島士鹿島傳左衛門右同

鹿島傳(國奉)左衛門

右高祖父鹿島駿(重國)河琉球御檢地奉行相勤、曾祖父郷兵衛馬廻相勤、祖父傳左衛門御小姓役、八人賦被召仕、(國位)親郷兵衛御馬廻相勤、其後金山奉行・大御目附座取次等之御役相勤申候、傳左衛門事も御馬廻にて江戸詰仕、當時屋久島奉行被仰付置候、尤代々小番にて御座候、但其後御船奉行御役相勤候、

○鹿兒島士白尾四郎兵衛右同

○鹿兒島士田中諸右衛門右同

田中諸右衛門

右祖父田中五左衛門事新御番相勤候よし、親田中權平横目役相勤、諸右衛門事御徒目付并御勘定方小頭等相勤、左候(而脱之)、屋久島奉行被仰付候、尤大番筋にて御座候、

白尾四郎兵衛

(曾殿九)
右祖父白尾金左衛門事加治木より被召出、御近習役被仰付、江戸におひて十人賦被下置候、祖父白尾登五左衛門物頭御役・出水地頭代等相勤申候、養父金左衛門事小番相勤、四郎兵衛事二男にて、兄跡目ニ罷成、横目役相勤、當時屋久島奉行被仰付置候、代々小番被入置候、

但其後御目附御役相務御免、

○溝口孝左衛門右同

溝口孝左衛門

右親溝口十右衛門事定御供相勤、其後島津筑後上洛之節相附、五人賦にて罷登り候よし、孝左衛門事横目役数年相勤、郡奉行御役被仰付、當時屋久島奉行相勤申候、

○鹿兒島士鈴木友右衛門右同

鈴木友右衛門

右兄鈴木市右衛門事代々小番にて御座候、友右衛門事別立、御普請方檢者・御徒目附等相勤、當時御勘定方小頭相勤、御役内琉球假屋守相勤申候、尤大番相勤申筈之家筋にて御座候、

○鹿兒島士市来茂左衛門右同

市来茂左衛門

右市来十郎右衛門二男家にて、養父市来栄右衛門無役にて御座候、茂左衛門事横目役・御徒目附相勤、御勘定方小頭被仰付、五人賦にて江戸詰仕候、尤大番相勤来申候、

○鹿兒島士大河平源助先祖并當源助勤方調

大河平源助

右大河平休兵衛二男家にて、曾祖父大河平細右衛門鹿兒島江被召出、祖父源太左衛門代官役、亡父源助事大御目附座取次勤相勤申候、當源助事座横目相勤、其後御勘定方小頭にて江戸詰仕候、尤大番筋にて御座候、

○鹿兒島士福島半助右同

福島半助

右高祖父福島新右衛門國分におひて納殿役相勤、曾祖父備前納殿役相勤、祖父新右衛門代官役相勤申候、養父玄佐御醫師にて拾耆人御賦被下置、江戸詰仕候、半助事横目役相勤、當時御勘定方小頭被仰付置候、尤大番筋にて御座候、

但其後御守殿御鎖口添番相勤候よし、

○仁礼平右衛門右同

仁礼平右衛門

右祖父仁礼六左衛門事加世田衆中にて御座候処ニ、御當地士ニ被仰付、無役にて御座候、親事も勤方無御座候、平右衛門事横目役・御徒目附等相勤、當時御勘定方小頭被仰付候、尤大番筋にて御座候、

○鹿兒島士久保七兵衛先祖及當七兵衛勤方調

412

久保七兵衛

右祖父久保七兵衛納殿御役相勤、親久保七兵衛事も納殿御役相勤申候、當七兵衛事御勘定所小頭被仰付、當時江戸詰仕候、尤大番家筋にて御座候、

但其後郡奉行・糺明奉行・物奉行・御使番御役相務、代々新番に被召入置候、

○鹿兒島士小倉與右衛門右同

小倉與右衛門

右祖父小倉五右衛門磨細工にて、親五右衛門事も輕き御奉公相勤申候、與右衛門事江戸・京・大坂江小役人にて相務、大坂詰之節者五人賦被仰付候、當分御勘定方吟味役相勤、先頃新御番ニ被召入置候、尤大番筋にて御座候、

○鹿兒島士木場次郎兵衛右同

木場次郎兵衛

右者木場源左衛門弟にて別立、諸御座筆者数年相勤、

413

411

410

414

御勝手方筆者并算用役相勤、大坂詰之節五人御賦被成

下、當分御勘定所吟味役被仰付置、此程大支配方ニ付郡奉行寄役被仰付候、尤大番筋にて御座候、

但其後高奉行御役相務、

○吉井勘右衛門右同

吉井勘右衛門

右吉井平馬二男ニ而別立、御勘定役にて江戸詰仕、其

後御勘定所吟味役相勤、其後當御役被仰付、尤大番筋

にて御座候、

○有馬千左衛門右同

有馬千左衛門

右祖父有馬千左衛門事代官御役相勤、父有馬十兵衛御

勝手方筆者相勤、千左衛門事御勝手方筆者・考役相勤、

其後代官御役被仰付、御役之内當分琉球假屋守り相勤

申候、尤大番筋にて御座候、

○西角太夫右同

西角太夫

右祖父西源左衛門、父西太郎右衛門小役人等相勤、角

太夫事御勝手方筆者・算用役、京都之節五人御賦被成

下、其後代官御役被仰付、御役内沖永良部島代官六人

賦ニ被仰付候、尤大番筋にて御座候、

○中村半助右同

中村半助

右曾祖父中村孫右衛門、祖父中村壹三右衛門、親中村

弥左衛門ミなども小役人等之御奉公相勤申候、半助事

筆者・小役人等にて江戸詰仕、御勝手方算用役相勤、

五人御賦にて京・大坂江相勤、其後當御役被仰付置候、

尤大番筋にて御座候、

○清水傳右衛門右同

清水傳右衛門

421

○榎元新兵衛右同

(元カ)
榎本新兵衛

右曾祖父代種子島彈正殿家来にて、榎元利助奥附土に罷成、父新右衛門事奥大番相務申候、新右衛門二男にて別立、御勝手方筆者・算用役相勤、京・大坂詰五人御賦被成下、其後代官御役被仰付、大御支配ニ付郡奉行寄相勤申候、尤大番筋にて御座候、

420

○押川十郎右衛門右同

押川十郎右衛門

右祖父押川喜左衛門事島津故圖書殿與力役にて、親押川十郎右衛門物奉行御役相勤、當十郎右衛門事御徒目附相勤、其後當御役被仰付置候、尤大番筋にて御座候、但其後御目附・糺明奉行兼役相務申候、

右父清水傳右衛門唐船警固番相勤、當傳右衛門事御徒目付にて江戸詰仕、當分代官御役被仰付置候、尤大番筋にて御座候、

423

○町田善助右同

町田善助

右養祖父町田仙隆事御茶道相勤、養父町田仙阿弥御同朋に御座候、善助事横目役相勤居候処に、當御役被仰付、先頃新御番被召入候、尤大番筋にて御座候、但代官御役相務、

○山下喜右衛門右同

422

○富山清右衛門右同

富山清右衛門

右親富山十兵衛事帖佐衆中にて御座候処に、被召出御小姓役・御右筆・御船奉行等相務、清右衛門事も御小姓相勤、其後新御番にて江戸詰仕、當時代官御役相勤申候、尤大番筋にて御座候、

但其後御船奉行御役相務、其子次郎左衛門新御番にて江戸詰仕、代々新御番ニ被召入置候、

右祖父山下喜右衛門事御包丁人頭相勤、親山下三左衛門御包丁人頭、其後納殿御役被仰付候、喜右衛門事御徒目附相務、且又長崎唐船警固相勤、其後當御役被仰付候、尤大番筋にて御座候、

但金山奉行・物奉行等御役相務申候、

○平田才右衛門右同

平田才右衛門

右祖父平田才兵衛、亡父平田弥右衛門横目役等相勤、

才右衛門事表御小姓数年相務、其後當御役被仰付置候、尤大番筋にて御座候、

○久留万左衛門右同

久留万左衛門

右祖父久留万左衛門事定御供・代官御役等相勤、父久留十左衛門事御家老座筆者相勤、万左衛門事御徒目附にて江戸詰仕、其後當御役相勤申候、尤大番筋にて御座候、

但山奉行御役相務、

○堀十郎右衛門右同

堀十郎右衛門

右養父堀仁右衛門事堀休兵衛三男にて、小役人等相勤申、十郎右衛門事小役人等相勤、御勘定方小頭被仰付、其後御臺所頭被仰付候、尤大番筋にて御座候、

右五拾六行、享保十三年戊申三月晦日調也、

○御本丸納殿役人衆より尋ニ付御記録奉行答

覺

(吉貫堂)
一 靈龍院様御事、享保七寅年、芝 御屋敷より高輪 御

屋敷江御引移為被遊にて可有御座与存候得とも、何月

何日 御引移被遊候儀、當座江相知不申候、

(雜書堂)
一 瑞仙院様御入興、享保八年卯四月廿一日にて御座候、

右、任御尋書付差越候、以上、

延享五年辰五月廿六日

430

本文調被仰渡候、八十右衛門亡兄喜六郎事者先島津左弟佐多喜六郎嫡子にて、左家内に罷在候処に、左家二男之儀者 御前元服被成下候ニ付、去ル元文二年巳十

佐多八十右衛門

○佐多八十右衛門屹度立候御礼之節進上種物之調(衍カ)

429

御本丸

納殿役人衆

御記録奉行

○將軍綱吉公及徳松様江琉人より献上品調

覺

一天和二年 將軍綱吉公

一西之丸 御若君徳松様(稱喜男)、琉人より献上物數品有之候与

相見得申候得とも、其品當座江相知不申候、右 徳松

様、天和三年閏五月、五歳にて 御早世、

右相糺候趣如此御座候、以上、

延享五年辰六月三日調之、

431

覺

○飯隈山坊中桜井五大院弟救仁郷種右衛門事大崎衆(左カ)
中池田善左衛門成之調

延享五年辰六月四日調、

存候、以上、

右 御格式之通御太刀・二種忱荷進上可被仰付儀与奉

亡兄喜六郎同前之儀ニ御座候間、此節御礼進上物之儀、

事此節右喜六郎場に組帳被召載置候儀御免ニ付而(衍カ)ハ、

刀・二種忱荷進上可被仰付旨被仰出置候、八十右衛門

式之内、 御前元服之人者屹度立候御礼之節者、御太

一月十六日、喜六郎事 御前元服被仰付候、然者御格

本文調被仰渡候、去ル元禄七年戌四月廿六日、飯隈山

坊中桐樹坊二男救仁郷藤兵衛事 御城下土岐岐齋養子

ニ被仰付候、寶永三年戌正月十三日、末吉衆中白尾正

右衛門二男白尾刑部左衛門事、仲之坊蓮繼坊鯉養子ニ

被仰付候、梅谷坊前住長楽坊二男長仙坊 御城下士ニ
 被召出、其子孫救仁郷文堯院救仁郷善兵衛にて御座候、
 且又先年蓮持院弟救仁郷善右衛門大崎衆中三浦吉六番
 子ニ被仰付候、右通先例御座候、然者桜井坊事蓮光院
 家より相分れ、代々桜井坊住職相勤、仲之坊・梅谷坊・
 蓮持院同前之格式之者ニ御座候間、此節桜井坊五大院
 弟救仁郷種左衛門事、大崎衆中池田善左衛門養子に御
 免被仰付候而も何ぞ差支申儀有御座間敷与吟味仕候、
 以上、

延享五年辰六月三日調、

吉(吉田清純) 安(安藤茂真)

町(町田俊懿) 川(川上久備)

吉 調之、

○琉人より 御臺様江献上物品調

本文天和二年琉人より 御臺様へ献上物之儀、 御譜
 中其外古書附等相札候得とも相知不申候、此段申出候、
 以上、

辰六月八日

御記録奉行

○鹿兒島土佐藤權之助家筋并勤方調

佐藤權之助

右本文家筋調被仰渡候、權之助高祖父佐藤将監事郡元
 村一之宮祝子職相勤申候、曾祖父佐藤權之太夫鹿兒島
 諏方大明神主職相勤申候、祖父佐藤兵右衛門、亡父
 佐藤五郎右衛門両代ともに無役にて、大番相勤申、當
 權之助事當分勤かた無之、大番相勤申候、尤代々御
 城下士にて御座候、以上、

延享五年辰六月

吉田調之、

○島津市太郎家内三木原二三太初而之 御目見ニ付

進上物申渡

写

島津市太郎

右家内寶壽院第三木原三三太初而之 御目見願出候ニ付、進上物御見合を以被仰付被下度被申出、中紙進上被仰付候、

右如例可申渡候、

延享五年辰

六月

鳥津
矢柄
(久意)

鹿兒島士高崎權右衛門初而之 御目見ニ付進上物申渡

高崎權右衛門

右繼目并初而之 御目見願出、進上物之儀者亡父高崎七右衛門御太刀進上仕候ニ付、不相替進上物被仰付被下度旨申出候、七右衛門事高崎家二男にて、御太刀進上仕、初而之 御目見被仰付候、以後中神與五左衛門聳養子被仰付候ニ付、三男高崎五郎右衛門依願二男成被仰付、御太刀進上迄も被仰付、然処七右衛門儀養子違変いたし、本家江立帰り候ニ付而者末子ニ準候故、此節より中紙進上被仰付候、

右如例可申渡候、

延享五年辰
六月

鳥津
矢柄
(久意)

(本文書ハ、四三五の1号文書ト同文ニツキ省略ス)

○平田平左衛門

本文初而高持之願申出、家筋調被仰渡候、平田平左衛門家者當平田才右衛門祖父平田弥右衛門二男ニ而初而別立申候、高祖父平田傳兵衛方相知不申候、曾祖父平田才兵衛、祖父平田弥右衛門、養父平田次郎八右三代共ニ諸檢者等相勤申候、當平左衛門事ハ平田助右衛門二男ニ而候処ニ、右次郎八養子ニ罷成、當分御料理役相勤申候、尤代々 御城下士ニ而、大番相勤候家筋ニ而御座候、以上、
延享五年辰六月十八日 吉調之、

覚

一享保三年、將軍吉宗公御代替ニ付中山王尚敬御祝儀之使者越來王子、
(朝慶)
同年戌九月十一日 淨國院様御代御
(吉良)

參勤之節江戸へ被召列、西目筋 御發駕、御家老北郷(久嘉)作左衛門・御用人宮之原(重行)甚太夫被召附、同年十一月八日、芝御屋敷へ 御着、同閏十一月十三日、琉使被召列 御登 城、御參勤 御目見相濟申候、同十五日、又々琉人被召列 御登 城、座乘被備 上覽候、同十二月二日、琉人芝御屋敷被召立、御家老嶋津内記、御用人谷山角太夫・鎌田六郎(政直)太夫被召附、同四年亥二月六日、鹿兒嶋へ致下着候事、
延享五年辰
六月廿日

○川上權四郎(親房)

本文調被仰渡候、川上權四郎亡父川上權之進事ハ式部祖父川上祥山(久重)二男ニ而、元禄十五年午十一月 御直元服被成下候得共、其以後段々 御直元服等之御格被相究、式部家嫡子迄 御直元服被成下事ニ御座候、依之先年式部弟川上長太夫事初而之 御目見願申出候節、式部家二男御太刀・二種壹荷進上仕来申候故を以、長太夫事御太刀・二種一荷進上被仰付候、然者權四郎事亡父權之進例ニハ難被仰付御座候条、右長太夫例を以、御太刀・二種一荷進上可被仰付儀与奉存候、以上、

延享五年辰六月廿一日

高山衆中
○柏原善右衛門

本文調被仰渡候、善右衛門高祖父柏原善右衛門大崎衆中ニ而候処ニ、桂山城高山地頭之節罷移、勤方相知不申候、曾祖父柏原善左衛門寛永十五年二月肥前國嶋原一揆之節、地頭島津下野江相附有馬江罷越、所主取役為相勤由候、祖父柏原主水横目役相勤、江戸へ茂相詰申候、養父柏原善左衛門所御留場見舞役相勤申候、當善右衛門事者同所衆中日高休左衛門弟ニ而候処ニ、右(マ)善右衛門養子ニ罷成、當時組頭役相勤申候、尤曾祖父以來高山衆中ニ而御座候、以上、
延享五年辰六月
廿二日調之、

440

○覚

(烏津貴備)備中殿二男末川織衛月次御礼ニ被罷出候節者、何れ之場ニ而御礼可被申上哉、致吟味可申出旨被仰渡候、織衛事當時備中殿家内ニ罷居、家格未相究申候、然者一所持・一所持格嫡子嫡孫之場ニ者難被仰付奉存候間、寄合嫡子嫡孫之場ニ而、當分ニ而八川上孫八頭ニ御礼

連名可被仰付儀与詮議仕候、乍然右躰之先例無御座候
ニ付、私共ニ茂究而者難申上御座候間、御吟味次第奉
存候、以上、
延享五年辰 藥 吉 安 町
七月四日 吉調之、

右調之通御礼席被仰付候由、内々^(島津久富)矢柄殿承知之、

○覚

○吉利李右衛門二男吉利仲左衛門初而之 御目見願被申
出、李右衛門家近年二男 御目見進上物之先例無御座
候ニ付而、相調可申出旨被仰渡、左之通御座候、

李右衛門家一所持ニ而、嫡子之儀ハ御太刀・二種一荷
進上被仕来候得共、二男進上物之先例無御座候、然者
島津帶刀・伊集院伊膳家一所持格ニ而、嫡子 御直元
服、御太刀・二種一荷進上被仕来候得共、二男進上物
之先例無御座候処ニ、先年帶刀二男黒岡與十郎・伊膳
亡父伊集院半太夫弟伊集院李兵衛事初而 御目見之節、
各御太刀進上被仰付候、李右衛門家嫡子 御直元服、
御太刀・二種一荷進上仕来、進上物右両家同様之儀ニ
御座候、川田與右衛門家一所持ニ而、嫡子 御前元服、

御太刀・二種一荷進上被仰付候、先年弟川田次右衛門
初而 御目見之節、弓進上ニ被仰付候、李右衛門家之
儀ハ 御直元服被仰付、與右衛門家ハ御前元服被仰付
事ニ而、與右衛門弟次右衛門例ニハ難被仰付御座候条、
與十郎・李兵衛例を以御太刀進上可被仰付儀与吟味仕
候、以上、

延享五年辰七月十三日 藥 吉 安 町 川 吉調之、

右調之通被仰付候事、

覚

本田出羽守七月廿八日諫方御神事相濟、於安養院
御名代御通為頂戴罷出候、大乘院門中御通相濟、平
僧席ニ而御通頂戴仕来候ニ付而、此節段々申出趣有
之、御通ニ罷出候席相札可申出旨被仰渡、左之通御
座候、
御在國之節、出羽守事門首席ニ而 御目見被仰付、官
成御礼ニ茂右同前ニ御座候、 御在府之節者、年頭松
之間ニ而御礼申上候、且又大乘院事者年頭着座之門首

二而、着座之内門中平僧迄 御目見相濟候以後、着座無之門首 御目見被仰付事ニ御座候得者、右年頭之御格ニ準、出羽守事於安養院 御名代御通頂戴之節、大乘院門中平僧迄茂御通相濟候以後、出羽守事別立而、出世席ニ而御通り頂戴可被仰付儀与奉存候、以上、

延享五年辰七月十八日 五人調之、吉調候、

○覺

○新納喜右衛門

右元祖新納悪四郎久顯事ハ新納四郎先祖新納越後實久他腹之長男ニ而御座候、其子新納越後忠泰、其子刑部忠親地頭職被仰付、其子越後孝久、其子十郎忠堯、其子越後忠誠右三代勤方相知不申候、其子越後忠包、其子孫右衛門教久右兩代地頭職被仰付候、其子越後久景勤方相知不申候、其子喜右衛門久行此代御直元服、御用人御役、地頭職被仰付候、其子當喜右衛門御馬廻ニ而江戸詰仕候、當分無役ニ而罷在候、尤喜右衛門家 御直元服被仰付、代々小番相勤、御太刀・二種一荷進上仕来申候、

○喜入十郎右衛門

右八代之祖喜入圖書忠道事ハ喜入主膳先祖喜入撰津忠俊二男ニ而、別立申候、於隅州根占戰死仕、其子喜入久正、後ニ紹嘉与申候、龍伯義久様御隱居御家老相勤申候、其子休右衛門久洪京・大坂へ相詰候節、為御使者江戸へ被差越、御用筋相勤、且又 寬陽院元久様御家督初而御登 城之節御供仕、公方久守様江 御目見被仰付候、何御役ニ而候哉相知不申候、其子休右衛門御用人御役相勤申候、右紹嘉より此休右衛門迄國分地頭職被仰付候、其子十郎右衛門御用人御役相勤、地頭職被仰付候、其子休右衛門御勘定奉行相勤申候、其子休右衛門久尚、大綱玄院様御側御小姓相勤、八人之御賦ニ而江戸詰仕候、其後御馬廻相勤候、當十郎右衛門事御馬廻ニ而江戸詰仕、當分無役ニ而罷在候、尤代々小番相勤、御太刀・二種一荷進上仕来申候、

○木脇八郎右衛門

右先祖伊東肥後祐昌事御用人御役相勤、地頭職被仰付、其子伊東次郎右衛門事茂御用人御役相勤、地頭職被仰付、

446

男子無之候ニ付、伊東五右衛門嫡子伊東仁右衛門事聳
 養子ニ仕、御納戸奉行・吟味役等之御役相勤申候、然
 處ニ養子致違變、仁右衛門子伊東次郎右衛門江先次郎
 右衛門より家督相讓、左候而、右次郎右衛門代木脇名
 字ニ相改、御馬廻ニ而江戸詰仕候、其子當八郎右衛門
 事御馬廻ニ而江戸詰仕、當分無役ニ而罷在候、尤代々
 小番相勤、御太刀・二種一荷進上仕來申候、

右家筋并勤方等相糺可申出旨被仰渡、如此御座候、
 以上、

延享五年辰八月十七日 日 吉 安 町 川 吉調之、

○入田助左衛門事身上致逼迫、此節以書附段々御訴申出
 趣有之候、依之助左衛門家筋并御切米被下置候由緒相
 糺可申出旨被仰渡、左之通御座候、

入田氏嫡家者高岡衆中入田七郎右衛門ニ而御座候、七
 郎右衛門先祖入田丹後入道宗和事大友家之一族ニ而、
 豊州之内入田城ニ居住仕候處ニ、對大友家不和ニ罷成、
 依之天正年中 御當家より大友家江被催御一戰候時節
 候故、右宗和方江御内通有之、御吟味方仕候、然處ニ

秀吉公無程御下向ニ付、宗和事一族召列御當國へ參上
 仕候、

一入田助左衛門家筋者、右宗和家之庶流入田筑後輝氏如
 心与申者ニ而、嫡家宗和江相隨御味方仕、其後宗和事
 御家ニ罷出候節、如心事茂一同ニ罷出候、左候而、宗
 和江御知行被宛行候ニ付而、右之内助左衛門先祖如心
 其外一族共ニ分地仕候、如心嫡子入田右近義氏事、庄
 内一乱之砌山田城江物見ニ被遣、於城内戦死仕候、右
 近嫡子入田^(義昌)右衛門ニ而御座候、右九右衛門代より漸
 々逼迫仕、渡世難續罷成候處ニ、肥州詫摩郡江詫摩加
 賀与申者一家之親類故、九右衛門事肥後領江參候ハ、
 右加賀方より介抱可仕由申越候故、嶋津^(久元)下野江相附御
 暇被下度由御訴申上候ニ付、御暇被下候而、九右衛門
 并忤入田^(義惠)新五郎家内召列罷越居申候處ニ、立花^(宗茂)飛驒守
 様者入田家ニ由緒御座候故、九右衛門・新五郎事如柳
 川罷越申候ハ、御介抱被成可被下由承候ニ付、柳川江
 罷越可申与存立候折節、下野より使者を以、九右衛門・
 新五郎事御暇相願候故御暇為被下儀ニハ候得共、御
 家ニ忠節為仕一筋有之候間、御扶助被成可被召置候条、

婦參可仕旨被申越候ニ付、又ニ御當國へ參上仕候、左候而、新五郎事寛永十四年 光久公御意を以江戸へ被招呼、穎娃左馬御取次を以、為堪忍分御切米式拾五石被下、御當地士ニ被仰付候、其後数年御切米被下置候得共、當助左衛門祖父入田九右衛門代式拾五石被召揚、五人飯米被仰付、其子入田諸右衛門、其子當助左衛門迄右飯米被下置候、右ニ付當座へ差出置候書附別紙式通書写、為御見合相添差上申候、

一 此節助左衛門家元祖之由緒段ニ申出候得共、是ハ大友家并嫡家入田七郎右衛門家之由緒ニ而、助左衛門家ニ相掛り申儀ニ而ハ無御座候、

一 助左衛門より申出趣者、祖父入田新五郎事島津下野殿

江相附御暇之願申上、立花飛驒守様御方江罷越居候処

ニ、島津下野殿より島津掃部殿御使ニ而婦參可仕旨被仰下候与此節書出申候得共、先年入田九右衛門書付を以申出置候内ニ、下野殿為御使同姓掃部を以被仰越候

与相見得申候、右掃部事者嫡家入田掃部氏隆与相見得申候故、相違ニ而御座候、且又新納刑部殿より被仰渡候者、御切米式拾五石被下置候内、御欠略ニ付而一節

447

拾六石可差上候、身上續兼可申候得共、以来者又如先規可被返下候間、残九石ニ而堪忍可仕候、其間身上續兼候ハ、續方之足ニ茂可罷成儀を見立可願出旨被仰渡候由、助左衛門より此節書出申候得共、右九右衛門書付之内ニ者、新納刑部殿被仰渡候者、當分高岡へ罷居候条、鹿兒嶋江被召移候、居屋敷を可被下候得共、高式百石以上之跡目可被仰付候間、式拾五石者可差上候、似合之跡目刑部見合可申上通被仰付、其内五人飯米被下置候由承候、則刑部殿へ申上候者、跡目相濟迄者式拾五石を被下度通申上候得者、跡目之御見合間茂有間敷候間、先其通ニ而罷移、可然通被仰聞候与相見得申候、右助左衛門申出候趣与者相違仕候、

右相糺候趣如此御座候、以上、

寛延元年辰八月十九日
藥日吉安町川吉調之、

(本文書ノ「〇」ハ墨書ナリ)

○覺

○幾朴千祥

右幾朴千祥曾祖父千泰德者朝鮮人ニ而候処ニ、慶長三年(義弘)惟新様朝鮮國より御歸朝之砌御當國江被召列、苗

代川居住被仰付、祖父勝官事茂引續キ苗代川致居住、
 勝官二男陽官事別立仕、於苗代川與頭・横目等相勤申
 候、右陽官子千祥ニ而御座候、(光久)寛陽院様御代被召出、
 御城下士ニ被仰付、奥御小姓并ニ被召仕、其後御書院
 御茶道之勤方被仰付、當分ハ無役ニ而苗代川江中宿仕
 居候、尤大番相勤申筈之家筋ニ而御座候、以上、

寛延元年辰八月十八日

○種子嶋伊右衛門

右伊右衛門兄種子嶋宇左衛門高祖父種子嶋出雲何御奉
(時連)
 公相勤候訳相知不申候、出雲娘南郷休八妻ニ而御座候
 処ニ、休八死後(家久)中納言様被召出御局役被仰付置、

寛陽院様御代引次御局相勤、江戸ニ茂数年相詰、首尾
 好御奉公相勤候訳を以、寛陽院御代御高三百石被成
 下候、左候而、右出雲男子早世仕候ニ付、南郷休三郎
 事御局孫ニ而候故養子被仰付、出雲跡御取立、種子嶋
(時壽)
 伊兵衛与改名仕候、是則宇左衛門曾祖父ニ而、幼少ヨ
 り 寛陽院様奥御小姓被召仕、其後御納戸奉行・吟味
 御役等相勤、地頭職被成下、於王子村犬追物被備 上

覽候節射手人数之内ニ而、公方様へ 御目見、御時
 服・御呉服等拜領被仰付候、祖父種子嶋伊兵衛事樺山
(久壽)
 權左衛門二男ニ而御座候処ニ、右伊兵衛直子無之付、
 養子被仰付候、御馬廻ニ而江戸詰仕、男子出生以後種
 子嶋家致違変候、其子種子嶋伊右衛門事宇左衛門亡父
(時真)
 ニ而御座候、是又御馬廻ニ而江戸詰仕り、其後屋久嶋
 奉行相勤申候、宇左衛門事當分京都御留守居御役相勤
 申候、本文伊右衛門事宇左衛門弟ニ而、先年別立被仰
 付、當分御持筒役人相勤申候、尤先祖代々 御城下士
 ニ而、大番相勤申筈之家筋ニ而御座候、以上、

寛延元年辰八月廿二日

○弟子丸喜兵衛

右喜兵衛高祖父弟子丸播磨初藤左衛門、其子弟子丸藤
(宗)
 左衛門兩代真幸・吉田移地頭職被仰付、数年相勤申候、
(宗茂)
 右藤左衛門嫡子右京事親地頭職之内吉田江罷居、何御
(宗信)
 奉公茂相勤不申候、右京嫡子藤左衛門事致早世、二男
(宗安)
 治兵衛ニ家督被仰付、藤左衛門与致改名、納殿御役相
 勤申候、藤左衛門事直子無之、弟藤兵衛事郡奉行御役

相勤申候、右藤兵衛事茂直子無之、當弟子丸喜兵衛事(盈隆)稻津源左衛門二男ニ而候処ニ、藤兵衛跡養子被仰付、御馬廻ニ而数度江戸詰仕候、當分無役ニ而候、代々御城下士ニ而、小番相勤候家筋ニ而御座候、以上、

辰九月六日

○池田仙左衛門(千九)

右家筋池田千左衛門事池田千右衛門二男ニ而、先頃別立被仰付候、千右衛門高祖父池田平四郎、曾祖父池田但馬兩代共ニ大番相勤申候、祖父池田士用兵衛 寛陽院様定御供相勤、親池田八左衛門事最初表御茶道相勤、其後致還俗、輕キ御奉公相勤申候、千右衛門事此間(吉貴)淨國院様御方御近習役并御役相勤、當分無役ニ而罷居(衍力)罷居申候、千左衛門事茂當分何之勤方無御座候、尤代々御城下士ニ而、大番相勤申筋申管之家筋ニ而御座候、以上、 辰七月廿一日

○覺

○家村仲藏家筋相札可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一 仲藏曾祖父家村大左衛門事御厩附御中間ニ而御座候、
 一 祖父家村次弟兵衛事茂御厩附御中間ニ而御座候、
 一 家家村次左衛門事者三原左衛門家来筋濱川佐之助与申者ニ而候処ニ、祖父次弟兵衛養子ニ罷成、引續御中間相勤居候処ニ、勤方之功を以御厩附士ニ御赦免被仰付、肝煎役相勤申候、次左衛門嫡子家村十郎右衛門事茂引續御厩肝煎役相勤、先年於江戸相果、嫡子家村次左衛門家督仕居候處ニ、是又直子無之ニ付、家村覚兵衛嫡子家村仲右衛門事右次左衛門養子ニ罷成候、
 一 次左衛門二男家村覚兵衛事當分御厩肝煎役相勤居申候、
 一 仲藏事ハ右次左衛門三男ニ而、硯細工仕、先年於江戸御腰物拭并硯御契合被仰付、御納戸支配ニ而、未別立不仕、甥家村仲右衛門家内ニ而罷在候、 右相札候趣如此御座候、以上、 寛延元年辰九月十一日

○高橋半藏(種彦)

右半藏事ハ當高橋七郎右衛門弟ニ而御座候、七郎右衛門(種直)先祖高橋七郎右衛門事ハ日州縣城主高橋(元種)右近太夫二男ニ而候処ニ、右近太夫御改易之御家ニ被召出、御高(節脱力)

右養祖父戸田平次事者願王院僧正弟ニ而候処ニ、^(盛綱)淨^(吉)、
國院様御代被召抱、代々小番之家格ニ被仰付候、最前

戸田平次

但先助大夫御用人御役、地頭職被仰付置候也、本行不相見
得候故、為後考書記置之、

右彦七事ハ當北郷助大夫嫡子ニ而御座候、助太夫家之
儀ハ島津筑後二男家北郷七郎左衛門家之二男ニ而、助
太夫親先北郷^(久弘)助太夫代初而別立、寄合并家格被仰付候、
當助太夫事御用人御役相勤、地頭職被仰付候、彦七事
ハ當分無役ニ而罷在候、

千石被下置、大崎地頭職被仰付候、其養子七郎右衛門^(種周)
事ハ新納勘解由二男ニ而、七郎右衛門養子ニ罷成、御
用人御役相勤、地頭職被仰付候、其後寄合之家筋ニ被
仰付候、此七郎右衛門養子中嶋仙次郎事故有之、高橋^(高橋種房)
家違変被仰付候、當七郎右衛門・半蔵兄弟共ニ右仙次
郎實子ニ而御座候、半蔵事ハ新御番ニ而江戸詰仕候、

○北郷彦七

物奉行御役、後町奉行・御用人御役等相勤、地頭職被
仰付候、養父戸田傳五郎事表御小姓・御目附・御使番^(盛傳)
等御役相勤、當分御用人御役相勤、地頭職被仰付候、
當平次事ハ山岡齋二男ニ而御座候処ニ、傳五郎賀養子
被仰付、淨國院様御側御小姓御役相勤、當分無役ニ
而罷在候、

○弟子丸兵橘

右兵橘事者當弟子丸與次右衛門嫡子ニ而御座候、與次^(宗)
右衛門家ハ弟子丸喜兵衛家より相別、曾祖父弟子丸市^(重)
之助物奉行・御納戸奉行・吟味役等之御役相勤、地頭
職被仰付候、祖父弟子丸與次右衛門事御納戸奉行・御
側御目附・御側御用人等之御役相勤、地頭職被仰付候、
親弟子丸三右衛門御側御小姓・中通御目附・御小納戸^(宗時)
等之御役相勤、部屋栖之内相果申候、當與次右衛門事
御側御小姓・御目附御役・甕嶋移地頭等相勤、先比物
頭ニ御役替、地頭職被仰付候、與次右衛門家代々小番
相勤、御太刀進上仕候、兵橘事當分無役ニ而罷在候、

○本田新右衛門

右新右衛門家者、本田作左衛門家之二男家本田六右衛門家之二男本田與兵衛家之二男本田出羽守家之二男二御座候、祖父本田喜兵衛御馬廻相勤、亡父本田傳兵衛御馬廻并御目附・高奉行等之御役相勤申候、代々小番相勤、新右衛門事當分新御番ニ而江戸詰仕候、

○川上安左衛門

右川上平右衛門二男ニ而候処ニ、先頃嫡子成被仰付候、(久懸)平右衛門事ハ當川上藤之丞祖父川上藤兵衛二男ニ而、先年別立申候、藤兵衛事ハ諸檢者等之御奉公相勤、平右衛門事當時御記録奉行御役相勤、地頭所被下置候処ニ、願之訳有之地頭所差上申候、且又先比安左衛門

種子嶋善兵衛

御目見之節、平右衛門最初地頭職之訳を以御太刀進上被仰付候、平右衛門代より代々小番ニ被召入置候、安左衛門事當分無役ニ而候、
寛延元年辰九
九月十三日
(衍方)

本田正右衛門

右高祖父本田源三郎、曾祖父本田治右衛門、祖父本田

少右衛門勤方相知不申候、親本田正右衛門事者町田源

左衛門附衆中竹下嘉左衛門二男ニ而候処ニ、右少右衛門養子ニ罷成、小役人之御奉公相勤、後御勘定方小頭御役相勤申候、正右衛門事御步行ニ而江戸詰仕候、大番筋ニ而中紙進上仕候、

有川七左衛門

右祖父有川七左衛門事納殿役人御役相勤、親有川平左衛門御馬廻ニ而江戸詰仕、其後納殿御役相勤申候、當七左衛門事御步行ニ而江戸詰仕候、大番筋ニ而中紙進上仕候、

右家者、種子嶋家之庶流川東氏之娘種子嶋家家中ニ罷居候処ニ、種子嶋(時亮)左近息女(義久)龍伯様御夫人ニ而御嫁入之節、御局役ニ而御供仕致勤勞候故、御高三百石拜領被仰付、最上長門末子養子ニ仕、局父種子嶋家臣川東太郎左衛門二男家ニ別立、川東善左衛門(時忠)与申、後ニ北條善左衛門与改、地頭職被仰付、其養子北條善左衛門(時常)

右祖父國分仲左衛門事勤方相知不申候、亡父國分平太夫事喜入休右衛門二男ニ而、右仲左衛門養子ニ罷成、御馬廻ニ而江戸詰仕候、藤之丞事御歩行ニ而江戸詰仕候、代々小番ニ而御太刀進上仕候、

肥後與右衛門

右祖父案原七之丞事ハ伊作衆中ニ而候処ニ、寛陽院様御代被召出、御側御小姓相勤申候、亡父篠原伊右衛門事新納次郎兵衛二男ニ而候処ニ、右七之丞養子ニ罷成、新御番ニ而江戸詰仕、當伊右衛門事茂新御番ニ而江戸詰仕候、大番筋ニ而中紙進上仕候、

國分藤之丞

門物頭御役相勤、其子善五左衛門横目役相勤、其子善左衛門代改北條種子嶋氏(時豊)ニ罷成、諸檢者等之輕キ御奉公相勤、其子當善兵衛事御歩行ニ而江戸詰仕、代々小番ニ而御太刀進上仕候、

案原伊右衛門

右高祖父・曾祖父・祖父勤方別帳ニ記置候故略之、親肥後與左衛門事御馬廻ニ而江戸詰仕、當分御守殿御鎖口添番相勤申候、與右衛門事御歩行ニ而江戸詰仕候、代々小番ニ而御太刀進上仕候、

右寛延元年辰九月廿三日調之内書拔之置也、

田中藤次兵衛

右曾祖父田中五右衛門事、去ル寛永十四年十一月、肥前國有馬江御人数被差越候節、五右衛門事右人数之内ニ而罷越、落城之節城乗仕り致敵合候由、諸書附ニ相見得申候、其節幾人之賦ニ而罷越候訳、且又其後何御奉公相勤候儀相見得不申候、祖父田中藤次兵衛事ハ御右筆御役相勤候、養父田中五右衛門事御記録奉行御役相勤、元禄十四年、於江戸林大学頭様江御家譜并頼朝公御筆之御教書臨本被差出候節、右御家譜并御教書之句解從(綱貫)大玄院様御直ニ被仰付相調、大学頭様江被差出候処ニ、御受取被成、御家譜之序・御教書之跋大學頭様御自筆ニ御調 此御方様へ被遣、右御家譜并句

解聖堂江御奉納有之候、右功を以 大玄院様御前江野
 村太左衛門奏者ニ而五右衛門被召出、御直之御意有之
 御目錄拜領、且又十人御賦重被仰付候、右為御礼五右
 衛門より二種壹荷進上仕候、右故を以、五右衛門家督
 之御礼申上候節 淨國院様御代弓進上ニ被仰付、弓進
 上之家筋ニ罷成候、五右衛門代十人賦被仰付候ニ付、
 淨國院様御代ニ一代小番ニ被召入置候、尤當藤次兵衛
 ニ至り、大番家筋ニ而御座候、以上、

寛延元年辰閏十月廿八日調之、吉町川 吉調之、

仁禮玄東

右家筋調被仰渡候、仁礼玄東事者當仁礼万兵衛弟ニ而
 先年初而別立申候、万兵衛高祖父木佐貫万兵衛何そ之
 勤方相知不申候、曾祖父別府半右衛門代始木佐貫家号
 名乗申候得共、後別府家号ニ罷成、金山藏役等相勤為
 申由ニ御座候、祖父別府半左衛門横目役相勤、親仁礼
 半右衛門新御番ニ而江戸詰等相勤申候、當仁礼仲右衛
 門庶流ニ而御座候ニ付、半右衛門代仁礼家号ニ相改申
 候、其子當万兵衛ニ而御座候、玄東事右半右衛門二男

ニ而御座候、當時 隅州様御方御側御醫師相勤居申候、
 尤代々 御城下士ニ而、大番相勤申家筋ニ而御座候、
 以上、

自分覚、右万兵衛事横目役相勤、當分無役ニ而、
 大番相勤居候事、

寛延元年辰十一月十五日調之、葉吉町川 吉調之、

高木次郎太

右本文調被仰渡候、高木次郎太祖父高木清兵衛事者當
 高木諸右衛門祖父高木九郎右衛門二男ニ而、初而別立
 申候、清兵衛勤方相知不申候、親高木善右衛門小役人
 相勤申候、當次郎太事茂小役人相勤申候、尤代々 御
 城下士ニ而、大番相勤申家筋ニ而御座候、以上、右
 同断

自分覚、高木諸右衛門親高木孫右衛門、祖父高木九
 郎右衛門代官役相勤、曾祖父高木孫左衛門客屋預り
 役相勤申候、高祖父轟木氏由緒不詳候、

市来平左衛門

右市来平左衛門親市来十郎右衛門家ハ市来早左衛門家
 之二男ニ而、十郎右衛門曾祖父市来五兵衛物奉行・高
 奉行等相勤、祖父市来七左衛門御馬廻ニ而江戸詰仕、
 山奉行・金山奉行・物奉行等相勤、親市来仙左衛門御
 馬廻ニ而江戸詰仕、郡奉行御役相勤申候、十郎右衛門
 事御馬廻ニ而江戸詰仕、納殿御役相勤、當分何ぞ勤方
 無御座候、代々、御城下士ニ而、代々小番相勤候家筋
 ニ而御座候、平左衛門事右十郎右衛門二男ニ而別立、
 當分何ぞ勤方無之、大御番相勤咎候家筋ニ而御座候、
 以上、寛延元年辰十二月四日調、

松下助五郎

右助五郎高祖父松下源四郎事 惟新様栗野 御在城之
(義弘)
 時分御奉公仕、御子久四郎忠清御卒去之時分殉死仕候、
 曾祖父松下吉兵衛、祖父松下與右衛門勤方相知不申
(行方)
 候、亡父松下源右衛門事諸檢者等之御奉公相勤申候、
 助五郎事小役人之勤方、當分ハ無役ニ而候、代々、御
 城下士ニ而、大番相勤候家筋ニ而御座候、以上、

辰十二月七日

近藤牧右衛門

右牧右衛門事ハ近藤七郎左衛門弟ニ而、先頃別立被仰
 付候、七郎左衛門祖父近藤三左衛門事阿州浪人之由候
 処ニ、蒙 御免大坂御屋敷居付士平嶋吉左衛門聳養子
 罷成、平嶋三左衛門与申候、其後平嶋家致違変、右代
 直被召出、大坂御屋敷廻相勤、主従之御賦被成下、其
 子近藤三左衛門事茂親同前御屋敷廻相勤、主従之御賦
 被下置候、其子近藤七郎左衛門代當御地へ引越、御
 城下士被仰付、牧右衛門事茂同前ニ 御城下士ニ被仰
 付、淨國院様御側御小姓相勤、六人賦被仰付、一代
(吉貴)
 新番ニ被召入置候、當時者表御小性格ニ而鳴津三次郎
(忠卿)
 殿方へ被召付置候、筋目ニ付而ハ大番相勤申咎ニ而御
 座候、以上、寛延元年辰十二月廿日 藥日吉
 町 川調之、

〇覚

〇兵庫様御家督御相續被 仰出候ハ、御家御代々御
(久門、後重年)
 讓物早速可被讓進候哉、又者以後 御下國之節可被讓
 進候哉吟味仕、御書附草案・御讓物増減之訳相札可申
 出旨被仰渡、左之通御座候、

一寶永元年申九月十九日 大玄院様御逝去、同年十月廿

九日 淨國院様御家督御相續被遊候、大玄院様御家

督内御逝去ニ而候故、淨國院様江御讓物御次渡之御

書付并御目錄無之候、依之 淨國院様御家督初而御下

國、寶永三年亥三月廿二日、於 御本丸御讓物繪圖之

通 御對面所江被備置、被遊 御覽候、

一享保六年丑六月九日 淨國院様御隱居、隅州様御家

督被 仰出候ニ付、同年同月十五日、御家老比志嶋隼

人殿御使者を以 御家御代々之御讓物御書付を以被讓

進、右品々者御國元ニ而可被遊 御覽旨被仰進候事、

一延享三年寅十一月廿一日 隅州様御隱居、慈徳院様

御家督被 仰出候ニ付、同十二月十一日、御家老頼娃

内膳殿御使者を以 御家御代々之御讓物御書付を以被

讓進、右品々ハ於御國元可被遊 御覽旨被仰進候事、

右之通ニ御座候、淨國院様御家督之節ハ御讓物御

次渡之御書付并御目錄無御座候、其節者 大玄院様

御家督内御逝去ニ而、御書付等被進候御方不被成御

座候故、右通ニ而相濟申候、此節之儀 御隱居様ニ

而者御座候得共、隅州様被成御座御事ニ御座候得

者、御讓物之御書付并御目錄可被進事ニ乍憚奉存候、

尤 隅州様 慈徳院様御両代共ニ、御家督被 仰出

候節早速御讓物御書付を以為被進事ニ御座候間、此

節之儀茂、御相續被 仰出候ハ、先規之通早速於

江戸 隅州様より御家老衆御使者を以、御代々之御

讓物御書付并御目錄を以被讓進、右品之儀ハ於御國

元可被成 御覽旨可被仰進儀与吟味仕候、且又此節

被進候御書付草案并御目錄、被召加候品々相改書加

へ差上申候、以上、寛延二年巳十月

平左

○草案

○貴殿事、故薩摩守殿遺跡相續首尾能被 仰出、別而悅

入候、因茲先祖代々相傳之家珍別録之表令讓與之間、

堅固被致所持、至于子孫萬々歳可被讓渡之状如件、

年号月日 前大隅守繼豐御判

御名

471

○覚

○肱岡三輪八

○本文肱岡三輪八家筋相札可申出旨被仰渡候、三輪八事

470の2

者當肱岡条右衛門亡父肱岡条右衛門弟ニ而、其身分別立被仰付候、當条右衛門高祖父肱岡市右衛門事出水聚中ニ而御座候処、御城下士ニ階堂源右衛門養子被仰付置候処ニ、右源右衛門實子致出生候故、市右衛門事養子致違變、直名字ニ而御城下士ニ被召出、市右衛門事何御奉公茂相勤不申候、曾祖父肱岡仲太夫事横目役相勤申候、祖父肱岡惣左衛門是又横目役相勤申候、親肱岡条右衛門中通御目附相勤申候、三輪八事御側御小姓相勤居候処ニ、御役御免被仰付、其以後江戸御留守居附被仰付置候処ニ、先年於江戸相果申候、尤大番家筋ニ而、何ぞ為差立由緒相見得不申候、三輪八家筋相糺候趣如此御座候、以上、寛延三巳十一月十一日 七左

○覺

○阿久三五郎(根脱力)

○東郷衆中阿久根源兵衛弟阿久根三五郎事、数年馬醫役相勤候一筋を以御城下士養子ニ被仰付被下度候、當時無高衆中外城より養子ニ罷成候儀御免無之由候、三五郎事無高ニ而御座候得共、養子被仰付候ハ、往々御奉公仕度旨願申出趣有之、調被仰渡、左之通ニ御座候、

一元文二年巳五月、先嶋津主殿殿御書付を以、外城より(久世)鹿兒嶋土養子罷成候者、向後之儀外城ニ而持高致所持直ニ其高持越候者迄を御免被仰付候、無高ニ而茂無據血筋又者為差立諷有之、依願之趣者被仰付儀茂可有之旨被仰渡置候、

一三五郎家筋御記録所江不相知候ニ付、兄阿久根源兵衛方へ問届申候処ニ、曾祖父阿久根安右衛門事入来院家之家来ニ而御座候処ニ、島津左衛門家来ニ罷成、東郷一所之地ニ拜領之節、東郷江罷在奉公仕、其子安右衛門迄家来ニ而候処ニ、島津丹波代延寶年間東郷一所被差上、東郷へ罷居候家来共皆々衆中被召成候節、右安右衛門事茂東郷衆中ニ罷成候、其子阿久根弥七東郷衆中ニ而、一節御雇足輕相勤候、其嫡子當阿久根源兵衛ニ而候、源兵衛事衆并之御奉公相勤罷居候、三五郎事右弥七二男ニ而、幼少より御當地へ中宿仕、馬醫稽古仕候処ニ、享保八年卯四月、馬醫被仰付、同十年巳十二月、定役被仰付、當年迄以上廿七ヶ年相勤居、悴阿久根三七事茂當分自分ニ馬醫稽古仕候由承届申候、一當岩城源太兵衛亡父岩城源太兵衛事大口衆中ニ而、馬

醫為稽古多年自分物入を以御厩罷出御用ニ相立、其後馬醫役被仰付、猶以功積御用相違候ニ付、享保三年戊九月、於江戸鹿見嶋士被仰付候、

一當前田助三事谷山衆中ニ而御座候処ニ、馬醫役被仰付置、所高致所持候ニ付、所高持出 御城下士養子罷成度存念ニ而罷居候、助三事馬醫役ニ而廿九ヶ年首尾好相勤、其功茂有之、專御用ニ相立者ニ御座候間、右之御取分を以、何とそ品能筋ニ被仰付被下度旨御馬方より申出候処ニ、延享三年寅十月、代々 御城下士被仰付候、

右之通御座候、去ル巳年御格式被相究候以後、外城衆中所高不持出 御城下士養子被仰付候者無御座候、然共三五郎事右通廿七ヶ年馬醫役相勤、其功茂有之、專御用ニ茂相立者之由ニ御座候、悴三七事茂折角精を出シ馬醫稽古仕、往々御用ニ相立者之由候、右御書付之内、無高ニ而茂血筋又ハ為差立諷有之、依願之趣者被仰付儀茂可有之旨相見得申候、且又岩城源太兵衛・前田助三事数年首尾好相勤、專御用相弁候ニ付、兩人共ニ直名字ニ而 御城下士ニ被仰付候傍

例茂御座候得者、三五郎儀御取分を以、願之通 御城下士養子成御免被仰付候而茂何ぞ差支候儀者有之間敷与詮儀仕候、乍然此儀御格式外之儀ニ御座候得者、私共究而難申上御座候条、御吟味次第奉存候、以上、 寛延二年巳六月十七日 左七

473の1

○覽

○山川宗廟熊野權現祭礼之節、同所衆中野間口彦之進家先祖代々 御代參相勤來候由申出候ニ付、 御代參ニ而候哉、又ハ司參ニ而候哉、相調可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一山川宗廟熊野權現何年間建立有之候儀相知不申候、慶長十六年 家久公御代御再興有之、其後萬治元年・延寶二年ニ茂御再興有之、棟札之面琉球國御征代依御宿願御再興与相見得申候、
一野間口彦之進先祖野間口藏之助与申者山川御假屋守被仰付置候、右藏之助代より、宗廟權現祭礼之節 御名代參相勤候由、田中五右衛門書調候系圖ニ書記、又ハ別當寶積坊書付之内、正月朔日・同七日・九月九日者

御公義御祭之故 御代社參、八月十五日者地頭御祭之

故地頭代社參、五月五日者所祭之故、司ニ而神事相勤

候由相見得申候、然共屹与 御代參被仰付候趣之古書

等無御座候、尤五右衛門儀茂自家申傳又者右寶積坊書

付を以 御代參相勤候与書記為申与相考申候、右寶積

坊書付茂野津安右衛門地頭之節之書付ニ而、近代之事

二候、

右之通御座候、 家久公御代慶長十四年、琉球為御

征伐山川江被遊 御光越、彼地より人数被差越候、

右之節為御宿願右權現御再興有之候節、藏之助事御

假屋守相勤、御心安被召仕者ニ而候故、 御代參為

被仰付儀茂可有之事ニ候、夫より引續司參仕候故、

只今迄 御代參與覚へ罷居、御祭礼之度毎ニ 御代

參相勤候由、自家申傳候半与相考申候、尤當分之

御代參與者格別之違ニ而候、彦之進家ニ申傳候 御

代參與申候者、諸外城 宗廟祭禮之節司參有之候、

右司參之儀与相見得申候、相札候趣如此御座候、以

上、

寛延二年己六月廿八日 左七

473の2

寫

山川衆中 野間口彦進(与脱カ)

右者山川熊野權現祭禮之節、右彦之進家先祖代々、御

代參勤来候由申出候得共、慥成由緒不相知候、彦之進

家系圖ニ 御名代參與田中五右衛門書記候得共、屹(与脱カ)

御代參被仰付候古書付等茂無之、自家申傳又者別當寶

積坊書付之内ニ 御代社參與有之所より 御代參與書

記候筋ニ相見得候、尤寶積坊書付茂近代之儀ニ而、往

古より之證書ニ而無之、本田出羽守家神社考ニ茂、祭

之司野間口家相勤候段相見得候、右次第を以ハ、司參

を 御代參與取違来候儀無別條候故、司參之儀者有之

来通申付候条、向後諸外城宗廟祭禮之節司參相勤候通

可相心得候、

右之通山川地頭江申渡、可承面々江茂可申渡候、
(鎌田政昌) 典膳

八月

○覚 ○山田一郎左衛門

右一郎左衛門事當山田元右衛門弟ニ而、其身代別立被

仰付候、元右衛門祖父山田助右衛門事者當今井市兵衛

先祖今井市兵衛二男ニ而、其身代別立、助右衛門母者

山田昌巖娘^(有榮)ニ而候故、母方之名字を名乗、新御番ニ而

江戸詰仕、亡父山田助右衛門御馬廻ニ而江戸詰仕、其

後納殿御役相勤申候、元右衛門事當分

^(繼豊)

隅州様御方御

近習御役相勤、地頭所被下置候、一郎左衛門事此跡御

側御小姓数年相勤、當分中通御目附御役相勤申候、大

番相勤申咎之家筋ニ而御座候得共、當御役ニ付一代新

番ニ被召入置候、

○伊勢九郎八

475

右曾祖父伊勢松浦事當伊勢傳右衛門先祖伊勢右京二男

ニ而、其身代別立、光久公御代焼物奉行相勤、苗代

川支配被仰付置、数十年相勤、江戸江十人賦ニ而度々

相詰申候、祖父伊勢玄愈事申良衆中ニ而、河野玄愈与

申候処ニ、右松浦養子ニ罷成、醫道仕、御雇ニ而高輪

御屋敷江相勤申候、亡父伊勢仲右衛門事表御小姓相勤、

其後御鎖口添番役数年相勤、一代新番ニ被召入置候、

九郎八事奥御小姓・御側御小姓相勤、當分中通御目附

御役相勤申候、大番家筋ニ而御座候得共、御役ニ付一

代新番ニ被召入置候、

476

○上村藤之丞

右高祖父上村壽宅事御書院方御茶道相勤候由申傳候、

曾祖父上村種右衛門江戸式日等之御使相勤申候、祖父

上村種右衛門諸檢者等之御奉公相勤、亡父上村段右衛

門奥横目役等相勤申候、藤之丞事御側御小姓相勤、當

分御目附御役相勤、大番家筋ニ而御座候得共、御役ニ

付一代新番ニ被召入置候、

○小倉仲之丞

477

右祖父小倉七右衛門事ハ當小倉良右衛門曾祖父小倉三

右衛門弟ニ而、其身代別立、筆者・小役人等之御奉公

相勤申候、亡父小倉甚右衛門事茂小役人等之御奉公相

勤申候、仲之丞事此跡御家老座筆者数年相勤、當分御

右筆御役相勤申候、大番家筋ニ而御座候得共、御役ニ

付一代新番ニ被召入置候、但其後十人賦被仰付、一

代小番ニ被召入置候、

○木村村右衛門

478

右親木村静隠^(時経)事當木村四郎左衛門曾祖父木村政右衛門

二男三而、其身代別立、繪師相勤、其後納殿御役相勤、一代新番ニ被召入置候、當村右衛門事表御小姓・御側御小姓等相勤、當分御目附御役相勤、先比十人賦被仰付、大番家筋ニ而御座候得共、一代小番ニ被召入置候、静隱親政右衛門事ハ奥大番相勤申候、

寛延三年正月十三日 七 左 平

○田代安積

右家筋調被仰渡候、安積事當田代彦右衛門弟ニ而、其身代別立被仰付候、兄彦右衛門先祖代ニ蒲生衆中ニ而御座候処ニ、高祖父田代新左衛門代御内被召放、其子番左衛門事者蒲生永興寺門前札ニ而罷居候、其子彦右衛門事外科醫師仕、町田勘解由方江拾年餘相勤罷居、其後島津筑後家来ニ罷成居候処ニ、貞享三年十月 御城下士ニ被召出、御醫師被仰付、安積与名替仕候、其子田代安徹事茂親同前筑後方江相勤罷在候処ニ、親一所ニ被召出、(綱貫)大玄院様御代御醫師被仰付、其後奥醫師相勤申候、其子當彦右衛門ニ而、當分横目相勤申候、右之通安積事其身代別立、先祖共何之差立候由緒相見

得不申候、 午二月十一日 七 新 左 平

○児玉鉄兵衛

右調被仰渡候、高祖父児玉善助事小林衆中ニ而候処、御當地へ中宿ニ而罷居申候、曾祖父児玉對馬事茂御當地江中宿仕居候、祖父児玉為兵衛事御兵具所附ニ罷成、鉄炮細工仕、其後物奉行所附ニ被仰付、御用御細工数年相勤、御切米被成下置候、親児玉八右衛門事右為兵衛弟ニ而候処ニ、為兵衛男子無之養子ニ罷成、物奉行所附ニ而鉄炮張細工仕、御切米被下置、数年首尾好相勤候訳を以、寶永七年寅八月、島津彦太夫御取次を以小林衆中ニ御赦免被仰付、五拾年餘御用御細工相勉候、當鉄兵衛事鉄炮張御用被仰付、御切米被下置、多年首尾能相勤候訳を以、延享元年子六月、一代 御城下士被仰付、當年迄四十餘ヶ年御用相勤申候、
一朝倉甚五兵衛事山之口衆中ニ而御座候処ニ、親子共ニ鉄石火矢并大筒等之細工、石火矢打様茂一通傳授仕居候付、御用ニ茂相立事候故、 御城下士ニ被仰付候由、享保五年子正月、宮之原甚太夫御取次御證文を以被仰

渡置候、

一 黒木長五郎事出水衆中ニ而候処、祖父以來及三代石火矢射付火矢等致傳授罷在候付而、亡父代より鹿兒島江多年被差置、御用相勤候、依之 御城下士ニ被仰付候旨、享保七年寅十二月、中神與五左衛門御取次御證文を以被仰渡置候、

一 永田次左衛門事水引衆中ニ而候処ニ、御細工所小細工人ニ被仰付、多年首尾能相勤、毎々御急用茂有之候処ニ万端正道ニ相勤候付、御城下士被仰付候旨、享保十九年寅正月、鎌田太郎右衛門御取次御證文を以被仰渡置候、

一 志和地治右衛門事物奉行所附ニ而候処ニ、鞆細工其外塗物御用數十ヶ年首尾能相勤候付、享保十三年申十二月、郡山衆中ニ被仰付、其後多年首尾能御用相勤、細工之功茂有之候付、代々 御城下士ニ被仰付候旨、元文二年巳六月、山田新助御取次御證文を以被仰渡置候、右之通多年首尾能御用御細工相勤、其功有之者者、

外城衆中より 御城下士ニ被仰付候先例多々有之候、本文鉄兵衛事多年御用相勤、專御用ニ相立者之由ニ

御座候得者、代々 御城下士ニ被仰付候而茂何ぞ差支申儀御座有間敷与吟味仕候、

但寛延三年午三月朔日 七 左平

481

○覚

○染川傳七

右染川傳七先祖能登与申者江 御家三代 太守久經公より惣鍛冶役被仰付候儀、於當座見合申候得共相見得不申候、然共右惣鍛冶役之儀家傳ニ申傳、且又傳七先祖染川喜兵衛御馬追之節駒ニ焼印當候儀、惣鍛冶役ニ而相勤候、其節惣鍛冶染川殿江三年ニ一度駒疋疋、自以前被下来先例之由候間、駒奉行江可被申入旨、其節之御用人仁礼右近より御馬方國分帯刀江申遣候書狀傳七家ニ所持仕候、右を以相考申候得者、傳七家自以前惣鍛冶役相勤候儀無別條相見得申候、尤差立候御家作之節鎚打御規式并年頭御旧式を以御祝物等被下候儀者、右惣鍛冶職相勤候故を以被仰付来候与相考申候、私共吟味仕候趣如此御座候、

寛延三年午三月八日 七 左平

○覺

○前後之文略之、廻向院當分者恵光与相改申候、

【○廻向院】

一「石往古 御家之御宿坊ニ而御座候ニ付、龍伯（義久）様御

石塔院中江御建立有之候処ニ、蓮金院之儀 頼朝公御

草創之寺院ニ而御座候処ニ、慶長十三年 義弘公 忠（家）

恒公御相談被遊、蓮金院之寺地并寺積三拾五石、寺家

共ニ代銀四拾貫目餘ニ御買取、結構ニ修覆被仰付候、

其儀ハ、頼朝公之御子孫故御宿坊蓮金院江御替有之

趣、蓮金院一卷之文書之内ニ相見得申候、右通候得

共「御領國中より高野山江致參詣候者共旧好を相慕、

如以前廻向院を為宿坊相附候儀退轉無之候処ニ、豊

臣秀頼卿大坂江御籠城之節、廻向院之住持大坂江御味

方申榑籠候故、其後寛永十六年より御領廻向院を宿

坊与仕候儀御禁止被成、其趣蓮金院江（手脱之）屹御書付を以

被仰渡置、且又正徳三年、同六年、享保十七年、廻向

院より 龍伯様御石塔御修覆之儀、大坂御留守居江相

付申出候得共、難被取揚諷有之、大坂御留守居より書

物為相返儀ニ候、後年又々願出候儀茂可有之候間、為

見合此趣記置候様ニ、享保十七年子八月、主計殿（榊山久初）より
當座江被仰渡置候、

右山中 理性院

右同 無量壽院

右者蓮金院御建立之節、右両院学侶之吏ニ而候故、世

話被致首尾能相調候、寶永二年 大玄院（綱貫）様御石塔御建

被遊候節、吉田右衛門次郎事奉行被仰付差越候節蓮金

院咄被致候趣ニ茂、高野山中寺院之住職替合之節ハ、

其住持より山中両門首寶性院・無量壽院江申出候得者、

檢校江沙汰之上、且那江者無構相定事候処ニ、御家

様御宿坊蓮金院之儀者、御先祖様より寺地御買取被成

候而寺被建置、其上高御寄附被成置候ニ付、餘寺ニ相

替、住持之僧被相定候儀檢校并両門首被聞届、蓮金院

者格別候間、且那江相窺後住相定可然候由挨拶有之、

此御方様御心次第被仰付事ニ候、於山中諸御大名之御

宿坊有之候得共、ケ様成例餘寺ニ絶而無之候由、蓮

金院咄ニ而候故、當座へ茂記置候様ニ、豊前殿より川

上八郎左衛門御取次を以被仰渡候ニ付、右衛門次郎よ

り直ニ咄承候間、書留置申候、然者右兩院者高野山兩門首ニ而御座候、

右之通相見得申候間、書付差出申候、以上、

寛延三年午三月廿六日 七 左 平

483

○覚

○土岐仁之助

右島津主水弟ニ而、一所持家内ニ罷在、初而 御目見之節御太刀進上仕候、

484

○小林中之丞

右親小林中(政一)太兵衛事嶋津主殿祖父島津中務三男ニ而御座候処ニ、(吉貴)淨國院様御代小林之家号拜領被仰付、別家ニ被召立、家格代々小番ニ被召入置、御太刀進上被仰付、當分寺社奉行御役被仰付置、地頭所被下置候、中之丞事右中太兵衛嫡子ニ而御座候、

485

○江田源五左衛門

右祖父江田源助、親江田源助兩代共ニ御馬廻相勤、當源五左衛門事新御番ニ而江戸詰仕、三代引續新番之勤

486

○新納藤右衛門

仕候故、代々新番ニ被召入置、弓進上仕候、

右元祖新納(忠管)孫四郎事者新納四郎家之先祖新納近江二男

ニ而、天文十年、日州山東火柱与申所ニ而戰死仕候、

六代之祖新納(忠光)四郎左衛門与申候、高祖父新納(久徳)三河代富

之隈江被召移、其後鹿兒嶋江被召移、朝鮮國江致渡海

軍勞仕候、曾祖父新納(忠村)四郎右衛門御小姓相勤、祖父新

納(久壽)五左衛門是又御小姓御役相勤、其後騎馬ニ而江戸詰

納殿御役等相勤候、養父新納(時想)四郎次郎事右五左衛門嫡

子新納(久治)四郎右衛門嫡子ニ而候処ニ、四郎右衛門致早世

候付承祖被仰付、表御小姓御役相勤申候、當藤右衛門

事四郎次郎弟ニ而、跡養子被仰付、新番ニ而江戸詰仕

候、代々小番ニ而、御太刀進上仕候、

伊勢弥市左衛門

右高祖父伊勢左近事當伊勢弥八郎先祖伊勢平左衛門二

男ニ而別立、御側御小姓御役相勤、其後御馬廻相勤申

候、曾祖父伊勢治部右衛門事日州松山衆中吉田藏之助

487

右先祖本田山城(親族)与申者 貴久公御代申口役相勤、湯尾地頭職被仰付候、養子本田助之丞与申者 惟新様御近習江相勤、朝鮮國・関ヶ原御供仕、其後御和談之儀ニ付度々致上洛、首尾能申調候、右之訳を以為御禮使被差上、於駿府 家康公江 御目見仕、段々勲功有之者ニ而御座候、夫より以來子孫共何ぞ御奉公為仕儀者無

右九代之祖伊集院美作(久忠)、天正年間日州表御退治之砌度々軍勞仕、日州清武地頭職被仰付、彼地ニ居住仕候、

○伊集院甚助

ニ而候処ニ、左近事直子無之ニ付養(子脱力)ニ仕候、治部右衛門事物奉行御役相勤申候、祖父伊勢仁右衛門、亡父伊勢平右衛門兩代共ニ無役ニ而、小番相勤候、當弥市左衛門事御步行ニ而数度江戶詰仕候、尤代々小番ニ而、御太刀進上仕来候、
但當弥市左衛門父者汾陽次郎右衛門末子ニ而養子ニ罷成候

新納十郎

○平山七郎右衛門
右祖父平山久馬事平山七兵衛家之二男ニ而別立、寛寛光陽院様御近習役相勤、地頭職被下置候、親平山作右衛門事御馬廻ニ而江戶詰仕候、七郎右衛門事御步行ニ而度々江戶詰仕候、代々小番ニ而、御太刀進上仕候、

右先祖新納悪四郎久顯事ハ新納四郎先祖新納越後實久他腹之長男ニ而御座候、其子新納越後忠泰、其子刑部忠親地頭職被仰付、其子越後孝久、其子十郎忠莚、其子越後忠誠右三代勤方相知不申候、其子越後忠包、其子孫右衛門教久右兩代地頭職被仰付候、其子越後久景勤方相知不申候、其子喜右衛門久行御用人御役、地頭職被仰付候、其子當喜右衛門御馬廻ニ而江戶詰仕、當分大口地頭代相勤申候、喜右衛門家 御直元服被仰付代々小番相勤、御太刀・二種一荷進上仕来申候、十郎事右喜右衛門嫡子ニ而御座候、

右七代之祖富山備中事、嶋津中務太輔家久佐土原在城之節、從(義)龍伯(入)樣被召付、於佐土原家老役相勤申候、

○富山弥右衛門

右祖父野間孫右衛門事納殿役人御役相勤申候、親野間孫右衛門御馬廻相勤申候、當孫兵衛事御步行二而度レ江戶詰仕候、尤親孫右衛門事大番家筋二而候得共、御馬廻相勤候故、一代小番二被召入置候、

○野間孫兵衛

其後豊後國於鶴崎戰死仕候、八代之祖伊集院吉右衛門、七代之祖伊集院主右衛門(久成)、六代之祖伊集院慶兵衛道之鳴代官二而渡海仕候節、於海上船致破損相果候、曾祖父伊集院重助事右慶兵衛親類二而養子二罷成、(光久後)陽和院(後武)樣納殿役人御役相勤申候、祖父伊集院甚助金山奉行御役相勤申候、養父伊集院重助當分納殿御役相勤居申候、當甚助事家村彦兵衛次男二而、重助養子二被仰付、御步行二而度レ江戶詰仕候、養父重助家筋代レ新御番二被召入置候、

平山源左衛門

六代之祖富山勘解由(義信)方相知不申候、高祖父富山弥右衛門於加治木、惟新(義弘)樣御側江被召仕候、御逝去以後谷山衆中二罷成候処二、伊勢古兵部与力役相勤、於江戶御城下士二被召成、其以後金山物奉行御役相勤申候、曾祖父富山九右衛門奏者番・御用人等之御役相勤、地頭職被仰付置候、祖父富山仲太夫家督不仕内相果、弟富山九右衛門家督仕候、是則弥右衛門亡父二而御座候、御馬廻相勤申候、弥右衛門事御步行二而度レ江戶詰仕候、尤代レ小番二而、御太刀進上仕候、

○伊集院七左衛門

右高祖父平山五郎右衛門納殿役人御役相勤、曾祖父平山五右衛門御馬廻相勤、祖父平山源左衛門御馬廻相勤、親平山五郎右衛門事是又御馬廻相勤申候、當源左衛門事御步行二而度レ江戶詰仕候、尤親五郎右衛門事代レ小番相勤、弓進上仕来候、

右曾祖父伊集院主水京・大坂御留守居御役相勤、祖父

右養曾祖父川崎仁左衛門御馬廻相勤、養祖父川崎伊右衛門新御番相勤申候、養父川崎仁右衛門事筆者・小役人等之御奉公相勤申候、當與三左衛門事山口佐左衛門次男ニ而、右仁右衛門養子ニ被仰付、御步行ニ而度々江戶詰仕、當分横目役相勤申候、尤代々小番ニ而、中紙進上仕候、

○讚良善藏

右善藏事先讚良善助^(眞伴)二男ニ而、別立申候、兄善助祖父讚良善助物頭御役相勤、同亡父讚良善助御用人御役相勤、地頭職被仰付候、兄善助當分物頭御役被仰付、琉球在番仕居候、善藏事御步行度々江戶詰仕、當分横目役相勤居申候、尤大番ニ而、中紙進上仕候、

右高祖父四本彦兵衛事當四本正藏先祖四本彦兵衛次男

○四本喜左衛門

伊集院多宮部屋栖之内相果候、亡父伊集院弥七御馬廻ニ而江戶詰仕、其後納殿御役相勤申候、七左衛門事御步行ニ而数度江戶詰仕候、尤代々小番ニ而、御太刀進上仕候、

○川崎與三左衛門

右養曾祖父川崎仁左衛門御馬廻相勤、養祖父川崎伊右衛門新御番相勤申候、養父川崎仁右衛門事筆者・小役人等之御奉公相勤申候、當與三左衛門事山口佐左衛門次男ニ而、右仁右衛門養子ニ被仰付、御步行ニ而度々江戶詰仕、當分横目役相勤申候、尤代々小番ニ而、中紙進上仕候、

○小田善兵衛

右曾祖父弟子丸市^(宗方)左衛門事、當弟子丸藤角先祖弟子丸藤左衛門次男ニ而別立、代官御役相勤申候、祖父弟子丸幸左衛門事大番相勤申候、親弟子丸半右衛門事土岐半助次男ニ而、右幸左衛門養子ニ罷成、當分寺社方取次役相勤居申候、當小八郎事御步行ニ而度々江戶詰仕、當分横目役相勤居申候、尤親半右衛門事大番ニ而、中紙進上仕候、

○弟子丸小八郎

二而別立、(島津綱久)泰清院様定御供相勤申候、曾祖父四本伊

右衛門事右彦兵衛弟二而養子ニ罷成、残物奉行相勤申

候、祖父四本新右衛門事山元善右衛門弟二而養(子脱)ニ罷成、

横目役相勤申候、養父四本助右衛門事小森新藏弟二而

養子ニ罷成、座横目相勤候、當喜左衛門事御步行ニ而

度々江戸詰仕、當分座横目相勤申候、尤大番家筋ニ而

御座候、

501

○平田新太郎

右六代之祖平田源太事平田靱負殿先祖平田新左衛門次

男ニ而、別立申候、何御奉公相勤申候儀相知不申候、

高祖父平田喜左衛門、曾祖父平田新助両代共ニ勤方相

知不申候、祖父平田喜兵衛小役人之御奉公相勤申候、

親平田元右衛門事當時長崎御附人御役相勤、一代小番

ニ被召入置候、當新太郎事御步行ニ而度々江戸詰仕、

當分横目役相勤居申候、

502

○本田次兵衛

右曾祖父本田太兵衛事當本田新兵衛先祖本田内膳次男

二而別立、勤方無御座候、祖父本田次兵衛事定御供役

相勤、其後納殿御役相勤申候、親本田太兵衛當分御船

奉行御役相勤居申候、當次兵衛事御步行ニ而度々江戸

詰仕、當分横目役相勤居申候、尤親太兵衛大番家筋ニ

而候得共、御役ニ付一代小番ニ被召入置、中紙進上仕

候、

503

○龜山次郎右衛門

右高祖父龜山甚七事當長太夫家之次男ニ而別立、納殿

御役相勤申候、曾祖父龜山五郎右衛門事穎娃衆中ニ而

候処ニ、甚七養子ニ罷成、御家老与力役相勤、祖父龜

山甚五左衛門事勤方無御座候、養父龜山次郎左衛門事

出水衆中ニ而候処ニ、右甚五左衛門養子ニ罷成、宗門

方横目役相勤申候、當次郎右衛門事山田三太夫次男ニ

而、右次郎左衛門養子ニ罷成候、御步行ニ而度々江戸

詰仕、當分横目役相勤申候、尤大番ニ而、中紙進上仕

候、

○伊集院平右衛門

右高祖父伊集院備後事、當伊集院伊膳先祖伊集院右衛門兵衛入道魯笑弟二而別立、龍伯(義久)様御代納殿御役相勤候、曾祖父伊集院土佐事寺山四郎左衛門三男二而、右備後養子ニ罷成、勤方相知不申候、祖父伊集院仁右衛門納殿御役相勤申候、養父伊集院仁左衛門事(後矩) 慈徳(宗信) 院様御守役・御用人格相勤、地頭職被仰付候、當平右衛門事上村茂兵衛弟二而、右仁右衛門養子ニ被仰付候、尤代々小番ニ而、御太刀進上仕候、

寛延三年、午四月廿一日
平左

覚

伊集院平右衛門事、養父伊集院仁左衛門御用人ニ而慈徳院様御守役相勤申候ニ付而者、差付新番可被仰付哉、吟味仕可申出旨被仰渡、左之(通脱之)御座候、
一 此跡小番格之者、江戸詰之節差付新番被仰付候者多々有之候處ニ、近年段々御吟味有之、一所持・一所持格・寄合等之二男又ハ地頭持之嫡子者差付新番被仰付、其外之者江者不被仰付候、乍然山田九郎左衛門事初而江

戸詰被仰付候節、元祖山田式部忠継事 御家二代忠時公御長男ニ而、格別之家筋ニ而候故、新番被仰付候、右外小番格之者差附新番被仰付候者頃日ニ者無御座候、一 當執印丹下親執印丹下事(友等) 大玄院様御代江戸詰之願申上候處ニ達 貴聞、其節者不被仰付候、重而願出候ハ、時宜次第可被仰付旨、寺社奉行江被仰渡置候、左候而淨國院様御代享保二年酉十月、右次第之詔を以江戸詰被仰付被下度旨寺社奉行所江相付願申出、新御番ニ而江戸詰被仰付候、右家之儀、乍社家上代より差立候家筋ニ而御座候、其上親丹下差附新番被仰付候詔を以、當丹下事茂去ル辰年差付新番ニ而江戸詰被仰付候与相見得申候、

一 川上十郎左衛門家代々 御家犬追物方相傳仕来、御代々様江御相傳申上、元祖十郎左衛門義久事者文明年中京都江罷登、將軍義尚公犬追物興行之節、射手ニ列シ施名譽候故、御諱之字拜領被仰付候、立久公為御褒美於高江御高五拾町被成下候、正保四年、於武州王子村犬追物被備 台覽候節、十郎左衛門先祖十郎左衛門久慶・其子佐(久重)太夫檢見・喚次等之勤仕、家光

公 家綱公江 御目見仕、拜領物被仰付、至當十郎左衛門弓馬之道相傳仕、御犬追物御預之人数ニ召加被置候、去辰辰年、十郎左衛門江戸詰願申出候節、當座江吟味被仰渡候ニ付、十郎左衛門家右通代々、御家傳之犬追物相傳仕来申候ニ付而者、右山田九郎左衛門家ニ準申事候ハ、差付新番被仰付ニ而茂可有之哉与奉存候、差付新番被仰付候儀ニ付而者、當座江御格式不被仰渡置候故、究而者難申上候条、何分ニ茂御吟味次第奉存候由調書差上候処ニ、御步行ニ而江詰被仰付候、右之通ニ御座候、新番被仰付候御格式被仰付候儀、當座へ仰渡無之候、平右衛門家筋之儀、先達而調書差上置候通、當伊集院伊膳家之二男家ニ而、先祖共何ぞ差立候勤方茂無之、養父伊集院仁左衛門事御用人格ニ而 慈徳院様御守役相勤、地頭所被下置候、此儀を以差付新番可被差付候哉、(仰カ)當座江御格式不被仰渡置候故、何分ニ茂難申上御座候条、御吟味次第奉存候、以上、 午四月廿五日 左 平

覚

○川上正右衛門

505の3

右祖父大嶋孫右衛門大坂御留守居御役相勤、養父大嶋彦左衛門無役ニ而小番相勤、當孫右衛門御步行ニ而度々江戸詰仕、代々小番相勤、御太刀進上仕候家筋ニ而御座候、

○大嶋孫右衛門

505の2

右祖父川上九右衛門横目役相勤、其後六人賦ニ而江戸詰仕候、親川上正左衛門横目役相勤候、當正右衛門事新御番ニ而度々江戸詰仕候、代々小番ニ而、中紙進上仕候、

○梅北次郎左衛門

右高祖父梅北休兵衛事何御奉公相勤候訳相知不申候、曾祖父梅北休五郎事大工仕、相應之御扶持方為申受由候、祖父梅北惣兵衛、親梅北休左衛門兩代共ニ筆者・小役人等之御奉公相勤申候、次郎左衛門事御步行ニ而度々江戸詰仕、當分横目役相勤申候、尤大番家筋ニ而中紙進上仕候、 午四月廿五日 左 平

○覺

○島津又六郎家来阿多平左衛門家出所之儀ニ付、阿多嫡家志布志衆中阿多新之丞方江相付、町田郷九郎方江申出候ニ付、何分ニ茂御調之上被仰渡被下度旨郷九郎より被申出、調被仰渡、左之通御座候、

一右平左衛門より申出候者、正保年中御支族之御改御座候節、平左衛門先祖阿多若狹忠尚与申者書出候砌、元祖之調大形有之、阿多若狹久鎮与申者より以来大略書記差出候、且又正徳三年御支族系繼被仰渡候節茂、祖父阿多平右衛門より、正保年中若狹忠尚申出候書留之趣を以書出候、其後委敷相糺候處ニ、阿多家元祖久清より四代刑部公久次男若狹忠房事平左衛門家元祖ニ而御座候由申出候、依之相糺申候処ニ、嫡家新之丞持傳候系圖ニ者忠房事實名計書記、俗名又者傳記等相見得申候事、

一嫡家志布志衆中阿多新之丞より此節申出候者、阿多平左衛門家筋之儀、私庶流ニ而出所分明相知レ不申候処、亡父新之丞代平左衛門亡父阿多武右衛門より申越趣有之、家筋別レ口之儀委敷相糺候得者、元祖久清より四

代公久之次男若狹忠房事、右平左衛門家元祖与相究申候由申出候事、

一右新之丞亡父新之丞より、去ル元文二年巳九月十七日、古系圖を口ニ立、奥書ニ、御方家筋之儀此方先祖久清より何代之別レニ而候哉、見合ニ相成候儀有之候間、相糺可申進旨、今月十日之書中相届致承知候、御方家筋元祖之儀者、此方元祖飛驒久清より四代目公久之次男若狹忠房与相究申候、五代之祖忠秋為ニ者弟ニ而候由、平左衛門亡父阿多武右衛門・叔父阿多仲兵衛宛書ニ而書付遣置申候、此壹通を以平左衛門家忠房子孫与申出候様子ニ相見得申候、右書付迄ニ而者平左衛門先祖若狹久鎮事忠房子孫与難申御座候、口ニ相立候古系圖者正敷系圖ニ而御座候、右系圖ニ茂、忠房一代ニ而系絶シ、忠房場ニ、若狹忠房事親阿多刑部子ニ而、南郷能野城ニ而致討死候趣書記申候、右相糺申候処、御譜中 御家十一代忠昌公御代文明十七年六月廿一日、伊東祐國為御退治被遊 御出馬候、其節右刑部事此方御人数之内ニ名相見得申候、南郷与申候者伊東領ニ而御座候、其節右忠房事致戦死候与相見得申候、平左衛

門先祖若狹久鎮事天正十八年相果候由系圖ニ相見得申候、右忠房文明十七年討死より天正十八年迄百六年ニ罷成候、右年數を以者、久鎮事忠房子ニ而無之儀者明白ニ相見得申候、然處ニ先新之丞より（懐カ）慎成證書無之忠房子与自分究之書付遣置、又者此節略系圖相認、忠房より直ニ久鎮ニ系掛候儀誤ニ而御座候、早竟先新之丞より出置候書付を本ニ仕、右通書記申候与相見得申候事、

一平左衛門先祖若狹久鎮より相知レ、其以前之先祖者相知レ不申候ニ付、正保年間御記録奉行平田清右衛門江被仰付、御支族系圖相調申候、右御支族系圖ニ茂、平左衛門家之儀者出所不知家ニ記置候、其以後正徳年間御支族系繼之節茂其通ニ而御座候、且又元禄八亥年、郷九郎祖父助太夫代支族改有之、不相究家者吟味有之、被究置候書付等當座江被差出置候、平左衛門家茂其節專吟味為有之筈候得共、其訳不相見得、元來出所不知家ニ候故、其通ニ而召置候与相考申候、尤正保年間御支族系圖相調候節者委敷為致吟味筈ニ御座候、然者平左衛門家之儀者如本出所不知家与相見得申候事、

506の2

右之通ニ御座候得者、此節段々申出候趣相違ニ而御座候間、平左衛門家之儀者本々之通出所不知家与可被仰渡儀与奉存候、尤右通先新之丞より自分究ニいたし候古系圖之奥書、且又此節忠房より久鎮江系掛候所、裂捨ニ可被仰付儀与奉存候、無左候得者、以後紛敷有之筈ニ御座候、私共吟味仕候趣如斯御座候、以上、
寛延三年午
六月二日 左平

○寫

○嶋津又六郎家来阿多平左衛門願出候儀付、被申出趣相糺候處、志布志衆中古阿多新之丞より又六郎家来阿多武右衛門・同仲兵衛宛書ニ而、武右衛門家筋元祖之儀者、此方元祖飛彈久清より四代目公久之二男若狹忠房与相究候、五代之祖忠秋為ニ者弟ニ而候由、書付遣置候付、平左衛門家忠房子孫之筋為申出ニ而可有之候得共、右新之丞書付迄ニ而平左衛門先祖久鎮事忠房子孫与者難究候、忠房事、文明十七年 忠昌公伊東領南郷江御出馬之節、親阿多刑部江相付御供いたし、南郷熊野城ニ而戦死之儀者明白候、然者久鎮天正十八年相果

候由系圖ニ相見得、忠房打死年間より天正十八年迄及百六年候得者、久鎮事忠房子ニ而者無之積候、古新之丞より慥成證書無之忠房子与自分ニ究之書付遣置、亦者此節略系圖相認、忠房より直ニ久鎮ニ系掛候儀誤ニ候条、平左衛門家之儀者如本出所不相知家与相心得候様被申聞置、古新之丞より古系圖之奥書并此節平左衛門より差出候系圖忠房より久鎮江系掛候所、裂捨可被申付候、

右申渡御記録奉行江茂可申聞置候、

(榊山久初)

六月

主計

○覚

○案原喜右衛門より、先祖代々年頭御肴進上仕来候、

此節 御家督ニ付、前々之通不相替進上仕度旨申出、家筋調被仰渡、左之通御座候、

喜右衛門先祖案原兵衛三郎篤通与申者、延文年間畠山治部大輔直頭日州下向之時従来、日州清武之邊ニ居住仕候、右篤通子孫案原大藏助篤次事、永録年間伊地知周防重興 御家ニ相叛候節、重興家臣大坊与申勇敢之

譽有之者鹿兒嶋近邊ニ讐を仕候ニ付、篤次并嫡子案原新左衛門篤明相共ニ待受、大坊を討捕申候、天正十五年 秀吉公九州御動座之節、龍伯様御末御不自由ニ御座候ニ付、篤次事鮮肴而三度進上仕候、龍伯様忠志を被遊 御感 御目見被仰付、篤次嫡子案原新左衛門篤明江 龍伯様より、篤明父子大坊を討捕、又者篤次より鮮肴進上仕候儀を被成御褒美、御高十五石餘篤明へ被下之、且又自今以後、御嘉例を以毎年御肴進上可仕旨被仰出候、右御高目録ニ喧嘩新左衛門与有之候、此儀者、篤明事又一郎久保公奉從鬪諍を好候付、諸人喧嘩新左衛門与唱為申由候、右篤明嫡子案原新右衛門篤典与申者 惟新様御供ニ而朝鮮國ニ渡海仕御奉公相勤、其後 中納言様江戸江之御供数度相勤申候、元和五年、諸士之高三三被召上候節、父篤明代拜領之高差上申候、篤典嫡子案原大藏篤能与申候、親代高差上候付流落仕、町人ニ罷成申候、然處ニ篤能父祖以来勤仕之段 寬陽院様被 聞召上、御目見被仰付、其後茂每度 御前江被召出候、慶安三年、伊東仁右衛門御取次ニ而、篤能事御赦免被仰付、御心安被召仕、寬陽

院様ニ茂篤能宅江被遊 御成候、右篤能嫡子案原新左衛門篤寛与申候、其養子案原喜右衛門事者河野長右衛門四男ニ而、養子ニ罷成申候、其子案原新右衛門、其子當喜右衛門ニ而御座候、尤代々御看進上仕候儀者、右新左衛門篤明代 龍伯様より被 仰出置候訳を以、子孫代々進上仕来候与相見得申候、喜右衛門家筋如斯御座候、以上、 午六月三日 平左

覚

上野納右衛門家ニ付、御領國中合藥一手ニ主取被仰付置候由緒、納右衛門祖父上野新右衛門代、先祖以来持傳候星之萬多羅与申物有之候由 寛陽院様被 聞召上、被遊 御覽候、左候而、右品進上仕ルニ而者有之間敷哉与川野道艘より承知仕候ニ付、難有奉存進上仕候處、其御星被遊 御信仰候ニ付、別而被遊 御喜悅、其以後難有 御意共御座候、新右衛門事身帯困窮仕候ニ付而ハ、何そ身上之助力ニ罷成儀を可奉願旨被 仰出候ニ付、新右衛門事脱躰醫道之相傳仕居申候故、 御領國中合藥一手主取御免被仰付可被下旨奉願候處、五代

509の1

勝左衛門御取次を以、願之通御免被仰付候、其以後新右衛門悴上野仲兵衛、當納右衛門迄新右衛門同前ニ合藥主取被仰付置候、然處ニ、先年鎌田十郎より町人名代を以磯御方江相付、合藥別ニ一手運上を以奉願候処、願之通被仰付、二手ニ相立候所より藥賣多人數ニ罷成、紛敷藥賣共有之、締方以前之通難仕、其上納右衛門方之合藥如以前相拂不申候故、近年納右衛門事別而及困窮、渡世難續罷成申候、早竟二手ニ罷成候故右通御座候間、納右衛門より訴申出候者、先年磯御方より運上を以別ニ一手被仰付置候合藥拂方迄納右衛門方江御片付被仰付被下度旨奉願候處ニ、一統ニ御片付御免被仰付候、

右之次第御記録所江委細相知不申候ニ付、納右衛門方江相尋、相糺候趣如此御座候、以上、

午七月三日 平左

○覚

○先年久・忠之文字御免外實名ニ相用候儀遠慮可仕旨被仰渡候、其節女之名迄茂為相懸儀ニ而者無之候哉、且

又於巖殿事於久殿与申候處ニ名替ニ而候、右之儀當座

江相知候哉、相糺可申出旨被仰渡候、相糺申候処ニ、

久・忠之文字女之名ニ用候儀遠慮可仕旨被仰渡候儀、

其節之書留等ニ相見得不申候、然共於御記録所ハ、女之名ニ茂用不申筋ニ心得罷在候、何方より名考申来候

而茂、右文字者相避申事ニ御座候、於巖殿名替之儀當座へ相知不申候、此段申上候、以上、

午七月廿八日 平

○覚

○鳥津小平太女子事於巖殿御孫ニ而候付、於巖殿より最

初之名ニ而候由ニ而於久与名付ケ被遣候、於巖殿名替

之節ハ 公方家江御遠慮之儀為有之由候、然者久・忠

之文字御免外ハ遠慮被仰付事ニ候、女ニ茂可致遠慮事

候哉、右女子之儀者於巖殿御孫之事候得者、遠慮ニ茂

及間敷哉、致吟味可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一久・忠文字之儀者 御家御元祖之 御實名ニ而候処ニ、

卑賤之者共御支族之端とて實名ニ相用候、別而不都合

之儀与 淨國院様御代被 思召上取有之、御一門・一

所持・一所持格・寄合・寄合并其外 御直別之御支族

嫡子迄ニ實名ニ相用候様ニ御免被仰付、末々之御庶流

者一切ニ相避候筋ニ被仰渡置候、

一右之通御格被究置候得共、其節女迄茂右両文字遠慮被仰出候儀無御座候、然共於當座者、男女ニ限不申遠慮

可仕事与兼而相心得罷在候故、何方よりニ而茂名考申来候節者、女ニ茂相避申事ニ御座候故、新ニ名相付候

儀者、私共より茂氣相付申筈ニ御座候、

右之通先年被仰渡置候得共、女迄ニ相係り候筋ニ者

無之候、尤於巖殿御名替之節茂、久・忠之両字遠慮

ニ付而之御名替ニ而者無之、小平太女子之儀者於巖

殿御孫、於久与申者於巖殿最初之御名ニ而、新ニ相

付候与者訊相替申候、小平太事一所持之家筋ニ御座

候付而者、嫡子之儀者久之字御免被仰付事ニ候、右

段々之訊を以、於久与名被相用候而茂差障申儀有御

座間敷儀与奉存候、私共吟味仕候趣如此御座候、以

上、 午八月二日 左

平

○覚

○先年從 (宗信) 慈徳院様中山王江 御意之趣又者拜領物被仰

付候ニ付御禮被申上、此節右之御返書被差越筈ニ候、

然者 慈徳院様御存生之内 御意之趣又者拜領物被仰

付候与可被相認候哉、又者 故太守様より 御意之趣

又者拜領物被仰付候与御認可被成哉、外ニ茂認様者有

之間敷哉、吟味仕可申上旨被仰渡候、依之相考申候者、

公義杯江被差出御書付ニ而候得者、 故薩摩守様又者

故中将宗信公杯与 御名可被書記事ニ候、平生御家中

ニ而者、唱・書付等ニ茂 太守様与奉称事ニ御座候、

右を以者、中山王江之御書中ニ而得ハ、 (候脱カ) 御名被相除、

故太守様 御意之趣又者拜領物被仰付候与被相認可然

哉与奉存候、乍然至後代肝要之證書ニ茂成申儀ニ御座

候者、 慈徳院様御存生之内与御認被成方儘ニ御座候

間、其通御認可被成儀ニ奉存候、右之外存寄申儀無御

座候、此段申上候、以上、 午八月十一日 左

○覚

○鳥津加賀守殿被復源姓候ニ付、庶流鳥津勘解由杯茂源

姓相用候様ニ屹与御願可被仰上候哉、亦者源姓相用候

様ニ被仰付、其首尾可被仰上候哉之旨、主鈴殿迄内ニ

御尋被仰越候ニ付、何様ニ有之可然候哉、相考可申上

旨被仰渡候、加賀守殿源姓被相用度旨先年已来御願有

之、別紙調書之通、段々之詔を以此節淡路守殿叙爵

之節より為被復源姓事ニ御座候、然者 御家之儀、

(光久) 寛陽院様寛永八年御初任之節被復源姓候故、寛永八年

以前相別レ候御庶流者藤原姓相用、寛永八年已来相別

レ候御庶流者源姓相用候様ニ被仰付置候、左様ニ御座

候得者、加賀守殿家之儀茂右ニ被準、此節より被復源

姓候間、此以後相別レ候御庶流者自源姓之筈候得共、以

前ニ相別レ候御庶流者、此内之通藤原姓相用申筈ニ御座

候、鳥津勘解由事者加賀守殿末弟ニ而、鳥津采女養子

ニ罷成候与承及申候、采女家之儀者彼御方二代右馬頭

忠興三男家ニ而御座候得者、姓之儀以前之通藤原姓相

用申筈ニ御座候間、其通可被仰遣儀与奉存候、以上、

寛延三年午八月廿三日 左 平

○覚

○大興寺江琉球船乗せ来候品物之内、此以前寄進為有

之由候、從 御家御寄進候哉、琉球國より寄進候哉、
右寄進之訳相糺可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一大興寺者將軍普光院義教公之舍弟嵯峨大覺寺門跡義昭(広カ)

僧正之菩提寺ニ而候、義昭隱謀之企致露顕、潜ニ日州

福嶋ニ被落下居事將軍家江相聞得、誅戮之儀 御家九

代太守忠國公江被仰遣、御家臣新納・樺山・北郷・本

田・肝付等福嶋江被差越、嘉吉元年三月十三日、於永

徳寺義昭生害ニ而御座候、依之右為御忠賞 忠國公江

琉球國并御劔・腹卷・御馬等御給、御家臣五人之間ニ

江茂以御感狀御太刀一腰宛拜領被仰付候、其後永正十

二年六月 十二代太守忠治公為右菩提所大興寺御建立、

寺領御寄附、目録傳失故、寺領員 數・所付相知不申候、至 貴久公 義久公御

代而茂段ニ寺領被成御寄附候目録大興寺文書之内ニ

相見得候得共、當時右田地者無御座候、乍然萬治二年

御分國田畠御引并之節、川上村之内高式拾五石九斗餘、

坂元村之内高四石七升餘相改被下候段者、名寄帳輿書

ニ相見得申候、且又此以前琉球國綾船致着岸候刻者、

品ニ寄進物有之來候處、其後右寄進物被差止、年々琉

米拾石ツ、今以被下置候、

一大興寺文書之内、左之通、

512の1

從琉球綾船參候刻、自先規貴寺へ御寄進物御座候、被
任其例、今度之綾船ニ參候物之内少ニ御寄進候、目録 別紙

有之、慥被成御請取可有御祈念候、恐々謹言、

慶長十四年五月廿六日

比志嶋紀伊守 國貞判

嶋津圖書入道

紹益 (忠長)

大興寺玉床下

512の2

琉球綾船ニ參候内御寄進物之目録

一花瓶 一箇 一香炉 一箇

一盆 一束 一沙糖壺 三箇

一上布 三十端

以上、

慶長十四年五月廿六日

比志嶋紀伊守 國貞判
嶋津圖書入道 紹益

大興寺

右之外、綾船上着之砌、從(義久)龍伯樣為御祈願法華經三十部御寄進、從(家久)中納言樣法華經四十三部、又者琉球渡海乘船無事為往返法華經三十一部、又者過分之金銀琉球江被差下候砌、為御祈願鳥目千疋御寄進被成候由、文書之内ニ相見得申候、

右通ニ御座候、此以前大興寺江琉球船乘七來候品、從御家御寄附為有之之儀ニ御座候、自琉球國寄進之筋ニ而者無御座候、相糺候趣如此御座候、以上、
午九月十一日
平左

○覺

○太守樣御家督御相續之儀者御先代与者相替為申儀ニ候、(重年)御領國中江被仰渡候御袖判御書付之發端ニ其詔不相見得候、御先代樣之御袖判御書付見合、何分ニ茂吟味仕可申出旨被仰渡、左之通ニ御座候、

一總州樣(吉貴)大玄院樣御繼目御相續御袖判御書付發端ニ、去秋大玄院樣御卒去、無遣方仕合ニ而、未齋も不終内繼目無相違被 仰出候与被書記、(繼忠)隅州樣御家督之節者、今度總州樣依御願御隱居、我等江家督無相違

被 仰出候与被書記、(宗信)慈德院樣御家督之節者、今度隅州樣依御願御隱居、我等江家督無相違被 仰出候与被書記候、

一太守樣御袖判何之詔不被書記、今度我等江家督無相違被 仰出候与被書記候、

右之通 總州樣 隅州樣 慈德院樣御袖判皆以其詔為被書記事ニ御座候、太守樣御事ハ右御三代ニ者相替御家督御相續ニ而御座候得者、弥以其詔可被書記儀与奉存候、右御袖判之儀者後代迄茂相殘儀ニ候へハ、可被入御念儀与是又奉存候、弥被書改儀ニ茂御座候ハ、右御袖判之發端ニ、今度 慈德院樣御卒去、御願被仰上置候通養子被仰付、我等江家督無相違被 仰出候与被書改候而者如何可有御座候哉与私共乍憚吟味仕候、何分ニも御吟味次第可有御座儀与奉存候、以上、寬延三年午九月十二日
平左

○慈德院樣御逝去一卷帳之内拔書

○覺

御代継之御祭文御葬送之夜被差上候儀、古来より之御

旧式ニ御座候、御嫡子御座候時者御嫡子より被差上事

候得共、此節之儀者御定被成候御嫡子茂無之、嶋津兵

庫殿門、後重年御家督御相續御願被仰上候、然共 公義より何分

与 仰出無之内者、御家督御相續之御嫡子同前ニ者御

祭文難被差上候、左候得者、御葬送前以御祭文無之候

而者御旧式茂相欠候ニ付、 御亡者様ニ茂御不足可被

思召哉与乍憚奉存候、然者此節之儀福昌寺被申出候通、

御連枝中より之御祭文ニ而、文章之内不肖之弟等与書

記、御代継御祭文之代ニ被差上可然儀与私共吟味仕候、

以上、 巳七月十日 七左平

○覚

○御代継御祭文被差上、御代之御太刀御持セ被成候儀ニ

付、嶋津兵庫殿御事御家督御相續之仰出無之候故、御

代継之御祭文者御連枝中より之御祭文ニ而、文章之内

不肖之弟等与書記、御継御祭文之代ニ可被差上事ニ候、

御代之御太刀之儀者、此節御名代与申筋ニ而者無之歎

与相考、御代之御太刀無之候而ハ 御家御代々様御葬

送之旧式相欠申候故、御代之御太刀茂御持セ可被成儀

与吟味書差上候処ニ、御祭文者御連枝中より被差上、

御代之御太刀御持セ被成候而者不相并様相見得申候、

此節者御名代之筋ニ而候哉、御名代与申ニ而者無之候

哉、又々得与吟味仕可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一兵庫殿御事 慈徳院様御存生之節御假養子被仰上置、

御家督御相續御願茂御存生之内為被究置儀ニ御座候、

右通御存生之内被究置候時者、於御家中者 御家御家

督御相續無御別條儀与皆共ニ奉存筈ニ而、いまた 公

義御免無之迄ニ御座候、

一御代継之御祭文・御代之御太刀之儀 御代々様御葬送

之旧式ニ而御座候、相欠申候而者、此節 慈徳院様御

葬送御不足可被思召上哉与乍憚奉存候、

一御貴大玄院様御葬送之節者 淨國院様御家督ニ而江戸へ被

成御座候故、御名代先嶋津玄蕃殿へ被仰付、御名代之

事ニ候故、御代之御太刀持者相欠申候、此節之儀者御

主無之候得者、御名代与申ニ而者無御座候、

右之通ニ御座候、兵庫殿御事 公義御免無之内者

公義向之儀者御遠慮可有之事候得共、御葬送一巻之

儀 公義向江相掛儀ニ而者無之、 御家御旧式之事
 ニ御座候、御旧式相欠申候而者如何事ニ奉存候、兵
 庫殿御事 慈徳院様御存生之内 御家御相續与被究
 置、於御家中茂其通奉存候得者、御名代与申ニ而者
 無之候間、御代継之御祭文兵庫殿より被差上、御代
 之御太刀茂御持セ被成候而茂何ぞ差障儀ハ御座有之
 間敷儀与乍推参吟味仕候、此上何れ之筋ニ茂御吟味
 次第奉存候、以上、 巳七月十二日
 平左七

○覚

○大玄院様御遺躰様御葬送之節者 浄國院様御家督ニ而
 江戸江被成御座、為御名代 御位牌先嶋津玄蕃殿被為
 奉守候ニ付、御名代ニ而候故、御代之御太刀持者相欠
 申候而相見得申候、此節者御家督御相續之御方茂無之、
 嶋津兵庫殿 太守様御存生之内御假養子被仰上置、御
 逝去為被遊儀ニ候、右御假養子之筋を以、此節御家督
 御續御願為被仰上与乍憚奉存候、然者此節御葬送之節
 者、兵庫殿 御位牌被為奉守筈与奉存候、左候得者、
 大玄院様御葬送之節、御名代 御位牌被為奉守候与者

訳茂相替、御名代与申筋ニ而者無之欵与相考申候、右
 次第御座候得者、御代之御太刀無之候而者 御家御代
 々様御葬送之旧式相欠申候、此節之儀 御家御旧式之
 通御代之御太刀茂御持セ被成候而茂何ぞ差支申儀者有
 御座間敷儀与私共吟味仕候、乍然御吟味次第奉存候、
 以上、 巳七月十一日 七 左 平

○覚

○御家御先祖様御葬送之節、家筋ニ付役者相勤候人数
 左之通御座候、

一御棺 前嶋津全殿家
(光久) 後嶋津筑後家
 但寛陽院様御葬送之節者、佐多全(久武)・嶋津權十郎被相
 勤候、(吉貴) 浄國院様御葬送之節者、嶋津全殿(久峯)江戸詰
 故名代新納四郎(久明)、嶋津筑後病氣ニ付名代北郷權八(久郷)
 被相勤候、
 一御太刀
 但寛陽院様御葬送之節、本田熊(親信)之助相勤候、
 浄國院様御葬送之節、本田次郎右衛門相勤候、
 一御葬馬 壹疋

但寛陽院様御葬送之節、左梶原平右衛門、右梶原主^(景忠)

水相勤候、^(悲)

一同 壹疋

但左梶原善左衛門、右蒲生衆中梶原清兵衛相勤候、^(景忠)

右 浄國院様御葬送之節者、御葬馬壹疋ニ而候、

左梶原善助、右蒲生衆中梶原清左衛門相勤候、^(景忠)

一御燈燼 四ツ

但寛陽院様御代者木藤平右衛門・木藤長左衛門・木^(武尊)

藤庄左衛門・木藤四郎兵衛相勤候、^(武忠) 浄國院様御^(武美)

代木藤次右衛門・木藤休五郎・木藤彦七・木藤七^(成政)^(貞)

右衛門相勤候、^(古)

一御幢 四本

但寛陽院様御代者中村堅助・中村勘右衛門・串良衆^(友將)

中中村孫兵衛・中村新助相勤候、^(兼次)

浄國院様御代者中村與太夫・中村勘右衛門・中村^(種興)

孫右衛門・中村東之坊相勤候、^(有保)

一御香爐

御香合

但寛陽院様 浄國院様御両代共ニ指宿衆中長野筑右

衛門相勤候、

一御茶碗 御茶入 御茶洗 御茶杓

但右同断、指宿衆中長野市左衛門相勤候、

一御湯碗 御湯入 御さし

但寛陽院様御代指宿衆中長野六左衛門相勤、^(祐長)

浄國院御代同所衆中長野六右衛門相勤候、^(祐卷)

一御花瓶

但寛陽院様御代財部衆中長野三郎兵衛相勤、^(祐康)

浄國院様御代同所衆中長野助七相勤候、^(祐位)

一御燭臺

但寛陽院様御代出水衆中長野仲右衛門勤、^(祐盛)^(相脱力)

浄國院様御代同所衆中長野四郎右衛門相勤候、^(祐次)

一下炬松明

右受卓

但寛陽院様御代末吉衆中長野覚右衛門相勤、^(祐相)

浄國院様御代谷山衆中長野次兵衛相勤候、^(祐次)

一御茶湯提子

但寛陽院様御代長野庄兵衛相勤、^(祐定)

浄國院様御代長野善右衛門相勤候、^(祐知)

一 御天蓋

但寛陽院様 浄國院様御両代共ニ猿渡勘左衛門家相

勤候、

一 大玄院様御遺躰様御葬送之節、

一 御棺守

佐多家・北郷家 式人

一 御太刀持

本田家 忝人

一 御天蓋持

猿渡家 忝人

一 御香爐持より下炬松明持迄

長野家 七人

一 御幢持

中村家 四人

一 御燈籠持

木藤家 四人

一 御葬馬式正口附

梶原家 四人

右者 寛陽院様 浄國院様御葬送之節、役者名書右

之通ニ御座候、右子孫當分何某与申候哉、當座ニハ

難相糺御座候、與所又者其所地頭ニ被仰渡候ハ、相

知可申候、 大玄院様御代相勤候名書一卷帳ニ不相

見得、右之通頭書迄ニ而御座候、

右、御用ニ付帳面見合書記差出申候、以上、

巳七月十六日 平左

514の5

○覚

○大玄院様御葬禮御中陰方日帳抜書

宮内源内事御鷹を箱ニ入、自分葬衣并右鷹入候箱ニ茂

葬衣着七、緒を付候而首ニ掛、修行門与菩提門との角

垣内ニ立候而罷居、闔屋江 御棺御直り候節者か、ミ

居、御引導相濟迄ハ罷居候而、何れ茂退出之節垣外ニ

罷出、 寛陽院様御灰塚之前之邊ニ而放候事、

右之通相見得申候、此外 御先祖様御葬送之節、御

鷹御居させ被成候儀相知不申候、然共 大玄院様御

事御家督内御逝去被遊、御鷹御居させ被成候、此節

之儀茂御家督内御逝去為被遊御事ニ御座候得者、

大玄院様御葬送之通、此節茂御鷹御居させ可被成哉

与奉存候、以上、 巳七月十七日 左 平

514の6

○御門牌草書

慈徳院殿故從四位上左近衛中将薩隅日三國主兼領琉球

國源公俊嚴良英大居士

514の7

○高野山御石塔之銘

○覚

(本文書ハ「旧記雜録追録五」七七七号文書ノ抄ナルベシ)

位下左近衛少将源朝臣重年建

※2

鳴津周防殿
鳴津兵庫殿
鳴津玄蕃殿
鳴津大学
鳴津圖書殿

○御石燈籠之銘

奉寄進石燈籠両基

紀州高野山

慈徳院殿 尊前

寛延三年庚午(貞六)月日

(吉貴女・島津久定室)
於徳様
(繼豊調室・宗信生母)
於嘉久様

(吉貴女・伊勢貞矩室)
於民殿
(繼豊女・樺山久倫室)

於貞殿
(繼豊女・肝付兼伯室)

於鐘殿
(繼豊女・島津久隆室)

於鉄殿

丸 慈徳院殿俊巖良英大居士

襲家兄之封為追薦從四位下左

近衛少将源朝臣重年建立焉

寛延二年己巳七月十日卒於薩府

(本文書ハ「旧記雜録追録五」七七七号文書ノ抄ナルベシ)

享保十三年戊申六月十三日産於江府

故大中大夫羽林中郎将薩隅日三

國主兼領琉球國源公宗信靈塔

○^{※1}姫君様
(繼豊女・黒田重政室)

菊姫様

近衛右府様
(内前)

阿部伊豫守様
(正五)

松平越中守様
(定賢)

平松三位様
(時行)

交野李頭様
(時丞)

石井少納言様

嶋津左殿

入来院主馬殿

小松安之助殿

嶋津權五郎

於銀

末川織衛

於袈裟

末川文九郎

末川七之進

於くん

於長

末川彦十郎

嶋津仙次郎

於寧

於村

於はる

於英

右、御逝去以後御遺物被進被下候、

(綱貫後室)
信證院様

(綱貫女・松平定英室)
於栄様

嶋津大学亡父

於巖殿

嶋津周防殿

嶋津備中殿

嶋津仁十郎殿

阿部伊勢守様

右之 輿方様
松平越中守様御方ニ而

慈照院様

松平隱岐守様

水野壺岐守様

柳生飛彈守様

嶋津加賀守様
松平大膳太夫様御方

長壽院様

平松夕可様

右、御隱居之節品物被進候付、御遺物不及候、

※1
(行間)

514の10

『 本文 浄國院様御隱居又ハ御逝去以後御遺物被進被下候御
人數書ニ而候、今度 慈徳院様御逝去ニ付御遺物被進被下

候儀、本文之通ニ茂可有之候哉、又ハ相替儀^茂可有之候哉、吟味仕可申上旨被仰渡候、

一 本文御書付ニ而ハ、重立候御方之様并御子・御孫・御兄弟・御智迄ニ御遺物被進被下候与相見得申候、

一 京・江戸御由緒有之御方之様是又御遺物被進候与相見得申候、

一 故嶋津兵庫殿御事者 浄國院様御叔父ニ而候処ニ、御遺物被遣候名書相見得不申候、

一 嶋津監物・桂太郎兵衛・村橋左膳妻・町田郷九郎・嶋津主水等 浄國院様御甥姪ニ而候得共、是又御遺物被下候名書相見得不申候、

一 右ヶ条之通ニ御座候得者、御叔父母・御甥姪又ハ御従弟等ニ者御遺物被下候名書相見得不申候、然者此節 慈徳院様御遺物^茂、右例を以御叔父・御甥姪又ハ御従弟之人

一 数ニ者御遺物ニ及申問敷哉与私共吟味仕候、且又京・江戸御由緒之御方様ニ者 浄國院様御代之通ニ被仰付、左候而、本文御名書外 慈徳院様御為ニ無據御由緒之御方

一 様へ茂御遺物可被進儀ニ奉存候、乍然御吟味次第奉存候、以上、

巳十月廿四日 新 左 平

『 』

514の11
※2
(行間)

覚

一 慈徳院様御遺物被進被下候儀ニ付吟味書差上候処ニ、慈徳院様御為無據御由緒之御方之様御人数相糺可申上旨被^(衍力)

一 仰渡、左之通ニ茂可有御座哉与私共吟味仕候、
一 姫君様
一 隅州様

一 菊姫様

一 信證院様
一 於榮様 但御大叔母之御續ニ候得共、格別之事情間、御遺物可被進方ニも可有御座候哉、

一 於嘉久様

一 於貞殿
一 於鐘殿
一 於鉄殿

一 鳴津空殿
一 入来院石見殿

一 近衛右府様

但御代之様御由緒之訳を以、御遺物可被進儀与奉存候、

平松三位様

交野李頭様

石井少納言様

但右三人之儀者 陽和院様御為御由緒之詔有之候得共、

慈徳院様ニ者遠キ御由緒ニ罷成候、然共於京都御家

之儀ニ付而ハ諸事御頼被成儀多々有之候、右ニ付而

御遺物可被進儀与奉存候、

一 尾張中納言様

但此程迄御舅様ニ而候、右之詔ニ而御遺物被進方ニ茂

可有御座哉、右御由緒を以者 中将様御兄弟・近衛

御簾中様迄茂被進方も可有御座候哉、ケ様成儀茂存

寄候付、別紙之通 慈徳院様御為無據御由緒与申上

候、

松平修理大夫様

但右菊姫様御由緒を以、御遺物可被進儀も可有

御座候哉、

一 於喜代様

但御叔母之御續ニ候得者、表立格別之事候ニ付、御遺

物可被進与奉存候、

但御従弟之御續

但御従弟違之御續

但右同断

但右同断

但右同断

右御五人表立格別之儀ニ御座候間、御遺物可被進儀与奉存

候、

嶋津加賀守殿

右格別之事候付、御遺物可被遺儀与奉存候、

松平大膳太夫様御方

長壽院様

但御二従弟之御續

松平越中守様御方

但當越中守様御曾祖母ニ而候、

慈照院様

右御兩人 慈徳院様御代迄御音信・贈答為有之儀ニ付而者

表立格別之事候付、御遺物可被進ニ而茂可有御座候哉、

瑞仙院様御懷様 法林院様

右瑞仙院様御由緒を以者、御遺物可被進儀ニ茂可有御座候

哉、

右御同人様御舍弟 松平大膳大夫様

瑞仙院様御懷様 法林院様

右之通可被仰付哉与奉存候、乍然御付届方ニ付而ハ私共

一御叔母

於徳様

無案内ニ御座候間、御使番方江委調方可被仰付儀与奉存

一御叔父

嶋津玄蕃殿

候、此外 淨國院様御代御由緒を以被進被下候人数別幣

一御叔母

於民殿

之通ニ御座候得共、 慈徳院様御遺物ニ者及申間敷儀与

一御叔父

嶋津三次郎殿

奉存候、先私共存寄候趣如此御座候、以上、

一右同

小松安之助殿

巳十月廿六日

新左平

」

一御叔母

於供殿

一御妹

樺山七郎室

一御弟

嶋津兵庫殿

一御母堂 竹姫君様

一御妹

肝付彈正室

一御父 (宗信公) 隅州様 (継豊)

一右同

嶋津市太夫室

御家臣渋谷喜左衛門女 御實母 於嘉久様

一御弟

嶋津奎殿

御家臣江田五兵衛女 曾祖母 信證院様

一右同

入来院石見殿

一御妹 菊姫様

一御甥

嶋津善次郎殿

一御叔母之續

阿部伊豫守様 御母堂

一御姪

肝付彈正娘 女子式人

一御従弟之續

阿部伊豫守様

一御従弟

末川織衛

一御叔父

嶋津備中殿

一右同

末川文九郎

一御叔母

嶋津大学室

一右同

嶋津權五郎

一御叔父

嶋津周防殿

一右同

末川七之進

一右同

嶋津圖書殿

一右同

末川彦十郎

一右同 鳴津備中殿娘 女子四人

一右同 鳴津千次郎

一右同 鳴津大学娘 女子三人

一御伯父御實母方 洪谷喜三左衛門

一御從弟御實母方 洪谷喜藤太

一右同御實母方 洪谷喜藤次

一右同御實母方 洪谷弁助

一右同御實母方 洪谷源助

一右同御實母方 女子老人

右書付差上申候、以上、
〔寛延二年〕
巳七月八日 左七平

○覚

○〔宗信公〕太守様江御續御忌掛り、左之通ニ御座候、

一御嫡子之御忌 竹姫君様

一右同断 隅州様

一御末子之御忌 於嘉久様

但太守様御事 竹姫君様御猶子ニ被仰出候、然者服

忌令之内養子之場ニ相見得候者、家督与相定ル時

ハ同し、其外之養子ハ定式之服忌可有之、實方之

父母者末子ニ可準与有之候、此儀を以、於嘉久様

御事御末子之服忌ニ御受可被成儀吟味仕候、於嘉

久様御事御嫡子定式之御服忌御受被成候ハ、洪

谷喜三左衛門事御甥之服忌受之、右子共ハ御從弟

之服忌受申筈ニ御座候、

一御曾孫之御忌 信證院

但淨國院様御逝去之節、御嫡子定式之御服忌被成御

受候、左候得者、信證院様御事御曾孫定式之御服

忌御受可被成儀与吟味仕候、

一御兄之御忌 菊姫様

一御甥之御忌 阿部伊豫守様

一御從弟之御忌

一御甥之御忌 於巖殿

一右同断 鳴津周防殿

但淨國院様御二男ニ御取立、越前家兼帯被仰付候付、

〔吉良等〕靈籠院様御逝去之節、御嫡母定式之御服忌被為受

候、左候得者、此節御甥定式之服忌可被為受与吟

味仕候、

一御甥之御忌 於徳様

一右同断

於民様

『寛延二年』巳七月九日

平左七

一右同断

嶋津三次郎

但淨國院様御三男家和泉家兼帯、諸事周防殿同前ニ

被仰付候、左候へハ、此節周防殿同前ニ御甥之服

忌可被為受儀与吟味仕候、

一右同断

於供殿

一御兄之御忌

於貞殿

一御兄半減之御忌

嶋津兵庫殿

一御兄之御忌

於鐘殿

一右同断

於鉄殿

一御兄半減之御忌

嶋津左殿

一右同断

入来院石見殿

一御伯父半減之御忌

嶋津善次郎殿

一御伯父之御忌

肝付彈正娘女子式人

一御従弟之御忌

嶋津千次郎

一右同断

嶋津大学娘女子三人

右、月番御用人戸田傳五郎申談相糺候趣如斯御座候、

此外御身近キ人御座候得共、他家養子ニ被為成御忌

掛り不申候、以上、

(本卷中ノ「〇」ハ全テ朱書ナリ)



旧史館調

以

515 一伊集院下野久治道号 子孫

一所持格伊集院伊膳

右、(義心) 貫明公御以來之御家老職にて、諸所之軍勞者不

及申、(義心) 太閤西征之前稜より 貫明公 (義弘) 松齡公(伊集院忠) 幸侃野

心之儀(棟) 御賢察被為在、諸人も其向見及ひなから追従

之人夥敷、一言申上者も無之候処、比志島(国貞) 紀伊・鎌田(政近) 出雲不顧前後被申上たるよし、無幾程 太閤人有之、

御和平も未被為調以前肝付一郡最前に拜領いたし、弥振威權、御家も次第二危く、御深慮之上極内分忠

義誠實之人数を被為拔擢、「本ノマ、一」 御用心被為入 御念

凡式拾人に誓詞被 仰付、引續き朝鮮御渡海ニ付、抱節にも蜜事被仰知、紀伊・出雲など夙夜申談し、相俱

に合心、(家久) 慈眼公之御側を不離奉守護候て、御無難

御帰朝被為 在、関ヶ原乱後に相成、幸侃悴源次郎忠

真又候陰謀を企、肥後之加藤に致内應、種々反間を以

て國分・帖佐・鹿兒島 御三殿様之御中を奉妨候節も、

國分方より者抱節只一人鹿兒島方同懐ニ而 御和睦相

成遂、能 御一味被為調、江戸 御和談も 御首尾能、

彼是忠義無餘儀被 思召上、慈眼公御臨終之 御遣

命にも、(島津忠長) 圖書入道(益方) 紹易・鎌田出雲・比志島紀伊・伊勢

兵部与此抱節五人之位牌者 御位牌之脇に可配列旨為

被 仰出置事、皆共幸侃陰謀之 御用心ニ付、拔群為

抽忠勤之故に御座候趣、兵部貞昌書留被置、紹易・出雲・兵部三人者名臣小傳にも被載置、紀伊与抱節者相

洩居、遺憾ニ御座候、

516 一伊勢雅楽貞世道号
任世

子孫

一所持格伊勢雅楽

右、松齡公御家老職にて諸所之軍勞尤多脱カ、新納忠元之

聳、伊勢貞昌・同姓貞成之親にて、天正十七年、幸侃

陰謀之、御用心ニ付、諸人幸侃江心を合せ候半やう極

内蜜誓詞為被、付脱カ仰式拾人中之一人ニ御座候、

保

517 一本田信濃氏親初名
二郎

子孫

寄合 本田主計

右、永和元年、九州探題今川了俊肥後之陣屋より就被

相招、(齡指カ)松齡公御出仕之処、少貳冬資未致參謁、探題

令旨に被為應候而、公義より被為相招、程なく出仕、

此年八月二十六日、酒席におひて探題不圖被為賊殺之、

續而、公之御出仕も被為催促、氏親等雖奉諫、於無御

出者似被為臆迎不被為、聽、御出仕被遊、至極、御

危難之形勢氏親并伊地知民部季弘等奉見受、陣門関通

り不離、御側其御座に陪從、尽忠奉衛護候之ゆへ、御
無難、御帰國被為在、自是探題方と、御不和ニ被為成
立、箕原之御合戦等も為有之由御座候、

止

518 一遠矢兵部貞勝

子孫

小番遠矢金右衛門

安政三年被召禿無跡、

右、筑後におひて戦死、二弟孫五郎貞友市来におひて

戦死、三弟左衛門政貞和泉におひて戦死、年月皆不詳、

519 一遠矢兵部成郡

子孫

右同無跡、

520 一遠矢八郎成則

子孫

右同無跡、

右、父子とも隈之城におひて戦死、年月不詳、

521 一遠矢對馬重勝

子孫

右同無跡、

右、天文十四年巳十一月二十二日、河邊におひて戦死、

522 一遠矢金兵衛良兼

子孫

右同無跡、

右、天文十四年巳九月晦日、隅州岩劔城におひて戦死、
年三十七、

523 一遠矢信濃良時

子孫

右同無跡、

右、島津忠隣為後見豊後御出陣之御供にて、天正十四
年丙戌十一月十二日、竹田駄原におひて戦死、年五十
二、

知

524 一伊地知彈正季隨

子孫

小番秩父太郎

依科家跡被召禿、

右、^(貞久)道鑑公御代被召抱、觀應二年 未九月廿八日

^(氏久)齡岳公御供にて筑前金隈之軍に罷立、至極 御危難之

節、家臣福崎主稅江 御帰國之策を申付、 御甲冑を

申請、奉冒 公之御姓名奮戦、誑敵遂戦死、年三十六、

道鑑公將軍家江御注進、翌三年卯廿九日 ^(月脱力)義詮より嫡

子彦七 ^(季匡)江御感状被成下候事者、名臣小傳に被載置御座

候、

525 一伊地知民部季弘 ^{道号 良宗}

子孫

小番秩父太郎、無跡、

右、永和元年 卯八月 齡岳公今川了俊肥後之陣屋江

御出仕被為及 御危難候時、本田氏親と俱共に尽忠節

御無難被為帰候由、詳に氏親之下江書置通御座候、

526 一伊地知縫殿重周

子孫

右同無跡、

右、^(忠治)蘭窓公より ^(勝久)大翁公迄之御家老職にて、大永三

年 未十二月五日、新納忠勝被振逆威ニ付、討手之將

として差遣され候、月野におひて戦死、年三十六、

和

527 一和田圓存

子孫

小番和田覺之丞、依科被召禿

無跡、

右、圓覺子にて、慶長五年子九月十五日、於関ヶ原に

戦死、

鎌田庄左衛門

天保八年、依科被召禿候、

右、天文年間日州櫛間におひて戦死、年三拾二欵、

曾

531 一曾木甚右衛門

子孫

曾木權之助

528 一和田秀尊坊義道

子孫

小番右同無跡、

右、慶長五年庚子九月十五日、関ヶ原におひて戦死、

也

右者、天正十二年 申三月廿四日、島原合戦之節、龍造寺山城守隆信之軍師守一軒を討取、為振名由御座候、

加

529 一川上又二郎久嗣

子孫 天保五年

小番川上宗碩

依科被召禿候、

右、日州飢肥逆谷におひて戦死、年三十七、

532 一八木民部左衛門信元

子孫

御小姓與八木八太郎

天保二年卯、欠落ニ付被召禿

無跡、

右、慶長五年庚子九月二十七日、関ヶ原御退陣之節、豊後之海上にて黒田家之番船に衝当り戦死、

530 一鎌田六郎右衛門政員 子孫

不

533 一二木民部左衛門信泰 子孫

御廣敷與力二木仲左衛門

欠落ニ付寛政九年酉被召禿無

跡、

右、薩州吉田におひて戦死、年月日不詳、

喜

534 一木村源四郎時真 子孫

小番木村五郎左衛門

依科被召禿候、

右、天文七年戊戌三月十七日、谷山紫原におひて戦死、

535 一木村源左衛門時弘 子孫

右同人、無跡、

右、地名・年月不相知戦死、

美

536 一三原遠江重秋道号昌庵 子孫

小番 三原藤四郎

右者、

梅岳公(忠良)

大中公(貴久)

貫明公(義久)

御三代之御家老御

兼役曾於郡地頭にて、諸所之軍労武略不少、天正十七

年、幸侃陰謀之 御用心に極内蜜誓詞為被 仰付忒拾

人之中に被入置、寛永十一年 慈眼公忠義之功臣五人

被為撰候中にも為被入置、餘義なく人物に御座候、

美

537 一宮原隼人 子孫

小番宮原五兵衛

安政三辰年、依科被召禿候、

右、天文七年 梅岳公島津實久与加世田間瀬川にて

御合戦、御勝利なく敵兵尾撃被為及 御危難候節、井

尻四郎左衛門祐秀・肥後掃部左衛門与三人強而 御退

去を奉諫上、御別に 御手拭巻ツ被成下、三ツに製(裂カ)

ミな頂戴いたし、返戦して俱に死す、餘者祐秀之下に

くわしく載置御座候、

538 一宮原太郎左衛門

子孫

右同無跡、

右、天文十七年戊申四月二日、飢肥業毎ヶ辻におひて
伊東勢と合戦之節戦死、年二十三、

比

539 一比志島紀伊國貞

子孫

右者、慈眼公御家老ニ而、太閤入之前方より 貫

明公 (義忠) 松齡公幸侃有野心義疾に 御賢察雖被為在候、

一同追従之威勢至極被為及 御配慮候折柄、鎌田出雲 (政近)

与振切而叛状を申上、即より極内蜜誠實忠義之士被為

選拔忒拾人誓詞為被 仰付中之一人にて、無程 慈眼

公朝鮮御出陣ニ付、紀伊・出雲 (伊集院久造)・抱節夙夜合心専ら抽

忠勤、御帰朝以来石田乱後 御危急之節も拔群正道

に守忠義、御國家御安全被為成、其功不可勝計趣

御筆にも被書載置、且ツ 御位牌脇五人之中に可配列

旨 御遺命も被為在、旁餘義なく名臣ニ候間、名臣小

傳にも可被載置之処、相もれ罷居残多奉存候、國貞子

宮内國隆も父之蔭にて御家老職被仰付置候得とも、段
々我意をふるひ、遂に其科に依被為誅殺、家跡をも禿
れ居候処、伊勢貞昌右躰忠臣之跡者被召立 御家之御
祈禱ニ可罷成趣細々被申上、為被召立由御座候、

(以下、五一五～五三九号ノ同文ニ組アリ、省略ス)

旧史官調雜抄

(表紙 一)

舊史官調雜抄

一

一 舊史官調雜抄目録

- 一 新納彌右衛門先祖勲功之調
- 一 中山王尚貞之書翰
- 一 諏訪神社神主世代之事
- 一 比志嶋と村上との關係
- 一 日州宮崎 御家御由緒之調
- 一 鎌田家政之字之事
- 一 松平康信主室之事

一 諏訪之二字之事

- 一 寶山檢校盲僧者之事
- 一 中村九郎左衛門由緒并御切米之事
- 一 柚木崎平右衛門家筋并御切米之事
- 一 山口友與養子願ニ付調
- 一 鎌田源七家筋調
- 一 紫尾山之事
- 一 瀬崎山之事
- 一 霧嶋山之事
- 一 向嶋之事
- 一 長嶋・獅子島・甌島之事
- 一 伊勢平八左衛門家筋并進上物之事
- 一 田邊屋七(七郎右衛門)左衛門家筋調
- 一 秩父小太郎元服願出ニ付調
- 一 太守様御家督御入部ニ付執印久馬御祝進上物之調
- 一 勝浦姫由緒之事
- 一 山田弥右衛門小番入再願ニ付家筋調
- 一 邊見平五左衛門家筋調
- 一 岩切戸左衛門右同

- 一 救仁郷新四郎右同
- 一 宮内勘左衛門右同
- 一 吉田藤右衛門右同
- 一 山口五郎兵衛右同
- 一 町田源六右同
- 一 平山伊兵衛 御太刀進上願ニ付吟味
- 一 比志嶋善八家筋調
- 一 山鹿越右衛門小番願出ニ付家筋調
- 一 平山八右衛門名字替願出ニ付調
- 一 町田甚五右衛門家筋調
- 一 阿多仲右衛門右同
- 一 阿多六郎左衛門右同
- 一 町田伊兵衛右同
- 一 土持權兵衛右同
- 一 相良弥五左衛門右同
- 一 馬場長軒右同
- 一 江川仙左衛門右同
- 一 汾陽藤次右衛門家筋調
- 一 岩下三左衛門右同
- 一 中西長兵衛之事
- 一 讚良權左衛門家筋調
- 一 東郷八左衛門右同
- 一 米良藤右衛門右同
- 一 萩原新助右同
- 一 横山長右衛門右同
- 一 市来十郎右衛門右同
- 一 鎌田與左衛門右同
- 一 花田六左衛門右同
- 一 中江八郎右衛門家筋調
- 一 有村伊右衛門右同
- 一 諏訪新右衛門右同
- 一 山田彌右衛門右同
- 一 木脇善助右同
- 一 山之内八郎兵衛右同
- 一 志岐藤左衛門右同
- 一 田代甚助右同
- 一 市来源右衛門右同
- 一 日高六郎兵衛右同

- 一 汾陽源右衛門右同
- 一 門司伊兵衛右同
- 一 江田源助右同
- 一 二階堂出右衛門右同
- 一 崎元才右衛門右同
- 一 有川四郎左衛門右同
- 一 肥後長左衛門右同
- 一 救仁郷善兵衛右同
- 一 川村慶智右同
- 一 神宮司新右衛門右同
- 一 堅山佐太夫右同
- 一 伊勢平藏右同
- 一 竹下八兵衛家筋調
- 一 土持鉄之助右同
- 一 本田次郎右衛門右同
- 一 鎌田源右衛門右同
- 一 大田八之進右同
- 一 伊勢六郎左衛門右同
- 一 堀四郎左衛門右同
- 一 和田五郎兵衛右同
- 一 面高連長院右同
- 一 川田甚右衛門右同
- 一 相良清之進右同
- 一 五代助十郎家筋調
- 一 本田新兵衛右同
- 一 海老原筑兵衛右同
- 一 中西文右衛門右同
- 一 平田平六右同
- 一 伊東半右衛門右同
- 一 平野佐次兵衛右同
- 一 四元平兵衛右同
- 一 指宿休左衛門右同
- 一 福島新助右同
- 一 伊東奎兵衛右同
- 一 田中吉左衛門家筋調
- 一 大野隼人右同
- 一 阿多六郎右衛門右同
- 一 市来次郎左衛門右同

- 一 米良九郎右衛門右同
- 一 相良奎之助右同
- 一 別府武左衛門右同
- 一 別府源之助右同
- 一 執印丹下右同
- 一 立石太郎右衛門右同
- 一 本田五右衛門右同
- 一 岡元千右衛門家筋調
- 一 四元仲右衛門右同
- 一 和田休左衛門右同
- 一 有馬新助右同
- 一 宮下傳左衛門右同
- 一 野村甚兵衛右同
- 一 加納壽哲右同
- 一 村田五太夫右同
- 一 伊集院八郎右同
- 一 北郷弥次郎右同
- 一 東郷藤内右同
- 一 村田太右衛門家筋調

- 一 相良權太郎^(夫)右同
- 一 羽田善左衛門右同
- 一 河野六兵衛右同
- 一 本田新右衛門右同
- 一 山田覺兵衛右同
- 一 木脇^(場)休右衛門右同
- 一 有川七左衛門右同
- 一 國分藤之丞右同
- 一 山田彌右衛門右同
- 一 長谷場源助右同
- 一 是枝八郎右衛門家筋調
- 一 松山覺兵衛右同
- 一 牧七右衛門右同
- 一 伊集院七左衛門右同
- 一 伊勢兵部家繼目御禮 御目見之調
- 一 總州様御家督ニ付御直判之御書附調
- 一 御目見之次第之事
- 一 有馬家系等之事
- 一 猿渡家調之内

- 一 讚岐坊の辞世の哥
- 一 福昌寺開山石屋和尚之事
- 一 重頼之事
- 一 赤松甚右衛門之事
- 一 執印丹下家筋之事
- 一 田原萬助焼物細工ニ付御扶持之事
- 一 田原喜藤(次)寺家筋之事
- 一 村橋左膳賦吟味之事
- 一 岸八十右衛門右同
- 一 兎玉新藏右同
- 一 川田曾右衛門家筋
- 一 荒武藏右衛門右同
- 一 横山新右衛門右同
- 一 川上安左衛門家筋調
- 一 別府平五左衛門右同
- 一 税所半兵衛右同
- 一 迫田甚助右同
- 一 長野筑右衛門系譜并調
- 一 北郷龜之助儀ニ付調

1 覚

一 御内證元服之儀ニ付吟味
 一 忠昌公御不例之節御立願之事

新納弥右衛門先祖勲功之趣相調可書出旨被仰渡候ニ
 付、左之通ニ御座候、

弥右衛門家之元祖休閑齋旅庵事新納伊勢守康久二男ニ
 而、始者時宗長住与申出家ニ而、遊行上人ニ二十七ケ年
 致隨身候ニ付、肥後八代之莊嚴寺被補住持職罷居候處
 ニ、天正十五年 龍伯(義小)様始而御上洛、八代ニ御止宿被
 遊候節、長住致 御目見候を被成御覽、長住兄新納五
 郎右衛門久饒ニ被 仰下候者、自今以後者上方之風俗
 を專ニ可被成事ニ候、長住事諸國致經歷、便口才智人
 ニ勝、御用ニ可相立候間、還俗被 仰付被召仕度旨
 御意候ニ付、久饒より段々申聞候得共、長住納得不仕
 候、因茲翌日 御發駕之節被召出、御腰物大小并道服
 拜領被仰付、其上久饒事一日 御跡ニ被召置御催促故、
 無是非致帰國還俗仕、休閑齋旅庵与致改名候、左候而

惟新様御家老職ニ被 仰付、專自他國之御用被仰付候事、

一文祿三年十月 忠恒公(家久)朝鮮御渡海之御供相勤、同十二

月、御用被仰付歸朝仕、其後又々罷渡候、自中途御用ニ付被召歸候事、

一慶長四年、自 惟新様 龍伯様江之御使被仰付、自伏

見罷下候道、於日州綾伊集院幸侃於伏見伏誅之儀ニ付

幸侃妻女より庄内江差下候使三浦太羅助与申者を見逢候而、黒田七兵衛ニ捕させ差上候事、

一慶長五年、上方兵乱起候風聞於出水承之、早速罷立、

七月廿八日、大坂ニ致着船、 惟新様江 御目見仕候

處ニ、 惟新様御意候者、石田三成催諸將 權現様江

就敵對、伏見城ニ可被遊御入守旨、川上休右衛門を以

守將鳥居彦右衛門殿・内藤弥次右衛門殿江再三被 仰

入候得共、應諾無之候間、旅庵事伏見城江參、其旨可

申達由蒙 仰、八月朔日、伏見之城門を扣、 惟新様

より彦右衛門江密事之御使被 仰付新納旅庵与申者罷

越候由、段々断を申入候得共、門番より請付不申、剩

城中為案内見分為參由ニ而追返候故、無是非罷歸候事、

一同九月十五日、関ヶ原之合戦相敗、旅庵事 惟新様御

簀本を相離、喜入撰津守・入来院又六・本田助之丞・

同勝吉・押川郷兵衛・同姓喜左衛門・五代舍人以下之

士卒三百人計 惟新様向伊勢路御退被成候趣承之、經

北近江至鞍馬、二三人ツ、上方ニ罷上候、然處ニ山口

勘兵衛殿・野瀬殿手之人数五百計ニ而喜入撰州及旅庵

之宿を相圍、旅庵本田助之丞父子同前ニ勘兵衛殿手ニ

囚ニ罷成、大坂ニ罷下奉行所ニ被召出、 惟新様自関

ヶ原御歸國之儀、又者 惟新様御事謀叛張本人之聞有

之由 御問条有之候ニ付、張本人ニ而無之段申上、伏

見城ニ可被成入守旨川上休右衛門を以再三被仰達候得

共、守將納得無之ニ付、又々旅庵を以被仰遣候得共、

城門番請付不申、無是非石田方ニ與同被成候由、其節

之様子委細申上候得者、其後本多佐渡守殿御逢被成、

直ニ被仰聞候者、旅庵申上趣内府様達 貴聞候処ニ御

疑無之候、旅庵事薩摩江罷下、 龍伯様 少将様間御

一人御上被成候而、叛逆之企御存無之由御断被仰上可

然旨可申上由被仰付候ニ付、旅庵事者上方ニ止居、本

田助之丞事悴勝吉を上方ニ止置、右之旨を承候而致下

101

國候ニ付、翌年二月 龍伯様 忠恒様より(文之相尚)正興寺并助之丞を上方ニ被召登、段々被仰遣候処ニ、同三月、佐渡守殿・勘兵衛殿より和久甚兵衛使ニ而御兩人之神文を以弥御上洛可被遊旨被 仰越候ニ付、其節正興寺・旅庵・助之丞父子茂暇を給致帰國候、左候而、同六月、旅庵事鎌田出雲守政近同前ニ 權現様真偽相窺可申由被仰付、上方ニ被召上候得者、佐渡守殿より弥以 龍伯様御父子之御間御一人無御疑御上京可被成旨、右兩人ニ被仰會、時服被下之、御返書を御渡被成候故、同十月下着仕候、依右之勲勞、慶長七年、御感状ニ而御高三百斛被宛行候、

今度和睦就調達度々上洛、感悦之至候、為其忠節知行三百斛宛行候、弥可抽奉公事可為神妙候也、謹言、

正月廿四日 (島津家久) 忠恒御判

旅庵

(本文書ハ「旧記雜録後編三」二四五・二六〇・二七一ノ文書ト同一文書ナルベシ)

其後尚々真偽御窺為可被成嶋津圖書忠長を被召上候節

201

茂、又々旅庵被差遣候、然處ニ 御兩殿様ニ 權現様より御神文を御給被成候ニ付、旅庵事御暇被下候、其時御腰物并高麗茶碗拜領被仰付、又々和久甚兵衛被差下候ニ付、致同道罷下候、依之同八月 忠恒公御上洛被遊、旅庵事御供仕、於上方致病死候、右病中 忠恒公旅庵旅宿江 御光儀被遊候事、

右旅庵軍勞如此御座候、右之外弥右衛門先祖軍勞為仕儀無之候、以上、

寶永七年寅二月十九日 市肥田 市案与相見得申候、

謹呈上一簡、今歳己丑孟春十日、

先大樹薨御訃音達陋邦、驚痛絕言語候、由是今度遣小臣大宜味親方到于薩州、就我太守少将吉貴恭述吊詞、以諸大老之取捨奏達所仰候、誠惶謹言、

寶永六年己丑六月四日 中山王 尚貞判

土屋相模守殿 小笠原佐渡守殿 秋元但馬守殿
本多伯耆守殿 大久保加賀守殿 井上河内守殿

202

▽ ㊦御札令披見候△

(徳川綱吉)

常憲院様薨御付而、琉球從中山王其地迄使簡差渡候、依之以使者被差越之、遂一覽則及 上聞、返札遣候

間、可被相達候、恐々謹言、

十月廿七日

井上河内守

正岑判

松平薩摩守殿

大久保加賀守

忠増判

本多伯耆守

正永判

秋元但馬守

喬知判

小笠原佐渡守

長重判

土屋相模守

政直判

(本文書ハ「旧記雜録追録二二二八七〇号文書ト同一文書ナルベシ」)

信書遠来仍承、特差使者大宜味親方到于薩州、吊慰國

哀、事達

上聽被嘉其厚誼候、餘悉州守少将可有傳説候、恐恐不備、

寶永六年己丑十月廿七日

井上河内守

源正岑判

大久保加賀守

藤原忠増判

本多伯耆守

藤原正永判

秋元但馬守

藤原喬知判

小笠原佐渡守

源長重判

回復 中山王館

右料紙并包紙間似合

土屋相模守

源政直判

3の1 鹿兒島諏方神社神主世代

諏方神主職 前代不詳、

宇宿對馬

佐藤將監信定

將監嫡子 同權太夫信年

元和四年迄相勤、

元和四年より寛永十八年辛巳迄廿四年、將監より權太夫迄兩代神主職相

此内逼塞、

勤、此間次渡年間不相知、

一 官職昇進之次第
 同 一 神主 一 祝子 一 同 一 社司

諏方權祝子職 前代不詳、 權祝子
 佐藤將監信定 佐藤將監信種 權祝子 將監養子
 郡元一条宮社司、元和四年より諏方神主職相勤、郡元迄兼
 役ニ相勤候、其後本名源四郎將監江一条宮附屬ニ而權祝子
 權太夫より次渡、
 正徳三年巳七月十八日 本田全頭

本田全頭

寶永二酉十二月廿九日より大和守隠居ニ而、翌年元日より
 神主職相勤候、名子之儀(字カ)ハ本田ニ而茂佐藤ニ而も心次
(光久)
 第二名字申候而可相勤候間 寛陽院様御意之由、黒葛原
 治部殿御取次ニ而被仰渡、本田ニ而相勤申候、

字宿若狭守 佐藤權太夫 權太夫聲 本名本田
 寛永十八年ニ權太夫 延寶二寅年十 佐藤大和守
 より神主職次渡、 二月再住、(任カ) 神主職次渡、寶永二酉より
 二月迄相勤、名字ハ佐藤
 ニ改相勤可申旨被仰渡、
 如斯ニ候、

- 一 權社司
- 二 權祝子
- 三 同 一 權社司
- 四 同 一 權社司
- 五 同 一 權社司
- 一 祠官
- 二 下神官
- 三 一 無官

右之通本田全頭申出置之候、

覚

比志嶋藤右衛門先祖其之内村上を名乗候者茂有之候ニ
(範履)
 付而、藤右衛門家号を村上ニ被召成候ハ、何ぞ障儀
 者有之間敷候哉、何方江茂村上之嫡家有之、其人より
 無免許候ハ、名乗候事ハ難成沢可有之候哉、且又
 比志嶋者何様之儀ニ而名乗来候哉、詮儀仕可申上由奉
 承知、其訳左ニ申上候、

一 比志嶋藤右衛門元祖満家左衛門尉重賢者、村上三郎左
 衛門尉源頼重志三郎先生義田憲之二男當國江配居之内、満家之郡司
 大蔵永平之嫡女ニ相嫁、重賢を致出生、頼重者本國如
 信州帰國候、永平男子無之ニ付而、重賢外祖父永平之
 所領讓を請、郡司一跡を相續仕、所知之満家を以重賢
 一代家号ニ仕候儀、系圖ニ相見得申候、
 一 重賢男子五人、嫡子比志嶋太郎祐範、二男西俣三郎盛
 忠、三男川田右衛門尉盛資、四男前田又四郎榮秀、五

男邊牟木又五郎采慶与申候、

一右二男以下五男迄ハ満家院中分知之在名を以銘々家号ニ仕候、嫡子祐範事茂満家之内比志嶋ニ居住仕、在名を以比志嶋与名乘来申候、右之通村上頼重之直子重賢事母方大蔵姓之讓を請、満家院郡司職家致連續候得共、實父方源姓ニ相改両家兼帶ニ而、系圖之儀者頼重一流系来申候、然者正保四年、於王子村犬追物 家光公之被備 台覽候時、右故を以藤右衛門先祖比志嶋左京事^(義時)射手之人数ニ而村上左京与名乘申候、右通ニ候得者、此節家号を村上与改申候而茂何ぞ望申事御座有間敷候、且又村上嫡家何所ニ御座候哉、私共不及承候、若有之候而茂、頼重一流之儀ニ候得者故障有之間敷候、乍然村上・比志嶋両號を相調考申候ニ、比志嶋を名乘罷居候方増ニ而候、其故ハ、村上之儀者重賢實父方之家号ニ而、只血筋迄之事ニ候、尤重賢以来犬追物手組之外村上与名乘申候文書等茂無之候、比志嶋名字之儀者傳來之所領を以為相立家号ニ而、代々比志嶋与名乘 禁裡大番并筑前宮崎吳賊警固番等相勤、將軍家并執權之御判物 御家御代々之御證判致頂戴、満家院安堵等之

文書等茂皆以御宛書比志嶋与有之、為差立家号ニ而御座候處、村上名字ニ相改申候儀其詮然与不相立儀ニ候得者如何之儀ニ御座候間、比志嶋氏ニ而罷居候方旁以増ニ而御座候半与詮儀仕候、然共此上御吟味次第ニ奉存候、以上、

寶永五年子三月廿七日 早 二 五

402

右之調書被遊 御覽候處、比志嶋之称号其由緒有之事候間、今更村上氏ニハ被召成間敷候間、奉得其意、子孫ニ至無相違様ニ相傳可仕候、依之右調書ニ加繼書可渡置旨 御意候、仍繼書如件、

寶永五年戊子四月七日 岩切正九郎

比志嶋藤右衛門殿

5

覚

日州宮崎郡

宮崎

薩隅日三州者從 右大将頼朝公 御元祖忠久公江守護職御給ニ而、薩州江御下向被成候、然共從古来三州之

内一村一郷傳領仕候者多ニ有之候ニ付、 忠久公御下

知ニ不随候故、三州之御家人可随 忠久公之御下知之

由 頼朝公御下文等ニ相見得申候、左候而、右御家人

之面々 御家之御下知を請、 禁裡大番又者宮崎等之

御番相勤申候、尤日州御守護職之儀者 頼朝公以来

禁裡并將軍家之御證判有之候、同國宮崎郡宮崎者戸次

丹後守与申者領ニ而候故、觀應三年、九州探題一色少

輔太郎入道道猷正判ニ而樺山安藝資久江被宛行候、且

又任御下文之旨宮崎之郡内可致領知由、 元久公 久

豊公御正判ニ而樺山家ニ被宛行候、其後 勝久公以来

三州相乱、宮崎邊者伊東家より致押領候処ニ、 龍伯(義久)

様御代天正五年、伊東義祐没落以後入御手、同八年、

上井伊勢覺兼事為日州押宮崎江被召移、嶋津中務家久

佐土原江被召置、其外日州之所々地頭被仰付、全守護

領ニ罷成候、同十五年 秀吉公薩州江御下向、九州之

國郡被宛行候ニ付、日州諸縣郡 御家ニ御給、飢肥・

財部・佐土原を以伊東氏・秋月氏・嶋津中務豊久江被宛

行、縣・宮崎高橋家へ拜領ニ而御座候、此時日州過半

右通他領ニ罷成候、其後高橋家不幸有之、有馬(直純)左衛門

佐様高橋家之旧領御給、其以後縣之儀者三浦(明敬)志岐守様

御給被成候、此時宮崎者 公領ニ為罷成之由承及候事、

右者日州宮崎 御家御由緒之訳從古來之儀相考可申

出旨被仰付、如此御座候、以上、

寶永五年子三月廿四日

鎌田家嫡家 正清 鎌田二郎 左兵衛尉 改政家、

正勝 藏人 寛文五年巳十二月吉日、改政信號正勝也云

々、委細家譜拔書之内不相見得也、正勝以

來嫡家代々用正字也、龜流家々者用政字、

7 女子 松平若狹守康信主室、 當松平紀伊守信庸主御祖母

ニ而御座候、 正徳三年三月調ニ有之、

8の1 諏訪因幡守様江 諏方之二字御尋被成候節御答

諏方之二字、上古ヨリ神號ニ書來候故實有之候、古

來者郡之名又ハ名字ニ茂方之字書申候、何れ之比ヨ

リ訪之字を書候哉、訊不奉存候、

一諸神記之内諏方之郡ニ、位記天曆村上天皇諸神一階正

一位下書記有之候、右之位記諸書不相見得、方・訪之

文字何れを用候茂不相知候、於信州相知候訳ハ無御座候哉、

當宮次第階級有之、白川院永保年中為 諏方正一

位南宮法性大明神、自此時賜宮號、

右之通之神号、天文年中 後奈良院勅筆于今有之、

一諏方郡之名茂、右之通方之字・訪之字兩様ニ書記有之

候、何れを用宜候哉、且又何年号之比より方・訪之文

字何れを御用來被成候哉、

古來者方之字書候得共、中比より兩様ニ茂書申候、

何れを用宜候与申儀訳不奉存候、社家ニ而ハ方之字

計用來候、

一諏方明神之唱ニ者、方之字被書來候由ニ御座候、何年

号之(イ、ヤ)比より御用被成候哉、神號ニ者從往古方之字用

來候、

御家ニ訪之字御用被成候得者、御分流之御庶子家茂御

同前ニ御座候哉、付札ニ同名之分不殘訪之字用申候、

右元文二年巳正月書附有之、

8の2

一舊事本紀第三曰、建御名方神タケミナカタノ中略、ニケサツテハ、ルカニ逝去而迴到於科野國シナノ、ヒ

洲羽海ス古事紀ニ者科野國之メクサグミ、ミコト、人皇三十四代推古天皇御宇選集

一同第四曰、建御名方神坐信濃國諏方郡諏方神社、

一日本紀神代卷抄曰、大己貴命二男健御名方命逃到信濃

諏方郡、經津主神付與此郡、今諏方大明神是也、

一同紀三十曰、信濃須波水内等神 人皇四十一代地統天皇(持)

御宇選集 一續日本紀第十一曰、天平三年乙卯為廢諏方國并信濃國、

人皇四十八代稱德天皇御宇撰集、

一延喜式第十神名之部 人皇六十代醍醐天皇御宇撰集

諏訪郡二座並ミテ大南方刀美神社二座名神是則諏方大明神ニ而御座候、

一神皇正統紀曰、健御名方美之神者事代主之弟也、今諏

訪明神是也、神功皇后征三韓時、天照大神託住

吉明神、諏訪明神令為輔佐、

神皇正統紀者後村院御宇撰集也、(上脱カ)

一信州下之諏方春宮・秋宮与申候而兩所ニ有之、正月元

日より六月廿九日迄ハ春宮ニ而祭り奉り、七月朔日、

秋宮ニ神幸にて神事有之、是を秋宮祭り与申由ニ御座

候、古歌ニ、尾花ふく穗屋のめぐりの一村にしばし里

あり秋のみさ山、是ハ諏方之御佐山祭りを讀たる歌に

て、薄の穂にて假屋を立るを穂屋作りすと申之由候、

御當地七月廿七八日之御祭りぢやう屋神供屋など、申

候て、茅薄を以て諏方之社地江假屋を造申候、右穂屋

作り与申舊キ事を用ひ来候与相見得申候、

一信州諏方大明神年中七十五度之御祭り御座候由、其中

三月中之酉之日、大會之神事之由ニ御座候、諏方神秘

之条々ニ、三月三ツ酉あれバ中之酉之日、二ツあれバ

始之酉之日御神事也与見得申候、且又於信州五月祭り、

七月御射山、或ハ三齋山、或ハ御佐山共書申候、御當地五月・七月之御祭り

を專御用り、殊更七月廿七八日御佐山祭を以大會之御

神事与被成来候事、其故有之儀与相見得申候事、

一井上宮内より三月後之酉之日与申上置候儀ニ付而ハ、

如何様正敷訳も可有之旨宮内方江承達候処、別紙申出

候、(筋力)但別紙當座へ不置候、

右、西之日始後之違目於信州者何れを正日ニ用ひ申

事ニ候哉、此儀爰元ニ而私共究而ハ難決御座候、

元文元年辰七月廿五日

覚

一寶山檢校盲僧者 忠久公御下向之節被召附罷下、伊作

中嶋ニ居住被仰付候儀、當座ニハ不相見得候得共、盲

僧讓席系圖を以相考候ニ、地神盲僧之第一祖滿諸院滿

市より系来候、宗旨ハ天台ニ而、專妙音菩薩之徳を奉

尊敬、手調琵琶之妙曲、口誦地神之説經、奉成四海國

土安穩之御祈禱之由、依之 桓武天皇之御宇五蛇之天

怪有之候時、筑前國罷居候今様・袈裟様・大栗・大行

司・満市・満王・満虎・山城之八人之盲僧應 勅令上

京、致御祈禱候得者、天怪忽鎮、 玉牀御安康被成御

座候由、其後從満市十九代之首孫寶山檢校御家御元祖

忠久公初而御當國江御下向之節寶山罷下、至于今一流

断絶無之候、比叡山佛乘坊法印玄秀・覺林坊法印幸憲

等之證書分明ニ候、然者始祖満市事者 桓武之御宇之

盲僧ニ而候得者、延曆寺創建之時代ニ而候、然ハ御當

國地神座向之一流者、其根元所自来久敷事ニ而御座候、

當世之平家座向之元を尋候ニ、後鳥羽院之御宇信濃前

司行長故有之致遁世、叡山門主慈鎮和尚之會下ニ罷在

候時、平家物語を作り候而盲僧生佛ニ語セ候、此一流

平家盲僧ニ而御座候、是を以考候得者、平家座向之始者生佛ニ而候、然ハ地神座向之始祖從滿市者四百餘年以後ニ為始事ニ而、地神盲僧別流之者ニ而御座候、御當家ニ寶山以來無斷絶相續仕來候儀者、御家久敷御相續之故与存候、當時上方平家檢校之一派ニ而、地神座向ハ無御座候得共、最初八旨之流九州中國之内間ニ有之候由、就中、御領國ニ者今以無斷絶相傳申事ニ候得者、地神盲僧之一流者、御家ニ付而御由緒之訳有之事与相見得申候、當座ニ相知候趣又ハ相考候段可申遣旨承候ニ付、盲僧讓席系圖之傳記等を以相考、如此御座候、以上、

寶永五年子六月十八日

寺社奉行所

御切米被下候人数帳之内

10 一米五石

右九郎左衛門先祖桐野九郎左衛門事、

中村九郎左衛門(家人) 中納言様御代

平田太郎左衛門増事 宗事様子有之被討果候節、押川強兵衛・桐野九郎左衛門被仰付、於入來土瀬戸越鉄炮を以

太郎左衛門を討留候由、自家より申出候、押川強兵衛

家之由緒書之内ニ相見得候ハ、桐野九郎左衛門事ハ入來行司ニ而、山之案内能存候故、案内者として強兵衛ニ被召附、強兵衛同前ニ於土瀬戸越鉄炮を放、太郎左衛門討留候、其後為御褒美桐野九郎左衛門江銀子、押川強兵衛ニ高廿六石拜領為被仰付由記置候、然處ニ九郎左衛門事外祖之名字中村氏ニ罷成、右依御奉公御里内ニ被召移、御切米拾石代ニ被下置候処ニ、當九郎左衛門事奥大番相勤候故、衆并ニ五石ニ被召成候、九郎左衛門事奥大番之御断申上、願之通御免被成、右御切米五石被召揚候得共、先祖御奉公之由緒達、貴聞、寶永七年之夏、右御切米代ニ被下由被仰渡候、

11 一御切米六石

穆佐衆中

柚木崎平右衛門

右平右衛門家筋元來日州伊東家之家臣ニ而御座候、四代之祖柚木崎丹後与申者、(義弘) 惟新様飯野御在城之時伊

東家与於木崎原被遂御一戰被得大勝利候、此時於鬼塚

原右丹後事對、惟新公弓を引受、御一大事ニ相見得候

處ニ、惟新公馬上ニ而御鎧を以御掛り、高聲ニ御名乗被成候節、丹後事御威光ニ恐、引設候弓を捨、子孫

13

右、左近丞伊右衛門跡養子之儀山口友與ニ被仰付被下
度旨、伊右衛門親類上田源左衛門・東郷太郎左衛門よ
り奉願候ニ付、調被仰渡候、伊右衛門事代々小番勤来

山口友與

14

私祖父以来何御奉公相勤候訳且又養子抔致候ハ、委細
鎌田源七

享保元年申十月十五日

12

一鱈干物

是ハしびのみがきを餘所へ御進物ニ被遣候時、鮪
みがきトハ申間敷由候、松平土佐守殿なとより此
方へ參候銘書ニ如此有之由候、又左衛門殿被仰候
旨御目錄留帳之内ニ相見得申候、

之儀奉頼候与申上合掌仕候、則御手自討取被遊候、右
之通ニ候故、御敵なから御哀憐深ク被 思召上、御一
世水を丹後江御手向為被下之由候、 惟新公関ケ原御
帰陣之後、丹後子孫之儀御尋之趣有之、右丹後嫡子丹
後与申者御訴申上、御知行廿四石拜領被仰付候得共、
無程沾却仕候、當平右衛門ハ右丹後嫡孫ニ而、別而逼
迫者ニ候故、 御先代御訴申上候處ニ、元禄十六年之
冬被仰渡候者、先祖代ニ知行を茂被下置候訳茂候ニ付、
為御養料御切米六石被下置之由被仰渡候、

辰五月 平 早 二

り候家筋ニ御座候処ニ、由緒無之者を養子ニ仕候儀別
而残念ニ存申候ニ付、伊右衛門為申置訳茂有之、其上
親類ニ而御座候間、山口友與ニ被仰付被下度旨右兩人
より奉願候、尤友與儀伊右衛門親類故内々申談候条、
何とそ伊右衛門跡養子ニ被仰付被下度旨奉願候由、友
與事代々御城下士筋目ニ而御座候由申出候得共、友與
儀ハ山口五郎右衛門差次之弟ニ而御座候、兄五郎右衛
門儀ハ始ハ入来院家ニ罷在、家中士ニ而御座候處ニ、
内藤善左衛門門弟ニ罷成、画術を相学器量能御座候ニ
付、^(光久) 寛陽院様御代御當地士ニ被召出候、其後友與事
茂被召出、御當地士ニ被仰付候、然者友與家筋ハ家中
より罷出候得者、代々御直之御城下士与ハ差別有御座
筈ニ御座候、然共當分ハ友與事御近習御醫師ニ而御座
候得者、御吟味之上願之筋ニ可被仰付哉、御吟味次第
ニ奉存候、以上、

書記可差出旨被仰渡、祖父鎌田十郎右衛門事鎌田後藤

兵衛弟ニ而、曾木甚右衛門家ニ養子ニ參候、御納戸奉

行迄相勤申候、其後違変仕、後藤兵衛方江罷帰候、然

ハ男子無之故、土岐藤左衛門弟休左衛門を躰養子ニ仕、

休左衛門事十郎右衛門与改名仕、新御番ニ而御奉公相

勤申候、尤祖父十郎右衛門、亡父十郎右衛門迄御太刀

進上 御目見仕候、任御尋如此御座候、以上、

享保二年酉七月朔日申出置候、

15 覚

薩州伊佐郡鶴田郷之内

15の1 一紫尾山

右紫尾山与申名ハ、先年 公儀江被差上候御繪圖又者

御内證繪圖ニ茂相見得不申、紫尾村与申村相見得申候、

紫尾村之邊大山有之、出水江之通路を紫尾山与相唱申

候、右紫尾山ハ出水之内上宮山ニ相續大山ニ而御座候、

肥後より見懸候山者右両山之内ニ而可有御座与存候得

共、究而難考御座候、

薩州出水郡出水郷之内

15の2 一瀬崎山

右先年 公儀江被差上候御繪圖ニ瀬崎山与申山相見

得不申候、御内證繪圖ニ瀬崎野牧内与有之、笠山与

申候高山御座候、此山肥後國より見懸申筈之山ニ而

御座候、瀬崎山与申候者瀬崎野惣名ニ而、右笠山之

事ニ而可有御座与相考申候、

日州諸縣郡高原郷之内

15の3 一霧嶋山

右霧嶋山ハ日隅二州ニ相懸り候山ニ而候、然共霧嶋

山与唱候大山ハ日州諸縣郡高原郷之内ニ而御座候、

先年 公儀江被差上候御繪圖ニ茂高原郷之内ニ相見

得申候、

隅州大隅郡之内

15の4 一向嶋

右向之嶋、先年 公儀江被差上候御繪圖桜嶋与有之、

向之嶋之名無御座候、 御判物御給ニ付、先年来

右伊勢平藏嫡子ニ而御座候、平藏父ハ伊勢左近(貞徳)与申候者ハ、(義弘)惟新様御家老伊勢平左衛門(貞成)二男ニ而御座候、左近事最前實子無御座候故、日州松山衆中吉田藏之助与

伊勢平八左衛門

享保三 戊六月廿一日 相川 肥藤

右之通相糺候処ニ難究所御座候、此上御吟味次第ニ奉存候、以上、

薩州出水郡

一長嶋ナガシマ

同長嶋郷之内
一獅子嶋シメノシマ

薩州甌嶋郡
一甌嶋オシキシマ

公儀江被差出候郡村高辻帳ニ、向之嶋村之肩書ニ向之嶋郷之内何村与有之、向之嶋与之ノ字有之候、先年被差上候御繪圖ニハ桜嶋与有之、高辻帳村之肩書ニ向之嶋与有之、兩名ニ相見得申候得ハ、桜嶋共又ハ向之嶋共相唱申筈ニ御座候、然共桜嶋蜜柑御献上之御事ニ御座候、其上被差上候御繪圖ニ茂桜嶋与有之候得者、桜嶋与相唱候儀可宜哉与存候、

覚

申者之子を致養子ニ、伊勢治部右衛門与申候、右治部右衛門養子ニ罷成候以後平藏出生仕候ニ付、治部右衛門弟ニ罷成候、治部右衛門家代ニ御太刀進上仕来候、然ハ當時之御格式を以ハ、平藏事嫡家同前ニ御太刀進上不被仰付筈ニ御座候得共、以前之儀ハ被定置御格式無御座候故、嫡庶同前之進上物仕候家ニ多々有之事ニ御座候、平藏儀ハ左近子ニ而、平左衛門直孫ニ而御座候得ハ、平藏申出候通御太刀進上為仕ニ而可有御座哉与相考申候、然共平藏覚迄ニ而其證據別ニ無御座候得ハ、申分難相達候得共、右段之之訊を以、平藏嫡子平八左衛門事御太刀進上可被仰付候哉、御吟味次第ニ奉存候、以上、 享保三年戊七月四日

水引大小路町へ罷居候田邊屋七郎右衛門より先比訴訟之趣有之、家筋調被仰渡、調書差上申候処ニ、又々右七郎右衛門より申出趣有之、調被仰渡、左之通ニ御座候、

一田邊屋道與与申候者ハ泉州堺ニ罷在候処ニ、慶長五年

惟新様(義弘)関ケ原御退陣之砌、道與事御奉公仕候訳有之、

御當國江罷下候節、為御褒美川内与阿多与兩所ニ御知行千石拜領被仰付候、道與儀ハ老牀故上方江罷上、俸

千五郎与申者を御當地へ差下シ御奉公為相勤候処ニ、

道與事老病差發候ニ付、千五郎御暇申上罷上候、其以

後道與知行米ハ大坂迄被送下候、依之道與存候ハ、上

方へ乍罷居大分之御知行費申儀恐多奉存、於御家中誰

人成共道與名字を御續七、右之御知行被成下度旨奉願

候ニ付、仁礼藏人二男(賴景)長松(兼棟)後今井市兵衛(兼棟)後今井市兵衛(兼棟)入道松(兼棟)関(兼棟)与申候を今井名字

ニ被召成、右之御知行被成下、道與跡職被仰付候、當

今井仁右衛門ニ至道與一筋代々相續致来候儀、別條無

御座候事、

一道與忤千五郎事ハ後ニ東本願寺之家老栗津家之養子ニ

罷成、栗津右近与申候而、其子孫本願寺へ罷居候事、

一右之通道與一筋之儀ハ今井仁右衛門相續仕来候処ニ、

右七郎右衛門先祖田邊屋七郎右衛門、同兄之吉右衛門

儀ハ道与甥共ニ而御座候、道與へ為忠分御高千石拜領

仕、每度御國へ罷下申候、老躰殊ニ男子無之、諸事難

調候故、右之内五百石ハ今井殿へ御約束之訳有之、五

百石ハ御目錄迄を頂戴仕、現高之儀ハ御断申上、道與

為名代右甥之田邊屋七郎右衛門、同兄之吉右衛門召下

シ、加治木并大小路へ被下候屋敷へ召置、右五百石之

御目錄頂戴仕置、至子孫身上難續節ハ、道與一筋之由

緒を以何ぞ無御障儀(行)を見立奉願、御蔭を以田邊屋家

相續仕可申候、惟新様御目懸之田邊屋ニ而候条、於

御國田邊屋家不相禿様ニ肝煎可申通道與より申付差下

為申之由申傳、五百石之御目錄于今格護仕候由、此節

右七郎右衛門より申出候、此儀筋違之家傳ニ而御座候、

相考申候ニ、右七郎右衛門先祖ハ、今井市兵衛ニ道與

跡職相續不被仰付以前、知行所務為取納道與より為差

下置与相見得申候、今一人阿多江差下置候子孫ハ當分

仁右衛門家来ニ而罷居申候、市兵衛事道與跡職相續仕

候ニ付、其後右七郎右衛門先祖共ハ肆簾号迄を相名乘、

自ラ御國居付ニ為罷成旨可有御座与申候、且又右七

郎右衛門家ニ五百石之御目錄格護仕候儀、右之通先祖

共以前所務為取納罷下り候ニ付、為考道與より為渡置

儀ニ而可有御座候、然ハ今更道與一筋之申上ニ者罷成

間敷儀ニ御座候、假令右七郎右衛門先祖共道與親類之

者ニ而有之候共、道與家筋之儀ハ今井仁右衛門相續仕
來候得ハ、右七郎右衛門事道與一筋之者与ハ難申候、
手傳筋目之儀別條有之間敷与相見得申候事、

一 右七郎右衛門先祖代々嶋津圖書殿家ニ致立入候由申出
候得共、是又道與一筋之證據ニ不相成事ニ御座候事、

右田邊屋七郎右衛門家筋又々相調候趣如此御座候、

以上、 享保三年戊三月四日

覚

秩父十郎兵衛嫡子(重行)小太郎事於 御前元服被仰付被下

度旨願申出候間、於當座調被仰付候ニ付、左之通御

座候、

一 十郎兵衛家ハ鎌倉執權北条武藏守泰時之右筆因幡房尊

西之嫡孫三郎兼季之三男刑部左衛門尉季清嫡子伊地知

彈正忠季随嫡流ニ而御座候、尊西嫡孫之儀ハ五代迄打

續執權之右筆相勤申、右季清事者鎮西探題北条陸奥守

隨時・同修理亮英時兩代之右筆与十郎兵衛家ニ致格護

候古系圖ニ相見得申候、左候而、季随事六波羅鎮西ニ

令勤仕、北條家没落以後 貞久公御代御當國江罷下、

觀應二年九月八日、筑前金隈合戰 氏久公御難儀之節
致忠死候ニ付、從 貞久公其旨御注進有之、 將軍尊

氏公御感狀嫡子伊地知彦七江被成下候古寫有之候、季

随三代之嫡孫縫殿助季豊入道久安事ハ、從 元久公至

忠國公御代御家老相勤、季豊玄孫縫殿助重周茂 忠昌

公御家老ニ而御座候、代々下大隅之内を領、本城ニ致

在城、御代々被成下候文書致格護、為差立家ニ而御座

候、永祿・天正之間、重周直孫周防介重興祿寢・肝屬

ニ黨を結、守護方ニ相背、 義久公被加御治罰、天正

二年、所領悉差上、下之城一所を給致降參、重興嫡孫

佐渡守重順九州御出陣之節自兵百七十餘人相卒致軍功、

朝鮮御征罰ニ茂軍勞仕候、左候而、文祿三年、背 嚴

命上方江致出奔、經七年蒙恩免婦參仕、高五百石致拜

領、後ニ倉岡地頭被 仰付候、是十郎兵衛高祖父ニ而

御座候事、

一 伊地知家中古書記候系圖ニ者、右因幡房尊西事、畠山

重忠兄畠山庄司太郎太夫重光嫡子太郎太夫季光嫡子ニ

而、刑部少輔季親入道尊西与為申由記置申、季親五代

之嫡孫刑部左衛門尉季清、嫡子彈正忠季随与嫡々相續

之趣ニ相記、或畠山与名乗、号伊地知、又畠山・伊地知与代々家号相替、専秩父畠山一流之由緒書記候得共、前段ニ書記候古系圖之表与ハ致相違候、古系圖ハ尊西を初ニ二系来申、古来慥成系圖ニ而御座候処ニ、畠山重光子孫之趣相見得不申候、相考候ニも、重光子孫ニ而候ハ、季光事ハ重忠甥ニ而、殊更家嫡之儀候間、東鑑ニも其名相見得申筈ニ御座候得共無其儀、古系圖等ニ茂其趣相見得不申候、且又尊西事重忠兄之嫡孫ニ而御座候ハ、泰時右筆者仕間敷儀欤与旁不審ニ存候、縱令尊西事重光嫡孫ニ相究り候而茂、季随事ハ尊西流之三男家ニ而御座候段ハ無別儀相見得候、然者伊地知家之儀畠山嫡流之様ニ覺罷居候与相見得候得共、左様ニ而ハ無之候事、

右之通家筋ニ而、十郎兵衛高祖父佐渡事一節致窄人婦參仕候得共、追付地頭職を茂被仰付、其上十郎兵衛養祖父六郎兵衛迄ハ(信季)御前元服被仰付、先祖兩代御家老職を茂相勤、佐渡代迄一所拜受之家ニ而御座候、十郎兵衛亡父勘助事ハ六郎兵衛弟ニ而罷居候内(重忠)元服仕候得者無其儀、十郎兵衛事茂勘助末二男ニ而

19

罷居候内ニ元服仕候得者、勘助同前之儀ニ候由申出候、然ハ中絶与申ニ而ハ無之候、本田家・肝屬家嫡子之儀茂御直御加冠ニ而ハ無之候得共、於御前元服被仰付候間、十郎兵衛家茂同格ニ可被仰付儀与吟味仕候、以上、

寶永二年酉十一月六日 市肥田

覺

此節(吉豐)太守様御家督初御入部被遊候ニ付而、八幡新田宮執印職執印久馬事御祝儀申上度奉願候、先祖事差立候時節ハ御太刀・馬代進上仕、御祝儀申上来候由申傳、且又始而御目見并継目之御礼申上候節茂御太刀・馬代進上仕候間、此節初御入部之御事ニ御座候条、御太刀・馬代進上ニ而御礼被仰付度之旨奉願、依之調被仰渡候故、左之通御座候、
一惟宗姓執印久馬家筋ハ、御元祖忠久公御下向無之以前より御當國ニ罷在、新田宮被補執印職ニ、子孫代々執印職勤来、至當久馬其通ニ御座候、
一御元祖様御下向以来三ヶ國擾乱ニ付、凶徒御治罰之御

祈禱久馬先祖江被仰付、或ハ支配下神職之者相促、御家ニ従軍仕候事度々有之候ニ付、將軍家并御家御證判之文書数通格護仕候、且又久馬祖父執印(曾脱カ)吉左衛門事ハ中納言様御代執印職相勤、御船奉行兼役被仰付候、

右者、執印久馬家筋太抵如此御座候、御當國之儀ハ御元祖様御下向無之以前より一郡一村領知仕候者多々有之、漸(義込)龍伯様至御代三ヶ國思召俣ニ御手ニ入、右通之歴々之家茂皆共ニ御家臣ニ罷成候、其子孫又ハ御連枝之家筋御繁栄之御事ニ御座候得共、此節初御入部ニ付而、御太刀・馬代進上ニ而、御目見被仰付事ニ而も無御座上ハ、久馬依申分ニ御取分ケ御太刀・馬代進上仕、御目見可被仰付廉相見得不申候条、願之通ニ被仰付間敷儀与相調申候、此上御吟味次第奉存候、以上、寶永二酉九月十六日

勝浦姫

一京都ニ罷居候桂江御米被下置候由緒、是又相札可申出旨被仰渡候、先年右桂より由緒之次第申出候書付之内

ニ相見得候ハ、人皇十五代神功皇后之御代より桂姫与申事初り候、皇后ハ仲哀天皇御后ニ而御座候、御嬪(禮)妊之御時、新羅・百濟國より日本を責ニ来り候由、其間得有之候ニ付、皇后自高麗江御向御退治被成候時、白旗ニ綿を包冠ニ被成候、其節皇之御左之脇ニ桂姫供奉仕候、其後皇子御誕生之時、白簾ニ綿を包たる帽子を着、桂姫萬之御祝事を相勤申候、ケ様ニ吳國を御隨、御代長ニ有之、應神天皇御即位之節、桂姫忠戦之故を以桂姫与申名を勝浦与御改、桂之里を知行ニ被下候、然其中比より知行ハ無之候得共、其子孫于今桂之里ニ代々居住仕候、右之由来ニ而、勝浦姫ハ武家御賞翫有之、昔ハ諸國ニ勝浦姫子孫を御招御馳走被成候、勝浦姫相勤候役儀ハ、御祝言之時御轅之左ニ相添、白簾之帽子を着、供奉仕候、御出陣之時ハ御首途之酌(酌カ)を仕候由相見得申候、御家ニ御礼申上候次第段々相見得候得共、信用難仕儀多々有之、龍伯様御代御國江被召寄候節、向後無懈怠御礼ニ罷出候様ニ与被仰付、勝浦姫妹一人御國江差上候得ハ、敷根ニ屋敷壹ヶ所被下居住仕、敷根より鹿兒嶋江御礼申上候、其後姉勝浦姫御

礼ニ罷下候得ハ、御扶持料子ノ孫ニ迄被下候御判物拜領仕候而罷歸候、然處ニ寛永十三年右御判物焼失仕候由相見得候得共、右之儀勝浦姫申分迄ニ而、外ニ諸書付之内ニ相見得不申候、〔家人〕中納言様御代御國江罷下候節、送人馬之儀ニ付其節御家老中より之書附所持仕、且又御切米拾石ツ、當年より被下候趣 中納言様御代比志嶋紀伊・嶋津圖書入道より之書附所持仕候由、右勝浦姫より差出候書付之内ニ相見得申候、右之詛を以御米被成下儀ニ而ハ可有御座哉与存候、右之外當座へ相知候儀無御座候、以上、

享保四年亥正月廿三日 川 肥

覚

山田弥右衛門事先年小番入之願申上候得共、願之通ニ不被仰付候ニ付而、此節又々小番入之願申上、調被仰渡、左之通ニ御座候、

右弥右衛門養祖父山田〔有貞〕土佐儀ハ山田越前入道利安〔有忠〕二男ニ而御座候、寛永年間兄山田民部出水移地頭被仰付罷下候ニ付、土佐事被召附被下度旨奉願、出水へ罷移候、

左候而、出水大割高之内致領知、宗門手札御改之節於彼地手札申請、出水衆中ニ罷成申候、然處ニ先年當弥右衛門代ニ奉訴、鹿兒嶋士ニ被仰付候、右通ニ御座候得者、弥右衛門家寄合之二男家ニ而御座候得ハ、家筋ニ付而ハ小番被仰付筈ニ御座候得共、土佐代より出水衆中ニ罷成候、且又土佐事小番相勤候由申出候得共、當座ニ相知不申候、縱令土佐事小番相勤申候而茂、右之通三代外城衆中ニ罷成、家之格式も引下り為申事ニ御座候得ハ、小番不被仰付筈ニ御座候、養父吉左衛門事江戸へ御馬廻ニ而相詰、小番相勤申候得共、是又於御當地小番相勤候者ニハ相替、其詮無御座候、右段ニ之詛ニ御座候得ハ、願之通代々小番ニハ難被仰付儀ニ御座候、然ハ弥右衛門事去年御馬廻ニ而江戸詰為仕儀ニ御座候条、御格式之通一代小番ニ可被召入儀与吟味仕候、以上、 享保二年酉十一月廿五日 川 肥藤

邊見平五左衛門

右高祖父邊見増右衛門勤方相知不申候、曾祖父邊見龍右衛門御包丁人役相勤、祖父邊見八左衛門御包丁人頭

相勤、親邊見平五左衛門與横目役相勤申候、當平五左衛門事定役之勤方無之、未ノ日大番相勤申候、代々御城下士ニ而御座候、

23

岩切戸左衛門

右岩切次郎兵衛二男ニ而、其身代ニ別立申候、親次郎兵衛事大坂御留守居・吟味役等之御役相勤、地頭職被下置候、兄岩切喜兵衛事御馬廻ニ而江戸詰仕、其子當岩切彦兵衛ニ而、代々小番勤来候、戸左衛門事何之勤方無之、代々御城下士ニ而、大番相勤申答之家筋ニ而御座候、

24

救仁郷新四郎

右親救仁郷白水祖父救仁郷長楽院代飯隈山先達家より御城下士ニ被召出、中納言様御代御祈念山伏被仰付候、親救仁郷了悦事右長楽院二男ニ而別立、光久公御代御醫師相勤申候、白水事初ハ救仁郷善兵衛与申、(吉豊)總州様御駕籠廻定御供役相勤申候、新四郎事白水三男ニ而、近キ比別立被仰付、何之勤方無之候、長楽院以

来御城下士ニ而、新四郎事大番相勤申答之家筋ニ而御座候、

25

宮内勘右衛門

右養祖父宮内平右衛門事ハ宮内六兵衛二男ニ而別立、勤方相知不申候、六兵衛子孫ハ當宮内四郎右衛門ニ而御座候、親宮内平右衛門事野田衆中清田右京二男ニ而候処ニ、右平右衛門養子ニ罷成、無役ニ而大番相勤申候、勘右衛門事琉球在番附役・長嶋地頭附役等相勤、當分無役ニ而候、尤大番相勤候家筋ニ而御座候、

26

吉田藤右衛門

右親吉田了叔事ハ吉田了測二男ニ而、初而別立、外科醫師仕候、右了測代外科醫師仕候故を以御家ニ被召抱、子孫當吉田正左衛門ニ而御座候、藤右衛門事此以前横目役相勤、當分無役ニ而、大番相勤候家筋ニ而御座候、

27

山口五郎兵衛

右五郎兵衛七代之祖山口五郎兵衛(直行)与申者者御旗本山口(直友)駿河守様弟ニ而、中納言様御代 家康公江被成御所望 御家ニ被召抱候、右由緒ニ而、五郎兵衛先祖代々駿河守様御子孫へ書通・音物等仕来、亡父山口五郎兵衛代去ル元文四年未正月、願申出候上右御子孫江書通・音物仕候、右次第之儀ニ御座候得者、此節之儀も書通・音物仕候儀御免可被仰付儀与奉存候、以上、

延享二年丑二月十一日

町田源六

右源六親町田源右衛門事町田伊賀二男ニ取立、高屋敷差分別立、御奉公相勤候処ニ、伊賀存念ニ不相叶様子有之、私遠流之願申上、大嶋へ差遣候處、源右衛門高屋敷之儀ハ町田勘左衛門江被下度旨伊賀より奉願、勘左衛門事伊賀二男ニ別立被仰付、源右衛門高屋敷被成下候、左候而、源右衛門事伊賀存生之内嶋より召帰、妻子等迄勘左衛門家内ニ罷成候故を以、源六事勘左衛門弟ニ奉願、其通ニ被仰付、此節 御目見之願申出、進物調被仰渡候、依之吟味仕候者、勘左衛門家二男

御目見之節者御太刀・二種一荷進上仕候得共、此家二男之儀ハ中紙進上之御格式ニ相當申候、然ハ源六事勘左衛門弟ニ為被仰付御事ニ御座候間、中紙進上可被仰付儀与奉存候、乍然源六親源右衛門事ハ最前伊賀二男家ニ相立申、御法事之節御組頭格之御手長等をも被仰付、屹与立儀をも相勤為申事ニ御座候処ニ、不幸之儀有之、妻子等迄勘左衛門家内罷成、源六事源右衛門嫡子ニ而候得共、無是非勘左衛門弟ニ為罷成事ニ御座候得ハ、勘左衛門家實之二男与ハ少御取分も被遊、弓進上ニ茂可被仰付哉、於其儀ハ、源六家相立候而ハ其家嫡子之儀ハ代々弓進上ニ被仰付、勘左衛門家之二男御目見被仰付候節ハ勿論中紙進上ニ可被仰付儀与吟味仕候、右源六事勘左衛門家實之二男与御取分可有之儀ハ御吟味次第之儀ニ御座候得ハ、究而難申上候、若御取分も於被仰付者、右之通弓進上ニ茂可被仰付哉与吟味仕候、以上、 正徳二年辰六月廿三日 川

平山次郎右衛門賀養子 平山伊兵衛

右、養子成御礼 御目見ニ御太刀進上仕七度旨養父次

郎右衛門より願申出置候、此家之元祖越後守忠康与申
 候者嶋津豊後守季久之二男ニ而、季久之領内帖佐平山
 之城ニ居住仕候ニ付、平山之家号を樹申候、忠康五代
 之孫右馬頭久武与申者、永祿二年、肝付省釣松山之城
 を圍攻候時遂戦死、子孫無之候處ニ、次郎右衛門祖父
 對馬久清 惟新公之命ニ而久武之家を致相續候、久清
 嫡子七兵衛忠昭者王子村犬追物之射手之列ニ茂被仰付
 候、其子次郎右衛門御用人役、代々地頭職をも被仰付
 候、然者伊兵衛御太刀進上之儀ハ勿論被仰付筈与考申
 候、以上、元祿十四年巳十二月廿七日 市 肥 田

比志嶋善八

右善八家之儀ハ、比志嶋氏二男家加治木ニ罷居候比志
 嶋休右衛門先祖之二男家ニ而御座候、右通於比志嶋家
 又庶流ニ而御座候得共、善八家之元祖比志嶋宮内少輔
 國真人道咲翁事市来地頭職相勤申、其子紀伊守國貞事
 義弘公 家久公御家老職相勤申候、其子宮内少輔國隆
 事茂 家久公御家老ニ而候処ニ、依罪科被誅候故、其
 子内記事配流被仰付、家断絶仕候、然共國貞事別而為

抽御奉公人ニ而御座候故、國貞之後嗣可被召立旨ニ而
 新恩地五百石嫡家比志嶋監物義之ニ拜領被仰付候、依
 之義之家之儀ハ嫡子左京義時ニ致附属、監物事ハ被成
 下候新知五百石を以紀伊守後嗣ニ罷成候、右監物養子
 主膳、其子善八与致連續、代々地頭職被仰付、紀伊守
 一流者善八ニ而御座候、右仕合ニ御座候故、國隆嫡子
 内記事配流御赦免之後者監物二男ニ被仰付候、是當比
 志嶋兵次郎家筋ニ而御座候、右之通善八家ハ比志嶋又
 庶流ニ而御座候故、家筋ニ付而ハ 御直元服被仰付筈
 ニ而無御座候得共、紀伊守國貞御家老職相勤、抽御奉
 公候一筋を以、善八事先御代被遊 御加冠為被下欵与
 存候、善八家筋如此御座候、以上、

宝永三年戊二月廿五日

山鹿越右衛門

右山鹿越右衛門小番願申出候、養父小番相勤候儀相知
 候者、其段可申上旨被仰渡候、養父越右衛門小番相勤
 候儀當座へ相知不申候、當越右衛門曾祖父越右衛門鎮
 幸事始而 家久公御代慶長年中ニ被召抱候而、高三百

六拾石餘被下置、庄内軍乱之節茂走廻り為申由候、其

後琉球入之節ハ船奉行相勤、又ハ江戸御城普請之節石

船宰領ニ而罷上り、水主喧嘩仕出候節、越右衛門存究

能御座候故、首尾好相濟為申由候、其子太郎兵衛代ニ

窄人被仰付、筑後柳川之城主立花左近殿被為知候ニ付、

彼地江罷越数年罷居候処ニ、嶋原鬼利支丹一揆之節、

太郎兵衛父子立花殿へ相附致出陣、二月廿七日城責候

節、薩摩之者与名乗本丸江乘、太郎兵衛遂戰死候、此

儀ニ付嫡子(親直)弥助後ニ越右衛門御家中江帰參為被仰付由

候、右之通帰參被仰付候得者、小番被仰付候哉相知レ

不申候、當越右衛門儀國分衆中藪田六右衛門弟ニ而、

外城養子ニ而御座候、御先代外城養子之儀ハ、假養

父家小番勤来候筋茂、大番為被仰付事ニ御座候、其内

(付箋ニ藤力衛ノ字カ、虫付)野休右衛門・伊勢嘉右衛門事ハ養父家差立候故ニ而

も候哉、又ハ外城養子之御吟味無内ニ願申出候故ニ而

も候哉、御太刀進上并小番迄被仰付候、其外之外城養

子ハ養父家之格式ニハ不被仰付候、是又為御考申上候、

以上、宝永三年戊三月廿七日

市

32

平山八右衛門事本名甌名字ニ名字替被仰付被下度
旨願申出、調被仰渡、左之通ニ御座候、

八右衛門家筋之儀、平山五右衛門先祖平山民部卿能清

之二男越後守武秀与申者ニ而、帖佐之内甌与申所致領

地、其所之以在名家号ニ仕来申候、是則八右衛門家之

元祖ニ而御座候、然處ニ高祖父甌勝左衛門代嫡家之称

号平山ニ相改為申事ニ御座候、八右衛門先祖代々甌与

名乘来候儀別儀無御座候条、如本甌名字ニ相改候而何

そ之差支申儀無之候間、願之通御免可被遊儀与詮儀仕候、

以上、正徳三年巳四月四日

33

覚

町田甚五右衛門

右甚五右衛門町田甚兵衛嫡孫ニ而御座候処ニ、甚兵衛

嫡子町田休右衛門事乍乱心不屈之依科系圖之世系被相

削、甚五右衛門事新規ニ被召出、家之旧式不被仰付、

甚兵衛家名跡計ニ御立被下、家筋ハ以前之通ニ被仰付

候事、

阿多仲右衛門

右家之儀、町田庶流阿多飛彈守久清二男佐渡守久満一流之系圖致所持候、且又仲右衛門亡父才左衛門代之家筋之儀ニ付嫡家町田出羽忠尚江差出候書付等を以相調候処ニ、御両族之證據相見得申、先祖代々町田家ニ相附、社役等茂相勤為申由ニ御座候得ハ、御支族別条無御座、佐渡守久満一流与相見得申候事、

出水衆中 阿多六郎左衛門

右六郎左衛門家家傳之系圖所持不仕、元祖之出所不相知家ニ而御座候、六郎左衛門六代之祖阿多美作忠豊与申者より相見得、家之字代々忠之字実名ニ用來、久之字名乗候儀無御座候、然ハ町田家氏族之外平姓阿多氏忠之字用來候故、段吟味仕候処ニ、町田庶流阿多家之内忠之字用來候家茂有之候、其上嫡家町田出羽忠尚氏族之中ニ社役被申付候ニ付、右六郎左衛門家ニ居頭役相勤候節贈答之書状其外書付等町田郷九郎より此節當座へ被差出、町田氏庶流之證據相見得申候間、六郎左衛門家筋弥以郷九郎家之氏族無別条候事、

出水衆中 町田伊兵衛

右伊兵衛家筋系圖證書等無之候ニ付出所詳ニ相知不申候得共、町田名字ニ而御家之字名乘來申候、町田氏之儀他家ニ無之候得者、伊兵衛家弥以町田家之庶流与相見得申候事、

正徳三年巳四月八日

土持權兵衛

右權兵衛十五代之祖遠江守頼宣与申候者、勢多合戦之節戦忠有之候ニ付、為其賞日州縣庄半分致拜領、從夫子孫代々縣之城主ニ而罷在候、頼宣十代之孫右馬頭親成、其子彈正忠久綱父子 御家十六代義久公御旗下ニ罷成候、殊ニ彈正事ハ御字迄被下候而久綱与号候、度々抽戦忠候故ニ居城を茂取離、彈正代ニ御領内ニ參上仕、御家臣ニ罷成候、久綱三男權頭盈信家督仕、別而龍伯公ニ被召仕、所々之地頭職被仰付、犬追物之射手ニ茂相列候、盈信嫡子次郎九郎并二男松千代丸兄弟共ニ、慶長十九年同日ニ 家久公御加冠ニ而元服仕候、次郎九郎致早世候ニ付、松千代丸後ニ彈右衛門与改名

仕、家督致相續候、彈右衛門智養子權之丞事ハ諏訪采^(信全)女三男成長仕候而養子罷成候故、權土持家元服ハ不仕^(延)候得共、權之丞嫡子權^(信秋)兵衛儀ハ、先祖共之謂を以貞享三年正月廿八日 綱貴公御加冠、嶋津中務殿理髮ニ而御直元服被仰付候、其引次ニ而御座候得者、惣十郎事茂不相替御直元服可被仰付儀与私共相調申候、以上、

寶永四年亥十月廿六日

相良弥五左衛門

右相良弥五左衛門曾祖父相良^(長繼)甚兵衛事最前ハ甚吉与申候而、鎌田藤四郎先祖鎌田出雲政近三男ニ而御座候、甚兵衛外祖父相良丹後長秀入道隣松嫡子相良吉右衛門長信病身ニ有之候ニ付、右甚吉事長信之養子ニ罷成、家筋相續仕来候由、弥五左衛門より申出候、然者申出之通鎌田家より甚兵衛儀養子ニ罷成候処ニ、養父吉右衛門長信直子主税長廣出生仕候ニ付而、甚兵衛方江ハ知行差分二男家ニ相定、吉右衛門長信家筋ハ嫡子主税長廣江相續為仕候、右之通ニ御座候得者、此節弥五左衛門申出候趣ニハ相違仕候事、

一弥五左衛門曾祖父相良甚兵衛事御太刀進上仕候由申傳候、甚兵衛嫡子舍人、其子甚左衛門、當弥五左衛門ニ至候而者進上物之品相知不申候条、弥五左衛門継目之御礼被仰付候節、相應之進上物被仰付被下度旨奉願候、此儀御格式を見合申候處ニ、申出之通甚兵衛事御太刀進上仕候而茂、其後三代ニ罷成御太刀進上不仕候故、中絶之御格ニ相當仕候間、中紙進上可被仰付儀与詮儀仕候、 寶永七年寅六月十二日

馬場長軒

右馬場長軒家ハ古来曾於郡ニ罷在候姫木氏之庶流馬場氏之一族ニ而御座候処ニ、先祖共如何様頼娃氏之家臣ニ為罷成ニ而御座候哉、頼娃ニ致居住候、其後長軒曾祖父馬場安右衛門、其子馬場主膳事谷山ニ為罷成長軒之由候、右主膳嫡子清兵衛事ハ長軒親ニ而御座候、主膳儀初而足輕ニ罷成、長軒事茂足輕役相勤、於江戸醫道之稽古仕候故、醫道を以 御先代御當地士ニ御救免被仰付候、以上、 正徳四年午三月五日

江川仙左衛門

右仙左衛門事初而高持成願申出候ニ付、家筋調被仰渡候、仙左衛門親江川安兵衛事ハ大明人友官与申者之ニ男ニ而、嫡家ハ江川清右衛門ニ而御座候、友官事於大明穎川与申所へ致居住、俗姓成程輕キ者ニ而、為商賣御國江罷在候処ニ、御赦免被仰付士ニ罷成候、右仙左衛門儀ハ安兵衛ニ男ニ而、友官孫ニ而御座(候脱之)以上、

正徳四年午三月廿一日 川 肥

汾陽藤次右衛門

右初而高成之願申出、家筋調被仰渡候、藤次右衛門事汾陽次郎右衛門五男ニ而御座候、次郎右衛門家代ニ御城下ニ罷居、小番勤来申候、藤次右衛門兄汾陽嘉左衛門事伊勢仁右衛門養子ニ罷成候ニ付、藤次右衛門事嘉左衛門跡養子ニ罷成、次郎右衛門家之二男家ニ相立申候、汾陽氏ハ元来大明人理心与申者之子孫ニ而、右嫡家ハ汾陽茂右衛門家之庶流ニ而御座候、尤藤次右衛門事大番罷在候、以上、 右同午五月十六日

岩下三左衛門

右三左衛門養父岩下主水左衛門事先祖代ニ御城下士ニ而、輕キ御奉公勤来申候、三左衛門事ハ諏訪仲右衛門附衆中北原三左衛門悴ニ而御座候、右主水左衛門外城養子御免ニ付養子ニ罷成申候、尤大番相勤申候家筋ニ而、當分山奉行所筆者役相勤罷在候、以上、

43 一中西長兵衛事元来河内國石川庄富田林之者ニ而候処ニ、

撰州大坂ニ罷在候能太夫小春左衛門養子ニ罷成、小春李之進与申候舞童ニ而御座候、(綱貫)大玄院様御代被召抱、

石川甚太夫与改名被仰付候、左候而、元禄四年、先中西長兵衛跡目被仰付候、然共其節継目之御礼不申上、且又寶永元年御與ニ被召入候得共、至只今継目之御礼不申上候事、

正徳五年未十一月十三日

讚良權左衛門

右權左衛門先祖代ニ御城下士ニ而御座候、七代之祖讚良善助貞行、其子讚良善助貞資兩人共ニ諸所於戰場

武功有之者ニ而御座候、親讀良善助ハ物頭御役相勤申候、權左衛門事前方御目附御役相勤、地頭職迄被下置候、當分茂長嶋移地頭職被仰付置候、尤代々小番相勤申家筋ニ而御座候、以上、

東郷八左衛門

右八左衛門家筋之儀、東郷家庶流ニ而御座候、先祖代々御城下ニ罷居候、曾祖父東郷仁右衛門与申者（義）惟

新様御代御荷内役相勤申候、其子仁左衛門与申者御座候得共早世仕候、然處ニ親東郷仁右衛門事ハ鹿兒嶋士

47

萩原新助

有馬千左衛門弟ニ而、右仁左衛門養子ニ罷成候而、蔵方其外諸檢者等相勤申候、當八左衛門事茂諸檢者等相勤申候処ニ、當分奥大番相勤申候、尤大番相勤申家筋ニ而御座候、以上、

米良藤右衛門

右家筋、藤右衛門先祖米良大蔵助事ハ米良五郎兵衛先祖米良縫殿（重世）二男ニ而御座候処ニ、肥後國米良之領主米良石見守殿（重長）より米良へ召寄、寒川サムカハ一所為致領知、石見

48

横山長右衛門

右先祖代々御城下士ニ而、曾祖父横山大蔵儀江戸之

守殿隱居跡致附屬、米良嫡家之二男家ニ罷成候、左候而、御當地与寒川与惣而罷居候、大蔵助より養祖父米良弥五左衛門迄三代何ぞ差立為申御奉公不仕候、養父米良藤右衛門事御側御用人役被仰付、地頭職迄被下候、當藤右衛門事ハ谷山角太夫弟ニ而、米良家相續仕、奉行職高奉行御役相勤候、相勤（筋力）當分嶋津筑後中押役相勤申候、尤代々小番、御太刀進上仕候家筋ニ而御座候、以上、未四月十八日

座候、以上、

祖父萩原郷左衛門并親喜三左衛門事御當地・江戸・京・大坂相應之御奉公相勤申候、尤大番相勤申家筋ニ而御

右家筋、藤右衛門先祖米良大蔵助事ハ米良五郎兵衛先

祖米良縫殿（重世）二男ニ而御座候処ニ、肥後國米良之領主米

良石見守殿（重長）より米良へ召寄、寒川サムカハ一所為致領知、石見

右十郎右衛門家先祖代々、御城下士ニ而御座候、曾祖父市来五兵衛(家忠)、祖父市来七左衛門(家忠)兩代奉行職相勤、親市来千左衛門事御馬廻相勤申候、尤代々小番相勤申家筋ニ而御座候、以上、

鎌田與左衛門

右與左衛門事初而 御目見仕候節中紙進上仕候、然処ニ親鎌田傳兵衛事地頭職被仰付候、親地頭職之内御太刀進上被仰付候、左様ニ無御座候得ハ、弓進上被仰付候御格式ニ御座候、與左衛門事親地頭職之内御太刀進上仕候間、御格式之通弓進上可被仰付儀与詮儀仕候、以上、

御奉公間々相勤、其子横山喜左衛門諸所御藏役人相勤、其子横山慶左衛門儀吳國座筆者役相勤為申由、當長右衛門儀、於江戸・御國相應之御奉公為仕由候、尤大番相勤申家筋ニ而御座候、以上、

市来十郎右衛門

右六左衛門祖父花田四郎兵衛事高橋家家来ニ而候処ニ、高橋家御改易ニ付當高橋七郎右衛門養祖父高橋七郎右衛門種直 御家ニ被召出候節、右四郎兵衛事茂種直ニ相附參候而御當地ニ被召出、屋敷拜領被仰付、其以後病者ニ罷成申候、親花田五左衛門事大御番相勤罷在候処ニ、野尻之内紙屋移噺役被仰付、数十年相勤申候、當六左衛門事江戸并御當地ニ相應之御奉公相勤申候、然處ニ亡父五左衛門跡役被仰付、紙屋移噺役相勤申候得共、諸所移噺役御免之節、六左衛門事茂被成御免、當分 御部屋栖様御方御用人座寄筆者相勤申候、尤祖父四郎兵衛以来 御城下士ニ而、大番相勤(符之)申候家筋ニ而御座候、以上、 正徳五年末十一月廿二日

中江八郎右衛門

右家筋調被仰渡候、八郎右衛門六代之祖中江周琳法印与申候者、近江國中江与申候所江罷在、醫道仕候故、近衛植家公御取持ニ而 貴久公御代被召抱、御知行百五六拾石拜領被仰付候、 貴久公より 義久公迄奉仕

候、右周琳嫡子中江主水(貞道)与申候、是則八郎右衛門家之元祖ニ而御座(候脱力)、周琳家業之醫道を二男中江瑞仙与申候ニ致傳授、家督相續為仕、其子孫中江九衛門ニ而御座候、周琳嫡子主水事ハ乍嫡子家ニ付候醫道傳授不(武)、武士之勤ニ而御奉公為仕候与相見得申候得ハ、其身代ニ家を相立為申ニ而御座候、右主水事 龍伯(義久)様御代御鷹師頭又ハ納殿役相勤申候、主水嫡子中江友仙御醫師相勤申候、友仙嫡子市右衛門、其子七左衛門事所々藏方御奉公、諸檢者等相勤申候、當八郎右衛門事茂相應之御奉公仕候、尤周琳以來代々 御城下士ニ而御座候、八郎右衛門事大番相勤申候家筋ニ而御座候、以上、

有村伊右衛門

右伊右衛門先祖曾於郡衆中ニ而御座候処ニ、祖父有村市兵衛事 寬陽院様御代鹿兒嶋士ニ被召成候、御包丁人頭役被仰付、御切米五拾石一世被下置候、親有村伊右衛門より至當伊右衛門御包丁役相勤申候、尤大番相勤申家筋ニ而御座候、以上、

諏訪新右衛門(兼利) 右新右衛門祖父諏訪次郎右衛門事諏訪李右衛門弟ニ而、別立罷居候故小番相勤候、親諏訪半右衛門事納殿御役相勤、江戸詰仕罷下り候砌、致破船相果申候、當新右衛門代々小番相勤申候、

山田弥右衛門

右弥右衛門養祖父山田土佐儀ハ山田越前入道理安二男ニ而御座候処ニ、寬永年間家兄山田民部(有孝)出水移地頭被仰付罷移候ニ付、土佐事被召附被下度旨奉願、出水へ為罷移由、然者出水大割高之内を致領知、宗門手札御改之節於彼地手札申受、出水衆中ニ罷成候、然處ニ先年當弥右衛門代ニ奉訴、御城下士ニ被仰付候、弥右衛門家ハ寄合格之二男家ニ而御座候得ハ、家筋ニ付而ハ小番被仰付御格式ニ御座候得共、二三代出水衆中ニ罷成候、且又土佐代ニ小番相勤候由申出候得共、當座へ相知不申候、縦土佐事小番相勤候而も、右之通外城衆中ニ罷成候得ハ、小番不被仰付筈ニ御座候、養父吉左衛門江戸ニ而小番相勤候儀、於御當地其詮無御座候

右善助家ハ、木脇賀左衛門曾祖父木脇刑部左衛門三男
 木脇作右衛門与申者善助父ニ而御座候、作右衛門子納
 戸役相勤、善助儀ハ賀左衛門父甕嶋地頭職ニ而罷移候
 節附役ニ而彼嶋へ相勤、其後津口番又ハ札改奉行所中
 取等相勤申候、代々御城下ニ罷在、大番相勤候家筋
 ニ御座候、以上、

山之内八郎兵衛

右八郎兵衛家ハ、當山之内勘兵衛祖父山之内勘兵衛ニ
 男山之内八左衛門与申者八郎兵衛父ニ而御座候、八左
 衛門儀御書院方筆者相勤申候、八郎兵衛事ハ諸御座筆
 者其外輕御奉公相勤、當分御勘定所御支配方賦役相勤
 申候、代々御城下ニ罷在、大番相勤候家筋ニ而御座候、
 以上、

条、弥右衛門儀大御番ニ可被召入儀与吟味仕候、以上、
 但正徳三年巳十二月六日 川 肥 田

木脇善助

右藤左衛門先祖代々肥後國天草郡之内志岐城主ニ而、
 其後菊池家ニ相從候、天正年間 秀吉公九州御下向之
 節、藤左衛門祖父志岐小左衛門事、志岐城没落仕、加
 藤主計清正江被召預候、依之清正より高四百石小左衛
 門へ被宛行、清正之嫡子不幸有之御預ニ被為逢候ニ付、
 小左衛門事彼地ニ罷居候事不罷成、且又小左衛門母ハ
 嶋津義虎之嫡女ニ而、母ハ入来院家之娘ニ而候故、小
 左衛門事右由緒を以 御家を奉頼、入来ニ初而罷越候、
 然者 龍伯様御娘御平様与奉申候ハ義虎之室ニ而御座
 候、右小左衛門母ハ 御平様之御子嶋津備前忠清之為
 ニハ他腹之姉ニ而、 寛陽院様御母堂慶安様之御父備
 前忠清ニ而御座候得ハ、小左衛門母ハ慶安様之伯母ニ
 而御座候、右之訳ニ而 寛陽院様江御由緒有之候小左
 衛門事從 寛陽院様御高三百石拜領被仰付、入来江居
 住仕、正保三年、於彼地死去仕候、右之通少々御由緒
 茂有之、又ハ入来江罷居候ニ付御番等茂不仕筈ニ御座
 候、右小左衛門嫡子藤左衛門事鹿兒嶋へ罷在候得共、
 親小左衛門引次ニ而御番不仕、當藤左衛門迄不相替其

志岐藤左衛門

通ニ御座候、末略之、寶永五年子五月小番入調書之内ニ有之、

但御太刀・二種一荷進上、二男御太刀進上、

田代甚助

右家筋、古来大隅之内田代村傳領、從 御家被成下候御文書等格護仕候、 太守元久公御代應永年間、九州之探題渋川兵衛佐滿頼之下知ニ而御當國より軍衆被差越候ニ付、田代肥前久助事惣大将ニ而探題江被差遣候、此肥前ハ當甚助より十一代之祖ニ而御座候、右久助嫡子肥前清定事、所領ニ相離漸々衰微為仕与相見得申候、甚助五代之祖田代助六与申者、慶長十年之比高三百三拾石余致所持、其後弥及逼迫、甚助親甚右衛門事船大工之家職を以渡世仕候、然處ニ古来歴々之家筋迄を以先御代甚助事御太刀進上ニ而 御目見被仰付候、是以過分之事ニ御座候、然ハ此節甚助より申出候ハ、代々御番御免之家筋ニ而候由、親甚右衛門より申聞置候由申出候、依之甚助方江問届申候処ニ、御番御免之證據無之、家傳迄ニ而御座候由申出候、此末略之、甚助親

61

60

甚右衛門事別ニ致様茂可有之處ニ、船大工を以渡世仕候儀ハ、古来之家筋相捨り、是迄ニ而家風断絶為仕ニ而御座候、右通ニ御座候得ハ、甚助事小番ニ可被召入訳無御座候条、大御番ニ可被召入儀与吟味仕候、末略之、 寶永五年子五月七日 肥 田

市来源右衛門

右源右衛門祖市来備前家廉与申者薩州家ニ罷居候、右家廉六代之孫市来備後(家利) 太守貫久公ニ罷出奉仕、永禄十年於菱刈市山御一戰之時、為抽戰死仕候、此儀 貴久公御譜中ニ被記置候、然ハ薩州家ニ数代罷居候者之子孫ニ而、其上守護方ニ罷出候而、地頭職を茂不被仰付家筋ニ而御座候間、御太刀進上之儀ハ御免許無之筈ニ御座候、末略、

日高六郎兵衛

右六郎兵衛家ハ當日高曾右衛門祖父之二男ニ而御座候、曾右衛門祖父主膳入道紹賀ハ日高宗可与申者之二男ニ而御座候処ニ、醫道を以被召仕、夫故鹿兒嶋士ニ罷成

候、右宗可子孫ハ于今串良柏原濱人ニ而御座候、六郎兵衛父勝右衛門事御書物方被仰付、六郎兵衛初而山奉行・物奉行被仰付、物奉行ニ而江戸詰をも相勤申候得共、右家筋之者ニ而候得者、勿論小番被仰付家ニ而無御座候間、大番可被仰付儀与詮儀仕候、以上、

寶永二年酉七月 市 肥

汾陽源右衛門

右汾陽源右衛門事兄汾陽八右衛門跡相續被仰付候ニ付、

(光教)

(盛卷)

小番被召入度之旨此節奉願候、源右衛門家之元祖ハ大唐郭氏ニ而、郭子儀与申人封汾陽王候故、家号を汾陽氏ニ相立候、其子孫光禹、後郭國安与申候、郭國安事、天文六年、日本為見物薩州京泊ニ入津仕、 太守義久公被及聞召鹿兒嶋ニ被召寄候、其後大唐江可罷帰由ニ而御暇申上候得共、頻御留被成候ニ付御當國ニ罷在、義久公之御意を以理心与改名被仰付、唐人醫師高陽許三官弟子ニ罷成醫道稽古仕、朝鮮御討治之時、醫道并朝鮮國書翰贈答可有之事ニ付而彼地江罷渡御奉公仕候、然処ニ慶長三年冬、大明・朝鮮之大軍 太守義弘公之

御居城泗川新塞へ取掛候時節、 義弘公以御謀右理心江被仰付候、御帰朝之後段ニ御高拜領被仰付、五百石ニ罷成候、且又理心弟建台与申者御當國へ罷渡、可罷帰由申達候得共、理心事不罷帰候ニ付、系圖耆册理心江相渡、弟建台大唐へ為罷帰由候、理心嫡子汾陽采右衛門光程、二男汾陽正右衛門光昌与申候、采右衛門事致死去、女子一人有之候ニ付而、二男正右衛門嫡家相續仕、其子當汾陽茂右衛門ニ而、嫡流相續之證書并系圖等格護仕候、右之通理心嫡子采右衛門事女子有之候ニ付、右之女子江法元仁右衛門二男次郎右衛門致縁組、汾陽次郎右衛門光東与相改、汾陽氏之二男家ニ相立候、右次郎右衛門嫡子八右衛門、其弟當源右衛門ニ而御座候、八右衛門事吟味御役、地頭職被仰付候、八右衛門直子無之ニ付、弟源右衛門江跡相續被仰付候、然者汾陽氏二男家ニ而ハ御座候得共、地頭職迄被仰付、結構ニ為被召仕儀ニ御座候条、源右衛門奉願候通小番ニ可被召入儀与吟味仕候、以上、

門司伊兵衛

右養父門司金右衛門小番相勤申候間、伊兵衛儀も不相替小番ニ被召入度之旨奉願候、門司氏上代不詳候、伊兵衛養曾祖父門司安意(光宗)与申者初中國ニ罷在、致出家諸國修行仕、其後大内家ニ暫為罷居之由候、左様ニ御座候而、御當國ニ參上仕 大守義弘公江罷出、御右筆相勤為申之由候、安意嫡子門司安右衛門(元正)、其子金右衛門ニ而候、金右衛門事騎馬御奉公仕、小番相勤為申之由ニ御座候得共、其砌ハ家筋之御調無之時節ニ候故、小番為相勤ニ而御座候、金右衛門養子伊兵衛事小番入不替被仰付度旨申出候得共、右調之通ニ御座候得者、小番可被仰付家筋ニ而ハ無御座候条、大番ニ可被召入儀与詮儀仕候、以上、寶永二年酉九月 市 肥

郷田源助

右源助先祖小野太郎家綱、嫡子家重兩代相續而薩州日置郡之地頭ニ而、京都大番并筑前筥崎吳國警固番等相勤候、家重一子無之、弟家長家相續仕、日置之内大田村ニ致居住、大田太郎家重(長九)与申候、其子式部大夫家氏肥前國松浦庄早湊村・同國福万名地頭職ニ而松浦庄ニ

罷在、郷田与家号を相改候、家氏子家房松浦之庄を相離レ日州ニ致移居、肝付八郎兼重之家臣ニ罷成、元弘・建武之乱兼重於高城遂一戦必死ニ相極リ候節、郷田式部家定兼重与名乘自殺仕候故、兼重必死を相通候、依之兼重忠死を感、家定嫡子金太郎江伴姓を授、今以兼之字を傳來申候、金太郎十二代之孫源左衛門兼重与申候者 龍伯様(義久)より御知行被下、日州宮崎江被召移候處、秀吉公西征之時鹿兒嶋江罷出、御知行八拾石被下候、源左衛門嫡子源助(兼吉)、其子三郎右衛門(兼定)、其子當源助ニ而御座候、源助初而之 御目見ニハ中紙進上仕候得共、右家筋を以、先年源助家督之御礼申上候節御太刀進上之願申出、調被仰付候節相調申候ハ、先祖共一節肝付之家臣ニハ罷成候得共、先祖家筋差立候間、二種一荷進上御免候而 御目見被仰付候ハ、可然与巳年申上置候、以上、寶永五年子六月三日 肥 田

二階堂出右衛門

右出右衛門先祖左兵衛尉元行与申人江從 實朝公相模國懷嶋殿原郷地頭職補任之御下文致頂戴、其外於代々

諸所庄園地頭職補任之證文多々致筒藏候、正應五年、

隱岐三郎左衛門尉泰行事為異國警固始而所領阿多北方

田布施之事ニ而候、罷下候儀、鎌倉執權之奉書相見得申候、夫

より子孫御當國ニ罷居、中古迄ハ田布施致傳領、將

軍尊氏公 直義公之御證判并執權探題之奉書、又ハ

貞久公 師久公 元久公之御證判、其外文書大分ニ致

筒藏候事、

一 先祖隱岐三郎左衛門尉代ニ阿多郡地頭職・郡司代、顯

娃郡右同、知覽院右同、是茂從 將軍家被下置候御下

文ニ相見得申候由申出候得共、 將軍家之御下文ニ而

者無之、足利右兵衛佐直冬之御判ニ而候、其比御當國

ニ而も 官方・ 將軍方・直冬方与申候而、三方ニ相

分為申事ニ候、直冬より為宛行地者大形文書迄ニ而、

実ニ相領候者稀ニ而御座候、其外諸所被下置候儀者申

出之通ニ而候事、

一 上代古系圖者有之候得共、中古以來之系圖無之故、世

系不詳候得共、右格護之文書を以考申候得者、出右衛

門事ニ階堂氏之嫡流ニ而茂可有之哉与存候、二階堂與

右衛門家ニ茂 將軍家之御下文其外差立候文書数多致

筒藏候得共、是茂中古以來家系不詳候、乍然田布施為
致傳領者出右衛門家与相見得申候事、

一 出右衛門親源右衛門事田布施衆中ニ而罷居候処、文書

致格護候由緒を以鹿兒嶋高ニ被仰付、御番入を茂不被

仰付由申出候、右申出之通、家筋之由緒を以為被召出

儀者左茂可有之候得共、御番御免為被仰付与申候儀ハ

疑敷存候、其故ハ、家ニ付御番御免之格式御取持被仰

付候者、其家風ニ而則御太刀進上を茂可被仰付之処ニ、

左様ニ無之、成程輕キ様子ニ而、御臺所日帳役ニ被召

仕置、漸出右衛門より社御太刀進上を茂為被仰付事候、

尤小番之儀ハ前々一所拜受之家又ハ御家老職被相勤候

人之嫡子ニ而茂為被仰付事ニ御座^(行カ)御座候得者、為差下

事ニ而無之候、然ハ源右衛門御番不相勤儀、御當地ニ

被召出候而茂無高無屋敷ニ而罷居候得者、前々より御

番不相勤咎ニ御座候事、

右者書略之、寶永三年戊八月十八日 田市

崎元才右衛門

右才右衛門事當崎元休右衛門差次之弟ニ而御座候、休

右衛門先祖代々御城下ニ罷居候、曾祖父崎元對馬儀、天正年間嶋津中務太輔家久佐土原江被為移候節、致供彼地江罷移、悴與六相共ニ家久江奉公仕候、與六致成長崎元惣右衛門与申候、後ニ父子如鹿兒嶋帰參仕候、左候而、對馬隱居仕、惣右衛門對馬ニ罷成、御臺所方小野坂元名御藏入高之儀數年承候由、右對馬男子小七事幼稚、其上病者ニ而御座候ニ付、鮫嶋源左衛門与為申者之ニ男を躰養子ニ仕、致出生候男子崎元清左衛門ニ而候、才右衛門ハ右清左衛門ニ男ニ而御座候、才右衛門儀江戸詰之横目役相勤、於御當地茂座横目等相勤申候、尤大番相勤申家筋ニ而御座候、以上、

正徳四年午正月

有川四郎左衛門

右家筋調被仰渡候、四郎左衛門事ハ有川仲右衛門家之二男ニ而御座候、仲右衛門家之儀先祖代々御城下ニ罷在、五代之祖有川淡路より祖父有川淡右衛門迄三代納殿役相勤、親有川治兵衛事奉行職相勤、江戸江茂御馬廻之御奉公相勤為申者ニ而御座候、當仲右衛門事代

々小番相勤申候、四郎左衛門事ハ大番相勤申筈之家筋ニ而御座候、以上、

肥後長左衛門

右家筋調被仰渡候、長左衛門家之儀先祖代々御城下ニ罷在候、曾祖父肥後長左衛門、祖父肥後平右衛門事吟味役ニ而、地頭職被仰付候、親肥後長左衛門事督不仕内致死去候故、祖父平右衛門より直ニ當長左衛門江家督被仰付候、尤代々小番相勤申家筋ニ而御座候、以上、

救仁郷善兵衛

右善兵衛家ハ當救仁郷長樂坊家之二男家ニ而御座候、當長樂曾祖父救仁郷長樂坊事家久公御代御祈念為山伏飯隈山より被召出、高五拾石被下御城下士ニ被召成候、善兵衛亡父救仁郷之悦儀ハ高山衆中小城助左衛門ニ男ニ而御座候処ニ、右長樂為ニハ外孫ニ而御座候故、出生仕候節より長樂乞受致養育、成長之後二男分ニ仕度旨奉願、蒙御免ニ男家ニ取立為申家筋ニ而御座

候、尤大番相勤申家ニ而御座候、以上、

70

川村慶智

右家筋調被仰渡候、系圖所持不仕故相知不申候得共、先祖共数代 御城下士ニ而為罷居由ニ御座候、慶智親代より御書院御茶道役勤来申候、尤大番相勤候家筋ニ而御座候、以上、

71

神宮司新右衛門

右新右衛門曾祖父神宮司新右衛門、祖父神宮司長左衛門事与力役相勤、亡父長左衛門事檢者役相勤為申者ニ御座候、代々 御城下士ニ而御座候与相見得申候、尤大番家筋ニ而御座候、以上、

72

豎山佐太夫

右家筋調被仰渡候、佐太夫曾祖父豎山助兵衛以来 御城下士ニ而御座候由、助兵衛子豎山小兵衛事ハ 光久公御代定御供役相勤、居屋敷并高百式拾石餘所持仕候得共、子共無之死去仕候ニ付、 光久公被召仕候御小

74

竹下八兵衛

右家筋調被仰渡候、八兵衛曾祖父竹下大学与申者元来加世田衆中ニ而御座候処ニ、朝鮮國江御渡海之節為走

姓河野五右衛門与為申者を小兵衛死跡継嗣ニ被仰付、豎山利兵衛ニ罷成、家相續仕候、後ニハ吉井・狩野扨同格ニ 御近習江被召仕候、利兵衛嫡子佐太夫ニ而御座候、右通養子筋ニ而、曾祖父助兵衛以前之儀ハ然与相知不申候、尤大番相勤候家筋ニ而御座候、以上、

73

伊勢平蔵

右家筋調被仰渡候、平蔵事ハ (義也) 惟新様御家老相勤申候伊勢平左衛門二男伊勢左近与為申者之直子ニ而御座候、然共左近儀身帶逼迫仕、外城養子之願申上、蒙 御免松山衆中吉田藏之助子治部右衛門を養子仕、伊勢治部右衛門ニ罷成候、家相續仕候ニ付、平蔵事乍直子二男ニ罷成候、然ハ治部右衛門子當伊勢仁右衛門家之二男家ニ而御座候、尤平蔵事ハ大番相勤申家ニ而御座候、以上、

衆御供仕候、大学竹下(子脱力)覚右衛門代御兵具所附士ニ御赦免被仰付、御輿ニ被召入、御兵具所肝煎役相勤申候、右覚右衛門二男竹下正右衛門与申候、是則八兵衛親ニ而御座候、正右衛門事肝煎役相勤申候、八兵衛事當分御兵具所押番相勤申候、以上、正徳四年午二月

土持勝左衛門嫡子

土持鉄之助

右家筋土持次郎九郎家之支族ニ而御座候、土持伊豆政綱与申者勝左衛門六代之祖ニ而、此政綱事 太守勝久公御家老職相勤候、大永六年之冬、從 勝久公 貴久公御養子之儀ニ付、右伊豆政綱・村田越前武秀・梶原備前景豊江御使被仰付、日新様被應其意候、依之

(忠良)

貴久公十五代之 太守ニ被成御定候、同七年、島津実

久 貴久公を可奉討之企ニ付、右政綱より密ニ為御知申上、 貴久公被披 御運、鹿兒嶋被成御退田布施ニ御帰候、右ニ付実久より 勝久公江申上趣有之、政綱を御討セ可被成与之催有之ニ付、政綱自宅へ火を放自殺仕候、政綱嫡子若狭事若年より 日新様へ被召仕候、其子若狭(利綱)与申候、是當勝左衛門高祖父ニ而御座候、右

段々之家筋ニ付、勝左衛門事茂家ニ付御太刀進上為仕儀ニ御座候間、嫡子鉄之助事茂不相替御太刀進上可被仰付儀与詮儀仕候、以上、

本田次郎右衛門

右家筋、本田氏十代之家督信濃守重垣(恒)与申者、是次郎右衛門家之元祖ニ而御座候、重垣事 太守忠國公之御代御家老職相勤、依讒訴家督を甥之國親ニ被奪候、然者重垣十代之孫當次郎右衛門ニ而御座候、然ハ右家筋ニ御座候間、願之通家ニ付御太刀進上可被仰付儀与詮儀仕候、以上、

鎌田源右衛門

右家筋ハ鎌田氏之二男家田布施篠原諸左衛門与申者之庶流ニ而、鎌田氏ニ而茂末々之家筋ニ而ハ御座候得共、當十左衛門高祖父(曾之)左京政徳、其子左京政喬、嫡子(政辰)藤兵衛、其子當十左衛門ニ至四代地頭職被仰付、結構ニ為被召仕事ニ御座候間、十左衛門并嫡子源右衛門御目見之節、家ニ付御太刀進上可被仰付儀与吟味仕候、

右家筋ハ、大田氏薩州家之二男下野守延久、是則大田氏之元祖ニ而御座候、延久嫡子下野守昌久妻ハ伊作又四郎善久之息女、日新様之御妹ニ而御座候、依之昌久之嫡子中務太輔忠成、其弟周防介忠續、此兄弟者日新様之御甥ニ而御座候、右周防介忠續ニ男家ニ相立、當八之進六代之祖ニ而御座候、右通乍ニ男家元祖者御由緒有之事ニ御座候、其上八之進祖父筑左衛門事地頭職為被仰付事ニ御座候条、八之進御目見之節、家ニ付御太刀進上可被仰付儀与吟味仕候、以上、

伊勢六郎左衛門

右六郎左衛門六代之祖有川治部少輔貞則与申者迄ハ系圖ニ相見得申候得共、其以前相知不申候、然処ニ貞則嫡子長門守貞清代、義弘公御意を以伊勢兵庫頭貞景ニ申上、御免許之上本名伊勢ニ改候而、系圖之繫を伊勢因幡入道如芸家系之内より繫可申旨、如芸免状有之

以上、

大田八之進

候、義弘公之御家老伊勢雅樂助入道任世者長門守差次之弟ニ而、任世子孫者伊勢平太夫、伊勢弥九郎ニ而御座候、扱長門守儀ハ義弘公家久公へ奉仕、所々地頭職を茂被仰付候、朝鮮國ニ茂致御供軍勞仕候ニ付、其趣義弘公より御書被下置候、其後朝鮮以来御奉公仕候故、御加增高百石被成下候、貞朝嫡子六郎左衛門貞秋茂所々地頭ニ被轉補候、貞秋嫡子六郎左衛門貞増是茂引繼而所々地頭職被仰付、吟味御役・御目附御役等相勤申候、其子當六郎左衛門ニ而御座候、右通曾祖以来亡父迄ハ相繼而地頭職被仰付候一筋与申、殊ニ於御家中ハ伊勢氏之嫡流ニ而、代々御太刀進上仕来候間、不相替此節茂願之通可被仰付儀与詮儀仕候、以上、

堀四郎左衛門

右四郎左衛門親堀甚左衛門先祖ハ豊後國大友氏之支族ニ而御座候、御家十一代之太守忠昌公之御簾中大友豊前守政親之御娘ニ而御座、此時御輿寄之役ニ而御家ニ致参上、子孫引次而御家臣ニ罷成候、甚左衛門六代之祖堀孫右衛門与申候、其子甚左衛門興親事乱國之

時節於所々ニ軍勞仕、寛永三年 中納言様御參 内之(家人)
 御供仕、尤地頭職被仰付候、右甚左衛門嫡子四郎左衛
 門興延御用人御役、所々地頭職被仰付候、其子弥右衛
 門・弟甚左衛門兄弟共ニ家相續仕候得共、男子無御座、
 當甚左衛門事(與旨)ハ本田與兵衛親昌二男ニ而、母者四郎左
 衛門興延娘ニ而御座候ニ付、外孫之故を以養子ニ罷成
 候、甚左衛門嫡子當四郎左衛門ニ而御座候、然者代々
 地頭職被仰付、結構ニ被召仕候条、四郎左衛門事家ニ
 付御太刀進上可被仰付儀与吟味仕候、以上、

和田五郎兵衛

右和田五郎兵衛事御太刀進上願申上候、五郎兵衛之儀
 庄内高城之城主和田氏之餘裔与相見得申候得共、系圖
 無之候故家筋相知不申候、五郎兵衛曾祖父讚岐事 公
 方様江御使者相勤申候節 御前江被召出、御直ニ
 上意為有之由相見得申候、其後大根占地頭職被仰付候、
 然者家筋相知不申候、先祖差立候勲功相見得不申候故、
 此節之御格式を以ハ御太刀進上被仰答(付脱力)ニ無御座候条、
 弓進上可被仰付儀与吟味仕候、以上、

面高連長院

右面高連長院事始而 御目見願申上候、親真連院家筋
 上代不分明、六代之祖宥仙坊英俊与申者より相知、代
 々山伏ニ而御座候、此英俊嫡子真連坊頼俊元龜・天正
 年間乱國之時分別而軍勞仕候、左候而、日州善哉坊住
 職被仰付、其御諸國干戈之時節ニ御座候処ニ、方々御
 使首尾克相勤候、此段ハ申出候由緒書之通ニ御座候、
 右頼俊嫡子連長坊俊昌善哉坊より御當地江被召移、御
 高三百斛為被成下之由、左候而、俊昌二男宥仙坊善哉
 坊住職被仰付候、俊昌嫡子善隆院俊康、其子連長院俊
 心、嫡子當真連院俊賢、其子連長院ニ而御座候、然者
 乱國之時節為御家之先祖方々江御使被仰付、別而苦勞
 仕候、且又代々小番を茂勤來候家筋ニ御座候、然共御
 太刀進上之儀ハ御免無之筈ニ御座候間、先祖段々之勲
 功を以、連長院 御目見之節弓進上ニ可被仰付儀与詮
 儀仕候、以上、

川田甚右衛門

右甚右衛門養父川田弥右衛門家ハ、川田氏七代之家督

三郎太郎義清嫡子長門守義親一流ニ而御座候、義親事ハ嫡ニ而御座候処ニ、叔父三郎四郎立昌家臣等ニ相謀、家督を奪申候、太守忠昌公より茂川田氏之惣領職を立昌ニ被仰付候、此一流當川田長右衛門ニ而候、右之通弥右衛門家ハ嫡ニ而御座候得共、庶流ニ罷成身帯共ニ致衰微、近代御太刀進上為仕儀茂無御座候、零落為仕家ニ而御座候間、御太刀進上御免不被遊、中紙進上可被仰付儀与吟味仕候、以上、

相良清兵衛二男

相良清之進

右相良清之進初而之 御目見御太刀進上之願申出、親(頼庸)清兵衛家筋ハ肥後國求摩相良氏之支族犬童(頼安)作入道休意与申候、右休意嫡子清兵衛代ニ本家相良氏ニ相改、代々相良氏之家臣ニ而御座候、清兵衛嫡子内藏之助頼安妻者島津中務家久之息女、惟新様御娘分ニ而御座候、右内藏之助嫡子喜平次事家久之外孫ニ而御座候、喜平次祖父清兵衛事、求摩仕置之事ニ付奥州津輕江御預ケニ罷成候、依之喜平次事 家久公之外孫故 御家ニ被召抱、後内藏之丞与申候、是當清兵衛養祖父ニ而

御座候、然者清兵衛嫡子之儀者家ニ付御太刀進上被仰付筈ニ御座候得共、二男迄御太刀進上可被仰付訳無御座候条、清之進 御目見之節中紙進上可被仰付儀与吟味仕候、以上、

五代喜左衛門嫡子

五代助十郎

右喜左衛門祖父五代平右衛門者、當五代勝左衛門五代之祖右京亮友慶四男ニ而御座候得共、兄一人致出家候故三男家ニ相立申候、喜左衛門家ニ相分申候而為差立御奉公茂不仕、殊更勝左衛門家之三男ニ而、今以大番ニ被召入置候間、中紙進上相應ニ御座候条、助十郎事弥以中紙進上可被仰付儀与相調申候、以上、

本田新助弟

本田新兵衛

右本田新兵衛事初而之 御目見二種一荷進上被仰付度旨願申出候、新助家ハ本田家ニ茂末々之庶流ニ而御座候、然共高祖父本田甲斐親良事泊地頭職被仰付、其子右衛門親平吟味御役被仰付、所々地頭職相勤申候、右衛門事於王子村犬追物被備 上覽候節射手相勤申候、

右通之由緒ニ而御座候得者、嫡子之儀ハ御太刀進上被仰付家ニ御座候得共、二男迄御取分ケ被遊家ニ而無之候、中紙進上相應ニ御座候条、中紙進上可被仰付儀与詮儀仕候、以上、

海老原筑兵衛

右家筋當座へ相知不申候、系圖等無御座候、乍然筑兵衛曾祖父海老原甚兵衛与為申之由候、其子善左衛門代身上別而差迫、子共介抱仕儀難叶候ニ付、嫡子甚兵衛事大山伊豫江頼置、伊豫御厩別當相勤罷在候ニ付、甚兵衛伊豫方江罷在、助力を請渡世仕、其後馬醫・御責役兼役相勤、先御代周防殿御方假別當被仰付候、尤最前甚兵衛伊豫方江罷在候節も御直士ニ而為罷居之由候、然ハ曾祖父甚兵衛より筑兵衛迄四代之儀ハ士ニ而御座候段ハ別条無御座候、筑兵衛家筋相知候趣如此御座候、以上、 寶永七年寅五月 肥 田調之、

ニ而、弥兵衛格護之町屋敷を虎屋与申候故、家号を虎屋与世人唱為申由候、慶長七年、忠恒公初(家久)而御上洛之節被召抱候、御當國ニ罷下、御高三百石被下置候、慶長九年、依 勅誥上方ニ被召登、於 禁裡御能被仰付、則被任長門守候、左候而、元和六年御加增高拜領ニ而、都合千石ニ被召成候、自分家ニハ元來ハ窄人之由申傳候、其後小幡を相改、中西名字ニ罷成申候、年頭ニハ諸地頭并ニ御太刀進上仕、今以其通ニ御座候、御切米六拾石被下來候儀ハ、當座へ其由緒相知不申候、以上、 寅七月 市 肥

平田平六

右由緒書之内、文右衛門曾祖父小幡弥兵衛事能之上手

中西文右衛門

右家筋ハ平田監物家之二男家ニ而御座候、監物家元祖者平田家嫡家平田美濃重宗之二男民部宗保与申者ニ而御座候、宗保直孫安房宗知之二男平田民部宗貞与申者平六家之元祖ニ而御座候、平六先祖共之内豊前宗祇、民部左衛門宗直、民部左衛門宗増三代者所々地頭職被仰付、宗増子吟味御役迄被仰付候、是平六祖父ニ而御座候、代々御太刀進上仕候家筋ニ而御座候、以上、

寶永四年亥十月

90

伊東半右衛門

右半右衛門養父伊東三左衛門事ハ、木脇次郎右衛門曾祖父伊東肥後祐辰二男ニ而御座候、次郎右衛門先祖木脇名字名乘来候処ニ、右肥後代ニ本名之由ニ而伊東ニ相改申候、然處先年次郎右衛門より先祖共木脇名字ニ而段々御奉公為相勤由緒を申上、木脇名字ニ相改申候、然ハ半右衛門事次郎右衛門家より近代相分レ候庶流ニ而御座候間、願之通木脇名字ニ相改候儀御免被成候而差支申儀有之間敷与相考申候、以上、 亥十一月七日

91

平野佐次兵衛

右家筋調被仰渡候、佐次兵衛家代々 御城下士ニ而御座候、祖父平野伊兵衛、養父平野次郎兵衛兩代御祐筆相勤、次郎兵衛事十人御賦ニ而江戸御奉公相勤申候、佐次兵衛事ハ次郎兵衛弟平野助七忰ニ而候処ニ、次郎兵衛養子ニ被仰付、大御番相勤申家筋ニ而御座候、以上、

92

四元平兵衛

右ハ二男四元半右衛門へ分地仕度旨奉願候ニ付、家筋調被仰渡候、平兵衛家之儀ハ伊集院家氏族四元八郎家之庶流ニ而御座候、平兵衛四代之祖四元主悦^(税カ)男子無之候ニ付、小根占衆中神之脇主左衛門嫡子を養子ニ仕、四元隼人与申候、隼人事男子無之故、鹿兒嶋士四元彦兵衛二男を養子ニ仕、四元伊右衛門与申候、其已後為右衛門事隼人養子違変仕候ニ付、鹿兒嶋士古後七郎右衛門二男を養子ニ仕候、是則當平兵衛ニ而御座候、尤先祖已来輕御奉公相勤、大御番相勤候家筋ニ而御座候、以上、 正徳六年閏二月

93

指宿休左衛門

右休左衛門事先祖代々 御城下士ニ而御座候、祖父指宿才淵御醫師相勤、親指宿立甫事茂醫道仕候、休左衛門事大御番相勤候家筋ニ而御座候、以上、

94

福嶋新助

右福嶋新助事伯父福嶋庄助跡目養子被仰付候、養父庄

助小番相勤申候間、小番被仰付被下度旨申出候、新助先祖福嶋佐渡守日州八代ニ罷居、慶長五年（義弘）惟新様聞ケ原御退陣之砌、伊東殿家臣稲津掃部与申者一揆を起候節、榎木平右衛門同前ニ八代を守、惟新様を奉迎由候、左候而、佐渡守直孫福嶋新助為質向之嶋ニ被召寄置、後ニ佐渡守并嫡子清右衛門同前ニ御當地ニ為被召移由候、右之外先祖勲功相見得不申、尤古来小番相勤候筋目ニ而無之、養父庄助代より小番相勤為申由候、然ハ新助事大番被仰付可然与吟味仕候、以上、

伊東左兵衛

右伊東左兵衛亡父伊東松右衛門事小番相勤申候間、不相替小番被仰付被下度之旨奉願候、左兵衛家筋ハ伊東（祐平）刑部左衛門二男ニ而、刑部左衛門祖父伊東駿河事日州（祐忠）飲肥伊東大和守殿支族ニ而御座候、駿河稲津掃部与申者ハ不和之様子有之、飲肥領立退致窄人、大坂邊ニ罷居候処ニ、惟新様江可被召仕之由ニ而、御高千石拜領被仰付、駿河嫡子九左衛門与申候、九左衛門嫡子當刑部左衛門吟味役相勤、地頭職被仰付、刑部左衛門弟

松右衛門与申候、是則左兵衛親ニ而御座候、左兵衛より申出候ハ、亡父松右衛門事小番相勤候間、不相替被仰付度之由申出候得共、此以前小番相勤候ハ指立候家迄ニ而（儀方）鐘之人数有之候、然處中比家筋之御詮儀無之小番ニ為被召入由ニ御座候、左兵衛親松右衛門事二男ニ相立、家之功も無之候得ハ、小番ニ可被召入廉相見得不申候、然ハ左兵衛願之筋ニハ難被仰付事ニ御座候条、大番ニ可被召入儀与詮儀仕候、以上、

田中吉左衛門

右親田中後藤兵衛小番相勤申候間、吉左衛門事（中七）茂小番被仰付度旨申出候、田中氏者日野大納言殿氏族之由候得共、究而其故相知不申候、貴久公御代田中玠阿弥与申者御同朋役被仰付置候、是則田中氏之嫡家ニ而、加治木ニ罷在候日野五郎右衛門家筋ニ而御座候、右五郎右衛門四代之祖田中内膳与申者、文禄年間於京都日野大納言殿江由緒之趣申達、日野氏被差免候、吉左衛門家ハ右玠阿弥二男田中大膳後對馬与申候、對馬事於所々軍勞有之、（義久）龍伯様分ニ被成御座候節御膳配役相

勤、慶長十一年、鹿見嶋・帖佐・國分三方より大石御進上ニ付、對馬事國分方石船之主被仰付、江戸江被召上由候、其後國分御上様江被召附候、右大膳嫡子後藤兵衛、其子又後藤兵衛、嫡子當吉左衛門ニ而御座、然者右家筋ニ付而小番ニ可被召入訳相見得不申候間、吉左衛門事者大番ニ可被召入与吟味仕候、以上、但小番ニ被召入置候、

大野隼人

右大野・吉利之儀ハ薩州家之庶流ニ而御座候、大野氏者吉利氏之兄ニ而御座候得共、龍伯様御代大野駿河(忠志)守事故有之切腹被仰付、家断絶仕候処ニ、其後駿河守(妙卷)女子より奉訴趣有之、大野家被召立候、依之大野家ハ兄ニ而御座候得共、御太刀進上之儀吉利家与隔年ニ御座配為被相究置事ニ御座候、然ハ此節右御座配可被相改儀ニ無之候、尤養子權(久矩)之丞儀隼人(久明)ニハ為相替儀ニ御座候由被申出候得共、養子ニ付家之格式相替可申儀ニ無御座候条、願之筋ニハ被仰付間敷事与詮儀仕候、以上、但寶永二年酉十二月 市 肥 田

阿多六郎右衛門 右家筋ハ阿多氏嫡家三代之家督飛彈守經久二男長門守与申者之家筋ニ而、六郎右衛門高祖父以来代々御城下ニ罷居、殊ニ祖父六郎右衛門以来ハ結構ニ被召仕候、代々小番相勤候家筋ニ而御座候、以上、

正徳三年巳十一月

市来次郎左衛門

右家筋大概嫡家市来次左衛門(家親)五代之祖備後守家利与申者之弟民部左衛門与申者、竹之内隱岐与申候者之養子ニ罷成、其嫡子を竹之内織部(家政)与申候、織部代ニ竹之内家を辞シ申市来ニ罷成、名をも備後与改申候、是則次郎左衛門為ニハ曾祖父ニ而御座候、市来ニ立帰申候節、系圖を堅懇望仕候付、次左衛門祖父伴右衛門家尚より市来之系圖を寫候而遣為申之由、伴右衛門記置申候、次郎左衛門家ハ次左衛門家之二男ニ而御座候、備後嫡子助左衛門、其子長千代早世仕候ニ付、喜入久右衛門久供二男次十郎家賀与申候ニ助左衛門跡職被仰付、吟味役迄被仰付、次十郎代ニ阿多之地頭職被仰付候、次

十郎子當次郎左衛門ニ而御座候、御太刀之儀ハ次十郎より進上仕筈ニ而御座候、此末略之、元祿十二年九月

米良小右衛門嫡子

米良九郎右衛門

右小右衛門家筋ハ菊池家ニ而、肥後國米良山之領主米良石見守(重長)ニ男米良縫殿(重供)与申者當小右衛門祖父ニ而御座候、元龜・天正年間伊東氏御一戰之砌、石見守事御吟味方ニ致參上、於所々軍勞有之候、且又慶長四年庄内御出陣之節、右石見守嫡子(重隆)小右衛門・弟縫殿事相共ニ以手勢庄内ニ致出張、御陣中ニ罷在候、因茲(家久)中納言様より御感状被成下、御高五百斛拜領被仰付候、其後小右衛門より被奉願候者、被成下候御高五百石弟縫殿江附屬仕被召仕度之旨奉願、縫殿事始而御家ニ罷出候、右縫殿嫡子隼人、其子小右衛門事米良氏之二男ニ而、屹与御家ニ為被召出事ニ御座候条、九郎右衛門 御目見之節、家筋ニ付御太刀進上可被仰付儀与詮儀仕候、以上、寶永二酉十二月

相良李之助

右家筋相良氏之庶流稻留氏ニ而御座候、李之助六代之祖稻留新助長泰代ニ嫡家相良殿より免を以相良名字ニ罷成、後相良日向守入道閑栖与申候、所々地頭職被仰付軍勞仕候、其子女蕃助頼豊事於朝鮮國抽軍功遂戰死候、其養子李之助長信地頭職・御用人御役被仰付、光久公御繼目之御礼被仰付候節 公方様江 御目見仕候、其子李之助長貞事茂御用人御役・地頭職被仰付、其子當新右衛門迄地頭職相勤申候、然者家筋之儀ハ相良家末々之庶流ニ而候得共、右李之助長信 御目見仕候故を以、御太刀・二種一荷進上仕来候、末略之、

別府武左衛門

右家筋先祖代々 御城下士ニ而御座候、祖父別府式部左衛門事御納戸奉行相勤、地頭職被仰付候、式部左衛門男子無御座候ニ付、御當地土岩切六右衛門世倅岩切采女を躰養子ニ仕候、右采女世倅當武左衛門ニ而御座候、其後采女事病身ニ有之候ニ付、本家岩切ニ立帰申候故、武左衛門事祖父式部左衛門より家督相續仕候、

武左衛門儀御目附相勤、地頭職被仰付候、尤代々小番相勤候家筋ニ而御座候、以上、正徳六年申閏二月

別府源之助

右家筋ハ、別府武左衛門弟別府一角跡養子ニ被仰付候、武左衛門家代々御城下ニ罷居、武左衛門祖父別府式部左衛門事并武左衛門兩代地頭職被仰付候、尤源之助儀ハ大番相勤申筈之家筋ニ而御座候、以上、申三月

水引新田宮神職 執印丹下

右執印家筋之儀ハ惟宗姓ニ而、御元祖忠久公御下向無之以前より御當國ニ罷在、新田宮被補執印職ニ、子孫代々至當丹下執印職勤来申候、御元祖様御下向以来三ヶ國擾乱ニ付、凶徒御治罰之御祈禱丹下先祖江被仰付、或ハ支配下神職之者相促 御家ニ從軍仕候事度々有之候故、將軍家并 御家御證判之文書数通格護仕候、且又當丹下高祖父執印吉左衛門事ハ、中納言様高麗江御渡海之節幼少ニ而致御供、御帰朝以後執印職相勤、御船奉行兼役被仰付候、當丹下親丹下事新御番

ニ而江戸詰仕候、且又丹下家年頭ニ御祝儀申上候、継目家督初而之 御目見被仰付候節、御太刀進上仕来申候、延享二年丑六月調之、

立石太郎右衛門

右家ハ、立石五助与申者致浪人、狂言藝古仕罷居候處、家久公藝之程被聞召上、御扶持米七拾石被成下被召抱候、五助嫡子喜兵衛、其子當喜兵衛ニ而御座候、太郎右衛門ハ五助三男ニ而、喜兵衛家之三男家ニ而御座候、五助以来 御城下ニ罷居候、太郎右衛門事依藝身ニ當御切米三拾石被成下、且又大御番相勤申候、以上、

正徳三己十一月四日

本田五右衛門

右家筋調被仰渡候、五右衛門家之儀本田次左衛門家之二男家本田次兵衛家之二男ニ而、於本田家末々之庶流ニ而御座候、代々御城下ニ罷在、大番相勤候家筋ニ而御座候、以上、

岡元千右衛門

右家筋調被仰渡候、(重隆)千右衛門家之儀入来院家庶流ニ而御座候、祖父岡元千右衛門納殿役人相勤、親岡元勘左衛門以来奉行職相勤為申者ニ而御座候、代々御城下ニ罷居、代々小番相勤候家筋ニ而御座候、以上、

候、以上、延享二年丑六月廿二日調之、

自分覚、右和田六郎左衛門妻ハ(細其後迄)信證院様御妹ニ而、六

郎左衛門嫡子ハ和田源六兵衛、其子和田源太兵衛ニ而候、輕御奉公相勤候、休左衛門書物ニハ和田次右衛門庶流之

由申出候得共、其段ハ差扣申出候、

四元仲右衛門

右家筋調被仰渡候、此四元之儀ハ他家ニ而御座候、仲右衛門先祖伊集院衆中ニ而御座候処ニ、祖父四元主殿代ニ鹿兒嶋士ニ被召成、御城下江罷移、御家老與力又ハ京・大坂之藏役共相勤申候、従夫至仲右衛門三代御城下ニ罷居候、尤大番相勤申家筋ニ而御座候、以上、

110

一市来早左衛門(家年)虚白者市来千左衛門二男ニ而、市来家嫡家市来次左衛門(家親)養子ニ罷成候、千左衛門跡ハ當市来十郎右衛門ニ而候、市来惣兵衛家ハ市来千左衛門家之庶流ニ而、子孫市来甚左衛門ニ而候事、

111

有馬新助

右家筋、曾祖父有馬勘左衛門事奏者番御役相勤、地頭職被仰付、祖父有馬新右衛門事大坂藏奉行・奏者番等之御役相勤、是又地頭職被仰付候、亡父有馬次郎八事無役ニ而、小番相勤申候、當新助事當時無役ニ而、小番相勤申候、尤先祖代々御城下士ニ而、御太刀進上仕、代々小番相勤申候家筋ニ御座候、

右家筋、曾祖父有馬勘左衛門事奏者番御役相勤、地頭職被仰付、祖父有馬新右衛門事大坂藏奉行・奏者番等之御役相勤、是又地頭職被仰付候、亡父有馬次郎八事無役ニ而、小番相勤申候、當新助事當時無役ニ而、小番相勤申候、尤先祖代々御城下士ニ而、御太刀進上仕、代々小番相勤申候家筋ニ御座候、

延享二年丑七月調之、

和田休左衛門

右家筋調被仰渡候、休左衛門事ハ和田源太兵衛祖父和田六郎左衛門二男ニ而、初而別立被仰付候、六郎左衛門事田布施衆中ニ而罷居候処ニ、御城下士ニ被召出、何之勤方無御座候、休左衛門御留守居附諸檢者等相勤、當分無役ニ而罷在候、尤大番相勤申管之家筋(筋力)ニ而御座

宮下傳左衛門

右家筋調被仰渡候、傳左衛門亡父宮下傳内事清水衆中安田七右衛門二男ニ而、安田仁右衛門与申者ニ而候処ニ、御城下土宮下次郎右衛門繼目養子ニ被仰付候、養高祖父宮下主水左衛門代伊作より御當地へ被召移候、勳方相知不申候、養曾祖父宮下次次兵衛御家老座筆者役相勤申候、養祖父宮下次郎右衛門郡方筆者又ハ大嶋代官附役等相勤申候、亡父宮下傳内小役人相勤、其後御下屋敷奥横目相勤申候、當傳左衛門事當時無役ニ而、大御番相勤申候、 丑七月調之、

野村甚兵衛

右曾祖父野村藏之助御私方代官御役相勤候、祖父野村助左衛門寺社方中取相勤候、親野村慶左衛門長病者ニ而勤方無之候、當甚兵衛事 御守殿御鎖口添番、一代新番ニ被召入置、其以後道之嶋代官相勤、當分無役ニ而候、尤代々 御城下土ニ而、大番家筋ニ而御座候、以上、 延享二年丑十一月調之、

加納壽哲

右家筋調被仰渡候、壽哲事當加納五次右衛門祖父如心二男ニ而、去ル正徳六年、初而別立被仰付候、如心祖父加納大学、^(父脱之)加納五郎左衛門并如心迄代々伊作衆中ニ而罷在候処ニ、如心事醫道仕候ニ付而、先年 御城下士ニ被召出、御側御醫師相勤候、壽哲事當分 薩州^(宗信)様御方御側御醫師相勤居候、尤大番相勤申答之家筋ニ而御座候、以上、 延享二年丑十一月十四日調之、

村田庄八嫡子 村田五太夫

右者先頃手を負、夫故相果、跡職之儀ニ付親類共より内意申出候、五太夫事河邊衆中大重藤兵衛妻江兼而致密通、不審存候ニ付藤兵衛心懸居候処ニ、夜中右妻与五太夫列立居候ニ付、藤兵衛より切付候処ニ逃去、其疵故相果候、不所行ニ而右通士之格を相迦候付、五太夫事ハ士被召放、持高没収被仰付世を削られ候、村田家之儀ハ先祖品能被召仕候付、五太夫亡父村田庄内^(八カ)跡新規ニ半地ニ而家被召立候、代々小番ニ而、御太刀進上仕来候得共、大番ニ被召入、中紙進上被仰付、跡継

目養子相續之者申出候様被仰付候条、諸帳面等如何被申渡旨織部殿御差圖ニ而候、以上、北條(時守)織部殿ニ而候、

延享二年丑九月十一日義岡左平太印證文有、(久中)

伊集院弥八郎嫡子

伊集院八郎

右者親弥八郎事依科被處遠流、八郎事ハ親類御預、此程赦免被仰付候、依之家督被仰付、中紙進上ニ而大番ニ被入置候、本弓進上大番、

北郷傳太夫嫡子

北郷弥次郎(頼説)

右者親傳太夫事依科被處遠流、弥次郎事ハ親御預ケ、此程赦免被仰付候、依之家督被仰付、代々小番ニ而候得共、一等被相下中紙進上ニ而大番ニ被入置候、右之通被仰付候条、諸帳面如何可被申渡旨織部殿御差圖ニ而候、以上、

延享二年丑十一月十三日有川幸右衛門印證文有、本(貞利)

御太刀進上代々小番、

東郷藤十郎嫡子

東郷藤内後改藤助、

右者親藤十郎依科被處遠流、藤内儀遠慮被仰付置候処ニ、此程被成御免候、依之藤内へ家督被仰付、中紙進上ニ而大番ニ被入置候条、諸事如何可被申渡旨左衛門(鳥津久甫)殿御差圖ニ而候、以上、

延享二年丑八月十三日有川幸右衛門印證文有、

村田太右衛門

右先村田太右衛門家筋先祖代々勤方相糺可申出旨被仰渡、左之通ニ御座候、村田氏之元祖村田五郎經秀者菊池之領主兵藤四郎經頼五男ニ而、肥前國村田之庄を領地仕罷在候処ニ、經秀十三代之孫通善初而御家ニ罷出、九代之太守忠國公ニ奉仕候、肥前經房御家老相勤、其子肥前經安十代之太守立久公より至十一代忠昌公御家老相勤候處ニ、背忠昌公御意、明應四年七月五日、御誅罰被仰付候、其子經亮父御誅罰之節一族相共ニ肥後國江出奔仕、菊池家を頼數年罷居、十四代之太守勝久公之御代婦參仕、於帖佐遂戰死候、其子越前武秀勝久公御家老相勤、於加治木戰死仕候、其子越前經定十五代之太守貴久公より義久公迄御

家老相勤候、其子右衛門季久於馬越戰死、勤方相知不申候、其子右衛門經平 義久公御家老相勤申候、其子刑部經永田布施・穆佐等之地頭被仰付、勤方相知不申候、其子太右衛門秀經是又諸所地頭被仰付、八重山嶋番手相勤候、男子無御座ニ付、新納右衛門久詮三男五郎左衛門を養子ニ仕家致相續、村田（経貞）五郎左衛門与申候、奏者番・御勘定奉行等之御役相勤、諸所地頭職被仰付候、其子九郎左衛門山之口移地頭相勤、其後御用人御役相勤、地頭職被仰付候、九郎左衛門実子相果候ニ付、弟村田太右衛門事養子ニ罷成家相續仕、御馬廻相勤申候、太右衛門事男子無御座候ニ付、新納五郎右衛門叔父新納庄八事跡養子ニ罷成、村田庄八与申候、庄八繼目嫡子村田五太夫与相續仕来、御太刀進上仕来候、尤兩代無役ニ而、代々小番ニ被召入置候、右之通先村田太右衛門家之儀者村田家之嫡流ニ而、先祖共軍功有之、繪旨又者 御家太守公之御判物等被下置、五代御家老御役相勤、子孫地頭職等被仰付、為差立家筋ニ而御座候、此段申上候、以上、

延享二年丑七月六日調、

120

本名彦次郎 相良權太夫
右彦次郎八代之祖稻留丹波（後力）与申者 日新様（忠臣）より嶋津圖書殿先祖嶋津左兵衛尚久江被召附置、其後本名相良ニ相改申候、丹後身帯宜キ者ニ而、龍伯様（義久）より金銀之御用被仰付候節、大分ニ差上之候ニ付、為御褒美御高千石被成下、右高嫡子相良（長信）吉右衛門江致附屬、吉右衛門事國分江被召移 龍伯様へ御奉公仕候、其後朝鮮陣・関ヶ原之節（義弘） 惟新様始終之御供相勤申候、其子相良（長廣）主税御用人御役相勤、地頭所被下置、其子相良（長主）主税事（遺）茂御用人御役相勤、是又地頭職被下置候、主税養子相良權太夫事は又御用人御役相勤、地頭所被下置、其後御勘定奉行御役・與頭兼役被仰付候、權太夫子相良主左衛門新御番ニ而江戸詰仕、主左衛門子相良權太夫是又新御番ニ而江戸詰、其後御目附御役相勤申候、權太夫子當彦次郎ニ而御座候、代々小番相勤、御太刀・二種一荷進上仕来候家筋ニ而、彦次郎事去ル寛保元年酉六月代々小番被仰付置候、右之通彦次郎家筋代々結構ニ被召仕、代々小番勤来申候、然者代々小番相勤候者八家来肩書名字付御免被仰付御格ニ御座候得共、

幼稚ニ有之御番不相勤者ハ家来無名字ニ被仰附旨、御條目を以為被仰渡置由ニ御座候、彦次郎事幼少有之、右通小番帳ニ者被召載置候得共、當時御番ハ相勤不申候、然共曾祖父權太夫事御勘定奉行御役・組頭兼役ニ被仰付、代々持高茂千石以上領知仕来り、今以高役番をも勤来候列ニ被仰付置候儀、平人ニ者餘例茂無之事候間、御取分を以、願之通家来肩書名字付御免可被仰付儀与奉存候、乍此上御吟味次第奉存候、以上、

延享二年丑八月十四日 用 伸

羽田善左衛門

右羽田宗古 御家中ニ被召出、宗古以来何様之詛を以御切米被下置候哉、相糺可申出旨被仰渡、左之通御座候、當羽田善左衛門養高祖父羽田宗古事於江戸公義町御奉行與力役相勤居候処ニ、漸々逼迫仕、公義江御暇之願申上、御免ニ而致窄人罷在候処ニ、嶋津八郎右衛門殿御引廻を以、寛陽院様御代於江戸御家中ニ被召出、御切米六拾石被成下、六人賦ニ而御側廻りニ被召仕、其後御當地江被召下、居屋敷巻ケ所家作等迄拜領

被仰付候、宗古事何御役与申儀相知不申候、嫡子羽田孫助御馬廻り相勤、家督仕候、二男羽田数馬御小姓御役相勤、其後新御番被仰付候、宗古より御切米之内式拾石右数馬江永々被下置度旨奉訴、其通被仰付置候、孫助嫡子羽田城古盲目ニ而候処ニ、孫助相果候以後、右数馬事孫助跡養子ニ御免被仰付候、数馬事後善左衛門与名替仕候、其子羽田弥次右衛門ニ而御座候、弥次右衛門直子無之、上原七郎左衛門ニ男養子ニ罷成、當羽田善左衛門ニ而、代々小番相勤申候、

但右上原七郎左衛門事ハ外城衆中ニ而、上原家之養子ニ為罷成人ニ而、延享二年丑九月七日調之、且又御切米被下候帳面相寫差添差出申候也、

河野六兵衛

右家筋、親河野次右衛門無役ニ而相果候、祖父河野太次右衛門事ハ畠山式部殿附衆中蒲生預りニ而、井上孝兵衛与申者ニ而候処ニ、曾祖父河野郷左衛門(通明)繼目養子ニ御免被仰付、無役ニ而大御番相勤申候、郷左衛門事ハ御記録奉行稽古被仰付、於江戸相果候、養高祖父河

125

右祖父木場龍右衛門表方代官相勤、且又江戸御勘定所
中取相勤候節六人之御賦被下候、嫡子木場源左衛門家
督仕候、養父木場次郎兵衛事右源左衛門弟ニ而別立、

木場休右衛門

124

右祖父山田覚太夫納殿相勤、親山田四郎右衛門横目役
相勤、當分伏見御屋敷守り相勤居申候、尤大番相勤申
候、

山田覚兵衛

123

右祖父本田喜兵衛御馬廻相勤、亡父本田傳兵衛御馬廻
并御目附・高奉行相勤申候、尤代々小番勤来申候、

本田新右衛門

延享二年丑十二月廿四日

附河野六郎左衛門事ハ河野太次右衛門二男ニ而、別

立仕候事、

(通古)
野六兵衛事河野道純二男ニ而御座候処ニ、御記録奉行
御役相勤申候、當六兵衛事當分無役ニ而、大番相勤候、

128

右曾祖父山田吉左衛門出水衆中ニ而罷在、御馬廻相勤
申候、祖父山田弥右衛門代 御城下士被召出、御馬廻
相勤申候、親山田吉左衛門部屋栖之内相果、當弥右衛
門承祖ニ而家相續仕候、尤大番家筋ニ而御座候、

山田弥右衛門

127

右養祖父國分仲左衛門勤方無御座候、亡父國分平太夫
御馬廻又者寄物頭相勤申候、尤代々小番ニ而、御太刀
進上仕来候、

國分藤之丞

126

右祖父有川七左衛門事 (光久後室)
陽和院様御方納殿役人相勤、
親有川平左衛門御馬廻ニ而度々江戸詰仕、其後納殿相
勤申候、尤大番相勤申候、

有川七左衛門

當時高奉行相勤、一代小番ニ被召入置候、尤大番家筋
ニ而御座候、

長谷場源助

右祖父長谷場源助御船奉行御役相勤、親長谷場源助代
々小番相勤申候、尤代々小番ニ而、御太刀進上仕候、

是枝八郎右衛門

右祖父是枝右京蒲生衆中ニ而候処ニ、(光久)寛陽院様御代
御城下士ニ被召出、御祈念方相勤申候、親是枝長右衛
門兵道方相勤、十人御賦ニ被召成候、尤大番相勤申候、

伊勢兵部殿

松山覚兵衛

右祖父松山休太夫代官相勤、親松山八郎左衛門是又代
官相勤申候、尤大番相勤申候、

又繼目外 御目見被仰付候儀相糺可申上旨被仰渡、左
之通御座候、

高祖父兵部貞昌代

牧七右衛門

右養祖父牧十郎右衛門御馬廻ニ而江戸詰仕、其後納殿
相勤申候、養父牧彦四郎無役ニ而、小番相勤申候、七
右衛門事十郎右衛門弟ニ而、別立罷居候處ニ、右彦四
郎相果養子ニ罷成候、尤代々小番相勤申候、

一 權現様江度々 御目見被仰付候、
一 (徳川秀忠)台徳院様上意ニ而 西御丸江被召出、御能見物被仰付、
御料理を茂被下候、其節土井大炊頭(利勝)・井上主計頭様(正徳)・
永井信濃守様より御奉書被成下候、
一 (徳川家光)大猷院様江度々 御目見被仰付候、
一 御當地江妻子共数年相詰申儀奇特成儀与 上意候旨御

伊集院七左衛門

右曾祖父伊集院主水京・大坂御留守居相勤、祖父伊集
院多宮部屋栖之内相果候、親伊集院弥七御馬廻ニ而江
戸詰仕、當分納殿相勤申候、尤代々小番ニ而、御太刀
進上仕候、 延享三年寅六月廿八日調之、

老中様より貞昌江被仰聞、米五百俵ツ、拜領被仰付候、

貞昌死去仕迄拜領ニ而御座候、

一大猷院様御鷹鷹拜領被仰付候、土井大炊頭様御取持ニ

而御座候、御座候、(行力)

一御暇被下候砌、御小袖・白銀拜領被仰付候、御馬拜領

被仰付候儀も御座候、

一貞昌死去仕候砌、御香奠拜領被仰付候、伊勢兵庫殿御

出頂戴ニ而 上意之旨阿部豊後守様被仰聞候、(貞衡)

中納言様御子、貞昌養子、
曾祖父兵部貞昭代

一養父貞昌繼目之節 公方様江 御目見為被仰付由候得

共、其時之書留兵部殿居宅類焼之節致焼失、委ク相知

不申候、尤御記録所ニ茂相知不申候、

一慶安二年丑正月廿六日 寛陽院様為御參勤鹿兒嶋 御(光心)

發駕、三月廿日 御參府、此時貞昭於御中途御家老御

役被仰付候而、御供ニ而御座候、鹿兒嶋より之御供島

津圖書久通ニ而候、然共御供之御家老 公方様江御目

見之儀相知不申候、

一承應二年巳四月十七日 寛陽院様為御參勤鹿兒島 御

發駕、御供之御家老貞昭ニ而御座候、六月廿一日 御

參府、同廿五日御礼被仰上節、貞昭事 公方様 御目

見、御太刀・御馬代・御時服三進上ニ御座候、

一萬治二年亥二月四日 寛陽院様為御參勤鹿兒嶋 御發

駕、御供之御家老貞昭ニ而御座候、三月廿八日 御參

府ニ而御座候、御禮被仰上候日相知不申候、此時茂貞

昭事先例之進上物差上、公方様江 御目見被仰付候、

一寛文二年寅二月四日 泰清院様為御參勤鹿兒嶋 御發(綱心)

駕、御供之御家老貞昭ニ而御座候、三月廿八日 御參

府、其後御礼被仰上候得共、御家老 御目見之儀ハ無

之候、左候而、翌年八月四日、貞昭事於江戸被致死去

候、

祖父兵部貞顯代

一延寶七年未二月十五日、自分繼目之御礼申上、御太刀・

銀馬代・御時服二献上仕、公方様江 御目見被仰付

候、御奏者松平山城守様ニ而御座候、

一天和元年酉十月十五日、大玄院様御帰國之御礼使ニ(綱心)

而、御太刀・御馬代・御小袖三献ニ而 公方様江 御(上服力)

目見被仰付候、御奏者秋元撰津守様ニ而御座候、

亡父兵部貞栄代

一寶永三年戊八月廿八日、自分繼目之御礼申上、公方網吉公 家宣公江御太刀・御馬代・御時服二献上仕、御目見被仰付候、御奏者鳥居播磨守様、家宣公江者御太刀・御馬代迄を献上、西御丸江罷登被相納候、御奏者堀左京亮様御逢被成候、

當兵部殿事、享保十二年未五月廿八日、自分繼目之御礼申上、公方様吉宗公・家重公江御太刀・御馬代・紗綾二卷献上ニ而 御目見被仰付候、御奏者松平玄蕃頭様、家重公江者御太刀・馬代迄を献上、西御丸江罷登、於檜之間御奏者高木主水正様御逢被成、献上物相納申候、

右之通、兵部殿家先祖代々 公方様江御目見有之候、繼目之御礼被申上候儀者高祖父兵部貞昌勲功故与相見得申候、私共相礼候趣如此御座候、

延享三年寅六六 日氏 川氏調也、

覚

(吉貴) 總州様御家督之節、御國中門首江 御袖判卷通ツ、被下置候寺院并飯隈山蓮光院江薩隅并日州諸縣郡年行事

職ニ付 御直判之御書附被下置候儀相礼可申上旨被仰渡、左之通御座候、

一總州様御家督ニ付而、寶永二年十一月十五日 御名乗御書判・御印判ニ而御書附卷通ツ、被下置候門首

- 御書判 右同
- 大乘院 福昌寺 右同
- 御書判 淨光明寺 御印判 右同
- 一乘院 大慈寺 右同
- 廣濟寺 感應寺 右同
- 神徳院 願成寺 右同
- 諸門首并 山内寺 遠壽寺 正國寺 右同
- 本永寺 正興寺 寶満寺 右同

一飯隈山蓮光院江 御代々様御家督之節薩隅并日州諸縣郡年行事職ニ付而 御直判之御書附被下置候、(繼豊) 隅州様御代迄先規之通 御書判御書附卷通被下置候、御記録所へ蓮光院より差出候ニ付書留置申候、

右相礼候趣如此御座候、以上、

延享四年卯七月廿九日 五人調之、

御目見之次第

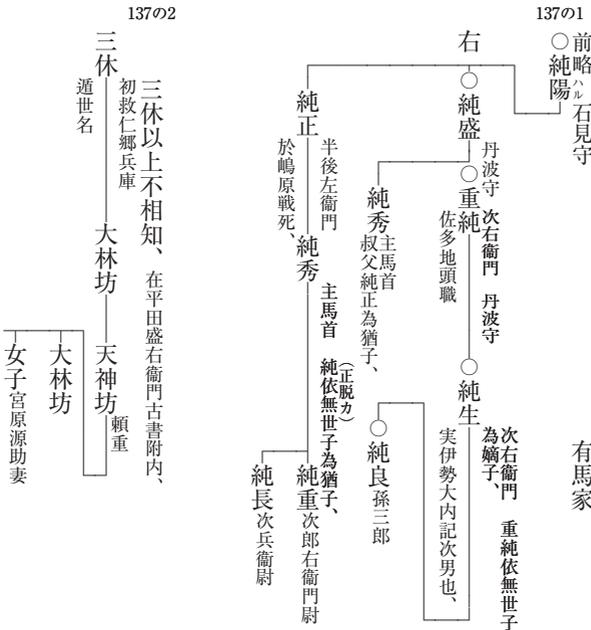
一御直元服・御名代元服、元服之御礼

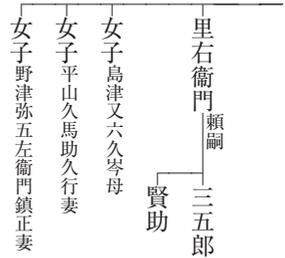
- 一 地頭職并御役之御礼
- 一 御太刀・三種二荷進上家督繼目之御礼
- 一 右同初而之 御目見
- 一 御太刀・二種一荷進上家督繼目之御礼
- 一 右同初而之 御目見
- 一 御太刀進上家督繼目之御礼
- 一 右同初而之 御目見
- 一 但大番之者家筋ニ付御太刀進上仕候節ハ、雖為家督繼目、代小ノ番之者初而之御礼相濟候次ニ可被仰付旨、享保二年酉八月廿三日、名越右膳御取次ニ而被仰渡候、
- 一 弓進上家督繼目之御礼
- 一 右同初而之 御目見
- 一 中紙進上之人数御役被仰付置候人ハ、家督繼目・初而之 御目見共ニ小番・大番ニ而茂御役之次第之通、
- 一 右同無役之人者家督繼目・初而之 御目見入交、小番筋、大番筋、御赦免士与罷出候、
- 但名字拜領并名字替等之御礼ハ、家督繼目之御礼之前後ニモ、又ハ初而之 御目見列之次第ニ茂、其家筋次第ニ相賦可然候、

正徳元年卯十二月日

右之通大御目附島津季より當座へ被仰渡置候、以上、

延享四年卯七月廿九日 御記録奉行





137の3

二階堂源太夫行朋、^{トモ}其子二階堂舍人行篤、其子二階堂源太夫行端、延享四年卯八月十日

137の4

一本田次郎左衛門苞親、^{カネチカ}其子本田作左衛門親、^{トモ}其子本田新次郎親、右同断、

137の5

一平田監物宗淨、^{實桂李之助忠保三男也、勤御納戸役}養子平田平太左衛門、

137の6

元禄四年未七月十四日夜、福昌寺前ニ而喧嘩、一河野彌太夫通照、養子河野源八、^{實者福崎藤藏、鎌田一藤太殿家親類}養子河野八郎左衛門、

137の7

一安達^{アゲチ}藤九郎盛長、^{安達者奥州之良也、為氏}一民部少輔平朝盛^{(臣脱カ)無氏}時^{無氏}字

137の8

一^{平姓}猿渡氏者尾州之在名也云々、^{猿渡之莊者}

138の1

猿渡家調之内

一元祖猿渡藤三郎信元比企判官能員為ニハ甥ニ而候、

右能員甥之儀者、系圖藤三郎傳ニ、叔父比企能員か

謀叛ニ依而猿渡庄を落て薩摩ニ下ル与御座候、是を

以考候ニ、父之弟を叔父与申候得者、能員者本猿渡

氏ニ而、比企之養子ニ為參か、又者藤三郎父比企家

より猿渡之養子ニ為參坎の筈ニ而御座候、此段者比

企氏之系圖御當國江無之、猿渡之系圖茂又藤三郎よ

り系り出申候得者、何れ本家与難究候、忠久公之

御母堂丹後之御局者能員妹与御系圖之傳ニ茂相見得

申候得ハ、藤三郎為ニ者叔母之筈ニ而御座候、然者

忠久公之御為藤三郎者御從弟ニ而御座候、

元禄十五年二月朔日 田氏 市氏 肥氏調之、

138の2

右之内、藤三郎二男為嫡子、藤四郎實信猿渡家之嫡

流を相續仕、元祖より猿渡喜右衛門親迄二十^(信安)

二代無断絶連續仕候、^{喜右衛門代}家被召禿候、

右之内

一貞親者本田家二代之家督、實者畠山重忠之息ニ而候を

(親厚カ)

近常養子ニ被致候、重忠者 忠久公御舅、然者貞親者

忠久公御簾中様之御兄弟、如此之由緒を以御劔之役を

貞親ニ讓為申与見得申候、貞親藤三郎信高より讓を得

候而より相繼而、於于今本田家之勤与罷成候、 右同

断、

一諸家系圖妄作者久保友元与申者ニ而候事、

139

大覚寺義昭大僧正尊宥坊官別垂讚岐坊辞世

此程ハよそとおもひし涙川いまま我か袖になかれへき

哉

さぬき房

右庄内都之城土鬼束備中与申者立祠大覚寺八幡令崇、

讚岐坊か靈を御所聖与号して、至于今年ニ祭申候由、

鬼束常心系圖之内有之候、大覚寺殿右常心先祖宅地へ

暫御居住被成、其以後福嶋江御越被成候与書記有之候

事、

140

一福昌寺開山石屋大和尚貞治元年乙酉七月十七日誕生、

延文五年十六歳出家、應永三十年五月十一日、於丹波

國永澤寺遷化、年七十七、

141

一重頼丹後守、齋名小杉宗文、源姓也、依讖違北郷忠能命、寛永四年

丁卯十月十日、妻子共伏誅、慶安二年己丑十月十一日、祭靈為

八幡宮、寛永二十年癸未、建立虎山軒、法名虎山宗文居士、為

孫断絶四十餘年、寛文三年癸卯二月、依 太守光久公命北郷與

142

一先赤松甚右衛門事御留守居御役之内地頭所被下置候儀

無御座候、且又右御役多年相勤、及晚年御用人御役被

仰付候得共、勤方之儀ハ如本御留守居御役相勤、無間

茂於江戸相果為申由ニ御座候、任御尋書付差出申候、

以上、 延享四年卯八月廿一日 御記録奉行

右御用人三崎平太より御用ニ付而書付差出置之、

但當甚右衛門養父甚右衛門實者赤松次郎右衛門弟

ニ而、次郎右衛門養子ニ罷成候、次郎右衛門ハ新

之丞与申候、是ハ御用人御役、地頭所被下置候也、

143

右執印丹下高祖父執印丹波事若輩之時分 執印丹下

中納言様御

側御小姓ニ被召仕、其以後執印職乍相勤御船奉行被仰付相勤申候、曾祖父執印丹(波力)後事年若ニ而相果申候、祖父執印休左衛門事年若之節(友卷)より筋氣有之、是又無程相果申候、父執印丹(友卷)下事(綱貫) 大玄院様御代江戸詰之願申上候処逢 貴聞、其節ハ不被仰付候、重而願申出候ハ、時宜次第可被仰付旨寺社奉行江被仰渡置候、左候而、享保二年酉十月、右次第之訳を以翌三年江戸詰被仰付被下度旨寺社奉行所江相付願申出、新御番ニ而江戸詰被仰付候、此段書付差出申候、以上、

延享四年卯九月四日

覚

- 一 五代祖萬助 右 黃門(家久)様高麗より被召列、焼物御細工相勤、御扶持拾八斛被下候、
- 一 萬助嫡子田原碗助 右 黃門様より三原飛彈御使ニ而田原名字拜領被仰付、焼物御細工主取相勤、御扶持拾四斛被下候、
- 一 祖父(田原碗助) 田原幸左衛門 右 焼物御細工方定役相勤、御扶持被成下別立仕候、田原萬助事焼物御細工主取相

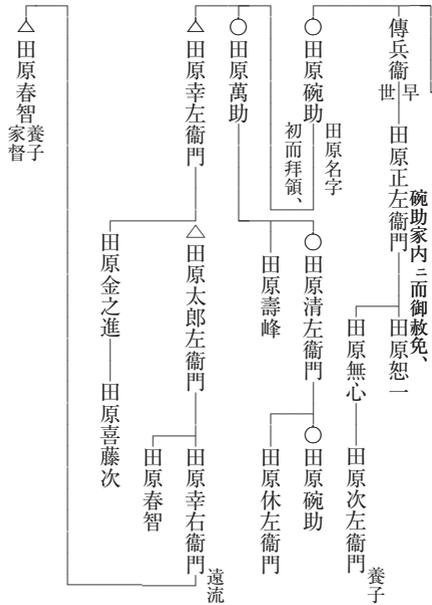
勤、御扶持被成下候、

一 亡父(田原幸左衛門) 田原金之進 右 寬陽院様御側御小姓(光久) 相勤罷居申候処ニ、別立被仰付、御逝去以後御免被仰付、其以後大御番并諸所寄檢者之勤仕申候、

延享四年卯十月廿九日

田原喜藤次

- 一 萬助嫡子ニ田原傳兵衛与申者有之、部屋栖之内致早世、其子田原正左衛門事田原碗助家内札ニ罷成居候処ニ、碗助嫡子田原萬助代願申出、御城下士ニ御救免被仰付候、正左衛門嫡子田原恕一、二男田原無心ニ而候、恕一跡當時有無不相知、無心養子田原次左衛門ニ而候、一碗助事二男ニ而候処、兄傳兵衛致早世候ニ付家督相續、其嫡子田原萬助、其嫡子田原清左衛門、二男田原壽峰ニ而候、清左衛門嫡子田原碗助ニ而候、二男田原休左衛門ニ而候、壽峰嫡子田原源左衛門ニ而候、
- 一 幸左衛門嫡子田原太郎左衛門、其子田原幸右衛門ニ而候、幸右衛門遠流之内於嶋相果、弟田原春智致家督候、



田原喜藤次

右家筋調被仰渡候、田原喜藤次親田原金之進事ハ當田
 原春智曾祖父田原幸左衛門二男ニ而、別立申候、寬
 陽院様御側御小姓相勤、其後諸檢者等相勤申候、當喜
 藤次事寄檢者等相勤、當分無役ニ而、大番相勉申候、
 尤代々、御城下士ニ而御座候、以上、

卯十一月七日 吉安 川調之、

覺

村橋左膳

右亡父村橋左膳事者先鳥津兵庫殿三男ニ而、初而別立、
 資格寄合并ニ被仰付、御太刀・一種一荷進上被仕候、
 當左膳事右嫡子ニ而、家督仕候、然者郷原金太夫事ハ
 寄合之部屋栖ニ而初而江戸詰之節十人御賦ニ被仰付候、
 川上弥五太夫事茂寄合家部屋栖之内六人賦ニ被仰付候、
 左膳事寄合并家ニ而候得者、右兩人ニ者相并不申候得
 共、先兵庫殿三男家、殊更家督之事候ニ付、金太夫例
 を以十人賦ニ可被仰付哉、又者弥五太夫例を以六人賦
 被仰付ニ而茂可有御座哉、私共究而ハ難申上御座候ニ
 付、御吟味次第ニ奉存候、

岸八十右衛門

右祖父岸喜右衛門事ハ御旗本伊勢兵庫殿家来ニ而候処
 ニ、御家ニ被召抱、何之勤方無之、右養子當喜右衛
 門事當町奉行御役相勤、地頭所被下置候、右式地頭所
 被下置候者之嫡子江戸詰之節ハ、初より六人賦被仰付
 候先例ニ而御座候、八十右衛門六人賦可被仰付儀与奉
 存候、

兒玉新藏

右養曾祖父兒玉庄兵衛事ハ高岡衆中ニ而候処ニ、寛寛院様御代 御城下士ニ被仰付、御家老座筆者相勤、養祖父兒玉金左衛門事隈之城押役相勤、養父兒玉小六事當分御納戸奉行御役相勤、地頭所被下置候、然者初而江戸詰、養父地頭職之故を以六人賦可被仰付儀与奉存候、

右家筋并江戸詰御賦方迄茂相調可申出旨被仰渡、

如此御座候、以上、延享四年卯十一月廿三日調之、

川田曾右衛門

右亡父川田仲右衛門事ハ高岡衆中ニ而本田宗右衛門与申候処ニ、先川田曾右衛門養子ニ被仰付、外城養子之格ニ為被仰付儀ニ而無之、曾右衛門養母瀧瀬御奉公之功ニ付、宗右衛門事養子ニ被仰付、右式故 御目見之節弓進上ニ被仰付候、先曾右衛門事新御番ニ而江戸詰仕、亡父仲右衛門事御馬廻ニ而江戸詰仕候、當曾右衛門事新御番ニ而江戸詰仕、代々新番ニ被召入置候、

荒武藏右衛門

右祖父荒武與市左衛門事元来海江田名字ニ而、鳥津故圖書附衆中ニ而候処ニ、御城下士荒武家養子ニ罷成、御馬廻ニ而江戸詰仕、親荒武喜右衛門事茂御馬廻ニ而江戸詰仕候、藏右衛門事御步行ニ而江戸詰仕候、尤大番家筋ニ而御座候、

横山新右衛門

右亡父横山新右衛門事ハ横山梶右衛門家之二男ニ而、其身代別立、御馬廻ニ而江戸詰仕候、當新右衛門事新御番ニ而江戸詰仕、一代新番ニ被召入置候、

木藤彦左衛門

右祖父木藤長左衛門事國分衆中ニ而候処ニ、御城下士木藤寛兵衛養子ニ罷成、横目役相勤申候、親木藤休八郎事右長左衛門二男ニ而、初而別立、當分納殿御役相勤候、彦左衛門事御步行ニ而江戸詰仕、當分横目役相勤候、大番家筋ニ而候得共、親休八郎事御役ニ付一代新番ニ被召入置候、

右之外税所次郎右衛門・細江弥右衛門・田中孝右
衛門家筋相調申候、 延享四年卯十一月廿三日

川上安左衛門

右川上平右衛門二男ニ而候処ニ、去ル九月、新納次郎
兵衛御取次を以初而別立被仰付候、右平右衛門事ハ當
川上藤之丞祖父先川上藤兵衛二男ニ而、先年別立申候、
藤之丞六代之祖川上弥四郎事、當川上七郎左衛門先祖
川上又左衛門弟ニ而別立、(忠通) 惟新様御近習御役相勤、
於関ヶ原戦死仕候、同高祖父川上治部右衛門事小番相
勤候、同曾祖父川上喜兵衛事、御城内ニ被召置、御番
御免ニ而罷在、何ぞ勤方無御座候、同祖父川上藤兵衛
諸検者等相勤申候、親川上平右衛門當時御記録奉行御
役相勤、地頭所被下置候、安左衛門事當分無役ニ而、
勤方無御座候、尤代々、御城下士ニ而、大番相勤申筈
之家筋ニ而御座候、以上、
延享四年卯十一月晦日 三人

別府平五左衛門

右別府平五左衛門事ハ當別府小七二男ニ而、別立申候、
右小七曾祖父別府五郎左衛門奥附足輕ニ而候処ニ、奥
附代々士ニ御赦免被仰付、奥江相附御奉公相勤候、祖
父別府五兵衛、親別府小七奥へ相付御奉公相勤候、平
五左衛門事當分奥へ相附御奉公相勤申候、右相調候趣
如此御座候、以上、 卯十一月廿一日 四人

税所半兵衛

右家筋調、半兵衛事當税所善兵衛祖父税所善兵衛二男
ニ而、先年別立被仰付候、當善兵衛高祖父妻屋和泉与
申候、曾祖父妻屋善兵衛右兩代共ニ勤方相知不申候、
祖父税所善兵衛、此代本名税所ニ相改申候、殿役奉行
御役相勤、親税所佐司右衛門御馬廻相勤、一代小番ニ
被召入置、御細工奉行御役相勤申候、半兵衛事者右佐
司右衛門弟ニ而、大番家筋ニ而御座候得共、當分於喜
女(吉貴兼)阿部正興(喜)代様御方納殿役人御役相勤候故を以、一代小番ニ被召
入置候、尤代々、御城下士ニ而御座候、以上、
寛延三年庚午九月十九日 用 左 平 用調之、

追田甚助

右家筋調、甚助事當追田太次右衛門二男家ニ而御座候、太次右衛門高祖父追田土佐川邊衆中ニ而罷在、勤方相知不申候、曾祖父追田甚左衛門代御當地江罷出候、何様之訳ニ而被召出候哉相知不申候、小役人相勤申候、甚左衛門嫡子追田太右衛門与申候、當太次右衛門祖父ニ而御座候、同二男追田甚之丞与申候、初而別立、小役人相勤申候、其子當甚助ニ而御座候、小役人等之御奉公相勤、當分無役ニ而罷在候、尤祖父甚左衛門以来大番相勤候家筋ニ而御座候、右同断、



唐(ママ)方御役相勤候、當太次右衛門

覚 寫

長野筑前右嫡子長野彦右衛門右智養子、實鹿兒嶋園田清左衛門殿先祖二男ニ而御座候、長野四郎右衛門

右嫡子 長野宮内左衛門 長野筑右衛門 右嫡子 長野兵右衛門 右之養子

長野彦右衛門彦右衛門實者長野兵右衛門弟ニ而候故養子ニ罷成候 右嫡子 長野筑右衛門

右之通私先祖相知申候ニ付、書付差上申候、以上、

午八月十日 指宿衆中

伊東傳兵衛様

長野筑右衛門

【〇】 覚

指宿衆中長野筑右衛門 御城下士ニ被召成被下度 旨願申出趣有之、調被仰渡、左之通御座候、

一長野家之儀、 忠久公薩隅日御給ニ而初而御入國之節、御供之人数ニ長野家相見得申候、九州軍大将四家之内 長野与當座古書附之内ニ相見得、當筑右衛門申出候趣 相違無御座候、

一 御家七代太守 元久公御上洛之節、騎馬之御供大寺・

長野兩家ニ被仰付相勤申候、同御代喜入之凶徒を御誅

討被成候砌、上永吉を大寺与長野左京ニ半分宛被下候

由當座書附之内ニ相見得、筑右衛門申出候趣相違無御

座候、

一 惟新公朝鮮(義弘) 御帰陣之後御上洛之節、筑右衛門八代祖

長野筑前御供仕、於大坂御船奉行御役相勤候由筑右衛

門申出候、此儀當座ニ相知不申候、同役之内新納助右

衛門家系圖ニ御船奉行御役相勤候由相見得申候、其外當新納

川上・本田・有川三家系圖之内ニ者右之訳相見得不申

候、然共筑右衛門七代祖長野彦右衛門元和三年巳十月

十八日書留置候書附之内ニ相見得申候得者、別條有御

座間敷哉与相考申候、恒川上伊豫當川上五郎右衛門先祖、本
田甲斐當本田新助先祖、有川淡路當有

川仲右衛
門先祖

一 右筑前代野尻より鹿兒嶋江可罷移由被仰付候節、鎌田

(政近) 出雲指宿地頭ニ而、筑前儀出雲被頼候ニ付指宿江罷移

居候段、其子彦右衛門委細書留置候趣別條有御座間敷

与存申候、

一 諏方御神事、社役川上・伊集院・新納・町田・伊地知・

本田・鎌田・長野八家被仰付置候、且又 御代々様御

葬送之節、御香爐之役筑右衛門家代々相勤来り申候、

一 筑右衛門家系圖文書所持不仕候故、上世之儀委細者相

知不申候得共、長野家嫡流ニ而御座候段者先役共糺置

候書附ニ相見得、嫡流別条無御座候、

右次第之家筋ニ而御座候、然者當大河平越右衛門

祖父大河平休兵衛代飯野衆中ニ而罷在候処ニ、先

祖共段々軍勞仕御奉公相勤候家筋之訳を以願申出、(久勝)

大玄院様御代元禄十年丑閏二月十五日 御城下士(綱貫)

ニ被召成候、當山田九郎左衛門祖父山田七郎右衛

門代志布志ニ罷居申候処ニ、御家他腹之御長男

家為差立由緒之訳を以願申出、(吉豊) 淨國院様御代寶

永七年寅八月廿二日 御城下士ニ被仰付候、筑右

衛門家先祖共右通差立御奉公相勤来、第一代々社

役相勤申候、社役之儀者御一族・他家之歴々古来

より相勤候而、格別之勤方ニ御座候、社役八家之

内ニ而者筑右衛門家計外城衆中ニ而相勤申事ニ御

座候、且又先祖筑前代鹿兒嶋江可被召移旨蒙御免

罷居、其以後至當筑右衛門指宿衆中ニ而為罷居事

ニ御座候、大河平家・山田家家筋を以者 御城下士ニ為被仰付先例茂御座候条、筑右衛門家先祖共歴々之勤仕候儀茂有之、古来より社役一家之頭取仕来候ニ付而ハ類少ク相見得申候、右訳を以者願之通 御城下士ニ被召成候而茂餘例ニ者罷成間敷与詮儀仕候、乍此上御吟味次第奉存候、以上、
寛延三年庚午九月廿四日 用 左 平 用調之、

覚

北郷權八三男種子島時良北郷龜之助事種子島時忠嶋藏人姉腹ニ出生仕、藏人方江内々貰受介抱仕置候間、以来弟分ニ被仰付被下度旨願被申出候ニ付、調被仰渡、左之通ニ御座候、

一當島津頼母事桂太七郎二男ニ而御座候、右母者先入来院主馬殿娘ニ而候、右腹ニ致出生候ニ付、太七郎存命之内より主馬殿子分ニ内々被申談置、出生之御より主馬殿方江引受介抱、享保十三年申九月十四日、主馬殿二男ニ被仰付被下度旨願被申出候処ニ、願之通主馬殿二男ニ被仰付候旨、谷山角太夫御取次を以被仰渡、入

来院大八郎与申候、其後先島津頼母殿養子ニ被仰付候、

一當宮之原觀明坊事大山後角貞徳右衛門三男ニ而、大山茂次

郎与申候、右母者宮之原甚五兵衛妹ニ而候、右腹ニ致

出生候ニ付、甚五兵衛養子ニ被仰付度旨願申出候処ニ、

延享三年寅五月十一日、願之通甚五兵衛養子ニ被仰付、

二男ニ被仰付旨、島津十太右衛門御取次を以被仰渡候、

右之外ニ茂先例可有御座候得共見當不申候、然ハ

北郷龜之助事、右兩人之例を以願之通藏人弟分ニ

被仰付候而茂何ぞ差支申儀御座有間敷与吟味仕候、

平七

以上、 寛延二年巳五月十七日

159 (本文書ハ「旧史館調」一九五号文書ト同一文書ニツキ省略ス)

160 覚

一御家十一代 忠昌公御不例之時、為御立願、文明十五年八月廿一日、於一宮新田八幡大菩薩神前有笠掛、奉行嶋津十郎左衛門江被仰付、同年同月廿二日、於高江有之候由、川上家枝流系圖之内ニ相見得申候、
一天正五年十一月十三日、御犬追物手組之内、於鹿兒嶋

之馬場御祈禱御犬追物有之由 (義久) 龍伯様御譜中ニ相見得

申候、右御祈禱之儀、御不快ニ付御祈禱トハ無御座候

得共、御祈禱ニ付御犬追物有之候与相見得申候故、(ママ)

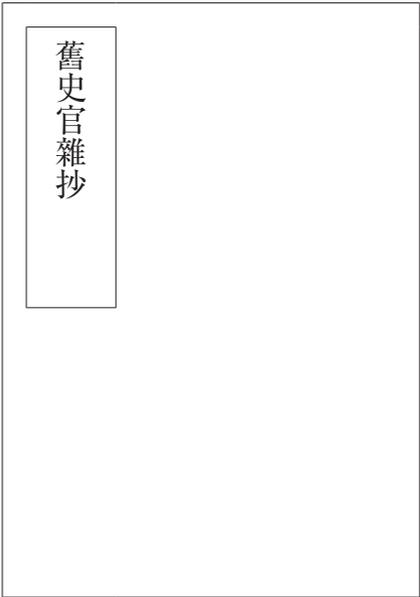
右之通書記有之、自分鎗流馬仕候儀分而相知不申

候得共、御不快之節為御立願笠掛等有之候儀見當

申候間、書付差上申候、以上、

寛延二年巳六月廿六日 左 七

(表紙 二)



一 舊史官雜抄目錄

一 野村勘七養子致度願ニ付調書

一 戸田七郎太家督御禮進上物調書

一 救仁郷深仙坊右同

一 河原孝右衛門家筋調

一 大河平順喜右同

一 横山喜左衛門右同

一 飯隈山蓮光院着座ニ付調

- 一 種子嶋次兵衛家筋調
- 一 甲斐藤助養子願ニ付調
- 一 川崎大乘坊養子願ニ付調
- 一 栗川孫次右衛門進上 御目見願ニ付調
- 一 末川彦十郎右同
- 一 畠山平太右同
- 一 鹿兒嶋并外城幟立始之事
- 一 入江十郎左衛門家筋由緒調
- 一 御関狩之事
- 一 大中良等庵主祭文并圍維場石之事
- 一 與中諸土杉差立之訳調
- 一 日新菩薩記之事
- 一 高城六右衛門家筋調
- 一 春日(ママ)之事
- 一 中紙進上御目見之事
- 一 寺院ニ付嶋津因幡殿より願之事
- 一 義岡彈正家格之儀ニ付再度調
- 一 慈眼院様御影堂御造替吟味之事
- 一 宇宿正右衛門家筋調
- 一 諏訪仲右衛門養子願ニ付調
- 一 廣濟寺江御高御寄附ニ付御禮申出調
- 一 重久金左衛門養子願ニ付調
- 一 内山勘左衛門養子願ニ付調
- 一 谷山早右衛門養子願ニ付調
(肝付七右衛門)
- 一 西郷次郎右衛門右同
- 一 町田五郎左衛門家筋調
- 一 木場壽山家筋調
- 一 永岩次郎兵衛養子願ニ付調
- 一 諸國大小神社改方ニ付調
- 一 喜入幸之丞事養子願調
- 一 岩下佐次右衛門御禮席連名之調
- 一 佐久間九右衛門勤務調
- 一 松崎平左衛門連名之事
- 一 大窪喜助繼目願ニ付調
- 一 御娘様他所江御縁中御卒去御位牌之調
- 一 京都即宗院 御再建之調
- 一 吉宗公右大臣ニ御轉任之事
- 一 伊藤善八家筋調

- 一 鳥津左殿御禮進上物之事
- 一指宿正哲家筋調
- 一 滿君様御婚姻之事
- 一 日新公御嫡女并 元久公御息女 御婢銘(牌九)
- 一 梅北弥左衛門家筋調
- 一 一乘院僧正尊盈進上物調
- 一 諦觀院殿 光闌院様御嫁ニ付系図調
- 一 伊藤善八家筋調
- 一 新納彌五郎・永田半左衛門進上物調(マ)
- 一 有村嘉右衛門家筋之調
- 一 和田伊右衛門右同
- 一 御關狩并御馬追之儀調
- 一 重富・今和泉之事
- 一 忠久公御五代御佛檀之調
- 一 妙心院江高取納御書付
- 一 顯幽集覽之事
- 一 良英寺之事
- 一 平田左右衛門家筋調
- 一 善久公第二女并吉田次郎四郎位清室 御法名

161

覚

- 一 鳥津因幡殿跡相續之儀ニ付調
 - 一 和田伊右衛門家筋調
 - 一 竹下喜右衛門家筋調
 - 一 龜山甚兵衛家筋調
 - 一 京都即宗院之事
 - 一 宥邦院様御葬送之節御尊牌御名代ニ付御太刀持有無之調
 - 一 日置郡并大隅郡鄉村名及高辻帳
 - 一 鳥津若狹・鳥津小平太席連名吟味
- 本文野村勘七直子無之候ニ付、庄内高城衆中津曲幸之進事血筋又甥之續を以養子御免被仰付被下度旨願申出、調被仰渡、左之通ニ御座候、
- 一 野村勘七先祖代々穆佐衆中ニ而為罷居由ニ御座候、高祖父野村對馬代迄ハ高岡之内むけ高と申所へ罷居、其後穆佐ニ被召移候由、豊後御陣、朝鮮國江茂致渡海、庄内御出陣之節茂軍勞仕候由申出候、勤方ハ相知不申

候、曾祖父野村弥八、祖父野村主税代身上逼迫仕、亡父野村四郎兵衛代御當地江致中宿、江戸江茂相詰、小役人等之御奉公相勤申候、當勘七事、元禄五年申十一月(光久)寬陽院様御代穆佐衆中ニ而御小姓御役相勤候、左候而、大玄院様御代奉願、同九年子八月、中神内藏(綱貫)之丞御取次を以代々、御城下士ニ被仰付、江戸江茂相詰申候、其後奥大番・奥横目等相勤、當分納殿御役被仰付、山下御屋鋪江相勤居申候、尤大番家筋ニ而御座候、

一津曲幸之進高祖父津曲佐藤兵衛事ハ、當津曲七兵衛先祖津曲伴左衛門二男ニ而、寛永年中別立候由申出候、曾祖父津曲幸右衛門勤方無御座候、親津曲助之丞事ハ右幸右衛門二男ニ而、享保六年丑八月別立申候、所衆并之御奉公相勤候、幸之進事勤方無之候、代々庄内古城衆中ニ而御座候、

右之次第ニ御座候、勘七・幸之進續之訳ハ、勘七母者幸之進曾祖父津曲幸右衛門妻ニ而、祖父幸左衛門致出生候、幸右衛門相果候以後勘七親野村四郎兵衛江相嫁、勘七致出生候ニ付、右幸左衛門為ニ者吳父

同母之弟ニ而候故、勘七与幸之進与ハ血筋又甥之續別条無御座候、外城より養子ニ罷成候者、二代相續外城養子願申出候者有之候ハ、家筋相糺、御内意ニ而被得差圖候様、享保三年戊七月、與頭江被仰渡置候由當座帳内ニ相見得申候、然者當鎌田嘉左衛門養祖父鎌田嘉左衛門事元来高山衆中ニ而、嘉左衛門養曾祖父鎌田嘉左衛門養子ニ罷成候処、直子無之、山川衆中日高十郎兵衛二男を養子ニ仕、是又嘉左衛門与改名仕候、左候而、右嘉左衛門ニ茂直子無之、又山川衆中日高與八弟無據血筋之訳を以養子之願申出、願之通御免被成候、是當嘉左衛門ニ而御座候、速水五右衛門事其身代外城衆中より御城下士養子ニ罷成、直子無之、串良衆中中山佐左衛門嫡子中山五郎右衛門嫡子中山甚五左衛門事血筋又甥之續を以養子願申出、當座へ調被仰渡、寶曆六年丙四月、願(子脱力)之通御免被仰付候、且又二階堂覚之丞事ハ二階堂古與右衛門附衆中ニ而、御當地へ致中宿、當座筆者役相勤、手跡別而宜敷、真文字當時無并程ニ有之、御用ニ相立候訳を以、正徳四年午七月、代々御城下

士ニ被仰付候、直子無御座候ニ付、國分衆中和田幸兵衛事養子之願申出、享保十八年丑十一月、願之通御免被仰付、二階堂栄珀与改名仕候、勘七事其身体御城下士被仰付、此節養子願ニ付而ハ、右覺之丞先例又ハ右通傍例茂御座候故、願之通養子御免被仰付候而茂何之差支有御座間鋪与吟味仕候、以上、

寶曆八年寅九月三日 安 吉 本 吉調之、

覺

戸田七郎太

本文進上物調被仰渡候、戸田七郎太家御太刀・銀馬代進上仕来申候、去ル戌八月、戸田平次嫡子戸田傳五郎智養子戸田治平太事智養子成之御禮申出候節、進上物銀馬代被仰付候、平次・傳五郎御家中江被召出 御目見被仰付候砌、銀馬代進上為仕事ニ候間、治平太事銀馬代被仰付候旨、去ル寛保三年亥十月、島津左衛門ヨリ當座へ被仰渡置候、右通ニ御座候故、此節七郎太家督之御禮御太刀・銀馬代進上可被仰付儀与奉存候、以上、 寶曆八寅六月八日 吉 中

覺

救仁郷深仙坊

本文進上物調被仰渡候、飯隈山坊中仲之坊當救仁郷深仙坊高祖父救仁郷深仙坊以来継目家督 御目見被仰付候節青銅百疋進上仕、初而之 御目見仕候節ハ先年以來無進上物ニ而 御目見仕来申候処ニ、亡父蓮光院代初而之 御目見仕候節より中紙進上被仰付、 御城下士同席ニ而 御目見被仰付候、右通代々継目家督之節青銅百疋進上仕来申候間、先例之通此節深仙坊事青銅百疋進上ニ而御禮可被仰付儀与奉存候、以上、

寶曆八年寅六月八日 中 吉 中調之、

右之通調書差上ケ置候故、深仙坊此節青銅百疋進上ニ而御禮被仰付候、其以後當座萬調帳之内段々相糺申候処ニ、先年當座より都而継目家督共ニ中紙進上被仰付筋ニ調書被差出置、其通ニ相究居候由見當り申候、然ハ此節之調書ハ致相違候故、其訳御断をも申出筈候得共、先ツ此涯相濟居候ニ付、申談候上不申出候、重而ハいつれ調方相替ル筈候へハ、其節ハ御断をも可申出哉与同席中申談置候事、

覚

河原孝右衛門

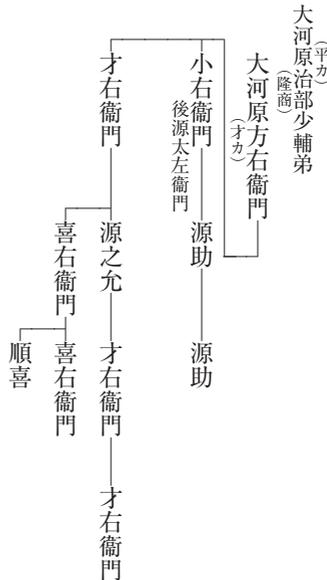
本文高持成ニ付家筋調被仰渡候、河原孝右衛門七代之祖河原玄蕃、六代之祖河原主馬、高祖父河原弥太右衛門直子無御座候故、岩崎伊右衛門嫡子養子ニ罷成、河原帶刀与申候、曾祖父ニ而御座候、右帶刀嫡子河原南鏡院事ハ、實祖父岩崎伊右衛門直子無御座候ニ付養子ニ罷成候故、祖父河原與衛事ハ帶刀二男ニ而、家督相續仕候、右五代共ニ勤方相知不申候、亡父河原孝左衛門横目役・御番等相勤申候、當孝右衛門當分郡方寄筆者相勤居申候、尤代々、御城下土ニ而、大番家筋ニ而御座候、以上、寶曆八寅九月二日 安 吉 本 吉調之、

覚

大河平順喜

本文高持成之願申出、家筋調被仰渡候、大河原順喜事兄當大河平喜右衛門家内より別立申候、喜右衛門亡父大河平喜右衛門事者、當大河平才右衛門曾祖父大河原才右衛門二男ニ而別立、山奉行所筆者相勤候、順喜事當分御番醫師相勤居申候、尤代々、御城下土ニ而、大番相勤申答之家筋ニ而御座候、以上、

寶曆八年寅十月廿四日 安 吉 本 吉調之、



覚

一御用人御役名之儀、百年以前ハ申口与有之、其後ハ御使役与申候、天和三年閏五月十三日 大玄院様御家譜之内、改使役曰用人与書記有之候、左候得者 寛陽院様御代より當分之通御用人御役与為被仰付与相見得申候也、

一柴崎十郎右衛門正勝者甲府中納言綱豊卿之臣也、
(徳川家宣)

二元禄七年甲戌三月廿一日 吉貴婚姻于勢州桑名城主松平越中守定重之姫、而行大禮於東都高輪之第也、

定重之姫後稱靈龍院殿、

一元祿十七年甲申三月十三日改寶永、東都者以三月晦日

為元、薩府者以四月二十五日
為元、依其地之遠近有遲速也、

一寶永三年冬、招請賀州大龜山大春和尚而薩州之乃令繼

玉龍之祖席、

一綱吉公御母堂號三丸、又稱桂昌院也、

一寛文四年貞享元年 將軍家從（倭名抄カ）依名集停知覽郡隸給黎郡

為十三郡、賜御判物之目錄、正保年間所獻之繪圖有知

覽郡、

植てこし情ならずハ宇津の山

みやこにかゝる蔦葉やは見む （近衛） 基熙公

色つきぬ緞のみさへこの秋ハ

かゝる蔦葉もむかししのへと （近衛） 家久公

覚

横山喜左衛門

右喜左衛門事ハ當横山長右衛門親横山長右衛門二男ニ

而、先年別立申候、親長右衛門六代之祖横山大蔵、高

祖父横山喜左衛門兩代共ニ大御番相勤候、曾祖父横山

慶左衛門御國遺座并吳國方筆者相勤候、祖父横山喜衛

169

覚

種子嶋次兵衛

本文五拾石上上り之願申出、家筋調被仰渡候、種子嶋

次兵衛事ハ當種子嶋權助二弟ニ而、寛保三年亥十二月、

權助家内より別立申候、權助高祖父種子嶋（時秀）六兵衛京都

蔵奉行御役相勤候、其嫡子種子嶋（時次）長十郎幼稚より中

168

覚

本文飯限山蓮光院着座被仰付候ニ付、御祝儀事等之節

登 城足輕下座之次第、先例相札可申出旨被仰渡候、

蓮光院頼英代着座被仰付、且又志布志大慈寺萬安事紫

衣 勅許ニ而着座被仰付候節、當座江調方被仰渡候哉

与諸書付等段ニ相札申候得共、足輕下座其外都而何様

共相知不申候、此段申上候、以上、

寶曆九年卯正月十四日 本 吉安 吉調之、

候、以上、 寶曆九年卯正月十四日 本 吉安 吉調之、

尤代ニ 御城下士ニ而、大番相勤申答之家筋ニ而御座

門御番相勤候、親横山長右衛門御勘定方小頭・代官御

役等相勤申候、喜左衛門子當分御春屋蔵役相勤居申候、（事カ）

納言様御側御小姓相勤、致早世男子無御座候、曾祖父種子嶋内(時忠)記事ハ村尾三右衛門弟ニ而、右六兵衛養子ニ被仰付、島津大膳乱心之砌、彼方差引被仰付候、養祖父種子嶋(時意)千次郎何御奉公相勤候訳相知不申候、代々小番相勤、御太刀・二種一荷進上仕来申候處ニ、千次郎直子無御座候付、亡父種子嶋權左衛門事ハ谷山衆中平井權左衛門与申候、右千次郎養子ニ罷成、中紙進上大番ニ被召成、何ぞ勤方無之、御番相勤申候、次兵衛事當分(球脱)琉假屋藏役相勤居申候、尤大番家筋ニ而御座候、以上、寶曆九卯二月廿五日 吉安 吉調之、

坊泊衆中甲斐七兵衛二男

甲斐藤助

覚
本文竹新助相果、直子無之候付、坊泊衆中甲斐七兵衛(佐脱)二男甲斐藤助血筋之訳を以養子被仰付被下度旨親類共より願申出、調被仰渡、左之通ニ御座候、一佐竹新助家ハ當佐竹源左衛門庶流ニ而御座候、養高祖父佐竹連光院、曾祖父佐竹連光院兩代共ニ山伏ニ而御座候、祖父佐竹源左衛門御祈念奉行相勤申候、養父佐竹段右衛門事右源左衛門四男ニ而、初而別立、諸檢者

等之御奉公相勤、其後屋久嶋居住被仰付、実子無御座候ニ付、新助事ハ當佐竹喜右衛門二男ニ而養子ニ罷成、是又諸檢者等之御奉公相勤申候、

一坊泊衆中甲斐七兵衛事ハ同所衆中當甲斐助六二男(マ)ニ而御座候、高祖父甲斐助六、曾祖父甲斐助六、祖父甲斐利助右三代共ニ勤方相知不申候、鹿兒嶋江居住仕候、親甲斐助右衛門事草野助右衛門先祖江紙漉致稽古、物奉行座附ニ被仰付候得共、新楮方御取立之節主取役被仰付、数年相勤申候ニ付、依其功坊泊衆中ニ御赦免被仰付候、助右衛門嫡子甲斐利兵衛、其子當助六ニ而御座候、七兵衛事當分新楮方主取相勤申候、二男甲斐藤助何ぞ勤方無之候、

右之通御座候、新助・藤助續之訳ハ、新助實祖父佐竹源左衛門妻ハ藤助曾祖父甲斐利助娘ニ而、其腹ニ佐竹段右衛門致出生候、右養子新助ニ而御座候付、藤助為ニ者ニ從弟之續ニ而、血筋別条無御座候、然者寶曆七年丑七月、藤助親七兵衛事右新助養子之願申出、當座江調方被仰渡候ニ付、七兵衛方江俗生相糺申候處ニ、七兵衛曾祖父甲斐助六、祖父甲斐利助

而代何様之者共其詛相知不申候、鹿兒嶋江居住為仕者之由申出候、依之寶曆二年申七月、坊泊衆中間世田助六直子無之、比志嶋隼人家來重信八兵衛血筋之詛を以養子之願申出、當座へ調被仰渡、右八兵衛先祖俗生相糺申候處ニ、元來谷山衆中之由申出候得共、其證據無之、俗生不審之者ニ御座候ニ付、右躰之者者御吟味之上御免被仰付間敷旨調書差上申候處ニ、養子御免不被仰付候、右を以ハ、此節七兵衛儀茂先祖之俗生不審之者ニ而、殊ニ御城下土養子之儀ニ御座候條、猶以御免被仰付間敷旨吟味書差上申候處ニ、養子御免不被仰付候、又々此節藤助養子之願申出、猶又俗生相糺申候處ニ、當福嶋清兵衛曾祖父福嶋庄介代、藤助祖父甲斐助右衛門江遣置候覺書之内、御方先祖甲斐助六殿事縣士ニ而候處ニ、私先祖福嶋佐渡日州八代江罷居候節引越、八代衆中ニ被召成度之願佐渡方へ被為頼候、新參ニ而右願急ニ取持難申候條、今程ハ佐渡方江致介抱可進候、左候而、時分を見合申出候ハ、願之通如何ニ茂可相達儀与存候由申合、其通ニ而被為居候、然處ニ稻津掃部逆心を

起シ、宮崎之城を攻落、佐土原・木之脇・三ヶ名、八代近邊迄焼拂候得共、相良日向殿・村尾勝勢老・榎木平右衛門殿・福嶋佐渡四人、秋月殿御領内東長寺江陳捕、稻津を追拂候節、右助六殿別而相働被成候、其後佐渡事鹿兒嶋江被召移候ニ付、右働之次第致言上、願之儀可申上格護(從提指力)ニ候處、追付助六殿死去ニ而、願之筋不申達残念ニ候由、佐渡折々申候趣申傳候、右之件書付可遣旨承候付、書付遣候段相見得申候、右書付ハ去々年藤助親七兵衛養子願申出候節ハ見出不申、其以後見當申候由、此節申出候、右趣を以ハ元來縣士ニ而為有之与相見得申候、左候得ハ、助右衛門代物奉行座附ニ而、其後坊泊衆中被仰付候、外城養子御格式之内ニ茂、外城衆中又ハ家中者之内無據由緒有之者ハ、其詛を以養子願出候儀ハ格別候間、有來候通可有之旨相見得申候故、無據由緒を以ハ足輕・人家來之内より茂養子御免被仰付候先例御座候、藤助先祖之儀茂賤卑之者ニ而ハ無之旨相見得申候得共、高祖父助六、其子利助何様之家業仕候者共相知不申候、利助娘佐竹源左衛門江相嫁、嫡子新

右衛門・四男段右衛門致出生候年間を以ハ、百年以前相嫁候与相見得申候、妻妾之分ケ申傳茂有之候哉与相糺候處ニ、利助娘源左衛門江如何様依願縁與仕候哉与此節申出候、右通本妻之分ケ慥ニ相知不申候、助右衛門代物奉行座附為被仰付者ニ候得者、座附之兄弟ニ而候故、利助娘事源左衛門本妻ニ而ハ有之間敷与相考申候、然ハ右躰妾腹之外戚血筋を以御城下士養子御免被仰付候先例見當リ不申候間、藤助事養子御免被仰付間敷儀与吟味仕候、以上、

寶曆九年卯三月九日 本吉 安 吉調、

右調書式部殿へ差上置候処ニ、卯三月十四日、甲斐藤助養子願之書物御取揚無之旨被仰渡候事、

覚

本文川崎大乘坊直子無之候付、薩州吉田衆中山口藤助事、石火矢并大筒鉄炮打方、其外石火矢鑄張唐金組合木形土形等之儀迄段々致傳授置候故、養子之願申出、調被仰渡、左之通御座候、

一大乗坊曾祖父川崎大乘坊山伏ニ而御座候、曾祖父以前之儀者、段々相糺申候得共何分相知不申候、祖父川崎龍之助兩代共ニ大御番相勤申候、亡父川崎圓龍院山伏ニ而、芹ヶ野金山山之神座主被仰付相勤申候、當大乘坊事茂右座主被仰付、御引取之節迄相勤、其以後三嶋存学院・山田仙鏡院入峯并江戸詰仕候砌、寄役ニ而御側御看經方相勤申候、當分何ぞ勤方無御座候、

一藤助祖父山口庄兵衛事ハ當鎌田主左衛門祖父鎌田傳兵衛家来ニ而御座候、庄兵衛以前之儀ハ、段々相糺申候得共何様之者共究而相知不申候、主左衛門先祖以来代々家来筋之者之由申出候得共、假名等茂相知不申、尤家業之儀茂相知不申候、右庄兵衛事ハ別而輕キ家業仕候者之由主左衛門親類共より此節申出候、親山口庄左衛門事最初傳兵衛家来ニ而候処ニ、鉄炮金具細工仕候故物奉行所附ニ被仰付、御切米被成下、御用御細工相勤申候、依之享保十六年亥正月薩州吉田衆中ニ御赦免被仰付候、當藤助事茂右同前之細工仕候ニ付、御切米被下置御用之御細工相勤来申候、

一松方甚八相果、直子無之、嶋津筑後家来入水權平事繼

目養子御免被仰付候ニ付、延享四年卯四月、新納次郎兵衛御取次御證文を以被仰渡候者、甚八相果、直子無之、跡養子ニ罷成者無之候、甚八家之儀者鉄炮細工代ニ致傳授、御用相勤来候訳有之候処ニ、細工下地無之者を致養子候而者、傳來之細工及断絶候、依之右權平曾祖父ニ者甚八親松方七右衛門祖父鉄炮細工弟子ニ而、權平ニ茂七右衛門弟子ニ而、細工功茂有之候間、繼目養子御免被下度旨甚八親類共申出趣有之、願之通被仰付候旨相見得申候、

一 右甚八繼目養子被仰付候以前、延享三年寅九月、嶋津筑後家来入水權平俗生之訳相札可申出旨當座へ被仰渡候ニ付、左之通申出候、入水氏者穰所氏之二男家ニ而、先祖以来嶋津筑後家来ニ而、權平親入水猶右衛門先祖入水伊賀与申者、筑後元祖尾張資忠代奉公為仕由ニ候、伊賀六代之祖穰所周防与申者、筑後先祖末吉領知之節深川名之支配被申付、周防子穰所伊豫、伊豫子穰所與右衛門、與右衛門子入水孝左衛門代ニ如本入水名字ニ相改為申由候、孝左衛門子入水猶右衛門代より筑後於家中小番相勤申候由候、猶右衛門權平(子脱力)ニ而候、右通代

ニ筑後家来筋之者ニ而候段、系圖之面ニ茂相見得、凡下雜人等之筋目之者ニ而無御座候段、調書差上ケ置申候、

右之次第ニ御座候、大乘坊・藤助師弟迄之訳ニ而、血筋由緒等茂無御座候、然者外城養子御格式之内、外城ニ而持高致所持、直ニ其高持出候者迄を御免可被仰付候、無高ニ而茂無據血筋又者為差立訳有之、願依趣ハ被仰付儀茂可有之旨相見得申候、且又血筋之者ニ而茂先祖俗生不慥者ハ、御吟味之上御免不被仰付儀ニ御座候、右を以ハ、藤助儀所高持越申儀ニ而も無之、又ハ血筋之訳茂無之、其上藤助俗生祖父庄兵衛以前何様之家業仕候者共相知不申、庄兵衛代別而輕キ家業為仕者之由候得者、養子御免被仰付間敷儀与吟味仕候、先年嶋津筑後家来入水權平事松方甚八繼目養子被仰付候節ハ、養子御免可被仰付候哉、又ハ被仰付間敷哉、相調可申出旨當座江調方為被仰渡儀無御座候、權平俗生迄を相札可申出旨被仰渡、前条之通俗生相調差上申候ニ付、何様之御吟味ニ而御免被仰付候哉、委キ儀者當座へ相知不申候、然共

御證文之趣を以ハ二三代師弟ニ而御用茂相弁来候、其上權平先祖以來筑後家ニ而代々相應之勤方仕来、

俗生茂正敷御座候故、旁之訳を以養子御免被仰付候哉与乍憚相考申候、然ハ藤助儀大乘坊弟子ニ而候故、右權平例ニ似寄為申儀而ハ御座候得共、俗生不慥儀ニ而、右例ニ可被仰付儀与ハ難申上御座候、然共右御格式之内ニ茂、為差立訳有之、願依趣者被仰付儀茂可有之旨相見得申候、藤助事石火矢・大筒打方、其外段々致傳授来候ニ付、大乘坊より此節難黙止訳を以養子之願申出候、右御取分を以ハ願之通ニ茂可被仰付候哉、此儀ニ付而ハ先例茂無之候付、究而難申上御座候条、何分ニ茂御詮議次第ニ奉存候、以上、寶曆九卯三月廿八日 本 吉 安 吉調之、

右之通調書差上置候処、自式部殿、右願不被取揚書物被相下候間、此段同役中可承置旨被仰渡、用右衛門致承知之候、

(吉田清純)
高津因幡殿家来

覚

栗川孫次右衛門

右亡父栗川孫六繼日被申付、家格之通進上物仕、於御城 御目見被仰付被下度旨願被為申出、調被仰渡、

左之通御座候、

一 島津(忠卿 今和泉家)三次郎殿家来之内三家、自分繼目家督之節

御目見可被仰付候、重而名書を以可被相願旨、延享元年子

十一月、被仰渡置候、

一 元文二年巳四月、島津(貴爵 垂水家)玄蕃殿・島津(忠紀 越前家)周防殿・島津(久門 加治木家)兵庫殿家来三人宛、自分繼目家督之節一度ツ、御目見可

被仰付旨當座へ茂被仰渡置候、

一 右三家之家来 御目見被仰付候者共ハ 御目見之節脇

差指候様ニ被仰付候、家来三人之外向後 御目見被仰付候者有之候而茂、脇差指候儀不罷成旨被仰渡置候、

一 三次郎殿家都而周防殿例ニ何事茂伺候儀者可致旨、延

享元年子五月廿三日、被 仰出置候、

右之次第ニ御座候、因幡(島津忠温 今和泉家)殿家来三人、繼目家督之節

忝度ツ、御太刀進上ニ而 御目見可被仰付旨被仰渡

置候、其節栗川孫六事幼稚ニ而相果、 御目見不仕

候、栗川家之儀右三人之内ニ而御座候、然者孫六事

一世自分 御目見不仕候故、中絶之筋ニ茂可相成候

得共、因幡殿家和泉家相續被仰付、諸事御取立ニ而
 儀御屋敷江被為居、其砌迄ハ家格等之儀ニ付被仰付
 候通ニ者無之、近年當分之屋敷江被為引移候以後都
 而之格式茂相定申候ニ付而ハ、中絶与者相見得不申
 候間、此節孫次右衛門自分継目節、御太刀進上ニ而
 於 御城 御目見可被仰付儀与吟味仕候、以上、

寶曆九年卯四月八日 本 安 吉調之、

覺

島津津備中殿五男 末川彦十郎

右初而之 御目見願被申出、進上物調被仰渡候、備中

(備垂水家)

殿家五男進上物之先例無御座候、寶曆五年亥十一月、

備中殿三男末川文九郎・四男末川七之進初而 御目見

之願被申出、進上物調被仰渡候節、享保廿卯年、嶋津

(久造)

兵庫殿二男島津助左衛門・三男村橋左膳別立之御礼願

(久造)

被申出、調被仰渡候節、兵庫殿家二男迄御直元服之家

格被仰付置、助左衛門事寄合被仰付、左膳事者三男ニ

而、寄合并被仰付候付、助左衛門同前之進上物者難被

仰付筈ニ御座候条、御太刀迄を進上可被仰付儀御座候

得共、得与吟味仕候ニ、兵庫殿家之儀ハ格別ニ御取分

ケ有之候付、左膳事御太刀迄を進上被仰付候而者事輕

相見得申候間、助左衛門一等被相下、御太刀・一種一

荷進上之筋ニ茂可被仰付哉与奉存候、一種一荷之儀者

御格式之内ニ茂相見得不申、尤進上仕候餘例茂無之事

御座候条、右品進上可被仰付とも難申上御座候、兵庫

殿家者格式之儀御座候間、不被混餘家、左膳事兄助左

衛門同前ニ御太刀・二種一荷進上可被仰付哉与奉存候、

(久進)

且又郷原金太夫事準御二男家之二男、島津權左衛門事

御二男家之三男ニ而、各寄合并被仰付置、御太刀・二

種一荷進上仕候、右を以ハ、左膳事茂三男ニ而寄合并

為被仰付事ニ御座候得者、右金太夫・權左衛門例ニ茂

相當仕候旨申上候処、助左衛門儀御太刀・二種一荷進

上、左膳事御太刀・一種一荷進上被仰付候、其以後備

(島津忠紀、越前家)

中殿・周防殿・善次郎殿家跡之儀者一所持之列相離、

(島津久門、加治木家)

御一門家ニ被仰付、右三家之儀家格ニ相掛り屹与立候

儀者相并候様吟味可仕旨被 仰出置候、右次第御座候

得者、備中殿二男末川織衛事 御直元服被仰付、御折

(久造)

六合・御樽三荷・御太刀・銀馬代進上被仰付候得共、

未別立無之候付、屹与立候家格進上物相究不申候、然

共先様別立被仰付候ハ、右助左衛門例を以御太刀・二種一荷進上被仰付外有御座間敷与奉存候、然者村橋左膳事兵庫殿三男ニ而、寄合并被仰付、嫡子元服之御礼ニ而御太刀・一種一荷之家格被仰付、文九郎事元服等之儀者相替申候得共、備中殿事一所持列相離、御一門家ニ被仰付、其家之三男ニ而御座候得者、御太刀迄を進上被仰付候而者相并不申候間、右左膳例を以御太刀・一種一荷進上可被仰付儀与奉存候、且又七之進事四男ニ而、餘家ニ茂四男 御目見之先例無御座候、然共右通御取分ケ有之家筋之四男ニ而御座候ニ付而ハ、文九郎事御太刀・一種一荷進上被仰付候ハ、七之進事一等被相下、御太刀進上被仰付相當可仕与吟味書差上ケ置申候処ニ、申出之通文九郎事御太刀・一種一荷進上、七之進事茂御太刀進上被仰付候、此節五男 御目見之先例無御座候得共、右通御取分ケ有之家筋之五男ニ而御座候故、彦十郎事弓進上被仰付候ハ、相當可仕儀与吟味仕候、乍此上御詮議次第奉存候、以上、

寶曆九年卯四月四日 本 吉 安 吉調之、

右申出置候通、彦十郎事弓進上被仰付旨致承知之、

174

覚

畠山數馬二男

畠山平太

右初而之 御目見被仰付度候、進上物之儀者御見合を以被仰付被下度旨願被申出、調被仰渡、左之通御座候、一數馬家一所持格ニ而、嫡子 御直元服、御太刀・三種二荷進上被仰付候、右家二男近年 御目見被仰付候儀當座へ相知不申候付、自家へ相糺候処ニ、當數馬親畠山數馬事、祖父式部(國傳)二男之内、寶永四年亥十二月十五日、御太刀・馬代・折六合・御樽三荷進上ニ而 御直元服被仰付候、左候而、嫡子畠山和泉事相果候付、右數馬始益之丞事、正徳元年卯十月十五日、嫡子成被仰付、御太刀・三種二荷進上仕、御礼申上候、右數馬二男ニ而元服被仰付候節、左之通被仰渡置候由ニ而、此節當座へ被差出候、

174の1

式部殿二男之儀者 御直元服可被仰付候、式部殿事

(光心)
寬陽院様御子之故を以今度新規二男迄元服被仰付詔

二而者無之候、式部殿格式之内、他家之者三茂二男迄元服被仰付候類茂有之候、且又先祖長壽院無比類

御奉公之一筋茂有之付而被仰付事候間、右之詔御記録所又者御家老座三茂髓ニ書留置可申候、元服之儀者いつニ而も御祝日ニ可被仰付旨 御意候、

亥十一月廿二日

一寶永三年 御目見進上物御格式被相定候御格式之内、

此以後者二男を嫡子并之進上物者被仰付間敷候、且又致分地相勤候者茂嫡家并之進上物間敷由相見得申候、

一寶永六年、北郷四郎事二男成之御礼申上候節、御太刀・

二種老荷進上被仰付候、北郷八右衛門二男ニ被仰付候而茂相替不申候、

一先桂太七郎弟桂平六左衛門始而 御目見之節、太七郎

家二男 御目見進上物之先例無之候得共、太七郎家一所持ニ而、嫡子 御直元服、御太刀・三種二荷進上被

仕候故、平六左衛門事御太刀・二種一荷進上被仰付候、

一正徳元年被 仰出候御格式之内、二男迄御太刀・二種

一荷進上不仕来家者、嫡家 御直元服并御太刀・三種

二荷進上仕候人之二男ニ而茂、御太刀計を進上可被仰付旨相見得申候、

一正徳二年、島津頼母殿(久記)二男權田弁之助家号拜領之御禮申上候節、御太刀迄を進上被仰付候、

一享保五年、島津内記弟基太村助(久應)太夫始而之 御目見、

御太刀・二種一荷進上被仰付候、是者内記家之二男島津織部事者 中納言様御女子腹ニ出生ニ而、右御女子

之遺領相續被仰付候故ニ而茂候哉、内記家之乍二男一所持格ニ而、御太刀・三種二荷進上仕候得共、助太夫

事此家之先例ニハ難被仰付候間、御太刀・二種一荷進上被仰付儀与其節調書差出、其通被仰付候、

一享保八年、島津仁十郎殿弟土岐太郎次郎、諏訪甚左衛門弟諏訪甚之助始而之 御目見願出候節、両家共ニ一

所持之家筋ニ而、嫡子 御直元服、御太刀・三種二荷進上仕候間、太郎次郎・甚之助御太刀・二種一荷進上

可被仰付儀与調書差出候処ニ、兩人共ニ御太刀迄進上被仰付候、

一享保九年、一所持・一所持格・寄合并之二男・三男・

四男始而之 御目見仕候節、進上物之儀其家ニ付而進上仕來候品者有來通可被仰付候、且又右二男・三男・四男 御目見之節進上物仕候例無之候ハ、時々遂吟味可相伺候、其砌何分与可被仰付候間、此段承知仕、帳面ニ可記置旨被仰渡置候、

一享保廿年、御太刀・一種一荷之進上物御格被相立候、

一同年、島津求馬弟柳久之丞始而 御目見之節、求馬家

二男 御目見之先例無御座候、然者右段之御格式茂

有之、嫡家 御直元服ニ而御太刀・三種二荷進上仕候

家之二男御太計進上仕候例多々有之、久之丞事御太刀

迄を進上被仰付ニ而茂可有御座哉与相考申候、乍然御

太刀・一種一荷之進上物御格被相立候ニ付而者、久之

丞事 寬陽院様御孫之儀ニ而、餘人与者訳相替候条、

御太刀計ニ而者輕ク相見得申候間、御太刀・一種一荷

進上被仰付ニ而茂可有御座候哉、御吟味次第可被仰付

儀与調書差出候処ニ、久之丞事御太刀計を進上被仰付

候、

一元文二年八月廿八日、島津市太夫殿二男細瀧金次郎事

始而 御目見之節、市太夫殿一所持ニ而、嫡子御太刀・

三種二荷進上候得共、二男 御目見進上物之先例無之候付、御見合を以被仰付被下度旨被願出候節、土岐太

郎次郎・諏訪甚之助・柳久丞右三家之類格を以御太刀

計進上可被仰付候哉、乍然市太夫殿當時一所持之儀者

北郷四郎同前之儀ニ御座候間、四郎家之類格ニ茂可被

仰付候哉、又者一等被相下、御太刀・一種一荷進上ニ

茂可被仰付哉、於此儀ハ究而何分難申上候間、御吟味

次第可被仰付儀与調書差出候処ニ、金次郎事御太刀・

一種一荷進上被仰付候、

一元文三年午二月十五日、比志島隼人二男比志嶋彦七・

三男比志嶋彦八始而 御目見之節、隼人家一所持ニ而、

嫡子 御直元服、御太刀・三種二荷進上候得共、二男・

三男 御目見進上物之先例無之、隼人御役内之儀候故、

二男彦七御太刀・一種一荷、三男彦八弓進上被仰付候、

一同年十一月、穎娃内膳二男穎娃佐太夫始而 御目見之

節、内膳家一所持ニ而、嫡子 御直元服、御太刀・三

種二荷進上候得共、二男 御目見進上物之先例無之、

内膳御役内之儀候故、二男佐太夫事御太刀・一種一荷

進上被仰付候、

一寛保二年戊八月、肝付彈正二弟肝付八五郎・三弟肝付

郷七始而(兼唐) 御目見之節、彈正家一所持二而、嫡子之儀

御太刀・三種二荷進上被仕来、親肝付典膳弟肝付郷十

郎迄者 御直元服被成下候得共、近年御格式被相定候

以後、二男・三男 御目見仕候者無御座候ニ付、進上

物之儀御見合を以被仰付被下度旨願被申出候節、数代

續二男以下 御直元服被成下候付、右八五郎事(北郷四郎)種子嶋

四郎助・桂平六左衛門例を以、御太刀・二種二荷進上

被仰付ニ而茂可有之候哉、乍然比志嶋隼人・穎娃内膳・

嶋津市太夫殿二男各御太刀・一種一荷進上被仰付候付、

右例ニ茂可被仰付哉与調書差上候処ニ、八五郎事御太

刀・一種一荷進上被仰付、三弟郷七弓進上被仰付候、

右通、寶永三年 御目見進上物御格式被相定候以後、

北郷四郎・桂平六左衛門右兩人御太刀・二種一荷進

上被仰付候、正徳元年被 仰出候御格式有之、權田

弁之助御太刀計を進上被仰付、享保五年、基太村助

太夫御太刀・二種一荷進上被仰付、享保八年已来土

岐太郎次郎・諏訪甚之助・柳久之丞是又御太刀計進

上被仰付候、左候而、同二十年、御太刀・一種一荷

之御格被相立候、其以後細瀧金次郎・比志嶋彦七・

穎娃佐太夫・肝付八五郎御太刀・一種一荷進上被仰

付候、右人数者皆以嫡家一所持・一所持格ニ而、嫡

子 御直元服、御太刀・三種二荷進上之家筋ニ而、

右通進上物相替申候、然者数馬家之儀茂一所持格ニ

而、嫡子 御直元服、御太刀・三種二荷進上被仰付

右家ニ同前之儀ニ御座候間、權田弁之助・土岐太郎

次郎・諏訪甚之助・柳久之丞類格を以、御太刀迄を

進上被仰付筋ニ茂可有之候得共、数馬家之儀、先祖

長壽院事 義久公御家老職被仰付、関ヶ原合戦之節

義弘公御供仕、御難儀之節御名代戦死被致候儀、無

比類御奉公之一筋茂有之候付、(合書)總州様御意之趣茂

有之、先数馬二男之内 御直元服迄茂被仰付、詛茂

相替為申事候間、北郷四郎・桂平六左衛門両家之例

格を以、数馬二男平太事御太刀・二種一荷進上可被

仰付哉、乍然嶋津市太夫殿・比志嶋隼人・穎娃内膳・

肝付彈正右四家之二男御太刀・一種一荷進上被仰付

候類格を以一等被相下、御太刀・一種一荷進上ニ茂

可被仰付哉、右両条究而難申上候条、御吟味次第奉

存候、以上、

寶曆八年寅八月十二日 中 本 吉 安

右畠山平太事御太刀・一種一荷被仰付候事、

175 覚

鹿兒嶋中并諸外城迄五月五日ニ家^{ノホリ}を相立候始りハ、
當島津李殿^久曾祖父佐多^{後称}島津^{備前殿}久、寛文元年 光久
公之命によつて稱伊勢兵部貞昭之子、為幕下伊勢兵庫貞
衡之養子、同十一年辭伊勢氏、是因養父貞衡生實子貞守
故也、同十二年五月、為佐多丹波久利之後嗣、久達嫡子
佐多右近久基延寶五年丁巳六月八日誕生于鹿府、翌六年
五月五日、始而佐多家江升被相立候半与相考候、佐多家
江升被相立候ニ付而ハ、鹿兒嶋中貴賤男女共ニ見物ニ参
候者大分有之与申事ニ候、上原了雲古戦咄之内ニ茂、
御當國ニ而者佐多家始而升を被相立候而より、世上于今
升相立候与咄申候、久達一往江府へ被為居候故、江戸表
升相立候ニ付而、直風儀を被移候而為被相立与其比世上
にも為致沙汰事之由候、當寶曆九年迄年数八十二年程ニ

茂相成候、大坂落城以後一統太平ニ帰シ候驗与申事ニ候、

但延寶六年より被立始候儀ハ究而ハ不相知候得共、此

方考を以相記置候、いつれ之筋にも佐多殿より被立

始候儀ハ無別儀事ニ而候、

176の1

(本文書ハ「旧史館調」一四四・二六八号文書ト同一文書ニツテ省略ス)

176の2

本文入江十郎左衛門相果、嫡子入江源十郎江跡職之願
親類共より願申出、右ニ付而十郎左衛門江御切米四石
被下置候故、引續源十郎江被成下度旨願申出趣有之、
由緒相札可申出旨被仰渡候、十郎左衛門養父入江十郎
兵衛代御當地江引越被仰付、御切米四石宛被成下候ニ
付、十郎左衛門代引續御切米被成下度旨御訴訟申上候
節、先祖共代^(義弘)惟新様関ケ原御帰陣之節泉州堺江被遊
御退候節、段々御奉公相勤候由緒申出候付、享保十六
年亥九月、當座江調方被仰渡、先役川上^{久徳}平右衛門より
調書差上ケ置申候ニ付、別紙写意通差上ケ申候、依之
同年十一月廿日、御扶持米式拾俵、入江十郎兵衛繼目
養子被仰付候ニ付、依願十郎兵衛江被下置候通入江十

郎左衛門江被成下候段、御家老衆御證文を以物奉行方江被仰渡置候由、此節承届申候、此段申上、以上、

寶曆九卯五月十八日 本 吉 安 吉調、

覚

天津正祐庵主者阿多大年寺末寺正覚寺ニ御建被遊候、天津芳祐庵主与者相知レ不申候、外ニ桂窓妙久大姉与申上、日新公御兄弟様ニ而有之由承申候、是又阿多之内桂窓庵ニ御位牌御建被遊候、此寺當寺支配ニ而、大年寺末寺ニ而候、右、享保十六年亥十月八日、福

昌寺師山和尚より被申出置候也、

覚

一 御関狩

一十六代之 太守義久公御代、天正四年 近衛前久公御當國江御滞在之節御馳走事与相見得、段々ケ条書有之候、右之内ニ春山之御関狩与書記有之候、其節前久公御一覽被成候儀者究而相知不申候得共、右通御譜中ニ被召載置候得者、其砌ニ茂御関狩有之候与

相見得申候事、

一 古老之者共申傳候者、御関狩之旧例者 頼朝卿御代 富士牧狩有之候ニ付、御家之儀茂 頼朝卿御子孫之儀ニ御座候故、御関狩之儀茂 御家ニ相残り候、尤武備之ならしにて有之由候、且又 惟新様 中納言様朝鮮御帰陣之節、寺沢志摩守様・宇久後称・大和守様鹿兒嶋江御見舞之節被召列候人数踊有之候ニ付、右之為御返禮 御家御旧式之御関狩於桜嶋御張行有之、御兩人江御馳走被成候由申傳候、右通古老之者口碑ニ相傳候迄ニ而、御関狩起り候基之儀ハ相知不申候得共、中納言様御初年之時分ニ茂右之通御旧式之御関狩為有之儀ニ御座候得者、自古来之御旧式与相見得候由、先役共書記置候事、

一 右御関狩場所之儀ハ最前吉野ニ而有之、其後伊集院春山又ハ谷山野ニ而為有之由ニ御座候、尤 寛陽院光久様 泰清院様 大玄院様御三代共ニ数度御登被成、琉球王子被召連見物被仰付候儀茂為有之由、古老之者共申傳候与是又先役共書記置候事、
一一 説ニ、古老之者共申傳候者、御関狩・御馬追之儀

一吉野御牧

軍事之習セニ而、御閑狩者御出陣之御作法、御馬追者御帰陣之御作法与申傳候得共、古書附等ニ而ハ見當リ不申候、依之此節段之相糺申候得共、右之訳相知不申候、依之御包丁人頭方茂右御規式之次第承合候処、御閑狩ニ者御盛塩御引渡有之、御馬追ニ者御盛塩式御三献之差別有之、右御規式之品を以御出陣・御帰陣御三献共相見得不申、尤右通之申傳茂無之由承届候、然共従前之右通申傳儀ニ候得者、如何様由来有之事ニ而、其通申傳候哉与相考申事ニ候事、

右川上家仕立召置候牧ニ而候処、慶長年中當川上久馬先祖川上上野久隅代右之牧 家久公江被差上、家久公吉野御馬追御登被遊、久隅茂参上為仕由ニ候、且又慶長九年閏八月十九日、吉野御牧毛付書卷通伊勢兵部所持之文書ニ相見得申候、右を以ハ慶長年中より吉野御馬追相始り候筋ニ相見得申候、吉野御馬追中古ニハ御名代無之、御家老一人・惣奉行一人・川上嫡家御目附二人羽織袴ニ而罷上り、御規式無之候得共如旧例可被仰付旨、寶永三年被 仰出置候、

180

覚

御家譜之内書抜

維元龜二年歲次辛未六月朔壬辰二十有三日甲寅、前奥州太守大中良等菴主於本宅俄示而登仙矣、越二十有九

179

左候而、御家老勤方有之候得ハ若御年寄勤ニ被仰付候旨、享保廿年卯八月、相究り申候、然者自古來御名代并役之被差越御規式為有之与相見得申候得共、何年間より相始り候儀ハ相知不申候、

右、寶曆九年卯五月十九日、要用集御用ニ付、

諸調書之内書拔置之候、

一享保九年以前ハ、一所持家格之衆年頭正月三日於 御對面所持參太刀御座配有之候、御書院内之御座配茂有之、然處ニ同年甲辰七月廿三日 吉貴公御意を以年頭所持御太刀進上之衆内外共ニ一流ニ着座被仰付、順之ニ列被仰付候旨被 仰出候、

但御對面所客居之方一流二十人宛着座、御盃頂戴、

日庚申、就于 日新精舎随梵儀以闌維、末略之、三男
藤原年久謹右祭文序、

前文略之、先君三州太守前陸奥守大中良等庵主、俄然
唱無聲三昧於加世田城寢室、越末系藤氏征久、祭文末
都而略之、

右両通之祭文、此本在清水岡寺云々、

日新寺常潤院之内ニ 大中公闌維場石与書記石有之
候、右を以ハ於加世田御城 大中公御逝去被遊、御

葬場者常潤院之内闌維場石有之所ニ而御葬送有之、

御廟所ハ當分福昌寺ニ被遊御座候与相見得、是以別

条有御座間敷与奉存候、川上氏・町田氏より口傳ニ

致承知置候ハ、大龍寺本御内當分中神氏屋敷内ニ御

持佛堂有之、於彼所御逝去之由ニ候、御系圖ニ者何

方とも御傳記無之候、御家譜之内ニ右通相見得居候、

後年為考書寫置之候事、

闌維場石 常潤院ニ有之、石銘之文字右通有之
由候、蘭字字書ニハ見當り不申候、

覚

與中之諸士より杉差立候儀何様之訳ニ而候哉、且又

何年間より始り候哉、急度為被仰渡儀ニ而ハ無之候
得共、御用候間、内々ニ而相札可申出旨被仰渡候得
共、當座へ相知不申候故、島津圖書方江承合候処ニ、
(久倫・寛之城参)
左之通申出候、

一 植杉・差杉之儀ハ下野久元代為申付与申傳候、左候而、

至圖書久通ニ猶以仕立杉申付、又江戸杉之実持下り、

苗ふせ置方方ニ遣、或ハ土佐御家老桐岡將監殿江申遣

相求、或ハ屋久杉之苗を茂植付、夫より組杉・人別杉

等茂始り、専久通代ニ繁昌為仕与申候、久通平生自贊

咄ニ、杉之親ハ己レ也与為被申居与古キ者共申候、承

應元年、吉野江山屋敷被致拜領、野ニ而御座候を、折

々自分差越、大境ニ松を植付、圈内ニ杉・松等被仕立

置候事、

一 杉ニ限り不申、久通代長門・周防より楮之苗木取寄、

紙漉師松岡氏抔召下、又ハ宇治より茶實を下シ園を仕

立、其外桐油之木などに至り植始、夫より方々弘まり

為申与申傳候事、

一 久通事承應三年之冬伊集院地頭被仰付候、其後四年目

欽明曆三年之冬、伊集院通道之松栽為有之与申傳候事、

一久通代寛文十三年七月、杉改帳差出可申旨被仰渡、宮

之城内改之帳面、植杉・苗杉共四萬七千九拾八本与相見得申候、其内大キ成杉者久元代仕立為被申杉与相見得申候事、按ルニ、寛文十三年より享保十七年迄六十年目也、

右之通被申出候間、此段申出候、以上、

享保十七年 十一月十六日 御記録奉行
壬子

覚

日新菩薩記一冊

慶長二歲次丁酉三月日、日新寺八世泰圓守見叟、

行年六十三而綴旆、以上、日新菩薩記之末ニ書記有之、

覚

高城六右衛門

三百石高上り之願申出、家筋調被仰渡候、六右衛門養祖父高城六右衛門事ハ當高城十太郎高祖父高城喜左衛門二男ニ而、初而別立、御馬廻ニ而數度江戸詰仕、其後納殿御役相勤申候、亡父高城六右衛門事大河平休兵衛二男ニ而候処ニ、右六右衛門養子ニ罷成、是又御馬廻ニ而數度江戸詰仕候、當六右衛門事當分新御番ニ而

江戸詰仕、小與頭相勤居申候、尤代々 御城下士ニ而、代々小番相勤申家筋ニ而御座候、以上、

寶曆九卯七月十日 本 吉安 吉調之、

184

覚

春日トハ佛師の名也、樂の仮面にも春日カ作餘多ありト云々、旧記に、稽文會・稽主勲ハ河内國春日部邑人也、兄弟共に佛師なり、一説にハ父子トあり是を春日作ト云なり、浮屠附會の説に、春日大明神の作ト云て世人をまとわせり、信用すへからすと有、

右俗説辨之内ニ相見得候也、

185

覚

中紙進上ニ而家督継目初而之 御目見之者一御役被 仰付置候人数家督継目、且又乍御役初而之御禮申上候節、小番ニ而茂大番ニ而茂家督継目・初而之御礼之次第を不分ケ、御役列之通 御目見可被仰付候、右終而無役之小番・大番・御赦免士 御目見之次第左

申出候、是者先島津頼母殿・同求馬殿(久原)ニ而可有御座候、

頼母殿儀 寬陽院様御直子ニ而御座候處ニ、元禄十四

年巳十一月十四日 大玄院様御代、御高千石拜領ニ而、

兄島津大藏殿家例ニ準シ、御家之御四男家ニ御取立ニ

而御座候、同年同月、求馬殿儀兄大藏殿・頼母殿家例

ニ随ひ、御高千石拜領ニ而、是又御五男家ニ御取立、

右三家共ニ内之御座配ニ被召加置候、

一 淨國院様御家督中被定置候以後 思召を以ハ、御人躰

ハ違候得共、越前家・和泉家皆断絶之家相續、家格者

新規ニ被召立候由被申出候、此儀者、越前島津家之元

祖周防守忠綱者 御元祖忠久公之御二男ニ而、承久三

年七月 忠久公越前國被任守護職候故ニ、為守護代越

前國ニ居住、其子周防守忠行代播磨國下掛保地頭職ニ

被補、是より代々播州ニ居住ニ而、忠行子左衛門三郎

行景、行景弟左衛門六郎忠轉行景家相續、忠綱より忠

轉迄者 鎌倉將軍家江呢近有之、忠轉より左近將監忠

長迄代々連續仕来、 京都將軍家ニ呢近ニ而、忠長代

天文三年八月、播州朝日山合戦之節戦死ニ而、此家及

断絶申候、遂戦死候家跡断絶候儀者武士之可有之事ニ

候得者、其家瑕瑾之儀少茂相見得不申、御支族之内相

并候家筋茂無御座候、其上 頼朝公御為ニ者忠綱事者

御孫ニ而御座候、當周防殿事、越前家中絶候故、元文

二年巳三月、右家相續被仰付、御高一所之地迄茂拜領

ニ而、御一門ニ被仰付置候、和泉家元祖下野守忠氏者

四代太守忠宗公御二男ニ而、佐多・新納・樺山・北郷

氏等之祖之兄ニ而御座候、建武年間高越後守師泰・齋

藤弥四郎左衛門尉利泰・忠氏三輩為鎮西成敗職、(為侍 断奉 所之)

行与御系圖 在筑前博多而 將軍家呢近ニ而御座候、二代

右衛門兵衛尉忠直 尊氏將軍御代貞和之比、武勇為勝

人ニ而候、後ニ 五代太守貞久公御代、數輩之親戚を

相離れ 西征將軍官方ニ属シ、被居住豊後、於彼國死

去、三代能登守氏儀事茂於豊後死去、四代式部大輔久

親代 七代太守元久公自豊後被召返、於救仁院深川村

百町之采地を賜り、志布志ニ居住被仰付候、五代又四

郎直久・弟又五郎忠次、應永廿四年酉九月十一日、兄

弟同日ニ於河邊被遂戦死、子孫断絶仕候、直久屬守護

方被遂戦死候儀、是又武士之可有之事ニ候得者、子孫

断絶与乍申其家之瑕瑾少茂相見得不申候ニ付、先因幡(島津忠)

殿事、和泉家中絶候故、延享二年子五月廿五日、右家相續被仰付、御高一所之地迄拜領、家格御一門ニ被仰付置候、

一 島津十太衛門(右腕力)養祖父島津織部事、當島津内記元祖島津(久茂)二男(久命)ニ而、始而別立被仰付候、織部母事者(家久)中納言様御娘ニ而御座候、母存生之節御高四百餘石被下下置候、依之母遺領を織部江被成下度旨、承應三年 寛

陽院様御代中務より願被申出、御免被仰付置候、左候而、兄島津甲斐(久武)より年頭御太刀進上、内之御座配ニ被召加度旨願被申出、延寶六年午二月被仰付、同七年未

正月三日、内之御座配ニ而御太刀進上被仰付候由、十太右衛門家之系圖ニ相見得、委細之訳ハ相見得不申候、一 島津清太夫家之儀者去々年糺方被仰渡候ニ付、相糺差上ケ置申候書付扣、此節書寫差上ケ申候、

右之通御座候、彈正殿去々年家格一所持格被仰付被下度旨願被申出候節、委細調書差上ケ置申候、然處此節被申出趣有之候ニ付、又々吟味仕候、島津頼母殿・島津求馬殿・島津十太右衛門・島津清太夫右四家共ニ 寛陽院様 大玄院様御代家被相立、 御對

面所并内之御座配ニ被召加置候、 淨國院様御代新規御取立之家者、先島津周防殿事(久壽花調家) 大玄院様御二男

ニ而、最初一所持格被仰付置、其後一所之地拜領ニ而、家格一所持大身分被仰付候、右外ニ者當周防殿・先因幡殿 淨國院様御二男・御三男ニ而、越前家・和泉家相續被仰付候、勿論右両家之先祖御座配等ニ

被罷出候人者無御座候得共、両家之先祖昵近之御奉公被相勤、両家共ニ被逐戰死、至子孫其家瑕瑾之儀

少茂相見得不申訳を以相續被仰付、家格右通被仰付置候、其外之儀ハ去々年調書差上候趣ニ相替儀無御座候間、去々年之調書写相添差上申候、以上、

寶曆九年卯閏七月七日

安 吉 寶曆七年之調書當座并江戸ニ而之調書、島津清太夫家之糺方写一紙ニ書写差上ケ置候、右書留ハ跡之座ニ有之、吉

調之

※ (行間)

『卯閏七月廿日、主鈴殿より御用ニ付吉田用右衛門罷出候處ニ、

御臺子之間ニ御下り被成候而被仰聞候趣ハ、彈正殿願ニ付而先日調書差出候、尤先調書ニ何ぞ相替儀も無之候ニ付、先調書写迄差出御覽被成置候、依之圖書殿(島津久茂)・藤馬殿(參列賢忠)へも被仰談候

處ニ、御手を可被附訖不相見得候故、此節も御手を不被相附(二候力)者者、其上大切成御願ニ而候、先日用右衛門より御咄ニ申上候趣、願之筋ニ茂被仰付候へハ、當分一所持・一所持格二十四五家被相越由ニ候、左候へハ、連名何れ之場ニ可相成与御尋被成候故、嶋津求馬殿前後ニ御吟味之上連名可被仰付哉与奉存候、伊勢兵部次ニハ連名ハ有之間敷哉与御尋被成候、是ハ御家格ニ相掛り申候へハ、御直別之御庶流他家之末席ニハ不被仰付筈与奉存候与申上候、此節彈正殿御願之儀ハ第一大切成候事ニ而候、其上時節柄与申旁以難被成時分ニ而御座候、浄國院様御代段ニ家格被相究置候以後之儀候へハ、私共ニ茂何分難申上由申上候へハ、尤之事ニ候、主鈴殿ニ茂時節柄と申旁以難被成事与被仰聞候事、且又御家老職二代迄被相勤候儀を第一ニ被申出候得共、是ハ餘り不珍筈ニ候、被仰聞候寄合家格御家老職二三代共被仰付候ハ多々可有之哉与存申候段、是又御直ニ申上候へハ、成程其通ニ候与被仰聞候事」

覚

福昌寺(家久) 慈眼院様御影堂、此節新御造替程之披キ御修甫近々成就仕筈候故、棟札之儀吟味仕可申出旨被仰渡

候、神社佛閣御造立御造替之節ハ、時々棟札被相改、其訊被書記事ニ御座候得共、御修甫等有之候節棟札又ハ副札等被仰付候先例段ニ相札申候得共、見當り不申候、然者此節之儀古物少々御用ニ相立候ニ付而者、披キ御修甫之筋与相見得申候故、御造替共難被書記筈ニ御座候間、先年(雜意) 隅州様御家督内御造立之節被納置候棟札被相改ニ者及申間敷与奉存候、以上、

寶曆九年卯五月十日
吉調、安

覚

宇宿正右衛門

本文初而高持成之願申出、家筋調被仰渡候、宇宿正右衛門事宇宿藤九郎弟ニ而、始而別立申候、藤九郎六代之祖宇宿彈次郎勤方相知不申候、直子無御座候付、緒方氏之子養子ニ罷成、宇宿治部左衛門与申候、是高祖父ニ而御座候、諸檢者等相勤候由御座候、曾祖父宇宿善右衛門事是又諸檢者等相勤申候、男子無御座候付、祖父宇宿勘兵衛事ハ隈之城衆中別府次五右衛門三男ニ(行世)而、右善右衛門躰養子ニ罷成、横目役等相勤候、男子無御座候ニ付、親宇宿十郎左衛門事ハ中嶋七右衛門二

男ニ而、聳養子罷成、横目役相勤申候、正右衛門事當分何之勤方無御座候、尤大番相勤申咎之家筋ニ而御座候、以上、寶曆九年卯何月(マ)本吉調之、
安

覚

諏訪仲右衛門事亡諏訪左衛門繼目養子被仰付置候処ニ、此節仲右衛門親類共より違変之願被申出、願之通於被仰付者、仲右衛門并子共迄茂婦參之儀、何分ニ茂御見合を以被仰付被下度旨被申出、調被仰渡、左之通御座候、

一 仲右衛門事最初三崎(久)文太夫二男ニ而罷居候節、其身代別立、家格代々小番ニ被仰付置候処ニ、諏訪左衛門繼目養子被仰付、子共迄茂召連候故、仲右衛門家跡不被召立筋ニ願申出、其通被仰付置候、

一 寶曆六年子三月、嶋津大藏事祢(久)寢式部(清)養子被仰付、祢寢仙十郎与改名被致候、右大藏家跡三崎文太夫江被仰付、文太夫家持高取加本家相續被仰付、嶋津大藏与改名被致候、

一 寬延二年、毛利善太夫弟毛利六郎兵衛事其身代別立、

平田五次右衛門養子ニ罷成家督仕、其後致違変候ニ付、兄善太夫家ニ婦參被仰付候、

一 寶曆七年、指宿彦左衛門弟指宿弥右衛門事其身代別立、小牟田六兵衛繼目養子罷成、致違変候付、兄彦左衛門家ニ婦參被仰付候、

右之通御座候、當大藏事ハ最初三崎氏ニ而、寄合并家格ニ別立被仰付置、其家内より仲右衛門事其身代家格代々小番ニ別立被仰付候処ニ、諏訪家繼目養子ニ罷成候、其後文太夫事本家相續被仰付候故、當分ハ三崎家ハ無御座候、其身代別立、養子ニ罷成、致違変候而本家婦參被仰付候先例ハ前條之通御座候、然者當分仲右衛門事可立帰本家迎ハ無御座候、大藏事本家相續為被仰付事御座候得とも、仲右衛門事何れ實父大藏家ニ婦參被仰付外御座有間敷与奉存候、以上、寶曆九年卯五月八日本吉調、
安

右願之通被仰付候由被仰渡之、

覚

伊集院廣濟寺兼任

玄察堂

本文此節 思召を以廣濟寺江御高百石御寄附被仰付候ニ付而、寺格之進上物仕御禮申上度旨願申出、調被仰渡、左之通御座候、

一諸寺院江御高御寄附被仰付候節、住持より寺格之進上物仕御礼申上候先例當座相糺申候得共、相見得不申候

ニ付、寺社奉行所へ相尋申候處、右躰之節住持より寺格之進上物仕御禮申上候儀相知不申候由承届申候、

一享保八年卯十二月、島津六郎次郎江御高五拾石拜領被仰付候、其節御禮被願出置候得共、六郎次郎事長と病氣有之、御禮不相濟内島津權左衛門養子被仰付、養子

成家督之御禮相濟候、以後權左衛門家格之通御太刀・

二種一荷進上被仰付、御高拜領之御禮被申上候、

一同十一年午四月、関山軍兵衛養母御局江御高五拾石拜領被仰付候、其節軍兵衛事御太刀進上仕申上候、

右之通御座候、諸寺院江御高御寄附被仰付候節ハ、

住持より進上物仕御禮申上候先例相見得不申候、然

共六郎次郎・軍兵衛養母へ御高拜領被仰付候節ハ、

家格之進上物仕御禮為被仰付事ニ御座候、此節玄察儀道儀修学之功有之、其身ニ付而 思召を以御高御

192

覚

寄附為被 仰出御事ニ御座候故、常式御寄附高与者 訊茂相替申候、右両家之傍例を以、玄察儀寺格之通 一束一本進上仕御禮被仰付候而も何ぞ差支申儀者有 御座間敷与奉存候、以上、
寶曆九年卯閏七月廿二日
本吉 安 吉調之

本文重久金左衛門相果、直子無御座候ニ付、伊勢兵部附衆中高尾野預り大村平次郎嫡子大村與平次事、血筋之訛を以継目養子御免被仰付被下度旨親類共より願申出、調被仰渡、左之通御座候、

一金左衛門家高祖父以前之儀者相糺申候得共相知不申候、曾祖父重久善左衛門事 御城下ニ罷居申候、勤方ハ相知不申候、祖父重久善兵衛其身代中宿御暇之願申上、谷山へ引入罷在候、養父重久善兵衛直子無御座候ニ付、伊勢兵部附衆中高尾野預り大村平右衛門二男養子ニ罷成、重久金左衛門与申候、田舎御奉公小山田村庄屋等相勤申候、

一大村與平次六代之祖大村源左衛門事祁答院家之又庶流ニ而御座候、勤方相知不申候、高祖父大村七兵衛重昌

事谷山嶮方江相糺申候處ニ、谷山高帳其外古書附等ニ
段々相見得居申候由申出候ニ付、谷山衆中別条無御座
候、曾祖父大村七兵衛重之事伊勢兵部貞栄代附衆中ニ
罷成、高尾野地頭職之内、元禄十四年、高尾野預リニ
帳面等相直申候、祖父大村平右衛門、父大村平次郎、
其子與平次迄四人共ニ御當地江中宿仕候、

右之次第御座候、金左衛門・與平次續之訳ハ、金左
衛門事與平次祖父平右衛門二男ニ而、養子ニ罷成候
ニ付、金左衛門為ニ者與平次事父方甥之續別条無御
座候、右通無據血筋之訳を以者、御城下土竹下三
左衛門繼目養子ニ志布志衆中岩崎八郎兵衛二男養子
ニ罷成、竹下諸左衛門与申候、諸左衛門事其身代外
城より養子罷成、引續外城養子者御免不被仰付事ニ
御座候得共、男子無御座候ニ付、本家同所衆中岩崎
小鉄郎事又甥無據血筋之續を以養子御免被仰付候、
此節與平次事所高銀子等持越不申候得共、無據血筋
之訳を以養子之願申出、尤金左衛門其身代外城より
養子ニ罷成、引續外城養子ハ御免不被仰付筈御座候
得共、右通先例茂御座候間、與平次事金左衛門繼目

193

養子願之通御免被仰付候而茂何ぞ差支申儀有御座間
敷与吟味仕候、以上、寶曆九卯閏七月廿二日
本
言調之、

覚

内山勘左衛門

本文調被仰渡候、嫡子幼稚ニ而老躰罷成、嫡子成長仕
迄之間逼迫者難儀仕筈ニ御座候間、養子被仰付、嫡子
之儀ハ右養子嫡子ニ被仰付被下度旨願申上、願之通御
免被仰付候先例ハ御座候得とも、本文願同様之先例段
々相糺申候得共見當り不申候、依之吟味仕候處ニ、内
山勘四郎儀内山勘左衛門四男ニ而御座候、勘左衛門二
男・三男病身ニ有之、勘四郎儀者幼稚ニ而、家相續為
仕候而者、老年ニ罷成内外差支申候ニ付、甥内山新兵
衛養子ニ仕、左候而、勘四郎事者新兵衛家跡養子ニ遣
置候、勘四郎儀他家督仕居候得者、家内之者与ハ訳
茂相替申候、其上新兵衛事未年若ニ御座候得者、先様
男子等出生不致、外ニ茂身近キ者家相續仕者無御座候
ハ、至其節候而者差當り無據儀ニ御座候間、本家相
續之筋ニ茂可被仰付事ニ奉存候、然者右ニ茂申上候通、
新兵衛事先様男子茂出生可仕事ニ存申候、殊ニ者先例

茂見當り不申候間、勘左衛門願之通ニ者被仰付間敷儀
与奉存候、以上、寶曆九卯閏七月十四日
吉 安

覚

本文谷山早右衛門相果、直子無之、谷山衆中長野関右
衛門繼目養子被仰付被下度旨親類共より願申出、調被
仰渡、左之通御座候、

一 早右衛門曾祖父谷山早右衛門事勤方無之、大番相勤申
候、曾祖父以前之儀段々相糺申候得共相知不申候、祖
父谷山喜左衛門御兵具所筆者相勤申候、養父谷山喜兵
衛事右喜左衛門嫡子ニ而致家督、諸檢者・諸蔵役等相
勤申候、喜兵衛直子無之候ニ付、弟谷山早右衛門事養
子ニ罷成、御普請方惣大工添役相勤、先頃於江戸相果
申候、

一 谷山衆中長野関右衛門高祖父長野十郎左衛門、曾祖父
長野太夫、祖父長野太兵衛、右三代共ニ勤方相知不申
候、親長野善助事八同所衆中長倉寶仙坊二男ニ而候処
ニ、右太兵衛直子無之候ニ付養子ニ罷成、所庄屋役相
勤申候、関右衛門事ハ右善助三男ニ而、先長野善右衛

門家内より先年別立、所庄屋役相勤申候、代々谷山衆
中ニ而御座候、

右之通御座候、外城より鹿兒嶋士養子ニ罷成者、向
後之儀外城ニ而持高致所持、直ニ其高持出候者迄を
御免可被仰付旨、去ル元文二年巳五月被定置候、其
以後所高持越 御城下士養子御免被仰付候先例御座
候間、関右衛門事所高持越申候ニ付而ハ、早右衛門
繼目養子御免被仰付候而茂何ぞ差支申儀御座有間敷
与奉存候、以上、

寶曆九年卯九月六日 山本 吉安
吉調之、

覚

本文伊勢兵部附衆中高尾野預り肝付七右衛門事、
御城下土西郷次郎右衛門相果、直子無之候ニ付、血
筋之續を以繼目養子罷成候、依之七右衛門家跡御細
工所附内田市右衛門嫡子内田藤兵衛事血筋之訳を以
養子之願親類共より申出、調被仰渡、左之通御座候、
一 七右衛門曾祖父肝付縫殿元来谷山衆中ニ而為罷居由申
出候ニ付、谷山噺方江相糺申候處ニ、縫殿事高帳并古

書附等見合申候得共相見得不申由候、尤縫殿以前之儀

相知不申候、祖父肝付伊左衛門事ハ、元禄五年高帳ニ

伊勢豊松附衆中谷山預リニ而為罷居由申出候、其以後

元禄十四年、高尾野預リニ罷成候、亡父肝付喜左衛門、

其子肝付七右衛門迄高尾野預リニ而、御當地へ中宿仕

居申候、七右衛門事 御城下士西郷次郎右衛門繼目養

子ニ罷成候、

一 藤兵衛曾祖父内田次左衛門元来肥前國居住之者ニ而御

座候処ニ、大坪流切付馬肌之細工仕候ニ付、正保二年

被召抱、御細工所細工人之内ニ被召入置、御切米三石

六斗并御借シ屋敷迄被仰付、御用細工等相勤申候、尤

高祖父以前之儀ハ相知不申候、祖父内田軍助是又親同

前之細工仕候ニ付、御切米并御借屋敷同様被仰付、御

用相勤申候、亡父内田市右衛門事ハ最初上脇主左衛門

与申候而、祢寢式部家之家来ニ而候處ニ、島津又七郎

先祖島津安藝殿代彼方家来ニ罷成、左候而、右軍助養

子ニ仕り、是又軍助同前御切米并御借屋敷被仰付、同

様之御用相勤申候、且又神當流切付馬肌之細工を茂被

仰付候、其子當藤兵衛事御細工仕御用相勤、御借屋敷

迄被仰付、當分御用相勤罷居申候、

右之通御座候、七右衛門・藤兵衛續之訳ハ、七右衛

門親肝付喜左衛門妹藤兵衛親内田市右衛門江相嫁、

藤兵衛出生仕候ニ付、七右衛門事ハ藤兵衛為ニ者母

方血筋從弟之續別条無御座候、然者物奉行所附石崎

助右衛門事、申良衆中鳥越甚左衛門相果、直子無之

候ニ付、血筋母方ニ從弟之續を以繼目養子之願申出、

其節當座江調被仰渡候、新規ニ附衆中被仰付候者ハ、

諸座附・人家来之者ニ而茂、元来士筋目之者ニ而候

得者、御免被仰付事御座候、無左候得ハ、御免不被

仰付候、血筋を以ハ、御城下士又ハ外城衆中養子

ニハ、元来士筋目之者ニ而無之候得共、御免被仰付

先例ニ御座候、左候得者、助右衛門事元来士筋目相

知不申候得共、血筋之儀ハ別条無之候、御兵具所附

足輕・御厩附御中間・物奉行所附、其外御座附之者

之儀ハ同前之事ニ御座候間、血筋之先例を以甚左衛

門跡養子御免被仰付候而茂何ぞ差支申儀ハ有御座間

敷旨、寶曆三年酉八月、調書差上ケ置申候処ニ、願

之通養子御免被仰付候、右先例茂御座候得者、此節

七右衛門家部血筋之訳を以ハ藤兵衛事養子御免被仰付候而茂差支申儀ハ有御座間敷与奉存候、以上、

寶曆九年卯九月廿九日 吉安
吉調之、

覚

本文初而高持成之願申出、家筋調被仰渡候、町田五郎左衛門七代之祖町田越後當町田主計家(忠實)之庶流ニ而御座候、六代之祖町田右近(久武)、高祖父町田喜左衛門(久利)、曾祖父町田勝右衛門(久近)、右四代共ニ勤方相知不申候、祖父町田五郎(後昌)左衛門事ハ御納戸小細工人相勤申候、養父町田喜左衛門田舎御奉公、筆者・小役人等相勤申候、當五郎左衛門事ハ右喜左衛門弟ニ而候処ニ、喜左衛門直子無御座候ニ付養子ニ罷成、諸檢者等之御奉公相勤申候、尤代々御城下士ニ而、大番相勤申家筋ニ而御座候、以上、寶曆九年卯十月廿七日 山吉安 吉調、

覚

本文調被仰渡候、木場壽山曾祖父木場鉄之助事諸金細工等仕、御扶持米被下置、御用相勤申候、祖父木場十

郎右衛門事ハ右鉄之助三男ニ而、初而別立申候、是又金細工等仕、御扶持米被下置、御用相勤申候、養父木場十助小役人等相勤申候、直子無御座候付、木場平左衛門二男木場壽山事、享保十七年子十二月、繼目養子被仰付候処ニ、壽山事幼少より盲目ニ罷成、何御奉公茂相勤不申、先比相果申候、右之次第御座候得ハ、何之差立為申儀無御座候、尤大番家筋ニ而御座候、以上、同九年卯十二月二日 吉調之、

覚

本文永岩次郎兵衛其身代別立罷在、依願山元七郎右衛門繼目養子被仰付置候、依之薩州吉田衆中永岩長八事、血筋之訳を以次郎兵衛家跡養子御免被仰付被下度旨親類共より願申出趣有之、調被仰渡、左之通御座候、

一次郎兵衛曾祖父永岩藏之助元来加治木士之由候処ニ、薩州吉田江罷移吉田衆中ニ罷成候、何様之訳ニ而右通被仰付候哉与相糺申候得共相知不申候、祖父永岩助左衛門代御當地江中宿仕、勤方相知不申候、親永岩平右

衛門事ハ兄永岩長左衛門一所ニ島津故帶刀家来ニ罷成、兄長左衛門事大山助左衛門、弟平右衛門大山半助与改名仕候、其以後帶刀方致暇、親類伊藤孫兵衛家内ニ而罷在候、然共先祖共元来吉田衆中ニ而、一節家来ニ罷成候故、本之通兄弟共ニ永岩名字ニ而吉田衆中ニ被仰付被下度旨奉願候處ニ、元禄十七年申正月十八日、新納小右衛門御取次を以以前之通吉田衆中ニ御赦免被仰付候、平右衛門事多年御能方相勤、延享元年子六月、

木村四郎左衛門御取次を以代々御城下士被仰付、其子永岩半藏、其子當永岩半助ニ而御座候、

一次郎兵衛事ハ右平右衛門二男ニ而、延享五年辰四月別立申候、寶曆八年寅五月、依願山元七郎右衛門繼目養子ニ罷成、當分山元良右衛門与改名仕候、

一長八高祖父永岩藏之助、曾祖父永岩助左衛門、祖父永岩長左衛門、右三代共ニ前條ニ相見得申候、亡父永岩長四郎御當地へ中宿仕、御能方定役相勤申候、長八事當分御能方脇稽古相勤居申候、尤吉田衆中ニ而御座候、一深栖市兵衛其身代別立、相果、直子無之、隈之城衆中中村甚兵衛母方血筋三從弟續ニ而候故、家跡養子之願

親類共より申出、寶曆二年申四月十六日、諏訪甚兵衛御證文を以願之通御免被仰付候、

一瀬戸山半五事其身代御納戸附代々士ニ御赦免被仰付、嫡子瀬戸山作左衛門事依願他家養子ニ罷成、男子無之候ニ付、御納戸附御小者瀬戸山長平嫡子瀬戸山嘉助事養子之願申出、寛保三年亥十一月十八日、伊地知千左衛門御證文を以願之通被仰付候、

右之通御座候、次郎兵衛・長八續之訳ハ、次郎兵衛親永岩平右衛門事ハ長八祖父永岩長左衛門弟ニ而御座候故、次郎兵衛為ニ者長八事嫡家從弟違之血筋別条無御座候、次郎兵衛親平右衛門代吉田衆中ニ御赦免被仰付、其後代々御城下士被仰付候、次郎兵衛事其身代別立、他家養子ニ罷成、家跡養子之願申出候、深栖市兵衛其身代別立、相果、家跡養子御免被

仰付候、其外先例多々御座候、且又瀬戸山半五事瀬戸山長平嫡子瀬戸山嘉助養子御免被仰付候傍例茂御座候、然者其身代別立、外城養子ハ御免不被仰付事ニ御座候得共、血筋之訳を以ハ右通御免為被仰付儀ニ御座候間、長八事次郎兵衛家跡養子願之通御免被

仰付候而茂何そ差支申儀有御座間敷与奉存候、以上、
寶曆九年卯十二月二日 安 吉 吉調之、

覚

御國元御家老衆より江戸御家老衆江御問合書迄通御渡被成候、

御本文此度諸國大小之神社改方之儀従 公儀被仰渡、
従 此御方様日向國御相給之御方様御領分迄正保年間
御國繪圖御調進之節之通可有之候哉、又ハ當分之通御
相給之御領主より可被書出候哉、左候而者、至後年
御家之障ニ者相成間敷哉、致吟味可申上旨被仰渡候、
御本文ニ茂、鳥居伊賀守様江被得御内意候處、此節神
社改之儀ハ別而輕キ儀ニ御座候、御國繪圖御用之儀者
重キ事ニ候得者、以來御國繪圖御改御用之節ハ正保之
例ニ可有之候、此節神社改ニ付而、以後御差支ニ者相
成間敷由相見得申候、殊ニ先年御國繪圖御調進之節ハ
御名書を以被差上、此度之儀者御留守居名前ニ而被差
出筈ニ御座候、付而ハ伊賀守様ニ茂仰之通旁以輕キ儀
与相見得申候間、夫レ之御領主より被書出候迎茂、
後年重立候儀之類例ニ者罷成申間敷哉与吟味仕候、乍
此上御詮儀次第奉存候、以上、

200

寶曆九年卯十二月十二日 山 本 吉 安 吉調之、
右藤馬殿へ差上置相納り申候、

覚

本文調被仰渡候、一所持家之二男小番格ニ別立罷居候
者、一所持家之養子ニ御免被仰付候先例近代見當り不
申候、乍然當北郷民部曾祖父北郷(久傳)作左衛門事、當相良
源五左衛門曾祖父相良源五左衛門二男ニ而候處ニ、北
郷宗次郎(忠昭)為ニハ従弟之儀候間、養子被仰付被下度旨願
被申出、小番格之二男ニ而候得共、願之通養子御免被
仰付候、尤一所持高之二男別立不申家内ニ而罷居候者
一所持又者一所持格養子ニ被仰付候先例ハ多々御座候、
喜入幸之丞事其身代小番格ニ別立被仰付置候得共、元
来一所持家筋之二男、殊ニ求馬躰(高津久教)之儀ニ而由緒茂有之
儀候間、願之通養子御免被仰付候而茂何そ差支申儀ハ
御座有間敷与吟味仕候、以上、

201の1

覚

岩下佐次(方巻)右衛門事當御役ニ而御用人格被仰付候ニ付、
御礼席連名之次第何様ニ可有之哉、致吟味可申出旨被

佐久間九右衛門事、享保十二年未六月十五日御太刀進上ニ而御役之御禮被仰付候御證文之内、朱書ニ而御用

覚

右之通被仰付候条、此旨申渡、首尾係りへも可申
渡候、三月(高橋種壽)縫殿

仰渡候、寛延四年未八月(重年)圓徳院様御着、城脇年頭御礼被遊、御受候節、山沢十太夫(盛香)・相良源太夫(長以)御用人格被仰付置候ニ付、御用人差次、町奉行頭ニ而納太刀進上御禮被仰付候間、先例之通佐次右衛門事御用人差次、町奉行頭ニ御禮席連名可被仰儀与奉存候、以上、寶曆十年辰三月十日、佐次右衛門事當分江戸御留守居御役相勤居候、此節江戸へ被差越候ニハ御用人賦可被仰付旨、御證文ニ相見得申候、安吉 吉調之、

写 覚

岩下佐次右衛門

人格ニ被仰付御禮与相記有之候、翌十三年申六月(宗)徳院様被遊御誕生候得者、其以後御守役為被仰付筈ニ御座候、然者九右衛門事御留守居御役之内御用人格ニ為被仰付儀与相考申候、右御用人格被仰付、又ハ御守役被仰付候節之御證文ハ見當不申候故、考を以右之通申上候、以上、寶曆十年辰三月二日 安吉 吉調之、

覚 島津将監殿御首尾

松崎平左衛門事御船奉行格ニ而御普請方勤被仰付置候、此節竹原兵右衛門御船奉行被仰付候、連名之次第何様可有之哉、致吟味可申出旨被仰渡候、格与申儀付而ハ、先年相良大藏(長賢)大御目附格被仰付置候、大御目附被仰付候人ハ家格寄合ニ被仰付御格ニ而御座候、然者大藏事右通格与被仰付候而茂大御目附同前之御格式ニ候哉之旨先役共より得御差圖候処ニ、大藏事家督之内右之通被仰付候ニ付而ハ、平岡八郎太夫次(之品)ニ被仰付筈候、大御目附格与申候者、御側江相勤候訳を以格与被仰出事候、何そ大御目附ニ相替儀ハ無之候、相良源太夫事寄合ニ付平岡八郎太夫次ニ被仰付候間、向後右之通可相

心得旨、享保七年寅十二月、被仰渡置候、右を以ハ格
 茂同前之事与相見得申候、然共本役与連名有之節ハ其
 差別可有之事ニ奉存候、先年有馬源五右衛門・東郷主
 左衛門兩人共ニ御勘定方小頭格ニ而御勝手方勤被仰付
 置候節、後役茂有之候得共、兩人共ニ御目見又ハ連
 名之次第本役より末ニ仕候由承届申候、然者先例之通、
 平左衛門儀兵右衛門次ニ連名可被仰付儀与奉存候、以
 上、

寶曆五年亥三月十六日 安氏 吉 安調之、右調
 之通被仰付置候得共、右調ハ不吟味与存居候、御
 本文之趣トハ致相違候、重而可心得事ニ候故、此
 節岩下佐次右衛門調之節ハ何事も委敷不申出調書
 之通ニ候処ニ、申出之通被仰渡候、為後考書記之
 置候也、

覚

本文大窪喜助嫡子大窪甚五兵衛相果、嫡孫大窪鉄藏
 幼少ニ有之之候付、(符力)喜助二男大窪彦八別立罷在候得
 共、嫡子成御免被仰付、嫡孫鉄藏儀者彦八嫡子ニ被

仰付被下度旨段ニ願申出趣有之、(調脱之)被仰渡、左之通御
 座候、

二男ニ別立罷在候者本家江立婦り嫡子成御免被仰付、
 嫡孫を其嫡子ニ被仰付候先例ハ見當り不申候、然共先
 年園田圓右衛門嫡孫有之候処ニ、幼少者故萩原仲左衛
 門事養子ニ被仰付、嫡孫之儀ハ仲左衛門嫡子ニ被仰付
 候、且又村田藤兵衛弟村田小藤次を養子ニ被仰付、藤
 兵衛嫡子村田藤次儀ハ小藤次嫡子ニ御免被仰付候、東
 郷四郎左衛門嫡子相果、嫡孫幼少者故、二男東郷四郎
 太事二男家養子ニ被仰付置候得共、本家ニ立婦り嫡子
 成御免被仰付、嫡孫者四郎太嫡子ニ被仰付候、右躰似
 寄候先例茂御座候間、喜助願之通御免被仰付候而茂差
 支申儀有御座間敷与吟味仕候、以上、

寶曆十年亥二月十二日 安 吉 吉調之、
(ママ)

覚

御娘様他所へ御縁中有之御卒去之節、輕ク御位牌御
 安置之儀、當座へ相知有之候ハ、可申出旨被仰渡候、
(細貴女・近衛家久室)英光院様、(光久女・織田信盛室)智姓院様、
(吉貴女・近衛家久繼室)御牌者御安置有之候

得共、其外他所へ御縁中被遊候御方様御卒去之節、御牌御安置有之候儀相見得不申候、乍然爰元ニ而御縁中有之御方様ハ左之通相見得申候、

一家久公御娘様北郷山城江御嫁被成、御法名輪桂貞玉大

姉与奉申候、御牌福昌寺へ御建立候、

一日新公御娘様肝付彈正江御嫁被成、御法名椿窓妙英大

姉与奉申候、御牌伊作多寶寺へ御建立候、

一義久公御娘様薩州義虎江御嫁被成、御法名蓮昌妙守庵

主与奉申候、御牌國分圓龍院江御建立候、

一忠國公御娘様伊集院大隅熙久江御嫁被成、御法名實峯

妙惠大姉与奉申候、熙久出奔之後為尼、大徳寺開山ニ

而、大徳寺へ御牌有之候、

右之通御座候間、書付差上ケ申候、以上、

寶曆十年辰二月晦日 安 吉 本

覚

京都即宗院事 氏久公御代御建立被遊、其以後及中絶候処ニ、龍伯様御再建被遊候哉、相札可申出旨被仰渡、左之通御座候、

即宗院儀者 御家六代氏久公御牌被成御座候、其故ハ氏久公鹿兒嶋より大始良江御移被成、大始良龍翔寺開山剛中和尚事 氏久公御帰依僧之由候、其後志布志ニ御移、剛中を大慈寺二代之住持ニ被仰付候、剛中隱居被仕、其庵を即心院与号候、然処ニ剛中東福寺住職有之候而、即宗院者又剛中隱居所ニ而御座候、 氏久公御逝去之節、剛中御焼香被仕候故ニ候哉、御牌を即宗院・即心院江御安置候、両院共ニ御家より御建立共、又者剛中自分之造営共詳相知不申候、且又 龍伯様御代即宗庵より御再建之御願申上候処ニ、龍伯様御再建可被遊 思召ニ而、先黄金三十両御進献候而御書被成下候、其節ハ即宗院を即宗庵与為申与相見得申候、家久公御代慶長十八年、即宗院造営相調候由被聞召上候付、御満足ニ被思召上候段御書被成下、毎年米七拾斛ツ、可被進由、伊勢兵部貞昌書状相見得申候、此段申上候、以上、

寶曆十年辰二月十二日 安 吉 本 吉調之、

覚

寛保元年酉八月七日 公方吉宗公右大臣ニ御轉任、

(徳川家重)

大納言様右大将御兼任ニ而右大将様与奉称候、同月十

二日 (徳川家治)

竹千代様御元服、大納言御任官ニ而大納言様与

奉称候、

右之通相見得申候、以上、

寶曆十年 辰三月十七日 吉調、安

覚

伊藤善八

初而高持成之願申出、家筋被仰渡候、伊藤善八事ハ伊

(調服カ)

藤孫八二男ニ而、當四月別立申候、善八曾祖父伊藤十

郎左衛門事ハ當伊藤善兵衛先祖伊藤善兵衛二男ニ而、

初而別立、横目役相勤申候、亡祖父伊藤十左衛門御徒

目附役相勤申候、親伊藤孫八横目役相勤申候、當善八

事何之勤方無御座候、尤代々、御城下士ニ而、大番相

勤申筈之家筋ニ而御座候、以上、

寶曆十辰四月十八日 本 吉 安 吉調、

覚

本文調被仰渡候、嫡子 御直元服・二男 御前元服被

仰付候節ハ、親より茂御太刀進上仕御禮被仰付先例ニ

御座候間、島津空殿事御太刀進上ニ而御禮可被仰付儀

(久峯)

与奉存候、然者島津将監嫡子・二男一所ニ元服被仰付

候節委敷吟味相届不申、将監より御太刀進上ニ而銘々

御禮可被申上旨調書差上申候故、銘々御禮被仰付候、

(忠光)

然共先年島津周防殿越前家相續・御高拜領之御禮一度

ニ被為申上候、右傍例を以得与此節吟味仕候得者、空

殿事嫡子・二男元服之御禮一度ニ被申上候筋ニ被仰付

度奉存候、以上、 寶曆十年辰 本 吉 安 二月十一日 吉調之、

210

覚

本文調被仰渡候、

一指宿正哲祖父松田吉右衛門事ハ當松田四郎兵衛家之二

男ニ而御座候処ニ、島津圖書殿家中ニ罷成申候、左候

而、嫡子指宿才測・二男指宿宗固事指宿家之養子ニ罷

成候由候得共、指宿何某与申者養子ニ而候哉、段々相

糺申候得共、假名相知不申候、右才測事御側御醫師相

勤申候、才測嫡子指宿隆甫与申候、二男當正哲ニ而御

座候、先年別立被仰付、醫道仕候、

一隈之城衆中安藤弥五郎弟安藤隆雲先祖代々北郷民部家

之家来ニ而候処ニ、親安藤仙庵醫道之功を以限之城衆
中ニ被仰付、表寄番醫師・御奥寄醫師等相勤申候、右
仙庵ニ男隆雲ニ而御座候、

右之通ニ御座候、正哲・隆雲由緒之訳ハ、正哲母ハ
北郷民部家来桜木藤兵衛与申者娘ニ而御座候、右藤
兵衛親桜木藤兵衛与申候、正哲為ニ者母方曾祖父ニ
而候、右藤兵衛兄桜木平左衛門与申者之娘同家中伊
地知太郎兵衛江相嫁、右太郎兵衛娘同家中阿蘇與右
衛門江相嫁、右與右衛門娘安藤仙庵ニ相嫁、當隆雲
出生仕候ニ付、三從弟違之續ニ而候得共、段々縁中
之續ニ而候得者、縁類ニ而無據血筋与ハ難申御座候、
然者右通之縁類ニ而養子ニ被仰付候先例見當り不申
候、乍然正哲親才測江 (光久) 寬陽院様より醫道之御書物
等拜領被仰付置、今以正哲致相傳罷居、隆雲事右通
縁類、殊ニ正哲弟子ニ而醫道稽古仕由ニ御座候得 (者力)
右御取分ケを以養子御免可被仰付哉与奉存候、相當
之先例見當り不申候ニ付、究而ハ難申上御座候間、
何分ニ茂御吟味次第奉存候、以上、

寬延三年午六月十日 安調、川

212

覚

一 正徳二年辰九月十八日四時半 満君様江戸芝御屋敷御
發興 十月十四日七時過 伏見御屋敷へ御着 同十一
月晦日晝七時、京都御裏方へ御入、同十一月廿四日、
前撰政様へ初而御對顔、同十二月廿三日御婚禮

庵娘野瀬方へ相尋承置之候事、
人程被成御座候由、寶曆十年辰五月廿三日、野瀬曆

之容色之由、家熙公御妾ニ而、御子共衆男女三四
御入輿之節八年比三拾歳計、其比於京都都三人程
近衛家熙公御上臈お妻様 町尻三位様 満君様
前撰政様与唱候 之御方 御息女

近衛基熙公 堀川御所 ○近衛家久公を其時ハ内府様与唱候、
禪閣様与唱候と申候、 御上臈按察様 之御方

當島津又七郎殿箭藏之内、
満君様御上京御婚姻一卷帳式冊之内、島津内記殿御供、
(吉貴女、近衛家久後室) (久貫)

211

覚

右才測嫡子指宿隆甫、隆甫嫡子指宿休左衛門、休
左衛門嫡子 (マ) 指宿正哲事者才測二男ニ而候、初
名休測与申候、御暇申上、於徳之嶋相果候、最初
ハ致私遠流候者ニ而候事、

日新公御嫡女 肝付河内守兼續室
月庭桂秋大姉 御牌在始良舎粒寺、

元久公御息女
至慶大姉 御牌右同斷、

覺

本文調被仰渡候、

〔本文願之通不被仰付由致承知之候事〕

一 佐土原窄人梅北弥左衛門先祖右馬頭征久江相附佐土原江罷越、彼方江奉公仕候由候得共、右之者假名・實名相知不申候、又者 御城下士、又ハ外城衆中ニ而御座候哉、右之段茂相知不申候、

一 弥左衛門曾祖父梅北弥藤兵衛事ハ、佐土原ニ而小頭与申組合ニ而大工相勤、高五石・居屋敷致所持候、尤大工之儀御用之細工迄相勤、脇方細工等致候儀ニ而ハ無御座由候、

一 祖父梅北四郎左衛門事御能地謡相勤、三ヶ年江戸詰仕罷下り候処ニ、無間茂親弥藤兵衛相果、跡職之儀申出候処ニ、親存生之内跡職可申出儀を死後ニ相成申出候不届ニ付高屋敷被召揚暇被下、御領内傍ニ可罷在儀ハ勝手次第可致旨被申付候、高屋敷被取揚候ニ付而ハ、

彼方何方ニ罷在候而茂老母妻子等介抱難叶候付、元來御當地より佐土原江相附參候一筋之者ニ候故、元禄十六年、高岡江參上仕、何方へ成共被召置被下度旨願申上、野尻紙屋名之内瀬越村へ家作等被仰付、御米一日ニ一升ツ、被下之、自分稼を以致渡世罷在、窄人居付手札被仰付置候由ニ御座候、

一 右四郎左衛門代、御米被召上、作職地方被仰付被下度旨願申出、御米之儀ハ被召上、瀬越最寄門ニより五升蒔作職地被仰付、家内介抱仕居候、然者島津市太夫殿(久懸)野尻地頭之節野尻衆中ニ御赦免之願申上候処ニ、四郎左衛門事佐土原御構ハ無之由候、右通不届有之高屋敷為被召放者ニ候得者、無御構者ニ而茂於此御方屹被召仕候様ニ者難被仰付筈ニ候間、今通ニ而罷在候儀迄を被差免候筋ニ茂可有御座哉之旨、御帳面ニ相見得申候、

一 亡父梅北長四郎事茂野尻衆中御赦免之願先年申上候得共、今以何分不被仰渡由候、
一 延岡窄人佐々木重太郎祖父佐々木右衛門代有馬(清純)左衛門佐様御家来ニ而罷在候処ニ、先年延岡百姓騒動ニ付、左衛門佐様江所存之趣再三申上候訳有之、彼御方暇被

下、其後 御家を奉頼高岡江参上仕、元禄十五年午七月、蒲生江被召置、御養料御切米廿八石餘被下置、右衛門子佐々木太郎次郎代鹿兒嶋江被召出被下度旨奉願、有馬家江及御問合、有馬家より構有之由返答有之候故、御國へ被召置候儀計御免被仰付、御養料茂被召揚候旨、享保六年丑七月被仰渡候處ニ、同七年寅四月、有馬家構免許有之候付、又々太郎次郎鹿兒嶋江被召出被下度旨奉願候處ニ、前々より領内ニ被差置候窄人共、先頃外城衆中を奉願候者共ハ何れ茂願之通被仰付、鹿兒嶋を願出候者ハ被召仕候御用茂無之候故、押而外城衆中ニ茂難被仰付、窄人手札被仰付、自分稼又ハ作職地被下被差置事ニ候、太郎次郎事ハ筋目茂宜有之儀ニ候得者、鹿兒嶋士を願出候段左茂可有之候得共、當分鹿兒嶋江被召出御用之見當茂無之候故、窄人手札被仰付、御養料・作職地被下置候、且又鹿兒嶋居住之儀猶以難成事候間、前後之儀を茂得与致了簡、卒尔之願共申出間敷旨被仰渡置候、太郎次郎嫡子重太郎、二男佐々木壽道ニ而御座候、壽道事ハ先頃奉願趣有之、御城下士養子御免被仰付候、

214

覚

坊津 一乘院僧正尊盈

右之通御座候、御領内ニ被差置候窄人外城衆中ニ奉願候者共願之通被仰付候先例を以、弥左衛門此節野尻衆中ニ御免可被仰付旨先日調書差上申候處ニ、佐々木太郎次郎代有馬家御構無之者ニ御座候故 御城下士奉願候得共、願之筋不被仰付、二男佐々木壽道事ハ 御城下士養子御免被仰付候、弥左衛門祖父四郎左衛門代野尻衆中御赦免願申上候節、不屈有之高屋敷為被召放者ニ候得者、無御構者ニ而茂於此御方屹被召仕候様ニハ難被仰付筈ニ候間、今通ニ而罷在候儀迄を被差免候筋ニ茂可有御座哉之旨、御帳面ニ相見得申候段被仰渡候、其子長四郎代又々野尻衆中御赦免奉願候得共、今以何分不被仰渡由候、然ハ右御吟味之趣を以御赦免不被仰付与相考申候得者、外之窄人共外城衆中ニ御免被仰付候例を以、此節弥左衛門事野尻衆中御免可被仰付与ハ難申上奉存候間、只今之通ニ而被召置候外有御座間敷与詮議仕候、以上、寶曆十年庚辰七月十三日 吉調之、
 兄本 吉 安

本文進上物調被仰渡候、坊津一乘院此以前僧正官被仰付候先例無御座候、當住尊盈事此節權僧正被仰付候ニ付、拾帖壹卷進上仕御禮申上度旨被申出候、南泉院亮嚴僧正官成之御禮壹束壹卷進上被仰付候、且又榎元檢校官成之御礼壹束壹卷進上被仰付候、一乘院寺格ニ付而ハ壹束本進上被仰付候得共、官成御禮之儀ハ右兩例を以十帖壹卷進上可被仰付儀与奉存候、以上、

寶曆十年庚辰八月十二日 見 本 吉 安調、吉調之、

覚

先年諦觀院殿 光闡院様御事 大玄院様(綱貴) 淨國院様(吉貴)

御養女ニ御願、阿部伊勢守様・島津淡路守殿へ御嫁被成候、右ニ付而ハ、御大名之御娘を御養女ニ被成候与、諦觀院殿を御養女ニ被成候与ハ厚薄ハ有之間敷哉、御系圖等ニ者何様ニ被記置候哉、致吟味可申出旨被仰渡、左之通御座候、

女子

島津淡路守惟久夫人

○延寶七年己未十月十日誕生、父島津圖書久洪、母

大隅守光久女、

○元禄八年乙亥三月、綱貴受 台許為養女、嫁島津惟久、而惟久卒後稱諦觀院、

女子

阿部伊勢守正襲夫人

○元禄十六年癸未正月十一日誕生、父島居伊賀守忠救、母薩摩守綱久女、

初嫁牧野備後守成央、成央卒後、享保六年辛丑正月二十六日、吉貴受 台許為養女、嫁阿部正龍(興)、

右之通 御系圖之内ニ被載置候、然者諦觀院殿ニ者陪臣之娘、光闡院様ニ者御大名之御娘ニ而被成御座、沢茂為相替筋ニ相見得申候、然共御兩人様共ニ依御願御養女ニ被蒙 台許候上ハ、御養女茂御直子御同様之御事ニ而、御系圖之内ニ茂系り入為被置事ニ御座候、右御養女ニ付而ハ諦觀院殿・光闡院様何之厚薄之御差別者有御座間敷儀与奉存候、尤諦觀院殿外之御大名ニ被嫁候ハ、殿之字ハ不被用筈ニ御座候得共、淡路守殿へ被嫁候故、向ニ被對殿之字被用候与相見得申候、右通吟

本文調被仰渡候、有村嘉右衛門事ハ有村碗右衛門二男

覚

渡候、弥五郎家之儀ハ新納五郎右衛門家之二男家ニ而御座候ニ付、右半左衛門頭ニ列可被仰付儀与吟味仕候、以上、
寶曆十年辰五月廿五日
兒本 吉安 吉調、

覚

事先伊右衛門三男ニ而候処ニ、次兄和田半助別立罷在相果、直子無之候ニ付、繼目養子ニ罷成申候、

一中紙 家督之御礼 新納弥五郎
一右同 繼目之御礼 永田半左衛門

覚

右者、弥五郎親新納平太夫事ハ代々小番相勤、御太刀・二種一荷進上仕来申候処ニ、依科遠流被仰付置、家格大番ニ被引下、中紙進上ニ而弥五郎江家督被仰付候、依之 御目見之列中紙進上之場ニ

覚

本文家筋調被仰渡候、和田伊右衛門曾祖父和田伊左衛門事ハ和田幸右衛門二男ニ而、初而別立、大工之家業仕候、祖父和田伊右衛門事鹿兒嶋近名郡見廻役相勤申候、養父和田伊右衛門小役人等相勤申候、當伊右衛門

(本文書ハ二〇八号文書ト同一文書ニツキ省略ス)

味仕、此段申上候、以上、
寶曆十年庚辰六月六日 吉調、本 吉安

ニ而、別立申候、碗右衛門嫡家當有村長左衛門高祖父唐之名山与申所之者ニ而、其假名等相知不申候、曾祖父有村碗右衛門代母方之名字有村名乘来、烧物細工仕、承應三年午四月 御城下士ニ御赦免被仰付、其以後烧物方主取相勤申候、嘉右衛門親碗右衛門事ハ右有村碗右衛門二男ニ而別立、烧物方主取相勤申候、嘉右衛門事烧物方御細工之節、其外輕キ御奉公相勤、先比相果申候、右次第ニ御座候得者、何ぞ差立為申訳無御座候、尤大番家筋ニ而御座候、以上、
寶曆九年
十二月晦日 吉調、

御関狩并御馬追之儀ニ付、御記録所ニ相知候趣茂有之候ハ、相札可申出旨被仰渡、左之通ニ御座候、

一上使御返答ニ被書出候趣ハ、関狩之儀當家古来より之旧例ニ而、毎年正月相催、薩摩守不被罷登節ハ名代被差登事ニ御座候、城下士其外諸所江召置候士等大勢相集、山野相圍、弓鉄炮を相放、其作法有之事ニ而、獵師共仕候狩ニ者相替候、依之御先代生類憐被仰渡、殺生之儀領内稠敷被申付候節茂、右関狩之儀ハ各別ニ候故、猪鹿類ハ打不申、旧例之儀無断絶被申付候由御返答有之候事、

一右上使御返答之外、御記録之内又ハ旧記之内ニ御関狩之儀相見得不申候、然共古老之者共申傳候ハ、右御関狩之旧例者、頼朝卿御代富士牧狩有之候ニ付、御家(儀力)之代ハ、頼朝卿御子孫之儀ニ被成御座候故、御関狩之儀茂、御家ニ相残候、尤武備之ならしにて有之由候、且又、(義弘)惟新様、(家久)中納言様朝鮮御帰陣之後、寺沢志摩守(廣島)様・宇久(後称)五嶋、(純志)大和守様鹿兒嶋江御見舞之節被召列候人数踊有之候付、右之為御返礼、御家御旧式之御関狩於桜嶋御張行有之、右御兩人江御馳走被成候由申傳候

事、

一右之通ニ古老之者申傳候迄ニ而、御関狩起候基之儀相知不申候得共、中納言様御初年之時分ニ茂右之通ニ旧式之御関狩為有之儀ニ御座候得者、古来より之旧式ニ而可有御座事ニ御座候、

一右御関狩場所之儀ハ最前吉野ニ而有之、其以後伊集院春山又ハ谷山野ニ而為有之由ニ御座候、尤、(光久)寛陽院様(綱久)泰清院様、(綱貴)大玄院様御三代共ニ数度御登七被成、琉球王子被召列見物被仰付候儀(初力)候儀茂為有之由、古老之者申候事、

一御馬追之儀、是又古来より之旧式ニ而有之由申傳候迄ニ而、御記録之内又ハ旧キ書留等ニ茂相知不申候、然共、御家五代貞久公御代、薩州出水於瀬崎野牧被立置候由、御記録之内ニ相見得候、馬追有之候儀ハ相見得不申候事、

右之外御記録所ニ相知候儀無御座候、以上、
享保四年己亥十二月五日、御記録奉行相良(寛力)角兵衛・川上平右衛門・肥後藤之丞、要用簿ニ見得候、

重富・今和泉延享年中 上使之節ハ、境木并道案内 覚

右寶曆九年卯五月十九日、要用集御用諸調書之内書拔置
申候、御記録奉行本田新右衛門(親方)・吉田用右衛門(清純)・安藤左(茂)
平次、
真

一當御城回録(禄カ)

右元禄九年四月廿三日ニ而御座、

(本文書ハ一七八号文書ト同一文書ニツキ省略ス)

一島津周防殿事 吉貴公御二男ニ而、元文二年巳三月十日、越前島津家跡相續被仰付、同三年午八月廿七日、隅州帖佐郷之内・薩州吉田郷之内重富一所之地拜領被仰付候、
一島津故因幡殿事ハ 吉貴公御三男ニ而、延享元年子五月廿五日、和泉家名跡相續被仰付、同年十二月廿一日、薩州指宿郷之内・穎娃郷之内今和泉一所之地拜領被仰付候、

帖佐・指宿より相勤候、周防殿・三次郎殿幼年故、山沢(盛香)十大夫・相良源(長儀)大夫兩所へ差越、御安否被相伺候、此節茂先例之通御安否被相伺答候、右兩所新ニ御取立ニ而、公義江被差出置候高辻帳并繪圖面ニ茂無之、御内々為被相分置事ニ而、以来何ぞニ付公邊江被書出儀有之節ハ高辻帳之通可相心得旨、淨(音)醫院様被 仰出置、御尋茂候ハ、重富者帖佐之内、今和泉ハ指宿之内ニ而、惣躰外城之數ニハ合不申段相答答候、去ル子年國御目附衆御越御巡行之節、兩所依願重富・今和泉境木相立、道案内等茂相勤候、此節御目附衆御越之節之通可有之哉、又ハ延享年中上使先例之通申渡、自然境木等之御沙汰有之候ハ、帖佐・指宿之内ニ而、常式ハ一郷充之境木相立置候故、御目附衆御越之節とハ致相違候段相答候而ハ如何可有之哉、右兩様致吟味、何分可申出旨被仰渡、左之通御座候、
一周防殿役人方江延享三年御巡國 上使御通路之節境木并道御案内等之儀相札申候処ニ、重富之儀周防殿一所之地ニ被仰付候得共、其時分迄ハ帖佐預りニ而被召置

候故、委細之訳帳留等茂無之、相知不申候ニ付、此節帖佐暖方江役人より相尋候処ニ、延享三年 上使御通路之節、帖佐之内重富一所領ニ御差分ニ付、芝之本帖佐・吉田境重富ニ罷成申候、且又西餅田村之内帖佐・重富新境相立申候、此節 上使御通路ニ付右両所境木相立、銘書重富与相記可申候哉、此段得御差圖候旨暖共より申出候処ニ、帖佐・重富境之儀ハ境木相立ニ不及候間可引取候、左候而、白金坂之上ニ有之重富・吉田境之場所ニ、帖佐・吉田境与境木可相立旨被仰渡、其通境木相立申候由ニ御座候、其以後帖佐・吉田暖申談、重富境木相立召置申候、且又寶曆六年國御目附様御通路之節者、帖佐境・吉田境両所へ境木相立申候、道御案内等之儀ハ御廻文を以被仰渡候ニ付、役人共相勤申候、右境木并道御案内等之儀ニ付、周防殿より被為願出候書留等相見得不申候由申出候、

一 因幡殿役人方江 御巡國上使御通路之節今和泉境木并道御案内等之儀相糺申候処ニ、今和泉之儀ハ、寶曆六年國御目附様御巡行ニ付、諸事御手當之儀、去ル寅年御巡見上使御通路之節之通相心得候様ニ与先達而御廻

文を以被仰渡候ニ付、今和泉之儀去ル未年御引渡有之、外城并之御用相勤候ニ付、喜入・指宿境木之儀因幡殿より被為願出候処ニ、喜入・指宿両境木可相建旨被仰渡、道御案内迄茂御廻文を以被仰渡候通相勤申候段、此節申出候、尤 上使御通路之節ハ今和泉ハ指宿預リニ而御座候故、境木相立不申由ニ御座候、

一 國御目附様就御問條御答書之内拔書、餘ハ略ス、大隅國外城之内始羅郡重富島津周防、薩摩國外城之内揖宿郡今和泉島津安之助、右銘之領分ニ而、城下外屋敷所持仕候由被書出置候、

一 右同断浦之數御問條之内、薩摩國揖宿郡今和泉郷之内瀬崎浦、大隅國始羅郡重富郷之内脇元浦、且又辻ニ高札何ヶ所御問條之内、大隅國始羅郡重富郷之内脇元浦与被書出置候、

一 島津小平太領分佐志一所之儀、前之より 上使御通路之節ハ宮之城より境木相立、道御案内等相勤來候、去ル子年、國御目附様御通路之節茂先例之通有之候処ニ、其以後島津圖書殿より被願出趣有之、後年 上使御通路之節ハ佐志一所別立候而境木相立、道御案内等相勤

申筋ニ被仰渡置候、

右之通御座候、然ハ此節佐志之儀茂境木相立、道御案内等をも相勤申答御座候、右ニ準候得者、重富・

今和泉兩所之儀茂、高辻帳ニ者相見得不申候得共、

御答書之内ニ右兩郷為被書出置事ニ御座候故、御目

附様御通路之節之通境木・道御案内等被仰付候ハ、

御答書与茂不致相違答ニ奉存候、私共吟味仕候趣如

此御座候、以上、
寶曆十一年巳五月廿二日 郡山氏
川上氏 吉田氏 安藤氏 吉調之、

右之通申出置候所ニ、
(鎌田政昌)
典膳殿より別紙を以被仰

渡候者、先年 上使御通路之通此節茂被仰付候

由被仰渡候、當座調書之通ニハ不被仰渡候、

覚

先年 忠久公御影像被成御安置候年鑑、且又 御五代

様御佛檀(壇カ)御一所ニ被成御座候哉、何分可申出旨承知仕

候、依之申上候、享保九年辰九月晦日、被成御安置候、

尤 御五代様御佛檀御一所被成御座候、任御尋此段申

出候、以上、

丑八月五日

浄光明寺 納所

御記録所

覚

高何拾石

右其寺、頃年依令衰廢、今般安置實父母號法之兩牌寄

附、右香積致再興、屹到後代全可有収納者也、仍如

件、

年号月日
吉利郷

妙心院

假名実名判

覚

顯シユウシツラシ幽集覽

顯ハアキラカナル心也、古来ヨリ書籍ニカキ記

シアルコトナレハ、新ニ是ヲ作意致シタルニアラス、幽

ハカクレテアルコト也、タトエハ古人ノ氣ノ附ヌ所乎、

又ハ深キ意味ノ隠レテ記シ出サヌコトヲ見出シ、自分ノ

了簡ヲモ少シ加ヘ書キアラハス意也、集ハサマノノ傳

授ト自分ノ工夫ニテ仕出シタルコトトモヲ編アツムル意

也、覽ハ此書ヲ見レハスヘテ一目ニ意味マテ見通スル意

也、古書ニモ右体ノヨウナル書集メタル書ノ題目ナトニ
モ集覽ノ文字アリ、顯幽ノ二字ハ左傳杜預カ序ニアル文
字ヲ切り用ヒタルナリ、

寶曆九年丑七月廿一日、島貴儔公鉄炮之書之題号也、

覚 写

良英寺

右者、福昌寺先住修門(宗信) 慈徳院様御焼香被申上候一筋
を以、配下之内廢寺地藏院依願再興、御位牌被奉安
置候処、(雜書(宗信生母) 妙心院様思召有之、御施主ニ而御佛餉料御
私高之内三拾石之所務永々被附置、御目見寺ニ被仰
付、御法号を以良英寺与改号被仰付候、右通為差立詔
を以、住替之節ハ於虎之間寺社奉行申渡之寺格被仰付
候、

右、如例可被申渡旨寺社奉行へ申渡、可承面々へ
も可申渡候、 十二月 (島津久亮) 圖書

右本文良英寺住替之節ハ於虎之間寺社奉行申渡之寺格
ニ此節被仰付候、依之寺格之列相調可申出旨被仰渡候、

寺社奉行被申出候通、良英寺事龍昌寺次、月香院頭ニ
寺格之列可被仰付儀与奉存候、以上、

寶曆十年辰十二月十九日 御記録方稽古郡山次郎左衛門・
川上五後右衛門 御記録奉行吉田用右衛門・安藤左平次、

覚

本文百石高上り之願申出、家筋調被仰渡候、平田左石
衛門家者平田平太夫庶流ニ而御座候、曾祖父平田左之
助事ハ谷山衆中ニ而御座候処ニ、故伊勢兵部與力役相
勤候節 御城下士ニ被召出、其後御右筆御役相勤申候、
祖父平田權左衛門事ハ右左之助二男ニ而、初而別立申
候、小役人等相勤候、亡父平田左石衛門御柄卷相勤申
候、當左石衛門事當分座横目相勤居申候、尤權左衛門
以來代々 御城下士ニ而、大番相勤候家筋ニ而御座候、
以上、 寶曆十年辰十一月十六日 安 吉 吉調之、

覚

一大田家先祖島津下野昌久室 伊作又四郎善久公第二女
御法名 天津芳祐菴主正覺寺殿
一吉田次郎四郎位清室 御法名 天津正祐菴主正覺寺殿

覺

島津(忠卿、今和泉家)因幡殿被相果、跡相續之人無之候ニ付、跡職之

儀者御存知可被遊旨(重生) 圓徳院様御代被仰渡置候、依

之 隅州(兼忠)様被 思召上候ハ、小松安之助殿事祢寢孫(清香)

左衛門養子ニ被仰付置候、因幡殿直弟ニ而候得ハ、

本家相續与申ニ而ハ無之候得共、直弟之詛を以因幡

殿後嗣被仰付、孫左衛門事直子無之事ニ而、(吉世) 總州

様思召ニ而候哉、又ハ孫左衛門願ニ而候哉、右通被

仰付、数年養育仕候儀ニ候得者、誰ニ而茂養子見合

可申出旨被仰渡候(久通) 茂如何之事候間、島津大藏事準御

二男家ニ而候得共、持高等茂少ク、家格之勤全ク相

調候と申ニ而も無之、殊ニ大藏事孫左衛門直弟ニ而

候得ハ、是を御見合を以孫左衛門養子ニ被仰付、大

藏跡之儀ハ、二男家三崎文(久通)大夫別立之節本家高致附

属別立罷居候、右附属高取加へ本家相續被仰付候ハ

、家格之勤茂相調筋ニ可有之候、右之段々私共吟

味仕、何分可申上旨被仰渡、左之通御座候、

一 因幡殿家之儀數代致断絶候処ニ、(重清) 總州様思召を以、

因幡殿事 總州様御三男ニ而和泉家相續被仰付、御一

門家格ニ被仰付置候、早世故跡相續之人無御座候、然

者小松安之助殿事祢寢孫左衛門養子ニ被仰付置候得共、

未家督等茂不被成事ニ候得者、孫左衛門方違変被仰付、

因幡殿直弟之詛を以彼家相續被仰付候儀、何ぞ差支申

儀無御座、先 御代右通之儀多々有之事ニ御座候、

一 島津大藏事家督ニ而候得共、孫左衛門直弟ニ而候得ハ

養子被仰付候儀、此跡家督相續ニ而又々他家後嗣ニ被

仰付候人数左之通相見得申候、(家久) 中納言様御子式部大

輔殿事、初島津備(貴藤)中殿先祖島津又四郎久敏後嗣ニ被仰

付置候処ニ、北郷出雲忠亮被相果、実子無之ニ付、又

四郎家違変被仰付、北郷家後嗣被仰付、又四郎家之儀

ハ御舍弟島津玄蕃殿(忠魁)へ相續被仰付候、且又 中納言様

御子松千代殿事初伊集院遠江久族養子被仰付、家督相

續ニ而御座候処ニ違変被仰付、鎌田隼人先祖鎌田治部

政統養子ニ被仰付、伊集院家之儀ハ御舍弟十右衛門殿

相續ニ而候、先々迫水善左衛門事森喜右衛門二男ニ而

御座候処ニ、堀之内六左衛門養子被仰付、家督相續ニ

而堀之内六左衛門与申候処ニ、御庶流迫水家之子孫迫

水内(忠徳)記申者寛文十年相果、跡相續之者無之ニ付、数年

断絶仕候処ニ、總州様御代寶永六年九月、右六左衛

門事内記跡相續被仰付、堀之内家之儀ハ伊地知八之丞

二男を養子ニ被仰付候、右次第ニ御座(候脱)得者、家督仕候

者茂又ニ別家養子ニ被仰付先例ニ御座候、大藏事先々

大藏末子ニ而、先大藏養子ニ罷成候、然共違変被仰付、

孫左衛門弟ニ而候故、養子被仰付候而茂何ぞ差支申儀

ハ有御座間敷与奉存候、乍然大藏家之儀者准御二男家

ニ而、家格連名頭ニ有之、祢寢家之儀ハ他家ニ而候得

者、連名末ニ有之、同一所持ながら年頭御禮者座等相

替り申候ニ付而ハ、其身より何様ニ存知可申哉、乍然

大藏事孫左衛門養子ニ被仰付、大藏跡之儀ハ三崎文太

夫高相加本家相續被仰付候ハ、先様家格之勤茂相應

ニ仕筈御座候得者、家之為ニハ宜敷事ニ御座候、

一大藏事孫左衛門養子ニ被仰付候ハ、大藏家之儀ハ、

二男家三崎文太夫事自分高持越大藏跡相續之儀ハ本家

相續之事ニ御座候間、弥以其通可被仰付事ニ奉存候、

右之通吟味仕候、中納言様御子式部大輔殿・

松千代殿并迫水善左衛門迫水家相續、思召を

以為被仰付与相見得申候、此節大藏事孫左衛門

230

養子ニ被仰付候儀茂 隅州様 思召を以被仰付

儀ニ御座候得者、同前之御事御座候間、餘例ニ

ハ不罷成筈ニ御座候故、何ぞ差支申儀有御座間

敷与奉存候、以上、

寶曆六年子二月十二日

山 安調之、

覚

本文百石高上り之願申出、家筋調被仰渡候、和田伊右

衛門曾祖父和田伊左衛門事者和田幸右衛門家之二男ニ

而、初而別立、大工之家業仕候、祖父和田伊右衛門事

鹿兒嶋近名郡見廻役相勤申候、養父和田伊右衛門小役

人等相勤申候、當伊右衛門事先伊右衛門三男ニ而候処

ニ、次兄和田半助別立罷在相果、直子無之候ニ付、繼

目養子ニ罷成申候、然處ニ長兄伊右衛門相果、直子無

御座候ニ付、右伊右衛門繼目養子ニ罷成、嫡家相續仕

候、當分何ぞ勤方無之、御番相勤居申候、尤代々御

城下士ニ而、大番家筋ニ而御座候、以上、

寶曆十年辰二月七日 吉安 吉調之、

覚

本文竹下喜右衛門相果、直子無御座、無高無屋敷極貧者ニ而、養子ニ罷成者無御座候ニ付、跡不被召立筋ニ被仰付被下度旨親類共より願申出、家筋調被仰渡候、喜右衛門事ハ當竹下金右衛門祖父竹下嘉左衛門二男ニ而、其身代初而別立、輕キ御奉公相勤申候、右亡父竹下嘉左衛門事ハ御小姓御役相勤、其後輕御奉公相勤申候由ニ御座候、嘉左衛門以前之儀ハ段々相糺申候得共相知不申候、右通ニ候得ハ、何ぞ差立候訳相見得不申候、尤大番家筋之者ニ御座候、以上、

寶曆十一年己七月二日 郡 吉調之、

覚

本文龜山長太夫庶流龜山甚兵衛事先年組方御暇申出、島津周防殿家来罷成申候ニ付、此節右甚兵衛事廣原名字ニ相改度御座候、且又右式陪臣ニ罷成候者向後有之候ハ、右廣原名字為名乗、龜山家小名ニ御免被仰付被下度旨願申出、調被仰渡候、然ハ 御支族之庶流陪臣者、為差立由緒無之者ハ、嫡家之家號名無乘候儀、

覚

正徳三年己七月、被差留置候ニ付、右甚兵衛事龜山家號ハ御免不被仰付筭ニ御座候間、願之通廣原名字相名乗、以來右通陪臣ニ罷成候者ハ廣原名字相用候様可致旨、長太夫方へ可被仰渡置儀与奉存候、尤廣原名字之儀何ぞ差支申儀ハ無御座候、以上、

寶曆十一年己三月十四日 郡山氏
川上氏 吉田氏 安藤氏 吉調之、

但自分覚、龜山家元祖日州飢肥之内廣原与申所致領 知居候事、

京都即宗院 (氏久) 齡岳様被遊御建立、其以後及中絶候処ニ、(義久) 龍伯様御再建被仰付候哉、且又 龍伯様御代即宗庵より御再建之御願申上候処、 龍伯様御再建可被遊 思召ニ而、先黄金三十両御進献候而御書被成下候、其節ハ即宗院を即宗庵与為申与相見得申候、 家久公御代慶長十八年、即宗院造営相調候由被聞召上候付、御満足ニ被思召上候段御書被成下、毎年米七拾石ツ、可被進由、伊勢兵部貞昌書状相見得申候、此段申上候、以上、 寶曆十年辰二月十二日 本 吉安 吉調、

覚

(継豊) 宥邦院様御葬送之節 御尊牌 御名代被奉守事ニ候得者、御代之御太刀持有無之訳相調可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一 寛陽院様御葬禮之節 (綱貫) 大玄院様御在國ニ而、御自身ニ

御位牌被遊御守候ニ付、御代之御太刀持本田嫡家ニ被仰付候、

一 大玄院様御葬禮之節 (吉貫) 浄國院様江戸へ被遊御座、為

御名代 御位牌先島津玄蕃殿被奉守候付、御名代ニ

而候故、御代之御太刀持ハ相欠申候与相見得申候、

一 浄國院様御葬禮之節 (宗貫) 慈徳院様御在國ニ而、御自身

御位牌被遊御守候故、御代之御太刀持本田嫡家へ被仰付候、

一 慈徳院様御葬禮之節、(重年) 圓徳院様御事 慈徳院様御存

生之内御假養子被仰上置候故を以、御家督御相續之儀

茂御願被仰上、未 公儀御免無之迄ニ而御座ニ付、

大玄院様御葬禮之節 御名代ニ而 御位牌被奉守候与

ハ訳茂相替、御名代与申筋ニ而者無之候故、御代之

御太刀持無之候而ハ 御家御代々様御葬送之御旧式相

欠申候段、當座より吟味仕申上候處ニ、御代之御太刀持本田嫡家ニ被仰付候、

一 圓徳院様御葬禮之節 (重蒙) 太守様江戸江被遊御座候故、

御位牌 御名代ニ而被奉守候故、大玄院様御葬禮之

節之通、御代之御太刀持ハ無之筈与吟味仕申上候處ニ、其通被仰付候、

右之通御座候得者、此度ハ 太守様江戸江被遊御座

候ニ付、宥邦院様御葬禮之節 御位牌 御名代ニ

而被奉守事ニ候得ハ、大玄院様 圓徳院様御葬禮

之節之通、御代之御太刀持ハ無之筈与吟味仕、此段

申上候、以上、

右、寶曆十年辰九月廿七日

御記録方添役鬼玉早之丞
御記録奉行本田新右衛門
吉田用右衛門
安藤左平次

覚

高辻帳頭書之内 日置南郷之内

日置之郡

右同

天文元、日置南郷を改而
永吉与被号候与相見得候、

永吉村

吉利村

大隅之郡

祢寝郷之内

小根占村

右同

山本村

之通御座候、

古キ御文書ニハ祢寢院右同与御座候、佐多・

大根占村

島津圖書殿(久卷)
(宮之城家吉貴五男)

書仕候、御支右同院之内ニ而候間、如是片

伊座敷村

島津若狹

配之村付ニハ、川北・川南・横別府・山

本・邊田五ヶ村小根占、城本・神之川・

汀野迫村

右若狹家ハ御二男家、圖書殿家ハ御三男家ニ而御座候
得者、家格連名之次第を以ハ若狹事圖書殿上座ニ被仰
付筈御座候、然共圖書殿事先年 淨國院様御代別紙之
通段ニ為被仰出置次第を以ハ、右通座席連名可被仰付
与奉存候、

伊座敷より邊津加村迄右同
六ヶ村ハ佐多之内、大屋

上坂本村

田村ハ田代之内之由候得共、右申
候様と如古来祢寢郷与片書仕候、右同

郡村

山崎村

島津(久卷)
李殿(佐多家・繼豊三男)

島津小平太

樺山左京殿(久智)

右同

邊津加村

右同
大弥田村
神之川村
假屋之村

右小平太事家格連名之次第を以、李殿次、左京殿上ニ
座席連名可被仰付儀与奉存候、

貞享元年被差出候高辻帳之内
一 高三千百三拾七石式斗壹升式夕

吉利村

右之通吟味仕候、圖書殿座席之儀ニ付而ハ別紙
寫沓通相添差上ケ申候、以上、

寶曆十一年巳 郡山氏 山田氏 吉田氏
七月廿三日 吉調之、

覚

島津若狹・島津小平太御家老御役被仰付候ハ、(座脱カ)
席連

名之次第何様ニ可有之哉、吟味仕可申上旨被仰渡、左

右巳七月廿一日、備中殿より御用ニ付吉田用右衛門
罷出候処ニ、於上之間若狹・小平太兩人座席連名吟

味仕可申上旨被仰渡、別而御隱密之由被仰渡候事、

寶曆元年未九月廿五日、萬調帳之内書寫、
島津圖書殿座席之儀ニ付、御目見御格式帳之内、

寛保二年戊八月晦日、圖書殿家格之儀ニ付被 仰出候

御書付忝通、延享元年子五月廿七日、圖書殿着座持參

太刀之儀ニ付 御筆写忝通、同年六月十日、大藏殿(島津八巻)よ

り被仰渡披露太刀之儀ニ付 書付忝通、

島津玄蕃殿・島津壯之助殿・島津兵庫殿家格段を被相

改候ニ付當座より申出候書付扣、右ニ付被 仰出候御

書付扣寫帳之内、

延享元年子五月廿七日被 仰出候御書付忝通、

右之通一紙ニ書寫、吟味書ニ相添、巳七月廿三日、於上之間備中殿へ吉田用右衛門直(清純)ニ差上置之候也、

巳八月朔日、備中殿より御用ニ付吉田用右衛門

罷出候処ニ、先日被仰渡置候空殿・若狹座席之

儀ニ付而、口達を以申出置候得共、口達之趣書

付候而可差上旨承知之仕候事、

島津若狹御家老御役被仰付候ハ、座席連名之次第吟味仕可申上旨被仰渡候ニ付、島津圖書殿次、島津空殿

殿頭ニ座席連名仕差上申候処ニ、若狹事御二名家、空

殿儀御三名家之事ニ候へハ、家格連名之次第を以ハ右

通ニ茂可有之事ニ候得共、空殿事當分御身柄御取分を

以、圖書殿次、若狹頭ニ座席可被仰付哉、又々吟味仕

可申上旨被仰渡候、空殿事當分御身柄ニ付御取分之儀、

當座へハ何様共不被仰渡候ニ付、家格連名之次第を以、

若狹事空殿頭ニ座席相調差上為申儀ニ御座候、然者空

殿當分之御身柄ニ付而格別之御取分有之儀ニ候ハ、

圖書頭ニ茂座席可被仰付候哉、乍然 淨國院様御代、

圖書殿事御一門部屋栖之次ニ座席為被仰付置事ニ御座

候得者、其通ニ茂可難被仰付哉、其上空殿此以後御家

老職を茂於被仰付ハ、家格之通若狹次ニ座席被仰付筈

ニ御座候、左候得ハ、當分座席被上置、至以後又々被

相下候様ニ相見得、如何ニ茂可有御座候哉、右旁之次

第を以ハ、若狹次ニ座席可被仰付哉与奉存候、此儀私

共ニ茂究而難申上御座候間、御吟味次第奉存候、以上、

寶曆十一年巳八月二日 郡山氏 山田氏 吉田氏 安

藤氏

八月二日、備中殿へ用右衛門直ニ差上置之候事、

島津左殿・島津若狭殿座席之次第調申渡、調書差出置候ニ付達 貴聞候処ニ、此度 思召有之、左殿事島津圖書殿之上席ニ被仰付候、若狭殿ハ圖書殿次ニ座席被仰付候旨被 仰出候、尤家格為被相替筋ニ而ハ無之候間、此段承知仕、以後紛敷無之様ニ可記置由、備中殿より被仰渡之候事、

右巳八月四日、吉田用右衛門致承知之、萬調帳之内ニ書留置候事、

(表紙 三)

舊史官雜抄

享保中ヨリ
明和中ニ至ル 三
止

(中表紙)

【〇】旧史官雜抄

享保中ヨリ
明和中ニ至ル

237

『(ママ) 時御用番松平伊豆守信祝也、

(元文元年)

五月十五日、御老中用係故、御奏者番松平伊賀守

(忠愛) 江

主計久初謁、於檜之間差上御獻之御太刀目録、於西之

丸亦於蘇鉄之間謁御奏者高木主水正、(正陳) 同人差上献上

之御太刀目錄』

百十六代櫻町院、御諱昭仁（テヒト）、中御門院仙洞第一皇子、御母新中和門院、近衛故准三后家熙公女、享保廿乙卯三月廿一日御讓位、同廿七日、遷幸於新院御所、同年十一月三日御即位、于時御宝筭十六、享保五子正月朔日降誕、

百十七桃園院 櫻町院第三皇子、

延享四年御即位、宝曆十二壬午七月廿一日崩御、御在位廿二歲、

百十八（後桜町院） 御諱智子、櫻町院第二皇女、御母女院御所、

二條故関白吉忠公御女、

元文五庚申八月三日御降誕、宝曆十二壬午七月廿七日御踐祚、同十三癸未十一月廿七日御即位、奉称緋宮様、

元文元丙辰四月十五日、太守繼豊公御参府、五月十五日、御参府御礼以家老（樺山久初）使者有献上物于公方様（徳川吉宗）・

大納言様、同年十二月十一日、繼豊公登城、於御黒書院被拜謁于公方様・大納言様、御献上之箱肴被備御前、

有御上意而後御退出、直登西之丸被獻箱肴、有御老中御廻勤矣、同年巳（二脱カ）、太守繼公爲御養生依御願當年御滯府也、

同二年七月朔日、島津但馬守忠雅同道於忠顯公登城、於白書院忠顯拜謁將軍吉宗卿・大納言家（宗信）、将退出之時、有命於御前、被蒙御懇之上意、太守繼豊公御礼名代忠雅兼之、

元文三年戊午、瑞春院様（徳川綱吉側室） 卒去、六月九日也、

同年八月二十九日、壯之助殿有可賜相續越前家一所之地之命、依之去二十七日、帖佐之内・薩州吉田之内賜之旨被仰渡、

同四年三月十五日、壯之助殿私領惣名号重富旨被仰渡也、

同年五月十六日、當分太守繼豊公依御病氣、總州様（吉豊） 諸事有御頼被聞召御用筋故、從諸士相中奉願御膳進上御能興行之事、因如願免之矣、

同年八月四日、於 江戸宗信公從將軍家賜松平之称号、於代々嫡子者永々有可称松平之命、

同年十二月十一日、於江戸御元服、御一字拜領、任官侍從、拜領物有品、被改宗信公、

同五年二月六日、又三郎御名被改薩摩守、因有可称薩州樣之通達、

同年三月十三日、薩州樣御庖瘡(ト)順快、今日被遊御酒

湯、依之上使御奏者番松平左近將監乘邑于來于芝第、

段々被蒙懇之上意、被遊御拜領物、從大納言樣亦有

上意、且又太守繼公從公方樣・大納言樣有上意、

同年申四月二十八日、繼豐公御名代阿部伊勢守御登城、

於御白書院緣頼御老中御列座、松平伊豆守信祝述台命

曰、以尾張中納言宗勝公之息女房姬樣可妻太子宗信、

是命也、

同六年、太守繼豐公依病疴當年被遊御滯府旨有通達也、

寛保三亥正月、太守樣就御不快、當年御滯府、

延享元子五月廿二日、種子島織部改号北條織部、

同年、薩州樣初御下國御暇願書同十二月被差出置之處、

來丑年四月末五月始、江府御發駕之筈也、右御内意達

松平左近將監乘邑、丑年御勝手次第可被願旨達之、

同二年丑二月十五日、今度於西之丸御男子御誕生、奉

称松平萬次郎樣也、(重好)家重公之御二男也、

同二年丑、宗信公四月二十七日發江府也、

同二年丑、大御所樣十月十九日賜御腰物一腰・箱看一種於太守樣・薩州樣、右薩州樣御拜領物者被差下御當地、御頂戴十一月廿一日也、

同三年寅三月五日、以上使酒井雅樂頭樣知被蒙御懇之上意、同十五日登城、於御黑書院拜謁公方樣、被申

謝參府之事、獻上物于三御所樣如先格、

同三年、上使巡行領内、

同三年六月十七日、養仙院樣逝去、依之薩州樣御忌十日也、

同三寅十月十一日、御領知御判物先格之通御頂戴也、

先是繼豐公御隱居・宗信公御家督依御願、延享三寅十一月二十日、御老中連名之奉書到來、翌廿一日、太守

繼豐公御名代柳生但馬守・宗信公登城、於御白書院御

老中列座、從酒井雅樂頭樣傳台命曰、繼豐公隱居・

宗信公御家督如願被仰出云云、

同三年寅十二月朔日、於江府御家督・御隱居之御礼被

仰上、

同三年十二月十八日、宗信公被任少將、

同三年十二月二十八日、宗信公御官位之御礼被仰上也、

同四年丁卯二月廿一日、初賜歲暮之御内書於太守宗信公、

同四年二月十八日、宗信公御家督御祝、招請老中於芝第、

同四年四月十六日、從公方(德川家重)以上使本多伯耆守於芝御

屋鋪御下國之賜御暇、從公方(德川吉宗)樣賜紗綾三十卷・白銀百

枚、同日、從大御所(德川家治)樣以上使西尾隱岐守(忠直)樣賜縮緬二十

卷、同十八日、從大納言(石丸)樣以上使松平左近將監樣賜紗

綾二十卷、同十九日、爲御礼登城、於御黑書院拜謁

公方樣、蒙御懇之上意、且於御前御腰物・御馬拜領之、

同二十三日、江府御發駕也、

同四年丁卯十月十日、吉貴公御逝去、同月十六日戌亥

之刻、礮御屋鋪御出棺、同廿五日、於淨光明寺御葬送、

同四年十二月廿三日、宗信公御家御讓物御覽、

同五年戊辰正月十三日、備中殿御家老座御出席之事、

此節依御家督、從備中殿依願今日於御前右勤免之、賜

御腰物也、

同五年辰年、御家督以後始以宿次之御奉書賜御鷹之鬻

也、

延享五年辰八月四日、具志川(朝利)王子御膳進上有之、同月七日、於御對面所賜御料理具志川王子其外琉人也、

寬延元辰九月九日辰刻、太守宗信公發駕鹿兒府、

同年閏十月、靈籠院(吉貴老)樣御位牌當三月瑞輪寺依火災及御

燒失、依思召御牌御再興、被安置于大圓寺、御廟所如

元被建置于瑞輪寺、

同年辰十二月十三日、太守宗信公叙任從四位上中將、

同年辰、宗信公御參府、十二日、上使本多伯耆守正珍

來芝屋鋪、如先例述叮嚀之上意、因即日登營、獻上先

格之品物、於黑書院拜謁 公方樣、被述參府之御礼、

被蒙御懇之上意、西之丸亦登城獻品物、翌十三日、以

上使河野豊前守(通喬)依琉人卒來如先格賜御米貳千俵、同

十五日、卒琉人登城御目見無過矢(実力)、且琉人御接待之事

都而如先格也、

同辰十二月廿八日、太守宗信公登城、謝御官位之礼矣、

〔張紙〕寬延元辰八月廿一日、太守宗信公於堀之頭弓場上覽

上方與中諸士之射術、(總人數百 四拾人余)同月二十三日、又於下

弓場上觀下方與中諸士射術也、兒玉次左衛門・鎌田平藏

両矢中束、

寛延元辰十二月廿八日、隅州様(兼慈)如御願於御國許御湯治御暇被免許之、從三御所様有拜領、翌巳二月四日發江府、四月廿三日、御着鹿府也、

同二年巳正廿二日、宗信公三月御交替御願書被差出于松平右近將監武元、同廿四日、如御願爲每年御交代三月中、

同二巳、今度太守宗信公御縁與之尾張宗勝卿御息女奉称御名嘉知姫様旨、同四月二日、於鹿兒府有通達矣、

同二巳四月十一日、以御名代御下屋鋪有御移徙御祝也、同二巳三月十三日、以上使本多伯耆守賜御國元御暇、

御拜領物如先格、同日、從大御所様・大納言様以上使西尾隱岐守忠尚・秋元(涼朝)但馬守如先格有拜領物、同十五日、爲御暇御礼登城、於御黒書院拜謁 公方様、被蒙御懇之上意、拜領御馬也、

同二巳三月廿二日、太守公發江都也、同五月十八日御着城、

同二巳四月廿三日、隅州様御着城、
同二巳六月廿二日、太守宗信公御不快、因諸役人月次御礼罷出面々、翌廿三日、謁御家老奉伺御機嫌也、同

巳七月十日御逝去、奉称 慈徳院殿俊巖良英大居士、同月十三日戌亥之刻出御城、入御于福昌寺、

同二巳九月三日從家老鎌田典膳政昌通達写、兵庫様五(大門後重年)

拾日拾三ヶ月御忌服被爲受、御出府被仰渡、依之諸書付様之字可用旨有之、同月十三日、從下屋鋪御發足也、同十一月十日、兵庫様登城、於(マ)白書院縁頼御老中各

列座、本多伯耆守述台命曰、慈徳院様豫如御願御養子被仰付、遺領無相違賜之、諸事如慈徳院様御代御心得可有之云云、同月十五日登城、被奉謝賜家督忝也、

同年(マ)重年公夫人於村様備于御前様、同十二月、從(稱山久初)主計殿有通達也、

同二巳十一月廿八日、太守重年公御登城、御元服御一字拜領、叙任從四位下少将、御道具拜領之、称御名薩摩守様、都而如御先例、

同二巳十二月四日、上使松平頼母(近明)來于芝第、重年公御家督始賜御鷹之鬻、

寛延三年正月廿二日、御前様於村様御移于御本丸奥、
寛延三年四月十八日、慈徳院様御遺髮從御牌殿御直客殿、同十九日曉七時發福昌寺、大乘院隱居覺門前以參

上于福昌寺、奉請取於御遺髮、

同三年三月廿二日、御家督初歲暮之御内書御頂戴也、

同三年、隅州様御暇來夏迄御申次之御願被仰上之處、
(繼豐)

御願之通被仰出旨御到來、諸役人御祝儀六月也、
(マ)

同三年八月朔午刻、御前様鹿兒府御發輿、御家老市來
(政方)

左中、十一月二日御着江府、

同三年九月十一日、御家督御祝、御老中御招請、

同四年未四月十三日、從(徳川家重)公方様上使本多伯耆守正珍來

芝第賜歸國暇、賜紗綾三十卷・白銀百枚、同日、從大

御所様・大納言様以上使西尾隱岐守先格之通有拜領物、
(徳川家治)

同十五日、爲御暇御礼登城、於黒書院拜謁 公方様・

大納言様、蒙御懇之上意、於御前御腰物・御馬拜領之、

未年、隅州様御暇來夏迄御申次御願被仰上、如御願御
免許、

同未四月廿三日、太守重年公江府御發馬、同六月廿一
(マ)

日御着城、

同閏六月朔、於とめ儀殿文字相用、於とめ殿与唱、書
(繼豊側室・重年生母)

付等ニも可致旨主鈴殿より被仰渡也、

同未六月廿日、大御所様(吉薨)御、因太守重年公賜御遣

物御脇指、同九月二日、於御國元御頂戴、今度御家督

初御下國、御膳進上并御料理被下候儀左之通、

一今月廿三日、自御一門至納殿役人一汁三菜、御普請

奉行以下一汁二菜賜、

一同廿五日、諸士一汁二菜賜之、

同廿七日、諸士ヨリ三汁 菜進上、
(マ)

同廿九日、御當地罷出御目見被仰付候寺院并山伏於

護所一汁三菜賜之、

右九月十日 主鈴
(種美)

秋月佐渡守 御使者小坂平兵衛來鹿兒府、

同未九月十八日、王子并親方迄二汁六菜、親雲上以下

二汁三菜賜之、同廿一日、自王子二汁六菜進上、但琉
球王子小録、

同未十月二日、御家督御任官爲御祝於御本丸隅州様江

御料理被進之、

同未十月四日、右同断御女中様方江於御本丸御料理被

進之、

同四年未十月十五日四半時、今度御家督初就御歸國、

爲御尋以宿次御書御肴御到來也、

同未十月、^(マ)松平隠岐守^定御使者伊藤淺右衛門來、

同未十月廿四日、島津因幡殿^{忠卿}先年和泉家相續被仰付、

御高壹万千貳拾八石餘、私領今和泉・佐多之内柙植場、

田代之内狩倉、礮御屋鋪被下置候處、當分之家來ニ而

未家格勤不相調候、因幡殿幼年故、島津備中殿ヨリ御

先代ニ段々被願出置候趣有之候、然共先樣家格之勤ヲ

モ可被致儀候故、御高并私領之儀者當分^{實德}之通被下置候、

佐多之内柙植場者被差上候様被仰付候、現高モ有之候

ハバ、其分ハ返地可被下候、田代之内狩倉之儀ハ追而

何分ニモ可被仰付候、居屋鋪之儀拜領之事候得共、以

前ヨリ御假屋地ニ候得ハ被差上候様被仰付、礮内エ懸

持屋鋪一ヶ所可被下置候、居屋鋪之儀者御城下エ以御

見合可被下候、右未十月、自主鈴久郷達之、

同五申二月、上下士踊并上下町踊有之、^(宝曆二年)

同五年申五月廿一日、隅州様御暇來夏迄御申次之事、

御願通免許之旨御來、

同五申九月十一日四半時、重年公鹿兒府御發駕、十二

月二日御參府、

右寬延四年未十一月三日寶曆改元、御國許御弘メ十一

月廿七日也、

寶曆三年酉正月十一日、以宿次御奉書賜御鷹之鶴於繼

豐公薩州、

寶曆二年申十二月三日、上使松平右近將監武元來芝第、

如先格有上意、同六日、以上使大御目附伊丹兵庫頭直

賢今度琉人依率如先格賜御米二千俵、

同二申十二月十二日、重年公登城、御先例之通有獻上

物、於御黑書拜謁公方様、被謝參府禮、被蒙御懇之上

意、而後登西之丸有獻上物、同十五日登城、琉人被召

連有御目見、

同三酉五月十日、隅州様御暇來夏迄御申重之願、御願

之通御免許之事御到來、

同三酉四月十五日、重年公以上使松平右近監^(將脫力)武元賜歸國

之暇、先格之通有拜領物、從大納言様上使亦右近將監

兼之、從御本丸先格之通有拜領物、同十八日、爲御暇

御礼登城、於御黑書院拜謁公方様・大納言様、有御懇

之上意、御馬拜領、

同三年酉四月廿三日、重年公發江府、同六月九日、御

着船于築地御茶屋、直御着城、

同三酉十二月^(ママ)、太守重年公來年被窺參觀之期、依之
七月中應將參府云云、

同四戊正月十六日、御通達之内、太守様此節濃州・勢
州・尾州川々御普請御手傳被仰付旨御到來、因同十八
日、御祝儀有之、但右御書者同三年酉十二月二十五日御老中西
尾忠尚・松平武元・本多正珠・酒井忠奇。
堀田正亮五人連名在奉書、

同四戊正月十六日、平田靱負^(正輔)於御前御直命御手傳方
惣奉行、右同命副伊集院^(久東)十藏奉行、

同四戊、以宿次御奉書今度初賜御鷹之羈、正月廿一日
到來、頂戴之、

同四戊閏二月二日、御前様 御卒去、

同四戊四月十五日、兵庫殿今度御參勤之節爲物馴可被
召連旨被仰渡、持道具手鍵計、家來不及召附、家格之
場ニテハ不遺被召附、人數者以御見合可仰付、今日御
直被命、

同四戊五月十二日、隅州様御暇來夏迄御申重、御願之
通御免之旨御到來、

同四戊八月四日、善次郎殿御事於江府從 太守様御用
番 御嫡子之御届有之、御名奉称松平又三郎忠洪様、

同四戊十二月朔日、大納言様御婚禮被爲濟、姫宮様御
事可奉称御簾中様旨有通達也、(德川家治)
(五十宮倫子)

大納言様御婚禮爲御祝儀、上使土岐伊豫守^(頼熙)・御簾中
様上使永井九右衛門ヲ以賜一種一荷於太守様・隅州様、
同五亥五月九日、隅州様御暇來夏迄御申重、御免許之
旨御到來、

同五亥六月二十六日、太守様依御不快、爲御養生依御
願當九月迄御滯府之旨有通達、

同五亥六月十三日、御老中酒井左衛門尉^{寄忠}ヨリ御名代
松平河内守^{定多}御手傳御普請依御勤賜御時服五十太守
重年公、

同五亥六月十二日、太守様御病氣爲御尋、從公方様^(德川家重)・
大納言様以上使松平紀伊守^(信孝) 御名代島津淡路守久柄ニ
テ被蒙御懇之上意也、

同五亥六月十五日、太守様爲御病氣御尋、從公方様以
上使阿部飛驒守様^(正允) 御名代島津淡路守久柄ニテ被御懇^(蒙脱力)
之上意、賜鮮干鱸一箱、從大納言様亦被蒙御懇之上意、

同五亥六月十六日重年公御逝去之旨、七月四日御披メ
有之、

同七月十六日、太守様御法名御到來、奉称圓徳院殿覺

満良義大居士、同八月十八日夜、御遺躰福昌寺御入寺、

同五亥七月二十七日又三郎忠洪御名代御一類中御壹人

西尾隱岐守尚御宅可罷旨、前日御老中御連名之御奉書

御到來、因島津淡路守久柄御出之處、御老中各列座、

從隱岐守、圓徳院様御遺領無相違御願之通被仰出、御

幼年故御領分并琉球國御仕置之儀隅州様被添御心、諸

事御先格之通御取計可被成旨、以御奉書被仰達、依之

從則日奉称太守様、

一 八月十九日夜、六時ヨリ五半時マテ之間御入棺、同廿

一日夜、五ヨリ四半迄之間御葬送、同自廿五日至廿五(九)

日日数五日御中陰御法事、

同五亥八月十五日、御家督之御礼以御名代島津淡路守

殿被仰上、

同五亥九月廿二日、從御用番伯耆守正珍、依太守御若

年、御國元爲御目附京極兵部・青山七右衛門可遺旨被

仰渡也、

同五亥十一月六日

(菊カ) 兼姫様御結納、松平筑前守繼御方

御互御取替被爲濟、

同六年子正月晦日七時、(綱貫後室) 信證院様御卒去、依之自今日

至來月六日日数七日殺生・鳴物・遊興停止、普請并鹿

児島中漁獵者來月二日迄日数三日停止也、

同六年子正月五日御通達之内、菊姫様舊臘七日松平修

理太夫政重御姻婚被爲整也有之、

同六子、隅州様以宿次御奉書賜御鷹之鶴、二月十五日

九時御到來、

一 隅州様御暇來夏迄御申重、御免許之旨御到來、同五月

廿一日也、

同六子六月十一日、御目附衆於御城御招請有之、

同六子七月廿八日、於登免様御名於御國中爲差立節茂

様と唱、書付ニも可仕旨被仰渡也、

一 今度於西之丸御誕生之姫君様御名奉称千代姫君様、八

月廿七日有通達也、

一 兩御目附衆御歸府之御奉書依御到來、同子十一月三日

爰元御出立之御日賦、十五日被仰渡也、

同子十月廿六日、御目附衆登城有之、

一 隅州様御暇來夏迄御申重、御免許之旨、寶曆七丑五月

六日有通達、

一隅州(繼豊)様御暇來夏迄御申重、免許之旨、同八寅五月四日
通達、

同八寅四月十九日、忠洪公登城、松平越中守賢定御同道、
於黒書院初拜謁、(徳川家重)公方様・(徳川家治)大納言様御退座、又々被召

呼御前、被蒙御懇之上意、而後西之丸亦御登城、

同八寅六月十三日、被召忠洪公於御城、於御前御元服、
賜重之一字、叙任從四位下少将、御盃頂戴賜御道具、

被蒙御懇之上意、被改御名御實名於薩摩守重豪公、

同八寅六月廿五日、端午之御内書御家督初頂戴之、

同八寅八月十三日、於登免様御引移于築地御屋鋪、
(繼豊御室重年生母)

同八寅七月四日、太守重豪公御袖留也、

同八寅七月廿三日、以上使黒川與兵衛、(正封)太守公御家督

初賜御鷹之雲雀、

同八寅十月八日、家老鎌田典膳政昌爲病養依願上京御

暇賜之、

同九卯正月六日、以宿次奉書賜御鷹之鶴、今日九時到

來、御頂戴之、

一鳥津備中殿息女於薫殿、今度、(貴礎)太守様御手前被成御介
抱、追而相應之御縁組御願可被成旨、御用番様江御届

相濟、御内々者、太守様被成御妹分、此節ヨリ於くん
殿与相唱、書付等ニモ此殿文字可相用旨、同九卯三月
五日、從圖書久亮通之、

一隅州様來々巳之年迄三年御暇御申重、免許之旨、同卯

四月廿八日御到來、

同九卯四月十六日、以老中御連名之奉書、太守様増上

寺火之御番被仰渡、

同九卯四月廿六日、如御願於薫殿鳥津淡路守久柄御縁

組被仰渡、

一太守様御事、(徳川)刑部宗尹之息女保姫様御縁組御願御内意

書、同九卯八月十九日、以御用御頼久世忠右衛門、(廣氏)被

差出于御用番松平右京大夫、(輝高)旨、九月十一日有通達也、

一菊姫様御懐胎、(懐力)同九月六日、御着帯并御袖留御祝相濟

旨、同十月十一日、聞於薩府也、

同九卯九月十一日、御家督御祝、於江府御老中御招請

有之、

同九卯九月廿八日、太守様御前髮御執之、

一太守様可被成御登城旨以御奉書被仰渡、同十一月四日、
御名代鳥津淡路守久柄登城、於御白書院縁頼御老中各

列座、從西尾隱岐守忠尚刑部卿宗尹息女保姬様縁與^(ママ)

于 太守様被仰渡、

一阿部伊勢守正襲與方於喜代様旧臘廿八日御卒去、隅州

様御兄弟之御續也、雖然^(吉貫) 淨國院様御養娘之故、半減

之御忌服ニテ一日之御聞忌被成御受旨、辰正月十七日
被達之、

一於薰殿事、島津淡路守同卯十二月廿三日御結納御婚姻

御祝段々被爲濟旨、翌年正月五日有通達矣、

一菊姫様同十年辰正月四日御安産、御男子御出生、雖然

同十四日御夭亡下有之、

一今度御轉任御兼任相濟、因從 公方様^(徳川家治)・右大將様以上

使^(ママ) 隅州様御拜領物有之旨、且從 公方様^(ママ)・右大將

様・御簾中以上使 有御給物旨、同三月有通達、

同十年辰五月十三日 公方様・右大將様・御簾中様御

移替之事、一右大將様御移徙當日ヨリ上様与奉称、

將軍 宣下當日ヨリ 公方様与奉称事、一公方様御移

徙當日ヨリ 大御所様与奉称候事、一書状等御移徙以

後者兩御所様可相認事、一御一方様之御事者上様・大

御様与可認候事、尤 將軍 宣下以後者準前条可認事、

一御簾中様御移徙當ヨリ^(日脱カ) 御臺様与奉称候事、

右之通從公義被仰渡、依之宝曆十辰六月十五日、於御

國元從圖書久亮以二階堂源太夫行^(端) 傳之、

同十辰六月二日、於江戸從大御所様以上使^(ママ) 御腰物

一腰・箱肴一種賜之於 隅州様、同七月七日御頂戴之、

同十辰九月十九日 隅州様依御不快、翌廿日謁御家老

御機嫌伺有之、廿日御逝去也、同廿一日夜四時御入棺、

同廿七日夜五時御出棺、同九月廿二日、於嘉久様御名^(雜息開室、宗信生母)

改妙心院様、於登免様御名改嶺松院様、 御法名奉称

宥邦院殿圓鑑亨盈大居士旨、同九月廿三日有通達也、

御中陰御法事自今月十一日至同十五日日数五日於福昌

寺御執行有之、十月二日^(ママ)

一竹姫君様奉称浄岸院様旨、同辰十一月廿二日有通達也、^(雜息開室)

同宝曆十一年辛巳正月十一日通達之内、 太守様御先

格之通、當四月、御國元御暇御給可被遊旨被仰渡、御

手當等^(重年) 圓德院様御家督初御下國之例ヲ以調可申出也、

一島津備中貴儔一往可出勤於御家老座旨、已二月朔日被

仰出也、

一圓德院様御遺髮高野山御登山無之、依之此節 宥邦院

樣御登山之節、御一所御遺髮之御代御手馴之物 (繼豊) 宥邦

院樣御遺髮御同 (一ノ)ニテ御越、御石塔御納御牌被遊御安置、御石塔就御建立、五十口之大曼陀羅供御執行被仰

付筈、同巳三月十八日、從伊織 (前田國福) 傳之、

同巳二月十八日、將軍 宣下御祝儀、御老中樣方御招請於江戶相濟、

同巳四月廿三日、太守樣江戶御發駕、

同巳四月十六日、從公方樣以上使秋元但馬守 (涼朝) 於芝御

屋鋪賜御暇、且賜紗綾三十卷、白銀百枚、同日、從

大御所樣以上使松平右京大夫 (輝高) 御先格之通有御拜領物、

同十八日、御暇之爲御礼登城、於御黒書院公方樣出御、

被蒙御懇之上意、於御前御腰物・御馬拜領之、

一巳年、今度巡國爲上使青山七右衛門 (成存)・神保帶刀 (忠能)、

花房兵右衛門 (正路) 右三人來、

同巳六月廿三日御着城也、

一大御所樣六月十二日薨御之旨、同六月晦日有御披矣、

一今度於御本丸御誕生之姫君樣奉稱萬壽姫君樣、

同十一巳十月十五日、御家督初就御下國、御女中樣方

於御本丸御料理被進、有御能矣、

同十一巳、御家督初就御歸國、爲御尋以宿次御奉書御看御拜領、十月十八日御到來、

一今度御家督御下國御膳進上并御料理被下次第、十一月

四日、自御一門至納殿役人一汁三菜、御普請奉行以下

諸御役人汁二菜、御能被仰付矣、因六日、諸士一汁二

菜矣、同九日、自諸士進上二汁三菜、備御能御覽也、

同十三日、御當地罷在 御目見被仰付寺院・山伏於護

摩所一汁三菜賜之、其以後十一月七日、右日限御延之

旨、自若狹傳之、依之同廿二日、寺院・山伏被下、同

廿五日諸士進上、

同十一巳十二月廿一日、御拜領御看有御披矣、

同巳十月廿五日、御判物江戶被差立、同十二月廿一日、

到着于御當地、

同巳十一月六日、今度御頂戴之御領知御判物被差立、

翌年午正月四日四時到着、

一祿寢式部清香先養子島津因幡 (忠福) 被仰付時、本家小松之

称号以來嫡子代々可被拘用上 (旨力) 繼豊公 御判物先年

吉貴公於御前因幡殿名代ニテ頂戴之、式部清香者只今

之通祿寢名字被仰付置、其以後因幡殿儀和泉家相續被

仰付、雖然御判物者于今所持也、偶右之通被仰出置、

家ニ付而ハ無據称号之儀御座候、往々相用候様ニ仕度

候条、嫡子代々小松称号御免被下度旨被申出趣有之候、

依之此節式部江小松之称号被仰付、嫡子代々相用、二

男ヨリハ称寝名字相用候様ニ被仰付候旨、同十一巳十

二月晦日、從隼人正芳(録)以北郷七郎左衛門久儔傳之、

同十二午正月二日、從式部清香、御内々御慎明三日迄

ニテ被爲明、依之來ル四日、御一門方於御近習番所可

申御祝儀、獨礼以下同日謁御家老御祝儀可申上、御側

廻并中通之面々於梅之間如御在府之時祝儀可申上、御

一門ヲ初持参太刀之面々同日都而納太刀、與中之諸士

同日登城、謁御家老御祝儀云云、

同十一巳十二月四日、兼姫様御安産、御女子出生、

同十二月午正月十五日、御判物御頂戴之御祝有之、

同十二午正月十八日上土踊、同廿三日下土踊、同廿五

日上下町踊、

同十二午二月四日四時御發駕、

一芝御屋鋪就御類焼、二月十八日、以宿次御奉書御尋、

翌十九日、又々以宿次御奉書、御類焼ニ付四月 御参

勤御用捨、七月中御参府可被成候、乍然御勝手次第可

被成旨、御懇之上意之趣、於藝州廿日市浦御奉書 拜

見被遊、依之自彼浦被遊御歸國管候、且又同廿三日、

爲御名代島津淡路守久柄登城、於御白書院御縁類老中

列座、御用番秋元但馬守凉朝申台命曰、御守殿就御數

焼彼是御手當等可有之候、御居宅茂御類焼可爲御難儀

被思召上、依之金貳万兩賜之云云、

一太守様因三月廿七日御歸府、

同五月六日四時御發駕、同七月十八日御参府、同廿一

日、上使松平右近将監武元來于芝、蒙御懇之上意、

一菊姫様御名被改真舎院旨、同八月十八日有通達也、

一保姫君様被遊御座御奧可唱新奧旨、從藏人正芳(録)十月

三日傳之、

一御式臺脇此跡中之口之儀可唱御末口、表御書院此跡有

三間、此節間數相重、上之間・二之間・三之間・末之

間、臺子之間上座泰吉了之間、此跡新座之儀可唱鴉之

間、從御家老座御取附之間通之角鳶之間、諸人通融之

御玄喚中之口、同上之間者溜之間、内御玄喚上之座内

御玄喚上之間与唱、次之座御纏縣之間、此跡鸞之間之

儀蘭之間、右之通御座唱於江戸被仰渡、午十月廿五日、
從山城久定傳之、(鳥津)

同午十一月朔日、從 太守樣刑部卿宗尹御方江御結納

御祝儀、以御使者(マ) 御互御取替被爲濟也、

一今度御誕生之若君樣 御臺樣被遊 御養、御名奉稱

竹千代樣旨、同十二月廿二日在通達矣、(德川家基)

同午十二月四日 太守重豪公御婚姻被爲濟、因同六日、

從 公方樣(德川家治) 御臺樣以上使 御前樣初被遊御拜領物、

一今度御男子樣御誕生、御臺樣御養、奉稱松平貞次郎、

未正月、

一豐之助樣御名被德(付達)「出付」レヌ(改脱カ) 民部卿樣、未正月、

一太守樣被遊御水痘、未二月廿二日、被爲召御酒湯也、

同十三未四月十三日、以上使松平右京大夫輝高賜歸國

之暇、御先格之通有御拜領物、從若君樣以上使松平周(德川家基)

防守康福如先格有拜領物、同十五日、爲御暇御札登城、

於白書院蒙懇之上意、御馬賜之、

同年未四月廿八日、重豪公發於江府、六月廿一日、御

着鹿兒府、

一御前樣依御懷胎、同未五月廿二日、御袖留并御着帶有

御祝、其後奉稱於悟樣、(重豪女)

一備中貴儔一往可出勤於御家老座旨先達而被仰出、又々(鳥津)

去年御在府中被相勤筋雖被仰付置、漸々及老年勤方太

儀被思食上、此節當勤被免於 御前有上意、賜御腰物、

未七月十九日也、

同未九月六日依翁御披、女中樣方於御本丸被進於御料

理、中通人數拜見被仰付也、

同未十月十三日、御前樣御安産、御女子樣御誕生、其

後御七夜御祝有之、且從 公方樣 御臺樣以上使(マ) 有

拜領物于淨岸院樣 太守樣 御前樣御銘々、(雜費後宅)

一刑部卿樣御男子御誕生、奉稱松平金次郎樣旨、未十二

月廿三日右通達、

一島津哲之助亡養父圖書久亮一家筋無構、御一門之方(宮之城家、吉貴五男)

被附焉、御祝儀御札席雖被仰付、此節哲之助事家格之

通於御對面所持參太刀被仰付、月次御札被罷出筋者鳥(節カ)

津大學次獨札被仰付、諸事同格同前被仰付、即同未十

二月廿五日、從式部清香使三原源五左衛門達之、

同十四年丙申正月十三日、有御能初矣、同二月五日、(甲)

有思召而有御法樂御能矣、

一 太守様依御寒濕之御痛、當春御國元御發駕、琉人者秋
從御跡出立之筋、御用番正月九日御願書被差出之處、
翌十日、御願之通被仰出旨、正月廿八日、從伊織國福
達之、
(川田)

同二月十五日、今度初而以宿次御奉書御鷹之鬻御拜領、
有御頂戴也、

同正月廿七日、爲御年礼 御前様登城、有御目見于

公方様 若君様 (徳川家治女) 萬壽姫様、御懇之上意、其上品々有

拜領物矣、

同三月十九日、有御拜領鬻御披也、

同三月廿二日四時御發駕、左中久金・此面種壽供奉、
(鳥津) (高橋)

五月十三日御參府、七月朔日登城、先格之通有獻上物

而參府之御礼被仰上、蒙御懇上意、

一新輿之事向後可唱御輿旨六月被仰渡、一芝御屋鋪御廣

座之事向後可唱外御座旨、且當御地廣御座之事同斷、

七月廿六日被仰渡也、

一從淨岸院様以繪刑賜牡牡丹御紋於悟姫様、
(形力)

同申七月廿六日、悟姫様御笑也、
(天七カ)

同申九月十八日、萩原殿死去、

同申十一月十三日、太守様叙任從四位上中將、同廿八
日、御官位御礼被仰上、

同十一月十三日、以上使池田筑後守 今度琉人依召連
(政倫)

御先格之通賜御米二千俵、同廿一日、率琉人而御登城、

拜謁 將軍家、琉人御饗應之次第都而如先蹤也、

同十二月廿二日、刑部卿逝去、奉称覺了院、

明和二酉正月廿九日、御目付御用御賴松平庄九郎也、
(忠郷)

同二酉二月十一日、松平隱岐守定功卒去、

同四月十三日、以上使松平周防守康福賜歸國之暇、先

格之通有拜領物、從若君様亦以右同人有拜領物、

同十五日、爲御暇御礼登城、拜謁 公方様、有御馬拜

領、

一松平備中守定靜事奉称隱岐守旨、明和二年五月、左京
(榊山)

久倫達之、

一太守様五月四日江府御發駕、此面種壽供奉、御用人
(ママ)

六月廿二日御着城、

『從是前自元文二元丙辰年至當 太守様御代明和二乙酉年』

一竹姫君様者清閑寺左少辨 御女、而常憲院様御代宝永
(熊宗元) (徳川綱吉)

240の1

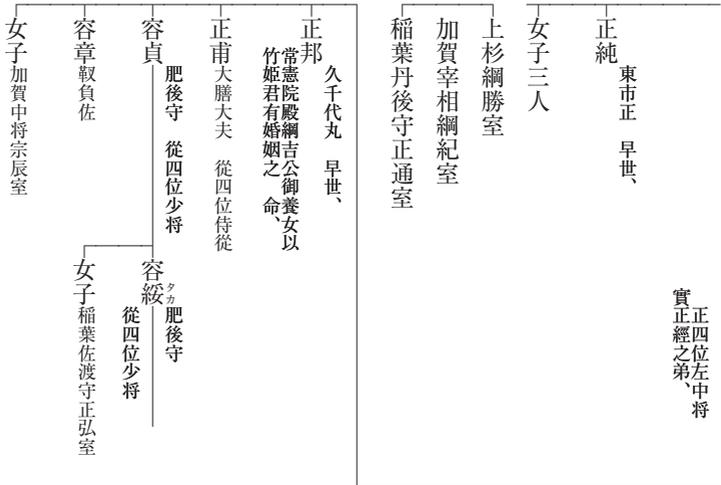
五年戊子七月廿五日、御臺様依御願以竹姫君様御方爲御養子、夙内御由緒松平肥後守嫡子久千代(正容)江御縁組被仰出候旨上意之段相逢之、同廿三日、松平肥後守被爲召之、来年十一月 竹姫君様久千代方江御入輿之儀被仰出之、同年同月廿七日、竹姫君様御養娘之爲御祝儀、清閑寺左少辨熙定以使者溝井主水御太刀・銀馬代・紗綾五卷獻上之、右之通十一月林大字頭所被差出候也、享保十七年子年、一姫君様御懷様之事、同十八年丑正月被相尋候処(徳川綱吉室)ニ、浄光院様御法事来月六日御位揃ニ付於東叡山御執行有之候、就夫御内々御法事内太守様御本丸江御献上物可被遊事ニ付而御守殿御沙汰申上候、御年寄衆より御本丸御老女衆江被得御差圖候様ニ向井十郎大夫より可申上旨被申聞置候事、

一保科家從信州高遠城主彈正忠源正直三代肥後守正之之系圖左之通、



241

○享保二十一年丙辰五月七日、松平安藝守吉長登城、松平左近將監乘邑述台命曰、今日改元元文、此旨從松平(伊達吉)



陸奥守至伊達伊織(村候)可致通達、別紙大御目附有馬出羽守(純珍)渡之、

○同辰十月廿三日、來月中旬女御入内ニ付、爲御祝儀以使者禁裏江可爲獻上御太刀・御馬代黃金三枚、于女御仕白銀貳十枚、使者衣服勤方日限者於京都土岐丹後守可承合之云、

右二行公義仰渡帳書拔也、

○享保廿一年辰二月二日、繼豊公爲御參府午上刻御發駕、御不豫未快、從奧御座之間召駕、御廣庭御通從南御門出御、御家老島津大藏久純・比志島隼人範房、御用人福山平太夫安村、御近習役木村四郎左衛門時央・伊地知千左衛門季伴・岸喜右衛門從駕焉、依之同三月十一日、於江府以肥後平左衛門盛房達可延引期旨於本多中務太夫忠良也、

○三月十八日、益(宗信)之助忠顯公御中剪御元服、(御力)

○七月六日、從山田新助各爲心得被申渡者、太守繼豊公就御病氣、爲御保養御下屋敷江被成御越可然旨、橘壯仙院樣就申上、御願書昨日被差出之處、可爲勝手次第旨即日以張紙被仰渡矣、

○七月十一日、繼豊公御不快爲御樣躰御尋、從公方樣有(德川吉宗)

水野壹岐守(忠定)於御懇之上意、而壹岐守樣來于芝、御芝御對顔被成、上意之趣御承知也、

同辰七月廿二日、上使御使番石丸藤藏(定枝)來于芝、賜御鷹之雲雀三十、太守公御不快故、爲御名代鳥居伊賀守(忠意)御出向、勤諸事也、

○同十月六日、御小姓組御番頭青木織殿之助(隆力)來于第、賜檜重一組矣、

○同辰十月三日、近衛准(后家力)熙公薨去、依之十月九日ヨリ來十三迄呼物遊興停止之也、

○同十一月十一日、以御老女使從公方樣(靈麗院・喜真室)大御前樣江御鷹之屬於高輪拜領之、

○同十一月廿二日、繼豊公御不快少快故、今日御用番御家中松平伊豆守信祝之宅御見廻也、(老力)

同十一月廿三日、右同斷故、御見廻于西之丸御老中松平能登守乘堅之宅也、

同十二月十一日、昨日御奉書到來、今朝六半時、太守繼豊公出芝第、御參府以後初登城、公方公(徳川家重)大納言公出御黒書院、獻上於御箱着一箱ツ、被謝御病後之御

礼、而被蒙御懇之上意退出、又登西之丸、於櫻田之第

御支度替、御老中方不殘爲御礼廻勤也、時家老島津大

藏久純・穎娃左京久周供奉、御目見者雖無之御目見同

前ニテ、献上紗綾二卷・御太刀・銀馬代一枚ツ、於公

方、御太刀・銀馬代一枚ツ、於大納言、

元文二丁巳年二月十三日、上使御使番松平(下力)兵衛(之郷)來

芝第、賜御鷹之鬮一羽、繼豊公御病中故、親叔鳥居伊

賀守勤名代矣、

同三月十六日、昨日御用番本多中務太輔忠良(久房)御滯府

願書被出之、即十五日之晚、如願可爲滯府旨被仰出也、

同五月廿二日曉、於西之丸大納言家重(言)公若君様家治公

御誕生、御母者梅溪中納(言)之御到來御女之由也、

同月廿八日、若君様御名奉称竹千代様、御七夜御祝從

繼豊公以御使者山岡權太左衛門(久房)頭御番獻上二種一荷(於力)公

方吉宗公、從總州様以御使者上村休左衛門(行卷)頭寄物獻上

一種一荷、從繼豊公以御使者福山平太夫安村(於脱力)頭御番獻

上御太刀一腰(三元)正元・御脇指一腰(久備)來國・御産衣竹千代様

從入道様以御使者北郷助太夫(吉豊)頭獻一種一荷ツ、於大納

言家・竹千代様、

同年六月朔日、竹千代様七夜之御祝故、從公方吉宗公

以上使松平紀伊守(信孝)來于芝第、賜卷物十(種力)・一荷於

繼豊公、一種一荷於總州様、從大納言(重家)公上使高木主

水正(正陞)同日來于芝第、賜同品於繼豊公・總州様也、繼

豊公依病中、島津但馬守忠雅代公有御受答矣、

同年六月十一日、又三郎様(宗信)此節初而御目見御願就被仰

上、今朝島津但馬守忠雅同導於顯公(忠脱力)、到御用番本多中

務太輔忠良之宅初御對顔、時山村十郎右衛門(良喜)有出會、

同月廿一日、又三郎公到松平左近將監乘邑宅初御對顔、

同廿六日、又到松平能登守宅初御對顔、此度亦忠雅同

導於忠顯公(宗信)、

同年七月朔日、忠顯公登城、表立初御目見公方吉宗公、

大納言家重公而退席、又々御出、從最前之席進暫(著力)座、

從公方様蒙久々ニ御成人トノ御懇之上意、獻上御太刀

一腰・白銀廿枚・縮緬十卷・御馬一疋裸脊于公方吉宗公、

御太刀一腰・白銀廿枚・御馬一疋裸脊于大納言家重公、

從太守繼豊公獻上於綿五十把于吉宗公、綿三十把于家

重公、從總州公獻上於二種一荷公方吉宗公、於一種一

荷于家重公、此日亦島津但馬守忠雅同導於又三郎公、

且又御守役佐久間九右衛門奉拜謁於(盛村) 両公也、翌二日、

忠顯公到于松平右京大夫輝貞宅有御對顏矣、

同月廿七日、上使御使番筒井主殿(忠雄) 來芝第、賜御鷹之

雲雀三十於太守繼豊公、時公御病中故、島津忠雅代公
有拜受也、

同年八月十七日近衛前関白家久公薨去之旨、同月廿四
日御到來 從即日 至廿八日日数五日慎之儀被仰出也、

同九月廿六日、昨日竹千代公御色直之爲御祝儀、從竹
千代公上使牧野越中守(真通) 來芝、賜御産衣二重・二種一

荷於太守公、御産衣二重・一種一荷于總州公、太守公
御病中故、忠雅代公勤事矣、

同閏十一月二日、忠顯公到水戸少将(德川宗翰) 養仙院様初有御對
面矣、(德川吉孚室 德川綱吉養女)

元文三戊午正月廿二日、(竹姬 繼豊後室) 姫君様同道於菊姫様入御城大
輿、從 吉宗公・家重公有上意於菊姫様、有太守公・

又三郎公・菊姫様ニ賜也、且菊姫様初有御目見于竹千
代様、拜領物亦有之、

同午年正月廿五日、上使御使番津田外記(正明) 來于芝、賜
御鷹之鶴一雙、繼豊公御病中故、忠雅代公勤事矣、同

三月廿一日 竹千代君爲御誕生之御祝、招請松平伊豆

守信祝・松平能登守乘堅、若御年寄板倉佐渡守勝清・

水野壹岐守忠定、其外幕府之士也、同廿三日、招請御

一門御正客松平大膳大夫・細川越中守於芝第、有御能

五番矣、

同午七月十九日、上使曾我又左衛門(善祐) 來芝、賜御鷹之

雲雀、

同午十二月七日、繼豊公爲御養生、明年滯府之願書被

差出于御用番松平左近将監乘邑之處ニ、今日免許之、

同四年未六月十五日、又三郎公初御馬乗初之事、

同八月四日、水野壹岐守忠定來芝第、賜松平之称号於

又三郎公、且於嫡子者代々可用之云云、

同月五日、大御前様御卒去、翌六日、公方様・大納言

様弔使増山河内守來芝第、但馬守忠雅爲擯之、同八日、

兒玉主右衛門(マ) 差出壺中之銘於樺山主計久初、其銘記

左、

這壺中毛髮者

靈龍院殿潜蹟妙能日淵大姉鬢髮也、大姉者勢州桑名故
城主四品松平越中守源朝臣定重女、而薩隅日三州主(兼)

領琉球國正四位下行左近衛中將源朝臣吉貴夫人也、惟時元文四年己未八月五日逝去、

同八月十二日晚戌之刻、於瑞林寺葬送之、同廿四日、(ハ)兒玉、書調在誌石之銘、

元文五年庚申十一月七日、始賜屬於薩州公、上使島田庄五郎來芝、(宗直)但御鷹之雁二羽也、

同十二月十五日、竹千代公御諱奉称家治公、『家治公御元服者寛保元年酉』

同年、薩州公御居間其外御次之間、從當年七月取付、十二月十六日造畢、今日午之刻御移徙也、

元文六年辛酉二月廿八日、(天英院、近衛基熙女)一位様薨去、家宣公之御臺也、同酉三月三日、寛保改元年、

元文五年申閏七月廿八日、從林大學頭家來長坂徳左衛門(門脱力)大塚七郎兵衛迄、吉貴公・繼豊公・宗信公御家督年間、

御隱居年号月日被書出候内、光久公者寛永十五年五月八日御家督、年二十三也、八月十八日、本多中務太

輔(忠良)御用人千馬郷左衛門を以被差出候、家久公御家督年号月日於江戸不相知候ニ付、御國元江紘方被仰越

候処ニ、慶長七年十二月廿八日、權現様御治世以後初

而於伏見御城御目見、翌年二月、國元江之御暇被下、御腰物・御馬・御鷹等拜領仕候、慶長七年者家久年廿七ニ而御座候、元文五申十二月、相良弥一兵衛を以中務大輔江被差出候事、

『是ヨリ以下明和二年七月廿一日より、是より以上八前ニ記置候也』

明和二乙酉七月廿一日、島津仲久智爲御家老職、賜役料高千石、桂織部久中爲大御目附役、賜役料高貳百石、同酉八月十九日、島津靱負久迢依願免若御年(衍力)寄役、

一世賜御養料御米百俵、

同酉九月六日、島津奎久峯依願免御家老勤、御禮席者向後御家老上於御座之間被仰付也、

同酉九月廿八日、重豪公爲御湯治光越于櫻島有村也、

同酉九月廿八日、河野八郎左衛門通古爲若御年寄役、(役脱力)御料高如元、島津十太右衛門(門脱力)起爲大御目附役、賜御役

料高貳百石也、

同酉十一月廿八日、河野八郎左衛門改名外記、島津十

太右衛門改名大進、是拜領也、

同酉十二月五日、大御目附之内壹人ツ、繰廻可勤御勝

手方(妻刈)旨傳藤馬實詮、及久中・久福(喜人)・久起也、是川田伊

織國福在旅中壹ヶ月ツ、如右、

同酉十二月七日、從高橋此面種壽(ヤ)來年御參勤御時節

被伺于江府之處、去年疏人被召連、因來年七月可被遊

參府之由有命、雖然暑中御旅行依障于御積氣、如定式

四月可有御參勤事、可爲勝手次第云云、右御時節御伺之

節御内意被仰上免許也、

242の1

一写、組中之諸士家督繼目并養子成等之御礼、御太刀・

弓又者中紙進上ニて御目見被仰付候人、幼少其外無據

訊ニ付而ハ、依願進上物相納御礼相濟候筋被仰付儀ニ

候、然共元服并初而之御目見相濟、右躰御礼願之人進

上物納之筋相願度茂候ハ、勝手次第被仰付候、

一御在府之節、御一門より諸士ニ至り家督繼目并養子成

等之御礼申出候面々ハ、御下國之節 御目見被仰付儀

候得共、御在府中ニ願出候面々ハ、其節々進上物相納

御礼相濟候筋被仰付候、右之通向後被仰付候条、可承

面々江可申渡候事、

242の2

一写、若君様御諱 家基公被奉称候付、基之字名乗之字

ニ用候儀、向後無用可仕候、右之文字ニ付而無之候而

も、もとの唱候字遠慮可仕与存候ハ、心次第相改可

然候、家之字ハ先年以来遠慮之事情間、分ケ而不申渡

候、

右、酉十二月廿八日、左京殿(禰山入道)より小林中太兵衛御取次

を以被仰渡候事、

242の3

一年頭 御在府之節、御家老并家格ニ付御太刀進上面々

又者地頭持之儀、江戸詰合之人々ハ持參太刀被仰付被符

仰付、御國許大御目附以上且家格ニ付御太刀進上之面

々、於江戸名代を以納太刀被仰付來候、 御在國之年

頭江戸詰之内御太刀進上致來候面々ハ 御參府之節御

太刀進上仕候様被仰渡置候得共、向後御留守詰之面々

御在國之年頭於御國許名代を以納太刀被仰付候、且又

年頭不在合人者、何方ニ而茂着候節納太刀願出候様申

渡有之候得共、已後共 御在府 御在國(前共)年頭被遊御

座候方ニ而、是又名代を以納太刀被仰付候、

(本文書ハ「旧記雜錄追録六」二五六の1号文書ノ抄ナルベシ)

右、明和三戌正月四日、(小松清香)式部殿より大野多宮御取次を以被仰渡也、

一同正月廿三日九ツ時 重豪公為御參觀鹿兒府御發駕、御供御家老川田伊織國福・高橋此面種壽、御側御用人山岡齋宮久澄、同御用人兼御近習役二階堂蒞行旦、御近習役川上龍衛親方、御表御用人當年詰新納次郎久(マ)但從築地駕船雖定至加治木事、當日風雨、因取路

於從御廐下北郷主膳宅之下知恵光院之上吉野筋、三月十九日、參府于江府、四月五日、將軍家治公以上使松平周防守康福來慰勞于芝第、有敦篤之 上意、同月廿二日登營、雖參府之事獻品如先躡、有 懇篤之上意矣、一戊四月七日、將軍家若君家基公可称大納言様云、且御名之順可爲大納言様 御臺様、一五月五日、命御留守詰於國老島津主鈴木久品、依 公御在府、島津備中貴儔代 公於椿之間之上傳之、

「同戊九月廿五日、來亥年御留主詰之儀、御國元江御用之儀有之、此度ハ被成御免候段被仰渡也」

一御上下之節、供奉之者於道中着袴過半者、依之自今而後可著野袴、雖然一切不禁袴著、野袴者多方可然旨於江府有 命、故戊六月、(マ)國老島津左中久金通之、一京都御留守居高田茂太夫、(マ)於京都病死、故代役上京之間、京都詰筭用役御使者相勤、首尾書等筭用役以名前可差越、右仲久(能)以二階堂源太夫通之、同戊四月七日 若君様可奉称大納言様、(マ)向後御順可爲齒列大納言様 御臺様、

但同五月七日、國老左京久(智脱)以福山平太夫傳之、同四月廿二日 重豪公登東武之營見進先格之獻品被謝御參府之事、有御懇之上意、但於御國元左京久(智)以二階堂(マ)傳之、同戊七月十八日、松平隼之助(黒田)於東武城於 御前元服、賜御一字、叙從四位下侍從、賜御腰物、頂戴御盃、改名式部大輔様、但同八月七日、左京久(智)以福山平太夫傳之、同戊九月廿五日、島津左中久金・樺山左京久倫、就

御在府、島津備中貴儔代 公命來亥年 御留守詰矣、

但九月廿五日、仲久健以宮之原甚五太夫、(伝之脱カ)

一御所帯方御無如意付段之御儉約被 仰出、御參勤御

下國共御供廻御行列至極減少被仰付、其外細ニ吟味被

仰付、當春より至極御手輕御少人数被仰付候、御家老

を初供廻迄茂減少被仰付、持せ道具二本道具・長刀一

振・弓臺一肩・乘馬壹疋為牽候様ニ被仰付候、間之交

代之面之右準シ随分成輕可罷通候、持せ道具御家老二

本道具・弓臺一肩可為持候、馬為牽候儀勝手次第可仕

候、他所より之見分至極儉約被相用候与相見得候様ニ

可致勤弁候、何ぞ諷有之節ハ已前之通可仕旨於江戸被

仰出候旨、左中久金赤松甚右衛門を以戌十月十一日

傳之、

同戌十一月二十二日、(綱貴女・松平定美室) 御剃髮、見改名

信解院、

但戌十一月廿五日、國老主鈴久品以宮之原甚五太

夫傳之、

右同日、(繼豊側室・宗信生母) 妙心院御方剃髮、

同戌十二月十三日、島津監物久倫於私領宮之城病死、

法名陽光院殿玉堂泰安大士、

同四亥正月十三日、小松式部清香依願改名帶刀、

同四亥二月十七日朝、島津主鈴久品病死、故來十九日

迄以心入可遠慮鳴物・遊興、不苦普請、右島津仲久健

傳之、

同亥三月三日、國老島津仲久健以御側用人宮之原甚五

太夫通直達之、三月十八日、太守公御首途、四月廿一

日御發駕、

同亥四月三日、桂織部久中為御家老役、賜役料千石、

島津備中貴儔代 公傳之、

同亥四月十三日、新納四郎久侶為大御目付役、賜貳百

石、

御前様江被進候御目錄より文字略シ候様可相調候、信

解院様・妙心院様・嶺松院様・(繼豊側室・重年生母) 於薰殿江於綾様より御

目錄御互ニ御同輩御名なしニ而、其内於薰殿江之御目

録者少シ文字略シ候様可相調候、

淨岸院様・太守様・御前様・(繼豊後室・黒田重政室) 真倉院様江於綾様より何

之被仰進候、何御進上被成候与唱、右之 御方之様よ

242の4

り於綾様江ハ何之被仰遣候、何御給又ハ御遣被成候与相唱、書付等ニモ右通可仕候、

信解院様・妙心院様・嶺松院様江於綾様より御互ニ何之被仰進候、何被進候与唱、書付等ニ茂可仕候、右之通被仰付候、九月此面(高橋種壽)

一江戸御老中様并御同格之御方、京都御諸司代・大坂御城代・若御年寄様之御名、近國之御大名又ハ御身近キ御一門様方之御名ハ遠慮可仕候、尤依御向柄遠慮有無之訳吟味被仰付筈候間、同名之人ハ名替可申出候、

右之通表方江致通奉(達力)、御側方・御勝手方江者写を以可相達候、亥九月十七日、此面殿より宮之原甚五太夫を以御通達有之、

一亥九月廿六日、此面殿より仁礼仲右衛門を以 太守様・於綾様児ケ水為御湯治被遊御光儀筈候間、御滞在中山川之儀者不及申、右近外城之湯治ニ差越候儀可致遠慮旨被仰渡候、

一亥九月晦日、此面殿より宮之原甚五太夫を以、御發

駕并 御着城當日之御次第、式通之通向後被仰付候旨

被仰出候、御定式之時候間、時之申渡ニ不及候与云云、

〔十月十五日〕

一此面殿より嶋津登を以、首尾不宜御役被成御免并小普請被仰付候者共之内、遠慮之心茂無之、方之行廻り不入儀を申、御仕立之取沙汰仕様之候を利申候者共茂有之由候ニ付、段之被仰出候事、

一亥十二月廿三日、織部殿(桂久世)より、来年頭御規式御請不被

遊候、御首途以後月次御礼ハ御請被遊間敷候、家督継目初而之 御目見等有之候ハ、間之可被仰付候、御用者當中 被 聞召上候、急成儀ハ其後ニ茂可申上候旨被仰渡候、

一明和五年子正月十八日九ツ時 太守様以宿次 御奉書御鷹之靄御拜領御到来被遊候ニ付御頂戴、御次第書を以此面殿より正月十五日被仰渡候、

一同子正月廿四日、織部殿より、御家老菱刈藤馬殿、大御目付新納波門(入徳)・喜入主馬・嶋津大進江、大御目座江(附脱)當年御留守中御勝手方江一人ツ、月番練廻し相勤、御用筋ハ藤馬殿江申談致首尾候様被仰付候、御通達有之、

一同子二月六日四ツ時 太守様被遊御發駕候ニ付御次第

242の6

書、

一同二月八日、大御目付衆より、旅立候跡祝として吳様之支度ニ而踊なといたし、方々小路致徘徊之間得有之不可然候、疱瘡踊ニ付而も毎度被仰渡趣有之候付、此節屹与被仰渡儀ニ而ハ無之候得共、右躰之儀無之様ニ可相心得候、

一子三月廿七日、織部殿より、御所帯向至而御差迫付、當年より先^(七脱)ケ年 公邊御勤事之外江戸御國許共萬端御

事^(八替)を被差欠、一涯稠敷御儉約被仰付候、依之椀山左京・菱刈藤馬江御用係被仰付、細密吟味、取分其詮相立候方可致出精旨被仰付候、御通達有之、

一子三月廿八日、藤馬殿より川上弥五太夫御取次を以、

與頭・御番頭、江戸・京・大坂御留守居、御守殿添御用達・御記録奉行・長崎御附人・中通御目付・御目付・糺明奉行・御右筆・御守殿御鎖口添番・納殿・宗門改方・御茶道頭・唐船方請込・寺社方取次・御側御小姓・表御小姓、
右者、御所帯向至而御差迫ニ付、當年より先七ヶ年

242の7

公邊御勤事之外万端御事を被差欠、御召物等茂袖・木綿類をも被為 召、都而之御用品位被引下、稠敷御儉約被仰付候間、御奥向其外夫ニ可被準候、右ニ付而ハ早速より取付、此節之儀ハ取分ケ細密遂吟味、往々詮立候筋可致出精旨被 仰出候付、七ヶ年内都而每物輕被仰付、依品差止可被仰付事茂可有之候間、同役中委ク遂吟味可申出候、去ル辰年御儉約しらへ之節之通此節ハ御座被相立ニ者不及、面々於御役場可申談候、尤支配違之儀ニ而も、存寄候趣ハ心底を不殘可申出候、御用係之儀ハ別立而被仰渡候得共、猶又随分情^(精力)を出御出方有之、先々御續方相直候様專致吟味、無延引追々可申出候旨被仰渡、川上^(親敷)大六致承知候、

一御所帯向至而御差迫ニ付、當年より先七ヶ年公邊御勤事之外万端御事を被差欠、御召物等茂袖・木綿類を茂被為 召、都而之御用品位被引下、稠敷御儉約被仰付候旨、御奥向其外夫ニ可被準候、右ニ付而者早速より取付、此節之儀ハ取分細密遂吟味、往々詮立候筋^(精力)ニ一涯可致出情旨被仰出候、

右通御身廻り之儀さへ御不如意ニ而被為濟候而者、諸士者勿論末々迄右之趣奉承知、引替每物質朴ニ可取計候、近年ハ諸人為及困窮時節ニ者候得共、無是非出来・出銀を茂為被仰付置事候得者、人々兼而右之心得を以可相計筈ニ者候得共、世并ニて每物結構之方ニ成行候儀茂有之、如何之事候、此節分而被仰出候付而者難有奉存、猶又諸事令省略、無益之物入一切不致、自分格式よりも万事を引下取計、衣服等之儀ニ付而ハ被仰渡置趣も有之候得共、屹立候勤場ニ而茂綿服籠服可相用候、尤妻子以下家来下人内女下女等ニ至御法度之品不相用様堅可申付候、右ニ付而ハ、染屋江者格式違之衣服等不染調様稠敷可申渡候、惣而無故參會事、何欵折目ニ付而者音信・贈答・餞別等之儀、分而申渡有之候通堅致無用ニ、吉凶等ニ付無據參會等不致候而不叶節ハ一汁一菜相用、諸事右ニ準シ可致作略候、御儉約ニ付而者段々しらへ方をも被仰付事候付、追々被仰渡趣茂可有之事候条、夫々支配下江者向々より不洩様右之趣申渡、此涯早速より每物引替儉約を相用、屹其詮相立候様可致候、

右之通被 仰出候条、奉承知堅固可相守旨表方江致通達、御側方江者写を以可相達候、

右、明和五年戊子四月十四日、(桂久中)織部殿・(斐川實途)藤馬殿より宮之原甚五大夫御取次を以被仰渡候、

一同子三月廿九日 太守様御參府、四月十三日、上使松平右京大夫様芝御屋敷江御出、被蒙 御懇之上意、同十五日御登城、

242の8

○御所帶向別而御差迫ニ付、當年より先七ヶ年稠敷御儉約被仰付、左之通被仰出候、

一 御常調御膳一汁二三菜差上上来候得共、一汁一菜ニ而差上、何ぞ御到来物等有之節者見合相重差上候様、先達而被仰付置候間、年頭其外屹立候節之儀者相調可申上候、

一 撰米被 召上来候得共、以来者撰米茂被 召上間敷候、御輿之儀茂同前被仰付候、

一 當分御箸之儀少事ながら御費ニ候間、以来者塗御箸相

調、以後共相損候迄ハ其御箸を以可差上候、何そニ付
白木御箸差上候砌、随分籠相之御箸可差上候、

但白木御箸位之儀者致吟味可申出候、御客之節逆茂

當分より位劣ニ而宜筭候間、御成合御相應可致吟

味候、

一御常調御肴御野菜類茂御餘計ニ不取入、其外御末廻随
分御費無之様可仕候、

一於伏見・大坂何そ御買入物茂候ハ、申談無費様ニ可

仕候、御道中御用御菓子等も御當用不差支迄ニ致用意、

御酒杯猶以不被 召上事候間、御餘計曾而無用候、

惣而御取入物減少候様折角可氣を付候、

一毎日御菓子取入置ニ不及候、 召上候節計可取入候、

一江戸・御國元・御旅中共酒杯御次江被下候事、毎日規

模之様差出不及候、 御沙汰之節計与可相心得候、其

節茂於 御前可被下候、屹御祝酒事等ニ被下候節ハ格

別、平生御近習番ニ而御酒被下候儀無用可仕候、

一於江戸御客之節、御馳走之次第ハ有来通可有之候、乍

然此跡ニ汁六菜之御料理者ニ汁五菜、二汁五菜者ニ汁

三菜杯与いたし、御菓子・御吸物・御取肴等も数多為

差上事候得共、都而上り物物数減シ、組合之品ニも細

ニ氣を付、物每少々ツ、者相減、品位相劣候筋之心得

ニて可仕候、いつれ御成合御相應ニさへ有之候得者宜

筭候間、當分迄之様無之候而も相濟賦候、夫共御客之

依趣御程合可有之事候条、時々勘弁可仕候、

一右同断之節、差而御入ニも不成、不目立所高直成物杯

取合候儀も可有之事候、專御納戸奉行引受、左様成所

ニも氣を付、支配下江得与申合、御包丁人頭始御末廻

り之者共、ケ様御差迫り被遊、御不自由之事を奉承知

候ハ、只今迄も其心得之筭ニ者候得共、弥以何欵与

無御費様ニ心懸、少事逆茂可氣を付事ニ候、左候へ者

格別御物入薄キ方ニも可相成儀ニ候、

一御掛合御菓子等迄茂當分之様無之候而茂可相濟候、御

并様方御見廻被遊御覽候処ニ、脇々ニ而者 此御方様

之様ニ者無之籠相之方ニ候間、吟味可仕候、

右十ヶ条御納戸奉行江申渡、其外可承御役々江可申

渡候、

一御召物御内輪ニ而者紬・木綿類をも被為 召候間、其

考を以御用意可仕候、其外夫ニ準シ、夏之御召物御上

下等御夜物ニ至、芭蕉上布類其外御藏御在合之品專見合、無御費樣可仕候、惣而右之心得にて可致吟味候、

御公界向ハ可為有來通候、乍然是茂當分迄之樣無之候而茂相濟儀茂可有之事候、御成合御相應ニさへ有之候得者相濟賦ニ候間、其程合致吟味、少々ツ、ニ而も御物入薄キ方ニ可相心得候、左候而、随分御あり付又者何ぞ難被為 召相成候節、御下りニ可仕候、可成程者被為 召候樣ニ可相心得候、右通御下りニ相成候節屯置、拜領ニも可被仰付候、差而御古ヒ茂無之候を早く拜領などにいたし候事無用可仕候、

一御足袋 御公界・御不断与二通り位を分ケ差上事候得共、向後ハ當分御不断 召を御公界ニも差上、二通り之用意無用可仕候、毎々取替差上候ニ茂不及候、古ヒ候迄可差上候、

一御下帶も毎々取替候ニ不及候間、見合取替可差上候、其外右ニ準シ、随分無御費樣可氣を付候、

右三ヶ條御小納戸役江申渡、其外可承御役々江可申渡候、

一御公界 御召物地合中位被仰付候、御不断新敷御白む

くに者不被為 召候、御公界召を段々之追送ニ被遊候へハ御費無之筈候、夏 御召物之儀も右ニ可準備、當分迄者 御召物過分ニ調方も有之候得共、以來者半減、

又者其内ニ而も可成程相濟候樣ニ致吟味可申上候、

一御手拭・御扇子・御鼻紙等茂當分御用被遊候よりハ位劣候而茂不苦候間、程合致吟味可申上候、

一御ゆかた白地計ニ而候得共、以後者御勝手筋ニ候ハ、染地ニ而も取更^(交カ)差上、尤當分より地合劣候筋ニ吟味可仕候、

一細上布類注文ニ而琉球江申越候儀者無用被仰付候、出來合之内より可差上候、

一御召物京都調被仰付來候得共、江戸呉服所ニ而御勝手之品者江戸調可被仰付候、尤御勝手筋ニ而京都調之品も候ハ、當分より位劣被仰付候、是又致吟味可申上候、

一御到來之諸反物其外不依何色御到來物有之節者、夫にて可被相濟候間、見合可差上候、

一御納戸并御小納戸御先荷・御跡荷ニ遣候御荷物、江戸・御國元共置付候而茂不損品者置付可仕候、御當用計持

越候様可仕候、

右七ヶ条御納戸奉行・御小納戸役江申渡、其外可承
御役々江可申渡候、

一表方諸御荷物等も右之通相心得、少ニ而も減少候様可
致吟味候、

一御旅中為御用諸御野菜・干物類杯御國元より過分不及
持越、御船繫之於諸所も御買入ニ而御勝手之品茂可有
之事候、人夫等之費をも計、右之心得にて可致吟味候、

右二ヶ条可承御役々江可申渡候、

一御不断之御手拭無間茂取替候ニ不及候、少々取落候而
も水ニ而清メ候得者相濟事候、其外差而穢敷茂無之品
者右ニ準可相心得候、

一刻御多葉粉双方之切はし多ク中計差上事候得共、不及
其儀候、末々ニ而用候多葉粉同前相心得、切はし多ク
費ニ不成様ニ可仕候、

一御多葉粉・御茶其外取入物之節、沢山ニ取入間敷候、
御用分迄を取入、無之候而茂相濟程之物者兎哉角ニ而
御用相弁候様可心懸候、

但江戸・御國元・御旅中共ニ其心得可仕候、

一御煎茶茂時々煎替差上ニ不及候、あた、め替、又者二
番せんし迄も可差上候、其外右ニ準シ御費無之様ニ相
心得、於伏見・大坂御多葉粉又者何ぞ御買物等有之候
節ハ、可成程可氣を付候、

一御道中御茶道方御道具、御昼休ニ茂繰越ニ而差越候得
共、以来者、泊計繰越ニ而、御休江ハ御茶弁當にて可
被濟候、御手水等茂御小休之通相心得候様ニ可仕候、

一御在府・御在國并御旅中迎茂御燈方相減候様ニ可仕候、
毎夜 御前御燈臺御平生ハ式ツ可差上候、御手燭壺ツ
當分迄ハ御燈臺同前ニ燈置候得共、是ハ 御立行之節
御用ニ而候間、不燈候而御近邊江差置、御用之節計時
々燈、直ニ消候様被仰付候、何ぞ付御燈臺多人候節茂
此跡之様ニ出ス間敷候、可成程可相減候、御近習番所
者猶以之事候間、手燭壺ツ置、御用之節計時々相燈、
直ニ可消置候、

一御行燈茂右ニ可準候、方々之御座・御廊下杯當分ハ無
不足様相見得候間、吟味之上減少可仕候、依御座御行
燈無之候而相濟所茂可有之候、御廊下も相減宜所も可
有之候、いつれ 御通筋御廊下杯も明り之續候而不締
(不脱カ)

ニさへ無之候得者相濟事候、又霄之内燈置候而油次足
ニ不及、御夜詰引ク候節消候而宜場所も可有之候、左
様成事共委敷可致吟味候、

右七ヶ条御茶道頭江申渡、其外可承御役々江可申渡
候、

右之通被 仰付候、御費無之様ニ与之儀者、先年以来
度々 御沙汰茂有之事候得共、如何相心得候哉、兎角
其通無之候、左様不最通事ニ而ハ別而如何之旨御沙汰
ニ候、此節之儀者屹詮相立候様随分遂吟味、依事ハ時
々御側御用人・御近習役江茂可申談候、其外右七ヶ条
ニ準、無御費様可致吟味候、就中於伏見・大坂御買入
物等、跡々 御上下之節より格別相減候筋仕候様可申
渡旨被 仰出候、

但右之通被 仰出候儀、御側御用人・御近習役ニも
(奉カ)可承知万端申談、無御費様氣を付、御側廻江茂存

寄時々不差置申聞候様可申渡旨、是又被 仰出候、

明和五子四月

右之通被 仰出、於江戸申渡相濟候段申来候旨、御減(間カ)

方致吟味申出候様御納戸奉行・御小納戸役・御茶道頭
江申渡、其外可承御役々江可申渡候、

明和五子五月廿二日
(權山)左京久智

(菱刈)藤馬實詮

右、村橋左膳御取次を以被仰渡候事、

写

一此節御儉約ニ付、當年より七ヶ年内、年頭其外年中御
規式之儀、延享五辰年已来被減置候通被仰付候条、少
事辻茂無費様相心得、椀飯御飾其外御規式ニ付被用來
候品々内、差當難調類者至其節似寄候品替を以被相濟
筈候間、品相替候節者時々可得差圖候、右通被仰付儀
ニ者候へ共、猶又氣を付、存寄候儀共都而向々より御
儉約御用係方江可得差圖候、此旨可承面々江可申渡候、
子八月
(小松清香)帶刀

(河野通古)外記

右通達志通、子八月廿四日、宮之原甚五太夫御取次を
以致承知候事、

写

今度稠敷御儉約付、先達而被 仰出候御書付之内、万端御事を被差欠与申件ニ而人々取違、何之格式茂無構御出方ニさへ成候得者宜事与而已自然心得違候而者、

おのつから心底茂邪ニ相成、若酖利欲、風俗を茂取乱候様成立候而者、甚 思召ニ不相叶候、此節之儀第一

驕費等無之様(⑩と)ニ者被 思召儀ニ候得者、每物随分作略

可有之事候得共、格式有之儀者可成程不取放様致吟味、

又者末々可及困窮儀共ニ専心付、其上ニ而何篇致減少、

兎角風儀宜筋之御儉約ニ被 仰付候、

右之通被 仰出候条、右之心得を以、取違無之様猶

細蜜ニ遂吟味候様御役人限可申渡候、

▽⑩明和五年子△八月

(榊山入智)
左京
(斐利實途)
藤馬

(本文書ハ「旧記雜録追録六」五三二号文書ト同一文書ナルベシ)

右御書付、左京殿・藤馬殿口達ニ而被仰渡筈候得共、

事長候故書付を以被仰渡候段、島津登御取次ニ而致承

知、御役人限恠人ツ、罷出、於表御用人座致承知候事、

子八月廿四日

写

一年頭熨目七日迄、十一日・十五日致着用来候得共、納

殿役人以上并寄合并以上三日迄着用、御規式等可相勤

候人者有来通、御普請奉行以下不及熨目、

一筆者・小役人年頭三ヶ日上下、四日より袴計、十一日

御祝頂戴仕候者迄上下着用、其外五節句御祝儀等申上

候節上下可致着用候、大番人も右同断、

一 小番人年頭三ヶ日麻上下、四日より支度有来通、

一 御謡初ニ付而ハ御能方人数者有来通、

一 御拜領物御到来、又ハ他所より御使者等之節ハ、支度

等之儀時々申渡可有之候、

一 御名代勤之人ハ有来通之衣服被仰付、相詰之面々者不

及熨斗目、

一家督継目初而之 御目見、又者御役・地頭職之御礼御

太刀進上ニ而申上候人者支度有来通、奏者番之儀者半

上下被仰付候、

一 進物番・御供番相勤候者麻上下着用、都而飾服可相用

候、

一出火之節御供先其外火事羽織不致着候而茂不苦、先年申渡有之通、

右之通、當年より七ヶ年を限被仰付候条、不洩様可

申渡候、

八月

(禪山久曾)
左京
(麥刈實詮)
藤馬

写

年頭

一若黨六七人之間、上下三日迄、

但右之内先供三人被列候儀者御一門計、右外先供無用、

(右腕カ)
万以下大身分獨礼之儀者若黨五六人之間、

一對挾箱

一長柄

一手鍬

一乘馬

一沓籠

一合羽籠

五節句并平日

一若黨四五人之間、但万石以下大身分獨礼之外者三四人勝手次第、

一片挾箱

一手鍬

一長柄

但天氣相ニ付而者勝手次第、

一乘馬 勝手次第、

一沓籠 右同斷、

一合羽籠

但天氣相ニ付而者勝手次第、

右、御一門・大身分其身獨礼万石以上、

年頭

一若黨四五人之間勝手次第、

一片挾箱

一長柄

但天氣相ニ付而者勝手次第、

一手鍬

一乘馬 勝手次第、

一沓籠 右同断、

一合羽籠 但天氣相ニ付而者勝手次第、

五節句并平日

一若黨三四人之間 勝手次第、

一片挾箱

但平日持せ候ニ不及、五節句計持せ候儀勝手次第、

一手鍵

一長柄

但天氣相ニ付而者勝手次第、

一合羽籠

但右同断、

右、御家老供廻、

年頭

一若黨四人

一片挾箱

一長柄

但天氣ニ付而ハ勝手次第、

一手鍵

一乘馬 勝手次第、

一沓籠 右同断、

一合羽籠

但天氣相ニ付而者勝手次第、

五節句并平日

一若黨両三人 勝手次第、

一片挾箱

但平日持せ候ニ不及、五節句計持せ候儀勝手次第、

一長柄

但天氣相ニ付而者勝手次第、

一手鍵

一雨具 天氣相ニ付而者勝手次第、

右、若御年寄・大御目付、

年頭

一若黨両三人 勝手次第、

一片挾箱

但勝手次第、

一長柄

但天氣相ニ付而ハ勝手次第、

一手鍵

一 乘馬 勝手次第、

一 雨具 天氣相ニ付而ハ勝手次第、

五節句并平日

一 若黨耆兩人 勝手次第、

一手鍵

一 天氣相ニ付而ハ雨具等勝手次第、

右、寺社奉行より寄合迄、

年頭

一 若黨耆兩人 勝手次第、

一手鍵

一 雨具天氣相ニ付而者勝手次第、

五節句并平日

一 若黨耆人

一手鍵

雨具同断、

右、御用人より御近習役寄合并迄、

年頭

一 若黨耆人

一手鍵

雨具天氣相ニ付而者勝手次第、

五節句并平日

一 不及手鍵

但物頭之儀者當番之節計鍵為持、又者何そ依勤方屹いた

し候節者有來通、其外御役ニ平日致無用、本^{石カ}棟之節者

惣而有來通、

右、御留守居より納殿役人迄、

年頭

一 若黨耆人 勝手次第、

右、六人賦以上御役人、

但六人賦以下御役人之儀者召列候儀致無用、草履取迄可

召列候、平日之儀者草履取召列候儀 蔑勝手次第、

右之通、當年より七ヶ年を限被仰付候、妻女供之儀も

可右準候、

右之致通達、御側方江者写を以可相達候、

子八月

(榊山久智)
左京
(菱刈實詮)
藤馬

右御通達、子八月廿八日、宮之原甚五太夫御取次を以

致承知候事、

写

一 高橋此面種壽、右者勤方ニ付而御心ニ不被遊 御叶
 思召有之、御役御免被仰付候旨、子七月廿五日、桂織
 部久中殿より宮之原甚五太夫御取次を以被仰渡候、
 一 御城下より五里内ニ而鉄炮猥ニ打候事、惣而於御留場
 狩認等之儀違犯之者ハ無之筈候得共、自分持留地杯ニ
 而兎狩・犬山等いたし候儀者不苦様ニ自然取違之者も
 候而者不可然候条、右牀之儀とも無之様ニ、左京殿よ
 り矢柄御取次を以被仰渡候事、

写

家督之者ニ而も依願妻子召列嫡家・本家継目養子等ニ
 相成、其身家跡者二男三男之内江願申出候節、跡々願
 書之認様不相并候条、向後者家跡相續与願出候様可被
 相心得候旨、丑三月十一日、(島津久金)左中殿より川田彦七御取
 次を以被仰渡候事、

一 小松帶刀(清巻)、當分御家老少人数候間、御供御家老着迄之
 内、表御家老月番方於御役座之御用相勤候様被仰付、

242の13

都而御家老名前ニ而可致首尾旨被仰付候旨、三月廿九
 日、左中久金より嶋津矢柄御取次を以被仰渡候、

一 遠國百姓共願を會所々ニ而寄合、手段を企廻状杯を出
 し、外村々之者共も趣意者不弁して不得止事罷出、大
 勢集、村役人之居宅又者遺恨ニ存候物共之家作并諸道
 具を打損シ、吟味相成候上ニて数ヶ條之願を申立候類
 も有之候得共、公義を憚領主々ニ而申宥、穩便(御取)ニ所
 鎮候儀を專要にいたし候故、百姓共かさつニ相成、及
 狼藉不法之儀共有之候、百姓を憐ミ候儀者勿論之事ニ
 候得共、右牀徒黨を結強訴を企、及狼藉者共を手弱取
 扱ひ候而者、外場所ニ而も見習候様ニ可成行哉、已來
 御料所之百姓とも騒立候ハ、最寄之領主よりも人数
 を出し、私領ニて騒立候ハ、其領主又者最寄之領主
 よりも人数を出し手強打散シ、手ニ當候ものともハ擲
 捕、願之趣理非之不及沙汰取上不申、他所之引合有之
 ハ▽(御領)差出△一頓限ニ候ハ、其領主ニ而遂吟味、仕置
 之儀可被相伺候、万石已下之知行所騒立候節も同様ニ
 可被相心得候、以上、

▽⑩明和六年△丑二月

(本文書ハ「旧記雜錄追録六」五五六の3号文書ト同一文書ナルベシ)

右之通、万石以上之面々江可被相觸、万石以下ニ而も知行所百姓騒立候ハ、右ニ準シ最寄之領主江早々遂吟味、申合可取計旨可被相觸候、

右之趣從 公義被仰渡候条、此段可被承置旨地頭・領主并御役人限通達いたし、御側方・御勝手方江者写を以可相達候、
(高津)
左中久金

明和六年丑四月朔日、赤松甚右衛門御取次ニ而致承知候事、

四月

一写、先月廿七日 太守様江從 公方様上使阿部伊豫守様正を以御國元江之御暇御給、御先格之通被遊御拜領物、從 大納言基様茂以上使板倉佐渡勝様を以從御本丸御暇御給ニ付御先格之通被遊 御拜領物、同廿八日、御暇之為御礼被遊 御登城、御黒書院江 公方様出御、御懇之被蒙 上意、御馬被遊御拜領候段、丑五月廿六

日、御通達有之、

一 丑五月十七日御通達ニ、五月四日御首途、同月廿七日御通達ニ、五月二日御發駕御日賦被仰出候、

一写、當年 御下國御暇被遊御給候得共、御痛所被遊御座、暑中之御旅行被遊御難儀候付、此節者八月比迄御滯府之御願被仰出度、御内ニ被 思召上候旨被 仰出候段、五月廿七日、左中殿より嶋津矢柄御取次を以被仰渡候、

一写、 太守様御事御積氣其上痔疾之御痛被遊御座、長途之御旅行難被遊候付、暫被遊御保養、御快被遊御座候ハ、早速可被遊 御發駕旨、五月廿一日、御用番様江御届被仰出候旨御到来之段、六月十八日、(高津久健)仲殿より二階堂源太夫御取次を以御通達有之、

一写、 太守様御痛所被遊御座、暑中之御旅行御難儀ニ付、當秋中まで 御滞在ニ而御養生、御快然被遊候ハ、早速可被遊 御發駕旨、御願之通被 仰出候段御到来候、此旨月次御礼罷出候面々并與中、御當地之諸寺院在番之琉球人承知仕候様ニ、丑七月廿三日、仲殿より赤松甚右衛門御取次を以御通達有之、

242の14

一 八月廿五日江戸御發駕之筈ニ御日限被相定候旨、丑七月廿六日、仲殿より嶋津矢柄御取次を以御通達有之、

一 私領薩摩・大隅・日向國之内、當八月朔日、大風大波付損失之覺、

一 高拾四万六千五百四拾五石餘

内拾四万六千五百拾五石餘 當損

三拾石餘 永損

一 潰家壹万四百八拾五軒

一堂四字

一流家四拾貳軒

一 堤千六百五拾間

一 井手貳百七拾六ヶ所

一 道壹万五千四百五拾四間

一 船大小貳百拾七艘

一 死人拾貳人

内男拾人

女貳人

一 死馬拾壹疋

242の15

一 死牛壹疋

右之通御座候付、御届申上候、以上、

月 日

御名

御着城其外何そニ付御國元被差立候御禮使羽織袴致着用
来候得共、向後野袴着用ニ付罷出、勿論道中筋并江戸着當日迄も同様相心得候様被 仰出候、且又御上下之節御供之面々野袴着用之儀ニ付而ハ、去戌年被 仰出置候、

一 間之交代ニ而致上下候面々、御國本・江戸出立之當日并江戸・京・大坂江着、京・大坂出立之當日又ハ御國元江着當日茂野袴可致着候、都而他國江出候者右同断野袴可致着候、併長崎御附人など之儀者脇之致方ニ可準候、将又 御上下節徒ニ而御供之面々股引・脚半着用之儀者、去々被^(年脱カ) 仰在置候、足輕・御中間・御駕籠^(出力) 之もの等、向後夏冬共脚半相用候様被 仰付候、

右之通被 仰出候段江戸より申来候間、此旨表方江致通達、御側方・御勝手方江者写を以可相達候、

老中^(左カ)

丑八月十五日、嶋津矢柄殿より 被仰渡候事、

一 太守様先月廿五日江戸被遊 御發駕候旨、九月十七日、
左京久智より御通達、

一 丑八月廿六日、江戸大風雨、今晚 御前様御流産、夫

より御病氣被遊御座候、九月廿三日江戸被差立候飛脚

十月八日昼四ツ過下着、八ツ前二階堂源太夫より御記

録奉行御用之由申來、本田文藏召出候處ニ、御用之儀

有之御家老衆を初被成長詰候間、何分与被仰渡迄間者

八ッ打候而茂御座退出不仕候様ニ被仰渡候、左候而、

七ッ時分退出觸有之、當座皆々退出候、左候而、九月

廿六日 御前様被遊御逝去候旨御到來候間、御本丸江

罷出、 太守様可奉伺 御機嫌旨、十月十九日被仰渡

候、

一 太守様播州坂越より御乗船、十月朔日、大里江御着船、

同十三日、出水江御着、御禮使義岡左平久賢太去ル九日御

當地被差立、前以彼地江罷越居居、其日被差立候、左

候而、同十四日、阿久根江御止宿、同十五日、向田江

御止宿、同十六日、苗代川江御止宿、同十七日暁天苗

代御立、同日四ツ時半過ニ御着城、同席中之外中通人

數惣而籠之間江詰居、 御通掛之御目見仕、御近習番

江罷出、同席中一同ニ村上桂馬江相附御祝儀申上候、

左候而、御側方人数御祝儀帳ニ相付致退出候、

一 九月十三日菱刈藤馬実詮於江戸死去之段到來、九月廿

九日より十月二日迄日数三日、鳴物・遊興ヶ間敷儀、

心入を以可致遠慮旨被仰渡候、

一 嶋津仲殿事島津備前殿 御名代ニ而當年江戸御留主詰

被 仰付、小倉筋被差越候間、早々相仕廻罷立候様被

仰付候、左候而、中急ニ而中途少人ニ而被差越咎候旨、

丑十月朔日被仰渡、九日、御當地被差立候、

一 丑十月十五日 太守様御座之間江御出座、與頭・御番

頭江 御直ニ御意有之、

242の16

一 弓鉄炮稽古ニ賭勝負を企候儀共有之由被 聞召上、甚

以如何之儀ニ候、右通ニ而者稽古之本意を背、自然与

風俗 不宜方ニ成行不可然事候条、向後賭勝負無用可

仕候、勿論稽古方之儀ハ専心懸致出精、実儀を不取

失様被 思召上候、

右之通、御家老・若御年寄・大御目附被 召出、

御賢慮を以 御直ニ難有為被 仰出御事候間、謹而

奉承知、屹相守、弓鉄炮賭勝負一切不仕、於稽古方

無油断可致出精候、其外右式之儀無之様かたく可相

嗜候、

十月

(島津久金(權山久智)川田國福)
左中 左京 伊織

(本文書ハ「旧記雜録追録六」五九七号文書ト同一文書ナルベシ)

右 仰出忝通、丑十月廿八日、月次御機嫌伺相濟候以

後、表御用人座江罷出、奉拜見候事、

一十一月朔日、小松帶刀殿事、表御家老月番方於御役座

之御用都而御家老名前ニ而、来月中此内之通承候様ニ

被仰付候事、

一丑十一月十二日、御上下之節大里 御乗船并御船卸

之節、兼而袴・野褙致着用候者、都而野褙可致着用候、

其外之所者去ル戌年被仰出置候通可相心得旨、左中殿

より被仰渡候事、

一丑十二月廿七日 御首途、寅正月廿七日 御發駕可被

遊旨、十一月廿二日、左中殿より被仰渡候事、

一御家老喜入主馬殿(久福) 御直御役被 仰付、加判同役同前、

座席桂織部殿次、小松帶刀殿頭被 仰付、御役料高千

石被下候、御家老小松帶刀殿右同前被 仰付、喜入

主馬殿次、川田伊織殿頭被 仰付、御役料高千石被下

候、若御年寄 新納波門(久徳) 御直ニ被仰付、座席河野外(通)

記上ニ被 仰付、御役料高三百石被下候、大御目附御

役料高式百石山岡齋宮被仰付、座席嶋津大進次被仰付

候、右四人十二月朔日被仰付候旨、左京殿より被仰渡

候事、

一大御目付御役料高三百石島津矢柄被仰付、座席島津大

進上ニ被仰付候旨、十二月十八日、左中殿より被仰渡

候事、

一嶋津矢柄、来卯年江戸御留守詰被仰付候、公義江相

係候御役名若年寄格与唱被仰付候旨、明和七年寅正月

廿三日、小松帶刀殿より被仰渡候事、

一與中之者共行跡不相直候付、當在國ニも段々申渡趣茂

有之候得者、其詮も可相立之處、却而頃日者度々致喧

247の17

嘩候者も有之由相聞得、不可然候、喧嘩口論禁制之儀者、公義御法令ニ茂相見得、且亦短慮之働いたし理不尽ニ事を破候もの者、加成敗所帯を可沒取旨、毎朔之條目載置候、左候へ者、親兄弟共より兼而きひしく可申付之處、若氣之いたりニ而誠ニ無益ニ死傷いたし候者及數多、甚不便候、早竟若輩之者故、傍輩を打果、切腹さへいたし候へは事相濟与心得候所より輕々敷及喧嘩事候、第一者國恩を以蒙生育候へは、専忠勤を心懸、第二者父母之受大恩人となり候へ者、夫々孝養を以可相報事候、左候得者、自分之身ニ而我儘ニ働候儀曾而不罷成筋候、ケ様之分を不弁致喧嘩候者者委遂吟味、無礼法外を働喧嘩之張本ニ為相決者者、誠不忠不孝之罪人と可申条、其身者凡下ニ申付、相果候死躰可為取捨候、親兄弟共之儀、茂吟味之上、大形之依輕重吃与咎目申付、其外高下之無差別右ニ準取計、依事者所帯をも可沒取候、^⑨末々之者を打果候といふ共、依理不尽之訳者應右吟味之上、是又屹与咎目可申付候、^⑩此上申渡候上、無礼法外之事共申懸、其偏ニ難差置事候^通とも、成りたけ其場を致堪忍、則筋々ニ可遂言上候、

左候ハ、彼者江者相當之咎目申付、尤神妙ニ取計候者江者屹与褒美可申付候、

右之通領國中江屹与申渡、其外締ニ茂可成細々之儀共者家老中申談可取計候、

寅正月廿四日

〔本文書ハ、「田記雜錄追録六」六四三号文書ト同一文書ナルベシ〕

〔右御書付於式舞臺御右筆平瀬治右衛門讀之、御家老以下諸御役人列座奉拜聞候事〕

242の18

一嶋津杵殿、去ル朔日、於出水御飯屋、御直ニ、當御留^{（守）}中御家老座江勝手次第被相勤、見聞有之候様被、仰付^{（脱力）}

候、今度讒^{（織力）}之御在國中ながら段々被、仰出趣も有之、万端御心を被為、勞御事候、御留守也も緩せ之儀者無之筈候へ共、重立候御用筋等御家老中より致相談候様被仰付候、

右之通被、仰付候間、表方江致通奉^{（達力）}、御側方・御

勝手方江者写を以可相奉候、^{（達力）}

二月六日 ^{（小松清香）} 帯刀

242の19

一寅二月廿一日、於江府 御名代桂織部殿ニ而、嶋津仲(入世)殿(魁)江來卯年江戸御留守詰被仰付候旨、三月廿日、御通(達力)奉有之、

一於綾様御事 太守様御再縁之御願書、三月廿七日御用(重豪後室)番様江被差出候由申來候旨、四月十九日、帶刀殿より御通達有之、

一寅正月廿七日 太守様鹿兒嶋御發駕、九州路御通路、大里より船、坂越より陸路、大坂・伏見・美濃路・東海道御通駅、三月晦日、(マ)來ル十五日四ツ時 御本丸江罷出御祝儀有之、

一卯五月廿三日、帶刀殿より谷山角太夫御取次を以、左之通被仰渡候、

写

実子を他家江養子ニ遣置、実父相果本家帰、且叔父より甥之跡職願申出候節、路(跡カ)々繼目養子与申出候得共、向後者跡相續与願出候様可被相心得候、

右之通與頭江申渡、帳面等茂其通可被調旨可承面々江可申渡候、

242の21

○家治公御筆 御畫左太公望二幅對右傳説 但御表具無之、

右、四月廿八日、一ツ橋御屋敷迄御老女松嶋様御持下りニ而、太守様江ハ拜領之段民部卿様より御取傳被成候様ニとの御事ニ而、翌廿九日、田沼能登守殿を以

242の20

五月 (小松清香) 帶刀

○卯六月八日帶刀殿より、信解院様今日 御逝去被遊、同十日夜、御遺躰御入棺、明後十二日、壽國寺御入寺、來ル十四日夜、御葬送之筈候旨被仰渡候事、

○卯六月九日、信解院様御法名 信解院殿方廣淨玄大禪尼

○御前様并御女子様方以來御紋所十文字其外御替紋桐牡丹御用被成、御二男様よりハ桐牡丹御紋所御用被成候様、御家老中承知可仕旨被 仰出候、

右之通可承面々江可致通達候、(小松清香) 帶刀 六月十六日

被進候付被遊御頂戴、五月廿一日、御披御祝迄首尾克被為濟候段御到来候、

右之通、御役人限可致通達候、

六月十六日

(小松御番)
帶刀

○卯六月廿日主馬殿(喜入久福)より、太守様先月廿八日江戸被遊

御發駕、八月十八日御着城、御家老椀山左京殿(久智)、大御

目附格二階堂(行旦)・赤松造酒(則正)、御側御用人嶋津登御供ニ

而候、

但十八日朝六時、苗代川御立、横井御休ニ而、九ツ

時過御着城之事、

○御近習役所之儀者格別之御用向取扱御役所ニ候条、江戸・御國元共右御役所敷居より内江者不罷通、御家老伺御機嫌申上、其外御用筋相達候節茂敷居外より申聞候坎、又ハ何そニ付而者御役所より呼出申達候筋相心得罷在、中通之面々右準候様被 仰出候段、御中途より申来候条、此旨中通之面々江不洩様可致通達候、

右卯八月七日、左中殿(島津久金)より被仰渡候事、

○卯八月廿一日左中殿より、嶋津左殿、右去々年御留守中御家老座江勝手次第被相勤、見聞有之候様被 仰出候、今度御下國被遊候へ共、只今之通一往被相勤候様被仰付候旨被仰渡候事、

○卯八月廿四日左中殿より、赤松造酒事(重家女)於敬様来春御出府ニ付御供被 仰付旨被仰渡候事、

○卯八月廿四日左中殿より、於敬様御名御順之儀、嶺松院(兼豊側室重家生母)被御次ニ而、此被之字被成御用候様被仰出置候

得共、已来者真(院脱カ)含御次ニ而、此御之字御用候様被

仰出候旨被仰渡候事、(菊姫、兼豊女)

○卯八月廿八日左京殿より、山岡齋宮殿(久遠)今日 御直ニ御家老被仰付、加判同役同前、座席川田伊織殿(国福)次被仰付、御役料高千石被下置候、左候而、御側方御用承、表月番之儀茂繰廻相勤候様 御直ニ被仰付候、且又同日、嶋津左中殿・山岡齋宮殿今日 御直来年 御參勤御供被 仰付候旨、是又被仰渡候事、

○卯九月七日、正徳三年以来之御支流家譜集續之儀ニ付、

當卯七月十八日、岩下佐次右衛門御取次を以申出置候
処、卯九月七日、左中殿より同人御取次を以申出之通
被仰付候旨被仰渡候事、

○卯九月廿一日左中殿より、桂織部事病氣有之御役之御
断被申出、願之通御家老御役被成御免、未老年ニも不
及候間、致快氣候ハ、御見合を以可被召仕旨被仰渡候
事、

○卯十月十日左中殿より、御臺様御牌号 (徳川家治室) 心觀院様与
奉称候段御到来之旨被仰渡候事、

○卯九月廿八日、東郷次太夫 (實包)・郡山主右衛門兩人共、於
唐子之間齋宮殿より鳴津登御取次を以御記録方添役御
役替被仰付、御役料米三拾五俵ツ、被下置候旨被仰渡
候事、

○卯十一月十七日 太守様護摩所江被遊 (序力) 御参詣候席ニ
御厩内御記録所江御入、御座中御覽被遊候事、

○卯十一月十九日左中殿より、御近習役并御役之次第、
御使番之次ニ被仰付置候得共、向後御近習役之次被仰
付候旨被 仰出候事、

242の23

○御當國之風俗已前より致来と覚候哉、御役人輕重之差
別薄様有之、餘國之風義ニ▽◎相替△ 御氣毒ニ候、

御家老職なとハ随分相敬、重役よりハ權威にほこり候
儀ハ不可然候得共、重キ職分之立候程之會釈ハ可有之
儀ニ候、其以下右ニ可應候、縦ハ諸奉行之内、一二段
上之御役江轉役被仰付候ハ、先同役共早速より其涯
を立、諸事應勤(◎)いたし、無役之諸士ハ勿論之儀、且
御役替被仰付候人より茂則相當ニ可致事候処、差而其

廉無之様相見得候、公義御役人方御役柄輕重格別之
被成向、早竟 上様江對左様ニ社可有之事候、公義
御仕向之通ニハ參間敷候得共、御役格高下をわかち、
御役之順を以互に龔礼無之様屹可相嗜候、右ニ準諸士
以下末々迄茂身之程を存、士農工商之品明白ニ有之、
於途中末々之者士江行逢節茂、笠頭巾を拔、鍮をも為
持候程之人躰江者猶以相愼罷通候様、支配下諸家中・
寺社家・町人末々迄も頭人主人より屹可申付候、凡下
ハ事之辨薄筈候間、右之意趣頭立候者得与相心得、町
嚀ニ可為致得心候、兼々礼義惡敷處より身之つふれと
も成事到来、不便被 思召候、年来染込候風俗故、一

通申渡候分ニ而ハ詮も無之筈候、尤急ニハ不相直儀も可有之候得共、何分此節被 仰出候趣、已来右通連(⑩最)も如何ニ候条、被 仰出之候、

卯(⑩十一月)
十月

(本文書ハ「旧記雜録追録六」八一七号文書ト同一文書ナルベシ)

『右壺通、卯十一月十九日於敷舞臺被仰渡候』

御領國風俗之儀、段々被 仰出候趣御尤至極之御儀、謹而可奉承知候、礼義を相專候者人々肝要之事情処、早竟以前より其分チ大形相心得候所より自然与龜礼ニ有之、高下わかち薄方ニ相見得候付、今度 思召之御旨趣具被 仰出候御事、誠以難有儀ニ候間、随分其涯相立候様可相專(⑩寺)之候、其外諸士以下末々迄も承知可仕之處、被 仰出候通年来染込之風俗故、急ニ不相直筈候条、一通り申渡候分ニ而ハ詮も有之間敷候間、諸士ハ与頭於宅 仰出之儀拜聞仕せ、夫より小与頭申合、小与中ニて人柄見合を以尚又申合(⑩合)、就中年若成者共江

ハ為致得心候様可仕候、若不合点成者於有之ハ、幾度も致教訓、何分此節 仰出最通風俗宜成立候儀諸人可相勵候、末事ニ難辨年少之者江ハ、おのつから親兄弟又ハ親類共より可申聞事候、支配下諸家中・寺社家・町人末々ニ至、別而端々之者ハ尚又事之辨薄候付、頭人主人或頭取候者引受、右与中申渡之格ニ準シ、末(⑩老)〔より〕も致流通候筋向々ニ而遂吟味、都而得心いたし候様可取計候、誠ニ厚キ 思召を以為被 仰出御事、聊無忘却、難有被 仰付候詮相立、連々風俗克改候様可相嗜之候、

十一月 左中(島津久重)

左京(喜入久福) 主馬(川田國福)
帶刀(榊山久智) 伊織(小松清香) 齋宮(山岡久澄)

(本文書ハ「旧記雜録追録六」八一八号文書ト同一文書ナルベシ)

『右壺通、同日於御側御用人座被仰渡候事』

口達之覚

○御領國邊鄙之儀候得者、言語甚不宜、容貌も見苦敷躰候故、他所之見聞も如何敷、早竟御國之面目ニも相懸儀ニ付、於 御上茂御氣之毒ニ被 思召上候、急ニ上

方向程ニ者可難改候へ共、九州一統之風儀大概相并候

程之言語行跡ニ者可相成事候旨、兼々御沙汰之趣御家

老中奉承知、御尤至極奉存候、依之向後人々此旨を辨、

容躰・詞つかい等相嗜之、他國人へ應答付而も批判無

之様常々可心掛候、尤衣服之儀ハ被仰渡候趣候条、自

他國之差別之外、分限を過候儀者可為無用候、

右之通被致承知、家来末々江者尚又書面之旨趣を以

口達和らけ具可申聞候、

※ 正月 左中

(鳥津久金)

左京

主馬

带刀

伊織

齋宮

(喜入久福) (川田國福) (山岡久澄)
(榊山久智) (小松清香)
(喜入久福)

※ (行間)

『石、辰正月十四日、明十五日四ツ時、大身分已下月次御禮罷

出候面々、御本丸江可罷出旨、主馬殿より被仰渡候、御書付

致拜見、通達帳ニ留置之候事』

別紙書付之趣、一所持已下月次御礼罷出候面々へ承知

有之候様相達、左候而、支配中諸外城・私領へ者地頭・

領主・支配頭より可被申渡旨如何可申渡候、

五月 (榊山久智)
左京 主馬 (喜入久福)

文
書
目
録

例 言

- 一 本巻に収めた「史館調」「旧史館調」「旧史官調雑抄」を、それぞれ掲載順に通し番号を付して収録した。
- 一 本目録は、原則として各底本巻頭記載の目録を大見出しとし、記載のないものは（ ）で示した。
- 一 文書は、番号のほか、年月日、文書名を記載した。
- 一 文書の年月日については、原文書記載の年紀はそのままとし、補筆の年紀は「」で囲んだ。
- 一 年紀を欠くもののうち、推定しうるものは（ ）で示した。
- 一 月の異称は数字に改めたが、正月、朔日、晦日などはそのまま残した。
- 一 原則として『鹿児島県史料 旧記雑録』及び『同 旧記雑録拾遺』にならない文書名を付けた。
- 一 重複等により省略した文書には※印を付し収載した。

番号	年月日	文書名	番号	年月日	文書名
史館調					
家久公御家譜之中					
一	1	島津家久譜	九	(宝曆 二年) 四月十一日	川上久儔・吉田清純連 署調書
2	元和 九年 二月廿七日	島津久元・伊勢貞昌連 署状	一〇	(宝曆 二年) 四月十八日	川上久儔・吉田清純連 署調書
慈徳院様疏使其志川王子御召列事件					
二		記録所覚書	松崎家相統		
島津図書殿宅江初而御光儀ニ付家来のもの共御目見且進上物等之調					
三	宝曆 二年 四月 八日	川上久儔・吉田清純連 署調書	一一		丹生家家筋
島津大学殿宅江御家督初而御光儀ニ付諸調					
四	宝曆 二年 四月 六日	吉田清純外二名連署調書	一二	宝曆 二年 三月 九日	丹生助右衛門覚書
島津周防殿宅江初而御光儀ニ付諸調					
五	宝曆 二年 四月 七日	川上久儔・吉田清純連 署調書	一三	(宝曆 二年) 四月廿六日	川上久儔・吉田清純連 署調書
島津備中殿家来川上六郎兵衛外一名自分継目之御礼御城に於て家格之進上物被仰付度願之調					
六	宝曆 二年 四月 廿日	吉田清純調書	一四	(宝曆 二年) 四月 廿日	川上久儔・吉田清純連 署調書
島津周防殿家来別府市郎左衛門継目家督ニ付家格之進上物仕御城に於て御目見之願之調					
七	(宝曆 二年) 四月廿四日	川上久儔・吉田清純連 署調書	一五		黒木家系図
島津主殿殿宅江御光儀之節小林左内・島津登御目見之調					
八	(宝曆 二年) 四月十一日	川上久儔・吉田清純連 署調書	一六	(宝曆 二年) 六月 六日	山田有雄・吉田清純連 署調書
御納戸付代々土川合太左衛門初而高持成之願調					
			一七	宝曆 二年 四月廿六日	本田親方・吉田清純連 署調書

親治右衛門代より御番入願失忘当有馬半次郎存当り此節御番入願之調

諏訪大明神御由緒調

二八 元文 元年 十二月十四日 相良長香・町田俊懿調署調書

大龍寺之辺色々唱等之調

一八 宝曆 二年 五月廿七日 吉田清純外二名連署調書

継目家督并養子嫡子成等之御礼八歳より以下者同格之者名代にて可申上仰渡

二九 元文 二年 四月十三日 相良長香外二名連署調書

一〇 享保 五年 五月(十日) 島津久武達書

御太刀・銀馬代目録等認様之調

三〇 元文 二年 四月十七日 相良長香外二名連署調書

御書院付代々士大山九平外城養子願之調

二〇 宝曆 二年 六月十七日 吉田清純調書

総州様御直御沙汰書之写

二一 (享保 六年) 八月 島津吉貴沙汰書

竹之山権四郎養子願之調

二二 宝曆 二年 六月十八日 川上久儔・吉田清純連署調書

入道様江善次郎殿より進上目録に実名可被相用否之調

二三 享保 廿一年 十一月十一日 相良長香・町田俊懿連署調書

水引八幡新田宮江相属候千儀家筋調

二四 元文 元年 十一月 七日 町田俊懿調書

国分衆中池田新左衛門家筋調

二五 元文 元年 十一月十二日 町田俊懿調書

鎌田太郎左衛門先代々勤方之調

二六 鎌田平右衛門高祖父以来勤方調

二七 元文 元年 十一月十七日 相良長香・町田俊懿連署調書

調

二八 元文 元年 十二月十四日 相良長香・町田俊懿調署調書

大龍寺之辺色々唱等之調

二九 元文 二年 四月十三日 相良長香外二名連署調書

御太刀・銀馬代目録等認様之調

三〇 元文 二年 四月十七日 相良長香外二名連署調書

総州様御直御沙汰書之写

三一 (享保 六年) 八月 島津吉貴沙汰書

竹之山権四郎養子願之調

三二 宝曆 二年 七月廿三日 吉田清純外二名連署調書

入道様江善次郎殿より進上目録に実名可被相用否之調

二三 享保 廿一年 十一月十一日 相良長香・町田俊懿連署調書

水引八幡新田宮江相属候千儀家筋調

二四 元文 元年 十一月 七日 町田俊懿調書

国分衆中池田新左衛門家筋調

二五 元文 元年 十一月十二日 町田俊懿調書

鎌田太郎左衛門先代々勤方之調

二六 鎌田平右衛門高祖父以来勤方調

二七 元文 元年 十一月十七日 相良長香・町田俊懿連署調書

伊集院千右衛門家筋調

三七

記録所調書

蓮金院江御沙汰書

四七 宝曆 二年

鳥津久馮外四名連署達
書案

秩父十太夫家筋調

三八

記録所調書

泉坊江被成下候知行目録之吟味

岸半藏家筋調

三九

記録所調書

四八 1 慶長十八年 八月十九日
2 宝曆 二年 正月十七日

伊勢貞昌・三原重種連
署知行目録写
記録所調書

木脇三左衛門家筋調

四〇

宝曆 二年 七月十九日

吉田清純外二名連署調
書

日向国御家来証文六通

四九 1 元禄十五年 十二月 九日
2 元禄十五年 十二月十一日
3 元禄十五年 十二月 六日
4 元禄十六年 十二月十六日
5 元禄 十二月十五日
6 元禄十六年 三月 六日

日本御禁制之書籍

四一

記録所覚書

1 元禄十五年 十二月 九日 松浦助右衛門書状
2 元禄十五年 十二月十一日 惠利清八書状抄
3 元禄十五年 十二月 六日 米良権右衛門書状抄
4 元禄十六年 十二月十六日 吉村伝七書状抄
5 元禄 十二月十五日 春成与五左衛門書状抄
6 元禄十六年 三月 六日 富沢庄左衛門書状抄

町田仲右衛門御番勤方之調

四二

宝曆 二年 七月廿二日

吉田清純外三名連署調
書

三雲新右衛門家筋調

四三

宝曆 二年 八月 八日

吉田清純外三名連署調
書

伊集院郷地略誌

五〇 伊集院郷地略誌

山田覚太夫家筋調

四四

宝曆 二年 八月 八日

吉田清純外三名連署調
書

日置郷地略誌

五一 日置郷地略誌

御厩附代々土松山次郎八永代御暇之上竹之山権四郎養子願不被仰付
候ニ付再々御厩江被召入度願之調

四五

宝曆 二年 八月 十日

川上久儔外二名連署調
書

市来郷地略誌

五二 市来郷地略誌
五三 串木野郷地略誌

久保七兵衛家筋調

四六

宝曆 二年 五月 三日

川上久儔外二名連署調
書

平佐郷地略誌

五四 平佐郷地略誌
酒匂久景注進状

1

隈城郷地略誌

五五

隈城郷地略誌

水引郷地略誌

五六

水引郷地略誌

高城郷地略誌

五七

高城郷地略誌

野田郷地略誌

五八

野田郷地略誌

出水郷地略誌

五九

出水郷地略誌

中西家伝来之能之伝書之調

六〇

寛延 四年 閏六月 三日

吉田清純・川上久儔連署調書

御家系図筆者江書調候趣書記

六一

宝曆 二年 九月

記録所覚書

踊衆中嘉茂源五左衛門直子病身ニ付島津善次郎殿家来某を養子願之調

六二

宝曆 二年 九月十八日

川上久儔外三名連署調書

琉球王子被召連江戸御参府御登城一件之調

六三

宝曆 二年 十月廿八日

吉田清純調書

吉田用右衛門より川上平右衛門・本田七右衛門・山田喜三右衛門江之書状

六四

(宝曆 二年) 十一月 十日

吉田清純書状

町田幸太郎家筋調

六五

宝曆 二年 十二月廿五日

吉田清純調書

平田靱負・市来左中御礼進上物之調

六六

宝曆 二年 十二月廿五日

吉田清純調書

中山王尚穆謝恩使被召連江戸江御参府一件

六七

1 (宝曆 二年)

記録所覚書

太守様琉人被召連先規之通御登城且被下物進上物其外諸次第之一件

2

記録所覚書

寛陽院様・浄国院様御兩代琉使江戸江被召連御参觀御日延等之調

六八

宝曆 三年 正月十七日

吉田清純調書

琉球国飢饉且王城焼失等御助力之御取分を以来辰年之御参府御用捨被仰出候御書

1 (正徳 元年)

将軍家上意達書

御月番井上河内守様より被御渡候書付御記録所江納置候様御家老島津帯刀より田中五右衛門江被相渡書付之写

2 正徳 元年

五月十六日 島津仲休申渡書

正徳二年辰御参府御用捨之処同巳年同御用捨事件且御請書御差出

正徳四年・享保三年浄国院様琉使被召連御参府之一件

慈徳院様中山王尚敬慶賀使被召連御参府一件

(六九)

宝曆 二年 十二月

吉田清純覚書

旧史館調

「旧史館調 一」

田布施土族下村隠岐守帳留抜書

一 下村氏方々移帳抜書

寄田村牧事忠節

二 貞治 七年 三月廿七日 島津師久預状

呂宋より参麝香逃

三 七月 九日 本田親商書状抄

国中一の宮條

四 弘安 十年 三月 新田宮諸司神官等解文抄

渋谷略系図

五 渋谷氏略系図

河西兵庫入道軍忠

六 貞和 三年 七月(四日) 河西道現軍忠状

高城郡若宮権現由来

七 高城郡若宮権現由来抄

日新様御牌写

八 永禄十一年 十二月十三日 島津日新牌文

小西作右衛門

九 小西作右衛門譜

和田家先祖

一〇 山路善左衛門系図書抜

村岡家略系図

一一 村岡家略系図

平岡曾藤兵衛御奉公

一二 (文禄 二年) 五月 晦日 某書状抄

柏原家先祖之事

一三 元禄 八年 二月 彼岸 柏原七郎右衛門書状

加世田六角堂

一四 田尻荒兵衛打手之人 島津忠国骨箱書付

日羅上人

一五 西勝寺大智院縁起 記録所覚

日本三躰之本尊

一六 宰代役 法光寺由緒書付

五院

一七 末弘甚兵衛江御褒美 伊瀬喜兵衛系図書抜

一八

一九 永禄 四年 正月十六日 総持寺五院書付

二〇 慶長 五年 九月廿七日 島津忠長外三名連署宛行状

二一 薩摩虚島 近衛信輔和歌

二二 橋口石見江御感状 記録所覚

二三 系図偽作之咎流罪衆 記録所覚

伊集院小伝次御誅伐

二四

記録所覚

島津大和守様御生害

二五

記録所覚

伏見之御城責

二六

記録所覚

薩州湯豊宿郡十二町名之内在谷山皇徳寺

垂水郷安田次郎兵衛家筋調

二七

十月廿二日

垂水役人連署届書

元久公御上洛之時之日記之内

二八

元久公上洛日記

義弘公より龍伯公江之御文

二九

九月廿九日

島津義弘書状

惟新様朝鮮江御渡海船

三〇

記録所覚

文保元年云々及寛永五年云々

三一

九月十六日

鎮西下知状抄

昔之字

三二

記録所覚

帖佐米山之堂鱒口

三三

記録所覚

幡雲及星燃

三四

記録所覚

国見舞として小出对馬守外に二人下国

三五

記録所覚

牛馬御改及一向宗之本尊出候士衆之件

三六

記録所覚

建久四年大飢饉之件

三七

記録所覚

將軍家より日本国中江絵図調差出候様達

三八

記録所覚

將軍辞世之歌

三九

記録所覚

島津中務久輝家臣高崎權左衛門先祖覚書之内

四〇

御当日記

烏丸家筋

四一

記録所覚

忠久公御誕生日異説

四二

記録所覚

大谷刑部陣取

四三

宮之原才兵衛覚書

関ヶ原江島津中書様御着

四四

宮之原才兵衛覚書

長慶院殿由緒伝系

四五

記録所覚

正之母

四六

記録所覚

奥州会津之元祖

四七

記録所覚

從四位上前肥後太守公土津靈神

四八

記録所覚

大炊御門中将殿齋島江配流

松木少將殿

松木少兵衛

松木伊兵衛

四九 元禄 三年 三月 九日 本田八左衛門覚書

五〇

記録所覚

八助

五一

記録所覚

藤原氏異名

五二

記録所覚

人丸

五三

記録所覚

天鍵鞭之法

五四

明応 六年 十一月 八日 入来院重聰書付

惟新様江殉死之藺牟田氏文書之内

五五

湯田平内系図書抜

惟新様加治木及平松江御移日

五六

記録所覚

義久公・義弘公・忠恒公御蔵入高石田より左之通

五七

記録所覚

義弘公関ヶ原より御帰宅等之事

五八

記録所覚

義弘公御位牌

五九

記録所覚

惟新様御他界

六〇 (元和 五年) 八月十六日

曾木重松書状抄

惟新様木崎原御合戦御危難

六一

記録所覚

惟新様与御改名

六二

記録所覚

忠恒様伊集院幸侃被成候時之次第

六三

記録所覚

比志島家略系図

六四

比志島家略系図

義久公御法名

六五

島津義久法名書付

起請文

六六

某起請文前書

又八郎様伊集院幸侃を御打果ニ付御逼塞

六七

記録所覚

新納旅庵伏見城江参上之節是非共御取次成ましき件

六八

記録所覚

太守公賜御板北斗之符

六九

高野孝右衛門家系図書
抜

鹿野屋高牧野福山野江被召直之云々

七〇

記録所覚

義昭僧正生害

八一

記録所覚

(廻野之牧)

七一

記録所覚

日高彦右衛門より進上品

八二

日高彦右衛門進上目録

秀頼様及御息御生害

七二

記録所覚

和田氏伝

八三

和田氏系譜

龍伯様御状

七三

島津龍伯宛行状

陽和院様一件三ヶ條

八四

記録所覚書

日秀上人照皆

七四

永祿 四年

七月 吉日

日秀上人照皆書状抄

榊山仲右衛門家略系図

八五

榊山仲右衛門家略系図

国府正八幡宮造立之一件

七五

記録所覚

榊山仲右衛門跡養子願之吟味

八六

延享 五年 七月 六日 記録所調書

御尊体之書物事

七六

天文 廿年

九月 吉日

大隅正八幡宮尊体注文

太守宗信公より築地神明宮に御寄進

八七

寛延 元年 九月 家老連署申渡書案

日新公御吉書

七七

天文 八年

正月十一日

島津日新吉書

玉造故城

八八

常陸国誌

福永助十郎子孫

七八

四月十五日

長寿院盛淳書状抄

年頭御規式

八九

延享 五年 正月十一日 記録所覚書

福永益右衛門由緒書抜

七九

福永益右衛門由緒書抜

島津矢柄殿其外役替

九〇

記録所覚書

雜説一書五ヶ條

八〇

記録所覚

島津備中殿御前ニ於て御腰物一腰拝領

九一

記録所覚書

比志島宮内少輔遠島

八〇

記録所覚

島津左衛門殿より十文字御紋被相用度願ニ付吟味

九二

延享 四年 十二月廿三日 記録所調書

本田奎・本田出羽御目見之儀ニ付吟味

九三 延享 五年 正月十六日 吉田清純外三名連署調書

赤崎円真家筋調

九四 (延享 五年) 正月十九日 記録所調書

御家老郷原軼依願御役御免及平田新左衛門等御役昇進之事

九五 記録所覚書

河野八郎左衛門大御目付

九六 (延享 五年) 正月 廿日 吉田清純調書

山田助右衛門家格調

九七 二月廿六日 記録所調書

吉貴公御代中山王使者江戸江被召列候御家老又ハ、琉使江被召付候御目見之調

九八 延享 五年 正月廿四日 記録所調書

光久公中山王使被召列候一件

九九 延享 五年 正月廿三日 記録所調書

本田出羽下司之作

一〇〇 延享 五年 五月廿七日 記録所調書

田中藤次兵衛家筋調

一〇一 延享 五年 二月 廿日 記録所調書

左近丞寿仙・松元寿閑等之家筋調

一〇二 延享 五年 二月廿二日 吉田清純外三名連署調書

植木次郎太家筋調

一〇三 延享 五年 正月廿八日 記録所調書

大野鉄兵衛家筋調

一〇四 餅原正因家筋調 記録所調書

岩崎次兵衛家筋調

一〇五 延享 五年 二月廿五日 記録所調書

城州伏見大黒寺由緒調

一〇六 (延享 五年) 三月 朔日 記録所調書

頼朝公五百五拾年ニ付本田作左衛門より献納願調

一〇七 延享 五年 三月 七日 記録所調書

猪俣奎右衛門家筋調

一〇八 延享 五年 三月 九日 記録所調書

京都即宗院由緒調

一〇九 延享 十二月廿九日 記録所調書

相良平八郎家筋調

一一〇 延享 五年 二月 四日 記録所調書

松元榮春家筋調

一一一 延享 五年 四月十二日 川上久儔外三名連署調書

倉橋金之丞被召拘訳及家筋調

一一二 延享 五年 四月 廿日 吉田清純外五名連署調書

佐多八十右衛門嫡子相果二三男男上り願之調

一一三 延享 五年 五月十九日 記録所調書

河野幸左衛門初而高持成願ニ付調

一一四 延享 五年 五月 廿日 記録所調書

延享 五年 五月廿一日 記録所調書

一一五 延享 五年 五月廿一日 記録所調書

大重仲兵衛高上り成願之調

一 一六 延享 五年 五月廿五日

吉田清純外三名連署調書

志和屋左太夫家筋調

一 一七

記録所調書

〔旧史館調 二〕

島津淡路守殿江忠之字等拜領被仰付差支有無之儀ニ付調

一 一八

(宝曆 二年)

記録所覚書

御記録所筆者川西筑右衛門御下国御供被仰付度旨御記録奉行より申出之件

一 一九

宝曆 三年

正月廿二日

吉田清純願書

菊姫様御疱瘡之件

一 二〇

(宝曆 三年)

記録所覚書

御記録方御用物入挾箱御下国ニ付御道中被差通度旨御供之御記録奉行より申出之件

一 二一

(宝曆 三年)

二月十八日

吉田清純願書

摂州住吉之社家田中福太夫訴状之儀ニ付調

一 二二

元禄十二年

正月十八日

田中国明調書

御領國中為差立靈験有之神仏取調之件

一 二三

宝曆 三年

四月 二日

吉田清純調書

太守様・若殿様江戸御上下之節東目御通行調

一 二四

(宝曆 三年)

四月十一日

吉田清純調書

桂太郎兵衛・河野安之右衛門・宮之原宇右衛門列調

一 二五

宝曆 三年

七月廿四日

記録所覚書

平田孫次郎・堀甚八同前

一 二六 宝曆 三年 八月 八日

記録所覚書

平田仲左衛門同上

一 二七 宝曆 三年 八月 九日

記録所覚書

呉明卿詠歌品字蓮

一 二八

呉明卿詠品字蓮有序

丹後宮津侯永井尚征之碑文

一 二九 延享 五年 六月

成肅公碑文

延享中將軍職解任之儀ニ付執事等ヨリ上表

一 三〇 延享 二年

徳川吉宗執事等上表文

將軍吉宗公墓表

一 三一

徳川吉宗墓表

將軍家宣公室天英院殿墓表

一 三二

天英院墓表

今和泉之儀指宿郡之内ニ被召付候付因幡殿へ被仰渡候御書付振之調

一 三三 宝曆 三年 七月 九日

吉田清純・安藤茂真連署調書

永山彦太郎繼日養子願ニ付家筋調

一 三四 (宝曆 三年) 七月廿五日

吉田清純外三名連署調書

申良衆中鳥越甚左衛門養子願ニ付調

一 三五 (宝曆 三年) 八月 八日

吉田清純外二名連署調書

五右衛門二男村田正次郎事孫ニ候故養子二男ニ仕度旨市来左中より願ニ付調

一 三六 (宝曆 三年) 七月 朔日

吉田清純・川上久儔連署調書

願ニ付調

一 三六 (宝曆 三年) 七月 朔日

吉田清純・川上久儔連署調書

甚左衛門二男堀甚八進上物調

一三七 (宝曆 三年) 八月 六日 書 吉田清純外二名連署調

石神彦四郎繼目養子願之調

一三八 (宝曆 三年) 七月 三日 書 吉田清純・安藤茂真連署調書

溝辺衆中宗像仁之助養子願ニ付調

一三九 1 (宝曆 三年) 十一月十三日 記録所調書

2 宝曆 三年 十一月十八日 吉田清純・安藤茂真連署調書

鎌田八郎右衛門家筋調

一四〇 (宝曆 三年) 十二月 吉田清純調書

海老原孝左衛門繼目養子願ニ付調

一四一 (宝曆 三年) 十二月十八日 吉田清純調書

佐多・新納両家年頭御礼着座等之件

一四二 宝曆 三年 十二月 記録所調書

御年男之儀ニ付仰出

一四三 1 (享保 廿年) 十一月 比志島範房達書
2 記録所覚書

入江十郎左衛門訴訟之儀ニ付由緒調

一四四 享保十六年 九月 七日 川上久儔調書

阿多正覚寺ニ御建被遊候天津正祐菴主云々福昌寺師山より寺社奉行

所へ申出之件 一四五 享保十六年 十月 八日 福昌寺師山口上覚抜粹

御兵具所付士森甚四郎致変死跡養子願ニ付調

一四六 宝曆 三年 十二月十七日 吉田清純外三名連署調書

救仁郷長左衛門・北郷次太夫繼目御礼名代ニ而進上物納願ニ付調

一四七 宝曆 三年 十一月 書 吉田清純外二名連署調

忠久公御鏡うつし并小泉御冑之儀ニ付御家老連署御記録奉行宛之御書付

一四八 1 享保十一年 十二月廿八日 鳥津久貫外五名連署申渡書

2 十一月十八日 記録所覚書
3 十一月 廿日 記録所覚書

慶長十一年鹿兒島城御樓門前之板橋落成渡初之件

一四九 記録所覚

六郎太夫二男鎌田兵太進上物調

一五〇 宝曆 四年 三月 廿日 吉田清純外二名連署調書

於德殿島津出雲へ被嫁候付為統料高被宛行候旨出雲宛之領知目録

一五一 諸所領知目録案

鳥津空地頭職之御礼願ニ付御礼席調

一五二 宝曆 四年 四月十二日 吉田清純外二名連署調書

鎌田兵太進上物調三通

一五三 1 宝曆 四年 三月廿一日 吉田清純外二名連署調書

2 (宝曆 四年) 三月廿二日 吉田清純外二名連署調書

3 宝曆 四年 四月廿三日 記録所調書

鎌田典膳娘北郷民部へ致縁与不縁ニ付離別願中右娘相果候ニより其
願意許否調

一五四 宝曆 四年 六月 六日 吉田清純・安藤茂真連
署調書

於供殿御忌掛之御方々調

一五五 宝曆 四年 六月十三日 吉田清純・安藤茂真連
署調書

上杉大炊頭様御家中島津玄蕃家筋之件

一五六 1 島津玄蕃書付
2 記録所覚書

中紙進上ニ而諸御目見之者之儀ニ付仰出

一五七 正徳 元年 九月 四日 島津吉貴内意書

国分正国寺へ御寄付高之儀ニ付御家老中より御書付被下置候可否調

一五八 1 宝曆 四年 十月 家老連署知行目録草案
2 宝曆 四年 十月 家老連署知行目録草案

3 宝曆 四年 十月 朔日 安藤茂真外二名連署調

4 家老連署知行目録草案
家老連署知行目録草案

5 弟共を兄之養子ニ相願候節之儀ニ付公儀仰渡

一五九 宝曆 四年 六月 幕府達書

伊集院衆中白井武右衛門養子願ニ付調

一六〇 宝曆 四年 九月 六日 吉田清純・安藤茂真連
署調書

田布施衆中和田早兵衛同前

一六一 宝曆 四年 九月十七日 吉田清純・安藤茂真連
署調書

中西文右衛門・同長兵衛・同政太郎・柏幾右衛門・有川二平太能方
ニ付座席列調

一六二 宝曆 四年 七月 八日 吉田清純・安藤茂真連
署調書

瀬之口甚右衛門高上り願之調

一六三 宝曆 四年 八月 六日 吉田清純・安藤茂真連
署調書

森朴阿弥家筋調

一六四 (宝曆 四年) 九月 七日 記録所調書
中紙進上ニ而家督継目初而之御目見云々仰出

一六五 正徳 元年 九月 四日 島津吉貴内意書

百十五代中御門院御履歴

一六六 中御門院年譜

往昔高尾野へ致居住候者之娘於通と申者浄瑠璃為作初由ニ付其由緒
調

一六七 延享 二年閏十二月十一日 町田俊懿外三名連署調
書

柰寝孫左衛門より江戸帰国之節上京平松様へ御目見願ニ付調

一六八 宝曆 五年 二月 朔日 吉田清純調書

崎山貞栄相果直子無之養子罷成者無之ニ付跡職不被召立旨願出ニ依
り調

一六九 宝曆 五年 正月廿三日 記録所調書

柰寝孫左衛門より小松家号ニ名字替願ニ付調

一七〇 延享 元年 十二月十九日 川上久壽・町田俊懿連
署調書

柰寝氏系図

1

榎元新兵衛百石高上り願ニ付調

一七一 1 (享保十四年) 正月十六日 川上久儔外二名連署調

2 (享保十四年) 正月十二日 高奉行調書

碓山次右衛門直子無之亡父八郎右衛門於大嶋出生之男子ヲ繼目養子願ニ付調

一七二 宝曆 五年 二月十六日 吉田清純外二名連署調

賀養子罷成候者養子違変本家へ立帰候後御目見沙汰之儀ニ付御通達

一七三 元文 三年 十月 四日 穎娃久周達書

年頭諸地頭并御役家ニ付御太刀進上之面々來年頭又三郎様御方へも納太刀可被仰付哉之旨調

一七四 宝曆 四年 十二月廿七日 吉田清純・本田親方連署調書

右同断ニ付正月三日納太刀被仰付筋ニ可有之哉之調

一七五 1 (宝曆 四年) 十二月廿九日 吉田清純・本田親方連署調書

2 記録所覚書

武井清左衛門養子願ニ付調

一七六 宝曆 五年 三月 七日 吉田清純・安藤茂真連署調書

藤田権兵衛より比志島隼人叔父比志島比三治ヲ繼目養子願ニ付調

一七七 宝曆 五年 三月 九日 吉田清純・安藤茂真連署調書

亡父伊勢兵部へ御作之紋所拝領被仰付置候処引続右御紋相用度旨伊勢巨より願ニ付調

一七八 宝曆 五年 三月十五日 安藤茂真調書

御船奉行格松崎平左衛門・御船奉行竹原兵右衛門連名之次第調

一七九 (宝曆 五年) 三月十六日 安藤茂真・吉田清純連署調書

嶋津登二弟掛橋五百右衛門進上物調

一八〇 (宝曆 五年) 三月十七日 安藤茂真・吉田清純連署調書

喜入主馬二弟喜入幸之丞分地別立ニ付家格調

一八一 (宝曆 五年) 三月 廿日 吉田清純・安藤茂真連署調書

格与申儀ニ付仰出

一八二 享保 七年 十二月廿八日 島津久當・名越恒渡連署調書

光久公御代琉使被召列御参府之涯御官位御昇進等有之候哉之儀ニ付調

一八三 1 宝曆 四年 十一月十四日 安藤茂真・本田親方連署調書

2 (宝曆 四年) 十一月十四日 記録所調書

中西長兵衛隱居嫡子中西八角儀八病身故二男中西政次郎へ家督相続願ニ付調

一八四 宝曆 五年 六月 朔日 吉田清純・安藤茂真連署調書

松元壽閑家筋調

一八五 (宝曆 五年) 八月十八日 吉田清純調書

中西長兵衛家系

一八六 中西長兵衛一流系図外続之次第書

江戸居付士二三男御番入之儀ニ付仰渡

一八七 (宝曆 五年) 五月 島津久馮達書

鎌田小八左衛門家筋調

一八八 (宝曆 五年) 五月 五日

吉田清純・安藤茂真連
署調書

島津中太兵衛之事

平岡内匠之事
一九七 寬延 三年 十二月廿四日

宝曆五年之御奉書

一八九 宝曆 五年 七月廿七日

堀田正亮外二名連署奉書

種子島藏人より御光儀之願ニ付調書
一九八 寬延 四年 八月 六日

有章院様御代武家諸法度被仰出候哉有無調書

一九〇 宝曆 五年 九月廿一日

吉田清純外二名連署調書

島津大学之事
一九九 寬延 四年 六月十八日

圓徳院様御葬礼之節御代之御太刀持之儀ニ付調書

一九一 圓徳院様御葬礼之節御位牌御名代ニ而被為奉守旁之儀ニ付調書

記録所覚書

於貞殿御忌掛之方々取調之事
二〇〇 寬延 四年 八月十一日

一九二 宝曆 五年 七月廿五日

吉田清純・安藤茂真連
署調書

北郷民部事御礼使被仰付ニ付吟味書
二〇一 寬延 四年 六月十八日

〔旧史館調 三〕

御記録奉行江御礼席順之申渡書

一九三 (寬延 四年) 八月

島津久馮達書

阿多源藏家筋書
二〇二 寬延 四年 三月廿七日

元服人并理髮人支度吟味書

一九四 寬延 四年 八月 九日

吉田清純・山田有雄連
署調書

長野筑右衛門御城下士願出ニ付調書
二〇三 1 寬延 三年 九月廿四日

御内證元服ニ付仰渡

元服人進上物吟味書

一九五 寬延 二年 六月 四日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

深栖市兵衛養子願ニ付調書
二〇四 寬延 四年 六月十九日

元服席之吟味書

一九六 寬延 四年 七月廿三日

川上久儔・本田親方連
署調書

御城下士養子ニ付存寄申訳書
二〇五 寬延 四年 六月十九日

池端善蔵養子之儀ニ付調書

二〇六 寛延 四年 五月 九日 吉田清純・川上久儔連 署調書

御城下士申目下知調書

二〇七 寛延 四年 四月 廿日 吉田清純調書

島津出雲繼目ニ付御光儀願調書

二〇八 寛延 四年 八月十五日 吉田清純調書

川俣作田還俗願出ニ付調書

二〇九 寛延 四年 六月十六日 吉田清純・川上久儔連 署調書

又七郎太刀御札着座調書

二一〇 寛延 四年 六月十六日 吉田清純・川上久儔連 署調書

満田与右衛門養子願出ニ付調書

二一一 寛延 四年 二月十九日 吉田清純外二名連署調書

川上弥八郎式百石高上りの願申出調書

二一二 寛延 四年 六月十三日 吉田清純・川上久儔連 署調書

森生眼高持成願申出調書

二一三 (寛延 四年) 二月廿九日 吉田清純・川上久儔連 署調書

上原嘉右衛門高持成願申出調書

二一四 寛延 四年 四月廿三日 吉田清純調書

渡辺新右衛門願出ニ付調書

二一五 寛延 四年 六月 十日 吉田清純・川上久儔連 署調書

池端善蔵養子願に準せしもの調書

二一六 寛延 四年 五月廿一日 吉田清純・川上久儔連 署調書

福島玄佐高持成之願申出調書

二一七 寛延 四年 正月 晦日 吉田清純調書

於供殿事縁与ニ付格合調書

二一八 1 寛延 四年 五月十二日 川上久儔・吉田清純連 署調書

2

愛甲玄昌高持成之願申出調書

二一九 寛延 四年 五月十六日 吉田清純・川上久儔連 署調書

隈元太一左衛門高上り願申出調書

二二〇 寛延 四年 三月廿五日 吉田清純・川上久儔連 署調書

太守様御着城年頭御規式之調書

二二一 寛延 四年 二月十六日 吉田清純・川上久儔連 署調書

琉球王繼目并卒去年月日書

二二二 1 記録所覚書
2 記録所覚書

()

二二三 家紋ニ付覚草案

大御所様御院号御記録奉行江達書

二二四 寛延 四年 八月十三日 義岡久中達書

上井五郎左衛門取次助右衛門辞職御免御札之事
二二五 寛延 四年 三月十五日 伊地知助太郎覚書

本田与兵衛二男進上物調書

二二六 寬延 四年 八月廿一日

吉田清純調書

桑波田藤右衛門家筋調書

二二七 寬延 四年 八月廿一日

吉田清純調書

本田孫右衛門三男進上物調書

二二八 寬延 四年 六月廿七日

吉田清純・川上久儔連署調書

高橋七郎右衛門座席連名調書

二二九 1 (寬延 四年 閏六月)

記錄所覚書

2 寬延 四年 閏六月 四日

吉田清純・川上久儔連署調書

御役之御礼地頭職御礼且進上物調書

二三〇 寬延 四年 六月廿八日

川上久儔・吉田清純連署調書

鎌田九郎別立之願申出調書

二三一 寬延 四年 七月 四日

吉田清純・本田親方連署調書

御目見之進上物調書

二三二 寬延 四年 八月 三日

川上久儔・吉田清純連署調書

山元平藏養子願申出調書

二三三 寬延 四年 閏六月 五日

吉田清純・川上久儔連署調書

平島甚左衛門由緒調書

二三四 寬延 四年 七月十六日

吉田清純外三名連署調書

本田甚六進上物吟味書

二三五 寬延 四年 六月廿八日

川上久儔・吉田清純連署調書

太刀持參之願ニ付伺書

二三六 寬延 四年 六月十九日

川上久儔・吉田清純連署伺書

都外川万兵衛養子願ニ付調書

川添市之進之事

吉田清純・山田有雄連署調書

二三七 寬延 四年 八月廿三日

吉田清純・山田有雄連署調書

川口治右衛門養子願ニ付調書

伊集院伊膳家来兒玉幸兵衛家筋之事

吉田清純・山田有雄連署調書

二三八 寬延 四年 八月廿三日

吉田清純・山田有雄連署調書

藤原氏八田系図

二三九 寬保 元年 十月

藤原氏八田系図

1

東鑑

大玄院様御前様之事

二四〇 1 寬保 二年 三月

記錄所覚書

2 延享 元年 九月

穎娃久周達書

本田甚六進上物調書

二四一 1 寬延 四年 七月廿五日

川上久儔・本田親方連署調書

※ 2 寬延 四年 六月廿八日

川上久儔・吉田清純連署調書

白井名字養子願ニ付調書

二四二 延享 四年 三月十一日

川上久儔外三名連署調書

本田作左衛門子家筋連名調書

二四三 延享 四年 七月十二日

宮内式部左衛門家断絶養子願ニ付調書

二四四 寛延 四年 八月廿九日

島津権太郎繼目御礼之儀申出ニ付調書

二四五 寛延 四年 九月十三日

種子島八郎次繼目御礼之儀ニ付吟味何指令

二四六 1 延享 二年 正月

相良新右衛門・小笠原彦之進元服御礼之事

二四七 寛延 四年 九月十六日

河野寿市郎元服御目見申上候事

二四八 (寛延 四年 九月十九日)

伊集院弥五兵衛進上物吟味書

二四九 寛延 四年 十月十四日

三島利兵衛家出緒調書

二五〇 三島利兵衛養子願ニ付調書

二五一 寛延 四年 十月 四日

山田一郎兵衛御目見願申出進上物調書

二五二 寛延 四年 十月 六日

島津図書殿御座席之事

二五三 1 (寛延 四年) 九月廿五日

町田俊懿外二名連署調書

御家老職等御盃頂戴之事

二五四 1 寛延 四年 十一月廿二日

署調書

2 寛延 四年 十一月

3 寛延 四年 十一月

公儀ニ相係り候儀若年寄并と唱候様申渡之事

二五五 池田九郎右衛門養子願ニ付調書

二五六 寛延 四年 十月廿六日

高持成之願申出家筋調書

二五七 (寛延 四年) 十一月 三日

筑後家御直元服被仰付ニ付進上物之事

二五八 (寛延 四年) 九月

島津千次郎事御直元服願進上物之事

二五九 1 寛延 四年 十一月十九日

御料理被下ニ付島津玄蕃殿座席吟味之事

二六〇 寛延 四年 九月廿一日

川上久儻外三名連署調書

川上久儻外三名連署調書

川上久儻外三名連署調書

署調書

中村善之進高持成申出調書

二六一 寬延 四年

坂本恕兵衛家筋調書

二六二 寬延 四年 十一月廿六日

本田伸右衛門跡養子願ニ付調書

二六三 寬延 四年 十月 晦日

岩本瑞哲高持成願ニ付調書

二六四 (宝曆 元年) 十二月 朔日 記録所調書

() 二六五

泊助兵衛一流系図

児玉市右衛門養子願ニ付調書

二六六 寬延 四年 十二月 四日 吉田清純等調書

(種子島藏人より御光儀之願ニ付調書)

二六七 寬延 四年 八月 六日 川上久儔・吉田清純連 署調書

入江十郎左衛門家由緒調書

※二六八 享保十六年 九月 七日 川上久儔調書

寛陽院様日光山江御參詣ニ付調書

二六九 享保十三年 六月 三日 町田俊懿・本城輝昌連 署調書

大友因幡守御家ニ御由緒之有之調書

二七〇 享保十三年 九月十七日 川上久儔外三名連署調書

五社江御參詣之儀ニ付本田新次郎調上申書

二七一 1 宝曆 元年 十二月廿五日 本田新次郎届書 記録所覚書

家来三人宛格式之事

二七二 延享 三年 四月 六日 有川貞利達書

大慈寺当住公文頂戴之儀願ニ付調書

二七三 宝曆 二年 正月廿七日 吉田清純外二名連署調書

福ヶ追諏訪大明神江御寄進之事

二七四 宝曆 元年 十二月廿三日 島津重年寄進状草案

山鹿越右衛門養子願ニ付調書

二七五 宝曆 二年 正月十二日 吉田清純外二名連署調書

大嶋十郎太夫養子願ニ付調書

二七六 宝曆 二年 正月廿五日 吉田清純・本田親方連 署調書

森山長元高上り願ニ付吟味之事

二七七 宝曆 二年 正月 八日 吉田清純外二名連署調書

〔旧土館調 四〕

郷原金太夫名字拝領御礼進上物之仰渡

二七八 1 宝永 八年 十一月廿五日 記録所覚書 記録所覚書

肝付郡高山玉池山由緒書

二七九 宝曆 六年 六月廿八日 日新院大信覚書

忠久公御譜之書抜

二八〇

島津忠久譜

小林仲太兵衛家筋調

2 宝曆十三年

記録所覚書

肝付甚兵衛系図之抜書

二八一

肝付氏系譜

二九一

宝曆十三年

九月 二日

吉田清純外四名連署調書

秩父家系図之書抜

二八二

秩父氏系譜書抜

1 宝永 二年

九月廿二日

島津忠雄達書

重豪公御前様御入興御供百々曲之儀

二八三

記録所覚書

2 宝永 二年

十月 五日

相良長規達書

()

記録所覚書

3 (宝永 二年)

十二月十一日

黒葛原忠雄達書

御座唱替

二八四

宝曆十二年

二九二

宝永 二年

二月

島津吉貴仰出

川上久國より新納右衛門佐・北郷佐渡守へ之状

二八六

川上久国書状

七島郡司寄役とも御目見之調

二九三 1 (宝曆十三年)

九月 廿日

吉田清純外二名連署調書

額字

2 宝曆十三年

記録所覚書

2 宝曆 二年

七月廿九日

七島郡司連署口上書

二八七

記録所覚

御代替ニ付郡山郷嘜・与頭より先例之踊御免被仰付度願

光久公御家督ニ付犬追物御行張之記

二八八

島津光久譜

二九四 宝曆 二年 七月十六日 郡山嘜・与頭連署願書

2

犬追物諸役名簿抄

り申出

二九五 宝曆 二年

八月廿二日

本田出羽守口上書

鹿兒島城築出等之儀阿部豊後守外二侯より之状

二八九

松平信綱外二名連署奉書

右ニ付御記録奉行調

右ニ付新納右衛門佐・北郷佐渡守より山田民部少輔外三名宛之状

二九〇

北郷久加・新納久詮連署書状

二九六 宝曆 二年 九月 廿日 本田親方・山田有雄連署調書

1 正保 二年

五月廿六日

二九七

宝曆十三年

八月

島津久金達書

外城衆中寄合以上之家来より養子之御格式御勘定奉行・地頭・御記
録奉行江御達書

二九八 宝曆十三年 八月廿六日 高橋種寿達書
護摩所不動明王之由来

二九九 元和 六年 閏十二月吉日 某誌不動明王由来
比志鳥家略系図并同紀伊守国貞江宰相家久公より追悼之御歌都合拾
二首

三〇〇 1 比志鳥家略系譜
2 (元和 六年) 島津家久追悼和歌
3 (元和 七年) 島津家久追悼和歌
4 八月 四日 比志鳥三左衛門書状

為御救相撲・芝居興行之書付
三〇一 大山平右衛門覚書

俗に下大隅之辺田七人
三〇二 記録所覚書

南方 山北 上山城 谷峯城之略誌
三〇三 記録所覚書

惟新公より龍伯公江進上被遊候起請文式通
三〇四 1 某起請文前書
2 慶長 七年 八月 十日 島津惟新起請文前書
3 明和 元年 八月廿八日 記録所覚書

向々にて御道具調御記録所江申出書都合
三〇五 1 享保 六年 十一月廿三日 納戸奉行届書
2 十二月十八日 納戸奉行米良九右衛門
左近充与太夫連署届書

川内高城衆中遠矢源三郎手牧御免之調書
三〇八 宝曆十四年 七月廿八日 吉田清純外四名連署調
書

矢野甚八家筋調
三〇七 宝曆十二年 閏四月 二日 吉田清純・郡山遜志連
署調書

大玄院様御以来御統合之略御系図
三〇六 島津家略系譜

鳥津權五郎養子成之御礼進上物調
三〇九 宝曆十四年 七月廿九日 吉田清純等連署調書
三家(花岡・重富・今和泉) 御取立覚
三一〇 記録所覚書

萩原喜兵衛高持成願之調

三一 宝曆十四年 九月十九日

吉田清純外三名連署調書

「旧史館調 五」

町田源左衛門付衆中石沢伊兵衛養子願之調

三二〇 宝曆十三年 三月

吉田清純・市来政公連署調書

松元正右衛門高持成願之調

三一 宝曆十四年 五月廿一日

吉田清純外三名連署調書

永井半助養家北川家より御兵具所附足輕江帰參願之調

三二一 宝曆十三年 三月廿七日 記録所調書

義昭大僧正辞世歌

三二三

大覚寺義昭辞世歌

窪田春賀死後養子無之家跡調

三二二 宝曆十三年 五月廿九日 記録所調書

大興寺文書

三一四 1 永正 五年 六月

懷讓画賛写 其書付

窪田春賀死後養子無之家跡調

三二三 宝曆十四年 六月 十日 吉田清純外三名連署調書

川上久馬より丸之内二十之字紋所用度願及右ニ付御申渡書

三一五 宝曆十四年 三月 高橋種寿達書

延宝二年より元禄五年まで之鑄流馬射手組人名

三二四 三二五 鑄流馬射手組人名書上

()

三一六 宝曆十三年 七月廿六日 吉田清純外二名連署調書

山口諸右衛門初而高持成願之調

三二六 宝曆(十二年) 三月十二日 吉田清純外二名連署調書

御厩附土源兵衛家内脇岡庄兵衛子細有之庄兵衛重て御目見之儀之調

三一七 宝曆十三年 四月廿六日 吉田清純外二名連署調書

奥付一代士鎌田孫市多年勤功ニより代々士被仰付度納殿役人より申出之調

右之再調

三一八 (宝曆十三年) 五月 朔日 記録所調書

久昶公御実名調

船木助七死後跡養子無之家跡調

三一九 宝曆十四年 六月 六日 吉田清純外四名連署調書

三二八 宝曆 九年 二月 吉日 吉田清純実名考

三二九 記録所覚書

組頭及び御記録奉行江式部殿より被仰渡候書付

三三〇 宝曆十四年 三月 小松清香申渡書

町田藤助初而高持成願之調

三三一 宝曆十三年 十二月廿一日 吉田清純外四名連署調書

諸所之古牧しらへ書

三三二 宝曆十四年 五月廿一日 吉田清純外三名連署調書

右ニ付川上十郎左衛門より申出之書付

三三三 宝曆十四年 五月 廿日 川上十郎左衛門覚書

鹿兒島稻荷神前鎗流馬御行張之始り御祈願等之調

三三四 宝曆十二年 七月廿二日 吉田清純外三名連署調書

長倉兵右衛門勤方之しらへ

三三五 (宝曆十四年) 五月廿九日 吉田清純外三名連署調書

1 (宝曆十四年) 五月廿五日 長倉七郎左衛門覚書

2 記録所覚書

栗屋盛右衛門高五拾石上り願之調

三三六 宝曆十四年 五月十一日 吉田清純外四名連署調書

福屋助左衛門勤方之しらへ

三三七 宝曆十四年 五月廿八日 吉田清純外四名連署調書

1 福屋兼全由緒書

2 記録所地頭帳

川田伊織殿及同人養子彦七進上御太刀之調

三三八 宝曆十三年 十二月廿九日 吉田清純外四名連署調書

喜右衛門弟肱岡次郎兵衛御兵具所付士山口半兵衛養子違麥ニ付て最初組方永代御暇之上養子為取組哉等之調

三三九 宝曆十三年 五月十七日 吉田清純外三名連署調書

左近允喜八谷山衆中左近允喜泉養子願之調

三四〇 明和 元年 十月 廿日 吉田清純外三名連署調書

御台所附士勤方有之者江者御切米三石六斗ツ、被成下候趣御台所より御記録奉行江返答

三四一 宝曆十二年 七月 九日 御台所返答書

永田十左衛門養子願之再調

三四二 宝曆十三年 七月廿二日 吉田清純外三名連署調書

申良衆中鳥越甚左衛門死跡養子之調

三四三 宝曆 二年 八月 八日 川上久儔外二名連署調書

諸御座付士格式差別無之候得とも御目見等之節順番之次第之調

三四四 (寛保 四年 四月廿一日) 記録所調書

諸座付士高下相知不申諸座付之者娘縁与之儀者相知格式御座候調

三四五 宝曆十三年 七月 八日 勘定方小頭返答書

御春屋付士職業ニ付て者高下之差別無之趣御春役より御記録奉行江之返答

三四六 宝曆十三年 七月 十日 御春屋役返答書

御船手付士職業により格式高下無之趣御船奉行より御記録所江申越

三四七 宝曆十三年 七月 十日 船奉行覚書

下町人藤田喜兵衛年功ニより御目見願之調

三四八 宝曆十三年 十二月廿八日 吉田清純外四名連署調書

稲津六兵衛嫡子角之助依科被召放養子願之調

三四九 明和 元年 十月廿一日 吉田清純外三名連署調書

鹿屋衆中亡永野市兵衛繼目養子願之調

三五〇 宝曆十三年 七月廿八日 吉田清純外四名連署調書

(V) 鉄熊御目見且同人家中御目見願之再調

三五二 宝曆十三年 七月廿九日 吉田清純外四名連署調書

志布志衆中重信新右衛門五拾石高上り之願調

三五二 宝曆十三年 五月十四日 吉田清純外四名連署調書

和田五斎初而高持成願之調

三五三 宝曆十四年 三月 晦日 吉田清純外三名連署調書

近衛龍山前久様鹿兒島江御滞在中御馳走之次第

三五四 宝曆十三年 二月廿二日 吉田清純・安藤茂真連署調書

内之浦衆中相良兵右衛門五十石高上願之調

三五五 宝曆十四年 四月十五日 吉田清純外三名連署調書

御家老・御物座・御国遣座詰等之調

三五六 宝曆十三年 正月 廿日 記録所調書

児玉与左衛門初而高持成願之調

三五七 宝曆十三年 三月十四日 吉田清純外二名連署調書

御厩附一代士黒松六郎右衛門俗生調

三五八 宝曆十三年 二月廿四日 記録所調書

島津備中殿御家老御役御免之書付并通達

三五九 宝曆十三年 七月十九日 高橋種寿達書

郡山五兵衛養子願之調へ

三六〇 宝曆十三年 五月 六日 吉田清純外四名連署調書

龍伯様御袖判并文書等之調

三六一 宝曆十三年 記録所調書

(町田源左衛門付衆中石沢伊兵衛養子願之再調)

三六二 宝曆十三年 四月 朔日 吉田清純外四名連署調書

小松安之助殿幼年ニ付統目之御礼名代且家来三人御目見之一条

三六三 吉貴公靈塔 記録所覚書

座付士以上身分昇進之儀ニ付思召書式通

三六四 島津吉貴靈塔銘

三六五 1 享保十一年 七月 島津繼豊内意書

御兵具所付士北川玄昌死後養子親類共より願之調

2 寛保 元年 八月 外城衆中鹿兒島士成格式

三六六 宝曆十三年 二月十四日 安藤茂真外四名連署調書

三崎鉄之助御前元服願之調

三六七 宝曆十三年 二月十一日

吉田清純外三名連署調書

野々山文左衛門家筋勤方調

三七四 享保十三年

三月 晦日 記録所調書

光久公御家譜之内拔書

三六八 宝曆十二年 三月 十日

吉田清純外二名連署調書

比志島七郎太夫家筋調

三七五 享保十三年 三月 晦日 記録所調書

1 三月 十日

島津光久譜

財部孫之丞家筋調

三七六 享保十三年 三月 晦日 記録所調書

2 (明曆 三年) 正月廿五日

酒井忠清外二名連署奉書

新納仁右衛門家筋并勤方調

三七七 享保十三年 三月 晦日 記録所調書

3 (明曆 三年) 三月 九日

酒井忠清外二名連署奉書

祢寝甚兵衛家筋并勤方調

三七八 享保十三年 三月 晦日 記録所調書

4 (明曆 三年) 八月廿三日

酒井忠清・阿部忠秋連署奉書

高橋喜左衛門家筋勤方調

三七九 享保十三年 三月 晦日 記録所調書

綱貴公御家譜之内拔書

5

島津綱貴譜

市來新左衛門家筋調

三八〇 享保十三年 三月 晦日 記録所調書

御城下代々土石原市左衛門養子願之調

三六九 宝曆十二年 十二月 十日

記録所調書

山田弥五右衛門家筋調

三八一 享保十三年 三月 晦日 記録所調書

左衛門殿養子島津大膳殿養子違変之儀御記録奉行より高奉行江問合

三七〇 正徳 五年 正月 廿日

川上久儔調書

東郷吉右衛門家筋并勤方調

三八二 享保十三年 三月 晦日 記録所調書

三輪山大門坊より御位牌御預り申上度願之調

三七一 宝曆十二年 九月廿九日

安藤茂真外四名連署調書

三原武兵衛家筋并勤方調

三八三 享保十三年 三月 晦日 記録所調書

太守宗信公より神明宮江御刀一腰御奉納之儀御家老衆より申渡書

三七二 寛延 元年 九月

家老連署申渡書案

伊集院源右衛門家筋并勤方調

三八四 享保十三年 三月 晦日 記録所調書

福崎五郎左衛門家筋并勤方調

〔旧史館調 六〕

三三五 享保十三年

三月 晦日 記録所調書

海江田半藏家筋勤方調

三七三 享保十三年 三月 晦日

記録所調書

木藤休右衛門家筋并勤方調

三八六 享保十三年 三月 晦日 記録所調書

- 讚良善四郎家筋并勤方調 三八七 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 津留伊兵衛家筋并勤方調 三八八 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 仁礼孫左衛門家筋并勤方調 三八九 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 本田太兵衛家筋并勤方調 三九〇 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 山田源左衛門家筋并勤方調 三九一 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 田尻八郎右衛門家筋并勤方調 三九二 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 友野次郎右衛門先祖軍功并次郎右衛門勤方調 三九三 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 伊藤長左衛門祖父及長左衛門勤方調 三九四 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 松元茂兵衛先祖及当茂兵衛勤方調 三九五 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 中馬源右衛門曾祖父よりの勤方調 三九六 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 中原茂右衛門先祖及当茂右衛門勤方調 三九七 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 三原源左衛門先祖及当源左衛門勤方調 三九八 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 西九平太先祖及当九平太勤方調 三九九 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 土持平右衛門先祖及当平右衛門勤方調 四〇〇 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 能勢彦右衛門先祖及当彦右衛門勤方調 四〇一 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 白石仲右衛門先祖及当仲右衛門勤方調 四〇二 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 田中諸右衛門先祖及当諸右衛門勤方調 四〇三 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 鹿島伝左衛門先祖及当伝左衛門勤方調 四〇四 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 白尾四郎兵衛先祖及当四郎兵衛勤方調 四〇五 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 溝口孝左衛門先祖及当孝左衛門勤方調 四〇六 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 鈴木友右衛門先祖及当友右衛門勤方調 四〇七 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 市来茂左衛門先祖及当茂左衛門勤方調 四〇八 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 大河平源助先祖并当源助勤方調 四〇九 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 福島半助先祖并当半助勤方調 四一〇 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 仁礼平右衛門先祖并当平右衛門勤方調 四一一 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
- 久保七兵衛先祖及当七兵衛勤方調 四一二 享保十三年 三月 晦日 記録所調書

小倉与右衛門先祖及当与右衛門勸方調
 四一三 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 木場次郎兵衛先祖及当次郎兵衛勸方調
 四一四 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 吉井勘右衛門先祖及当勘右衛門勸方調
 四一五 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 有馬千左衛門先祖及当千左衛門勸方調
 四一六 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 西角太夫先祖及当角太夫勸方調
 四一七 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 中村半助先祖及当半助勸方調
 四一八 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 清水伝右衛門先祖及当伝右衛門勸方調
 四一九 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 押川十郎右衛門先祖及当十郎右衛門勸方調
 四二〇 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 榎元新兵衛先祖及当新兵衛勸方調
 四二一 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 富山清右衛門先祖及当清右衛門勸方調
 四二二 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 町田善助先祖及当善助勸方調
 四二三 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 山下喜右衛門先祖及当喜右衛門勸方調
 四二四 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 平田才右衛門先祖及当才右衛門勸方調
 四二五 享保十三年 三月 晦日 記録所調書

久留万左衛門先祖及当万左衛門勸方調
 四二六 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 堀十郎右衛門先祖及当十郎右衛門勸方調
 四二七 享保十三年 三月 晦日 記録所調書
 御本丸納殿役人衆より尋ニ付御記録奉行答
 四二八 延享 五年 五月廿六日 記録所調書
 將軍綱吉公及徳松様江琉人より献上品調
 四二九 延享 五年 六月三日 記録所調書
 佐多八十右衛門屹度立候御礼之節進上物之調
 四三〇 延享 五年 六月四日 記録所調書
 飯隈山坊中桜井五大院弟救仁郷種左衛門事大崎衆中池田善左衛門成
 之調
 四三一 延享 五年 六月三日 吉田清純外三名連署調書
 琉人より御台様江献上物品調
 四三二 六月 八日 記録所調書
 佐藤権之助家筋并勸方調
 四三三 延享 五年 六月 吉田清純調書
 島津市太郎家内三木原三三太御目見ニ付進上物申渡
 四三四 延享 五年 六月 島津久富申渡書
 高崎権右衛門御目見ニ付進上物申渡
 四三五 1 延享 五年 六月 島津久富申渡書
 ※ 2 延享 五年 六月 島津久富申渡書
 平田平左衛門家筋調
 四三六 延享 五年 六月十八日 吉田清純調書

中山王使者を以祝儀為差登之事	四三七	延享 五年	六月 廿日	記録所調書	種子島伊右衛門家筋勤方之調	四四八	寛延 元年	八月廿二日	記録所調書
川上権四郎家筋調進上物之事	四三八	延享 五年	六月廿一日	記録所調書	弟子丸喜兵衛家筋勤方之調	四四九	(寛延 元年)	九月 六日	記録所調書
柏原善右衛門家筋調	四三九	延享 五年	六月廿二日	記録所調書	池田千左衛門家筋勤方之調	四五〇	(寛延 元年)	七月廿一日	記録所調書
末川織衛月次御礼之事	四四〇	延享 五年	七月 四日	吉田清純外三名連署調書	家村仲藏家筋調	四五一	寛延 元年	九月十一日	記録所調書
吉利仲左衛門御目見進上物吟味之事	四四一	延享 五年	七月十三日	吉田清純外四名連署調書	高橋半藏家筋調	四五二			記録所調書
本田出羽守通席之事	四四二	延享 五年	七月十八日	吉田清純等調書	北郷彦七家筋調	四五三			記録所調書
新納喜右衛門家筋調	四四三			記録所調書	戸田平次家筋調	四五四			記録所調書
喜入十郎右衛門家筋調	四四四			記録所調書	弟子丸兵衛家筋調	四五五			記録所調書
木脇八郎右衛門家筋調	四四五	延享 五年	八月十七日	吉田清純外四名連署調書	本田新右衛門家筋調	四五六			記録所調書
入田助左衛門家筋由緒之調	四四六	寛延 元年	八月十九日	吉田清純外五名連署調書	川上安左衛門家筋并勤方之調	四五七	寛延 元年	九月十三日	記録所調書
幾朴千祥家筋勤方之調	四四七	寛延 元年	八月十八日	記録所調書	本田正右衛門家筋并勤方之調	四五八			記録所調書
					有川七左衛門家筋并勤方之調	四五九			記録所調書
					種子島善兵衛家筋并勤方之調	四六〇			記録所調書

篠原伊右衛門家筋并勤方之調

四六一

記録所調書

脇岡三輪八家筋調

四七一 寛延 二年 十一月十一日

安藤茂真・本田親方連
署調書

国分藤之丞家筋并勤方之調

四六二

記録所調書

阿久根三五郎家筋調

岩城源太兵衛并前田助三御城下土ニ被成候事

四七二 寛延 二年 六月十七日

安藤茂真・本田親方連
署調書

肥後与右衛門家筋并勤方之調

四六三

寛延 元年 九月廿三日

記録所調書

田中藤次兵衛家筋并勤方之調

四六四

寛延 元年 閏十月廿八日

吉田清純外二名連署調
書

山川宗廟熊野權現祭礼之節野間口彦之進家御代参云々調之事

四七三 1 寛延 二年 六月廿八日

安藤茂真・本田親方連
署調書

仁礼玄東家筋并勤方之調

四六五

寛延 元年 十一月十五日

吉田清純外三名連署調
書

山田一郎左衛門家筋調

2 八月

鎌田政昌申渡書

高木次郎太家筋并勤方之調

四六六

寛延 元年 十一月十五日

吉田清純外三名連署調
書

伊勢九郎八家筋調

四七四

記録所調書

市来平左衛門家筋并勤方之調

四六七

寛延 元年 十二月 四日

記録所調書

上村藤之丞家筋調

四七六

記録所調書

松下助五郎家筋并勤方之調

四六八

(寛延 元年) 十二月 七日

記録所調書

小倉仲之丞家筋調

四七七

記録所調書

近藤牧右衛門家筋并勤方之調

四六九

寛延 元年 十二月 廿日

川上久儔外四名連署調
書

木村村右衛門家筋調

四七八

寛延 三年 正月十三日

川上久儔外二名連署調
書

兵庫様御家督御相続ニ付御讓物調之事

四七〇

1 寛延 二年 十月

川上久儔・安藤茂真連
署調書

田代安積家筋調

四七九 (寛延 三年)

川上久儔外三名連署調
書

2

高津繼豊議状草案

児玉鉄兵衛家筋調

朝倉甚五兵衛・黒木長五郎・永田次左衛門・志和地治右衛門御城下
士被仰付候事

四八〇 寛延 三年 三月 朔日

川上久儔外二名連署調書

(新納十郎家筋之事)

伊集院甚助家筋之事

四九一

記録所調書

染川伝七家筋調

四八一 寛延 三年 三月 八日

川上久儔外二名連署調書

富山弥右衛門家筋之事

四九二

記録所調書

廻向院之事

理性院無量寿院之事

四八二 寛延 三年 三月廿六日

川上久儔外二名連署調書

伊集院七左衛門家筋之事

四九五

記録所調書

土岐仁之助御目見進上物之事

四八三

記録所調書

川崎与三左衛門家筋之事

四九六

記録所調書

小林中之丞家筋之事

四八四

記録所調書

讃良善藏家筋之事

四九七

記録所調書

(江田源五左衛門家筋之事)

四八五

記録所調書

弟子丸小八郎家筋之事

四九八

記録所調書

新納藤右衛門家筋之事

四八六

記録所調書

小田善兵衛家筋之事

四九九

記録所調書

伊勢弥市左衛門家筋之事

四八七

記録所調書

四本喜左衛門家筋之事

五〇〇

記録所調書

平山七郎右衛門家筋之事

四八八

記録所調書

平田新太郎家筋之事

五〇一

記録所調書

本田助之丞家筋之事

四八九

記録所調書

本田次兵衛家筋之事

五〇二

記録所調書

島山次郎右衛門家筋之事

五〇三

記録所調書

島津加賀守殿復源姓ニ付庶流吟味之事

五一一

寛延 三年

八月廿三日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

伊集院平右衛門家筋之事

五〇四

1 寛延 三年

四月廿一日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

大興寺江寄進物之事

五一一

(寛延 三年)

九月十一日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

2 (寛延 三年)

四月廿五日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

1 慶長十四年

五月廿六日

島津忠長・比志島国貞
連署書狀

川上正右衛門・梅北次郎左衛門・大島孫右衛門家筋勤調

五〇五

1

(寛延 三年)

四月廿五日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

2 慶長十四年

五月廿六日

島津忠長・比志島国貞
連署寄進物目錄

2 (寛延 三年)

四月廿五日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

御先代様御袖判御書付見合調

五一三

寛延 三年

九月十二日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

島津又六郎家采阿多平左衛門家出所之調

五〇六

1 寛延 三年

六月 二日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

慈徳院様御逝去一卷帳之内抜書
大玄院様御葬送之事

2

六月

榊山久初申渡書

五一四

1 (寛延 二年)

七月 十日

川上久儔外二名連署調
書

篠原喜右衛門家筋調

五〇七

(寛延 三年)

六月 三日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

2 (寛延 二年)

七月十二日

川上久儔外二名連署調
書

上野納右衛門家ニ付合業主取之事

五〇八

(寛延 三年)

七月 三日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

3 (寛延 二年)

七月十一日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

久・忠之文字遠慮可仕事

五〇九

1 (寛延 三年)

七月廿八日

川上久儔調書

5 (寛延 二年)

七月十七日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

2 (寛延 三年)

八月 二日

川上久儔・安藤茂真連
署調書

6

門牌草稿

中山王御礼ニ付返書御吟味之事

五一〇

(寛延 三年)

八月十一日

安藤茂真調書

7

島津宗信靈塔銘

8 寛延 三年

遺物拝領人名書上

島津重年石燈籠銘草稿

五三二	川上久儔外二名連署調	五三二	八木信元跡調
五三三	書	五三三	二木信泰跡調
五三四	川上久儔外二名連署調	五三四	木村時真跡調
五三五	書	五三五	木村時弘跡調
五三六	川上久儔外二名連署調	五三六	三原重秋跡調
五三七	書	五三七	宮原隼人跡調
五三八	川上久儔外二名連署調	五三八	宮原太郎左衛門跡調
五三九	書	五三九	比志島國貞跡調
10 (寛延二年)	十月廿四日		
11 (寛延二年)	十月廿六日		
12 [寛延二年]	七月 八日		
13 [寛延二年]	七月 九日		
「旧史館調 七」			
五二五	伊集院久治跡調		
五二六	伊勢貞世跡調		
五二七	本田氏親跡調		
五二八	遠矢貞勝跡調		
五二九	遠矢成郡跡調		
五三〇	遠矢成則跡調		
五三一	遠矢重勝跡調		
五三二	遠矢良兼跡調		
五三三	遠矢良時跡調		
五三四	伊地知季随跡調		
五三五	伊地知季弘跡調		
五三六	伊地知重周跡調		
五三七	和田圓存跡調		
五二八	和田義道跡調		
五二九	川上久嗣跡調		
五三〇	鎌田政員跡調		
五三一	曾木甚右衛門跡調		

旧史官調雜抄

「旧史官調雜抄 一」

新納弥右衛門先祖勲功之調

一 宝永 七年

一 (慶長 七年)

中山王尚貞之書翰

二 1 宝永 六年

2 (宝永 六年)

3 宝永 六年

諏訪神社神主世代之事

三 1 正徳 三年

2

比志島と村上との關係

四 1 宝永 五年

2 宝永 五年

日州宮崎御家御由緒之調

五 宝永 五年

鎌田家政之字之事

六

松平康信主室之事

七

諏訪之二字之事

八 1 元文 二年

2 元文 元年

宝山檢校盲僧者之事

九 宝永 五年

中村九郎左衛門由緒并御切米之事

一〇

柚木崎平右衛門家筋并御切米之事

一一 (正徳 二年) 五月

()

一二

山口友与養子願二付調

一三 享保 元年

鎌田源七家筋調

一四 享保 二年

紫尾山之事

瀬崎山之事

霧島山之事

向島之事

長島・獅子島・甌島之事

一五 享保 三年

肥後盛香外二名連署調

六月廿一日

紫尾山之事

瀬崎山之事

霧島山之事

向島之事

長島・獅子島・甌島之事

寺社奉行所調書

記錄所調書

肥後盛香外二名連署調

書

記錄所覺書

記錄所調書

記錄所覺書

記錄所調書

鎌田源七家筋届書

七月 朔日

紫尾山之事

瀬崎山之事

霧島山之事

向島之事

長島・獅子島・甌島之事

書

肥後盛香外二名連署調

六月廿一日

紫尾山之事

瀬崎山之事

霧島山之事

向島之事

長島・獅子島・甌島之事

書

肥後盛香外二名連署調

六月廿一日

紫尾山之事

瀬崎山之事

霧島山之事

伊勢平八左衛門家筋并進上物之事

一六 享保 三年 七月 四日 記録所調書

田辺屋七郎右衛門家筋調

一七 享保 三年 三月 四日 記録所調書

秩父小太郎元服願出ニ付調

一八 宝永 二年 十一月 六日 田中国明外二名連署調書

太守様御家督御入部ニ付執印久馬御祝進上物之調

一九 宝永 二年 九月十六日 記録所調書

勝浦姫由緒之事

二〇 享保 四年 正月廿三日 肥後盛香・川上久儔連署調書

山田弥右衛門小番人再願ニ付家筋調

二一 享保 二年 十一月廿五日 肥後盛香・川上久儔連署調書

辺見平五左衛門家筋調

二二 記録所調書

岩切戸左衛門家筋調

二三 記録所調書

救仁郷新四郎家筋調

二四 記録所調書

宮内勘右衛門家筋調

二五 記録所調書

吉田藤右衛門家筋調

二六 記録所調書

山口五郎兵衛家筋調

二七 延享 二年 二月十一日 記録所調書

町田源六家筋調

二八 正徳 二年 六月廿三日 川上久儔調書

平山伊兵衛御太刀進上願ニ付吟味

二九 元禄十四年 十二月廿七日 田中国明外二名連署調書

比志島善八家筋調

三〇 宝永 三年 二月廿五日 記録所調書

山鹿越右衛門小番願出ニ付家筋調

三一 宝永 三年 三月廿七日 田中国明・市来家年連署調書

平山八右衛門名字替願出ニ付調

三二 正徳 三年 四月 四日 記録所調書

町田甚五右衛門家筋調

三三 記録所調書

阿多仲右衛門家筋調

三四 記録所調書

阿多六郎左衛門家筋調

三五 記録所調書

町田伊兵衛家筋調

三六 正徳 三年 四月 八日 記録所調書

土持権兵衛家筋調

三七 宝永 四年 十月廿六日 記録所調書

相良弥五左衛門家筋調

三八 宝永 七年 六月十二日 記録所調書

馬場長軒家筋調

三九 正徳 四年 三月 五日 記録所調書

江川仙左衛門家筋調

四〇 正徳 四年 三月廿一日

肥後盛香・川上久儔連
署調書

中江八郎右衛門家筋調

五二

記録所調書

汾陽藤次右衛門家筋調

四一 正徳 四年 五月十六日

記録所調書

有村伊右衛門家筋調

五三

記録所調書

岩下三左衛門家筋調

四二 正徳 四年 五月十六日

記録所調書

諏訪新右衛門家筋調

五四

記録所調書

中西長兵衛之事

四三 正徳 五年 十一月十三日

記録所調書

山田弥右衛門家筋調

五五

正徳 三年 十二月 六日

田中国明外二名連署調書

讚良權左衛門家筋調

四四 正徳 五年 十一月十三日

記録所調書

木脇善助家筋調

五六

記録所調書

東郷八左衛門家筋調

四五 正徳 五年 十一月十三日

記録所調書

山之内八郎兵衛家筋調

五七

記録所調書

米良藤右衛門家筋調

四六 正徳 五年 四月十八日

記録所調書

志岐藤左衛門家筋調

五八

宝永 五年 五月

記録所調書

萩原新助家筋調

四七 正徳 五年 五月 七日

記録所調書

田代甚助家筋調

五九

宝永 五年 五月 七日

田中国明・肥後盛香連
署調書

横山長右衛門家筋調

四八 正徳 五年 五月 七日

記録所調書

市来源右衛門家筋調

六〇

記録所調書

市来十郎右衛門家筋調

四九 正徳 五年 五月 七日

記録所調書

日高六郎兵衛家筋調

六一

宝永 二年 七月

肥後盛香・市来家年連
署調書

鎌田与左衛門家筋調

五〇 正徳 五年 十一月廿二日

記録所調書

花田六左衛門家筋調

五一 正徳 五年 十一月廿二日

記録所調書

汾陽源右衛門家筋調

六二

記録所調書

門司伊兵衛家筋調

六三 宝永 二年 九月

肥後盛香・市来家年連
署調書

土持鉄之助家筋調

七五 本田次郎右衛門家筋調

江田源助家筋調

六四 宝永 五年 六月 三日

田中国明・肥後盛香連
署調書

七六 鎌田源右衛門家筋調

二階堂出右衛門家筋調

六五 宝永 三年 八月十八日

田中国明・市来家年連
署調書

七七 大田八之進家筋調

崎元才右衛門家筋調

六六 正徳 四年 正月

記録所調書

七八 伊勢六郎左衛門家筋調

有川四郎左衛門家筋調

六七 肥後長左衛門家筋調

記録所調書

七九 堀四郎左衛門家筋調

救仁郷善兵衛家筋調

六八 六九 記録所調書

八〇 和田五郎兵衛家筋調

川村慶智家筋調

七〇 七二 記録所調書

八一 面高連長院家筋調

神宮司新右衛門家筋調

七一 七二 記録所調書

八二 川田甚右衛門家筋調

堅山佐太夫家筋調

七二 七三 記録所調書

八三 相良清之進家筋調

伊勢平蔵家筋調

七三 七四 記録所調書

八四 五代助十郎家筋調

竹下八兵衛家筋調

七四 正徳 四年 二月 記録所調書

八五 本田新兵衛家筋調

七四 正徳 四年 二月 記録所調書

八六 本田新兵衛家筋調

記録所調書

海老原筑兵衛家筋調	八七	宝永 七年	五月	田中国明・肥後盛香連 署調書	市来次郎左衛門家筋調 九九 元禄十二年	九月	記録所調書
中西文右衛門家筋調	八八	宝永 七年	七月	肥後盛香・市来家年連 署調書	米良九郎右衛門家筋調 一〇〇 宝永 二年	十二月	記録所調書
平田平六家筋調	八九	宝永 四年	十月	別府源之助家筋調 一〇一	相良奎之助家筋調 一〇一		記録所調書
伊東半右衛門家筋調	九〇	宝永 四年	十月	別府武左衛門家筋調 一〇二	別府源之助家筋調 一〇三	閏二月	記録所調書
平野佐次兵衛家筋調	九一	正徳 六年	十一月 七日	執印丹下家筋調 一〇四	立石太郎右衛門家筋調 一〇五	三月	記録所調書
四元平兵衛家筋調	九二	正徳 六年	閏二月	延享 二年	本田五右衛門家筋調 一〇六	六月	記録所調書
指宿休左衛門家筋調	九三	正徳 六年	閏二月	正徳 三年	岡元千右衛門家筋調 一〇七	十一月 四日	記録所調書
福島新助家筋調	九四	正徳 六年	閏二月	延享 二年	四元仲右衛門家筋調 一〇八	六月 廿二日	記録所調書
伊東奎兵衛家筋調	九五	正徳 六年	閏二月	正徳 三年	和田休左衛門家筋調 一〇九	四月 廿二日	記録所調書
田中吉左衛門家筋調	九六	正徳 六年	閏二月	延享 二年	（市来早左衛門家筋調） 一一〇	六月 廿二日	記録所調書
大野隼人家筋調	九七	宝永 二年	十二月	延享 二年	有馬新助家筋調 一一一	六月 廿二日	記録所調書
阿多六郎右衛門家筋調	九八	正徳 三年	十一月	延享 二年		七月	記録所調書

宮下伝左衛門家筋調

一一二

七月

記録所調書

山田覚兵衛家筋調

一一四

記録所調書

野村甚兵衛家筋調

一一三

十一月

記録所調書

木場休右衛門家筋調

一二五

記録所調書

加納寿哲家筋調

一一四

十一月十四日

記録所調書

有川七左衛門家筋調

一二六

記録所調書

村田五太夫家筋調

一一五

九月十一日

北条時守申渡書

国分藤之丞家筋調

一二七

記録所調書

伊集院八郎家筋調

一一六

記録所調書

山田弥右衛門家筋調

一二八

記録所調書

北郷弥次郎家筋調

一一七

十一月十三日

北条時守申渡書

長谷場源助家筋調

一二九

記録所調書

東郷藤内家筋調

一一八

八月十三日

島津久甫申渡書

是枝八郎右衛門家筋調

一三〇

記録所調書

村田太右衛門家筋調

一一九

七月 六日

記録所調書

松山覚兵衛家筋調

一三一

記録所調書

相良権太夫家筋調

一二〇

八月十四日

町田俊懿・吉田清純連署調書

牧七右衛門家筋調

一三二

記録所調書

羽田善左衛門家筋調

一二一

九月 七日

記録所調書

伊集院七左衛門家筋調

一三三

六月廿八日

記録所調書

河野六兵衛家筋調

一二二

十二月廿四日

記録所調書

伊勢兵部家継目御礼御目見之調

一三四

六月 六日

川上久儒・日高為常連署調書

本田新右衛門家筋調

一二三

記録所調書

総州様御家督ニ付御直判之御書付調

一三五

七月廿九日

記録所調書

御目見之次第之事

一三六 延享 四年 七月廿九日

島津宗信仰出

田原万助焼物細工ニ付御扶持之事

一四四 1 延享 四年 十月廿九日

田原喜藤次覚書
記録所調書

有馬家系等之事

一三七 1

有馬純陽一流系図

2 3

田原喜藤次家筋之事

一四五 (延享 四年) 十一月 七日

川上久儔外二名連署調書

救仁郷三休一流系図

2 延享 四年 八月 十日

二階堂行朋家覚書

3 延享 四年 八月 十日

本田苞親家覚書

4 延享 四年 八月 十日

平田宗浄家覚書

5 延享 四年 八月 十日

河野通照家覚書

6 延享 四年 八月 十日

安達氏覚書

7 延享 四年 八月 十日

猿渡氏覚書

8 延享 四年 八月 十日

猿渡氏覚書

猿渡家調之内

一三八 1 元禄十五年 二月 朔日

肥後盛香外二名連署調書

2 延享 四年 十一月 廿三日

記録所調書

讚岐坊の辞世の歌

一三九

記録所調書

福昌寺開山石屋和尚之事

一四〇

記録所覚

重頼之事

一四一

小杉重頼譜

赤松甚右衛門之事

一四二

延享 四年 八月 廿一日

記録所調書

執印丹下家筋之事

一四三

延享 四年 九月 四日

記録所覚書

川上安左衛門家筋調

一五二 (延享 四年) 十一月 廿三日

記録所調書

別府平五左衛門家筋調

一五三 (延享 四年) 十一月 晦日

記録所調書

横山新右衛門家筋

一五〇 (延享 四年) 十一月 廿三日

記録所調書

(木藤彦左衛門家筋)

一四九 (延享 四年) 十一月 廿三日

記録所調書

荒武蔵右衛門家筋

一四八 (延享 四年) 十一月 廿三日

記録所調書

川田曾右衛門家筋

一四七 (延享 四年) 十一月 廿三日

記録所調書

児玉新蔵賦吟味之事

一四六 (延享 四年) 十一月 廿三日

記録所調書

岸八十右衛門賦吟味之事

一四五 (延享 四年) 十一月 廿三日

記録所調書

税所半兵衛家筋調

一五五 寛延 三年 九月十九日

吉田清純外二名連署調書

一六三 1 宝曆 八年 六月 八日

中神長廣・吉田清純連署調書

迫田甚助家筋調

一五六 1 (寛延 三年 九月十九日)

吉田清純外二名連署調書

河原孝右衛門家筋調

一六四 宝曆 八年 九月 二日

吉田清純外二名連署調書

2 迫田土佐一流系図

長野筑右衛門系譜并調

一五七 1 (寛延 三年) 八月 十日

長野筑右衛門覚書

一六五 宝曆 八年 十月廿四日

吉田清純外二名連署調書

2 寛延 三年 九月廿四日

吉田清純外二名連署調書

1

大河平氏系図

北郷龜之助儀ニ付調

一五八 寛延 二年 五月十七日

川上久儔・本田親方連署調書

(一六六)

横山喜左衛門家筋調

一六七 宝曆 九年 正月十四日

記録所覚書

御内証元服之儀ニ付吟味

※一五九 寛延 (二年) 六月 四日

川上久儔・安藤茂真連署調書

飯隈山蓮光院着座ニ付調

正月十四日

吉田清純外二名連署調書

忠昌公御不例之節御立願之事

一六〇 寛延 二年 六月廿六日

安藤茂真・本田親方連署調書

一六八 宝曆 九年 正月十四日

種子鳥次兵衛家筋調

吉田清純外二名連署調書

〔旧史官調雜抄 二〕

野村勘七養子致度願ニ付調書

一六一 宝曆 八年 九月 三日

吉田清純外二名連署調書

甲斐藤助養子願ニ付調

一七〇 宝曆 九年 三月 九日

吉田清純外二名連署調書

戸田七郎太家督御礼進上物調書

一六二 宝曆 八年 六月 八日

中神長廣・吉田清純連署調書

川崎大乘坊養子願ニ付調

一七一 宝曆 九年 三月廿八日

吉田清純外二名連署調書

救仁郷深仙坊家督御礼進上物調書

栗川孫次右衛門進上御目見願ニ付調

一七二 宝曆 九年 四月 八日 吉田清純外二名連署調書

末川彦十郎進上御目見願ニ付調

一七三 宝曆 九年 四月 四日 吉田清純外二名連署調書

畠山平太進上御目見願ニ付調

一七四 宝曆 八年 八月十二日 安藤茂真外三名連署調書

鹿兒島并外城幟立始之事

一七五 1 (宝永 四年) 十一月廿二日 某達書
記録所調書

入江十郎左衛門家筋由緒調

※一七六 1 享保十六年 九月 七日 川上久儔調書
2 宝曆 九年 五月十八日 吉田清純外二名連署調書

(阿多正覚寺ニ御建被遊候天津正祐菴主云々福昌寺師山より寺社奉行所へ申出之件)

一七七 享保十六年 十月 八日 福昌寺師山口上覚抜粹

御閑狩之事

一七八 記録所調書

大中良等庵主祭文并園維場石之事

一七九 記録所覚書
一八〇 記録所調書

与中諸士杉差立之訳調
一八一 享保十七年 十一月十六日 記録所調書

日新菩薩記之事

一八二 高城六右衛門家筋調 記録所覚

一八三 宝曆 九年 七月 十日 吉田清純外二名連署調書

春日之事

一八四 中紙進上御目見之事 俗説辨

一八五 (正徳 元年 九月 四日) 島津吉貴仰出

寺院ニ付島津因幡殿より願之事

一八六 宝曆 九年 閏七月 島津忠温願書

義岡彈正家格之儀ニ付再度調

一八七 宝曆 九年 閏七月 七日 吉田清純・安藤茂真連署調書

慈眼院様御影堂御造替吟味之事

一八八 宝曆 九年 五月 十日 吉田清純・安藤茂真連署調書

宇宿正右衛門家筋調

一八九 宝曆 九年 詠訪仲右衛門養子願ニ付調 吉田清純外二名連署調書

一九〇 宝曆 九年 五月 八日 吉田清純外二名連署調書

廣濟寺江御高御寄付ニ付御礼申出調

一九一 宝曆 九年 閏七月廿二日 吉田清純外二名連署調書

重久金左衛門養子願ニ付調

一九二 宝曆 九年 閏七月廿二日

吉田清純・本田親方連
署調書

岩下佐次右衛門御礼席連名之調

二〇一 1 宝曆 十年 三月 十日

吉田清純・安藤茂真連
署調書
高橋縫殿申渡書

内山勘左衛門養子願ニ付調

一九三 宝曆 九年 閏七月十四日

安藤茂真・吉田清純連
署調書

佐久間九右衛門勤務調

2 (宝曆 十年) 三月 三日

谷山早右衛門養子願ニ付調

一九四 宝曆 九年 九月 六日

吉田清純外三名連署調
書

松崎平左衛門連名之事

二〇二 宝曆 十年 三月 二日

吉田清純・安藤茂真連
署調書

(肝付七右衛門)
西郷次郎右衛門養子願ニ付調

一九五 宝曆 九年 九月廿九日

吉田清純・安藤茂真連
署調書

大窪喜助繼日願ニ付調

二〇三 宝曆 五年 三月十六日

安藤茂真・吉田清純連
署調書

町田五郎左衛門家筋調

一九六 宝曆 九年 十月廿七日

吉田清純外二名連署調
書

御娘様他所江御縁中御卒去御位牌之調

二〇四 宝曆 十年 二月 晦日

本田親方外二名連署調
書

木場寿山家筋調

一九七 宝曆 九年 十二月 二日

吉田清純調書

京都即宗院御再建之調

二〇五 宝曆 十年 二月 晦日

吉田清純外二名連署調
書

永岩次郎兵衛養子願ニ付調

一九八 宝曆 九年 十二月 二日

吉田清純・安藤茂真連
署調書

吉宗公右大臣ニ御転任之事

二〇六 宝曆 十年 二月 十二日

吉田清純・安藤茂真連
署調書

諸国大小神社改方ニ付調

一九九 宝曆 九年 十二月 十二日

吉田清純外三名連署調
書

伊藤善八家筋調

二〇七 宝曆 十年 三月 十七日

吉田清純外二名連署調
書

喜入幸之丞事養子願調

二〇〇 宝曆 九年 十二月 十二日

吉田清純外三名連署調
書

島津左殿御礼進上物之事

二〇八 宝曆 十年 四月 十八日

吉田清純外二名連署調
書

二〇〇

記録所調書

二〇九 宝曆 十年 二月 十一日

吉田清純外二名連署調
書

指宿正哲家筋調

二一〇 寬延 三年 六月 十日

安藤茂真・川上久儔連
署調書

御関狩并御馬追之儀調

二二〇 享保 四年 十二月 五日

肥後盛香外二名連署調
書

満君様御婚姻之事

二一一

記録所覚書

()

二二一 1

記録所覚書

日新公御嫡女并元久公御息女御牌銘

二一二

記録所覚

※ 2

記録所調書

梅北弥左衛門家筋調

二一三 宝曆 十年 七月十三日

吉田清純外三名連署調
書

重富・今和泉之事

二二二 宝曆十一年 五月廿二日

吉田清純外三名連署調
書

一乘院僧正尊盈進上物調

二一四 宝曆 十年 八月十二日

吉田清純外三名連署調
書

忠久公御五代御仏檀之調

二二三 八月 五日

浄光明寺納所覚書

諦觀院殿光闍院様御嫁ニ付系図調

二一五 宝曆 十年 六月 六日

吉田清純外二名連署調
書

妙心院江高取納御書付

二二四

某寄進状案

伊藤善八家筋調

※二一六 宝曆 十年 四月十八日

吉田清純外二名連署調
書

顯幽集覽之事

二二五 宝曆 九年 七月廿一日

顯幽集覽題字考

新納弥五郎・永田半左衛門進上物調

二一七 宝曆 十年 五月廿五日

吉田清純外三名連署調
書

二二六 1

島津久亮申渡書

有村嘉右衛門家筋之調

二一八 宝曆 九年 十二月 晦日

吉田清純調書

平田奎右衛門家筋調

二二七 宝曆 十年 十一月十六日

吉田清純・安藤茂真連
署調書

和田伊右衛門家筋之調

二一九

記録所調書

二二八

記録所覚書

善久公第二女并吉田次郎四郎位清室御法名

二一九

記録所調書

善久公第二女并吉田次郎四郎位清室御法名

記録所覚書

島津因幡殿跡相統之儀ニ付調

二二九 宝曆 六年 二月十二日

安藤茂真・山田有雄連
署調書

和田伊右衛門家筋調

二三〇 宝曆 十年 二月 七日

吉田清純・安藤茂真連
署調書

竹下喜右衛門家筋調

二三一 宝曆 十一年 七月 二日

吉田清純・郡山遜志連
署調書

龜山甚兵衛家筋調

二三二 宝曆 十一年 三月十四日

吉田清純外三名連署調
書

京都即宗院之事

二三三 宝曆 十年 二月十二日

吉田清純外二名連署調
書

宥邦院様御葬送之節御尊牌御名代ニ付御太刀持有無之調

二三四 宝曆 十年 九月廿七日

安藤茂真外三名連署調
書

日置郡并大隅郡郷村名及高辻帳

二三五

記録所覚書

島津若狭・島津小平太席連名吟味

二三六 1 宝曆 十一年 七月廿三日

吉田清純外二名連署調
書

2 記録所覚書

3 宝曆 十一年 八月 二日

吉田清純外三名連署調
書

4 (宝曆 十一年 八月四日)

記録所覚書

「旧史官調雜抄三」

二三七 (元文 元年) 五月十五日

二三八 (享保ノ明和) 皇統略譜

二三九 (元文元年ノ明和二年) 島津本宗家年譜

二四〇 竹姫略譜

2 保科家系図

二四一 (享保廿一年ノ元文六年) 島津本宗家年譜

二四二 (明和二年ノ九年) 記録所記録留

1 (明和 二年) 十二月十五日) 小松清香申渡書

2 (明和 二年) 十二月廿八日) 樺山久智達書

3 (明和 三年) 正月 四日) 小松清香達書

4 (明和 四年) 九月 四日) 高橋種寿達書

5 (明和 四年) 九月十七日) 高橋種寿達書

6 (明和 五年) 三月廿八日) 菱刈実詮申渡書

7 (明和 五年) 四月十四日) 桂久中・菱刈実詮連署
達書

8 (明和 五年) 五月廿二日) 樺山久智・菱刈実詮連
署申渡書

9 (明和 五年) 八月) 小松清香・河野通古連
署申渡書

10 (明和 五年) 八月) 樺山久智・菱刈実詮連
署申渡書

11 (明和 五年) 八月) 樺山久智・菱刈実詮連
署申渡書

12 (明和 五年) 八月) 樺山久智・菱刈実詮連
署達書

13 (明和 五年) 八月) 島津久金達書

14 (明和 六年) 四月) 大風大波付損失覚案

- 15 (明和 六年) 八月) 島津久金達書
- 16 (明和 六年) 十月 島津久金外二名連署中渡書
- 17 (明和 七年) 正月〔廿四日〕島津重豪論達書
- 18 (明和 七年) 二月 六日 小松清香達書
- 19 (明和 八年) 五月 小松清香申渡書
- 20 (明和 八年) 六月十六日 小松清香達書
- 21 (明和 八年) 六月十六日 小松清香達書
- 22 (明和 八年) 八月 七日 島津久金達書
- 23 (明和 八年) 十月^(十一) 島津重豪訓諭書
- 24 (明和 八年) 十一月 島津久金外五名連署達書
- 25 (明和 九年) 正月 島津久金外五名連署達書
- 26 五月 樺山久智・喜入久福連署申渡書

鹿児島県史料編さん関係者

史料編さん顧問
東京大学 史料編纂所所長 榎原雅治

国立歴史民俗博物館元館長 宮地正人

鹿児島大学名誉教授 五味克夫

九州大学名誉教授 安藤保夫

委員 原口泉 晋藤哲哉

三木靖 日隈正守

宮下満郎 塩満郁夫

堂満幸子

鹿児島県歴史資料センター黎明館

館長 高山大作

副館長 小園一哉

調査史料室長 内倉昭文

学芸専門員 崎山健文

資料調査員 梶ヶ山梨沙

編集員 中野尚子

堀田未希 村山麻美

鹿児島県史料

旧記録拾遺 記録所史料一

平成24年3月2日発行

非売品

編集 鹿児島県歴史資料センター黎明館

発行 鹿児島県

印刷所 株式会社 きょうせい